

豊 後 府 内 6

中世大友府内町跡第10次調査区

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (5)

2007

豊 後 府 内 6

中世大友府内町跡第10次調査区

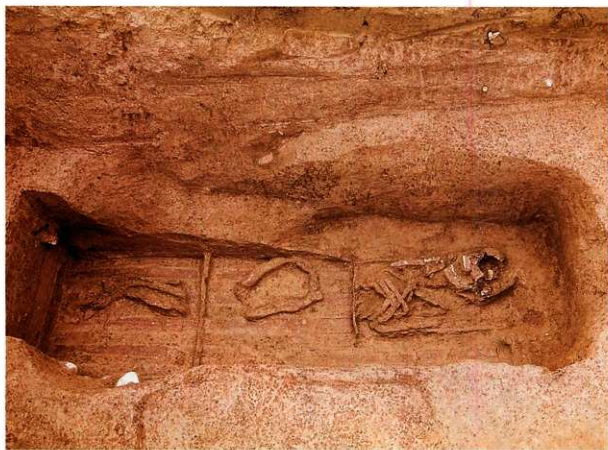
ダイウス堂および祐向寺付近の発掘調査

2007

大分県教育庁埋蔵文化財センター



10次Ⅱ区北調査区墓地遺景(南から:線路の向うが、ダイウス堂推定地)



1号墓ST130の木棺と埋葬状態(東から)



中世大友府内跡の空中写真（1948年：米軍撮影）



10次調査区周辺の空中写真（合成）



10次Ⅰ区調査区の空中写真



10次Ⅱ区南調査区の空中写真



10次Ⅱ区北調査区全景



10次Ⅱ区北調査区全景(東区から墓地、手前に道路)



10次Ⅱ区北調査区全景(墓地から西区、手前に道路)



道路SF151
(西から)



道路SF151の断面



側溝道路SF151の北側側溝の推移(SD165→SD250→SD270)



SE147の石組井筒

序 文

本書は、大分県教育委員会が大分駅付近連続立体交差事業に伴い、大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受けて実施した中世大友城下町跡第10次調査区の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する大分市は、かつて九州の有力な戦国大名であった大友氏の守護所がおかれていました。近年の発掘調査により、大友氏の館やその菩提寺である万寿寺をはじめとした都市のにぎわいにあふれた府内の町の様子が、次第に明らかになってきました。

本書に収録した第10次調査区は、戦国時代の府内の町の景観を描いたとされる「府内古図」によれば、中世府内にあった40余りの町のひとつである「中町」の南端にあたり、かつて日本にキリスト教を伝えたイエズス会の府内教会の南縁にあたります。

調査区からは、ゴミ捨て穴と考えられる土坑、街路、井戸などの町屋の景観をつたえる遺構群や、府内教会の付属墓地の一部と考えられる16世紀後半の墓地が発見されました。初期の府内教会内には病院や孤児院が併設され、後にはイエズス会の最高学問機関であるコレジオもおかれています。墓地の調査によって明らかとなった子供の墓地から成人墓地への変遷は、この教会の発展によるものと考えられます。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、学術研究資料として広く御活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力をいただきましたことに対し、こころから感謝申し上げます。

平成19年3月30日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 小 玉 学 司

例 言

1. 本書は大分県大分市顕徳町・元町に所在する中世大友府内町跡第10次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分駅付近連続立体交差事業の実施に伴い、大分県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所の委託を受けて、大分県教育委員会文化課が実施した。
3. 中世大友府内町跡第10次調査はⅠ区とⅡ区に別れ、Ⅰ区は2001(平成13)年7月から2001(平成13)年10月にかけて実施し、坂本嘉弘・植島隆二・吉田寛・後藤晃一・中田裕樹・阿比留士郎・幡上敬一(大分県教育委員会)が担当した。また、Ⅱ区は2001(平成13)年9月から2002(平成14)年9月にかけて実施し、坂本嘉弘・田中裕介・後藤晃一・植島隆二・吉田寛・山崎文子・服部真和・中田裕樹・阿比留士郎(大分県教育委員会)が担当した。
4. 現地での写真撮影・遺構の実測は大分県教育庁文化課職員のほか、(株)パスコ・(株)明大工業・(株)埋蔵文化財サポートシステムの調査員が担当した。
5. 遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については調査員、大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理補佐員のほか、(株)九州文化財研究所・(株)国際航業・(有)九州文化財リサーチが担当した。
6. 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センター(大分市大字中判田ビワノ門1977)において保管している。
7. 本書で使用する方位はいずれも座標北である。座標値については、旧日本測地系と世界測地系の数値を併記している。
8. 本書で使用する遺構略号は、以下の通りとする。
SD：溝、SB：掘立柱建物、SK：土坑、SE：井戸、SF：道路および道路状遺構、
SA：構列および構列状遺構、ST：墓、SH：堅穴住居跡、SP：柱穴および小穴
SX：その他の遺構(不明遺構・集石遺構・整地層など)
9. 本書で使用した出土遺物の分類については、以下の文献による。
青花 小野正敏「15～16世紀の染付陶・皿の分類と年代」(『貿易陶磁研究』№2 1982年)
青磁 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」(『貿易陶磁研究』№2 1982年)
白磁 森田勉「14～16世紀の白磁の分類について」(『貿易陶磁研究』№2 1982年)
備前焼 兼岡実「中世備前焼壺(壺)の編年案」・「備前焼播鉢の編年案」(『第3回中近世備前焼研究会資料 付第1回・第2回研究資料』所収 2000年)
兼岡実「近世備前焼播鉢の編年案」(『岡山城三之曲輪跡-衣町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査-』岡山市教育委員会 2002年)
中国南部産焼締陶器 吉田寛「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」(『貿易陶磁研究』№28 2003年)
京都系土師器 堀地調一「大友領内における京都系土師器の分布とその背景」(『博多研究会誌』第6号 1998年)
堀地調一「九州出土の京都系土師器Ⅲ」(『中近世土器の基礎研究』XIV 1999年)
河野史郎「大友府内4-中世大友府内町跡第4次発掘調査報告書-」大分市教育委員会 2002年
瓦 森田寛「屋瓦」(『摂津高槻城』高槻市文化財調査報告書第14冊 高槻市教育委員会)
動物骨 松井卓氏(奈良文化財研究所)の鑑定による。
10. 本書の執筆は第1章を坂本嘉弘・田中裕介、第2・3章を後藤晃一、第4・6章を田中裕介が担当し、そのうち4章第6節は山崎文子と田中が担当した。中世大友府内町跡第10次調査出土土人骨の調査を九州大学大学院比較社会文化学府基礎構造講座に委託し、舟橋京子(同大学院)・田中良之氏(同大学院教授)らによる分析結果を掲載した(第5章第1節)。中世大友府内町跡第10次調査ほか出土金属遺物の分析を魯観球・平尾良光(別府大学大学院文学研究科)から得た(第5章第2節)。なお、執筆分担は目次に明記している。
11. 本書の編集は、田中と後藤が行った。

目 次

第1章	はじめに (坂本嘉弘・田中裕介)	
第1節	調査の経緯	1
第2節	遺跡の立地と環境	6
第3節	報告書作成にあたって	8
第4節	第10次調査区について	13
第2章	中世大友府内町跡第10次Ⅰ区調査区 (後藤晃一)	
第1節	調査の経緯	15
第2節	遺構と遺物	19
第3節	小結	49
第3章	中世大友府内町跡第10次Ⅱ区南調査区 (後藤晃一)	
第1節	調査の経緯	51
第2節	遺構と遺物	55
第3節	小結	84
第4章	中世大友府内町跡第10次Ⅱ区北調査区 (田中裕介)	
第1節	調査の方法	87
第2節	基本層序	88
第3節	遺構の概要	88
第4節	古代の遺構と遺物	97
第5節	中世の遺構と遺物	99
第6節	墓地の遺構と遺物 (山崎文子・田中)	252
第7節	小結	285
第5章	自然科学的分析	
第1節	中世大友府内町跡第10次調査出土人骨について (舟橋京子・田中良之)	293
第2節	中世大友府内町跡出土金銅製品に関する自然科学調査 (魯視球・平尾良光)	303
第6章	総括 (田中裕介)	
第1節	調査の成果	311
第2節	第10次調査区発見の墓地とイエズス会府内教会	313
第3節	イエズス会府内教会の歴史から	322
付 節	遺物の補遺	326

細目次

1章 はじめに	SE014	38
第1節 調査の経緯	SE017	40
1. 調査に至る経過	4. 土坑墓	45
2. 調査の経過	ST009	45
3. 調査の体制	5. 包含層・ピット	46
2001(平成13)年度	第3節 小結	49
2002(平成14)年度		
第2節 遺跡の立地と環境		
1. 地理的環境		
2. 歴史的環境		
第3節 報告書作成にあたって		
1. 府内古園と道路の名称		
2. 中世大友城下町跡出土の土師質土器編年		
3. 整理作業の経過		
第4節 第10次調査区について		
第2章 中世大友府内町跡第10次Ⅰ区調査区		
第1節 調査の経緯		
第2節 遺構と遺物		
1. 溝		
SD001		
SD010		
SD028		
2. 土坑		
SK004		
SK005		
SK006		
SK007		
SK008		
SK012		
SK013		
SK015		
SK016		
SK019		
SK022		
SK023		
SK026		
SK027		
SK030		
3. 井戸		
第3章 中世大友府内町跡第10次Ⅱ区南調査区		
第1節 調査の経緯		
第2節 遺構と遺物		
1. 溝		
SD111		
SD113		
SD116・SF116・SF124		
SD117		
SD118		
2. 土坑		
SK101		
SK102		
SK103		
SK104		
SK115		
SK120・121		
SK125		
3. 掘立柱建物		
SP001・SP002・SP003		
SB001		
4. 井戸		
SE126		
5. 包含層		
第3節 小結		
第4章 中世大友府内町跡第10次Ⅱ区北調査区		
第1節 調査の方法		
第2節 基本層序		
第3節 遺構の概要		
第4節 古代の遺構と遺物		
遺構の概要		
土坑		
SK226		

SK301	98	小結	140
小結	98	4.16世紀第2四半期の遺構と遺物	
第5節 中世の遺構と遺物	99	概要	140
1. 遺構の概要	99	溝	141
2. 15世紀代の遺構と遺物		SD140	141
概要	99	井戸	142
道路状遺構 SF151	99	SE235	142
溝	107	SE144	143
SD165	107	SE291	144
SD259・SD277・SD294・SD255	118	土坑	145
井戸	119	SK238	145
SE300	119	SK243	146
土坑	121	SK265	146
SK256	121	SK272	147
SK298	123	SK285	148
SK286	124	SK163	149
SK287	124	SK190	150
SK206・SK207	124	SK191	150
SK199	125	SK276	151
SK203	127	墓?	151
SK212	128	ST192	151
SK251	128	小結	151
S275	129	5.16世紀第3四半期の遺構と遺物	
ピット	131	概要	152
SP183	131	溝	153
SP221	131	SD284	153
SP223	131	SX164	153
SP288	131	井戸	154
小結	131	SE234	154
3.16世紀第1四半期の遺構と遺物		土坑	154
概要	132	SE291 内部土坑	154
溝	132	SK224	155
SD303	132	SK228=SK232	156
SD239-SD245	133	SK278	158
SD176・SD197・SD208	133	SK293	159
土坑	134	SK267	159
SK247	134	小結	160
SK266	135	6.16世紀第4四半期前半の遺構と遺物	
SK227	137	概要	161
SK189	138	溝	162
SK193	139	SD118	162
ピット	140	SD117	164
SP166	140	SD116	166

SD250	168	溝	240
SD270	180	SD204	240
SD131	183	土坑	240
SD230・SK261・SD292	186	SK136	240
井戸	192	SK180	241
SE148	192	SK220	242
土坑	192	SK246	242
SK264	199	ピット	243
SK236	199	SP184	243
SK252 (=S133)	201	SP195	243
SK269 (=S137)	202	SP240	243
SK156	204	SP249	243
SK279	204	SP280	243
SK263	205	SP281	243
SK229	207	SP282	243
SK273	208	10. 近世の遺構と遺物	
SK262	209	概要	244
小結	217	近世初頭	244
7. 16世紀第4四半期後半の遺構と遺物		溝	244
概要	218	SD138	244
溝	219	石列	245
SD141	219	SX139	245
SD167	223	土坑	245
SD168	226	SK177	245
井戸	229	近世中期	246
SE147	229	溝	246
SE210	229	SD145	246
土坑	234	土坑	246
S218	234	SK146	246
SK231	235	ピット	247
SK215	237	SP142	247
S134	238	小結	247
小結	238	11. 近世整地層の遺物	
8. 16世紀第4四半期の遺構と遺物		第2層整地層出土遺物	247
溝	239	12. 近現代の遺構と遺物	
SD194	239	概要	251
土坑	239	溝	251
SK237	239	SD143	251
ピット	239	13. そのほかの遺物	251
SP213	239	第6節 墓地の遺構と遺物	
SP214	240	概要	252
SP233	240	1. 墓地第1期	255
9. 16世紀代の遺構と遺物		3号墓 ST268	255

2. 墓地第2期	256
5号墓 ST154	257
6号墓 ST157	258
7号墓 ST158	258
13号墓 ST289	259
14号墓 ST295	260
15号墓 ST296	261
16号墓 ST297	262
17号墓 ST299	262
3. 墓地第3期	263
1号墓 ST130	263
2号墓 ST135	266
4号墓 ST150	266
8号墓 ST149	272
9号墓 ST152	277
10号墓 ST260	278
11号墓 ST257	279
12号墓 ST274	280
18号墓 ST290	281
4. 墓地まとめ	282
墓地第1期	282
墓地第2期	282
墓地第3期	283
墓地の構成	284
墓地の性格	284
第7節 小結	
1. 15世紀以後の第10次北調査区の遺構の変遷	285
15世紀	285
16世紀第1四半期	285
16世紀第2四半期	286
16世紀第3四半期	287
16世紀第4四半期前半	287
16世紀第4四半期後半	288
近世	289
2. 遺構の画期	289
3. 木棺に転用された唐櫃について	291

第5章 自然科学的分析

第1節 中世大友府内町跡第10次調査出土人骨について	293
1. はじめに	293
2. 人骨出土状態	293
3. 人骨所見	295

4. まとめ	300
第2節 中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学調査	303
1. はじめに	303
2. 資料	303
3. 鉛同位対比の原理	303
4. 分析方法	304
5. 測定値の表し方	304
6. 化学組成	304
7. 結果	305
8. 考察	305

第6章 総括

第1節 調査の成果	311
第2節 第10次調査区発見の墓地とイエズス会府内教会	313
1. 第10次調査区の位置	313
2. 墓地の実態	314
3. 墓地の性格	315
4. まとめ	321
第3節 イエズス会府内教会の歴史から	322
1. ポルトガル人の来住とキリスト教の伝来	322
2. 府内教会の始まりと青児院	322
3. 教会の拡張	323
4. 病院と墓地	323
5. 府内教会の最盛期とコレジオ	324
6. 府内教会の終焉	324
7. イエズス会府内教会の変遷と墓地	325
付節 遺物の補遺	326

挿図目次

第1章 はじめに

第1-1図	中世大友城下町跡の発掘調査状況……………2
第1-2図	大分平野の地形と主要道路……………4
第1-3図	中世大友城下町跡と周辺の戦国時代遺跡 ……………7

第1-4図	「府内古園」と街路名称の設定……………8
第1-5図	中世大友城下町跡出土の土師質土器編年図 ……………10
第1-6図	10次調査区の位置 (1/1000) ……14

第2章 中世大友府内町第10次調査区Ⅰ区

第2-1図	第10次調査区Ⅰ区遺構分布図(1/100)…15
第2-2図	第10次調査区Ⅰ区遺構分布図(1/100)…17
第2-3図	第10次調査区Ⅰ区土層図 (1/100) ……18
第2-4図	SD001 遺構図 (1/60) ……19
第2-5図	SD001 出土遺物実測図 (1/3) ……20
第2-6図	SD001 出土遺物実測図 (1/3) ……21
第2-7図	SD001 出土遺物実測図 (1/3) ……22
第2-8図	SD001 出土遺物実測図 (1/3) ……23
第2-9図	SD010 遺構図 (1/60) ……24
第2-10図	SD010 出土遺物実測図 (1/3) ……25
第2-11図	SD028 遺構図 (1/30) ……26
第2-12図	SD028 出土遺物実測図 (1/3) ……26
第2-13図	SK004 遺構図 (1/30) ……27
第2-14図	SK004 出土遺物実測図 (1/3) ……27
第2-15図	SK005 遺構図 (1/30) ……28
第2-16図	SK006 遺構図 (1/3) ……28
第2-17図	SK006 出土遺物実測図 (1/3) ……29
第2-18図	SK006 出土遺物実測図 (1/3) ……30
第2-19図	SK007 遺構図 (1/30) ……31
第2-20図	SK008 遺構図 (1/30) ……31
第2-21図	SK012 遺構図 (1/30) ……32
第2-22図	SK012 出土遺物実測図 (1/3) ……33
第2-23図	SK013 遺構図 (1/30) ……33
第2-24図	SK015 出土遺物実測図 (1/3) ……33
第2-25図	SK015 遺構図 (1/30) ……34
第2-26図	SK016 遺構図 (1/30) ……34
第2-27図	SK019 遺構図 (1/30) ……35

第2-28図	SK019 出土遺物実測図 (1/3) ……35
第2-29図	SK022 出土遺物実測図 (1/3) ……35
第2-30図	SK022 遺構図 (1/30) ……35
第2-31図	SK023 遺構図 (1/30) ……36
第2-32図	SK026 出土遺物実測図 (1/3) ……36
第2-33図	SK026 遺構図 (1/30) ……36
第2-34図	SK027 出土遺物実測図 (1/3) ……37
第2-35図	SK027 遺構図 (1/30) ……37
第2-36図	SK030 遺構図 (1/30) ……37
第2-37図	SK030 出土遺物実測図 (1/3) ……37
第2-38図	SE014 遺構図 (1/200) ……38
第2-39図	SE014 出土遺物実測図 (1/3) ……39
第2-40図	SE017 遺構図 (1/40) ……40
第2-41図	SE017 土層断面図 (1/40) ……40
第2-42図	SE017 出土遺物実測図(1/3・11=1/1) ……………41
第2-43図	SE017 鉄・銅・甕出土状況 (1/40) ……42
第2-44図	SE017 出土遺物実測図 (1/3) ……43
第2-45図	SE017 出土遺物実測図 (1/3) ……44
第2-46図	ST009 遺構図 (1/30) ……45
第2-47図	ST009 出土遺物実測図 (1/3) ……45
第2-48図	包含層・ピット出土遺物実測図 (1/60) ……………47
第2-49図	包含層・ピット出土遺物実測図 (1/3) ……………48
第2-50図	府内古園C類……………49
第2-51図	時期別遺構分布図 (1/500) ……50

第3章 中世大友府内町第10次調査区Ⅱ区南調査区

第3-1図	第10次Ⅱ区南調査区遺構分布図 (1/80) ……51
第3-2図	第10次Ⅱ区南調査区遺構分布図(1/250) 53
第3-3図	第10次Ⅱ区南調査区土層図 (1/60) ……54
第3-4図	SD111 遺構図 (1/80) ……55

第3-5図	SD111 出土遺物実測図 (1/3) ……56
第3-6図	SD113 遺構図 (1/40) ……57
第3-7図	SD113 土層図 (1/30) ……58
第3-8図	SD113 出土遺物実測図 (1/3) ……58

第3-9図	SD116・SD117・SD118土層図(1/30)59	第3-27図	SK115 遺構図(1/30)76
第3-10図	SD116・SD117・SD118 遺構図(1/100)60	第3-28図	SK115 出土遺物実測図(1/3)76
第3-11図	SD116 出土遺物実測図(1/3)62	第3-29図	SK120・SK121 遺構図(1/30)77
第3-12図	SD116 出土遺物実測図(1/3)63	第3-30図	SK120 出土遺物実測図(1/3)77
第3-13図	SD117 出土遺物実測図(1/3)65	第3-31図	SK120 出土遺物実測図(1/3)77
第3-14図	SD117 出土遺物実測図(1/3、33=1/1)66	第3-32図	SK125 遺構図(1/40)78
第3-15図	SD118 出土遺物実測図(1/3)67	第3-33図	SK125 出土遺物実測図(1/3)78
第3-16図	SD118 出土遺物実測図(1/3)68	第3-34図	SP001・SP002 遺構図(1/30)78
第3-17図	SD118 出土遺物実測図(1/3、30=1/1)69	第3-35図	SP003 遺構図(1/30)78
第3-18図	SK101 遺構図(1/30)70	第3-36図	SP003 出土遺物実測図(1/3)78
第3-19図	SK101 出土遺物実測図(1/3)70	第3-37図	SB001 実測図(1/40)79
第3-20図	SK102 出土遺物実測図(1/3)71	第3-38図	SE126 遺構図(1/40)80
第3-21図	SK102 遺構図(1/30)71	第3-39図	SE126 土層図(1/40)80
第3-22図	SK103 出土遺物実測図(1/3)71	第3-40図	SE126 井筒実測図(1/40)81
第3-23図	SK103 遺構図(1/30)71	第3-41図	SE126 出土遺物実測図(1/3)81
第3-24図	SK104 遺構図(1/60)72	第3-42図	包含層出土遺物実測図(1/3)82
第3-25図	SK104 出土遺物実測図(1/3)74	第3-43図	包含層出土遺物実測図(1/3、59=1/1)83
第3-26図	SK104 出土遺物実測図(1/3)75	第3-44図	第10次調査区I区・II区南調査区遺構変 遷図(1/400)84
		第3-45図	府内古園C類86
第4章 中世大友府内町跡第10次Ⅱ区北調査区			
第4-1図	10次調査区の調査位置図(1/800)87	第4-16図②	SD165 出土遺物(1/3)112
第4-2図	調査区の分割(1/400)87	第4-16図③	SD165 出土遺物(1/3)113
第4-3図	層序概念図88	第4-16図④	SD165 出土遺物(1/3、58・59=1/10、60 =1/1)114
第4-4図	古代の遺構(1/300)97	第4-16図⑤	SD165 出土遺物(1/3)115
第4-5図	SK226(1/30)97	第4-16図⑥	SD165 出土遺物(1/3)116
第4-6図	SK301(1/30)98	第4-16図⑦	SD165 出土遺物(90=1/1、91=1/4、92 ~94=1/10)117
第4-7図	15世紀の遺構(1/300)99	第4-16図⑧	SD165 出土遺物(1/3)118
第4-8図	SF151上層(1/100)100	第4-17図	SD259・SD277・SD294(1/40)119
第4-9図	SF151中層(1/100)102	第4-18図	SD255 出土遺物(1/3)119
第4-10図	SF151下層(1/100)104	第4-19図	SE300(1/30)120
第4-11図	SF151 出土遺物①上層・中層(1=1/1、2 ~22=1/3)105	第4-20図	SE300 出土遺物(1/3)120
第4-12図	SF151 出土遺物②下層(1/3)106	第4-21図	SK256(1/30)121
第4-13図	SD165掘形(1/100)107	第4-22図	SK256 出土遺物(1/3)122
第4-14図	SD165 第4矢筈列(1/100)108	第4-23図	SK298(遺構1/30、遺物1/3)123
第4-15図	SD165 B10・C11区の掘削時の埋置土 罫器(1/30)109	第4-24図	SK286(遺構1/30、遺物1=1/3、2 =1/1)124
第4-16図①	SD165 出土遺物(1/3、10・19=1/4)111	第4-25図	SK199(1/30)125

第4-26 国	SK119 出土遺物 (1/3)	126	第4-66 国	ST192 出土遺物 (1/3)	151
第4-27 国	SK203 (1/60)	127	第4-67 国	16世紀第3四半期の遺構 (1/300)	152
第4-28 国	SK203 出土遺物 (1/3)	127	第4-68 国	SD284 (遺構 1/30、遺物 1/3)	153
第4-29 国	SK212 (遺構 1/30、遺物 1/3)	128	第4-69 国	SX164 (遺構 1/30、遺物 1/3)	153
第4-30 国	SK251 (1/40)	129	第4-70 国	SE234 (1/30)	154
第4-31 国	SK251 出土遺物 (1/3、3=1/4、17=1/1)	130	第4-71 国	SE234 出土遺物 (1~6=1/1・7~9= 1/3)	155
第4-32 国	16世紀第1四半期の遺構 (1/300)	132	第4-72 国	SK224 (1/30)	155
第4-33 国	SD303 (1/80)	132	第4-73 国	SK224 出土遺物 (1/3、3~5=1/1)	156
第4-34 国	SD239=SD245 (1/60)	133	第4-74 国	SK228=SK232 (1/30)	157
第4-35 国	SD239=SD245 出土遺物 (1/3)	133	第4-75 国	SK232 出土遺物 (1/3、15=1/1)	158
第4-36 国	SD176・SD197・SD208 (1/80)	133	第4-76 国	SK278 (遺構 1/30、遺物 1/3)	158
第4-37 国	SK247 (1/80)	134	第4-77 国	SK293 (1/30)	159
第4-38 国	SK247 出土遺物 (1/3)	134	第4-78 国	SK293 出土遺物 (1/3)	159
第4-39 国	SK266 (1/30)	135	第4-79 国	SK215・SK267 (遺構 1/30、遺物 1= 1/3・2=1/1)	160
第4-40 国	SK266 出土遺物 (1/3、3=1/10)	136	第4-80 国	16世紀第4四半期前半の遺構 (1/300)	161
第4-41 国	SK227 (遺構 1/30、遺物 1/3)	137	第4-81 国	SD118 (1/80)	162
第4-42 国	SK189 (1/30)	138	第4-82 国	SD118 出土遺物 (1/3、7=1/1)	163
第4-43 国	SK189 出土遺物 (1/3)	139	第4-83 国	SD117 (1/80)	164
第4-44 国	SK193 (遺構 1/30、遺物 1/3)	139	第4-84 国	SD117 出土遺物 (1/3、7=1/4)	165
第4-45 国	16世紀第2四半期の遺構 (1/300)	141	第4-85 国	SD116 (1/80)	166
第4-46 国	SD140 (1/80)	141	第4-86 国	SD116 出土遺物 (1/3、16=1/4)	167
第4-47 国	SD140 出土遺物 (1/3)	141	第4-87 国	SD250 (1/100)	169
第4-48 国	SE235 (1/30)	142	第4-88 国①	SD250 出土遺物 (1/3、16=1/4)	170
第4-49 国	SE235 出土遺物 (1/3)	142	第4-88 国②	SD250 出土遺物 (1/4)	171
第4-50 国	SE144 (1/30)	143	第4-88 国③	SD250 出土遺物 (1/3、19=1/4)	173
第4-51 国	SE144 出土遺物 (1/3)	144	第4-88 国④	SD250 出土遺物 (1/3)	174
第4-52 国	SE291 (1/30)	144	第4-88 国⑤	SD250 出土遺物 (1/3)	175
第4-53 国	SE291 出土遺物 (1/3)	145	第4-88 国⑥	SD250 出土遺物 (1/3)	176
第4-54 国	SE238 (遺構 1/30、遺物 1/3)	145	第4-88 国⑦	SD250 出土遺物 (1/3)	177
第4-55 国	SK243 (遺構 1/30、遺物 1=1/3、2= 1/2)	146	第4-88 国⑧	SD250 出土遺物 (86=1/1、87~88= 1/4、89・90=1/10)	178
第4-56 国	SK265 (1/30)	146	第4-88 国⑨	SD250 出土遺物 (91~102=1/10、103~ 105=1/3)	179
第4-57 国	SK265 出土遺物 (1/3、5=1/1)	147	第4-89 国	SD270 (1/100)	181
第4-58 国	SK272 (遺構 1/30、遺物 1/3)	147	第4-90 国	SD270 出土遺物 (1/3)	182
第4-59 国	SK285 (1/30)	148	第4-91 国	SD131 (1/60)	183
第4-60 国	SK285 出土遺物 (1/3、5=1/1・6~10= 1/10)	149	第4-92 国①	SD131 出土遺物 (1/3、4=1/4)	184
第4-61 国	SK163 (遺構 1/30、遺物 1/3)	149	第4-92 国②	SD131 出土遺物 (1/3)	185
第4-62 国	SK190 (遺構 1/30、遺物 1/3)	150	第4-93 国	SD230・SK261・SD292 (1/80)	186
第4-63 国	SK191 (1/30)	150	第4-94 国	SD230 (1/30)	187
第4-64 国	SK191 出土遺物 (1/3)	150	第4-95 国	SK261 (1/30)	188
第4-65 国	ST192 (1/30)	151			

第4-96 園	SD292 (1/60) ……………188	第4-124 園	SD168 (1/80) ……………227
第4-97 園①	SD230・SK261 出土遺物 (1/3、1 = 1/4) ……………190	第4-125 園	SD168 出土遺物 (1/3、21 ~ 22 = 1/1) ……228
第4-97 園②	SD261 出土遺物 (1/3、15 = 1/1、16 ~ 17 = 1/4) ……………191	第4-126 園	SE147 (1/30) ……………230
第4-98 園	SD292 出土遺物 (1/3) ……………192	第4-127 園	SE147 (1/3、5 = 1/1・6 = 1/4) ……………231
第4-99 園	SE148 上部廃棄状壁 (1/30) ……………193	第4-128 園	SE210 (1/30) ……………232
第4-100 園	SE148 (1/30) ……………194	第4-129 園	SE210 出土遺物 (1/3、6 ~ 8 = 1/1) ……233
第4-101 園①	SE148 井筒石組出土遺物 (1/10) ……………195	第4-130 園	S218 出土遺物 (1/3) ……………234
第4-101 園②	SE148 井筒石組出土遺物 (1/10) ……………196	第4-131 園	SK231 (1/40) ……………234
第4-102 園①	SE148 出土遺物 (1/3) ……………197	第4-132 園①	SK231 出土遺物 (1/3) ……………236
第4-102 園②	SE148 出土遺物 (1/3、24 = 1/10、36 = 1/1) ……198	第4-132 園②	SK231 出土遺物 (1/3) ……………237
第4-103 園	SK264 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……………199	第4-133 園	SK215 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……………237
第4-104 園	SK236 (1/30) ……………200	第4-134 園	SI34 (1/30) ……………238
第4-105 園	SK236 出土遺物 (1/3) ……………200	第4-135 園	SD194 (1/30) ……………239
第4-106 園	SK252 (1/30) ……………201	第4-136 園	SK237 (1/30) ……………239
第4-107 園	SK252 出土遺物 (1/3) ……………202	第4-137 園	SP213 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……………239
第4-108 園	SK269 (= S137) (1/30) ……………202	第4-138 園	SD204 (1/30) ……………240
第4-109 園	SK269 出土遺物 (1/3) ……………203	第4-139 園	SK163 (1/30) ……………241
第4-110 園	SK156 (遺構 1/30、遺物 1/1) ……………204	第4-140 園	SK180 出土遺物 (1/3) ……………241
第4-111 園	SK279 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……………205	第4-141 園	SK220 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……………242
第4-112 園	SK263 (1/30) ……………205	第4-142 園	SK246 (1/30) ……………242
第4-113 園	SK263 (1/3、13 = 1/4) ……………206	第4-143 園	SK246 出土遺物 (1/3) ……………243
第4-114 園	SK229 (1/30) ……………207	第4-144 園	SP195・SP240 出土遺物 (1/3) ……………243
第4-115 園	SK229 出土遺物 (1/3) ……………208	第4-145 園	近世の遺構 (1/300) ……………244
第4-116 園	SK273 (遺構 1/30、遺物 1/3、2 = 1/1) ……………208	第4-146 園	SD138 (1/30) ……………244
第4-117 園	SK262 (1/30) ……………209	第4-147 園	SD138 出土遺物 (1/3) ……………245
第4-118 園①	SK262 出土遺物 (1/3、8 = 1/4) ……………211	第4-148 園	SX139 (1/60) ……………245
第4-118 園②	SK262 出土遺物 (1/3、9・10 = 1/4) ……212	第4-149 園	SK177 出土遺物 (1/3) ……………245
第4-118 園③	SK262 出土遺物 (1/3) ……………213	第4-150 園	SD145 出土遺物 (1/3、3 ~ 4 = 1/2) ……246
第4-118 園④	SK262 出土遺物 (1/3) ……………214	第4-151 園	SK146 出土遺物 (1/3、4 = 1/1) ……………247
第4-118 園⑤	SK262 出土遺物 (1/3) ……………215	第4-152 園	SP142 出土遺物 (1/3) ……………247
第4-118 園⑥	SK262 出土遺物 (1/3) ……………216	第4-153 園①	第2層整地層出土遺物 (1/3、25 = 1/1) ……248
第4-119 園	16世紀第4四半期後半の遺構 (1/300) ……218	第4-153 園②	第2層整地層出土遺物 (1/3、49・63・64・ 67・74 = 1/1・73 = 1/2) ……………249
第4-120 園	SD141 (1/80) ……………219	第4-154 園	その他の遺物 (1/3、3 = 1/1) ……………251
第4-121 園①	SD141 出土遺物 (1/3) ……………220	第4-155 園	墓地とその周辺の遺構配置 (1/80) ……254
第4-121 園②	SD141 出土遺物 (1/3) ……………221	第4-156 園	墓地第1期 (1/150) ……………255
第4-121 園③	SD141 出土遺物 (1/3・55 ~ 57 = 1/1) ……222	第4-157 園	3号墓 ST268 (遺構 1/10、遺物 1/3) ……256
第4-122 園	SD167 (1/80) ……………224	第4-158 園	墓地第2期 (1/150) ……………257
第4-123 園①	SD167 出土遺物 (1/3) ……………225	第4-159 園	5号墓 ST154 (1/10) ……………257
第4-123 園②	SD167 出土遺物 (1/3、35 = 1/2・36 ~ 41 = 1/1) ……………226	第4-160 園	6号墓 ST157 (遺構 1/10、遺物 1/3) ……258
		第4-161 園	7号墓 S T158 (1/10) ……………259
		第4-162 園	13号墓 ST162 (1/10) ……………260
		第4-163 園	14号墓 ST295 (遺構 1/10、遺物 1/3) ……261

第4-164 図	15号墓 ST296 (1/10) ……………	261	第4-177 図	8号墓 ST149 出土遺物 (1~5=1/1、6~13=1/3) ……………	276
第4-165 図	16号墓 ST297 (1/10) ……………	262	第4-178 図	9号墓 ST152 (1/10) ……………	277
第4-166 図	17号墓 ST299 (1/10) ……………	262	第4-179 図	9号墓 ST152 出土遺物 (1/3) ……………	278
第4-167 図	墓地第3期 (1/150) ……………	263	第4-180 図	10号墓 ST260 (1/10) ……………	279
第4-168 図	1号墓 ST130 (1/10) ……………	264	第4-181 図	10号墓 ST260 出土遺物 (1/1) ……………	279
第4-169 図	1号墓 ST130 出土遺物 (1/2) ……………	265	第4-182 図	11号墓 ST257 (遺構 1/10、遺物 1/3) ……	280
第4-170 図	2号墓 ST135 (遺構 1/30、遺物 1/2) ……	266	第4-183 図	12号墓 ST274 (遺構 1/10、遺物 1/3) ……	281
第4-171 図	4号墓 ST150 (1/10) ……………	267	第4-184 図	18号墓 ST290 (1/10) ……………	281
第4-172 図	4号墓 ST150 埋葬人骨出土状態 (1/10) ……	268	第4-185 図	15世紀の遺構 (1/400) ……………	285
第4-173 図	4号墓 ST150 木棺金具及び釘 (1/2) ……	269	第4-186 図	16世紀第1四半期の遺構 (1/400) ……	286
第4-174 図	4号墓 ST150 木棺金具及び釘 (1/2)・木棺内上層出土遺物 (1/3) ……………	271	第4-187 図	16世紀第2四半期の遺構 (1/400) ……	286
第4-175 図	4号墓 ST150 木棺復元図 (1/10) ……	272	第4-188 図	16世紀第3四半期の遺構 (1/400) ……	287
第4-176 図①	8号墓 ST149 棺蓋出土状態 (1/10)・木棺想定復元図 ……………	273	第4-189 図	16世紀第4四半期前半の遺構 (1/400) ……	288
第4-176 図②	8号墓 ST149 埋葬人骨出土状態 (1/10) ……	274	第4-190 図	16世紀第4四半期後半の遺構 (1/400) ……	288
第4-176 図③	8号墓 ST149 木棺 (1/10) ……………	275	第4-191 図	近世の遺構 (1/400) ……………	289
			第4-192 図	江戸時代の車長持 ……………	292

第5章 自然科学的分析

第1節 中世大友府内町跡第10次Ⅱ区北調査区出土人骨について

図1	3号墓人骨大腿骨病変部(後面) ……………	302	図3	3号墓人骨大腿骨病変部レ線像(後面) ……	302
図2	3号墓人骨大腿骨病変部(前面) ……………	302	図4	3号墓人骨大腿骨病変部レ線像(側面) ……	302

第2節 中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学調査

表1	中世大友府内町跡から出土した金属製品の記載 ……………	303	図4	図3の拡大図 ……………	307
表2	中世大友府内町跡から出土した金属製品の化学合成 ……………	304	図5	今回の金属製品とこれまで測定された府内町跡出土の金属製品の鉛同位体比 ……………	308
表3	中世大友府内町跡から出土した金属製品に関する鉛同位体比値 ……………	305	図6	図5の拡大図 ……………	308
図1	中世大友府内町跡から出土した金属製品の鉛同位体比 ……………	306	図7	今回の金属製品とこれまで測定された府内町跡出土の金属製品の鉛同位体比 ……………	309
図2	図1の拡大図 ……………	306	図8	図7の拡大図 ……………	309
図3	中世大友府内町跡から出土した金属製品の鉛同位体比 ……………	307			

第6章 総括

第6-1 図	府内古園と地籍園による比定 ……………	312	第6-4 図	振倉謝公墳 ……………	320
第6-2 図	キリシタン墓地 ……………	317	第6-5 図	第7次調査SK734出土遺物 (1/3) ……	326
第6-3 図	中世大友府内町跡10次調査区の墓地 ……	318			

表 目 次

第1章 はじめに

第1-1表 中世大友府内町跡発掘調査一覧 ……3

第2章 中世大友府内町跡第10次調査区Ⅰ区

第2-1表 第10次調査区Ⅰ区遺構一覧 ……16

第3章 中世大友府内町跡第10次調査区Ⅱ区南調査区

第3-1表 第10次調査Ⅱ区南調査区遺構一覧 ……52

第4章 中世大友府内町跡第10次Ⅱ区北調査区

第4-1表 第10次Ⅱ区北調査区遺構一覧 ……89

第4-2表 第10次Ⅱ区北調査区の接合資料一覧 ……96

第4-3表 第10次Ⅱ区北調査区墓地時期別一覧 ……252

第4-4表 第10次Ⅱ区北調査区墓地一覧 ……253

遺物観察表目次

遺物観察表1 10次Ⅰ区調査区遺物観察表(土器・陶磁器①)

遺物観察表2 10次Ⅰ区調査区遺物観察表(土器・陶磁器②)

10次Ⅰ区調査区遺物観察表(瓦)

10次Ⅰ区調査区遺物観察表(銅銭)

遺物観察表3 10次Ⅰ区調査区遺物観察表(土製品・石製品・
金銅製品)

遺物観察表4 10次Ⅱ区南調査区遺物観察表(土器・陶磁器①)

遺物観察表5 10次Ⅱ区南調査区遺物観察表(土器・陶磁器②)

遺物観察表6 10次Ⅱ区南調査区遺物観察表(土器・陶磁器③)

10次Ⅱ区南調査区遺物観察表(瓦)

10次Ⅱ区南調査区遺物観察表(銅銭)

遺物観察表7 10次Ⅱ区南調査区遺物観察表(土製品・石製品・
金銅製品・木製品)

遺物観察表8 10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器①)

遺物観察表9 10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器②)

遺物観察表10 10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器③)

遺物観察表11 10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器④)

遺物観察表12 10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑤)

遺物観察表13 10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑥)

遺物観察表14 10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑦)

遺物観察表15 10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑧)

遺物観察表16 10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑨)

遺物観察表17 10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑩)

10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(石製品①)

遺物観察表18 10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(石製品②)

10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土製品)

遺物観察表19 10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(銭貨)

10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(瓦製品①)

遺物観察表20 10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(瓦製品②)

遺物観察表21 10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(瓦製品③)

10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(金銅製品①)

遺物観察表22 10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(金銅製品②)

10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(木製品)

10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(その他)

写真図版目次

巻頭図版1 (上) 10次Ⅱ区北調査区墓地遠景

(下) 1号墓 ST130の木棺と埋葬状態(東から)

巻頭図版2 中世大友府内町跡の空中写真

巻頭図版3 10次調査区周辺の空中写真(合成)

巻頭図版4 (上) 10次Ⅰ区調査区の空中写真

(下) 10次Ⅱ区南調査区の空中写真

巻頭図版5 (上) 10次Ⅱ区北調査区遠景(南上空から)

(下) 10次Ⅱ区北調査区全景

巻頭図版6

(上) 10次Ⅱ区北調査区全景

(下) 10次Ⅱ区北調査区全景

巻頭図版7

(上) 道路 SF151(西から)

(下) 道路 SF151の断面

巻頭図版8

(上) 道路 SF151の北側開溝の推移

(下) SE147の石組井筒

中世大友府内町跡第10次Ⅰ区調査区

写真図版1 SD001 遺物出土状況(東から)

SD001 完掘状況(北から)

SD010・SD028 遺物出土状況(南から)

SK004 遺物出土状況(北から)

SK005 遺物出土状況(南から)

SK005 完掘状況(南から)

SK006 遺物出土状況(北から)

SK007 遺物出土状況(南から)

写真図版2

	SK008 遺物出土状況 (東から)		SK030 遺物出土状況 (北から)
	SK012 焼土・炭検出状況 (東から)		ST009 遺物出土状況 (北から)
	SK012 遺物出土状況 (東から)		ST009 遺物出土状況 (南から)
	SK013 遺物出土状況 (北から)		ST009 遺物出土状況 (北から)
	SK015 遺物出土状況 (東から)		ST009 完掘状況 (北から)
写真図版 3	SK022 遺物出土状況 (西から)		SP01 (4-B区) 滑石製スタンプ出土状況
	SK027 遺物出土状況 (南から)		SE014 完掘状況 (北から)
中世大友府内町跡第 10 次Ⅱ区南調査区			
写真図版 4	SE017 検出状況 (北から)		SD117 (11-A区) 在地系土師器出土状況
	SE017 井筒検出状況 (北から)		SD117 (11-A区) 在地系土師器出土状況
	SE017 土層断面図 (合成写真)		SD117 (10-A区) 遺物出土状況
	SE017 桶側 2 段目検出状況		SD117 (10-A区) 永楽通寶出土状況
	SE017 桶側蓋検出状況		SD117 (10-A区) 漳州窯出土状況
	SE017 桶側 4 段目検出状況		SD117 完掘状況 (西から)
写真図版 5	SE017 井筒内出土土・炭・瓦	写真図版 8	SD118 (9-A・10-A区) 遺物出土状況 (西から)
	SE126 検出状況		SD118 下駄出土状況
	SE126 井筒南側横棧支柱		SD118 洪武通寶出土状況
	SE126 井筒南側横棧接合部		SD118 折敷出土状況
	SE126 井筒		SD118 完掘状況 (西から)
	SD111 遺物出土状況 (西から)	写真図版 9	SD101 遺物出土状況 (北から)
	SD113 (基礎 3) 遺物出土状況 (北から)		SK104 遺物出土状況
	SD113 (基礎 4) 完掘状況 (北から)		SK104 遺物出土状況 (東から)
写真図版 6	SF116・SF124 (西から)		SK115 遺物出土状況 (南から)
	SF116・SF124 (北から)		SK120・SK121 遺物出土状況 (東から)
	SF116・SF124 (石敷)		SB001・SP001・SP002・SD111
	SF116 完掘状況 (西から)		SP003 遺物出土状況
	SF116 京都系土師器出土状況		古代包含層遺物出土状況
	SF116 近世 1 期備前系陶器産鉢出土状況		
写真図版 7	SD117 (11-A区) 遺物出土状況 (東から)		
中世大友府内町跡第 10 次Ⅱ区北調査区			
写真図版 10	10 次Ⅱ区北調査区全景	写真図版 13	道路 SF151 西半上層
	10 次Ⅱ区北調査区遠景 (西から大分川を望む)		第 1 面の検出状況 (C7 区付近)
写真図版 11	調査区東半 (南西から)		中面道路面 (B8 区付近)
	調査区東半 (南から: 第 4 南北街路が見える)		下層道路面 (B8 区付近)
	調査区西半線路の向こうにはダイウス堂推定地)	写真図版 14	側溝にはさまれた道路 (B8 区東半 (SD165 の矢板列がみえる))
写真図版 12	東区 (中町に面した町屋の遺構)		近世の石列 SX138 (北から)
	道路 SF151 上層		SX138 (西から)
	道路 SF151 中層		近世の溝 SD145 (道路 SF151 の位置に)
	SF151 第 1 面検出状況		SD145
	SF151 と両側溝 SD167 と SD168	写真図版 15	道路 SF151 と南の溝 SD118
			SD117 (右は道路 SF151 上層)
			SD167 と道路 SF151 (B8 区)

	SF151とSD141出土状況(東から:A10区)		土坑SK163 (16世紀第2四半期)
	溝SD141 出土状況①	写真図版 22	土坑SK164 (16世紀第3四半期)
	溝SD141 出土状況②		土坑SK224 (16世紀第3四半期) 祭祀出土状況SK224
写真図版 16	溝SD270と道路SF151 (B9区・A10区)		土坑SK232 (16世紀第3四半期)
	溝SD270 出土状況 (東から:A9・B10区)		土坑SK293 (16世紀第3四半期)
	溝SD270とSD250 (東から:B7区)		溝SD230 (16世紀第4四半期前半)
写真図版 17	道路SF151と溝SD270 (東から:A10区)	写真図版 23	土坑SK261 (16世紀第4四半期前半) 出土状況SK261 塵土除去後SK261
	北側側溝群と道路SF151(東から:B10区)		溝SD292 (16世紀第4四半期前半)
	溝SD165矢板痕跡 (第3矢板列:B9区)		土坑SK236 (16世紀第4四半期前半) 出土状況SK236 動物骨出土状態SK236 土器出土状態SK236 完掘状態
	SD165 第4矢板列の杭痕 (B8区)		土坑SK269 (16世紀第4四半期前半)
	SD165 矢板痕	写真図版 24	土坑SK279 (16世紀第4四半期前半)
	SD165 第4矢板列の杭痕 (C7区)		土坑SK263 (16世紀第4四半期前半)SK263 断面SK263 完掘状態
	SD165 完掘状態 (西から:B9区)		土坑SK229 (16世紀第4四半期前半)SK229 完掘状態
	SD165 完掘状態 (西南から:B9区)		土坑SK262 (16世紀第4四半期前半)出土状況
	SD165 動物骨出土状況		土坑SK231 (16世紀第4四半期後半)
写真図版 18	SD165 第4矢板列の掘形内埋置土師器群		土坑SK215 (16世紀第4四半期後半)
	SD189 (南から:南2区)		土坑SK237 (16世紀第4四半期後半)
	SD194 (B6区)		土坑SK220
	井戸SE300 (15世紀)とSE210 (東から)		現地説明会 (2002.) 風景①
	井戸SE235 (16世紀第2四半期) 北からSE235の井筒	写真図版 25	墓地の区画溝SD131 (東から) 2001年度調査時
	井戸SE144 (16世紀第2四半期前半)		SD131 (西から)
	井戸SE234 (16世紀第3四半期)		墓地全景 (南から)
写真図版 19	SE234の井筒		墓地全景 (西から)
	井戸SE148 検出状況		墓地全景 (北東から)
	SE148 井筒と破壊のあと出現		墓地全景 (北東から)
	SE148 石組井筒をこわしてふさいでいる		墓地西部 (南から)
	SE148 井筒内大石でふさぐ		墓地中部 (南から)
	SE148 石組井筒出土状況		墓地中部 (南から)
	SE148 井筒2段目の石組		墓地東部 (南から)
	SE148 石組の基礎出現	写真図版 26	1号墓ST130 (南から)
	SE148 井筒基底の掘出土		ST130 (北から)
写真図版 20	井戸SE210 (16世紀第4四半期)		ST130 木棺
	SE210の井筒桶		ST130 北半 (東から)
	土坑SK226 (古代)		ST130 全景 (西から)
	土坑SK256 (15世紀後半)	写真図版 27	2号墓ST135 (西から)
	土坑SK119 (15世紀前半)		3号墓ST268 棺底出土状態 (東から)
	土坑SK212 (15世紀)		3号墓ST268 埋葬状態
	溝SD239 (16世紀第1四半期)	写真図版 28	
写真図版 21	土坑SK266 (15世紀~16世紀第1四半期)		
	土坑SK227 (16世紀第1四半期) 出土状況		
	S K227 完掘状態		
	土坑SK193 (16世紀第1四半期)		
	土坑SK238 (16世紀第2四半期)		
	土坑SK265 (16世紀第2四半期)	写真図版 29	
	土坑SK272 (16世紀第2四半期)		
	土坑SK285 (16世紀第2四半期)		

	4号墓 ST150 埋葬状態 (南から)	写真図版 33	8号墓 ST149 北小口・角材出土状態
写真図版 30	4号墓 ST150 西側板・角材痕跡		8号墓 ST149 南小口・角材出土状態
	4号墓 ST150 東側板・角材痕跡		9号墓 ST152 埋葬状態
	4号墓 ST150 北小口板・角材痕跡		10号墓 ST260 埋葬状態
	4号墓 ST150 金具 12 出土状態	写真図版 34	11号墓 ST257 出土状態 (南から)
	4号墓 ST150 金具 1 出土状態		11号墓 ST257 ガラス玉出土状態
	4号墓 ST150 金具 2 出土状態		12号墓 ST274 埋葬状態
	4号墓 ST150 金具 11 出土状態		13号墓 ST289 埋葬状態
	4号墓 ST150 釘 25 出土状態		14号墓 ST295 埋葬状態
写真図版 31	5号墓 ST154 埋葬状態	写真図版 35	15号墓 ST296 人骨出土状態
	6号墓 ST157 埋葬状態		16号墓 ST297 出土状態
	7号墓 ST158 埋葬状態		18号墓 ST290
写真図版 32	8号墓 ST149 埋葬状態		両在風景 (夏の夕暮れ)
	8号墓 ST149 木棺出土状態		現地説明会②
	8号墓 ST149 棺蓋落下状況		
	8号墓 ST149 木棺底部		
中世大友府中世大友府内町跡第 10 次 I 区調査区			
写真図版 36	SD001 出土遺物		SK027 出土遺物
	SD010 出土遺物	写真図版 37	SK030 出土遺物
	SK004 出土遺物		SE014 出土遺物
	SK006 出土遺物		SE017 出土遺物
	SK019 出土遺物		ST009 出土遺物
	SK022 出土遺物		包含層・ビット出土遺物
	SK026 出土遺物		
中世大友府内町跡第 10 次 II 区南調査区			
写真図版 38	SD111 出土遺物		SK115 出土遺物
	SD113 出土遺物		SK121 出土遺物
	SD116 出土遺物		SP003 出土遺物
	SD117 出土遺物		包含層出土遺物
	SD118 出土遺物		
写真図版 39	SK104 出土遺物		
中世大友府内町跡第 10 次 II 区北調査区			
写真図版 40	SD165 出土遺物		SE148 出土遺物
	SD255 出土遺物		SK264 出土遺物
	SK251 出土遺物		SK263 出土遺物
	SK266 出土遺物		SK262 出土遺物
写真図版 41	SK265 出土遺物	写真図版 45	SD168 出土遺物
	SK163 出土遺物		S218 出土遺物
	SK224 出土遺物		SP213 出土遺物
	SK232 出土遺物		第 2 層整地層出土遺物
	SD118 出土遺物		ST268 出土遺物
写真図版 42	SD116 出土遺物		ST295 出土遺物
	SD250 出土遺物		ST150 出土遺物
写真図版 43	SD270 出土遺物	写真図版 46	ST150 出土遺物
	SD131 出土遺物		ST152 出土遺物
	SK261 出土遺物		ST257 出土遺物
写真図版 44	SK261 出土遺物		第 7 次調査 SK734 出土遺物
	SD292 出土遺物		

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

1. 調査に至る経過

別府湾沿岸は、瀬戸内海を通じて古代から九州の玄関口としての役割を果たしてきた。なかでも大分川河口部西岸地域は、中世・近世・近代を通じ、豊後国・大分県の行政・経済の中心地として発展してきた。特に明治以降、瀬戸内海航路に加え鉄道の敷設や道路網の整備など、陸上交通の発達が顕著になると、県庁所在地である大分市は東九州の交通の要衝となった。そうしたなか1911(明治44)年に大分駅が近世城下町の外堀の南に建設されると、周辺は大分県の物流の中心地となり、以後太平洋戦争による空襲の打撃を受けながらも、今日まで発展を遂げた。

しかし、昭和40年代以降の自動車交通量の増加に伴い、大分駅周辺の交通状況も変化を起し、周辺の鉄道と道路の平面交差部分では交通障害を引き起こす結果となった。また、拡大する大分市中心街にとって、鉄道線路そのものが市街地を分断する要因ともなった。そこで、これらを解消するため1970(昭和45)年に「大分市国鉄路線高架化促進期成同盟会」が設立された。この動きは、25年後の1995(平成7)年に「大分駅付近連続立体交差事業」として採択され、具体化することになった。

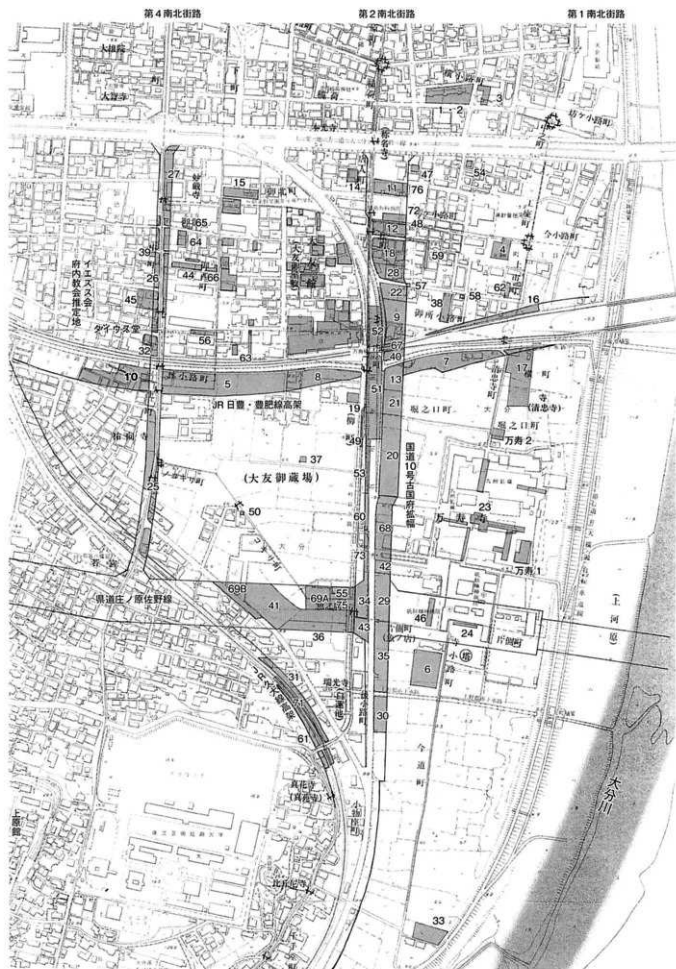
一方、大分川河口部西岸沿いには、のちにキリシタンとなり南蛮貿易を行った戦国大名である大友宗麟の城下町「府内」があることが、古絵図から知られていた。この古絵図には、大友館・万寿寺など当時の主要な建物の位置や、道路・屋敷地の配置などが明瞭に描かれ、都市の構造を伝えるものであった。その位置は1955(昭和30)年に刊行された「大分市史」の段階で、大友館や万寿寺をほぼ特定できたが、使用できる地形図の問題もあり、精度に問題を残した。その後、1987(昭和62)年に刊行された「大分市史」中巻で新たに府内古図が確認されたこともあり、明治時代の地籍図と照合し、さらに現在の地図に置き換えた。その結果、現在の地図上に高い精度で、大分川に沿った東西約0.7km、南北2.2kmの規模の戦国時代の「府内」を再現することができ、「中世大友城下町跡」として周知遺跡となった。

こうして大分駅高架化事業である「大分駅付近連続立体交差事業」は、この戦国時代の「府内」を東西に貫く土木工事となり、しかもこの中世都市の中核部である大友氏館の南側を通過するものであった。そこで大分県教育委員会では、事業主体者である大分県土木建築部と協議を行い、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の経過

大分駅付近連続立体交差事業に伴う、大分県教育委員会による中世大友城下町跡の発掘調査は、1999(平成11)年8月から始まる。しかし、この遺跡に対する発掘調査は、1996(平成8)年から大分市教育委員会が大分駅南地区の区画整理事業に伴い、移転先の宅地造成地や民間開発などに対応し実施していた。すなわち、同じ遺跡を大分県と大分市という2つの組織が発掘調査することとなった。そこで大分市教育委員会と協議を行い、遺跡全体を「中世大友城下町跡」とするが、大友氏館部分は「大友氏館跡」、都市城部分は「府内町跡」として県教育委員会と市教育委員会が重複することなく発掘調査着手に調査次数を兼ねることとした。また、遺構実測をする際には、国土座標を必ず使用することにした。(のちに万寿寺跡も調査次数を別にすることになった)

こうして、1999(平成11)年8月、大分駅付近連続立体交差事業に伴う発掘調査として、「府内町跡5次調査」が開始された。そして、2000(平成12)年から「府内町跡7次調査」と「府内町跡8次調査」が加わり、21世紀を迎えた2001(平成13)年には「府内町跡7次調査」を継続するとともに「府内町跡10次調査」と「府内町跡16次調査」を実施した。そして、2002(平成14)



第1-1図 中世大友府内町跡発掘調査状況(数字は調査次数)

第1-1表 中世大友府内町跡発掘調査一覧

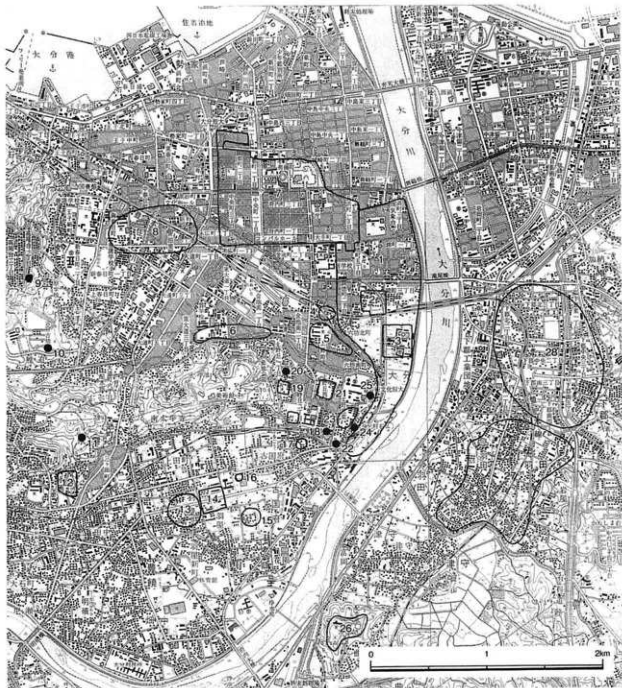
調査年度 2006(平成18)年12月現在

調査年度	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	報告書発行	調査内容
府内町跡1次	大分県教委	1996-7(平成8-9)年度	区画整理移転事業	榎小路町	2001(平成16)年3月	幅約10mの道路
府内町跡2次	大分県教委	1996-7(平成8-9)年度	区画整理移転事業	榎小路町	2001(平成16)年3月	
府内町跡3次	大分県教委	1997(平成9)年度	区画整理移転事業	榎小路町	2003(平成15)年3月	10基の備後焼土の集積
府内町跡4次	大分県教委	1998(平成10)年度	マンション建設	上志町	2002(平成14)年3月	名々小路の跡の一部
府内町跡5次	大分県教委	1999-2001(平成11-13)年度	県庁舎・倉庫高架梁	御藏場	2005(平成17)年3月	御藏場周辺の道路
府内町跡6次	大分県教委	1999(平成11)年度	JJA整備場	寺小路町・万寿寺		万寿寺の南側の堀?
府内町跡7次	大分県教委	2001(平成12-13)年度	県庁舎・倉庫高架梁	清忠寺町	2006(平成18)年3月	古代大型建物群、第1南北街道、清忠寺町、御所小路町
府内町跡8次	大分県教委	2000(平成12)年度	県庁舎・倉庫高架梁	榎町・榎の南側	2005(平成17)年3月	15世紀の溝・北堀
府内町跡9次	大分県教委	2001(平成12-13)年度	国道10号拡幅	御所小路町	2006(平成18)年3月	御所小路の跡
府内町跡10次	大分県教委	2001-2(平成13-14)年度	JRA庁舎・御蔵高架梁	上町・中町・ダイクス堂	2007(平成19)年3月	御蔵高架梁、道路
府内町跡11次	大分県教委	2001(平成13)年度	国道10号拡幅	袴名寺		袴名寺の西側の堀
府内町跡12次	大分県教委	2001(平成13)年度	国道10号拡幅	大友館・榎町・名々小路町	2006(平成18)年3月	大友館の東北隅・礎石建物
府内町跡13次	大分県教委	2001(平成13)年度	国道10号拡幅	御所町	2006(平成17)年3月	ウチノキメゾイ出土
府内町跡14次	大分県教委	2001(平成13)年度	マンション建設	田丸町	2003(平成15)年3月	身付
府内町跡15次	大分県教委	2001(平成13)年度	スーパー建設	御藏場		
府内町跡16次	大分県教委	2001(平成13)年度	県庁舎・倉庫高架梁	上志町	2006(平成18)年3月	上志町厨下堀形跡の町屋、御所小路町
府内町跡17次	大分県教委	2002(平成14)年度	コンビニ建設	榎町・清忠寺	2006(平成18)年3月	榎町の道路・跡古印跡
府内町跡18次西	大分県教委	2001(平成13)年度	国道10号拡幅	大友館・御蔵	2006(平成18)年3月	大友館と第2南北街道
府内町跡18次東	大分県教委	2002(平成14)年度	国道10号拡幅	榎町	2006(平成18)年3月	大友館の建物の町屋
府内町跡19次	大分県教委	2001(平成13)年度	御蔵補助 範囲確認	榎町?		御蔵高架梁の跡
府内町跡20次	大分県教委	2002(平成14)年度	国道10号拡幅	万寿寺	2007(平成19)年3月	礎石建物・北堀の堀
府内町跡21次	大分県教委	2002(平成14)年度	国道10号拡幅	堀之内1町	2005(平成17)年3月	万寿寺西側の堀・礎石建物
府内町跡22次	大分県教委	2002(平成14)年度	国道10号拡幅	榎町・御所小路町	2006(平成18)年3月	第2南北街道
府内町跡23次	大分県教委	2002(平成14)年度	御蔵補助 範囲確認	万寿寺		
府内町跡24次	大分県教委	2002(平成14)年度	御蔵補助 範囲確認	万寿寺・寺小路町		万寿寺の塔の礎石
府内町跡25-1次	大分県教委	2003(平成15)年度	市道拡幅	ノコギリ寺		
府内町跡25-2次	大分県教委	2003(平成15)年度	市道拡幅	祐内寺	2006(平成18)年3月	16世紀代前の柱状建物群
府内町跡25-3次	大分県教委	2003(平成15)年度	市道拡幅	上町		
府内町跡25-4次	大分県教委	2003(平成15)年度	市道拡幅	上町		16世紀後半の道路状遺構
府内町跡25-5次	大分県教委	2004(平成16)年度	市道拡幅	袴名寺		
府内町跡25-6次	大分県教委	2004(平成16)年度	市道拡幅	祐内寺	2006(平成18)年3月	
府内町跡26-1次	大分県教委	2003(平成15)年度	市道拡幅	中町・ダイクス堂付近	2007(平成19)年3月	
府内町跡27-1次	大分県教委	2004(平成16)年度	市道拡幅	袴名寺		
府内町跡27-2次	大分県教委	2004(平成16)年度	市道拡幅	御蔵場		
府内町跡28次	大分県教委	2003(平成15)年度	国道10号拡幅	榎町	2006(平成18)年3月	
府内町跡29次	大分県教委	2003(平成15)年度	国道10号拡幅	袴名寺		万寿寺内の区画溝
府内町跡30次	大分県教委	2003(平成15)年度	国道10号拡幅	榎小路町		14世紀代の町屋
府内町跡31次	大分県教委	2003(平成15)年度	県庁舎・倉庫高架梁	堀之内1町		
府内町跡32次	大分県教委	2003(平成15)年度	個人・市道拡幅	中町・ダイクス堂付近	2006(平成18)年3月	
府内町跡33次	大分県教委	2003(平成15)年度	御蔵補助 範囲確認	府内町の南側付近	2003(平成15)年3月	15-16世紀後半の溝
府内町跡34次	大分県教委	2003(平成15)年度	国道10号拡幅	榎町		万寿寺西側の堀・礎石建物
府内町跡35次	大分県教委	2003(平成15)年度	国道10号拡幅	榎小路町・万寿寺		
府内町跡36次	大分県教委	2003(平成15)年度	庄原野野埋	魚ノ店・ノコギリ寺		
府内町跡37次	大分県教委	2003(平成15)年度	アパート建設	御藏場		
府内町跡38次	大分県教委	2003(平成15)年度	アパート建設	御所小路町		御蔵御所小路跡・南北溝
府内町跡39次	大分県教委	2003(平成15)年度	アパート建設	中町		
府内町跡40次	大分県教委	2004(平成16)年度	県庁舎・倉庫高架梁	御内町		
府内町跡41次	大分県教委	2004(平成16)年度	国道10号拡幅	万寿寺		
府内町跡42次	大分県教委	2004(平成16)年度	国道10号拡幅	万寿寺		
府内町跡43次	大分県教委	2004(平成16)年度	国道10号拡幅	万寿寺		
府内町跡44次	大分県教委	2004(平成16)年度	アパート建設	御蔵場		
府内町跡45次	大分県教委	2004(平成16)年度	アパート建設	中町・コジロキ付近		
府内町跡46次	大分県教委	2004(平成16)年度	駐車場建設	万寿寺		
府内町跡47次	大分県教委	2004(平成16)年度	店舗建設	袴名寺		
府内町跡48次	大分県教委	2004(平成16)年度	工業用排水	榎町・御蔵	2006(平成18)年3月	名々小路
府内町跡49次	大分県教委	2004(平成16)年度	工業用排水	榎町・御蔵		
府内町跡50次	大分県教委	2004(平成16)年度	個人住宅・宅地埋	福人住宅・御蔵		
府内町跡51次	大分県教委	2005(平成17)年度	国道10号拡幅	第2南北街道・御内町		御藏場の西側の御蔵と御蔵
府内町跡52次	大分県教委	2005(平成17)年度	国道10号拡幅	第2南北街道・大友氏館		万寿寺西側の堀・大友館東側溝
府内町跡53次	大分県教委	2005(平成17)年度	榎・庄原水防線	万寿寺西側の堀		第2南北街道・大友館の東部
府内町跡54次	大分県教委	2005(平成17)年度	浄化槽	袴名寺の東		
府内町跡55次	大分県教委	2005(平成17)年度	庄原野野埋	御藏場		
府内町跡56次	大分県教委	2005(平成17)年度	御蔵補助 範囲確認	御内町		
府内町跡57次	大分県教委	2005(平成17)年度	市下水道	名々小路町		
府内町跡58次	大分県教委	2005(平成17)年度	アパート建設	御所小路町		
府内町跡59次	大分県教委	2005(平成17)年度	市下水道	榎町		
府内町跡60次	大分県教委	2005(平成17)年度	榎・庄原水防線	万寿寺西側の堀		
府内町跡61次	大分県教委	2005(平成17)年度	県庁舎・倉庫高架梁	堀之内1町		
府内町跡62次	大分県教委	2005(平成17)年度	確認調査	第1南北街道		南街道
府内町跡63次	大分県教委	2006(平成18)年度	確認調査	御内町		
府内町跡64次	大分県教委	2005(平成17)年度	アパート建設	御内町		
府内町跡65次	大分県教委	2005(平成17)年度	確認調査	御内町		
府内町跡66次	大分県教委	2005-6(平成17-18)年度	確認調査	御内町・大友館		
府内町跡67次	大分県教委	2006(平成18)年度	国道10号拡幅	榎町・御所小路町		
府内町跡68次	大分県教委	2006(平成18)年度	国道10号拡幅	万寿寺		
府内町跡69次	大分県教委	2006(平成18)年度	庄原野野埋	御藏場・魚ノ店		A・B区
府内町跡70次	大分県教委	2006(平成18)年度	市下水道工事	金湯寺		
府内町跡71次	大分県教委	2006(平成18)年度	県庁舎・倉庫高架梁	堀之内1町		
府内町跡72次	大分県教委	2006(平成18)年度	国道10号拡幅	袴名寺		
府内町跡73次	大分県教委	2006(平成18)年度	榎・庄原水防線	万寿寺西側の堀		
府内町跡74次	大分県教委	2006(平成18)年度	民間共同住宅建設	大塚院の北側		
府内町跡75次	大分県教委	2006(平成18)年度	庄原野野埋	御藏場・魚ノ店		
府内町跡76次	大分県教委	2006(平成18)年度	国道10号拡幅	袴名寺		

東西に横断

年8月に「府内町跡10次調査」が完了し、この事業に伴う主要部分の発掘調査は終了した。その結果、大分駅付近連続立体交差事業に伴う中世大友城下町跡の発掘調査は、都市遺跡の中央に、東西に横断する巨大なトレンチを入れることになったものである。

本報告書は、このうちの、2001(平成13)年から2002(平成14)年に調査した「府内町跡10次調査」の報告書である。



1. 中世大友城下町跡
2. 大友氏館跡
3. 万寿寺跡
4. 上野町・顕徳寺遺跡
5. 若宮八幡宮遺跡
6. 東大道遺跡
7. 府内城・城下町
8. 東田室遺跡
9. 亀甲古墳
10. 古宮古墳
11. 永興千人塚古墳
12. 永興寺遺跡
13. 羽屋園遺跡
14. 金剛宝戒寺跡
15. 石明遺跡
16. 町口遺跡
17. 岩屋寺遺跡
18. 円寿寺
19. 金剛宝戒寺
20. 上野廃寺
21. 大友上原館跡
22. 岩屋寺石仏
23. 上野龍王畑遺跡
24. 元町石仏
25. 大臣塚古墳
26. 守岡遺跡
27. 羽田遺跡
28. 下郡遺跡群

第1-2図 大分平野の地形と主要遺跡

3. 調査の体制

この大分駅付近連続立体交差事業の発掘調査は1999（平成11）年8月から開始されたが、この事業区域の北側に隣接して「大友氏館跡」が想定されており、この地域に対して2001（平成11）年度から国指定史跡にするための確認調査を大分市教育委員会が実施することになった。このように、大規模な土木事業が重要遺跡に近接して実施されることとなり、事業と遺跡保存の調整が行われる場面も想定できることから文化庁と協議を行い、調査指導者会を2000（平成12）年度から大分県教育委員会と大分市教育委員会が各1回、年2回開催し、その指導を受けながら調査を実施することとなり、2000（平成12）年度から、大分駅付近連続立体交差事業の一部として開催した。2001（平成13）年度以降は本格的に開始された、国土交通省の国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査の事業で開催し、指導を受けた。

本書に報告する2001・2002（平成13・14）年に発掘調査した府内町跡10次調査は以下の調査体制で実施した。役職名は調査当時のものである。

2001（平成13）年度

調査指導者会	調査指導者	河原純之（千葉大学文学部教授） 後藤宗俊（別府大学文学部教授） 小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授） 坂井秀弥（文化庁記念物課埋蔵文化財担当調査官）
	文化課長	工藤正徳
	参事兼課長補佐	麻生祐治
	参事兼課長補佐	清水宗昭
現場総括	大型駅事業担当主幹	坂本嘉弘
	主査	田中裕介（府内町跡7・16次調査担当）
	主任	植島隆二（府内町跡5次B調査担当）
	主任	吉田 寛（府内町跡5次A調査担当）
10次担当	主任	後藤晃一（府内町跡10次Ⅰ区、Ⅱ区南調査区担当 本書掲載）
	嘱託	服部真知、中田祐樹、阿比留志郎、木村宣夫

2002（平成14）年度

調査指導者	調査指導者	河原純之（川村学園女子大学文学部教授） 後藤宗俊（別府大学文学部教授） 五野井隆史（東京大学史料編纂所教授） 田中良之（九州大学大学院教授） 小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授） 坂井秀弥（文化庁記念物課埋蔵文化財担当主任調査官） 山田拓伸（大分県立歴史博物館調査課主幹研究員） 高橋公一（高槻市教育委員会文化財課技師）
	文化課長	岩男康明
	参事兼課長補佐	麻生祐治
	参事兼課長補佐	清水宗昭
	主幹	高橋 徹
現場総括	大型駅事業担当主幹	栗田勝弘
10次担当	副主幹	田中裕介（府内町跡10次Ⅱ区北調査区担当、本書掲載）
	嘱託	山崎文子、河野哲郎、古庄博之、戸田英佑、松田幸之助
	なお調査中特に意見を賜った方々のご芳名は以下のとおり。 故加藤知弘（大分大学名誉教授）、河野史郎・上野淳也（大分市教委）、長田大輔（野津町教委）、宮小路賢宏（九州文化財リサーチ）。	

第2節 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

大分川河口
西岸

大分県内には、各所に小規模な平野が展開する。そうしたなか中世以降今日に至るまで、大分川の左岸から西側にかけて広がる地域は、政治経済の中心地であった。この地域は、東側を大分川が北流し、北側に別府湾が広がり、南側は高崎山系から東に延びる標高約30～40mの上野丘陵が横たわり、西側は高崎山(628m)へと続く標高80m～100mの起伏の激しい丘陵に囲まれている。

中世都市

中世大友城下町跡はその大分川西岸沿いに形成された都市遺跡である。府内古園に描かれている範囲は、北は現在に比べ西側に大きく曲がっている河口部から、南は上野丘陵の先端部と大分川が接する部分にあたる。現在の標高は河口に近い北部で約4m、上流の南部地域で約6mの自然堤防上に立地する。

周辺状況

北と東側は別府湾と大分川に限られるが、遺跡の南西部から西側の限りは、試掘調査の結果や原地形が残されている部分の観察から、低湿地の広がりが見込まれた。この部分は1950年代までレンコンを栽培していたと伝えられている。この低湿地は上野丘陵の裾を巡り、北の別府湾方向に伸び、府内古園に描かれる舟入に続いている。しかし2004年度の中世大友府内町跡第41次調査において、ノコギリ町西側の低地で、規格的な溝が発見された。16世紀にはいまだ宅地としては利用されていないものの、すでに湿地ではなく畑などに利用されるようになったものと推定される。

中世大友城下町跡が立地する自然堤防は、発掘調査の結果、検出面は粘質土層であるが下部には砂層が厚く堆積している。下部の砂層から縄文時代晩期から古墳時代前期の土器が出土しており、上部からは8世紀頃の遺物が出土している。おそらくこの間に2～3m堆積し形成されたものと考えられる。

2 歴史的環境

古宮古墳

壬申の乱

大分君

「大分評衡」

「豊後国府」

古代寺院

別府湾に近い大分川西岸地域が、豊後のなかでも政治的に特別な地域として注目され始めるのは7世紀後半からである。その代表的な遺跡としてあげられるのが、国指定史跡として整備されている古宮古墳である。西側の急峻な丘陵地にあるこの古墳は、壬申の乱(672年)で大海人皇子(天武天皇)側について活躍した大分君恵尺(えさか)あるいは稚臣(わかみ)の墓と想定されている¹⁾。また同時期の重要な遺跡として上野丘陵の南側平野で調査された羽屋井戸遺跡、羽屋園遺跡がある。この遺跡からは、7世紀後半～8世紀初頭の方形の掘形をもつ大型孤立柱建物や総柱の倉庫群が確認されており、「大分評衡」の遺構と想定されている²⁾。

その後8世紀に設置された豊後国府については、羽屋井戸遺跡、羽屋園遺跡の東側に「古国府」の地名が残るものの、政庁本体が未だ不明である。しかし、上野丘陵の東端部で調査された上野龍王畑遺跡では8世紀～10世紀前半にかけての庇をもつ孤立柱建物や築地堀跡、道路状遺構が検出され、その配置から、国司の館跡の可能性が指摘されている³⁾。上野丘陵の西部には8世紀～9世紀にかけての版築基壇に瓦葺の礎石建物が建てられている上野廃寺が存在する。さらに、この丘陵の東端部の南側崖面に岩屋寺石仏、東側崖面に元町石仏が刻まれており、平安時代後期の藤原様式の作風と言われている。このように上野丘陵の南側の羽屋地区から古国府地区、そして上野丘陵東部一帯は7世紀後半から10世紀頃にかけて、豊後の政治文化宗教の中心地であったと考えられている。

11世紀から13世紀代になると、注目される文書が残されている。まず「宇佐神領大鏡」の1053(天

註1 藤原宗俊「古宮古墳考」『大分県地方史』117、大分県地方史研究会1985(『東九州歴史考古学論考』山口啓吉1991に転載)。

註2 坪根伸也・坂地潤一「豊後国府推定地周辺の発掘調査Ⅱ」『大分県地方史』163、大分県地方史研究会1996。

註3 高橋信武「大分県大分市・上野道跡群龍王畑遺跡」『日本考古学』50(1997年度版)、日本考古学協会、1999。

勝津留

喜元)年、1059(康平2)年、1077(承保4)年に「勝津留(かちがつる)畠四至」として登場する。その示す範囲は、上野丘陵東部から北に広がる沖積地にあたり、16世紀に大友館が置かれる場所が含まれている。その中で天喜元年の申文に西の限りとして「高国府」の地名が見られ、上野丘陵東端部が想定されている。11世紀の勝津留開発は、この自然堤防が一旦荒廃し、再開発の対象となったことを示している。13世紀中頃、大友氏3代目の大友頼泰が豊後に守護職として下向した際、「高(隆)国府」を強引に割譲する。このため「高国府」「勝津留畠」については守護所の設置場所と関わる重要な問題となっている。さらに、この申文の中に「東限北廻り、二方市河」とあり、すでに大分川沿いで河原市があり、府内古図に描かれた「府内」の初源的な位置づけがなされている。こうした様子を裏付けるような豊後府中の状況を表す文書がある。それは1242(仁治3)年の新御成敗状で、都市の規範を示す条項が書かれている。このような文書資料では、13世紀代に豊後の中心地である府中が、都市として成立していた様子を示すという。

河原市

守護館

万寿寺

しかし、こうした状況は考古資料で証明できているわけではない。「勝津留畠」の範囲の中で新御成敗状が描く「府中」の状況は現時点で考古学的には不明である。ただ、上野丘陵の南側の平野部で調査された石明遺跡では13世紀を中心とした大規模な溝とその内側をさらに小規模な溝で区画する遺構が確認されており、最初に豊後に下向した三代大友頼泰初期の守護館の指摘もある。

14世紀代になると、1306(徳治元)年に万寿寺が大分川を東に望む自然堤防上に建立され、この地域での本格的な町づくりが開始される。これまでの中世大友城下町跡の発掘調査で確認されるのはこの時期からで、以降16世紀中頃から後半に最盛期を迎え、17世紀初頭に「府内」が近世の府内城下町建設に伴い移転するまでの遺物や遺構が継続して出土する。

上原館

16世紀の遺跡は、府内周辺でも多く確認されている。大分川の東岸にある下部遺跡群や津守・片島地区では方形館や方形区割りをもつ遺構が確認されている。独立性の強い守岡丘陵には山城的な存在である守岡城があり、一方上野丘陵には土塁と堀を廻らす上原館がある。その南の古国府地区には町口遺跡がある。さらに西方の高崎山の山頂は大友氏の詰城として知られている。このように、16世紀代の府内は、府内古図に描かれていない部分も含め、その構造が論じられている。



1. 中世大友城下町跡 2. 高崎城 3. 金谷追城 4. 賀東氏館 5. 尼ヶ城遺跡 6. 雄城城 7. 石明遺跡 8. 町口遺跡 9. 岩屋寺遺跡
10. 上原館跡 11. 東大道遺跡 12. 守岡城跡 13. 津守遺跡 14. 片島遺跡 15. 下部遺跡 16. 千歳城跡 17. 猪野新土居遺跡
18. 猪野中原遺跡 19. 横尾遺跡 20. 沖ノ浜(推定)

第1-3図 中世大友城下町跡と周辺の戦国時代遺跡(1901年の25,000分の1図より集成)

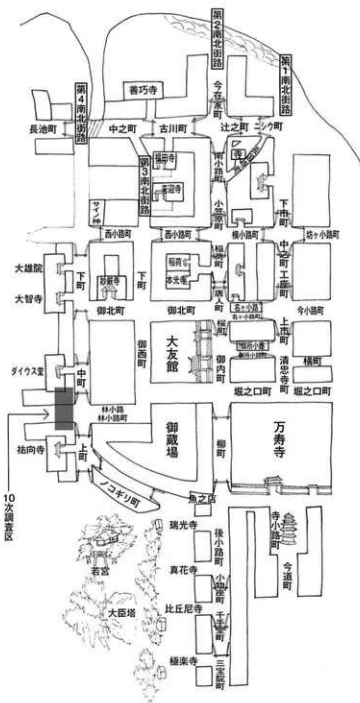
第3節 報告書作成にあたって

1 府内古図と道路の名称

戦国時代に豊後の中心であった府内を描いた「府内古図」は、現在の地図との整合性を求める作業が一部で行われた^{註1}が、永く文献史学ではその信憑性が疑われてきた^{註2}。しかし、1970年代の中頃から、他の文書からの検討がおこなわれ^{註3}、その信頼性が増してきた^{註4}。

そして、「大分市史」^{註5}が1980年代後半に編集されたおり、それまで知られていた「府内古図」の原因と思われる絵図が確認された。そこで、明治時代の地籍図との照合をほかり、現在もその地に存在する大智寺・稲荷などを基点とし、「府内古図」を大分川西岸の現在の地図に写す作業を行った。その結果、ほぼ正確にその位置を把握することが出来た。発掘調査は、この地図を頼りに町屋の名称や道路の位置等を推測しながら実施している。

しかし、現在3種類12枚が確認されている「府内古図」は、その研究^{註6}



第1-4図 「府内古図」と街路名称の設定
 (「府内古図」A類をトレスし、一部改変)

府内古図

「大分市史」

現地比定

古図の研究

註1 大分市「大分市史」上巻 大分市史編纂審議会 1955
 註2 外山幹夫「大友宗麟」吉川弘文館 1975
 註3 渡辺澄夫「古代中世の大分」『大分縣地方史』73 大分県地方史研究会 1974
 註4 橋本操六「旧府内城下図の信憑性」『大分縣地方史』94 大分県地方史研究会 1979
 註5 大分市「大分市史」中、付図5.1987
 註6 木村幾多郎「府内古図の成立」『大分市歴史資料館年報 1992年度版』大分市歴史資料館 1993

名称の統一
 による成立年代は、1634（寛永13）年を遡らず、A類・B類・C類に分類され、その順で新しくなるほど文字情報が増えることが明らかにされた。報告書作成にあたり、こうした各「府内古園」間の不整合と名称の無い街路の呼び方を統一・解消する必要が生じた。すなわち、「御蔵場」の名称はC類のみに見られ、万寿寺西側の「柳町」もB・C類にはあるが、A類には見られない。さらに、府内の町中を走る幾筋もの街路の名称もまたそうである。

街路名称
 「府内古園」には4本の南北の街路と5本の東西の街路が描かれている。南北の街路についてはこれまで、大分川側から一之大路・二之大路・三之大路・四之大路²⁷や、市町筋・大路筋・寺町筋²⁸、南北路1・南北路2・南北路3・南北路4²⁹などと仮称されてきた。本報告書では、全てが町を貫く大路ではないことや、文章との混乱などを考え、大分川側から第1南北街路・第2南北街路・第3南北街路・第4南北街路とした。街路としたのは、ルイス・フロイスの日本史の訳文が「街路」とされており、都市内の道路の意味でこの名称を使用した。また東西の道路については、御所小路町・名々小路町があり、それぞれ、「御所小路」「名々小路」とした。「御蔵場」については、将来検討することを含め、そのまま使用する。

2 中世大友城下町跡出土の土師質土器編年

古文書によると、大分川の西岸地域は11世紀に「市河」として登場し、以後、「府中」「府内」と呼ばれながら、17世紀初頭に近世府内城下町に移転するまで、人々の活動が継続して存続する。発掘調査を実施するにあたり、大分市教育委員会と大分県教育委員会の複数の職員が担当することが予測され、お互い年代的な共通認識を持つ必要が生じた。そこで、継続的に存続したと考えられる中世大友城下町跡の出土遺物の大半を占める土師質土器の編年の確立を、この遺跡のみで目指すことにした。

土師質編年
 研究

豊後地域の11世紀から17世紀初頭の土師質土器の編年は、臼杵石仏群の調査¹⁰や玖珠町伐株山城跡¹¹で試みられ、上野淳也¹²と塩地潤一¹³は16世紀代の土師質土器の編年案を提示している。また、坪根伸也・塩地潤一は大分県内で蓄積した8世紀から16世紀までの発掘資料の編年を試みている¹⁴。さらに、最近では後藤一重が、別府湾を挟んで中世大友城下町跡の対岸にある八坂遺跡群の出土土師質土器を編年している¹⁵。

14世紀初頭

以上のような研究成果を元にまとめたのが第1～5図の編年表である。現時点で、遺構出土のまとまりのある最古の資料は1～18の、府内町第35次調査S017出土資料である。溝状遺構に廃棄された状態で出土したもので、土師質土器の皿1～6は、口径が8.3cm、器高1.3cm、底径6.5cmであるが、7・8は器高が1.9cmと高い。また、坏9・10は、口径が12.7cm、器高3.8cm、底径は6.6cmの底径が小さいタイプであるが、11～16は、口径が12.1cm、器高3.3cm、底径は8.6cmで、

註7 廣毛敏夫「文献・絵図からみた大友館と府内の町・都市と国際性」『南直都市・豊後府内一都市と交易』中世大友再発見フォーラム 大分市教育委員会・中世都市研究会 2001

註8 木村幾多郎「府内と府内古園」『南直都市・豊後府内一都市と交易』中世大友再発見フォーラム 大分市教育委員会・中世都市研究会 2001

註9 池邊千太郎・上野淳也「大友府内6 - 中世大友府内町跡第14次発掘調査報告書 -」大分市教育委員会 2003

註10 菊田 徹「臼杵石仏群地域発掘調査報告書」臼杵市教育委員会 1982

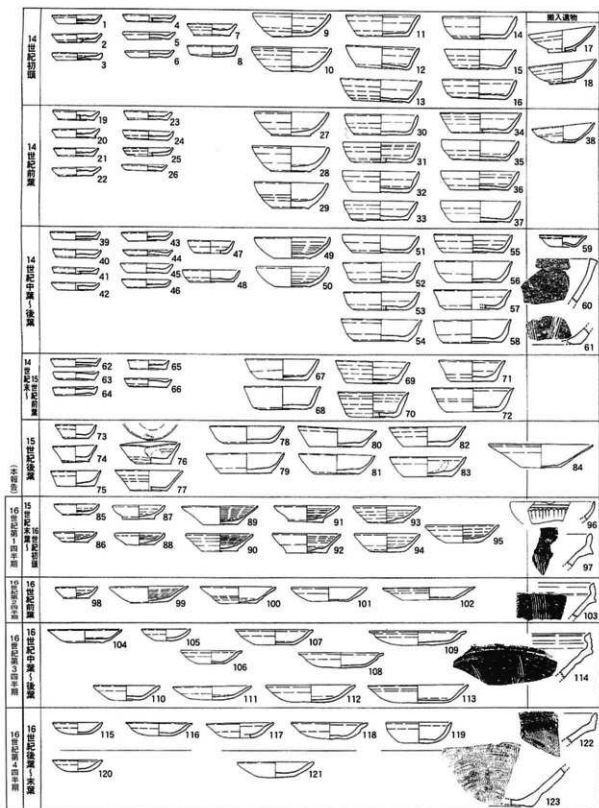
註11 渋谷忠章・後藤一重「切株山城跡」玖珠町教育委員会 1984

註12 上野淳也「千人塚遺跡出土の土師質土器について」『千人塚遺跡』緒方町教育委員会 1999

註13 塩地潤一「九州出土の京都系土師器Ⅱ」『中近世土器の基礎研究 XIV』日本中世土器研究会 1999

註14 坪根伸也・塩地潤一「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会 2000

註15 後藤一重「八坂の遺跡」大分県文化財調査報告書第150号 大分県教育委員会 2003



第1-5図 中世大友城下町跡出土の土師質土器編年図

底径が大きい。11～16の底部から口縁部にかけての器壁の厚さはほぼ一定であるか、やや口縁部にかけて厚くなる。これらの遺物に、口径11.1cm、器高3.4cm、高台の底径4.4cmの17・18の吉備系土師器が伴う。この吉備系土師器は岡山県鹿田遺跡での研究によると14世紀前葉に位置づけられている¹⁶が、この土師器の器形変化の特徴は、口径と底部高台の縮小化である。中世大友城下町跡で次に編年される府内町第30次調査S115からは、さらに新しい傾向の吉備系土師器が出土していることから、14世紀初頭に位置づける。

14世紀前葉

その府内町第30次調査S115は、小土坑に一括廃棄された土器群である。19～38は代表的な資料であるが、組成は口径が8.1cm、器高1.4cm、底径6.4cmの皿、口径12.3cm、器高4.0cm、底径は6.3cmの底径が小さいタイプ、口径12.6cm、器高3.2cm、底径は9.0cmの底径が大きいタイプがある。この底径が大きいタイプの底部から口縁部にかけての器壁は、口縁部が肥厚する傾向が強い。この土器群には38の口径10.2cm、器高2.9cm、底径4.0cmの吉備系土師器が伴う。この土器は、17・18よりさらに口径が小さく、高台も断面三角形で矮小化している。こうしたことから、この時期を14世紀前葉に位置付ける。

14世紀中～後葉

39～61の資料は府内町第30次調査S109出土の資料である。この遺構は大型の土坑で、中位と間柄を挟んで下位から一括廃棄された状態で土器が出土した。図示したのは中位出土の代表的な資料である。組成は皿が口径8.1cm、器高1.2cm、底径6.6cmの39～46のタイプが主体をしめ、口径が小さく器高が高い47、口径が大きい48なども見られる。坏は、口径12.1cm、器高3.3cm、底径は5.6cmの底径が小さいタイプと、口径12.6cm、器高3.3cm、底径は9.1cmの底径が大きいタイプがある。底径の小さいタイプはやや小振りになり、内面に凹線状の整形痕が残る。また底径が大きいタイプの底部から口縁部にかけての器壁は、底部に近い部分が肥厚し、口縁部にかけて外反し、口縁部が尖る傾向が強い。この土器群には59の口径7.3cm、器高1.5cmの京都系土師器と60・61の備前焼播鉢が伴う。京都系土師器は、小森俊寛・村上康章による13世紀末から14世紀中頃に定型化した15世紀末まで見られる白色系薄手のヘソ皿である¹⁷。また、備前焼播鉢は、乗岡実の編年表¹⁸では14世紀後半にあたる。これらの資料から、この土器群を14世紀後葉と考える。

15世紀前葉

62～72は府内町第20次A調査S1505出土の資料である。出土量は多くないが、組成は皿が口径7.7cm、器高1.4cm、底径6.3cmで、底部が厚い。前時期に比較すると小振りになる。坏は、口径12.3cm、器高3.8cm、底径は7.9cmで、前時期より器高が高く、底径が小さくなる。口縁部は回転を利用し引き出すようにし、器高を高くして反らせ、端部は尖る。時期を決定できる明確な資料はないが、前後の関係から15世紀前葉と考える。

15世紀後葉

73～84の資料は大友氏館跡1次調査S008出土資料である¹⁹。遺物は庭園遺構に切られる長方形の土坑から廃棄された状態で出土している。73～75の小型の坏の口径は6.9cm・7.5cm・8.6cm、器高は2.4cm～2.7cm、底径は4.0cm・4.7cm・6.3cmである。また、76・77の中型の坏は口径10.2cm・11.4cm、器高は3.3cm・3.5cm、底径は6.2cmである。そして、坏の口径は12.8cm、器高3.2cm、底径8.0cmが平均である。こうした在地土器は、前時期までの皿と坏の基本的な組成が見られず、小型・中型の坏が一定量みられ、法量分化の傾向が見られる。しかし、色調は橙褐色系・淡褐色と前時期と同じである。こうした在地土器に、口径17.6cm、器高5.5cm、底径は6.6cmの84の色調が白色の薄手の坏が伴う。この土器は、周防の大内氏館跡の編年によると15世紀後葉に位置づけられている²⁰。しかし、中世大友城下町跡では、この後、在地土器の色調が赤褐色化し、

註16 山本悦世「吉備南部地域における古代末～中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎研究 VIII』日本中世土器研究会 1992

註17 小森俊寛・村上康章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996

註18 乗岡実「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会 2000

註19 高島豊「XXII 大友館跡第1次調査」『大分市埋蔵文化財年報10 1998年度』大分市教育委員会 1999

5次B
16世紀
第1四半期

それに導手の白色系土器が伴う時期がある。このため、この時期を、15世紀中葉から後葉と考える。

85～97は府内町跡5次B調査区出土の資料である。85・87・91はSK245、86・93はSK134、90・94はSD230、95・97はSK234でいずれも土坑に廃棄された状態で出土した。また、88・89・92・96は大規模な区画溝であるSD251の下層からの出土である。図示した土器の口径は85・86が7.6cm・7.2cm、87・88が8.8cm・8.5cm、91・93・94が10.8cm、90が11.4cm、95が12.0cm、89が12.9cmで境界は不明であるが法量分化が明確である。こうした在地系土器は、前時代の導手の白色系土器の影響を受けて成立したと考えられ、内面に回転を利用した強い螺旋状の指ナデや工具による螺旋状の沈線が見られる。色調も赤褐色で、73～83までの資料とは異なる。またこの土器は、より古式のもの、製作時の粘土塊からの切り離しの際の痕跡か、底部の外端が直立し、口縁端部にかけて内湾し、口唇部断面は「コ」の字状になる。内面の強い螺旋状のナデは内底部までおよび、えぐれている。これが新しくなるにつれ、底部からの立ち上がり94・95のように丸みを帯び、口縁部は外反し、口唇部断面は丸みを帯びる。また、内底部の中央は横ナデで平坦に仕上げている。これらの土器には、15世紀代の青磁碗²¹や中世6期の備前焼播鉢が伴い、京都系土器を伴わないことから、15世紀末葉から16世紀初頭と考える。本報告では16世紀第1四半期とする。

16世紀
第2四半期

98～103は府内町跡5次調査区出土である。98・99・102は5次A調査区のSD7の上層で直接して出土した一括性の強い土器である。100・101は5次B調査のSK121、103はSK206出土の土器である。在地系土器は、99に見られるように、底部からの立ち上がり丸みを帯び、口縁部は明らかに外反し、口唇部断面は尖るように丸み帯びる。内面は螺旋状の工具による沈線文があり、内底部は平坦に仕上げている。この土器群には非ロクロ系土器である京都系土器が伴う。在地系土器が赤色系であるのに対し、京都系土器は白色系である。器形は、側面観が扁平な「逆台形」をし、口縁断面は紡錘形で端部は丸い。器壁は薄く、特に底部は薄い。この新しい土器作りの影響か、京都系土器の胎土でロクロ成形したものや、100のように外面下位に段が付くものなどが見られる。京都系土器の導入時期は、周防国大内氏との関連や、京都からの直接的な導入などが考えられているが、ここでは塩地潤一・小野貴史²²が論じた「式三藏」に代表される室町幕府からの儀礼の導入時期である天文6年(1537)とし、本報告では16世紀第2四半期とする。

16世紀
第3四半期

104～114は府内町跡5次B調査区出土の資料である。104～109はSD105、それに切られたSD106から出土した。110～113、114はSK222出土である。SD105からは多くの京都系土器が出土しており、その口径は約8.2cm・10.5cm前後、12～13cm、14.3cm前後、16cmの5法量に明確に分かれる。口縁部は外面を強い指ナデで仕上げ、凹線状に窪むため、急に外反する形態になる。この資料より新しい遺構から出土した110～113は若干大型化し、器高も高くなる。114は中世6期16世紀代の備前焼播鉢である。この資料は、前後の関係から、16世紀中葉と考える。本報告では16世紀第3四半期とする。

16世紀
第4四半期

115～123の資料の内、116・119は大友氏館跡1次調査の庭園の池Ⅲ期からの出土で、それ以外は府内町跡4次調査出土である。前時期に比べると、器壁が厚くなり口径に比べ器高が高くなる。また119のように坯形に近い形態の非ロクロ系土器がみられる。その出現時期は、遡る可能性もあるが、この時期から明確に伴う。これらと一緒に出土する備前焼播鉢は、斜めスリ目で1570年以後の16世紀後葉から末葉に編年されている近世1期のものである。また府内町4次調査区は府内古園の上市町の一角にあたり、報告書²³によると2度の火災にかかわる層と処理土坑があり、

註20 古賀信幸「大内氏館跡Ⅷ・大内氏関連町並遺跡Ⅰ」『大内氏遺跡発掘調査報告書Ⅺ』山口市埋蔵文化財調査報告第35集 山口市教育委員会 1991

註21 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』2、日本貿易陶磁研究会 1982

註22 塩地潤一「九州出土の京都系土器Ⅱ」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会 1999

1587年 ひとつは1587(天正15)年の島津氏侵攻、もうひとつを1596(慶長元)年の慶長大地震に起因すると考えている。こうしたことから、これらの時期を16世紀後半から末葉と考える。本報告では16世紀第4四半期とし、近世府内城下町に移転する17世紀のごく初期を含む。

3 整理作業の経過

整理 中世大友府内町跡第10次調査区の整理作業を、2002(平成14)年度は現場事務所仮整理を行い、2005(平成17)年度から本格的な整理作業を開始した。実質1ヵ年で整理をおこなった出土遺物は700箱あまり、出土遺物量は約数万点におよび、その中から約1500点を選択して実測をおこなった。

実測 整理作業のうち、水洗・注記・接合の基礎作業には石井蓉子、今別府洋、安部典子、田畑里美、姫野真知子、伊賀田香、平田美智子があたり、特に接合作業は入念に行った。

トレース 実測作業は安部明美、高井光子、土崎弘子、山口美紀、金丸涼子、田嶋智子、田中裕介が分担してあたり、一部は九州文化財研究所がおこなった。

浄世には、藤澤香織、榎藤聡子、土崎弘子、安部明美、金丸涼子、高井光子、山口美紀、長野とよみ、小野千恵美、上田はるみがあり、一部を九州文化財研究所がおこなった。

編集作業には田中裕介、後藤晃一、榎藤聡子、河原英明、藤澤香織、安部明美、高井光子、山口美紀が主にあたり、長野とよみ、小野千恵美、上田はるみの協力をえた。

銭貨の整理は、畦津安幸(嘱託:現佐伯市教委)があたり、一覽表等の作成には藤澤香織があつた。

現地調査 写真の撮影は田中裕介、後藤晃一があたり、陶磁器全般については吉田寛の教示をえた。

なお現場発掘調査には、以下の方々があつた。現地の航空写真は九州航空、実測は県調査員のほかに九州文化財リサーチがあたり、発掘作業は秋吉雅子、麻生持子、足立正子、阿部笑子、安部喜代、安東隆司、伊東早智子、伊東真由美、井上志津子、今村千代子、今村嘉子、上野信子、江藤恒亀、江藤美津江、大久保覚至、萩昭八、甲斐千年、金子るり、亀井美加、河野次雄、河辺フサ子、神田裕子、木本優子、釘宮邦孝、小石穂子、小出愛美子、児玉恵美代、後藤和子、後藤小夜、後藤タツ子、後藤美智代、坂本栄作、佐藤朱美、佐藤勝枝、佐藤恭子、佐藤忠士、佐藤俊信、柴田敏夫、生野恒子、菅かえで、関谷直美、大福逸夫、高倉常子、高橋抄子、田辺昭一、堤賢治、堤鈴子、堤光江、那賀文子、長尾恒子、中野聖子、藤塚千鶴、藤本聡、三浦賢一郎、三浦聡子、薬師寺由記子、山本準二郎、畑本ひとみ、和気晶子、渡辺悦子。以上の方々があつた。

人骨の調査には九州大学大学院生、舟橋京子、板倉有太、岡崎健治があつた。

第4節 第10次調査区について

第10次調査区は、大分県大分市大字大分字顕徳寺に属し、現在の住居表示では大分市六坊北町に当たる。調査区は東西に長く、西側をⅠ区、東側をⅡ区として調査を行った。Ⅱ区については高架工事との調整から南北にわけて、南を先に調査した。そのため事実上調査区を3回にわけて発掘したことになる。その位置は第1-6図のとおりで、字顕徳寺の南部にあたり、調査区の東端は中世大友府内城下町の第4南北街路に接する。また調査区のうちⅡ区北は「府内古図」のダイウス堂推定地にあたる土地の南東端と重なることがわかる²¹。ダイウス堂とは1553年から1587年まで存在したイエズス会府内教会にほかならない²²。同時に古図からは西に抜ける道路や南側には祐向寺

ダイウス堂
推定地

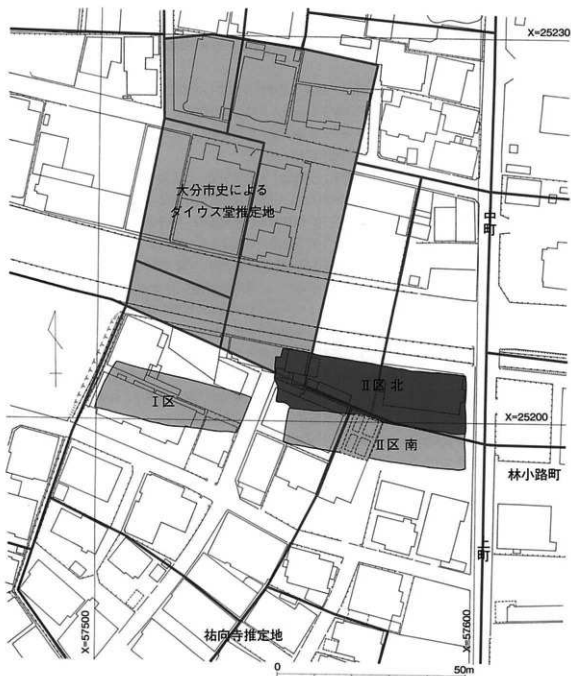
祐向寺

註23 河野史郎「大友府内4-中世大友府内町跡第4次発掘調査報告書-」大分市教育委員会2002

小野貴史「大友氏における「式三蔵」について」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会2001

が付近に存在することも想定される位置に当たった。

以上から、I区については城下町遺跡に西端の状況が、II区では東西道路の位置とその周辺の上町および中町の道路に面した状況、さらにその背後の府内教会および祐向寺の遺構の特定を課題として調査は行われた。



※網ラインは、1889年の字境界

第1-6図 10次調査区の位置 (1/1000)

註1 「大分市史」中、付図「地籍図に残る戦国時代の府内」1987、大分市

註2 五野井隆史「豊後府内の教会領域について」『東京大学資料編纂所研究紀要』14.2004.

第2章 中世大友府内町跡第10次I区調査区

第1節 調査の経緯

中世大友府内町跡第10次I区調査区は大分県大分市上野六坊北町に所在し、標高約3.5mの沖積低地上に立地する。本調査は、大分駅周辺総合整備事業に伴い大分県教育委員会が2000年に試掘調査を実施、翌2001年7月から12月までかけて本調査を実施した。

試掘調査は、本調査区西半部において南北3m×東西42mのトレンチを入れて実施された。調査の結果、トレンチ内西端で方形の土坑が1基、さらに数基の土坑、ピット等が検出された、特に西端で検出された方形土坑は骨片が出土していることから土坑墓と推測された（本報告書でST009）。

祐向寺

本調査区は、「府内古図」によれば、南側に「祐向寺」が存在していたとされる場所に位置する。そこで前述の土坑墓の存在、さらには試掘時のトレンチ内から五輪塔の部材が出土しているなどのこともあり、本調査において祐向寺の存在を立証し、寺域の確定がなされるのではないかと期待があった。ところが「府内古図」の描写は最近の発掘調査成果から、1570年以降の大友義統統治下における府内の町の様子であることが分かってきており、前述の土坑墓は15世紀代の可能性が高く時代が合わない。発掘調査の結果、本調査区は大きくこの土坑墓の時期である15世紀代の画期と、16世紀後半の画期が認められており、府内古図の描写の時期は後者の画期に該当する。本調査区中央部は若干高く東西に地形の落ち込みがみられ、16世紀後半にこの低地を置うように整地されたものと考えられる。整地層を切つてかなりのピットや土坑、さらには井戸等が掘られており、その景観は町屋そのものである。府内古図には祐向寺の北側に町屋が描かれており、本調査区はその町屋の姿が掘り出されたものと考えられる。

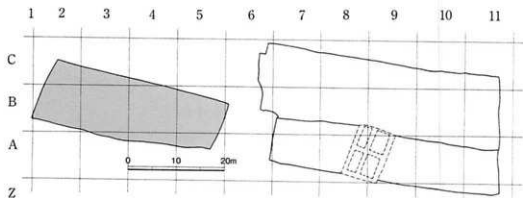
大友義統統治世

町屋

なお、もう一つの画期である15世紀代は16世紀後半のそれとは全く異なる景観が想定できる。前述の祐向寺の存続期間（開山が15世紀代以前に遡れば）によっては、15世紀代の姿は祐向寺の寺域を反映したものであるのかもしれない。いずれにしても、祐向寺に関しては文献的裏付けも乏しく、今後の祐向寺該当地域の発掘調査が進むことを待つしかない。

国土座標

なお、中世大友府内町跡府内町跡第10次調査区においては、事業対象地区を国土座標に乗せた10m方眼で区画しており、それぞれの区画を西から東へ1～11、北から南へC・B・A・Zのアルファベットを付し、アルファベットと数字の組み合わせで、各々の区画を呼称することになっている。本章で報告する第10次I区調査区については、東西1～6区、南北C・B・A区、の位置に相当する（第2-1図）。



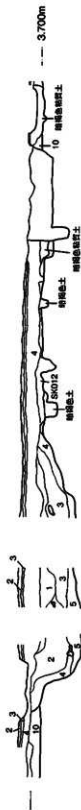
第2-1図 第10次I区調査区遺構分布図 (1/800)

第2-1表 第10次調査I区遺構一覧

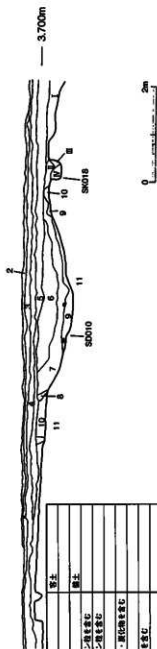
本報告での遺構番号	目録番号	遺構の位置	遺構の性格	遺構の時期	特記事項	掲載頁
S001	SD001	5A・5B I C	溝	16世紀後半	京都系土師器2期・琵琶湖系青瓦(C・E群)・龍泉系青磁・白磁・備前系陶器・瓦質土器	19
S004	SK004	4B I C	土坑	15世紀末葉～16世紀初頭	在地系土師質土器	27
S005	SK005	4B I C	土坑	16世紀後半		28
S006	SK006	3B・4B I C	土坑	16世紀後半	備前系陶器・瓦質土器・石臼	28
S007	SK007	3B I C	土坑	15世紀後半～16世紀前半		31
S008	SK008	2B I C	土坑	15世紀後半～16世紀後半		31
S009	ST009	2B I C	土坑墓	15世紀		45
S010	SD010	2B・2C I C	溝	15世紀末葉～16世紀初頭	在地系土師質土器・龍泉系青磁・瓦質土器・土埴	24
S012	SK012	5A I C	土坑	16世紀後半	京都系土師器2期・在地系土師質土器・龍泉系青磁・瓦質土器	32
S013	SK013	5B I C	土坑	15世紀後半～16世紀後半		33
S014	SE014	5B I C	井)	15世紀代	在地系土師質土器・龍泉系青磁・白磁・備前系陶器・土埴	38
S015	SK015	5A・5B I C	土坑	15世紀後半～16世紀前半	龍泉系青磁(人形手)・備前系陶器群(中供5期～6期段階)	33
S016	SK016	4A I C	土坑	16世紀後半	16世紀後半の溝)SE017を切っている	34
S017	SE017	4A・4B I C	井)	16世紀後半	京都系土師器2期・琵琶湖系青瓦・龍泉系青磁・備前系陶器・瓦質土器・銅鏡・鉄製物・瓦製物	40
S019	SK019	4B I C	土坑	15世紀末葉～16世紀初頭	在地系土師質土器	35
S022	SK022	5A・5B I C	土坑	15世紀前半	備前系陶器群(中供3～4期)	35
S023	SK023	3A I C	土坑	15世紀後半～16世紀前半		36
S026	SK026	5A・5B I C	土坑	15世紀前半	備前系陶器群(中供3～4期)	36
S027	SK027	4A I C	土坑	14世紀	備前系陶器	37
S028	SD028	2B I C	溝	15世紀末葉～16世紀初頭	在地系土師質土器	26
S030	SK030	4A・4B I C	土坑	15世紀後半～16世紀後半	瓦質土器・青銅製品	37



第2-2図 第10次I区調査区遺構分布図 (1/200)



S0001	1層	砂質粘板層土	図・地土を多量に含む
	2層	粘板層土	
	3層	砂質粘板層土	
	4層	粘板層土	
	5層	砂質粘板層土	
S0012		粘板層土	図・地土を多量に含む



中部本組	1層	砂質粘板層土	腐植土
	2層	粘板層土	
	3層	砂質粘板層土	
	4層	粘板層土	
	5層	砂質粘板層土	
	6層	粘板層土	
S0010	7層	砂質粘板層土	腐植土・腐化物を含む
	8層	粘板層土	
	9層	砂質粘板層土	
	10層	粘板層土	
	11層	砂質粘板層土	
S0018	1層	砂質粘板層土	腐植土
	2層	粘板層土	
	3層	砂質粘板層土	
	4層	粘板層土	

第2-3図 第10次I区調査区 南壁土断面 (1/80)

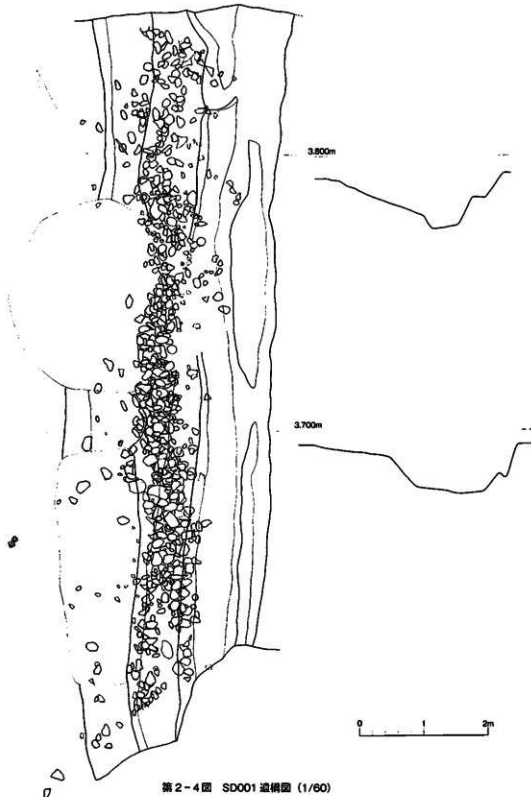
第2節 遺構と遺物

1. 溝

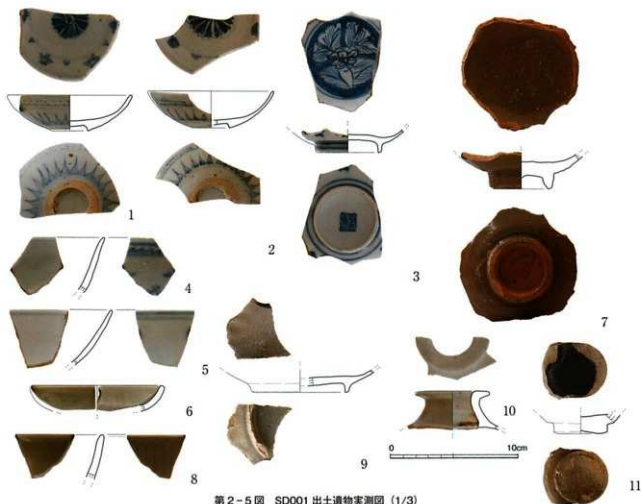
SD001 (第2-4図)

調査区の東御厨を南北に延びる溝で、検出された長さは約17.3m、幅約4.9m、深さは最も深いところで約1.3m、方位はN-30°-Eで東に振っている。溝内からは、遺物と共に大量の石も出土しており、周囲の町屋等に使用された石が、溝の廃絶に伴い放り込まれたものであろう。

また、SD001は中央部付近で井戸SE014と切り合っている。井戸SE014については、当初のプラ



第2-4図 SD001 遺構図 (1/60)



第2-5図 SD001 出土遺物実測図 (1/3)

ン等を含めて明確ではなく、溝の掘り下げ後にその存在がはっきりと確認できたことから、溝SD001に切られていたものと考えられる。井戸SE014から出土する遺物は、後に詳述するが、土師質土器はロクロ成形による在地系ものが中心となり、備前系陶器の播鉢等も乗岡福年の中世3期～5期のものが主体となって検出されていることから、15世紀段階ごろの位置づけができそうであり、したがって切り合い関係からしてSD001は15世紀以降の所産である。

次に、溝内から出土する遺物から見てみると、SD001からは埴地福年の京都系土師器2期のものが出土し、さらに景德鎮窯青花碗のE群が出土していることなどから、16世紀後葉の位置づけが可能であり、前述の切り合い関係とも矛盾しない。特に時期を隔てた遺物の出土も見られないことから、溝の掘削も埋没も16世紀後半に位置づけられよう。

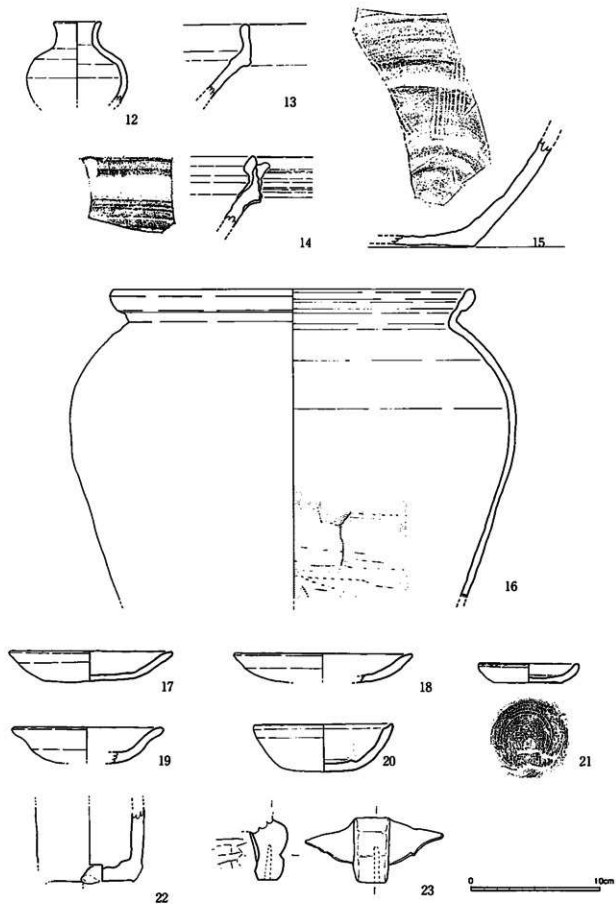
16世紀後半

出土遺物(第2-5～8図)

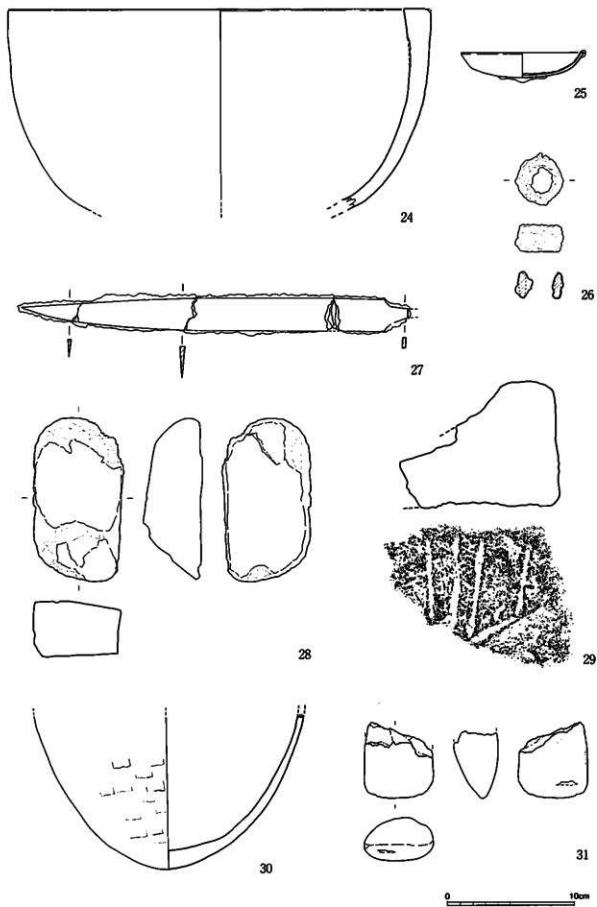
1・2は、中国景德鎮窯系青花皿で、両者ともいわゆる碁笥底を呈し、胴部外面には芭蕉葉文、内面見込には捺花を施す。小野正敏福年のC群にあたる。3～5は景德鎮系の碗で、3は見込部分が盛り上がるいわゆる饅頭心を呈し、小野正敏福年のE群にあたる。6～8は龍泉窯系の青磁で、6は皿、7・8は碗である。7は外面に鎗蓮弁が認められ、蓮弁の形状からして、14世紀代のものと思われ、混入したものと考えられる。9・10は中国産の白磁で、9は皿の高台部、10は瓶の口縁部である。11は瀬戸美濃系陶器の天目碗の高台部である。12～16は、備前系陶器で、12は壺、13～15は播鉢である。ナナメスリメ等は確認できないが、13・14の口縁部形態からすると、乗岡福年の中世6期～近世1期の段階に比定できそうである。16は大甕でやはり前述の播鉢と同様の段階に位置づけられよう。17～20は京都系土師器である。17～19は皿、20は坏である。17は器壁が薄く、ナデも明瞭でない

小野福年E群

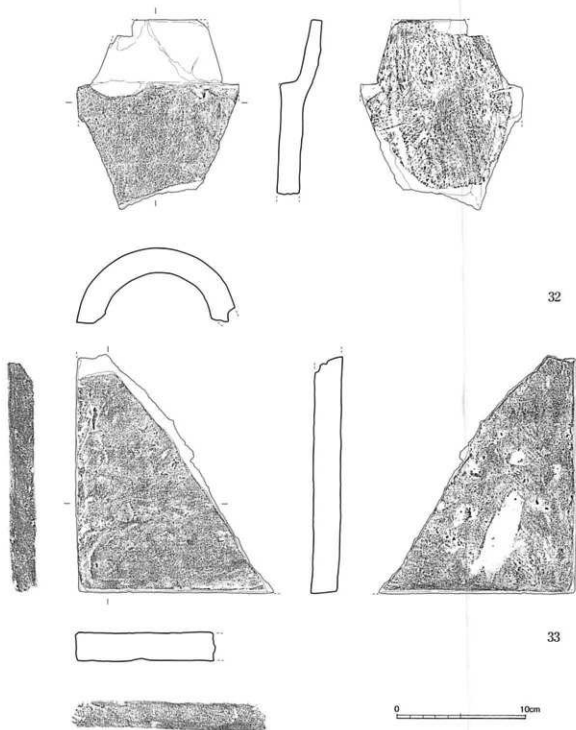
中世6期～
近世1期



第2-6図 SD001 出土遺物実測図 (1/3)



第2-7圖 SD001 出土遺物実測図 (1/3)



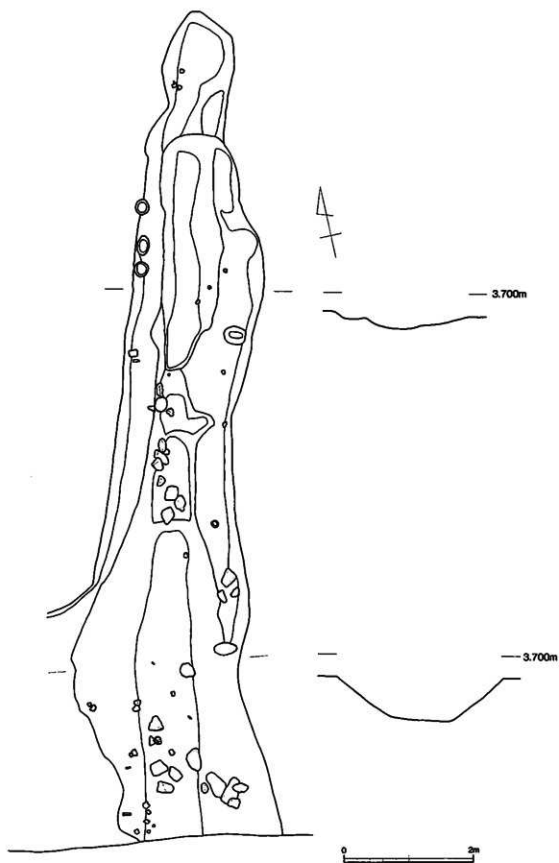
第2-8図 SD001出土遺物実測図 (1/3)

京都系土師器
2期

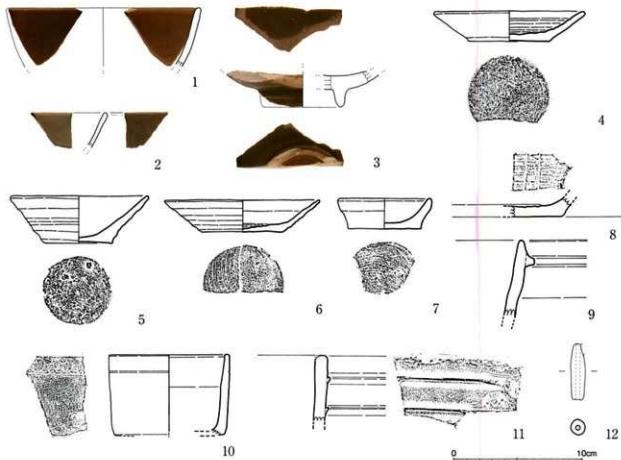
ことから、古い様相を呈しているが、18は器壁が厚く、口縁部下のナデも明瞭であることから、2期以降の位置づけが可能であり、坏の共伴とも整合する。21は、底部に糸切り痕を残す在地系土師質土器の小皿である。口唇部にススが附着しており、灯明皿と思われる。他の遺物の時期関係からみて混入しているものと考えられる。22～24は瓦質土器で、22は香炉、23は火鉢の脚部、24は鉢である。25～27は鉄製品で、25は鉄製の碗、26は環状製品であるが、用途は不明である。27は刀子である。28・29は石製品で、28は流紋岩製の砥石、29は凝灰岩製の石臼である。30・31は混入遺物で、30は古墳時代の土師器の甕、31は磨製石斧である。32は軒丸瓦、33は埴である。

鉄製の碗

SD010



第2-9圖 SD010遺構圖 (1/60)



第2-10図 SD010出土遺物実測図(1/3)

SD010 (第2-9図)

調査区西側隅を南北方向に延びる溝である。最大幅 2.6 m、深さは検出面から計測して約 0.7 m ある。確認できている長さは 17.4 m であるが、溝の北側部分は調査区外には延びず、終端部となっていると考えられる。溝内からは、SD001 ほどではないが、遺物と共にかんりの石が出土しており、SD001 同様に周囲の町屋に使用されていたものが、溝の廃絶に伴って放り込まれたものであろう。溝の方向性から見ると、SD001 とはほぼ同方位を示しているが、出土する遺物は 14～15 世紀のものが主体となり、SD001 とはかなり時期差 (SD001 は 16 世紀後半が主体) が認められるため、両溝は併存していない。しかしこの両溝に加えてその他本調査区内で検出される溝は、すべて同方向の方位性を持っている点に注目すると、ある程度の期間 (少なくとも 1～2 世紀の間) は同じような空間認識が存在していた可能性は十分にあり得るであろう。

出土遺物 (第2-10図)

1～3は龍泉窯系青磁で、1・2は碗の口縁部である。2は胴部に蓮弁が確認でき、まだ蓮弁の形状が幅広であることから、14世紀代に位置づけられよう。3は碗もしくは皿の高台部である。4～7は在地球系土質土器である。4～6は皿で口縁部が直線的に開き、内外面にロクロ目を顕著に残す。7は小皿で、いずれも坂本編年で15世紀末葉～16世紀初頭頃に位置づけられる。8は古瀬戸の鉞皿である。

9～11は、在地球系の瓦質土器で、9は鉢の口縁部で、突帯が巡らされる。10は香炉である。口縁部下に刻印による七宝文を巡らす。11は火鉢の口縁部と考えられ、二条の突帯間に刻印による文様が施される。12は石錘である。以上のように遺物は14世紀～15世紀のものが見られるが、遺構の時期は、15世紀末葉～16世紀初頭頃とみなすのが妥当であろう。

町屋に使用された石

同じような空間認識

龍泉窯系青磁

在地球系土質土器

七宝文

15世紀末葉～16世紀初頭

SD028 (第2-11図)

調査区西側隅B-2区に位置する。SD010に切られているため、残存長1.2m、残存幅0.75m、深さは確認できる範囲で、0.13mほどである。残存部分が少ないためにどのような形状であったか詳細はつかめないが、残存部がこれだけであることを考えると、SD010よりも規模は小さく、方位もほとんど同方向に伸びていたのであろう。さらにSD010は調査区北側で終わっていたが、その先にSD028も検出されていない。したがってSD028がSD010と同方位に伸びる溝だったとしても、やはりSD010以上に北側には伸びない溝であったと考えられる。

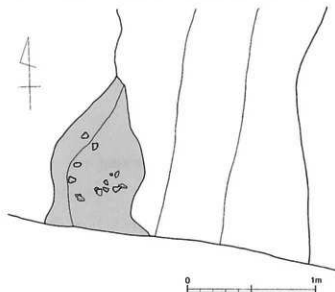
15世紀中葉

SD028から出土する遺物は、希少であるため時期の認定は困難であるが、15世紀中葉段階の在地系土師質土器が出土しており、その頃の位置づけが可能であろう。SD028を切っているSD010もほぼ同じような時期の遺物が見られることから、両者にはさほど時期差が無かったか、もしくは同一の溝の掘り返しであった可能性、さらには同一溝の異なる堆積の一部という認識も考慮に入れておく必要があろう。

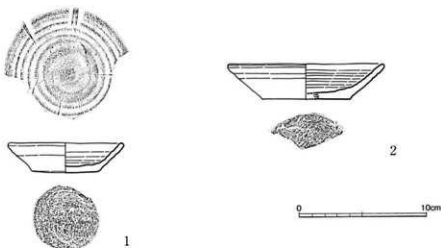
出土遺物(第2-12図)

内面にロクロ目
目

1・2ともに在地系の土師質土器の皿である。口縁部が外に向かって直線的に広がり、内面に顕著なロクロ目を残す。坂本編年で15世紀末葉～16世紀初頭頃に位置づけられるものと考えられる。



第2-11図 SD028 遺構図 (1/30)



第2-12図 SD028 出土遺物実測図 (1/3)

2. 土坑

SK004 (第2-13図)

2つの土坑

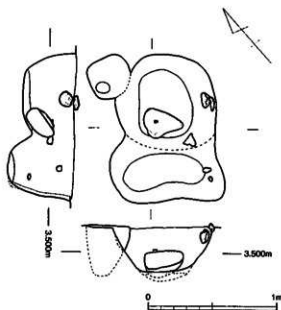
調査区中央北側のB-4区に位置する土坑である。長径が南北方向1.17m、短径が東西方向で0.74m、深さは最も深いところで0.53mほどである。図2-13から分かるように、南北で異なる形状の底面が確認され、深さも違うこと等を勘案すると、2つの異なった土坑が切り合っていたものと考えられる。検出時には切り合いのラインが明確に把握できなかったため、両者併せてSK004として扱い、遺物も共に取り上げた。しかしながら遺構図から分かるように、土坑中央部で出土した鏝の流れ込み具合から判断すると、北側の土坑が南側の土坑を切って存在していた可能性が高いと思われる。したがって図2-13では、その推定ラインを点線で図示している。

土坑から出土する遺物は希少であるが、15世紀中頃段階の在地系土師質土器が出土していることから、該期の所産と考えられる。南北2基の土坑は切り合っているが、さほど時期差はないものと考えられる。

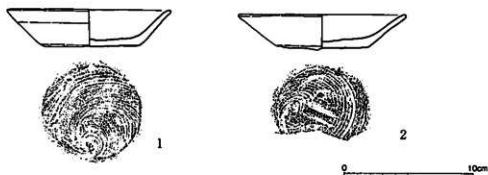
出土遺物(第2-14図)

在地系土師質土器

1・2ともに在地系の土師質土器の皿である。底部から口縁部に向かって直線的に外方向に広がる形態で、坂本編年で15世紀末葉～16世紀初頭に位置づけられるものと考えられる。



第2-13図 SK004遺構図(1/30)



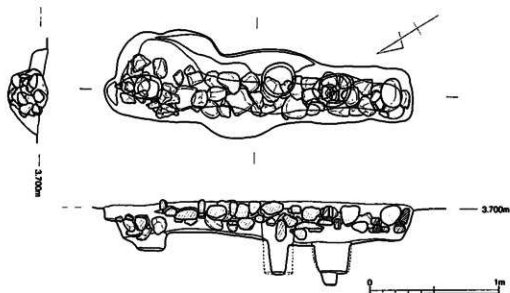
第2-14図 SK004出土遺物実測図(1/3)

SK005 (第2-15図)

大量の礫

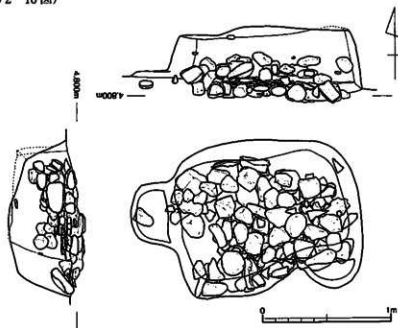
16世紀後半

調査区中央B-4区に位置する土坑である。長径2.46 m、短径0.69 mの細長い長方形プランを呈す。深さはもっとも深いところで0.66 m、浅いところで0.24 mであるが、深いところは切り合っているピットの深さである可能性が高く、本遺構の深さは、実際は0.3 m前後と思われる。本土坑の主軸はSD001とはほぼ同方向を示しており、細長いそのプランを見ると、何らかの区画溝の一部が残存して検出されているのかもしれない。遺構内からは大量の礫が出土しているが、この土坑の時期を認定できる遺物の出土は見られない。ただ、ほぼ同方位を示しているSD010との関連性を重視すれば、SD001が16世紀後半に位置づけられることから、その時期の所産とすることが可能であろう。



第2-15図 SK005 遺構図 (1/30)

SK006 (第2-16図)



第2-16図 SK006 遺構図 (1/30)

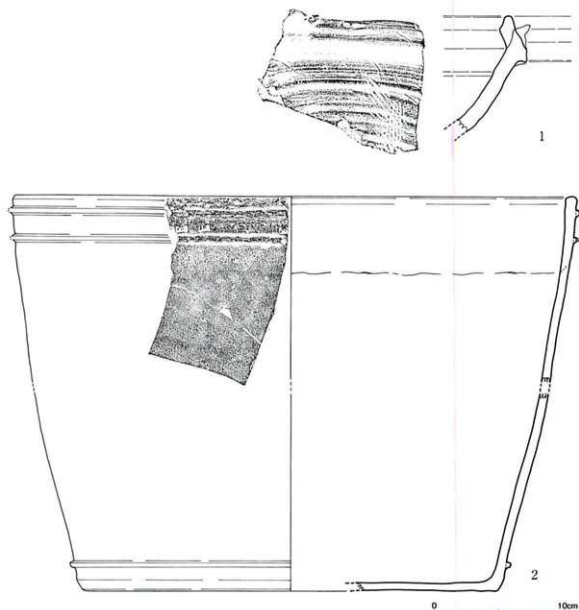
調査区のはほぼ中央付近、B-3・4区に位置する土坑である。長径1.83m、短径1.22mの隅丸長方形の平面プランを有す。深さは検出面から計測して0.54mほどである。遺構内からは遺物と共に、大量の礫が検出された。礫は土坑底面に接するようにはなく、底面から若干上にまとまって検出されていることから、土坑に敷き詰められていたのではなく、土坑を埋める際に廃棄されたものと解するのが妥当と考えられる。礫が土坑の形成とは無関係で、単に大量に廃棄されているという観点に立てば、この土坑は廃棄土坑として位置づけるべきであろう。平面プランが隅丸方形である点や礫の大量の混入という点に着目すれば、他の何らかの施設である可能性も考慮に入れておく必要があろうが、現段階その他の施設の様相を示す遺物の出土状況等も認められず、廃棄土坑として位置づけておきたい。なお、廃棄された大量の礫は、調査区内を南北に延びる溝SD001内から出土する礫と同様に、町屋で屋根等に使用されたものであることが考えられる。後述するように、本土坑内から出土する遺物に、近世1期の備前系陶器の摺鉢が出土していることから土坑の時期はSD001と併存した可能性のある16世紀後葉に位置づけられ、そうした場合16世紀後葉期の町屋等の廃棄土坑としての位置づけが可能であろう。

大量の礫

廃棄土坑

町屋

16世紀後葉

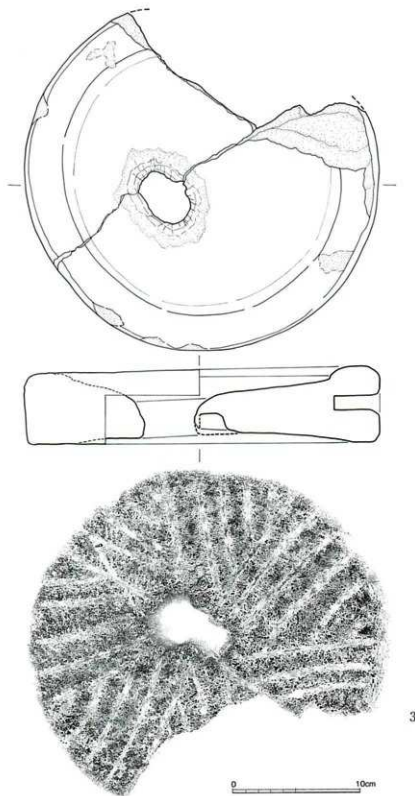


第2-17図 SK006 出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第2-17・18図)

近世1期

1は備前系陶器の播鉢で、スリメの状況は不確定だが、口縁部の形態等からみて、近世1期、ナメスリメを有する段階のものと考えられる。2は瓦質土器の火鉢と考えられ、口縁部下に2条の突帯を巡らし突帯間に文様を施す。3は安山岩製の石臼で、上臼である。

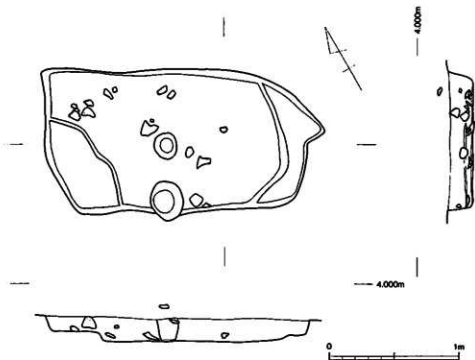


第2-18図 SK006 出土遺物実測図 (1/4)

SK007 (第2-19図)

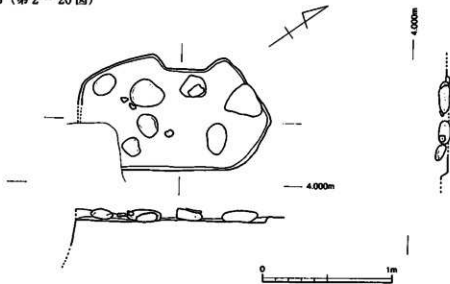
3-B区に位置する土坑で、長径2.07m、短径1.11mの東西方向に長い長方形プランを呈す。深さは浅く0.18mほどしかない。遺物の出土状況は希薄で、遺物から土坑の時期を認定するのは不可能である。しかしこの土坑の方位に着眼してみると(図2-2参照)、東西方向の主軸は、 $W-30^{\circ}-N$ の方位を示し、北側に 30° 振っていることがわかる。実はこの方位は本調査区を南北方向に走る溝(SD001・010・028)と直交する方位であり、よってこれらの溝で規格されるいずれかのプランに伴うものであることが考えられる。現段階、各溝の時期幅は15世紀後葉~16世紀後葉の中で捉えられており、したがって土坑の時期もその間で考えておくのが妥当であろう。

溝に直交する
方位



第2-19図 SK007 追検図 (1/30)

SK008 (第2-20図)

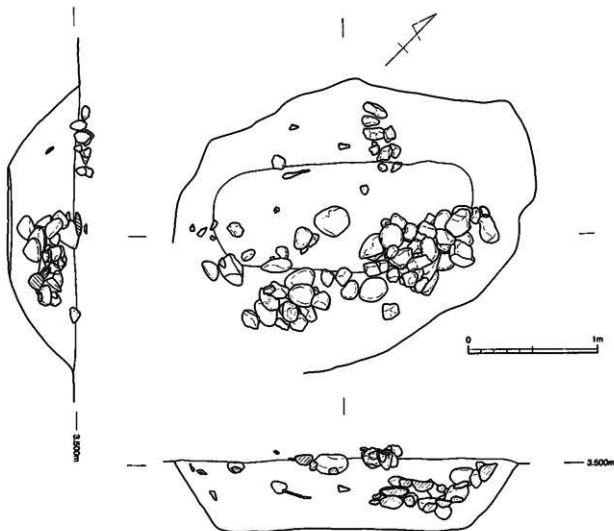


第2-20図 SK008 追検図 (1/30)

3-B区に位置する土坑で、長径1.53m、短径0.81mの南北方向に長い長方形プランを呈すが、南側の一部分は攪乱によって削られている。全体的に深さは浅く0.05mほどしかない。土坑内からは濬が複数出土しており、廃棄土坑の可能性もあるが詳細は不明である。遺物の出土状況も希薄で、遺物から土坑の時期を認定するのは不可能である。しかしSK007同様にこの土坑の方位に着眼してみると(第2-2図参照)、南北方向の主軸は、N-30°-Eの方位を示し、東側に30°振っている。これは濬(SD001・010・028)と平行する方位を示す。よって本遺構もこれらの濬で規格されるいずれかのプランに伴うものであると考えられ、15世紀~16世紀後半頃の所産でと考えるのが妥当であろう。

SK012 (第2-21図)

5-A区に位置する土坑で、長径2.75m、短径2.24mの楕円形プランを呈す。深さはもっとも深いところで0.57mほどある。土坑内からは遺物と共に大量の濬さらには炭や焼土も出土しており、廃棄土坑と考えられる。出土する遺物の中には京都系土師器2期のものが見られ、遺構自体は16世紀後半代のもと考えられる。そうした場合、ほぼ同時期の所産と考えられる濬SD001がすぐ東を流れており、併存もしくは同時期に廃絶された可能性が高く、強い関連性が認められる。また本土坑の底面の形状をみると濬SD001とほぼ同方位を示す隅丸長方形を示しており、両者に共通した規格性が感じられる。したがって、本土坑はSD001に画された町屋等の裏手に掘られた廃棄



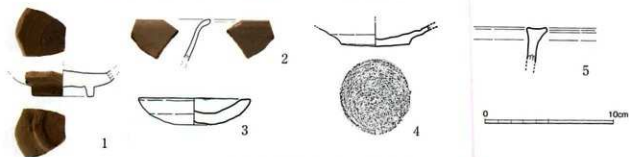
第2-21図 SK012遺構図(1/30)

土坑であると考えられ、中世大友府内町跡の町屋でよく見られるのもの一つである。

出土遺物 (第2-22図)

龍泉窯系青磁
京都系土師器
2期

1・2は龍泉窯系青磁で、1は碗の底部、2は皿の口縁部である。破片が小片のため、文様構成等は把握できない。3は京都系土師器の皿で、器壁が比較的厚く2期以降のものと思われる。4は在地系土師質土器の皿、5は瓦質土器の鉢の口縁部である。

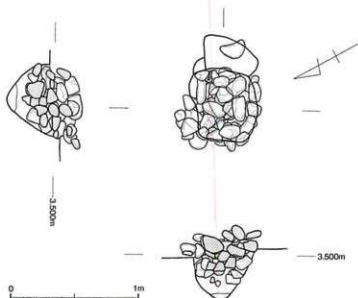


第2-22図 SK012 出土遺物実測図 (1/3)

SK013 (第2-23図)

大量の礫

5-B区に位置する土坑で、長径0.83m、短径0.48mの楕円形プランを呈す。深さはもっとも深いところで0.38mほどである。土坑内には大量の礫が詰まっている。遺物の出土がないため、この土坑の時期や性格については不明であるが、出土する礫の最上部のレベルを見ると実際の場形はまだ上だったと考えられ、そのレベルからみると15世紀後葉～16世紀後葉のものであろう。



第2-23図 SK013 遺構図 (1/30)

15世紀後葉～
16世紀後葉

SK015 (第2-25図)

5-A区と5-B区にまたがって位置し、長径3.42m、短径1.41mの隅丸長方形プランを呈す土坑であるが、東側部分はSD001によって掘削されている。深さはもっとも深いところで0.35mほどで、さほど深くない。土坑内からは遺物と共に多くの礫も出土しており、廃棄土坑と考えられる。

土坑の時期については、中世5期～6期の備前系陶器插鉢が出

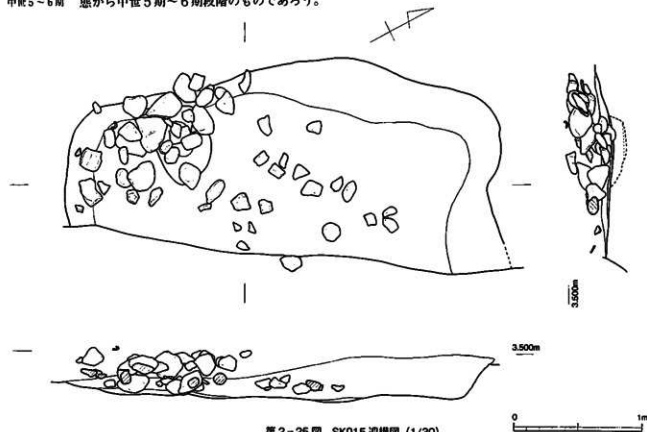


第2-24図 SK015 出土遺物実測図 (1/3)

土していることから、15世紀後半から16世紀前葉段階に比定され、SD001との切り合い関係とも矛盾しない。

出土遺物 (第2-24図)

人形手 1・2は龍泉窯系青磁で、1は碗である。1の見込みには陰刻による人物像が描かれ、いわゆる「人形手」である。2は瓶の把手部分と思われる。3は備前系陶器播鉢の口縁部であるが、口縁部の形態から中世5期～6期段階のものであろう。



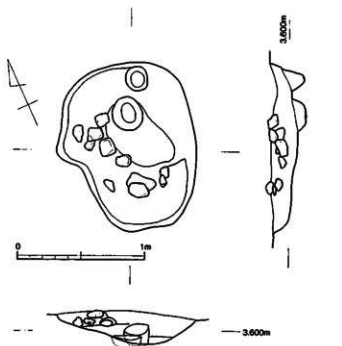
第2-25図 SK015遺構図 (1/30)

SK016 (第2-26図)

4-A区に位置し、長径1.34m、短径1.11mの楕円形プランを呈す土坑である。深さはもっとも深いところで0.26mほどで、さほど深くない。土坑内からは礫が出土している。時期を認定できるような遺物の出土は見られず、土坑の時期判定は困難であるが、16世紀後葉の井戸であるSE017を切って造られている点や、他の遺構の密集している中に立地している点などを加味すると16世紀後葉の位置づけが可能かと思われる。また礫の混入状況から恐らくは廃棄土坑的性格を有する土坑と思われるが、詳細は不明である。

SE017を切る

廃棄土坑



第2-26図 SK016遺構図 (1/30)

SK019 (第2-27図)

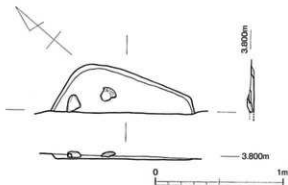
4-B区に位置し、長径1.14m、短径0.33mで隅丸長方形を呈すものと思われる。深さはもっとも深いところでも、0.03mと浅い。出土する土師質土器から15世紀末葉～16世紀初頭の所産かと思われる。

出土遺物 (第2-28図)

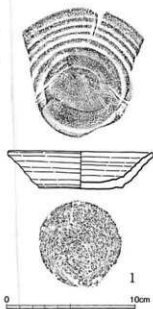
1は在地系土師質土器の皿で、内外面にロクロ目を顕著に残す。

15世紀末葉～
16世紀初頭

ロクロ目



第2-27図 SK019 遺構図 (1/30)



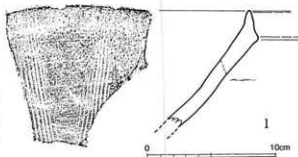
第2-28図 SK019 出土遺物実測図 (1/3)

SK022 (第2-30図)

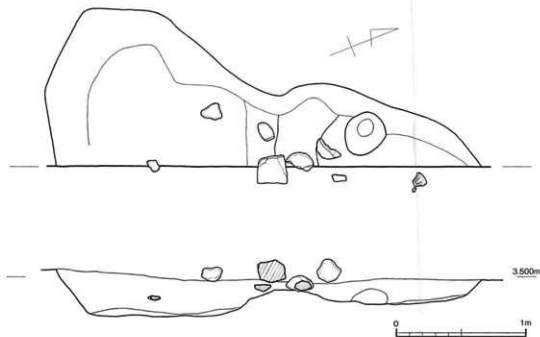
5-A・B区に位置し、長径3.35m、短径2.06mで東側部分は調査区外にさらに広がるものと思われる。深さは0.33mほどである。遺物と共に礫が若干出土しており廃棄行為に伴う土坑と思われる。時期を認定できる遺物は少ないが、備前系陶器埴鉢から15世紀前半の所産と思われる。

廃棄行為

15世紀前半



第2-29図 SK022 出土遺物実測図 (1/3)



第2-30図 SK022 遺構図 (1/30)

出土遺物 (第2-29図)

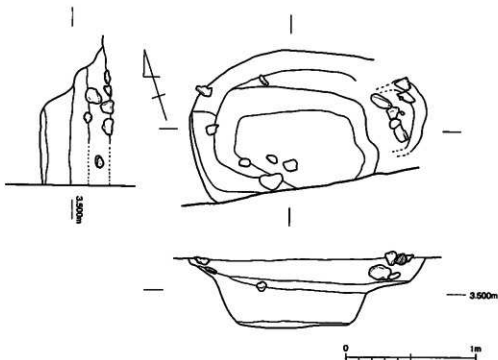
中世4期

1は備前系陶器の擂鉢で、乗岡幅年の中世4期に位置づけられると考えられ、他の良好な資料が見られないため、本資料をもって遺構の時期を15世紀代と位置づけておく。

SK023 (第2-31図)

廃棄土坑

3-A区に位置し、長径1.84m、短径1.08mで南側部分は調査区外にさらに広がるものと思われる。深さは0.56mほどである。遺物と共に礫が若干出土しており廃棄土坑と思われる。



第2-31図 SK023遺構図 (1/30)

SK026 (第2-33図)

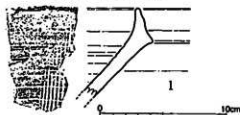
15世紀

5-A・B区に位置し、長径1.11m、短径1.10mで東側部分は調査区外にさらに広がるものと思われる。深さは0.38mほどである。16世紀後半に比定されるSK012に切られており、それ以前の所産である。出土する遺物の中に時期認定ができるものが少ないが、1点15世紀段階の備前系陶器擂鉢が出土しており、土坑の時期もとりあえずその時期にあてておきたい。

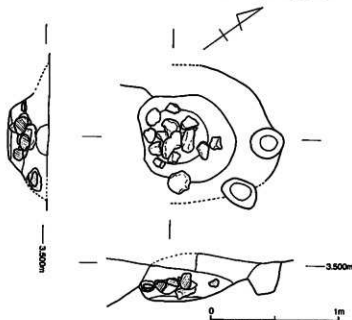
出土遺物 (第2-32図)

中世4期

1は備前系陶器の擂鉢で、口縁部の形態から乗岡幅年の中世4期に位置づけられると考えられる。



第2-32図 SK026出土遺物実測図 (1/3)



第2-33図 SK026遺構図 (1/30)

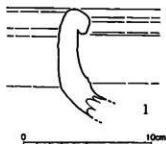
SK027 (第2-35図)

4-A区に位置し、長径0.9m、短径0.77mの楕円形プランを呈す。深さは0.24mほどである。土坑内には遺物と共に大量の礫が入っている。時期を認定しうる遺物が希少である。

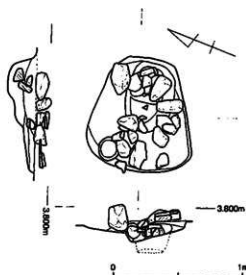
出土遺物 (第2-34図)

1は備前系陶器の大甕の口縁部で、14世紀代と考えられる。

大量の礫

備前系陶器
大甕

第2-34図 SK027 出土遺物実測図 (1/3)



第2-35図 SK027 遺構図 (1/30)

SK030 (第2-36図)

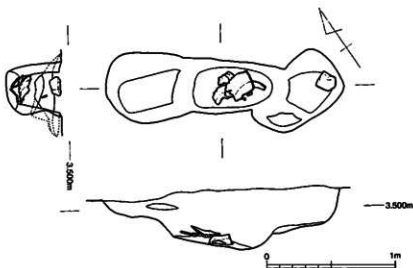
4-A・B区に位置し、長径1.88m、短径0.42mの規模であるが、実際は3つの小円形土坑が切り合っているものと思われる。深さは一番深いところで0.48mほどである。遺構の時期は遺物から判定できないが、方位的にみて15～16世紀後葉代の区画内に収まるものであろう。

出土遺物 (第2-37図)

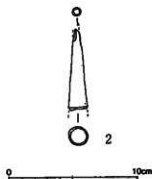
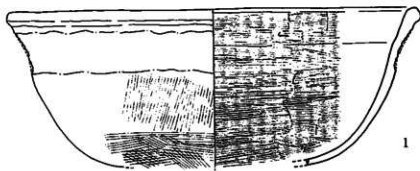
1は瓦質土器の土鍋、2は円錐形を呈する青銅製品で、用途は不明である。

15～16世紀
後葉

瓦質土器土鍋



第2-36図 SK030 遺構図 (1/30)



第2-37図 SK030 出土遺物実測図 (1は1/3. 2は1/2)

3. 井戸

SE014 (第2-38図)

5-B区に位置する井戸である。当初この井戸の存在は明確に把握できていなかった。第2-38図の位置関係からもわかるように、井戸の大半は溝SD001に切られており、わずかに残った円周部分の一角が確認できているのみであった。したがって検出時は土坑の一部か、もしくはSD001の掘形の一部であろうという認識の元掘り下げを行った。切り合い関係からまずSD001を掘り下げていったが、SD001の底面に達したにもかかわらず、この部分はまだ地山が確認できず、その時点で初めてこの遺構は土坑でも溝の一部でもなく、井戸であろうという認識に至った。最終的には標高1.94mまで掘り下がったところで、水が大量に湧き出したため、それ以上の掘り下げは不可能となった。そのため、遺構実測図では底面の表現がなされていない。確認されている範囲で推定する限り、規模は直径約2.3m前後のものであったろうと思われる。

なお井筒に使用された部材等は出土しておらず、桶枠によるものか、また方形枠を伴う曲物によるものかといった構造については不明である。したがって井戸の形態から時期の認定は不可能であるが、遺構内からは比較的時的にまとまった資料が出土しており、それらの出土遺物の示す時期から、15世紀段階のものと考えられる。本調査区では該期の遺構として溝SD010等があるが、その区画に伴う遺構である可能性もある。

出土遺物 (第2-39図)

龍泉窯系青磁

1～3は龍泉窯系青磁で、1は碗の底部破片で、見込は蛇の目軸剥ぎが施され、外面高台内部は輪状に軸が削り取られている。2は皿の口縁部で、菊花状を呈す。3は碗の口縁部で、胴部外面には蓮弁文が見られる。蓮弁文は細線化し、幅も狭くなっているが、刺頭と細線が単位を意識して構成されている。したがって上田編年によれば15世紀後半代に位置づけられる一群と考えられ、他の1・2の碗と皿も同時期に位置づけられよう。4・5は中国産の白磁で、4は皿、5は碗の底部付近の胴部片である。この内4の皿はまだ口縁部が外反せず、胴部から内湾気味に立ち上がっている。前述の青磁と共存するものであろう。

中国産白磁

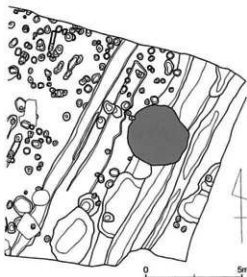
在地系土師質土器

6～9はロクロ成形による在地系の土師質土器である。6・8・9は坏もしくは皿で、7は小皿である。特に6は胴部にロクロ目を残し、底部から口縁部に向かって直線的に外方向に開く。坂本編年で15世紀末葉～16世紀初頭に比定される資料であろう。

備前系銅鉢

10～15は備前系陶器の銅鉢である。10～12は口縁部が上方に拡張が始まり、口縁部外面下角の垂下が顕著になっている形態から、乗岡編年の中世4期に比定されると考えられる。13・14については、口縁部が形成される段階で、特に13は口縁部端部のナデが強くなり先細りしており、近世1期の特徴を示している。この13・14の2点の資料については、他の遺物の大半が15世紀代に位置づけられることを考慮に入れると、隣接して切り合っている16世紀後半代の溝SD001からの流れ込みと捉えるのが妥当であろう。また、15の資料については、スリメはナナメスリメであるが、口縁部がまだ発達しておらず、乗岡編年の中世3期に比定されるものと考えられる。

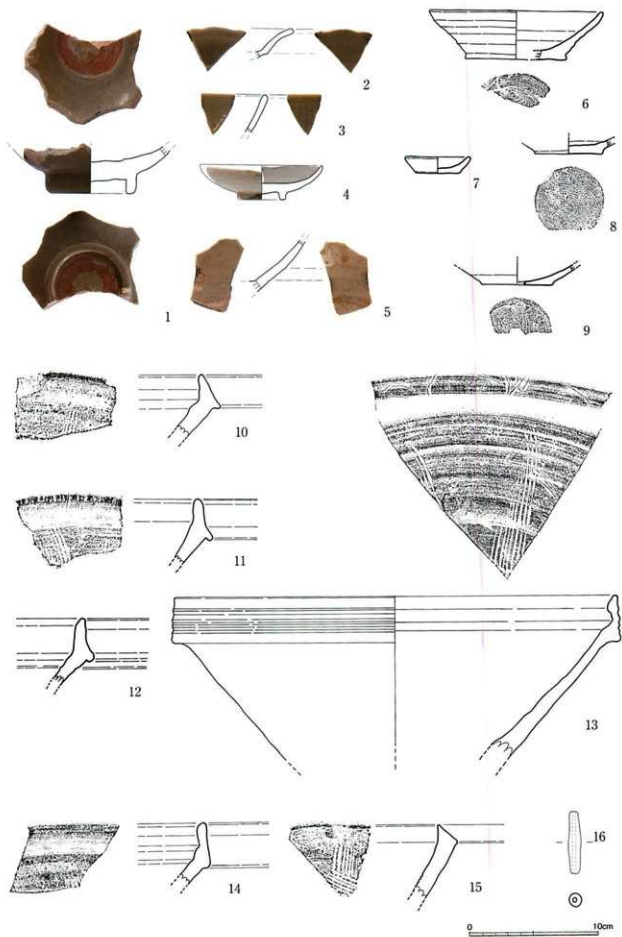
16は土鉢である。以上、SE014から出土する遺物は、その大半を15世紀代のものが占めており遺構の時期もその時期に当てて大過なからう。



第2-38図 SE014遺構図 (1/200)

SD001に切られる

15世紀段階

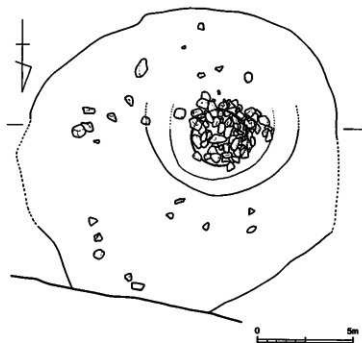


第2-39图 SE014出土遺物実測図(1/3)

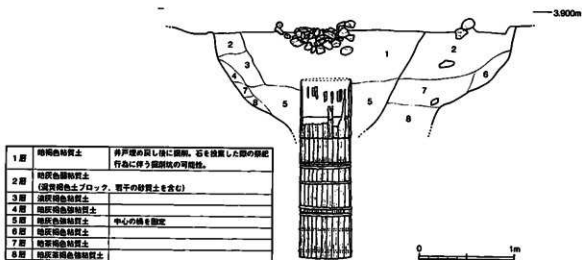
SE017 (第2-38図)

4-A・4-B区にまたがって位置する井戸である。井戸の掘形¹⁾は直径約3.2mのほぼ円形を呈する。深さは約2.4mを計測したが、途中からかなりの水が湧き出し、検出中の井筒も崩壊するなどの状況となったため、それ以上の掘削は不可能となった。したがって実際の井戸の掘形の深さはまだあると考えられる。ただ、湧水点が現在と当時余り変わっていないならば、深くてもさほど下がらない可能性もある。井筒を構成するのは円形桶間で、底の無い桶を3段重ねた状況が確認された。桶は短冊形の縛板(くわいたなげ)を縦で巻いて固定している。土層を確認すると(第2-41図)井戸の

円形桶間
掘



第2-40図 SE017 遺構図 (1/40)



第2-41図 SE017 土層断面図 (1/40)

註1 井戸の構造名称は草戸千軒町遺跡発掘調査報告書に準拠する。(広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V-中世瀬戸内の集落遺跡-』1996年)

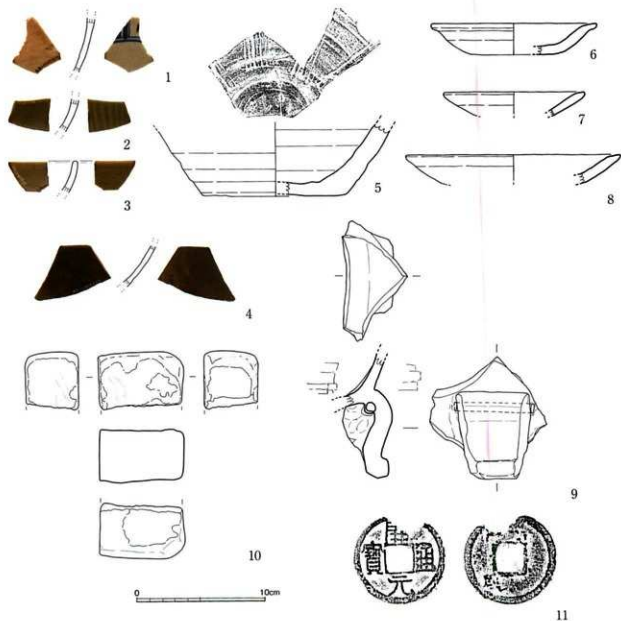
掘形の中央部、丁度桶側あたりに新たな掘りこみのラインが確認できる。その新たな掘りこみラインのあたりから上部には、桶側が消失しており、これは桶側が腐食して消失したと考えるよりも、抜き取られたと考えるのが妥当であろう。したがって桶側の付近にみられる新たな掘り込みラインは、井戸廃棄時に桶を抜き取るために掘られた痕跡であると解される。そして抜き取られた部分は、後に地盤沈下の恐れがあったのであろう、かなりの礫が集中して埋められていた。また、このように抜き取りによる掘り返しが行われた結果、井戸の上部構造である井桁部分の痕跡は全く失われてしまっている。中世大友府内町跡で検出される井戸では、これまで井桁の確認がなされておらず、抜き取り行為は比較的通常のことであった可能性がある。

桶側の中及び井戸掘形の中から出土する遺物は、16世紀後半のものが主体を占め、井戸の使用時期及び廃絶期は共に16世紀後葉であろう。中世大友府内町跡で確認される16世紀後半代の井戸は、その大半が桶側によるものであるが、中には石組みのもの、桶側に石組みを組み合わせるもの等がある。本遺構は水が湧き出して、桶側が崩壊してしまったこともあり、最下層の井筒の状況は不明であるが、おそらく最下部から上部まですべて桶を積み上げた構造であったと思われる、こうし

抜き取られた

地盤沈下

16世紀後葉



第2-42図 SE017 出土遺物実測図 (1/3) ※ 11のみ 1/1

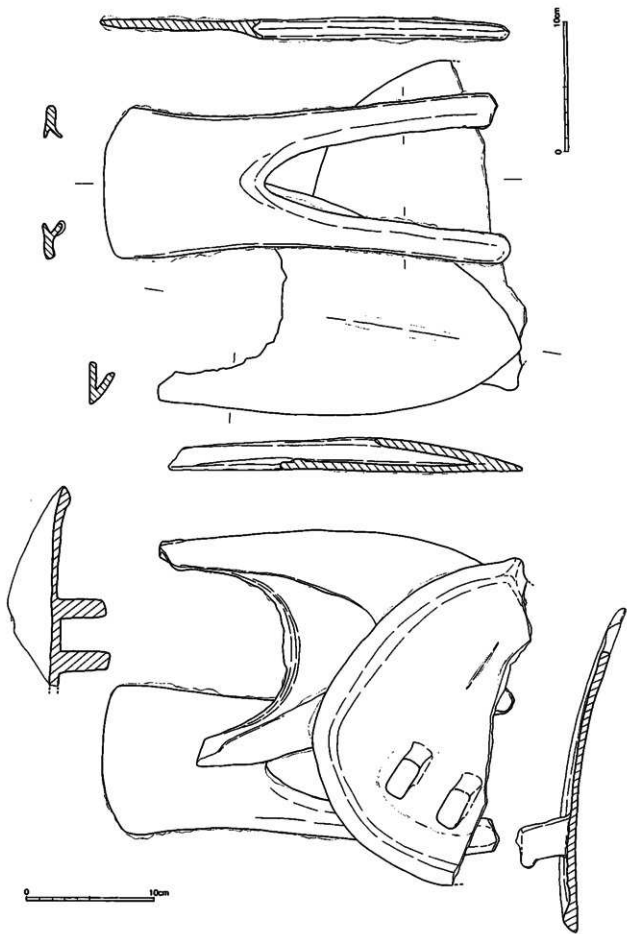
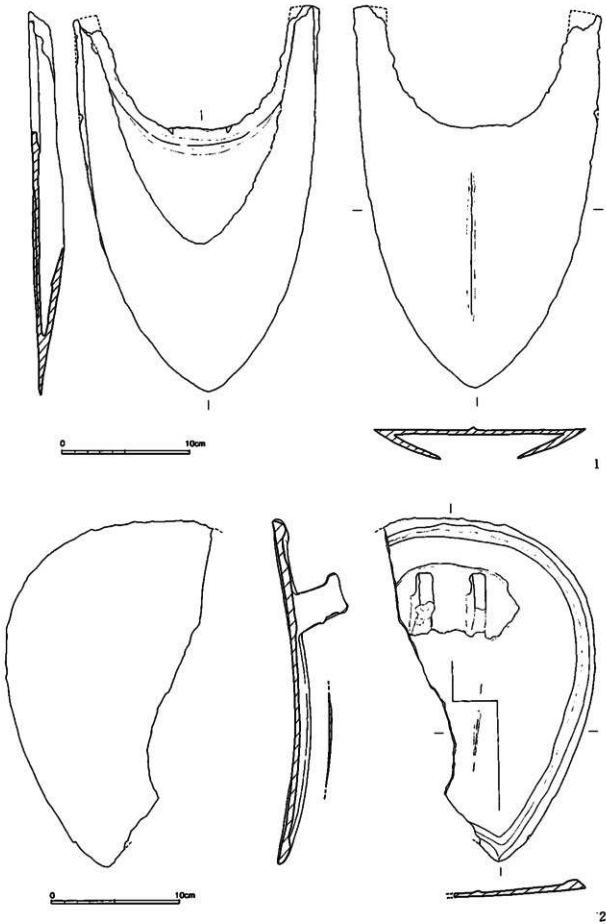
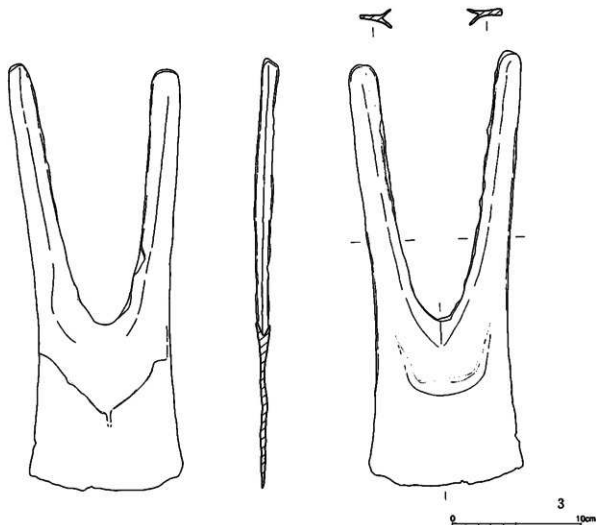


圖 2-43 圖 SE017 瓶・鉢・蓋の出土状況 (1/4)



第2-44圖 SE017 出土遺物実測圖 (1/3)



第2-45図 SE017 出土遺物実測図 (1/3)

町屋 た構造の井戸は、中世大友府内町跡の町屋によく見られるものである。
 道路 また、本井戸と時期的に近い遺構としてSD001がある。府内古園によると、本調査区の北側には東西方向に走る道路が描かれている。そしてその道路に面するように町屋と思われる描写がなされている。この絵図が正しいとすると、本調査区は北側を道路、東側を南北方向に延びる溝SD001に面された町屋の一面である可能性があり、本井戸SE017は北側の道路に面した町屋の裏手に位置するものと考えられる。

出土遺物 (第2-39図・第2-43~45図)

景徳鎮窯系 1は景徳鎮窯系青花の破片である。表にラム式蓮弁のような図柄が見られる。瓶の一部か。2・
 青花 3は龍泉窯系青磁碗である。2は胴部に蓮弁文が施されるが、蓮弁の幅は狭くなっており15世紀後半以降の特徴を示している。3は口縁部外面に二条の界線による文様帯が施される。4は朝鮮王
 龍泉窯系青磁 舟徳利 朝産舟徳利である。

5は備前系陶器の摺鉢、6~8は京都系土師器である。京都系土師器は器壁が比較的厚く、口唇部下のナデも明瞭であることから、2期に位置づけられる。9は瓦質土器の火鉢の脚部である。

京都系土師器 2期 10は開元通寶で、初鑄年は621年、直径24cm、重さ21gである。

なお、楯側内の底の方から、鉄製鞆が出土した。第2-43図はその出土した際の状況を図に示した。図から判るように、鞆先・鞆ヘラ・鞆先が3点付着した状態で出土した。第2-44・45図はそれらを切り離し、それぞれを図示している。第2-44図の1は鞆の鞆先である。一方の面は平らで、もう一方の面は筒状を呈す。鞆床部分にとりつための袋部分がある。第2-44図の2

は壘^{ツタ}ヘラである。ハート形を呈し上下に若干湾曲している。裏側には2カ所隆起部が設けられ、壘柱^{りゅうちゅう}に取り付けられる部分であろう。第2-45図の3は楾である。これは壘とは直接関係ないが、壘と共にこの楾も同時に井筒に放り込まれているところを見ると、何か祭祀の意味合いを有しているのかもしれない。

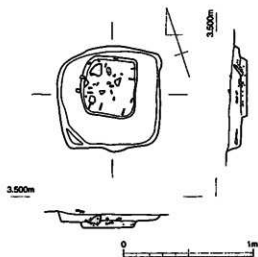
4. 土坑墓

ST009 (第2-46図)

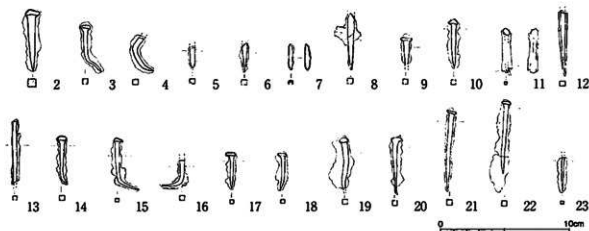
2-B区に位置する土坑墓である。長径0.84m、短径0.81mのほぼ方形の掘形を呈し、掘形内中央部北側よりの部分に、長径0.48m、短径0.42mの方形の棺を納めたと思われる痕跡が認められる。棺部分の深さは0.14m程しか無く、上部はかなりの削平を受けているものと思われる。この棺部分の中から大量の釘と土師質土器等が出土している。骨片は確認できているが、残りはさほどよくなく埋葬方法の詳細は不明である。棺のサイズからして座棺か小児墓であった可能性が考えられる。この内小児墓については、北西に隣接して位置する第10次Ⅱ区北調査区(本報告書第4章)において、数多く検出されている。しかしそれらの一群は16世紀後半が主体となっているのに対して、本土坑墓ST009は出土する土師質土器の形態から15世紀代に遡る可能性が高い。また第10次Ⅱ区北調査区小児墓群は比較的まとまって検出されているのに比べ、ST009はその一群からはかなり距離を隔てて位置し、さらには本調査区(第10次Ⅰ区調査区)の中でも16世紀後半代の遺構群の区画から離れて位置している。したがって第10次Ⅱ区北調査区の墓域とは時期も性格も全く異なるものであると解される。



1



第2-46図 ST009遺構図(1/30)



第2-47図 ST009出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(第2-47図)

断土が白色

1は薄手の器壁で、内外面にロクロ目を顕著に残す土師質土器皿である。胎土は白色を呈し在地のものとは異なる。15世紀後半代に位置づけられる。2～23は鉄製の釘である。棺に使用されていたものであろう。

5. 包含層・ピット

遺構空地

包含層・ピットから出土した遺物をここでは一括して掲載する。包含層出土遺物は調査区西側からグリッド毎に取上げを行った。一番西側の1-B区は調査の端わずかな部分で、中世の遺物が出土している。続いて東側へ順に2-B区も中世の遺物が中心に出土している。3-B区は本調査区において遺構空地になっている部分で、中世の遺物の出土は少ない。ここでは縄文土器や古墳時代の土器等が出土している。4-A・B区は遺構が最も集中するエリアで、中世の遺物がかなり出土している。本項で掲載した遺物は4-A区出土の縄文土器を除いて、すべてピットから出土したものでいずれも中世のものである。ただ、本調査区における大きな時期的な画期は、他の土坑や溝から見ると、15世紀代と16世紀後半代であるが、出土する遺物から、各ピットがそのいずれの画期に相当するものかは認定しがたい。本調査区東端に位置する5-A・B区においても中世の遺物が中心となって出土するが、土錘が比較的まとまって出土しているのが特徴的である。また、古代の土師質土器が出土しているが、本調査区の東側に隣接してある第10次Ⅱ区南調査区において、古代の包含層が確認されている。この包含層が部分的に本調査区まで広がっている可能性もある。

第10次Ⅱ区南調査区

出土遺物(第2-48図・第2-49図)

龍泉窯系青磁

1は4-B区のピット内(P59)から出土した。龍泉窯系青磁皿で胴部は梭をもって口縁部に向かってゆるやかに外反する。15世紀代の所産か。2は1-B区から出土した、中国産天目碗の高台部である。3は1-B区から出土した備前系陶器播鉢で、口縁部が立ち上がって口縁帯ができあがっている。しかし口縁部外面の凹線が未発達である。またスリメもまだナナメスリメではなく、乗岡編年の中世5期に該当するものと考えられる。

備前系陶器

在地系土師質土器

4は4-A区のピット内(P02)から出土した在地系の土師質土器小皿である。口縁部が外傾して広がり、坂本編年で15世紀末葉～16世紀初頭に位置づけられるものと考えられる。5は1-B区から出土した在地系土師質土器の皿である。口唇部にススの付着が認められ、灯明皿として使用されたものと考えられる。胴部から口縁部に向けて外に開くように立ち上がり、内面にはロクロ成形痕が顕著に残る。坂本編年の15世紀末葉～16世紀前葉に位置づけられるものと考えられる。6は一括資料で在地系土師質土器の耳皿である。7は、5-B区のピット内(P10)から出土した在地系土師質土器で、上部皿部分の中央部から底部まで孔が貫通しており燗台である。8は5-B区から出土した瓦質土器火鉢の脚部である。脚部の下方向からと脚部上部横方向に穿孔が認められる。

瓦質土器

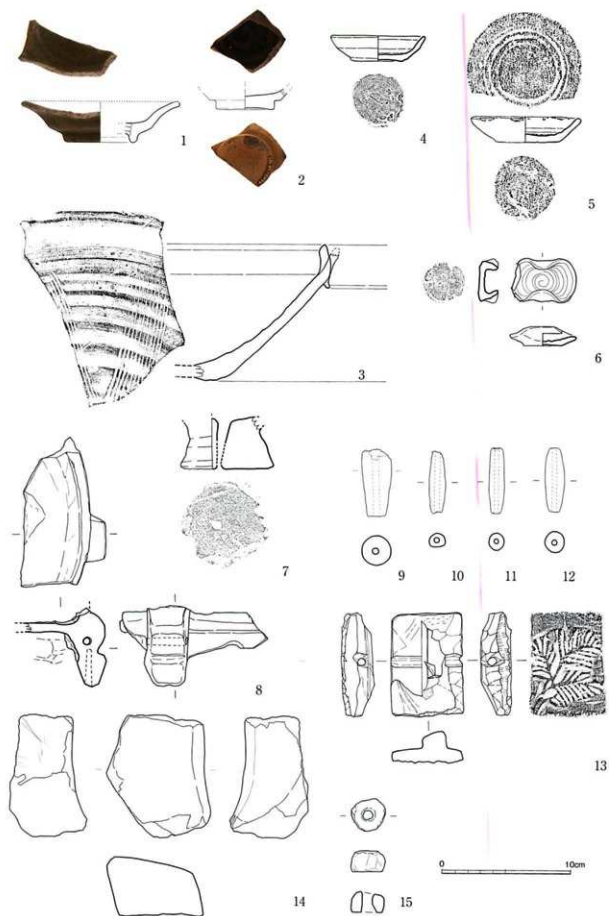
土錘

9～12は土錘である。9(2-B区出土)を除きすべて、5-B区からの出土である。土錘については本調査区の西側に位置する上野遺跡でまとまった資料が検出されており²¹、本調査区一帯では土錘の出土が比較的顕著である。13は4-B区のピット内(P001)から出土した滑石製のスタンプである。上部のつまみ部分と目される所では、横方向の穿孔がなされており、紐等を通していたのであろうか。またスタンプ面では、木の葉状の模様が発刻されており、粘土等の何か柔らかいものに押しつけて模様を映し込んだのではなかろうか。14は4-B区のピット(P056)から出土した砥石である。石材は砂岩と思われる。15は3-B区のピット内(P010)から出土した環状の石製品である。軽石でできており、用途は不明である。16は前述の砥石と共に4-B区のピット(P056)から出土した燗である。17は4-B区のピット内(P033)から出土した銅鏡であ

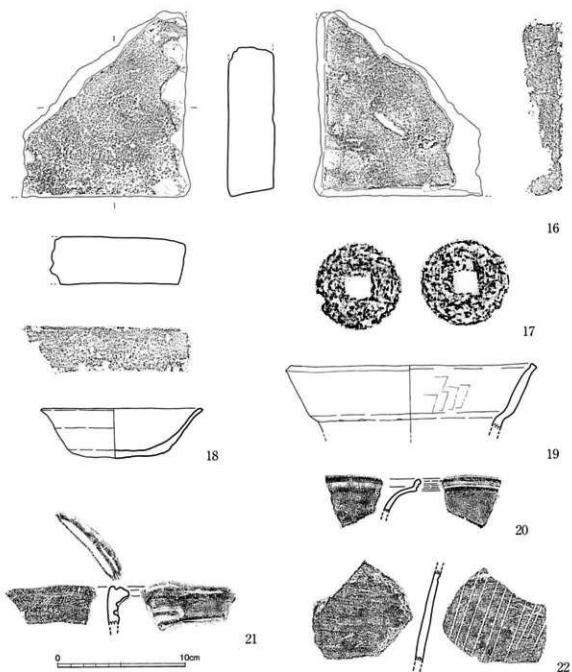
砥石

燗

註1 「上野町道跡・顕徳寺道跡」(大分県文化財調査報告164)2004.大分県教育委員会



第2-48図 包含層・ピット 出土物実測図 (1/3)



第2-49図 包含層・ピット 出土遺物実測図 (1/3) ※17のみ1/1

るが、腐食が激しく表面の文字は確認できない。またピット内から出土した銅銭という点においては、地鎮の意味があるのかもしれない。

18～22においては、中世の遺物ではない。18は5-A区から出土した古代の土師器塚で、東に隣接する第10次Ⅱ区南調査区の古代包含層がここまで広がっていた可能性がある。19は3-B区から出土した古墳時代前期の甕の口縁部である。20は4-A区から出土した縄文土器で後期末～晩期初頭の浅鉢である。21は3-B区から出土した縄文土器で口唇部及び口縁部直下にための沈線を施す。後期鐘崎式である。22は3-B区から出土した縄文時代前期曾畑式の深鉢で、胴部外面に沈線文が施される。

古墳時代前期
縄文土器

第3節 小結

以上第10次調査区I区については、大きく2つの画期が認められた。一つは15世紀代・もう一つは16世紀後半代である。最後にこの2つの画期について今一度整理し、本調査区の性格についてまとめておきたい。本調査区の具体的なイメージを得ることのできる「府内古図」との兼ね合いから、新しい順に見ていきたいと思う。

第1画期 (16世紀後葉代)

大友義統治世

天正元年

祐向寺

町屋

廃棄土坑、井戸

東西方向の道路

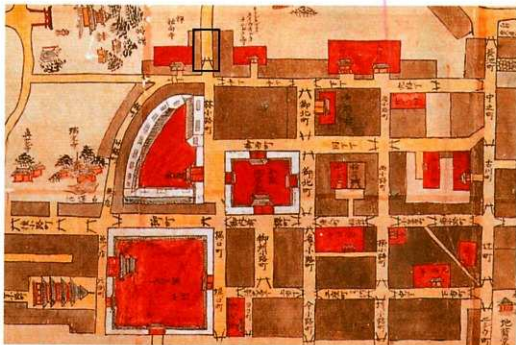
裏手

町屋の終端部

近年の発掘調査成果により、府内古図の描写する時期は、大友宗麟の息子である大友義統治世段階における府内の姿であることが分かってきた。大友義統が宗麟より家督を継ぐのは1573年(天正元年)のことであり、したがって本調査区で得られた一つの画期である16世紀後葉代とは、まさしくこの府内古図が描いた世界である。そこで、府内古図の描写と本調査区の位置関係を照らし合わせてみると、第2-50図の□で囲った部分が該当すると考えられる。当初は、試掘により土坑墓や五輪塔の出土したことから、府内古図に描かれている「祐向寺」との関係が明らかにされると考えられていた。ところが土坑墓は15世紀代のものであり、府内古図の世界とは時期が異なる。そこで府内古図を今一度よく見てみると、祐向寺の北側には町屋の描写があることが看取される。

本調査区で明確に16世紀後葉代と認定できる遺構を拾ったのが第2-51図(赤色の部分)である。これを見ると東側に溝SD001が南北方向に延びており、それと方位を同じくして(あるいは同じ方位を意識して)16世紀後葉代の遺構が展開していることが窺われる。遺構の内訳は、廃棄土坑、井戸、ピットである。こうした遺構の構成は、中世大友府内町跡においては町屋の裏手でみられる一般的な光景である。これらの遺構の北側にはピット群があり、さらに第3章で触れるが、本調査区の東側に隣接して位置する第10次II区南調査区においては、府内古図に描かれているものと考えられる東西方向の道路が検出されており、この延長部は本調査区の北側に位置するものと想定される。したがって、本調査区で検出された遺構の配置は、北側に延びてきていると想定される道路に面した町屋の光景を示しており、特にその裏手の部分が検出されているものと考えられる。

また、遺構が集中して分布するのは本調査区の中央部付近で終わり、それより西側では遺構が希薄になる。16世紀後葉代の遺構に関してみれば、ほとんど認められない。したがってこの部分が町屋の終端部と考えられ、府内古図でも町屋はこのあたりで終わっているように描かれている。



第2-50図 府内古図 C類

第2画期（15世紀代）

15世紀代から
同じ方向性

土坑墓 ST009

府内古園A～
C類

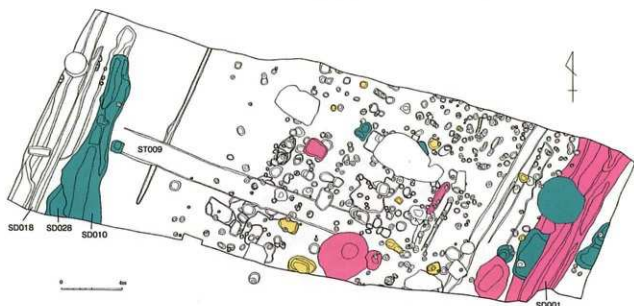
墓域

五輪塔

この画期の遺構は、16世紀後葉代とは異なって本調査区内全体に点在している（第2～51図の青色の部分は、15世紀代の遺構。黄色の部分は15世紀～16世紀の範囲で位置づけられる遺構）。ただ、西側隅で検出された溝はその方位が、16世紀後半代の溝と同じであり、15世紀代から同じ方向性をもった空間認識が存在していたことを想定させる。この画期で注目すべき遺構は土坑墓 ST009 である。当初はこの遺構の存在から、府内古園に描かれる祐向寺との関係が注目されていた（府内古園には大きくA類～C類までであるが^{註1}、いずれにも「祐向寺」は記載されている）。ただ前述のように府内古園の描写が16世紀後半の世界であることから、直接両者に関連性を求めるのは難しい。

また土坑墓 ST009 と他の15世紀代の遺構との関連を見てみると、まず土坑墓 ST009 のすぐ西側に溝 SD010・SD028 が存在する。この内 SD010 とは非常に至近距離にあるが、前述のように上部がかなり削平されている可能性があるため、したがって両者は併存していない可能性が高い。SD028 については、これがもし SD010 と別の溝であれば併存しているかもしれない。また、その他の遺構については、明確に同時期であろうとされる遺構が ST009 のそばにはほとんど認められず、かなり距離を隔てて東側に土坑や井戸が認められる。したがってこの土坑墓 ST009 は居住空間とは異なった区画に存在していたと考えられる。ではこの ST009 の周囲一帯が、ある時期墓域だったのかということになると、他に墓が見つかっていない以上立証のしようがない。ただ前述のようにすぐ西側に隣接している溝 SD010・SD028、さらにはそれらの西側に存在する SD018（出土物が希少なため時期は不明）等が、この土坑墓 ST009 よりも新しく、その造成に伴って他の墓群が消失したとするならば、ある時期の墓域の存在を想定することも可能であろう。

なおこの祐向寺がいつから、いつまで存在したかは現時点では文献上の記録もなく不明である。もし開山が15世紀代以前まで遡れば本調査区と全く関係ないともいえない。そうした場合、土坑墓の存在や試掘時に検出された五輪塔等も、祐向寺の関連のものである可能性は十分にある。今後周囲の発掘調査等が行われて祐向寺の存在が明確になってくれば、解明されていくであろう。



第2-51図 時期別遺構分布図 (1/500)

註1 府内古園の分類については、木村幾多郎氏の分類に準拠する。（木村幾多郎「府内と府内古園」〔南宮都市・豊後府内〕大分市教育委員会・中世都市研究会編）2001年）

第3章

中世大友府内町跡第10次Ⅱ区南調査区

第1節 調査の経緯

中世大友府内町跡第10次Ⅱ区南調査区は大分県大分市上野六坊北町に所在し、標高約35mの沖積低地上に立地する。本調査は、大分駅周辺総合整備事業に伴い大分県教育委員会が2000年に試掘調査を実施、翌2001年7月から2002年3月までかけて本調査を実施した。

第5次調査区
A区
SD431
SD116～118

本調査区の東側には、第5次調査区A区が隣接して位置しており、当初は調査区西端部で検出された溝SD431の延長部が検出されるのではないかと想定されていた。そして実際、第10次Ⅱ区南調査区で、方位的には符合しそうな溝が東西方向で検出された(SD116～118)。ところが本調査区の溝の時期は16世紀後半が主体となっているのに対し、第5次調査区A区で検出された溝SD431は15世紀後半と位置づけられており、同一のものではないことが判明した。また、溝の時期に注目すれば、第5次調査区A区のSD101・SD103等が方位的に関係ありそうであるが、第10次Ⅱ区南調査区の溝(SD116～118)に比べると規模がかなり違うために、一連のものとするには無理がありそうである。したがって本調査区は、隣接する第5次調査区A区とは別に区画を有して、遺構群が展開していると思なした方がよさそうである。

ダイウス堂

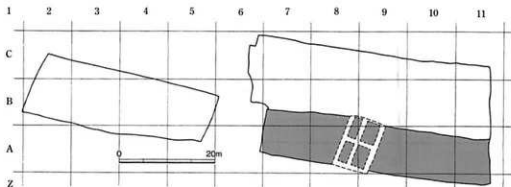
また「府内古園」によれば、南側に「祐向寺」、北側には「ダイウス堂」が存在したとされる場所に位置する。北側のダイウス堂については、本調査区の北側に隣接して位置する第10次Ⅱ区北調査区で、キリシタン墓と思われる木棺墓が見つかるなど、府内古園の描写と符合する状況が現れてきている。一方南側の祐向寺については、その存在を証拠づけるような遺物や遺構が、本調査区では確認できなかった。本報告書第2章の第10次Ⅰ区調査区でも触れたように、府内古園ではこの祐向寺の北側には町屋の描写がなされており、実際はその町屋部分に調査区があたっている可能性が高いと思われる。また、さらに注目すべき点は、府内古園で祐向寺・町屋とダイウス堂との間に東西方向に延びる道路が描かれている点である。本調査区及び北側に隣接する第10次Ⅱ区北調査区では、その道路と思われる遺構が検出された。

キリシタン墓
祐向寺

東西方向の道路

なお、中世大友府内町跡府内町跡第10次Ⅱ区南調査区においては、事業対象地区を国土座標に乗せた10m方眼で区画しており、それぞれの区画を西から東へ1～11、北から南へC・B・A・Zのアルファベットを付し、アルファベットと数字の組み合わせで、各々の区画を呼称することになっている。本章で報告する第10次Ⅱ区南調査区については、東西6～11区、南北B・A・Z区、の位置に相当する(第3-1図)。

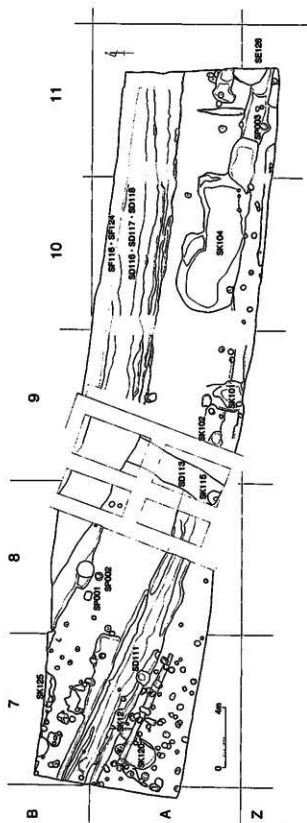
国土座標



第3-1図 第10次Ⅱ区南調査区遺構分布図(1/800)

第3-1表 中世大友府内町跡 第10次Ⅱ区南調査区遺構一覧

遺構番号	旧遺構番号	遺構の位置	遺構の性格	遺構の時期	備考	掲載頁
S126	SE126	11A・11Z区	井戸	14世紀前期	龍泉型系青磁碗(遺存文)	80
S113	SD113	9A区・基礎3・基礎4	溝	15世紀末葉～16世紀初期	龍泉型系青磁碗(遺存文)・在地系土師質土器類・土師質土器(焼物等の蓋)・瓦質土器(火鉢)	57
S101	SK101	9A・9Z区	土境	15世紀末葉～16世紀初期	在地系土師質土器類	70
S120	SK120	7A区	土境	15世紀末葉～16世紀初期	備前系陶器類(中世6期)・在地系土師質土器小皿	76
S121	SK121	7A区	土境	15世紀末葉～16世紀初期	備前系陶器類(中世6期)・在地系土師質土器小皿	76
11Z区P01	SP001	11Z区	井戸	15世紀末葉～16世紀初期	在地系土師質土器類	78
S111	SD111	7A・7B・8A区	溝	16世紀後葉	景徳鎮窯系青花・青磁・白磁・肥後系陶器・備前系陶器・京都系土師器・土師・瓦石	55
S116	SD116	8B・8A・9A・10A・11A区・基礎1・基礎3	溝	16世紀後葉	景徳鎮窯系青花類(唐・明)・龍泉型系青磁碗・中国陶器類(中国産白磁器(磁器)・景徳鎮窯系白磁(陶磁器)・備前系陶器類(近世1期)・京都系土師器類(2期)・在地系土師質土器(皿・土鍋)・瓦質土器(火鉢)・土鍋	61
S116(遺跡)	SD116(遺跡)	9A・10A・11A区	石敷遺跡	16世紀後葉		61
S117	SD117	8B・8A・9A・10A・11A区・基礎1・基礎3	溝	16世紀後葉	中国産白磁器(16世紀)・景徳鎮窯系青磁碗・備前系陶器類(近世1期)・京都系土師器類(2期)・在地系土師質土器類・瓦質土器(角火鉢・鉢)・土師質土器類(白・茶臼)・土師・青銅製品・宝珠印等・赤銅貨幣	62
S118	SD118	8B・8A・9A・10A・11A区・基礎1・基礎3	溝	16世紀後葉	景徳鎮窯系青花類(唐・明)・龍泉型系青磁碗(遺存文・印文)・中国陶器類(中国産白磁(磁器)・産地不明陶磁器(朝鮮産?)・備前系陶器(磁・磁鉢・大甕)・京都系土師器・土師質土器類(白・瓦質土器類)・土師・木器(漆器類・刺籠)・下駄)・明瓦・漢式漆器	64
S102	SK102	9A区	土境	16世紀後葉	京都系土師器(2期)	71
S103	SK103	9A区	土境	16世紀後葉	在地系土師質土器類・瓦質土器茶釜(SD116・SD117・SD118で出土した破片と整合)	71
S104	SK104	10A・10Z・11A・11Z区	土境	16世紀後葉	景徳鎮窯系青花類(唐・明)・龍泉型系青磁碗(遺存文・印文)・中国陶器類(中国産白磁(磁器)・産地不明陶磁器(朝鮮産?)・備前系陶器(磁・磁鉢・大甕)・京都系土師器・土師質土器類(白・瓦質土器類)・土師・木器(漆器類・刺籠)・下駄)・明瓦・漢式漆器	72
S115	SK115	8A区	土境?	16世紀後葉	京都系土師器(2期)・瓦質土器火鉢	76
S125	SK125	7B区	土境	16世紀後葉	京都系土師器類(2期)	77
SD01	SD01	7A区	礎石	16世紀後葉?		79
8B区P01	SP001	8B区	柱穴	16世紀後葉?		78
8A区P02	SP002	8A区	柱穴	16世紀後葉?		78



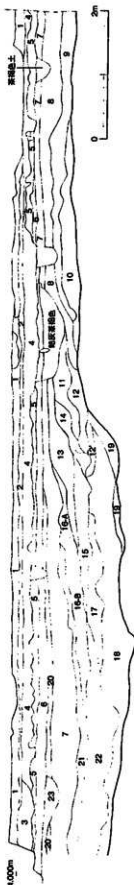
第3-2图 第10次Ⅱ区南岡土区遺構分布图 (1/250)



1層	礫状砂質粘土
2層	砂質砂質土
3層	砂質砂質粘土
4層	マンガン鉄多量帯
5層	マンガン鉄少量帯
6層	マンガン鉄多量帯
7層	黄褐色粘土
8層	黄褐色粘土
9層	黄褐色土
10層	黄褐色土
11層	黄褐色土
12層	黄褐色土
13層	灰褐色土
14層	灰褐色砂質土

①層	礫状砂質粘土
②層	砂質砂質砂質粘土
③層	砂質砂質粘土
④層	砂質砂質砂質粘土
A層	灰褐色土
B層	灰褐色砂質土

①層	礫状砂質粘土
②層	砂質砂質砂質粘土
③層	砂質砂質粘土
④層	砂質砂質砂質粘土
A層	灰褐色土
B層	灰褐色砂質土



1層	礫状砂質粘土
2層	砂質砂質砂質土
3層	砂質砂質砂質土
4層	砂質砂質砂質土
5層	砂質砂質砂質土
6層	砂質砂質砂質土
7層	砂質砂質砂質土
8層	砂質砂質砂質土
9層	砂質砂質砂質土
10層	砂質砂質砂質土
11層	砂質砂質砂質土
12層	砂質砂質砂質土

7A・B区1層	
7A・B区2層	
7A・B区6層	
7A・B区7層	
7A・B区8層	
7A・B区13層	
7A・B区15層	

13層	礫状砂質砂質土
14層	砂質砂質砂質土
15層	砂質砂質砂質土
16層A	砂質砂質砂質土
16層B	砂質砂質砂質土
17層	砂質砂質砂質土
18層	砂質砂質砂質土
19層	砂質砂質砂質土
20層	砂質砂質砂質土
21層	砂質砂質砂質土
22層	砂質砂質砂質土
23層	砂質砂質砂質土

第3-3図 第10次工区前隣区土層図 (1/60)

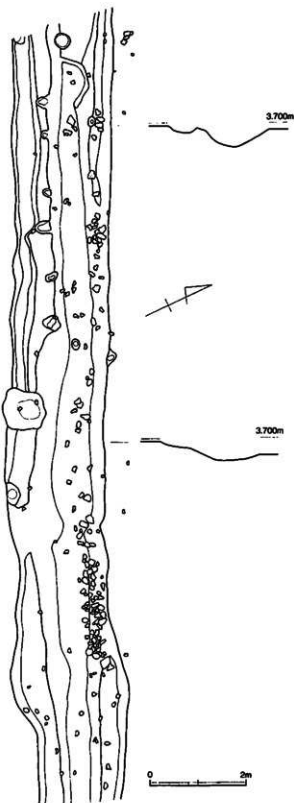
第2節 遺構と遺物

1. 溝

SD111 (第3-4図)

本調査区の西側7A区・7B区・8A区にわたって確認された。確認できた長さは16.6m、幅2.1mほどである。溝の東側はマンションの基礎部分が残っている関係でそこで分断され、その先は調査区の南に出て行ってしまおうと思われる。溝の西側は調査区を越えてさらに延びていくと考えられるが、その延びた先には第10次Ⅰ区調査区があり、そこではこの溝SD111は確認できていない。方位的には、W-25°-Nと約25°北に振っており、第10次Ⅰ区調査区で検出されたSD001がW-30°-Nであるため、わずかにずれるものの直交する可能性がある。もし直交するのであれば、第10次Ⅰ区調査区のすぐ北側外で直角に折れてSD001に連結するか、もしくはSD001の手前で終わっている可能性もある。第10次Ⅰ区調査区のSD001は16世紀後葉代のもと考えられているが、溝SD111も出土する遺物からほぼ同じくらいの時期に位置づけられるため、両者は併存していても問題はない。

ところでSD111の方位は前述のように、W-30°-Nと約30°北に振っているが、この軸は中世大友府内町跡では特異な方位である。坂本氏によれば16世紀後半は中世大友府内町跡の町造りは、一般にN-4°-E(東西方向で言えばW-4°-N)と4°振った方位で行われているとされている²¹⁾。本調査区の東側に隣接する第5次調査区で検出されている16世紀代の東西方向の溝も、いずれもW-4°-Nの方位を示している。このことから、SD111は第5次調査区以東、さらに言えば第4街路以東の区画とは異なった町造りのもとに形成されたと考



第3-4図 SD111 遺構図 (1/80)

W-25°-N北
に振る

直交

16世紀後葉

N-4°-E

第4街路以東

えられる。本調査区が中世大友府内町跡の中でも西側の縁辺部で、さらに最も西側を画する南北の街路である第4南北街路の外側（西側）に位置する所以であるかもしれない。

出土遺物（第3～5図）

ラマ式蓮弁

1は景徳鎮窯系青花の壺である。内面は軸がかからず、外面はラマ式蓮弁が施文される。同一個体と思われる破片が、本調査区内の他の遺構でも見つっている。包含層（8-A区・10-A区）から2点、土坑SK104から1点出土している。2は景徳鎮窯系の青磁の皿である。

景徳鎮窯系青磁

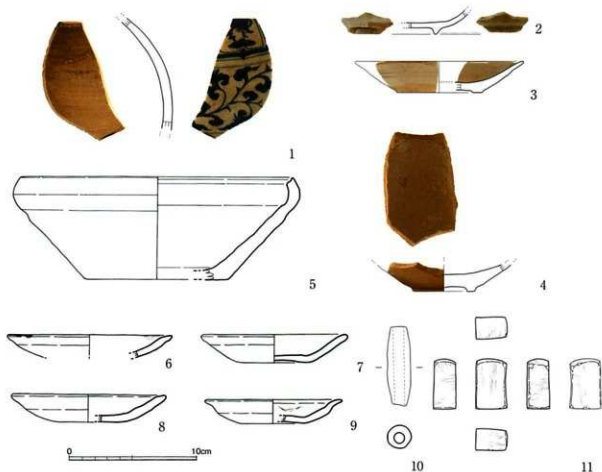
3は中国産の白磁の皿で、底部から口縁部にかけ直線的に開く。高台部外面は軸剥ぎである。

胎土目

4は肥前系陶器の皿で、見込に胎土目が残る。混入品と思われる。5は備前系陶器の鉢で、口縁帯は未発達で口縁部外面に凹線も施されない。6～9は京都系土師器の皿である。器壁はさほど厚くないが、口縁部下のナデが明瞭になっているので、2期の段階に位置づけられよう。

京都系土師器2期

10は土錘、11は砥石である。石英粗面岩である。



第3～5図 SD111 出土遺物実測図（1/3）

註1 坂本嘉弘「考古学から見た中世大友府内城下町の成立と構造」（『南筑都市・豊後府内』大分市教育委員会・中世都市研究会編）2001年

なお、坂本氏は14世紀後半～15世紀中頃まではN-10°-Eという軸が存在するとしているが、SD111はこの方位にもあわない。

SD113 (第3-6図)

9-A区内を南北に延びる溝である。ちょうどマンションの基礎部分が残っている中で検出されたため、調査できなかった部分がある。溝の北側はSD116・SD117・SD118によって切られており確認できない。本調査区の北側に位置する第10次Ⅱ区北調査区でも延長部分は確認されていないことから、北の方へはさほど展開しないと思われる。南側は調査区を越えて延びていくものと思われる。確認できている長さで7.0m、幅20m、深さは1.7mほどである。出土する遺物は

15世紀後半～
16世紀前半

15世紀後半～16世紀前半のものが中心となっており、前述のSD116～118(16世紀後半代)との切り合い関係と矛盾しない。

SD111に直交

溝の方位は確認できている範囲が短いので、あまり正確なことはいえないが、N-30°-Eくらいであろう。この方位は前述のSD111の方位にはほぼ直交する。ただSD111とは時期が全く異なるため両者に直接の関係はないが、中世大友府内町跡の一般的軸線(14世紀後半～15世紀中頃はN-10°-E、16世紀後半はN-4°-E)と異なる区画造りがなされていたのが、15世紀代まで遷ることが示唆される。本調査区の西側に隣接する第10次Ⅰ区調査区で検出された15世紀代の溝もほぼ同じ軸線を有しており、第4南北街路以西は、15世紀代から異なった軸を意識した区画造りがなされていたことが想定される。

15世紀代

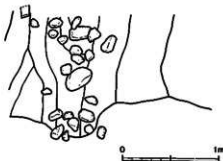
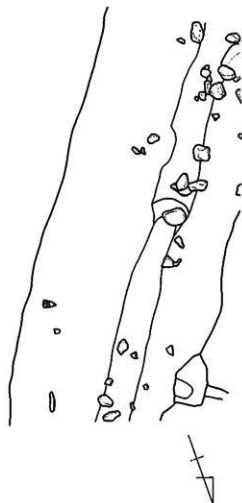
出土遺物(第3-8図)

龍泉宮系青磁

1・2は龍泉宮系青磁碗で、1は高台部、2は口縁部である。2は胴部に蓮弁文が見られるが、蓮弁の幅狭くなっている。細線と剣頭とが蓮弁としての単位を意識している段階で上田福年の15世紀後半～16世紀前半に位置づけられると思われる。

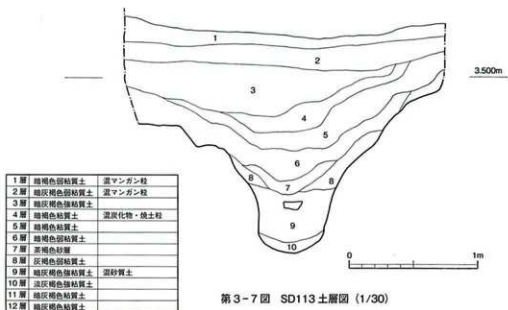
在地系土師質土器

3～6は在地系の土師質土器皿で、底部から口縁部に外に向けて開くように立ち上がり、内外面にロクロ目を顕著に残す。坂本福年で15世紀末業～16世紀初頭に位置づけられる資料である。7は土師質土器

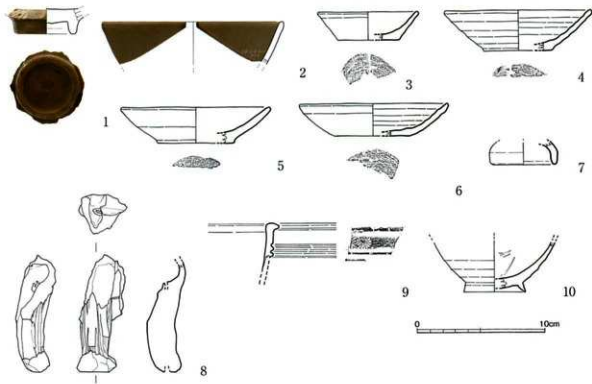


第3-6図 SD113遺構図(1/40)

瓦質土器 焼塩壺の蓋と思われる。8～10は瓦質土器である。8は火鉢の脚部、9は火鉢の口縁部である。9は口縁部下に巡る突帯間に文様帯が施される。10は埴である。高台部分は断面が三角形形状を呈する。



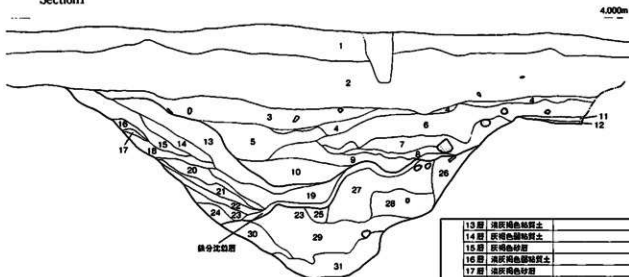
第3-7図 SD113土層図 (1/30)



第3-8図 SD113出土遺物実測図 (1/3)

SD116・117・118

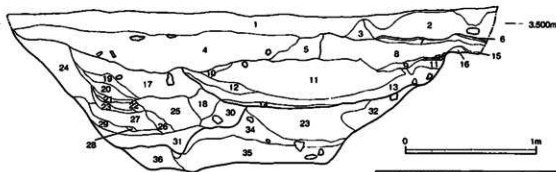
Section1



SD116	1層	灰褐色粘質土	マンガン殻を多く含む	
	2層	地味色粘質土	マンガン殻を含む	
	3層	黄褐色粘質土		4層(遺跡跡)の自然落下後に堆積 沈没跡
	4層	灰褐色シルト層		
	5層	黄褐色粘質土		
	6層	灰褐色粘質土		
	7層	灰褐色シルト層		
	8層	黄褐色粘質土		
	9層	灰褐色シルト層	地味色粘質土を含む	
	10層	灰褐色粘質土		
	11層	灰褐色シルト層		
	12層	黄褐色粘質土	鉄分を含む	

SD117	13層	黄褐色粘質土	
	14層	灰褐色粘質土	
	15層	灰褐色粘質土	
	16層	黄褐色粘質土	
	17層	黄褐色粘質土	
	18層	灰褐色粘質土	
	19層	灰褐色粘質土	
	20層	黄褐色粘質土	
	21層	19層と同様	
	22層	黄褐色粘質土	灰褐色粘質土を含む
SD118	23層	灰褐色粘質土	黒・黄土質を含む
	24層	黄褐色粘質土	
	25層	黄褐色粘質土	
	26層	黄褐色粘質土	黄褐色土ブロックを含む
	27層	黄褐色粘質土	
	28層	黄褐色粘質土	
	29層	黄褐色粘質土	
	30層	灰褐色粘質土	砂粒を多く含む
	31層	黄褐色粘質土	

Section2



SD116	1層	地味色粘質土	マンガン殻を含む	
	2層	灰褐色土	黄褐色土を多く含む	
	3層	灰褐色土		
	4層	黄褐色粘質土		
	5層	地味色土		第1遺跡跡
	6層	灰褐色シルト層		
	7層	灰褐色粘質土	黒・黄土を含む	
	8層	灰褐色土	黄褐色粘質土ブロックを含む	沈没跡形成層(第1遺跡)
	9層	地味色粘質土		
	10層	灰褐色粘質土		
	11層	Section1の9-10層に対応		第2遺跡跡の四隅の可能性
	12層	灰褐色粘質土	黄褐色粘質土を含む	
	13層	黄褐色粘質土	砂粒が極めて小さい	
	14層	灰褐色シルト層		
第2遺跡跡	15層	地味色粘質土		
形成層	16層	灰褐色粘質土	沈没(沈没遺跡)形成層(第2遺跡)	

SD117	17層	黄褐色粘質土	
	18層	地味色粘質土	赤褐色土ブロックを含む
	19層	地味色粘質土	灰色粘土・マンガン殻を多く含む
	20層	地味色粘質土	
	21層	地味色粘質土	
	22層	地味色粘質土	
	23層	地味色粘質土	
	24層	地味色粘質土	マンガン殻を含む
	25層	灰褐色粘質土	
	26層	22層とは異なる	
SD118	27層	地味色粘質土	黄褐色粘質土を多く含む
	28層	灰褐色粘質土	
	29層	地味色粘質土	
	30層	地味色粘質土	
	31層	黄褐色粘質土	
	32層	地味色粘質土	(地味色粘質土)
	33層	地味色粘質土	
	34層	黄褐色粘質土	
	35層	地味色粘質土	黒い灰褐色粘質土ブロックを含む
	36層	地味色粘質土	

第3-9図 SD116・SD117・SD118土層図(1/30)



第3-10圖 SF124・SD116・SD117・SD118遺構圖(1/100)

SD116・SF116・SF124 (第3-9・10図・付図)

SD116は8-B・8-A・9-A・10-A・11-A区に渡って、本調査区北側を東西に走る道路遺構及び溝である。第3-2図の遺構分布図から分かるように、本調査区北側9-A区から11-A区にかけてはW-5〜7°-Nの方向で東西方向へ延び、8-A区と9-A区の境界付近で北側にカーブしてW-30°-Nの方位で北側に急にカーブしていく。ちょうどその屈折部分に、現代の建物の基礎部分が残っており、所々がそれによって分断されて明瞭には把握できない。ただ、基礎部分の合間には削平を受けておらず、掘り下げは可能であった。明確に遺構に帰属しえない資料については、基礎によって分断された4つの箇所それぞれ名称を付し、その単位の取り上げを行った。その4つの箇所の名称は、北西隅が「基礎1」、その南が「基礎2」、基礎1の東側が「基礎3」、基礎3の南側が「基礎4」となる。したがってこのSD116は基礎1・基礎3内を通過していることになる。この基礎1・基礎3内ではSD116以外に後に詳述するSD117・SD118が重なってSD116下に存在しており、さらに基礎3内においては南側部分にSD113が存在する。そこで上から順次掘り下げを行い、把握できる限りで遺物を各遺構へ帰属させた。

なお、第3-10図及び付図ではSD116～118の遺構実測図を載せているが、前述の基礎部分は遺構の掘形が正確に把握しがたいこともあり、この基礎部分以东のみを掲載した。

ところでSD116は道路部分とその直下にある溝の両方を指す。遺構検出時は、道路遺構と考えられる硬化面及びシルト層の広がりが増え、それが南側でとぎれる部分から溝があると考えられていた。そのため両者に時期差がないと考え、SD116の名称を両遺構に付し、道路部分から出土した遺物をSD116(道路)、溝内から出土した遺物をSD116として取り上げた。しかしながら、第3-9図の土層図から分かるように、SD116(道路)の硬化面及びシルト層は溝SD116の直上に広がっており、溝SD116が埋没後に、道路面であるSD116(道路)が形成されていることが判明し、両者は全く別物であるという認識に至った。したがってこれ以降は、SD116(道路)をSF116と呼称することとする。ただ、溝SD116の廃絶とSF116の形成は一連の作業であったと考えられ、本調査区内においては溝SD116内から出土する遺物とSF116内から出土する遺物に大きな時期差は認められない。ただSF116の北側には、砂利敷き道路面SF124が存在しており、両者は位置的にみても一連のものである可能性がある。SF124からは、本調査区内ではさほど遺物の出土が見られず、あってもSD116に近い時期の遺物しか見られないが、本調査区の北側に位置する第10次Ⅱ区北調査区では、砂利敷き道路面が慶長期以降まで存続していることが確認されている。SF116のシルト層とSF124の砂利敷き道路面の形成が一連の道路形成によるものなのか、時間差があるものなのかは、土層から確認できていないが、砂利敷き道路面が慶長期以降まで存続している期間を考えると、何枚かの道路形成層が存在したとするのが無難であろう。ただ道路の位置や方位はほとんどずれることなく、代々空間認識は踏襲されているようである。

また、SF116のシルト層の南側に溝状の窪みがある(第3-9図 Section 1の3層、Section 2の4層)。道路の側溝とするには掘形が明確ではない。またSection 1をみると、シルト層は南側へ向け(図中では左方向へ向け)下がっているのが看取できる。これは直下に溝SD116～118が存在するために、沈下したものと考えられる。したがって溝状の窪みも、直下に溝が存在していることを考えると、自然発生的に形成された溝と考えるのが無難であろう。

出土遺物(第3-11・12図)

1は景徳鎮窯系青花皿で、見込と高台内に文様が見られる。口縁部の形態が不明であるが、小野編年のE群か。2は龍泉窯系青磁の壺である。口縁部が短く立ち上がり、胴部は丸みを持つ。3は中国産陶器の壺と思われる口縁部である。口縁部は短く屈曲し、口縁上面に平らな面が形成される。4は、中国産の白磁皿である。口縁部が湾反り、森田編年のE群にあたると思われる。16世紀代に位置づけられる。5は景徳鎮窯系白磁で見込部分が緩やかに盛り上がり、いわゆる饅頭心を呈す。

近世1期

高台内には「富貴佳器」の字款を描く。6は、備前系陶器の描鉢で、口縁部が発達し、口縁部外面に凹線が巡る。口端のナデが強く先細りとなる。また内面は、ナナメスリメが施される。乗岡福年の近世1期に該当すると思われる。

京都系土師器
2期

7～12は京都系土師器の皿である。器壁が厚くなってきており、11は口縁部下のナデが強くなくて後をなしている。2期の段階に位置づけられると考えられる。13～24は在地系土師質土器で、13～14・16～22は皿、15・23は坏、24は小皿である。この内皿については、いずれも口縁部が底部から直線的に開くタイプで、13・14・20・21などは内面にロクロ目を顕著に残す。坂本福年の15世紀末葉～16世紀初頭に位置づけられる一群であろう。また、坏については、まず15については、胴部が若干内湾気味に立ち上がっており、他の一群より古い様相を示している。混入品と思われる。23は前述の皿と同時期と思われ、24の小皿も同時期の所産であろう。

燭台

25・26は土師質土器の燭台である。25は底まで穿孔が届かないが、26は欠損して不明だが、底まで穿孔されているようである。27・28は瓦質土器で、27は火鉢の脚部、28は火鉢の口縁部である。28は口縁部下の2条の突帯間に文様帯が巡り、雷文が印刻されている。29・30は土錘である。

SD117 (第3-9-10図・付図)

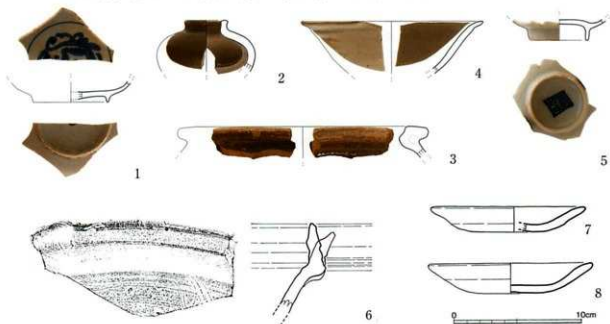
鉄分沈着層

SD116の下に位置し、SD116にほとんど併行して延びる。8-B・8-A・9-A・10-A・11-A区にわたる。北側部分をSD116に切られているため、幅は推定で2.5m程度、深さは0.9m前後であったと考えられる。このSD117の下にSD118があるが、両者が接するあたりに厚い鉄分の沈着層が見られる(第3-9図Section 1参照)。

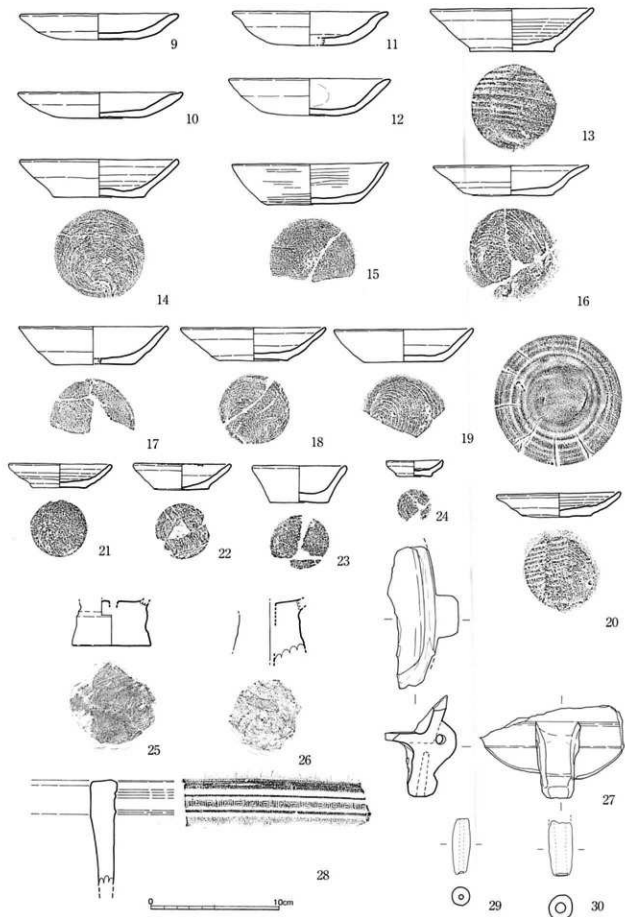
内外面にロクロ目

ナナメスリメ

SD117の形成時期であるが、SD116に切られているため年代的にそれより当然古い。しかも内外面にロクロ目を残し、底部から口縁部に向けて直線的に開く在地系土師質土器皿が大量に出土した。この形態の土師質土器は坂本福年により15世紀末葉～16世紀初頭に位置づけられているため、当初はこのSD117はその時期まで遡るのではないかと考えられていた。ところが、同じ埋土の中から、SD116とはほぼ同形態の京都系土師器が出土し、さらには後述するがこのSD117に切られているSD118からナナメスリメを有する近世1期の備前系陶器描鉢も出土していることから、16世紀後半以前には遡り得ないことが判明した。よって、大量に出土する内外面にロクロ目を残す在地系土師質土器は、この時期まで残ると考えた方がよさそうである。



第3-11図 SD116出土遺物実測図(1/3)



第3-12图 SD116出土遺物実測図(1/3)

出土遺物 (第3-13・14図)

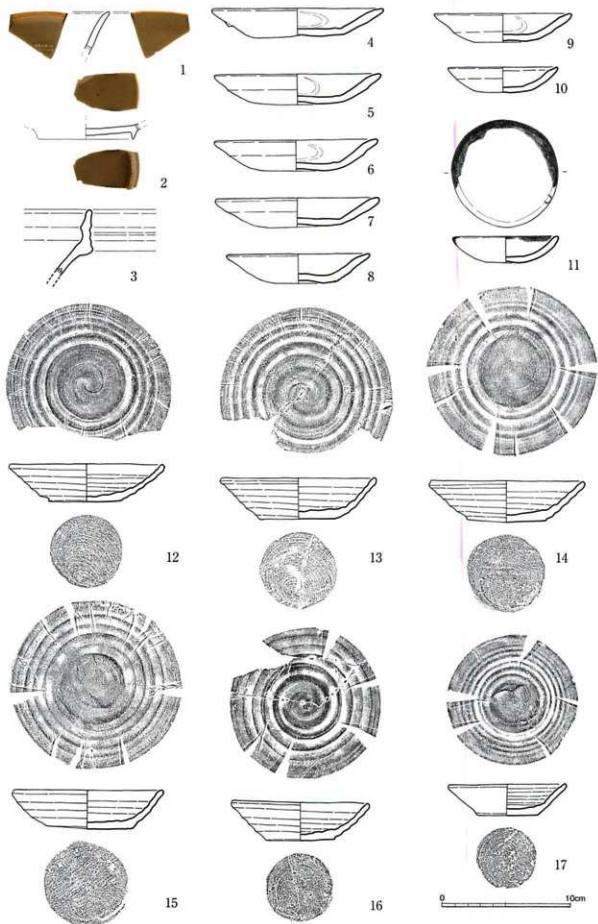
- 口先げ 1は中国産白磁の皿の口縁部である。口縁部はいわゆる口先げで、13～14世紀のものと思われる。2は京徳鎮窯系青磁皿の高台部分である。3は、備前系陶器の挿鉢で、口縁部が発達し、口縁部外面の凹線も多条化している。また口縁部端部はナデが強く先細りしており、スリメの形態は不明だが、乗岡福年の近世1期に位置づけられよう。
- 近世1期 4～11は京都系土師器の皿である。5・6のように口縁部下のナデが強く、襷を持つような形態が出てきており、道地福年の2期に位置づけられる。SD116で出土している京都系土師器と形態的にみて同じ時期に位置づけられる。最低3法量以上はありそうである。また11については、口唇部ススの付着が認められ、灯明皿として使用されていたと思われる。
- 京都系土師器
2期 12～25は在地系土師質土器の皿である。底部から口縁部に向けて直線的に開き、内外面にロクロ目を顕著に残すタイプの一群である。ロクロ目については外面はナデ消されて、内面のみ残るものもある。また、底部は糸切り痕が残る。法量分化も認められ、3法量以上はありそうである。これらの形態は、坂本福年で15世紀末葉～16世紀初頭に位置づけられる一群であるが、4～11の京都系土師器と共存していることから、16世紀後葉まで下げられる。混入したとするには、出土する量が多すぎるので、このタイプの一群は16世紀後葉まで残ると考えるのが妥当であろう。中世大友府内町跡では第13次調査区で、このタイプの在地系土師質土器と2期の京都系土師器が互いにかんりの量で共存して出土している例がある。
- 内外面ロクロ
皿 26・27は瓦質土器で、26は角火鉢の一部と思われる。27は鉢の底部で高台が付く。28は土師質土器の燗台で、穿孔は底部まで及ばない。29は、茶白の下白で、砂岩質である。30は土錘、31は棒状の青銅製品で、用途は不明である。32は宝篋印塔、33は水奈通寶で、初鑄造年は1408年、直径2.4cm、重さ3.1gである。
- 角火鉢
燗台

SD118 (第3-9・10図・付図)

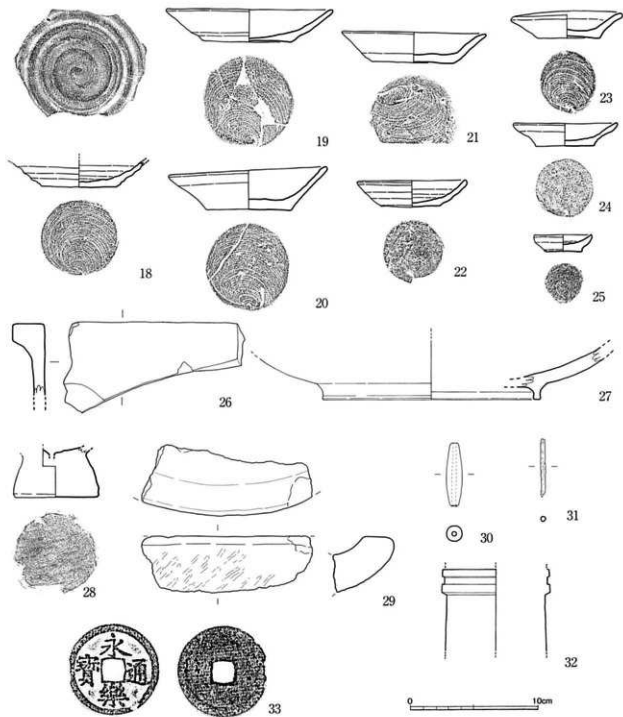
- SD116・117の直下をほぼ併行して延びる溝で、溝の上部はSD116とSD117に切られているため幅は不明である。深さは底部の標高が2.0m程で、深さから考えてもSD116・SD117よりもはるかに大きい規模の溝であったと考えられる。埋土は下の方が泥炭層となっており、帯水していたことを示す。この帯水層のおかげで有機質の残りが非常に良く、木器類がかなり良好な状態で出土した。また動植物遺体も多数も出土しており様々なものがこの溝に廃棄されていた様子が窺われる。
- 帯水層
動植物遺体

出土遺物 (第3-15～17図)

- 饅頭心 1は京徳鎮窯系青花の碗である。見込み部分が緩やかに盛り上がるいわゆる饅頭心を呈す。見込み部分には人物像が、高台内には「宣徳年製」の文字が見られ、E群の碗である。2～4は、龍泉窯系青磁の碗である。胴部には蓮弁文が見られる。蓮弁の幅は短くなっているが、細線と刺頭が1つの単位をなしている。15世紀末～16世紀前葉に位置づけられる。3は、見込に印花文が施される。5は中国産陶器の壺の底部である。6は中国産白磁の皿で口縁部が壊反りする。16世紀代に位置づけられる。また、被熱しており、部分的に黒色になっている。7は中国産白磁の壺の底部と思われる。高台部は露胎となっている。8は産地不明陶器碗で、朝鮮産かもしれない。
- 蓮弁文
印花文 9～14は備前系陶器で、9は壺の底部、10～12は挿鉢である。10は口縁部が発達し、外面の凹線が多条化する。口縁部端部はナデが強く先細りする。近世1期に位置づけられる。同時期のものと思われるのが12でナナメスリメを有する。11は口縁部外面の凹線が未発達で、若干古く中世6期頃に位置づけられよう。13・14は大甕の口縁部である。
- ナナメスリメ

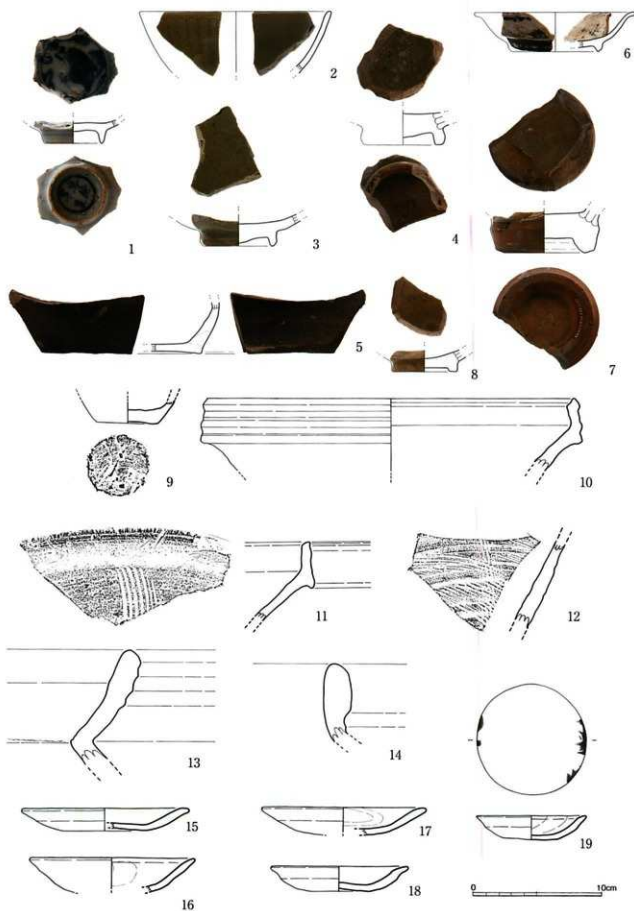


第3-13图 SD117 出土遺物実測図 (1/3)

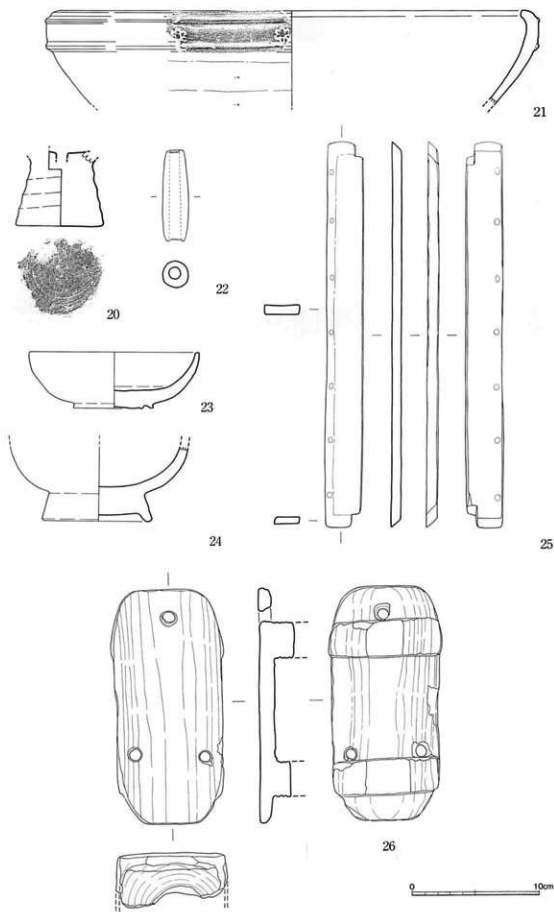


第3-14図 SD117出土遺物実測図(1/3) ※33のみ1/1

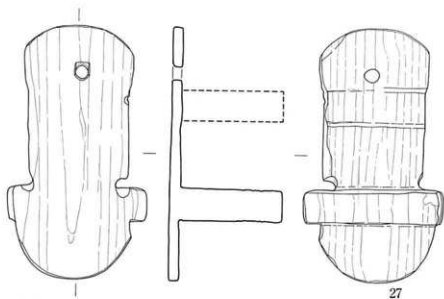
- 灯明皿 15～19は京都系土師器で、18・19は口唇部下のナデが明瞭で2期に位置づけられよう。19は口唇部にススの付着がみられ、灯明皿として使用している。20は土師質土器の燭台で、21は瓦質土器である。21は鉢で口縁部に2条の突帯が巡りその間に文様が施される。22は土鍾である。
- 漆器椀 23～27は木器で、23・24は漆器椀である。24は高台が高く発達している。25は折敷の縁の板と思われる。竹釘か何かで止めたと思われる釘穴が穿たれる。26・27は下駄である。いずれも連雨下駄である。28は軒丸瓦の瓦頭で珠文が巡っている。29は埴である。30は洪武通寶で初鑄造年は1368年で重さ2.2g、直径2.2cmである。
- 連雨下駄



第3-15图 SD118 出土遺物実測図 (1/3)



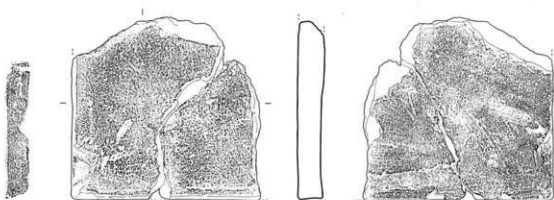
第3-16圖 SD118 出土遺物実測圖 (1/3)



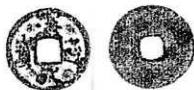
27



28



29



30



第3-17図 SD118 出土遺物実測図 (1/3) ※30のみ1/1

2. 土坑

SK101 (第3-18図)

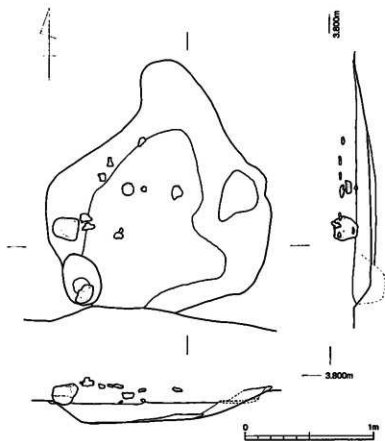
廃棄土坑

長径2m、短径1.8mの不定形プランを呈す。深さは0.15mほどで浅く、上部はかなり削平を受けているものと思われる。出土量は少ないが、遺物と礫が混ざって出土している状況を見ると、廃棄土坑であったのではないかとと思われる。遺構の時期は、出土する在地系の土師質土器が坂本編年で15世紀後葉～16世紀前葉に位置づけられるため、その頃に比定できる。しかし、この土坑のすぐ北側を東西に延びるSD117では、SK101で出土する土師質土器と同形態のものが大量に出土している。SD117の項でも触れたように、SD117は2期の京都系土師器が共存しているため、16世紀後葉に位置づけられ、この形態の土師質土器はその段階まで残るとした。したがって本遺構も16世紀後葉まで含めて、時期設定しておくのが無難であろう。

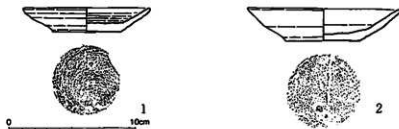
出土遺物 (第3-19図)

内外面ロクロ目

1・2は在地系の土師質土器皿で、底部から口縁部に向けて直線的に開くように立ち上がる。内外面にはロクロ目を顕著に残し、底部には糸切り痕が残る。坂本編年で15世紀末葉～16世紀初頭に位置づけられる資料である。



第3-18図 SK101 遺構図 (1/30)



第3-19図 SK101 出土遺物実測図 (1/3)

SK102 (第3-21図)

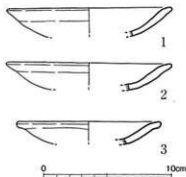
長径約1.0m、短径0.8mの楕円プランを呈す。西側は一部現代の建物の基礎のために削平されている。深さは0.7mほどあり、平面プランの規模にしては深い。遺物の出土量も希薄で、どういふ性格の土坑なのか認定しがたい。土坑の時期は、時期が認定できる出土遺物が、2期の京都系土師器のみであり、よって16世紀後葉頃に位置づけておく。

出土遺物 (第3-20図)

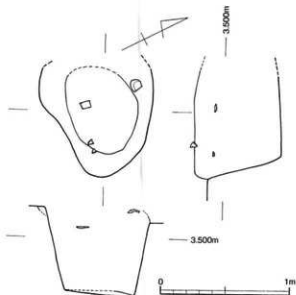
1~3とも京都系土師器である。

口縁部下のナデが強くなっており、2期の特徴を示している。

京都系土師器
2期



第3-20図 SK102 出土遺物実測図 (1/3)



第3-21図 SK102 遺構図 (1/30)

SK103 (第3-23図)

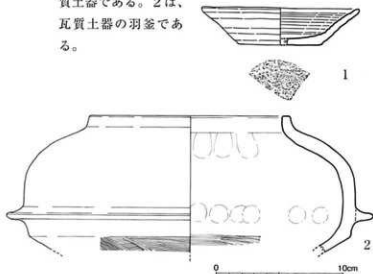
長径約0.8m、短径0.6mの楕円プランを呈す。深さは0.17mほどで上部は削平されているかもしれない。遺物の出土量も希薄であるが、恐らく廃棄土坑であろう。なお土坑の時期については、出土した羽釜の破片がSK104、SD116・SD117・SD118で出土した破片と接合した。SK104、SD116・SD117・SD118はすべて16世紀後葉に位置づけられていることから、SK103もその時期に比定される。

廃棄土坑

出土遺物 (第3-22図)

1は底部から口縁部に向けて直線的に外に開き、内外面にロクロ目を顕著に残す在地土師質土器である。2は、瓦質土器の羽釜である。

内外面ロクロ目



第3-22図 SK103 出土遺物実測図 (1/3)



第3-23図 SK103 遺構図 (1/30)

SK104 (第3 - 24 図)



第3-24図 SK104遺構図(1/60)

SK104 (第3-24図)

10-A・10-Z・11-A・11-Z区にわたって位置する土坑で、長径9.1m、短径2.6mの規模を有す。西側部分(図中では上方)が楕円形状、東側部分(図中では下方)は方形に近い形を有す。したがって二つの別の土坑が切り合っているという見方もあるが、出土遺物に明らかに時期差を示すようなものは見られない。仮に二つの別の土坑が切り合っていたとしても、さほど時間差をおかず両者は形成されているものと考えられる。土坑の深さは深いところでも0.3mほどで、出土する遺物の量から見ると、浅いように見受けられる。上方が削平を受けている可能性もある。

大量の礫と遺物

土坑内からは大量の礫と遺物が出土しており、明らかに廃棄行為に伴う土坑である。しかし、通常廃棄土坑としているものは、これほどまでに掘削が大きくなく、廃棄行為に伴い炭の層が堆積していたりすることが多い。そこで本土坑については、通常の廃棄土坑とは異なった性格を考慮に入れておかねばならない。

土取遺構

まず、このように広い範囲で土坑が重なって掘られていた例としては、第2南北街路に面した、府内古園でいうと「御内町」と称される町屋あたりで検出されている。この土坑は土取の遺構かもしれないと捉えられている¹⁾。もう一つの例としては、第51・52次調査区で検出された連続する土坑群がある。これらの土坑群は、第2南北街路の直下で検出された。いずれも街路構築直前に掘られ、ただちに埋め戻されていた。ただ土坑の深さはいずれも比較的深い。

第2南北街路

SK104がいずれの例に近いかという点であるが、まず土坑の広がりや深さから見ると、前者の土取遺構のそれに近い。しかし土取遺構内の場合、中から遺物が出るものさほど量が多くない。これに対しSK104は中からかなり多くの遺物や礫が出土しており、土坑の深さを考えると、遺物の包含密度はかなり高いといえる。さらに、このSK104が検出された周囲には、同時期の遺構が溝SD116・117・118以外にほとんどなく、当時空閑地であった可能性がある。こうした空閑地に土坑が掘られたというロケーションは、第2南北街路直下で検出された土坑群のそれに近い。第2南北街路直下の土坑群では、比較的遺物の出土も豊富で、遺物の時期もSK104に近い。よって、本土坑SK104は、当時溝SD116～118が機能していた期間のいずれかの時期に、それらの溝と、恐らく本調査区の南に展開していたであろう生活空間との間に生じた空閑地に掘られ、そう長くはない時間で埋め戻されたものであろうと解される。

空閑地

出土遺物 (第3-25・26図)

ラマ式甕弁

1は景徳鎮窯系青花の甕で、外面に唐草文が描かれる。ラマ式甕弁を描いたSD111(第3-5図の1)・包含層(8-A区・10-A区 第3-42図の2・3)出土遺物と同一個体と思われる。

つば皿

2は景徳鎮窯系青花の皿で、口縁部が折れてつばがつくいわゆるつば皿で、小野編年のF群である。3は中国産白磁の碗で、口縁部が端反り16世紀代の特徴を示している。4・5は龍泉窯系青磁の碗である。6～8は甕前系陶器で6は壺、7・8は描鉢である。7は口縁部が発達し、口縁端部のナデも強い。口縁外面の凹線も多條化する。8は内面にナメスリメが施される。7・8いずれも近世1期に位置づけられる。

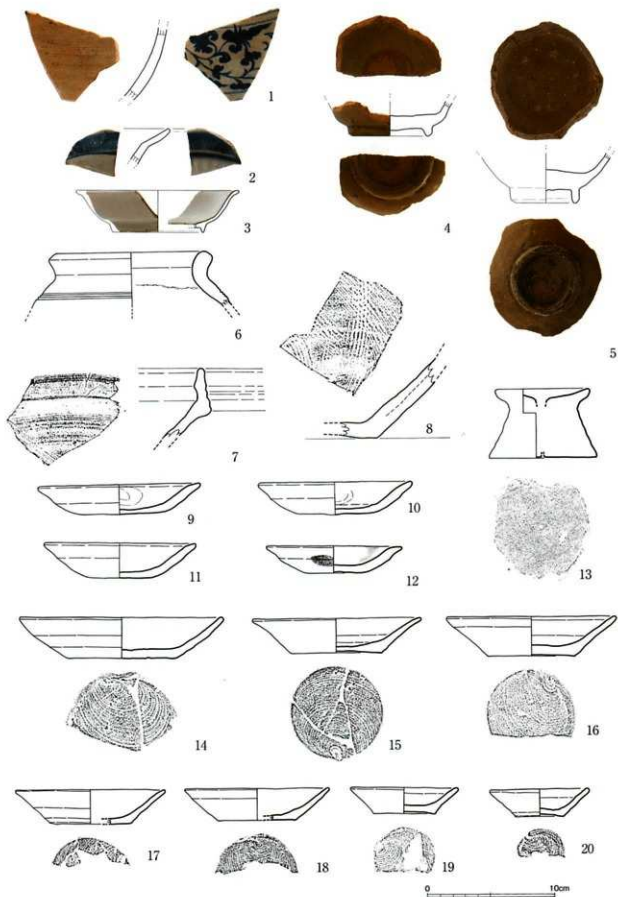
ナメスリメ

9～12は京都系土師器皿で、口縁部下のナデが強く2期に位置づけられる。13は土師質土器の燗台である。底面まで穿孔が見られる。14～22は在地系土師質土器の皿で、底部から口縁部に向けて直線的に開く。内面にクロク目を残すものがみられる。23は、六連式焼塩用製塩土器の口縁部である。24～26は瓦質土器で、24は埴の底部、25・26は香炉である。脚部に龍が象られている。

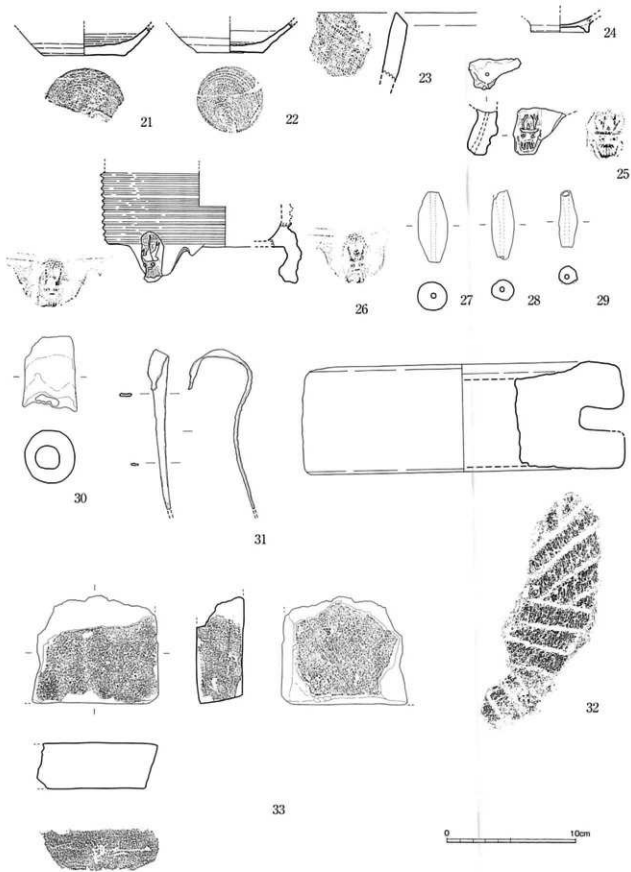
六連式焼塩用製塩土器

27～29は土鍾、30は輪の羽口である。31は青銅製の筭、32は石臼の上臼である。33は埴である。

註1 「豊後府内2 中世大友府内町跡第9次・第13次・第21次調査区」(一般国道10号古国府広幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)大分県教育庁埋蔵文化財センター)2005年



第3-25図 SK104出土遺物実測図(1/3)



第3-26图 SK104 出土遺物実測図 (1/3)

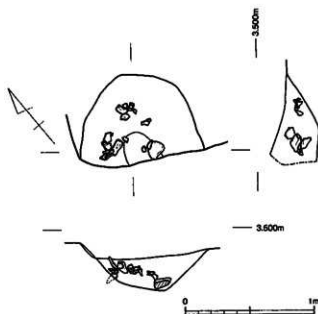
SK115 (第3-27図)

8-A区、現代の建物の基礎(基礎4)内の南側に位置する。確認できている範囲で長径1.0m、短径0.7mだが、実際は南にまだ広がると考えられる。深さは0.6mほどである。土坑内からは礫に混ざって遺物がかかり出土しており、また炭の堆積も見られるため廃棄土坑と考えられる。

廃棄土坑

なお本土坑はSD113と切り合っているが、南側の土層観察から、SK115がSD113を切っていることが確認されている。SK115からは2期の京都系土師器が出土しているので、16世紀後葉に位置づけられ、SD113で出土する遺物と時期的な前後関係は矛盾しない。

16世紀後葉

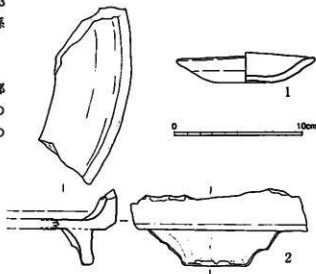


第3-27図 SK115遺構図(1/30)

出土遺物(第3-28図)

1は京都系土師器である。口縁部下のナアが強くなっており、2期の特徴を示している。2は瓦質土器の火鉢である。

火鉢



第3-28図 SK115出土遺物実測図(1/3)

SK120・121(第3-29図)

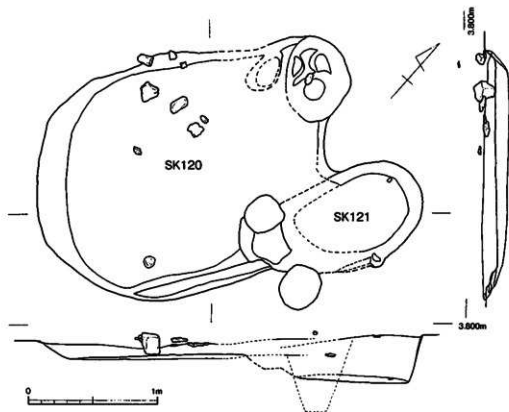
7-A区に位置する土坑で、2基の土坑が切り合っている。南側の大きい方で隅丸方形プランを呈する土坑がSK120で、長径2.4m、短径1.9mの規模を有す。深さは0.12mほどで浅い。一方北側の小さい方の土坑がSK121で、長径1.4m、短径0.8mの楕円形の楕形を呈す。深さは0.38mとSK120よりも深い。ちょうど両者が接するあたりを溝SD112が通過して切っており、両土坑の切り合い関係は現地では検出不能であった。また両土坑から出土する遺物も希薄で、遺物からも両土坑の前後関係を認定するのは難しい。さらに両土坑を切って通過しているSD112も遺物の出土が無く、それからも時期の推測は不可能であるが、SK120からは備前系陶器摺鉢と在地系土師質土器が出土しており、その形態から15世紀末葉から16世紀初頭頃の位置づけが可能である。SK121もさほど時期を違えないものと思われる。

15世紀末葉～
16世紀初頭

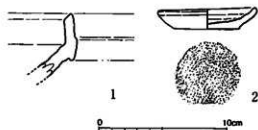
出土遺物(第3-30図・第3-31図)

第3-30図の1は備前系陶器摺鉢で、口縁の形態から中世6期に比定される。2は在地系土師質土器の小皿で内面にロクロ目を有し、15世紀末葉～16世紀初頭に位置づけられる。

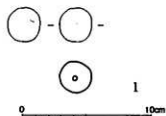
内面ロクロ目



第3-29図 SK120・SK121 遺構図 (1/30)



第3-30図 SK120 出土遺物実測図 (1/3)



第3-31図 SK121 出土遺物実測図 (1/3)

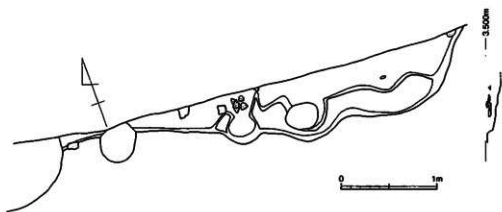
SK125 (第3-32図)

16世紀後葉

7-B区に位置する土坑で確認できている範囲で長径4.4m、短径0.7mの規模を有すが、実際はさらに北に展開する。深さも確認できているところで0.24mほどである。掘形は段を有して下がっていき、数基の土坑が切り合っているのかもしれない。出土する遺物から、16世紀後葉に位置付けられよう。

出土遺物 (第3-33図)

1・2ともに京都系土師器の皿ですが、2は口縁部下のナデが強くなってきており、塚地層年の2期に近い。



第3-32図 SK125遺構図 (1/40)



第3-33図 SK125出土遺物実測図 (1/3)

3. 掘立柱建物

SP001・SP002・SP003 (第3-34図・第3-35図)

礎が充填

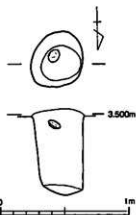
SP001は8-B区に位置し、径0.53m、深さ0.36m、中には礎が充填されている。SP002は8-A区に位置し、径は0.52m、深さ0.17mでやはり礎が充填されていた。両者の間は約1.5mで、礎の充填されている状況や径がほぼ同じ点などから、対になるものと思われる。遺物が出土していないため時期は不明だが、SD116～118のすぐ縁辺に位置し、軸も平行していることから、何らかの関係があるものと思われる。

SP003は11-Z区に位置し、径0.44m、深さ0.63mで、出土する遺物から15世紀末葉～16世紀初頭に位置づけられる。

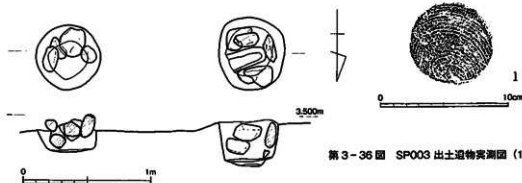
出土遺物 (第3-36図)

在地系土師質土器

1は底部から口縁に向けて直線的に開く在地系土師質土器皿である。



第3-35図 SP003遺構図 (1/30)



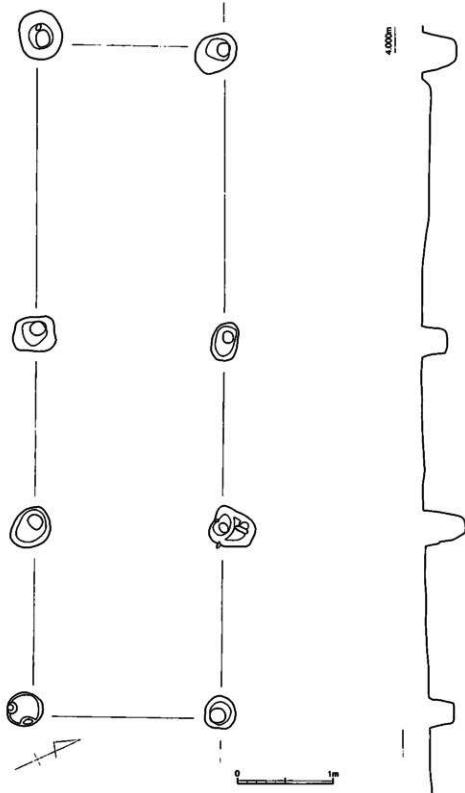
第3-34図 SP001・SP002遺構図 (1/30)

第3-36図 SP003出土遺物実測図 (1/3)

SB001 (第3-37区)

6尺5寸

7-A区に位置する掘立柱建物である。図示しているのは1間×3間であるが、実際は南にまだ展開していると思われる。各ピットからは柱痕も確認され、それらの間を計測すると、短いところで約1.97m、長いところで約3mある。これは間尺になおすと、短い所で6尺5寸にあたる。また長いところはそのちょうど1.5倍にあたる。建物の軸は、W-30°-Eの方位を示し、SD111・SD116~118や第10次調査Ⅰ区で検出された16世紀後葉の町屋の区画に平行する。



第3-37図 SB001 実測図 (1/40)

4. 井戸

SE126 (第3-38~40図)

方形

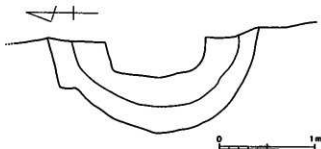
11-A・Z区に位置する井戸である。東半分は現在道路となっているため、完掘はできなかった。確認できている範囲で井戸掘形の直径は約2.2mほどである。井側は方形に縦板を組む。縦板の四隅には柱を立て、納穴を設けて横棧を組んでいる。そして底で取水もしくは浄水のために設けられる井筒には曲物が使用されている。草戸千軒町遺跡で分類された「縦板組隅柱横棧型」に相当する²¹。草戸千軒町遺跡ではこのタイプは13世紀中葉～14世紀初頭に多いとし、中世大友府内町跡でも14世紀代によく見られる。出土遺物が希少であるが、13世紀末～14世紀初頭頃の龍泉窯系青磁碗が出土しており、該期に比定できよう。

縦板組隅柱横棧型

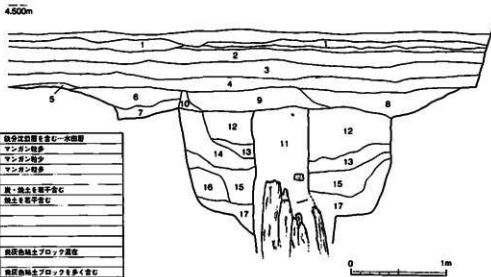
なお井側の規模は、約1mの正方形で、曲物は2つサイズの異なるものが重なって出土した。出土遺物(第3-41図)

掘削弁文

1は龍泉窯系青磁碗で、胴部に掘削弁文が描かれる。



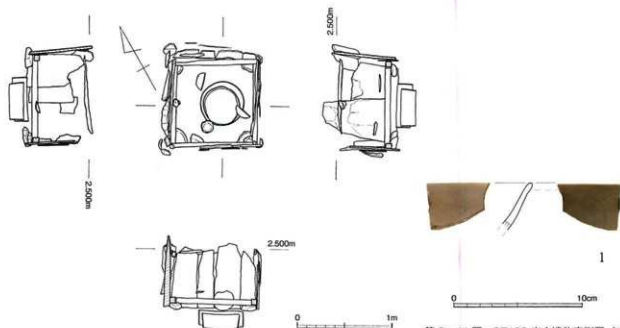
第3-38図 SE126 遺構図 (1/40)



1層	深褐色細粒質土	後中世前期を占む一次地層
2層	灰褐色細粒質土	マンガン屑多
3層	灰褐色細粒質土	マンガン屑多
4層	灰褐色細粒質土	マンガン屑多
5層	灰褐色細粒質土	
6層	灰褐色細粒質土	炭・焼土を若干含む
7層	灰褐色細粒質土	焼土を若干含む
8層	灰褐色細粒質土	
9層	灰褐色細粒質土	
10層	灰褐色砂質土	
11層	灰褐色砂質土	
12層	灰褐色砂質土	黄褐色粘土ブロック混在
13層	灰褐色砂質土	黄褐色粘土ブロックを多く含む
14層	灰褐色砂質土	黄褐色粘土ブロックを多く含む
15層	灰褐色砂質土	
16層	灰褐色砂質土	
17層	灰褐色砂質土	黄褐色粘土ブロックを多く含む

第3-39図 SE126 土層図 (1/40)

註1 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編「草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ 中世瀬戸内の集落遺跡」1996



第3-41図 SE126 出土遺物実測図 (1/30)

第3-40図 SE126 井筒実測図 (1/40)

包含層 (第3-42・43図)

1は景德鎮窯系青花の碗である。見込み部分が緩やかに盛り上がるいわゆる微頭心である。文様は見込み分に2重界線が巡り、その中に瑞果が描かれる。高台内には「福」の字款が描かれる。小野福年のE群にあたる。2・3は景德鎮窯系青花の壺で、表面にラマ式蓮弁が描かれる。SD111(第3-5図の1)・SK104(第3-25図の1)と同一個体と思われる。4は龍泉窯系青磁の碗で、胴部には蓮弁が描かれる。蓮弁の幅は狭くなっている。5・6は中国産白磁の皿で、5は口縁部が端反り、16世紀に位置づけられる。7は中国産陶器の壺の底部で、被熱している。8は中国産翡翠軸の皿である。9は中国産の陶器と思われる。渦巻状の施文がされ軸がかけられている。10は肥前系陶器の瓶の底部で、11は産地不明陶器の碗である。

12・13は京都系土師器の皿で、2期のものと思われる。14は薄手の灰白色を呈する土師質土器で在地のものとは異なる。口縁部に穿孔が1箇所見られる。15～17は在地系土師質土器の小皿である。17は口唇部にススが付着し、灯明皿として使用されたと思われる。15は14世紀代、16は15世紀末葉～16世紀初葉、17は15世紀代か。18～20は土師質土器で焼塩壺の蓋と思われる。21は瓦質土器の香炉である。口縁部下に文様帯が巡り、花文が配される。22は瓦質土器であるが、器形は不明である。底部周辺に雷文のような文様が連続して配され、その上に双頭飛手流雲文が三角形に配される。他に例をみない特殊な文様構成で、陶磁器の模倣形態かもしれない。

23～44は土錘で、大きく長さ6～7cm、幅2cm前後の一群と、長さ5cm前後、幅1.5cm前後の一群とに分かれる。45は土製の輪の羽口である。46・47は青銅製品である。46は竿秤の錘である。釣鐘形をしており、上部には竿につるすための穿孔がある。鉛同位対比分析の結果華南産の鉛が使用されていることが判明した。詳細は第5章第2節の分析の項を参照されたい。47は用途不明製品であるが、何かの把手であろうか。48～50は砥石、49は石臼の上臼、50は姫烏産黒曜石の石核である。53～55は六連式焼塩用製塩土器、56は古代の土師器である。57は古墳時代中期の甕、58は古墳時代前期の高坏である。59は大観通寶である。

ラマ式蓮弁

肥前系陶器

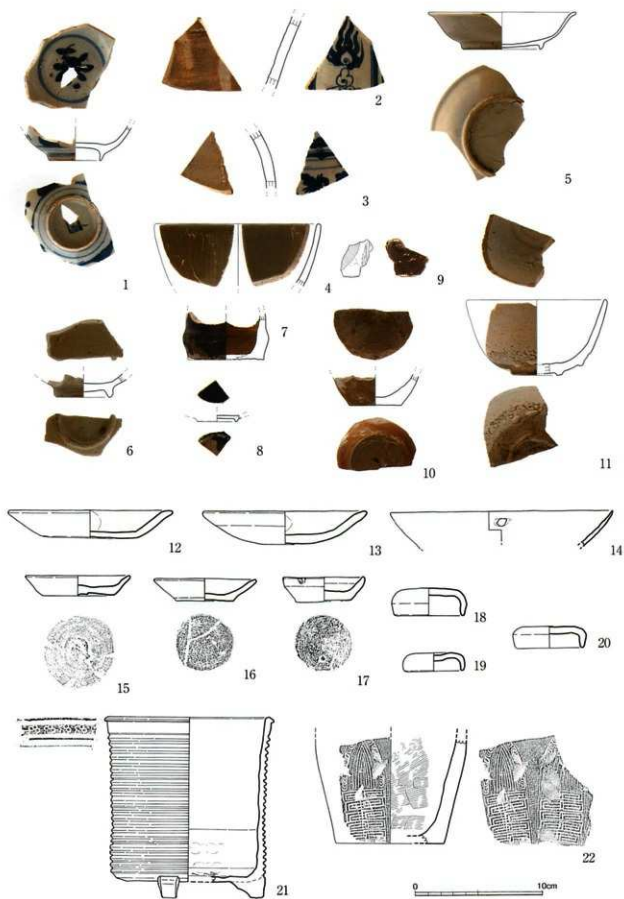
香炉

双頭飛手流雲文

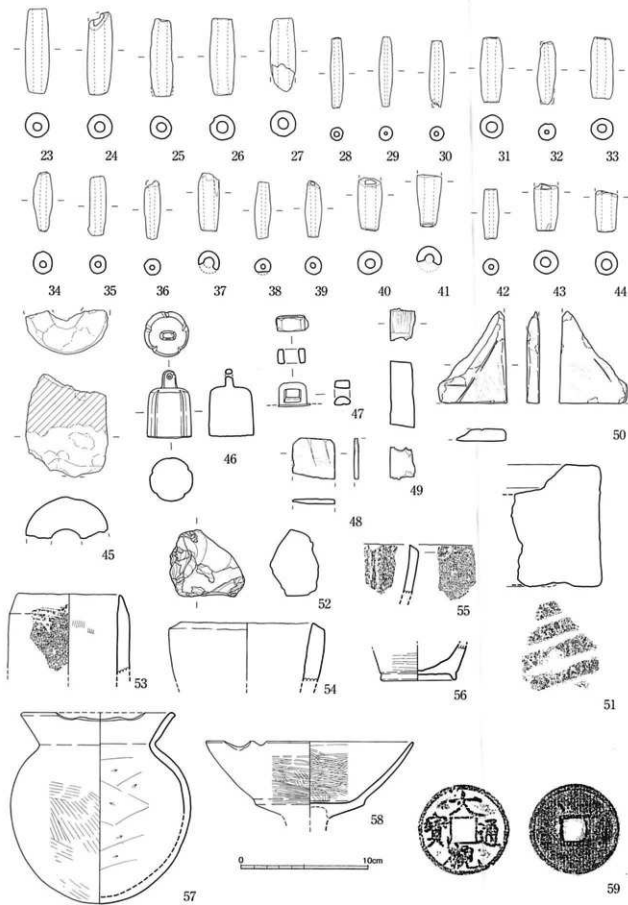
竿秤の錘

華南産の鉛

六連式焼塩用製塩土器



第3-42図 包含層出土遺物実測図 (1/3)



第3-43図 包含層 出土遺物実測図 (1/3) ※59のみ1/1

第3節 小結

以上各遺構から得られた所見を統合し、第10次Ⅱ区南調査区における景観の変遷について、整理をしておきたい。(第3-44図参照)

[古代]

製塩土器

7-A・B区・8-A・B区で古代の包含層が検出されている。しかし該期の遺構は検出されておらず、古代にどういった景観をなしていたかは不明である。ただ製塩土器が多数出土しており、本調査区の西側に位置する上野町遺跡からは、多数の土鍾が出土しているなど、海岸部における集落の特徴を表している。

[14世紀]

方形縦板組
隅柱横浅型

中世において遺構が確認できるのは、14世紀段階が初現である。代表的な遺構としては、井戸SE126がある。方形縦板組隅柱横浅型のしっかりした井戸であるが、本調査区において、14世紀代と特定できる遺構はこれのみである。西側に隣接する第10次Ⅰ区調査区でも14世紀に位置づけられるのは土坑1基しかなく、この時期の具体的な景観は復元できない。ところでこのあと詳述するが、SE126が位置する周囲は、15世紀後半以降は空地となっている場所である。したがって、15世紀代以降とは全く異なった空間認識が14世紀代にあったことが判る。

[15世紀後半～16世紀初頭]

在地系土師
質土器

この時期の遺構は、主に底部から口縁部に向けて直線的に開き、ロクロ目を顕著に残す在地系土師質土器皿を出土する遺構である。中世6期の備前系陶器播鉢や幅の狭まった選弁を有する備前系背磁等が共伴する。しかし、中には在地系土師質土器のみを出土する遺構もある(SK101・SP003等)。実はこの在地系土師質土器皿は、本調査区においてはSD116～SD118やSK104等で京都系土師器2期、近世1期の備前系陶器播鉢等と共伴し、この時期まで残ることが確認されている。したがって在地系土師質土器皿のみ出土している遺構については、16世紀後半まで下る可能性を考えておかなければならない。

北側は空地

さてこれらの遺構の位置関係であるが、検出遺構がさほど多くないので、景観の復元は難しいが、いずれも調査区南側に集中し、北側は空地になっている可能性がある。ただSD113のみは調査区を南北に延びており、北側まで展開する可能性があるが、調査区中央部分から北側はSD116～118によって切られており、さらに本調査区の北側に位置する第10次Ⅱ区北調査区においても検出されていない。したがって、この遺構もさほど北側へは展開せず、南側へ延びていくものと思われる。なおこの溝の方位はN-30°-Eと振っており、本調査区西側に隣接する第10次Ⅰ区調査区で検出された15世紀後半の溝の区画と平行する。

[16世紀後半～]

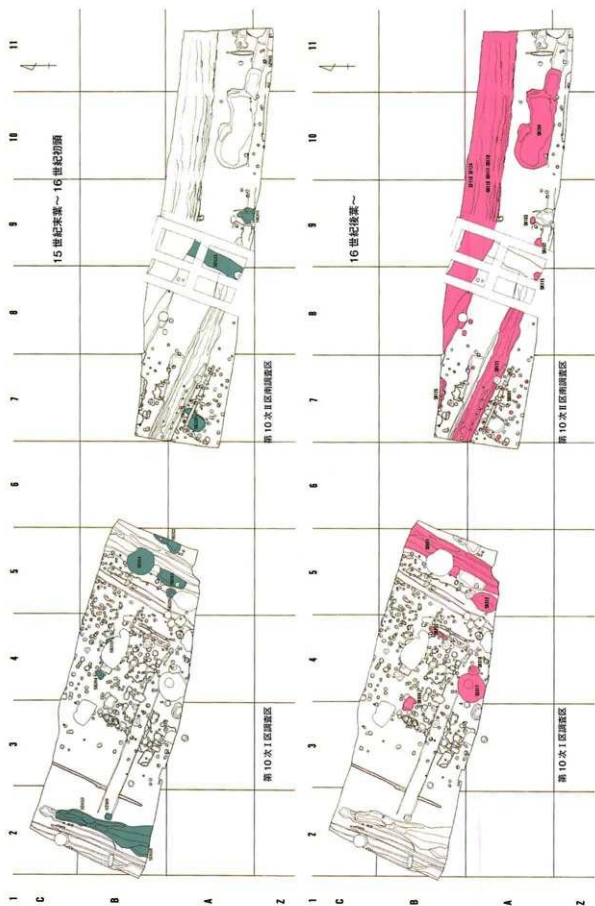
北側へカーブ

この時期の遺構でまず注目されるのは溝SD116～118の方位である。9-A区～11-A区までW-4°-Nほどで延びてきて、そこから西側へいくにしたがい急に北側へカーブし、約W-30°-Nの方位となる。もう一つの溝SD111もカーブした後の方位に平行して延びている。この溝の屈曲は、府内古園(C類)(第3-45図)からも窺われる。府内古園では溝の描写はなく、祐向寺とダイウス堂の間を通る道路が北側へ(絵園中では右側へ)カーブしていく様子が描かれている。本調査区ではこの溝は16世紀後半に掘られ、末葉までには埋まってしまっていることが判っている。そして、埋まった後はその上に方位を踏襲して道路が形成されている。最近の発掘調査成果から、府内古園は16世紀後半以降の府内の姿を描いたと考えられており、絵園はこの溝が埋まった後の道路の屈曲を描いたものと考えられる。

祐向寺と
ダイウス堂

16世紀後半
以降の府内の
姿

また、この屈曲した後の方位は、西側に隣接する第10次Ⅰ区調査区で検出された町屋の区画に直交する。本調査区では第3-44図の遺構分布変遷図をみると、ビットや土坑群が3-



第3-44図 第10次Ⅰ区・Ⅱ区南調査区遺構配置図(1/400)

町屋の裏手

B区～4-B区あたりに向け非常に密集しているのが判るが、その密集しているブロックは、東より角度を振って位置している。方位的には約N-30°-Eぐらいを指す。この第10次I区調査区では、確認された井戸や廃棄土坑はいずれもこのブロックの南側に集中しており、北側方向に向けて位置している町屋の裏手の状況を示しているものと思われる。

さらに目を転じて第10次II区南調査区の7-A区を見てみると、同じように東よりに角度を振って、掘立柱建物SB110が建っている^{註1}。この掘立柱建物は確認されているのが一部分であるため、正確な規模等は判らないが、恐らく南へまだ展開するものと思われる。また、西側の一間は柱間が1.5倍広いが、この建物が北を向いていたのか、西を向いていたのか判断し兼ねる。いずれにしてもこの建物部分がある区画の前面であることは違いないと思われる。

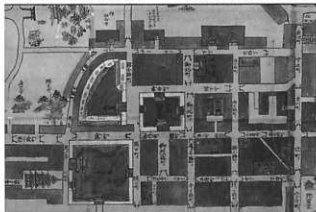
異なる区画

こうして見ると、第10次I区調査区の町屋の区画と、第10次II区南調査区の掘立柱建物の区画は同じ方向性をもって位置しているが、前面のラインはよく見ると東西方向で若干ずれていることが判る。これは第10次I区調査区の5-A区においては、南北に延びる溝SD001が存在しており、それを境にその東西は別の区画がなされていることによる。この異なる区画は、単に町屋の並びを区画しただけなのか、あるいは性格の異なる施設が存在する故の区画なのかは、現時点では即答できない。ただ、第10次II区南調査区においては、SD116～SD118やSK104から、まとまった量で京都系土師器皿や在地系土師質土師器皿が出土しており、中世大友府内町跡で一般的にみられる町屋の遺物出土状況とは異なる点は考慮する必要がある。これが、府内古園に描かれる「祐向寺」に関係するものなのか、近くに武家屋敷的性格のものがあったことによるものなのか、今後さらなる検証を要する。

遺構の空地
地
道路

なお、この区画の前面では興味深い状況が認められる。第10次I区調査区の町屋の前面は調査区外なので不明だが、第10次II区南調査区の掘立柱建物の区画のラインの前面は、それから東の8～11区に目を転じていくと、ずっと遺構の空地に成っていることが判る。これは、この区画がSD116～SD118と併存していれば、当然必要な空地である。この空地が一定期間存在していれば、ここが道路であった可能性も出てくるが、現時点で道路はさらに北に検出されており、本調査区内では、その痕跡は確認できていない。ただ、空地に存在する巨大な土坑SK104などは、例えば第51次調査区等で道路の下から連続して土坑が検出されるなどの例もあることから、中世大友府内町跡で見られる空地利用の一つの例として注目される。

巨大な土坑



第3-45図 府内古園 C類

註1 この掘立柱建物SB001からは遺物の出土がないため、それからの時期の認定はできないが、この掘立柱建物SB001は15世紀末葉～16世紀初頭の土坑SK120・SK121を切って存在している点や柱間が6尺5寸である点などから、16世紀後葉の可能性が高い。

第4章 中世大友府内町跡第10次Ⅱ区北調査区

第1節 調査の方法 (第4-1・2図)

現在の地籍の区割りにもとづいて、東から順に東区、北1区、北2区、西区、南1区、南2区の6区に分ける

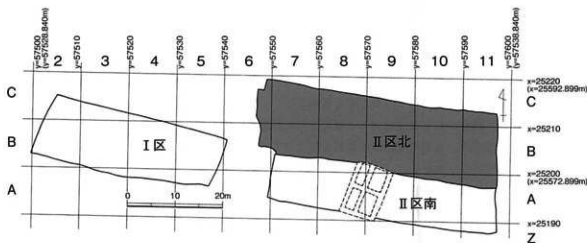
6区に分ける

座標

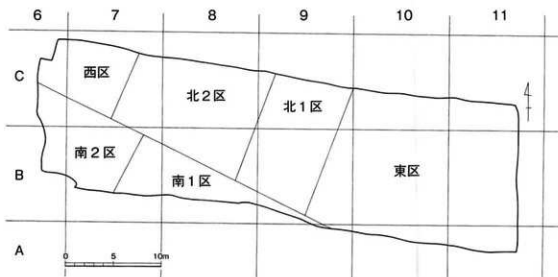
測量および実測においては、旧国土座標に基づいた正方位の10m方眼を組んで使用した。南北にアルファベットを用い、東西には算用数字を用いた。

記録方法

測量は光波トランシットを用いて、原則として20分の1、遺構の状況に応じて10分の1図を作成した。墓地および人骨については必要に応じて5分の1図を作成した。また調査区全体の断面土層図を10分の1で作成した。写真は35ミリ白黒とカラーリバーサルボジを基本に、必要に応じて6×9中型カメラを使用し、メモとしてデジタルカメラを使用した。



第4-1図 10次調査区の調査位置図 (1/800)
()内は、世界測地系



第4-2図 調査区の分割 (1/400)

第2節 基本層序 (第4-3図、付図8)

以下に基本層序を上から下にむかって説明する。

現代の客土

客土: 水田を埋めて宅地を造成した際の整地層である。1948年の米軍撮影の空中写真では、この場所はまだ水田であるので、その後のものである。

水田耕

最終水田耕作土: 暗灰色土。宅地化される直前の水田の耕作土である。下部に赤く硬化した水田床土の面が広がる。

近世前期

第1層: マンガン沈着のはげしい明茶色土。細かく見ると更に多数の水田床面を観察できる。近世から近代に水田層である。

第2層: マンガン沈着のある暗茶褐色土。調査区全体にひろがる整地層である。彫三鳥碗、絵唐津皿、京都系土師器4期の皿など17世紀前半の遺物を最新のものとする。おそらく17世紀=近世前期の整地層と推定される。この層の上面および掘下げ途中で発見された遺構はすべて近世の遺構であった。この層の上面は水平でマンガンの沈着が激しく、水田の床面であったことを示す。下部の基盤層との境界は不整合面をなしているので、整地前に一度東側を削り西側をかさ上げする削平が行われていると考えられる。

整地

細かく見ると3ないし4層にさらに細分可能である。その最下層に当たる2c層に彫三鳥碗、絵唐津皿、京都系土師器4期皿の破片が広く分布しており、造成の時期も17世紀初頭にさかのぼる可能性がある。

地山

基盤Ⅲ層: 黄色粘土層。基本的には無遺物層であるが、場所によっては古代以前の遺物が含まれる。

基盤Ⅳ層: 黄色砂層。無遺物層。

基盤Ⅲ・Ⅳ層は中世大友府内町跡が立地する微高地を形成する。遺跡にとっては地山となっている。10次調査区の位置する辺りはその微高地の西縁に当たるため、基盤層は西に低く東に高く堆積している。そのため調査区西半では第2層が厚く、東側では第2層を除去するとすぐに、基盤Ⅲ層がさらに基盤Ⅳ層が露出する状況である。

第3節 遺構の概要 (第4-1表、第4-2表、付図4)

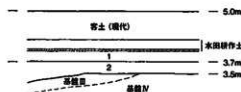
2001年調査

北2区の北部は前年2001年度のⅡ区南調査時に一部先行して調査している。S130~140までがその際検出された遺構である。その際の土層所見より、第2層の存在とその下で戦国時代の遺構が検出されることが判明していたので、調査はまず重機によって客土と最終水田耕作土と第1層土を除去し、第2層上面で最初の遺構検出作業をおこなった。その場で視乱を識別し、まず攪乱土坑の滑掃を行い断面観察をおこなって、第2層以下の遺構の深さを観察した。同時に調査区内に抜き取ることが不可能な建物基礎のコンクリート杭が多数残っていた。このためこの杭が残る調査区東半は第1層から人力で掘下げた。第2層上の遺物は少なく近世から近代の水田耕作に関わる遺構のみで、現在の宅地の境界や地絡図の地割りの境界と一致する溝や石列であった。

2層上面

2層除去後

その後第2層をすべて人力で掘下げたが、その途中で遺構を発見することはまれで、第2層そのものは長期間の堆積というよりは一気に埋められた整地層と考えられた。第2層を除去した面は、基盤層の自然層である。この面において奈良時代から戦国時代末までの遺構が約160基検出された(付図4)。それらの遺構を層位的に区分することは不可能であったので、遺構の切合関係を徹底的に検討した。それでも後の整理段階で訂正した切りあいが二三存在したが、ほぼ出土遺物の



第4-3図 層序概念図

第4-1表 10次Ⅱ区北調査区遺構一覧表

遺構	性格	時期	グリッド位置	位置	検出層位	構成遺構・層序	切欠関係	最新の出土遺物	残留遺物	備考	総数(Ⅱ)
1層	近世水田跡	17世紀後半～18世紀末	-	全面	-	-	-	近現代遺物	-	-	88
2層	整地層	16世紀末～17世紀前半	-	全面(東区を除く)	-	最下部に粘唐津・肥三島	-	-	-	-	88
SD116	溝	16世紀第4四半期前半	東西溝	南2区・南1区	-	上層は黄色土・ブロッサ。凝灰岩礫混在。	SD117を切り、SD108とSD190に切られる。	-	須恵器、土師器	-	166
SD117	溝	16世紀第4四半期前半	東西溝	南2区・南1区	-	凝灰岩礫多い。	SD118を切り、SD116に切られる。	京都系土師器2期	無し	人為的埋め戻し。	164
SD118	溝	16世紀第4四半期前半	東西溝	南2区・南1区	-	礫多く、最下部はグラウ化	SK302を切り、SD117に切られる。	人面石、	須恵器類	-	162
ST130	1号墓	16世紀第4四半期前半	C7区	北2区	-	木棺墓。仲辰葬。	SD165を切り、SD167に切られる。	鉄釘	-	木棺墓(長方形)	263
SD131	溝	16世紀第4四半期前半	C8・C9区	北1・北2区	-	単層：暗茶褐色土、凝灰岩礫混在。	SK252、SK256とSK269を切る。	京都系土師器3期	須恵器、土師器	区西溝	183
S133	→SK255										201
S134	集積遺構	16世紀第4四半期後半	C8区	北1・北2区	-	礫層	SK252を切る。	京都系土師器2期皿	-	-	228
ST135	2号墓	16世紀第4四半期前半	C7区	北2区	-	-	-	16世紀第2四半期の遺物	-	16世紀第2四半期の遺物の可能性あり	206
SK136	土坑	16世紀	C8・C9区	北2区	-	暗褐色土坑。	SD131と重複SK137に切られる。	備前焼	-	-	240
S137	→SK309										202
SD138	溝	17世紀初頭	C8区	北2区	-	礫多い。	SD131に切られる(調査時の所見)	唐津焼土師器	-	切りあいの所見は同溝いへ。	244
SK139	石列	近世中期	C7区	北2区	2層中出土	礫が西に向す。	SD145の下、SF151の上	-	-	石材に五輪等の部材を利用。	245
SD140	溝	16世紀第2四半期	C6・C7区	西区	-	-	SK247SK301とSK303を切る。	京都系土師器3期皿	無し	-	141
SD141	溝	16世紀第4四半期後半	B10・B11区	東区	2層直下検出	上面は道路面? 大量の凝灰岩礫混在。	SD165、SK251-SK302を切る。	礫多量・焼土・須恵器・五輪塔焼土	須恵器、土師器	-	219
SP142	ビッド	近世中期	B9区	北1区	2層上面	単層：暗黄褐色土(マンガン沈着あり)	2層を切る。	唐津焼陶器	-	ビッドの複合・土器からのしみで遺構でないかも。	247
SD143	水路痕跡	近現代	C9・B9・B10区	北1区・東区	2層上面	単層：マンガンの沈着	2層を切る。	-	-	土層からのしみ。近世水路の位置を反映。	251
SE144	井戸	16世紀第2四半期	C10・B10区	東区	2層1回目後	井筒は木製構。埋め戻し時の内部土坑あり。	SD197を切り、SK224に切られる。	赤褐色土師・ロクロ目土師 京都系土師器2期	-	瓶形円形。小型・武家屋敷にある。近現代せず。	143
SD145	水田痕跡	近世中期	C7・B7・B8・B9区	境界	1層下部	小溝が3回以上重複する。	SK146に切られる。	近世陶器(津波龍田跡)	-	この溝が近代の最盛地となる。	246
SK146	土坑	18世紀後半以後	C7区	境界	1層下部	単層：灰色砂層	SD145を切る。	唐津焼陶器	朝鮮王明産砂目陶器	方形箱型	246
SE147	井戸	1875年以後	C10区	東区	2層1回目後	井筒は木製構。埋め戻し時の内部土坑あり。	SK225に切られる。	肥三島焼片(瓶形内)	-	瓶形円形。井筒内に埋戻土。完結せず。	229
SE148	井戸	16世紀第4四半期	C9区	北1区	2層2回目後	方形石組井筒。最下部木製構	SK278とSP288を切る。SK264とSK296に切られる。	近世1期の備前焼土師器	無し	瓶形円形	192
ST149	6号墓	16世紀第4四半期前半	C8区	北2区	2層1回目後	黄鉄。釘で小口を止める。	ビッドとSK163、ST289(13号墓)、ST295(14号墓)を切る。ST274(12号墓)に切られる。	鉄釘	古代黑色土師	木棺墓(小児墓) 覆土中に京都系土師器片多し。	272
ST150	4号墓	16世紀第4四半期前半	C8区	北2区	2層1回目後検出	黄鉄。釘で小口を止める。	SK277とSD294を切る。	最上部に粘唐津、釘、京都系土師器2期	-	瓶形木棺墓(成人墓)	266
SF151	石敷き道路	16世紀第1四半期	C6・C7・B7・B8・B9・B11区	境界	2層除去後検出	1層(砂利層)を踏面にその下に2層(灰色砂層)を高築した1号期の道路面(1号期混在)が最も高く残存する。	SD-167・168に切られる。2層上で埋没	上層に京都系土師器初期小皿	-	-	99

遺構	性格	時期	グリッド 位置	位置	構造部位	構造遺構・層序	切合関係	最層の 出土遺物	埋没遺物	備考	縮尺
ST152	9号墓	16世紀 第4四半期前半	C8区	北2区	2層除去後、 基盤IV層上 面で見出。	方形土箱（埋葬東 向き北側位）	SI53とSD255を 切る。	銅貨	-	二階層構築 の可能性のこ る。	277
SI53	浅い溝	-	C7・C8区	北2区	2層除去後、 基盤IV層上 面で見出。	単層：2層土	ST257（12号墓）を 切り、ST152（9号墓） に切られる。	-	-	性格不明	-
ST154	5号墓	16世紀 第3四半期	C8区	北2区	2層除去後 残部	-	なし。	銅貨・角	-	水筒蓋（乳 児墓）20× 30cm	257
SP155	ピット	-	B8区	北2区	2層除去後 残部	単層：2層土	なし。	-	-	-	-
SK156	埋蔵土坑	16世紀 第3四半期前半	C8区	北2区	2層除去後 残部	単層：2層土	SK163とSD145を 切る。	動物骨片・銅 貨（元倉造瓦 1078）1枚・ 漆黒青瓦片	-	浅い陥伏、底 面凸凹	264
ST157	6号墓	16世紀 第3四半期	C8区	北2区	2層除去後 残部	水筒直脚	なし。	鉄削1点、 銅貨	古代銅器・土 師器	水筒蓋（陶児 墓）	258
ST158	7号墓	16世紀 -第3四半期	C8区	北2区	2層除去後 残部	水筒直脚	なし。	角と銅貨。	-	水筒蓋（陶児 墓）、北平銅り すま。	258
SP159	ピット	-	B10区	南1区	2層除去後 残部	単層：2層土	なし。	土器片あり。	-	浅い陥伏；柱 穴ではない	-
SP160	ピット	-	B10区	南1区	2層除去後 残部	単層：2層土	なし。	-	-	浅い陥伏；柱 穴ではない	-
SP161	ピット	-	B11区	南1区	2層除去後 残部	単層：2層土	なし。	-	-	浅い陥伏；柱 穴ではない	-
SP162	柱穴	-	B10区	南1区	2層除去後 残部	単層：2層土	SK237を切る。	-	-	-	-
SK163	埋蔵土坑	16世紀第2四半 期	C8区	北2区	2層除去後残 部	単層：2層土	ST149（8号墓）・ SK156に切られる。 SD - 165を切る？	土師1点定形 品、ロクロ目土 師器片、骨片	-	浅い不要部	149
SK164	溝状くぼみ	16世紀第3四半 期	C9区	北1区	2層除去後 残部	単層：2層土で、 小溝多い。	なし。	漆黒系 土師器2個	-	地形のくぼみ か、底面ここ ぼこ。	153
SD165	溝	15世紀後半～16 世紀第3四半期	東西溝	西1区・ 北2区	2層除去後残 部	矢筈による土留め が北側にあり、 3回の掘りなおし あり。	SK251とSK300を 切り、SK139の下、 SK163に切られる？、 SD168、SD259と SD292に切られる。	-	銅器	SI300を切る？、 漆黒系土師器 土師器の埋蔵あり。	167
SP166	柱穴	16世紀第1四半 期	B6区	南2区	2層除去後 地山上で残部	単層：2層土	なし。	ロクロ目土師 のみ。	なし	-	140
SD167	溝	16世紀第4四半 期後半	東西溝	西1区・ 北2区	2層除去後 残部	埋蔵中興あり	SD165・SF151と SD256、SD279を切 る。	キセル	古代銅器・土 師器	同向か切り あった最の最 上層の溝。	223
SD168	溝	16世紀第4四半 期後半	東西溝	南2区・ 南1区	2層除去後 残部	-	SD116の上、SF151 とS190を切る。	中国産磁器 青瓦瓦葺き	内院埋蔵、古 代銅器・土師 器	-	226
SP169	ピット	-	B10区	南1区	基盤IV層上	単層：2層土	-	瓦片	-	-	-
SP170	ピット	-	B11区	南1区	基盤IV層上	単層：2層土	なし。	土器片あり。	-	-	-
SP171	不要ピット	-	B11区	南1区	基盤IV層上	単層：2層土	-	-	-	-	-
SK172	不要土坑	-	B11区	南1区	基盤IV層上	単層：2層土	なし。	土器片あり。	-	底面凸凹、溝 溝が縦列。	-
SP173	柱穴	-	B11区	南1区	基盤IV層上	単層：2層土	なし。	-	-	-	-
SP174	ピット	-	B11区	南1区	基盤IV層上	単層：2層土	なし。	土器片あり。	-	-	-
SP175	柱穴	-	B11区	南1区	基盤IV層上	単層：2層土	なし。	土器片あり。	-	-	-
SD176	溝 （埋物品層）	16世紀第1四半 期以前	B11区	南1区	基盤IV層上	単層：2層土	SP195と重複。 ピットに切られる。	無し。	-	SD197と一連 の遺構。底部 に浅いピット が遺る。遺物の 埋蔵ありは埋 層の下層。	133
SK177	土坑	近世初期	B11区	南1区	基盤IV層上	-	SP179を切る。	キセルの火災	-	底面凸凹	245
SP178	柱穴	-	C11区	南1区	基盤IV層上	単層：2層土	SK203とSD204を 切る。	土器片あり。	-	-	-
SP179	小ピット	-	B11区	南1区	基盤IV層上	単層：2層土	SK177に切られる。	土師器片1	-	-	-
SK180	土坑	16世紀	C11区	南1区	基盤IV層上	単層：2層土	なし。	中国産陶器 土師器	-	底面凸凹	241
SP181	ピット	-	B11区	南1区	基盤IV層上	単層：2層土	なし。	土器片あり。	-	-	-
SK182	土坑	-	C11区	南1区	基盤IV層上	単層：2層土	-	-	-	-	-
SP183	ピット	15世紀	C11区	南1区	基盤IV層上	単層：2層土	なし。	赤切りの在地 形土師器底部。	-	2つのピット からなる。	131

遺構	性格	時期	グリッド 位置	位置	検出層位	構成・設備・形状	切欠関係	最新の 出土遺物	附属遺物	備考	図面頁
SP184	柱穴	16世紀 第2四半期以後	C11区	東区	基盤IV層上 検出。	単層・2層土。 なし。	なし。	京都系 土師器1期系	-	-	243
SP185	柱穴	-	C11区	東区	基盤IV層上 検出。	方形柱穴 なし。	なし。	-	-	-	-
SP186	平瓦ビット	-	C10区	東区	基盤IV層上 検出。	-	-	-	-	-	-
SP187	柱穴	-	C10区	東区	基盤IV層上 検出。	埋まり。	-	副製品1	-	-	-
SP188	柱穴	-	C10区	東区	基盤IV層上 検出。	-	-	-	-	-	-
SK189	長い土坑	16世紀 第1四半期	B6・ B7区	南区	基盤III層上 検出。	単層・2層土。人 頭穴の残存も みられる。	SK227を切り、 SK191とST192に 切られる。	ワタロ目土師 器。赤切り土師 器。	無し	底面に深い溝 あり。壺蓋土 坑として使用。	136
SK190	土坑？溝？	16世紀 第2四半期	B7区	南区	基盤IV層上 検出。	-	SD168とSK191に 切られる。SD168を 切るか？	京都系 土師器類	無し	-	150
SK191	土坑	16世紀 第2四半期	B6区	南区	2層除去後検 出。	単層：真っ黒い泥 炭より土坑溝。	SD189とSK190を 切り、ST192に切ら れる。	京都系土師器 類。副製品の 残存品。	六代土師器	-	150
ST192	溝？	16世紀 第2四半期	B7区	南区	-	-	SD189とSK191を 切る。	京都系 土師器1期	無し	水筒底の可能 性有り。	151
SK193	土坑	16世紀 第1四半期	B6区	南区	基盤III層上 検出。	3回の埋塞有り。	SK236とSK227を 切り、SK191と柱 穴に切られる。	丹。京都系 土師器	無し	壺蓋土坑。	139
SD194	溝	16世紀 第4四半期	B6区	南区	基盤III層上 検出。	単層・2層土。	SK193を切り、 SD168に切られる。	灰質赤土 師器	-	SD168にとり つく溝か。	239
SP195	柱穴	16世紀前半	B11区	東区	基盤IV層上 検出。	-	SD176と重現。	灰質赤 土師器	-	-	213
SP196	柱穴	-	B11区	東区	基盤IV層上 検出。	単層・2層土。	-	-	-	-	-
SD197	溝 (建物基礎)	16世紀 第1期半期以前	B10・B11 区	東区	基盤IV層上 検出。	単層・2層土。	SE144に切られる。	無し	-	溝 SD176と一 連の遺構。建 物の基礎ある いは埋の下部。	133
SK198	土坑	-	C11区	東区	基盤IV層上 検出。	やわらかい褐色 砂質と硬い暗色 土のラミナ状埋塞 も表面。	なし。	-	-	シ字型土坑。	-
SK199	2つの上 坑の重現 (A/B)	15世紀 後半 (B→A)	C11区	東区	基盤IV層上 検出。	段層	S301とSP213に切 られる。	白磁。赤切り 土師器のみ	-	土師器焼納。 型成遺構。	125
SP200	ビット	-	B10区	東区	基盤IV層上 検出。	-	なし。	-	-	-	-
S-201	小ビット	-	-	-	-	-	SK199を切る。	-	-	-	-
SP202	自然ビット	-	B11区	東区	基盤IV層上 検出。	単層・2層土。	-	-	土器片あり。	-	-
SK203	土坑	15世紀	C11区	東区	基盤IV層上 検出。	単層・2層土。	SP178とSD304に切 られ、P216とSP217 と重現。	赤切り土師 器のみ。	-	埋まりにつくら れた深い土坑。	127
SD204	溝	16世紀	C11区	東区	基盤IV層上 検出。	上下2層。上層は 黄色粘土層(基盤 III層土)。	SK203を切り、 SP178とビットに切 られる。	灰質赤土 師器	-	建物の基礎あ るいは埋の下部。	240
SP205	小ビット	-	C11区	東区	基盤IV層上 検出。	単層・2層土。	なし。	-	-	-	-
SK206	土坑？	15世紀	C10・ C11区	東区	基盤IV層上 検出。	単層・2層土。	SK207とSE234に切 られる。	無し。	-	底面内門。	124
SK207	土坑？	15世紀	C10・ C11区	東区	基盤IV層上 検出。	-	SK206を切り、 SE234に切られる。	無し。	-	底面内門。	124
SD208	溝(建物基 礎)	16世紀 第1四半期以前	B10・ B11区	東区	基盤IV層上 検出。	底面に深いビット が通る。一部に ぐり石。	SK212を切る。	無し。	-	建物の基礎あ るいは埋の下部。	133
SK209	土坑	-	B10区	東区	基盤IV層上 検出。	-	なし。	-	-	-	-
SE210	溝？	16世紀 第4四半期	B10区	東区	基盤IV層上 検出。	溝底は木製橋。底 には小溝で隔めて いる。埋塞には 埋と地山ブロック 多い。	SE141・SD168・SK205 ・SK206・SK272とSK202 を切る。	近賀1期の備 前焼瓦1口。	-	-	239
S-211	-	-	B10区	東区	基盤IV層上 検出。	-	-	-	-	-	-
SK212	土坑	15世紀	B11区	東区	基盤IV層上 検出。	砂と褐色土ブロッ クの混在。埋は少 ない。	SD208に切られる。	赤切り土師 器。京都系土師 器	-	-	128
SP213	ビット	16世紀 第4四半期	C11区	東区	-	-	SK199を切る。	赤土。3期	-	-	239

遺構	性格	時期	グリッド位置	位置	検出層位	構成遺構・層序	切合関係	最新の出土遺物	残置遺物	備考	視覚頁
SP214	ピット	16世紀 第4四半期	C11区	東区	—	—	なし。	備前焼窯(複合資料4)。	—	浅いピット。	239
SK215	土坑	16世紀 第4四半期後半	B9区	東区	2層除去後検出	単層:黒灰色軟質土(小礫混じり)。	SK203/SK207とSK279、SK290を切る。	京都系土師器2期前。	赤生土器	—	237
SP216	柱穴	—	C11区	東区	SK203の底面で検出。	単層:2層土	SK200と重復。	—	—	—	—
SP217	柱穴	—	C11区	東区	SK203の底面で検出。	単層:2層土、礫はいる。	SK200と重復。	—	—	—	—
S-218	不明	1587年以后	B11区	東区	基盤IV層上検出。	—	SK220を切る。	瀬三島赤土	—	—	234
S-219	—	—	B11区	東区	基盤IV層上検出。	—	SK220を切る。	—	—	—	—
SK220	土坑	16世紀	B11区	東区	基盤IV層上検出。	焼土、円礫小礫多い。	SK217とSK218に切られる。	銅鉄1枚	古代土師器	—	242
SP221	ピット	15世紀	C10区	東区	基盤IV層上検出。	—	なし。	赤切り土師のみ	無し	—	131
SP222	ピット	—	C10区	東区	基盤IV層上検出。	—	なし。	—	—	—	—
SP223	ピット	15世紀	C10区	東区	基盤IV層上検出。	—	SK245に切られる。	赤切り土師のみ	白磁碗	—	131
SK224	土坑	16世紀 第3四半期	C10・ D10区	東区	基盤IV層上検出。	—	SK144とSK245を切る。	定形土師器を上向きにおく。	—	埋納祭祀遺構。	155
SP225	ピット	—	C10区	東区	—	—	SK147を切る。	—	—	—	—
SK226	土坑2基	古代	D6区	南2区	2層除去後検出	底面に灰層堆積。土層は基盤III層土。	SK193に切られる。	古代土師器碎片のみ。	—	人為的埋め戻し。南側の土坑が北を切る。	97
SK227	土坑	16世紀 第1四半期	D6区	南2区	基盤III層上検出	上下3層に分かれ、土層は基盤III層粘土で埋め戻して密着している。下層には礫が集中。	SK189とSK193とピットに切られる。	ロクロ目土師のみ。	無し	南方向からの埋塞。人為的埋め戻し。	137
SK228 →SK232	土坑	16世紀 第3四半期	C9・C10区	北1区	2層除去後検出	単層:黄色土小ブロック混じりの暗黄褐色土(小円礫、1cm大の炭塊土)、人頭大の礫多い。	SK275とSK226を切り、SK228に切られる。	京都系土師器2期前的大型片集中。	縄文晩期深鉢	後世の土坑の遺復	156
SK229	土坑(方形)	16世紀第4四半期前半	B9区	北1区	2層除去後検出	単層:2層土。大型礫散在。	SK230を切り、SK165、SK228とSK232に切られる。	京都系土師器2期前	瓦器類、製瓦土器	現場土坑。3つの土坑の切りあらい	207
SD230	溝	16世紀 第4四半期前半	D9区	北1区	2層除去後検出	暗黄褐色細砂質土(1cm大の黄色土ブロック、炭塊土多く含む)。	SK284を切り、SK229とSK233に切られる。	京都系土師器3期前	無し	SK261からの排水溝か	186
SK231	超大型方形土坑	16世紀 第4四半期後半	D9・10区	東区	2層除去後検出	礫集中。炭灰岩と磁器片が多い。	SK261/SK262とSK263、SK291を切り、SK241に切られる。	中国景德鎮黒青系花籃F群磁三碗類	古代の瓦器類	—	233
SK232	土坑	—	—	—	—	—	—	—	—	(=SK228)	156
SP233	不整ピット	16世紀 第4四半期	D9区	北1区	2層除去後検出	単層:2層土	SK284と重復。	京都系土師器3期前	無し	—	240
SE234	井戸	16世紀後半	C10区	東区	2層除去後検出	井筒は小型木製構。	SK235(=243)を切る。	掘削内:銅鉄2京都系土師器2期前、動物骨。	青磁皿	掘削に銅鉄的。小型物は武家屋敷に多い。湧水のため、完備できず。	154
SE235	井戸	16世紀 第2四半期	C10区	東区	2層除去後検出	表掘りか?内部土坑(=SK243)	SK206、SK207を切り、SK231に切られる。	ロクロ目土師、京都系土師器1期	無し	—	142
SK236	土坑(堅穴遺構)	16世紀 第4四半期前半	C9区	北1区	2層除去後検出	柱穴7本の方形型穴遺構。磁灰岩礫多い。	SK264とSK265、SK275を切り、SK252に切られる。	定形土師器が並ぶにおかれる。内部に灰が詰まる。	古代の製瓦土師	土器埋納的祭祀遺構。	199
SK237	長円形土坑	16世紀 第4四半期	B10区	東区	2層除去後検出	単層:暗黄褐色砂質土(1cm大の炭塊土含む)。	SK266を切り、SK162に切られる。	鉄釘。	—	—	239
SK238	土坑	16世紀 第2四半期	B10区	東区	2層除去後検出	薄い灰層が何回も広がる。	SK271を切り、SK279に切られる。	京都系土師器1期前	無し	何らかの穴を突いたあたり	145
SD239 (=SD245)	溝	16世紀 第1四半期	B10区	東区	2層除去後検出	単層:2層土	SK265に切られる。	赤切り土師器、備前焼。	無し	—	133
SP240	柱穴	16世紀 第2四半期以後	D10区	東区	2層除去後検出	—	SK266と重復。	京都系土師器1期前。	—	—	243

遺構	性格	時期	グリッド位置	位置	種別	構成・層序	切合関係	最終の出土遺物	残留遺物	備考	掲載頁
SP241	柱穴	-	B10区	東区	2層除去後検出	-	SK306と重複。	-	-	-	-
SP242	柱穴	-	B10区	東区	2層除去後検出	草層：2層土	-	-	-	-	-
SK243	土坑	16世紀第2四半期	C10区	東区	2層除去後検出	榎材出土。	SE234に切られる。	土師器ほか	-	SE235の内部土坑	146
SK244	土坑	-	C10区	東区	2層除去後検出	草層：2層土	ビッドに切られる。	-	-	-	-
SD245	溝 (-SD239)	16世紀第1四半期	C10-B10区	東区	2層除去後検出	草層：2層土	SP221/SP223を切り、SK234に切られる。	土師器燗台A1類	-	古代土師器	133
SK246	土坑	16世紀第2四半期以後	C7区	西区	2層除去後検出	-	SK247を切る。	-	-	古代黒磁器 古代土師器	242
SK247	超大型方形土坑	16世紀第1四半期	C7区	西区	2層除去後検出	-	SD145、SK246とSK268(3号墓)とSE1003に切られる。	ロクロ目土師器 磁器片、燗台破片、白磁	無し	一部を調査したのみ。	134
SP248	柱穴	-	C7区	西区	2層除去後検出	草層：2層土	-	-	-	-	-
SP249	ビッド	16世紀後半	B10区	東区	2層除去後検出	-	SK238を切る。	鉄器	-	-	243
SD250	溝(V字溝)	16世紀第4四半期前半	東西溝	中央	SD167の範囲で検出。	礎多い。最上層に粘土ブロック多い。	SD165を切り、SD167/SD270に切られる。	近世1期の備前焼製1期、土層から完全の京都系土師器2期分。	黒磁器ほか	埋没前に埋め戻し。	168
SK251 -SK302	大型土坑 (SK302を含む)	15世紀後半	B11区	東区	-	礎が散在。砂礫と粘土の互層=人為的な埋め戻し。	SD141とSD165、S280、S281、S282に切られる。	定形の本切り土師あり。	-	-	128
SK252 -S133	土坑	16世紀第4四半期前半	C9区	北1区	-	礎集中。礎土集中	SK236を切り、SD131、SK134、SK369に切られる。	中国産州系青花京師系土師器3期分 礎物が多い。	古代の黒磁器・土師器	併記遺構ほか。	201
SP253	小ビッド	-	C8区	北2区	基礎2層土検出。	草層：2層土	小溝を切る?	-	-	-	-
SP254	柱穴	-	C8区	北2区	-	-	SD255を切る。	-	-	->SP200	-
SD255	溝	15世紀	C7-C8区	北2区	-	明瓦間色土：小堀(礎が砕けたような粗い塊状土)を多く含む。	SD259、SD294を切り、ST149(8号墓)、ST152(9号墓)、SP254、ST257(11号墓)、ST271(12号墓)、ST286(13号墓)に切られる。	定形本切り土師器1枚上面で検出。 京都系土師器なし。	-	墓地以前の区画	118
SK256	土坑	15世紀後半	C8区	北2区	-	礎土ブロックと多量の礎を含む。	SD131、SD259、ST297(16号墓)とST299(17号墓)に切られる。	牛馬骨、礎土片、土師器	-	-	121
ST257	11号墓	16世紀第4四半期前半	C7区	北2区	基礎IV層上で検出	長方形、人骨、乳歯	SD255を切り、S153に切られる。	ガラス玉1点	-	始尾墓	279
SP258	ビッド	-	C8区	北2区	基礎IV層上で検出	草層：2層土と地山ブロックとの混層(C)。	-	-	-	-	-
SD259	溝	15世紀	C7-C8区	北2区	基礎IV層上で検出	-	SK256を切り、SE255とST260に切られる。	-	-	墓地以前の区画	118
ST260	10号墓	16世紀第4四半期前半	C8区	北2区	基礎IV層上で検出	長方形木箱。	SD259を切る。	無し。	-	東西方向、小児骨埋葬。	278
SK261	石皿土坑	16世紀第4四半期前半	B10区	東区	SK231の範囲で検出。	SD292と重複。大型礎で石皿。小礎光満。2層土。	SK291を切りSK231に切られる。	中国産州系青花	古代土師器	水面遺構ほか。	186
SK262	礎室土坑	16世紀第4四半期前半	B10区	東区	SK231の範囲で検出。	瓦葺光満。	SE291とSD292を切り、SK231に切られる。	近世1期の備前焼	-	片対じの内部土坑ほか。	209
SK263	土坑(長方形・集石)	16世紀第4四半期前半	B9区	東区	SK231の範囲で検出。	人頭大の礎光満。	SK279をきり、SK215とSK231に切られる。	中国産州系系青花	-	-	205
SK264	土坑	16世紀第4四半期前半	C9区	北1区	SE148掘り下げ中検出。	草層：2層土	SE148を切り、SK236に切られる。	中国製焼締陶器破片(検査資料18)	古代土師器	ほとんど遺物なし	199
SK265	土坑	16世紀第2四半期	B10区	東区	2層除去後検出	草層：2層土(茶褐色土)	SD239とSK266を切り、SE210、SK218、SK242、SE291、SD292に切られる。	京都系本切り土師器ほか(検査資料10)	-	-	146

遺構	性格	時期	グリッド 位置	位置	出土部位	構成遺構・層序	発出物類	最層の 出土遺物	後層遺物	備考	編組区
SK266	土坑	16世紀第1四半期	B10区	東区	2層除去後残存	底面に灰褐色土混じりの黒色土が検出。	SE210, SK237, SK265, SK272に切られる。	内面にロクロ目のある土師器。赤切り土師小皿。	古代磁器類、古代土師器	黒色土の上に土師器。惣形行島が行われたか。	135
SK267	土坑	16世紀第3四半期	C9・D9区	東区	2層除去後残存	単層：小砂利混じり層。	SK283を切り、SK215に切られる。	銅製1枚、京都系土師器	-	-	159
ST268	3号墓	16世紀第2四半期	C7区	西区	SK247掘り下げ中検出。	木桶か、所帯。	SK247を切る。	人骨、定形の赤切り土師器類3枚。	古代の埴土器	土師器は内向きの内側面。	255
SK269 (S137)	亀石上坑 基	16世紀第4四半期 前期半	C9区	北1区	SK135の下で検出。	2つの亀石土層が切り合う。ともに暗褐色土の厚切でほぼ平らである。	SK282を切り、SD131に切られる。	赤大の礎。	-	-	202
SD270	溝	16世紀第4四半期 前期半	東西溝	中央	-	-	SD250を切り、SD141とSD267に切られる。	京都系土師器3期類 透瓦1面の陶器類	古代の埴土器	a-g区に分けて調査。上記V字形、下部彫彫。	180
SK271	土坑	15世紀	B10区	東区	-	-	SK238とSK265に切られる。	-	-	-	-
SK272	土坑	16世紀第2四半期	B10区	東区	-	上下2層：1層＝暗褐色土(1cm大の砂、2～3cm大の塊土アロツク多い)。2層＝暗褐色土結實土(硬多い)。	SK266を切り、SE210に切られる。	埴、瓦、礎土	-	灰褐色土の墓中掘所あり。大穴埋戻土坑	147
SK273	土坑	16世紀第4四半期 前期半	D9区	東区	-	上部に塊土混じり硬質層。下の1層＝暗褐色土結實土(5mm大の塊土多い)。	SD230を切り、SK261を復元	瓦、礎土	-	礎土等検中。	206
ST274	1号墓	16世紀第4四半期 前期半	C8区	北2区	2層除去後残存	方形木椁、小児骨(赤土混じり、重なり)。	ST149 (8号墓)とSD255を切る。	足下に京都系土師器片。	古代土師器	-	280
S-275	土坑	15世紀?	C9区	北1区	2層除去後残存	単層：2層土(黄色塊土アロツク多い)。	SK236とSK282に切られる。	埴土器のみ	-	底面凸凹。自然遺構の可能性あり。	129
SK276	土坑	16世紀第2四半期	C9区	北1区	2層除去後残存	単層：2層土(黄色塊土アロツク多い)。	SK232に切られる。	京都系土師器1期類。	-	SK228の一部か?	151
SD277	溝	16世紀	C8区	北2区	2層除去後残存	単層：灰色結實土	ST150 (M4)に切られる。	瓦質土器片のみ。	-	断面円形の浅い溝。	106
SK278	土坑	16世紀 第3四半期	C9・10区	南区	-	上下2層：1層＝暗褐色土軟質土(マンガン含む)。2層＝暗褐色土結實土(5cm大の塊土含む)。その間に灰を含む黒色層あり。	SE148に切られる。	京都系土師器2期類用増埴。中国産陶器四耳甕。	-	-	156
SK279	亀石上坑	16世紀第4四半期 前期半	D9区	北1区	-	単層：2層土。礎礎層	SK283を切り、SK215とSK263に切られる。	瓦片多い。	磁器類	-	204
SP280	ピット	16世紀	B11区	東区	-	-	S251を切る。	赤切り土師	-	-	243
SP281	ピット	16世紀	B11区	東区	-	-	S251を切る。	土師器	-	-	243
SP282	ピット	16世紀	B11区	東区	-	-	S251を切る。	赤切り土師	-	-	243
SK283	土坑	-	B10区	東区	2層除去後残存	掘り下げるとSK265とSK286になる。	SK285とSK286を切る。	-	-	-	-
SD284	溝	16世紀第3四半期	C9・D9区	北1区	-	単層：暗褐色土と黄色砂砂との混層。	SP288を切り、SE148とSD230に切られる。	京都系土師器2期類	無し	-	153
SK285	土坑	16世紀第2四半期	D10区	東区	SK283の下で検出。	埋藏中。最下層に塊土混層。	SK286とSK287を切り、SK283に切られる。	遺物散在。京都系土師器1期類。ロクロ目土師	-	-	146
SK286	土坑	16世紀	B10区	東区	SK283の下で検出。	上下2層：1層＝暗褐色土結實土(黄色塊土アロツク多い)。2層＝軟質暗褐色土(1cm大の塊土多い)。	SK283とSK285に切られる。	-	-	-	124
SK287	小土坑	16世紀	B10区	東区	埋藏地の検出	単層：やや開いた小窪と暗褐色土の混層。	SK285に切られる。	-	-	-	124
SP288	ピット	16世紀	C9区	北1区	基盤掘削時 上	単層：C層土(塊山アロツク多い)。	SE148とSD284に切られる。	赤切り土師のみ。	無し	-	131

遺構	性格	時期	グリッド位置	位置	検出層位	構成遺構・層序	切合関係	最新の出土遺物	残留遺物	備考	掲載頁
ST289	13号基	16世紀第3四半期	C8区	北2区	基盤II層直上	土坑墓?幼児埋葬	ST149(8号墓)に切られる。	無し。	-	幼児埋葬	259
ST290	18号基	16世紀第4四半期前半	C8区	北2区	-	曾出土。	-	無し。	-	-	281
SE291	井戸	16世紀第2四半期	B9・10区	東区	SK262の下で検出。	井筒は木製植。内区土坑(2~3m)大の灰土を多く含む暗褐色土。	SK261とSK262に切られる。	井筒内から京都系土師器・陶磁	-	清水のため、完結できず。第3四半期まで使用。	144
SD292	溝	16世紀第4四半期前半	B10区	東区	SK262の下で検出。	SK261に接続	SD165とSK265を切り、SE290とSK262に切られる。	京都系土師器2期型	固定部・土師器、褐色土師器入箱、製瓦土師	-	186
SK293	甕壺土坑	16世紀第3四半期	C9区	北1区	-	単層:暗褐色軟質土	SK215,SK267,SK279に切られる。	瓦貫火鉢(組合 号15)、京土師2期型	無し	確含む。	159
SD294	溝	15世紀後半~16世紀前半	C8区	北2区	2層除去後検出	単層:小礫を少量含む灰色粘土層	ST150(4号墓)とSD255に切られる。	底部糸切の土師器片のみで、京都系土師器を含まない。	-	西に向かって浅くなり、SK298付近で閉える。	118
ST295	14号墓	16世紀第3四半期	C8区	北2区	2層除去後検出	土坑墓?幼児埋葬	ST149(8号墓)に切られる。	糸切り土師小皿1枚。	-	頭骨に装束のように土師小皿土。	200
ST296	15号墓	16世紀第3四半期	C8区	北2区	-	木棺?幼児埋葬	SK255とSK288を切られる。	鉄釘1点。	-	-	261
ST297	16号墓	16世紀第3四半期	C8区	北2区	-	幼児埋葬	SK256を切る。	無し。	-	-	262
SK298	土坑	15世紀以前	C8区	北2区	-	-	SD255とSK256、SD294を切り、ST296(15号墓)とST299(17号墓)に切られる。	糸切りの在地形土師器	-	瓦片多く含む。土師器の皿を伏せた土体で検出。	123
ST299	17号墓	16世紀第3四半期	C8区	北2区	-	土坑墓	SK256とSK288を切る。	人骨片	-	-	262
SE300	井戸	15世紀	B10区	東区	SD165の底面	井筒は木製植。抜き取られている。底面埋め込み。	SD165に切られる。	底面に遺物。	-	-	119
SK301	土坑	古代	C7区	西区	-	確多く含む。	SD140とSD165、SK247に切られる。	古代の土師器碎片のみ。	無し	-	98
SK302	土坑(S210-0)	-	A11区	東区	-	-	SD118とSD141に切られる。	-	-	⇒SK302	128
SD303	溝	16世紀第1四半期	C6・C7区	西区	-	やわらかい淡褐色微砂層のナミ状埋層=系統	SK247を切り、SD140に切られる。	糸切り土師のみ	無し	-	132

年代観と合致した。そうして識別した遺構の一覧が第4-1表である。

時期区分

時期比定は最新の出土遺物の時期から15世紀は前半と後半の2時期に、16世紀は4分の1世紀25年単位で4時期に区分した。その上で切合関係に矛盾がないか検討し、最新土器による時期比定より切合関係から見た時期が新しい場合には、切合関係にしたがった。さらに出土土器の接合関係から検証をおこなった。切合関係のない遺構が同時期であることを検証することができた接合資料は40例である(第4-2表)。

遺構の相関

ひとつの遺構を単位として、遺構の切合関係と、時期比定をまとめたのが付図4下の遺構相関表である。この表をもとに以下のように遺構を古代、15世紀、16世紀第1四半期・第2四半期・第3四半期・第4四半期、近世にわけて記述する。

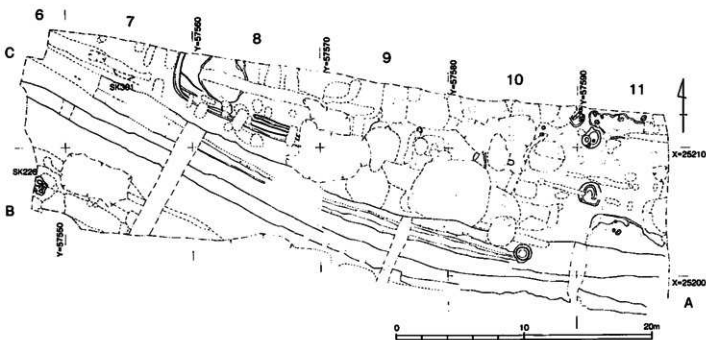
第4-2、第10次Ⅱ区北調査区の接合資料一覧

番号	品名	部材の出土した品名	接合関係のない品名	時期	用器図番号
接合資料1	瓦葺材	SD250, SD168, SD116 (南), S124 (南), S104 (南)	SD116, SD250	16世紀第4回半前期半	図4-88図34
接合資料2	瓦葺瓦	SD131, SD116, SD118, SD250, SE148, SK263	SD131, SD116, SD250, SE148, SK263	16世紀第4回半前期半	図4-92図15
接合資料3	焼酎樽	SD250, SK231, SK261	SD250, SK261	16世紀第4回半前期半	図4-97図2
接合資料4	焼酎樽	SD116, SD118, SD131, S137, SD141, SD168, SD250, SE148 片欠	SD116, SD131, SD250, SE148 片欠内, SK262, SK263, SP214	16世紀第4回半前期半	図4-102図12
接合資料5	焼酎樽	SD141, SD168, SD250, SE210	SD168	16世紀第3回半前期半	図4-168図17
接合資料6	瓦葺大瓦	SD167, SD250, SE148片欠内, SK262	SD250, SE148片欠内, SK262	16世紀第4回半前期半	図4-88図129
接合資料7	焼酎樽	SD141, SD250, SK261, SK262	SD250, SK261, SK262, 5次 ASX16, SK26	16世紀第4回半前期半	図4-118図13
接合資料8	中国製焼酎樽	SD141, SD167, SD250, SD292, SK231	SD250, SD292	16世紀第4回半前期半	図4-98図2
接合資料9	焼酎樽	SE148, SK231, S218	SE148, SK231, S218	16世紀第4回半前期半	図4-130図1
接合資料10	瓦葺	SD141, SD168片欠内, SD250, SD265	SD168片欠内, SK265	16世紀第2回半前期	図4-57図1
接合資料11	中国製焼酎樽	SD131, SE147, SK231, SK269, SK262	SD131, SE147, SK231, SK269	16世紀第4回半前期半	図4-92図12
接合資料12	中国製焼酎樽	SF151, SD141上取, SD167, SD168, SK278, SK164	SD141上取, SK278, SK164	16世紀第3回半前期	図4-76図1
接合資料13	焼酎樽	SD141, SK262	SD141, SK262	16世紀第4回半前期半	図4-118図12
接合資料14	焼酎樽	SD116, SD131, SD167, SD250, SK231	SD116, SD131, SD250, SK231	16世紀第4回半前期半	図4-92図13
接合資料15	瓦葺大瓦口内	SD118, SD141, SD165, SD167, SD250, SK228, SK261, SK293	SD165, SK228, SK261, SK293	16世紀第3回半前期	図4-76図1
接合資料16	焼酎樽	SD118, SD250, SK252, SK261	SD118, SD250, SK252, SK261	16世紀第4回半前期半	図4-88図13
接合資料17	瓦葺大瓦	SD118, SD250, SK229	SD118, SD250, SK229	16世紀第4回半前期半	図4-115図2
接合資料18	中国製焼酎樽	SD116, SK264	SD116, SK264	16世紀第4回半前期半	図4-103図2
接合資料19	中国製焼酎樽	SD118, SD141, SD250, SD167, SD292, SF151, SK231, SK261, SK262	SD118, SD250, SD292, SF151, SK261, SK262	16世紀第4回半前期半	図4-98図1
接合資料20	中国製焼酎樽	SK252, SK263	SK252, SK263	16世紀第4回半前期半	図4-107図2 図4-109図3 図4-113図3
接合資料21	瓦葺瓦	SD131, SD141, SD167, SE210片欠内, SK231	SD131, SD141, SD167, SE210片欠内, SK231	16世紀第4回半前期半	図4-129図3
接合資料22	土	SD116, SD167, SD168, SD250, SD292, SE148片欠内, SK261	SD250, SD292, SE148片欠内, SK261	16世紀第4回半前期半	図4-97図1
接合資料23	白磁器	SD167, SE148, SE210, SK231	SD167, SE148, SE210, SK231	16世紀第4回半前期半	図4-132図1
接合資料24	焼酎樽	SD284, SK231	SD284, SK231	16世紀第3回半前期	図4-68図1
接合資料25	中国製焼酎樽	SD131, SE148, SK269片欠	SD131, SE148, SK269片欠	16世紀第4回半前期半	図4-102図127
接合資料26	焼酎樽	SD118, SD168, SD250, SD270, SK231, SK261, SK262	SD250, SK261, SK262	16世紀第4回半前期半	図4-118図18
接合資料27	焼酎樽	SE148片欠内, SK231, SK262, SK269	SE148片欠内, SK262, SK269	16世紀第4回半前期半	図4-118図29
接合資料28	中国製焼酎樽	SD131, SD167, SD250, SK231, SK236, SK252, SK269, 2号卓 S1135	SD250, SK231, SK236, SK269, 2号卓 (S1135)	16世紀第4回半前期半	なし
接合資料29	中国製焼酎樽	SD131, SD141, SK135, SK146, SK269	SD141, SK269	16世紀第4回半前期半	なし
接合資料30	白磁器	SD116, SD250, SD270	SD116, SD250	16世紀第4回半前期半	なし
接合資料31	焼酎樽	SD270, SK262	SD270, SK262	16世紀第4回半前期半	なし
接合資料32	焼酎樽	SD250, SK262	SD250, SK262	16世紀第4回半前期半	なし
接合資料33	焼酎樽	SD250, SD116	SD250, SD116	16世紀第4回半前期半	なし
接合資料34	焼酎樽	SK261, SK262	SK261, SK262	16世紀第4回半前期半	なし
接合資料35	焼酎樽	SD116, SD117, SD118, SD141, SD250, SF151, SK262	SD118, SD250, SF151, SK262	16世紀第4回半前期半	図4-88図14
接合資料36	中国製焼酎樽	SD250, SK156	SD250, SK156	16世紀第4回半前期半	図4-88図110
接合資料37	白磁器	SE234, SK286	SE234, SK286	15世紀	図4-24図1
接合資料38	焼酎樽	SD250, SK262	SD250, SK262	16世紀第4回半前期半	図4-118図127
接合資料39	焼酎樽	SK262, SK263	SK262, SK263	16世紀第4回半前期半	図4-118図128
接合資料40	中国製焼酎樽	SD131, SE148片欠内	SD131, SE148片欠内	16世紀第4回半前期半	図4-92図110

第4節 古代の遺構と遺物

遺構の概要 (第4-4図、付図5上)

10次Ⅱ区北調査区においては、中世以前にさかのぼる古代の遺構は極めて少ない。いずれも切合関係から見て、相対的に最古に位置づけられる層序から検出され、中世以後の遺物を含まないことを判断の主な材料とした。その結果以下の2つないし3つの土坑を見出した。



第4-4図 古代の遺構 (1/300)

土坑

SK226 (第4-5図)

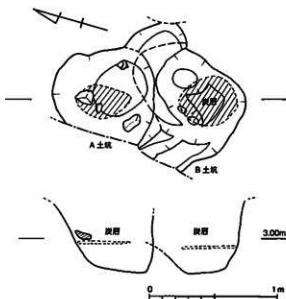
B6区(南2区)において第Ⅱ層除去後に検出した土坑である。調査の過程で円形にちかい土

二つの土坑

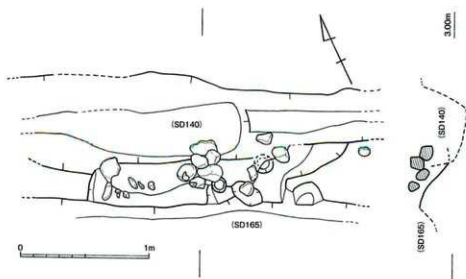
坑2基が重なっていることが判明した。

古いほうをSK226A土坑、新しいほうをSK226B土坑とした。上部を土坑SK193(16世紀第1四半期)にきられていた。A土坑は長さ0.8m、幅0.7m以上、深さ0.6m、B土坑は長さ0.7m、幅0.6m、深さ0.6m。2つの土坑とも底面近くに炭層といえる黒色土の堆積があり、最上部には厚く基盤Ⅲ層の土が埋め戻すように堆積していた。内部の埋土からは図示できないほど碎片の古代の土師器環が出土している。ともに廃棄土坑として使われた後、埋め戻されたものと考えられる。この土坑は切り合い、最下層の遺構である、中世の遺物を全く含まないところから古代の遺構と推定される。

廃棄土坑



第4-5図 SK226 (1/30)



第4-6図 SK301 (1/30)

SK301 (第4-6図)

C7区(西区)で、溝SD140とSD165にその大半をさらに大型土坑SK247によって切られた土坑である。残存した部分が狭いため形態は不明である。長さ2.1m、幅0.4m以上、深さ0.4m。内部には礎を多く含み、古代の土師器坏破片が出土している。廃棄土坑と推定される。相対的に最も古く、中世の遺物を全く含まないところから古代の遺構と推定される。

廃棄土坑

小結

10次調査区ではI区南で8世紀後半の井戸と包含層を調査しており、II区北の廃棄土坑もそのような8ないし9世紀の生活の跡と関連する遺構と考えられる。以下に述べる中世の遺構の中には、かなり多くの古代の遺物、特に8ないし9世紀の遺物が含まれており、なかには円面硯の破片が出土している。遺跡東部の7次調査区では官衙的な配置をとる掘立柱建物群も発見されており、中世大友府内町跡と重なるようになんかなり広範に古代の遺構が存在するものと見られる。

8・9世紀

註1. 田中裕介編『豊後府内3』2006、大分県教育庁埋蔵文化財センター

第5節 中世の遺構と遺物

1 遺構の概要 (付図4)

中世の遺構と認定したものは、基盤Ⅲ層上面で発見された遺構のうち内部から底部系切の土師器以後の遺物を含むものである。以下に述べるように遺物の中には13ないし14世紀にさかのぼるものもあるが、遺構の時期としては15ないし16世紀がほとんどである。とくに16世紀第4四半期の遺構数が多い。

2 15世紀代の遺構と遺物

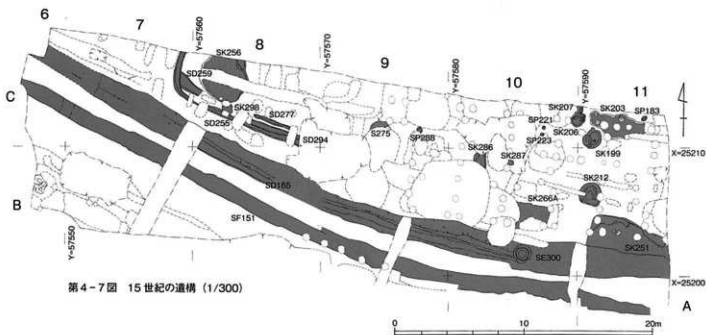
概要 (第4-7図、付図5上)

ここで15世紀代に認定した遺構は、ロクロ目土師器以後の16世紀代の土師器をまったく含まず、さらに遺構の切合関係上16世紀以後の遺構より古いことが明らかな遺構である。その多くは15世紀代の型式と認められる土師器を出土した遺構である。

東西道路

15世紀の後半(厳密に見れば末に近いと考えられる)の道路状遺構SF151とその北側の道路側溝を兼ねた水路である溝SD165とが、調査区の中央東西に伸びる。SF151の第7硬化面と水路SD165の第4矢板列が対応する。それ以外の15世紀代と考えられる遺構はその東西道路の北側にあたるC8区付近の北2区とBC10/11区の東区の2箇所に分布が分かれる。C11～B11区付近は本来第4南北街路に面した場所にあたる。

中町



第4-7図 15世紀の遺構 (1/300)

道路状遺構

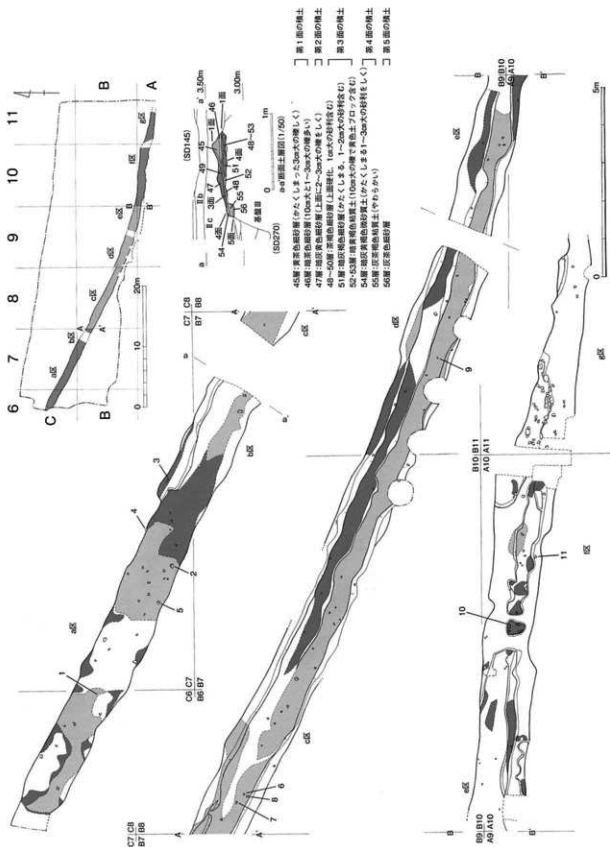
SF151 (第4-8～10図、付図8)

東西道路

第2層除去後に検出した道路状遺構で、調査区全体を横切っておおよそ東西方向に伸びている。次に述べる溝SD165、SD250、SD270と並行して西に向かうほど北にゆっくりと曲がっていく。また第4南北街路とも直交しないので、方位を基準に建設された道路ではない。52mにわたって検出し、最高7面の硬化面を確認した。どの面をはかっても東西両端での比高差は10～20cmほどで、緩やかに西に向かって低くなっている。第4硬化面の舗装以後は砂利層を上部に、その下に粘土層を敷く舗装を1単位とした硬化面を作っている。それ以前の第5面以下には砂利等による表面

自然地形に沿う

道路面7回



の舗装はなされていない。道路は15世紀後葉に建設され、まったく同じ場所を踏襲して16世紀末あるいは17世紀初頭の中世都市府内が廃絶する時期まで存続している。SD250、SD270、SD116～SD118、SD167、SD168などの道路状遺構SF151と並行する多くの溝によって道路の両端を切られ

幅は5m以上 ているため、一見幅1m程度の細い道路状遺構に見えるが、SD165のみが北側に側溝として機能していた建設当初から16世紀第3四半期までは、少なくとも5m以上の道路幅を持っていたものと推定される。その後第4四半期に両側に溝を持つようになると道路幅は2m以下にまで狭くなり、最終段階の16世紀末には再びSD167・SD168とセットになって大幅に拡幅されたようである。

長大な遺構であるためa～g区に分けて掘下げている。以下に上層から下層に向けて記述する。

上層（第4～8図）

第1-2硬化面 第2硬化面以上の遺構と遺物を上層として記録した。したがって第4～8図に記録した道路硬化面のうち、南側のやや高くなっている部分が第1硬化面で、その周囲で低く表現されている部分が第2硬化面にあたる。

第1硬化面 礫敷きの道路舗装面。断続的に検出した道路面で10cm大の円礫をまじえた1～3cm大の小礫を混ぜた暗茶褐色細砂層（B7区a-a'断面の46層、B9区b-b'断面の35層）を敷き、その上に5cm大の礫を敷き詰めて舗装している（同45層、同34層）。上面の高さはC6区で約3.4m、B10区で3.5mと東に行くほどわずかに高くなる。断面を観察できた幅1mほどをみると、水平ではなく中央が高くなっている。さらにこの硬化面を北側に追うとSD270につながる、いっぽう南側ではSD116に対応するようである。さらにこの第1硬化面が使用されている間に当初側溝となっていたSD270とSD116は人為的に埋め戻されて、SD270はSD167に、SD116はSD168におきかわっている。SD167とSD168は溝というよりは浅い溝状の窪みともいべき遺構で、断面を見る限り明確に硬化した道路面とは認識できないが、この上から切り込む遺構はまったくなく、側溝として機能していた痕跡もない。したがってSF151第1硬化面の最終段階とSD167およびSD167の底面をひとつの道路とみなすと、幅8m以上の道路が16世紀第4四半期後半に整備されたことになる。

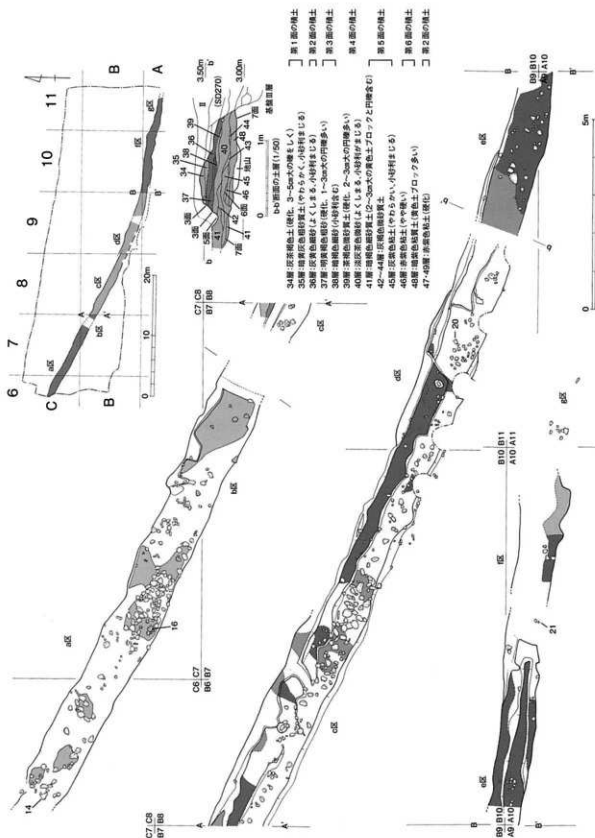
第2硬化面 礫敷きの道路舗装面。第1硬化面の5～10cm直下で、2～3cm大の小礫を混ぜたよくしまった暗灰黄色細砂層（B7区a-a'断面の47層、B9区b-b'断面の36層、SD250の12層・18層）を敷き舗装する。北側の側溝はSD250の上層、南側の側溝はSD117に対応する。そうすると道路の幅はおおよそ2mほどに想定できる。対応する溝の時期から見て、16世紀第4四半期の前半に舗装された道路と見られる。

中層（第4～9図）

第3-4硬化面 第4硬化面以上の遺構と遺物を中層として記録した。したがって第4～9図に記録した道路硬化面のうち、やや高くなっている部分が第3硬化面で、その周囲で低く表現されている部分が第4硬化面にあたる。

第3硬化面 小砂利敷きの道路舗装面。礫混じりの硬化面として断続的に検出した道路面で、10cm大の円礫をまじえた1cm大の小礫を混ぜてよくしまった茶褐色細砂層（B7区a-a'断面の48～51層、B9区b-b'断面の37・38層）を敷き舗装している。上面の高さはC6区で約3.3m、B10区で3.35mと東に行くほどわずかに高くなる。断面は観察できた幅1.3mほどをみると水平ではなく北が高くなっている。さらにこの硬化面を北側に追うとSD250掘形ラインにつながる。いっぽう南側ではSD118に対応するようである。SD250とSD118が第3硬化面の側溝として機能していたとすれば、そのときの道路幅はB7区a-a'断面でおおよそ2mである。対応する溝の時期から見て、16世紀第4四半期の前半に舗装された道路と見られる。

第4硬化面 小砂利敷きの道路舗装面。礫混じりの硬化面として断続的に検出した道路面で、5cm大の円礫を交えた1～3cm大の小礫を混ぜてよくしまった暗灰黄褐色微砂層（B7区a-a'断面の54層、B9区b-b'断面の39層）を敷き、その上に礫の多い砂質土を敷き詰めて舗装している（同55層、同40層）。上面の高さは第3硬化面より5cm程度低い。断面は観察できた幅1.3mほどをみるとおおよそ水平だが、硬化面が波打っており下部の道路面が比較的柔らかかったことを示



第4-9面SF151中層 (1/100)

側溝

めしている。この道路面の北側の側溝は、SD165の第1矢板列の段階の溝が対応すると推定される。これに対して南側では対応する溝が確認できないのでなんともいえないが、SD118になる以前に水路が存在した可能性は否定できない。SD165が第4硬化面の側溝として機能していたとすれば、そ

のときの道路幅はB7区 a-a' 断面ですくなくとも3m以上である。対応する溝の時期から見て、16世紀第3四半期ごろに舗装された道路と見られる。

第3四半期

下層(第4-10図)

第5-7硬化面

第4硬化面以下の遺構と遺物を下層として記録した。第4-10図に記録した礫や砂利の集中する部分は第4硬化面を舗装する際に混ぜられた礫や砂利である。その周囲の礫がほとんどない部分が第5硬化面から第7硬化面であるが、その3面は平面的に掘り分けることができなかったため、図面上では一括して表現されている。

側溝

第3四半期

第5硬化面 砂質土の硬化面。第1-4硬化面ほど硬くない灰褐色微砂質土層(B7区 a-a' 断面の56層、B9区 b-b' 断面の41-45層)で下層の45層は粘土質である。平面的に確認することはむずかしいので、東西の高差はわからない。断面をみるとおよそ水平だが硬化面が波打っている。この道路面の北側の側溝は、SD165の第2矢板列の段階の溝に対応すると推定される。これに対して南側ではSD116-118が後に掘られたため対応する溝が確認できない。SD165第2矢板列の溝が第5硬化面の側溝として機能していたとすれば、そのときの道路幅はB7区 a-a' 断面ですくなくとも3m以上である。対応する溝の時期から見て、16世紀第3四半期ごろに舗装された道路と見られる。

側溝

第2四半期

第6硬化面 粘質土の硬化面。やや硬化した粘質土層(B9区 b-b' 断面の46-48層)である。下部の48層は基盤層に由来する黄色粘土のブロックを含み、明らかに人為的な積み土である。第5硬化面同様平面的に確認するのはむずかしいので、東西両端の高差はわからない。断面をみると硬化面は波打っているため、わだちが付いていた可能性が高い。この道路面の北側の側溝は、SD165の第3矢板列の段階の溝に対応すると推定される。これに対して南側ではSD116-118が後に掘られたため対応する溝が確認できない。SD165第3矢板列の溝が第6硬化面の側溝として機能していたとすれば、そのときの道路幅はB7区 a-a' 断面ですくなくとも3.3m以上である。対応する溝の時期から見て、16世紀第2四半期ごろに舗装された道路と見られる。

側溝

15世紀

第7硬化面 粘質土の硬化面。硬くしまった粘質土(B9区 b-b' 断面の47-49層)の下は、基盤IIIあるいはIV層の地山である。一旦地山面を削った上で47-49層を道路の床土として敷いている。道路状遺構SF151建設当初の道路層である。道路面上面の高さはわからないが、地山面に高さをみると東に行くほどわずかに高くなる。この道路面の北側溝にあたるのは、SD165第4矢板列段階の溝と推定される。これに対して南側ではSD116-118が後に掘られたため対応する溝が確認できない。SD165第4矢板列の溝が第7硬化面の側溝として機能していたとすれば、そのときの道路幅はB7区 a-a' 断面ですくなくとも3.3m以上である。対応する溝の時期から見て、15世紀後葉-末ごろに建設されたと思われる。

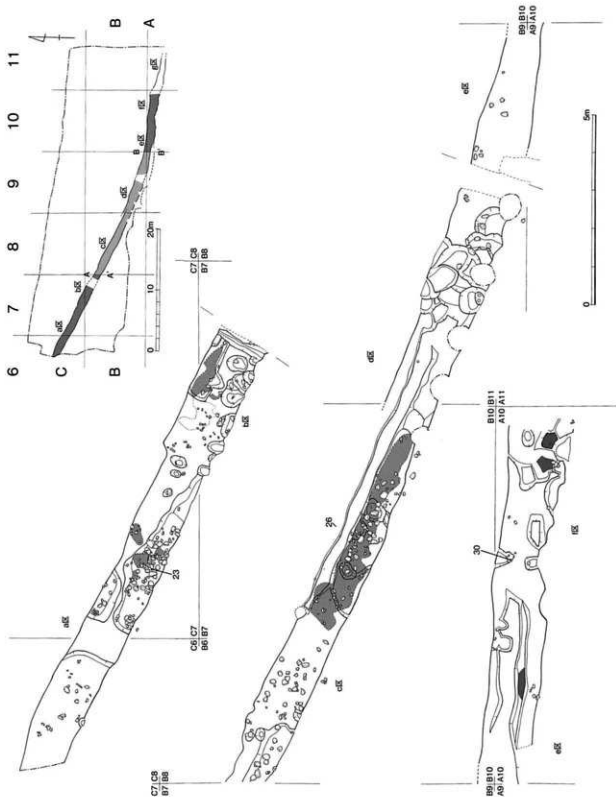
SF151出土遺物(第4-11図)

道路1-2面

上層 第2層下部と道路第1面および道路第2面構築土の中に入っている遺物である。SD270に対応する。16世紀第4四半期の遺物である。1はC6区出土の完形の中国銅鏡、元豊通寶(北宋1078年初鑄・行書体)。2はC7区出土の双頭鹿手電雲文の刻印をほどこす瓦質火鉢の脚部。3はC7区出土の備前焼小型の鉢口縁。4と5はC7区出土の埴、ともに厚さ3cm前後の厚手の製品。6はB8区出土の15世紀後葉生産中世5期の備前焼埴口縁。7はB8区出土の16世紀前葉にあたる中世6a期の備前焼鉢鉢口縁部。8はB8区出土の16世紀末近世1b期の備前焼鉢鉢口縁部。9はB9区出土の端部をへら調整しない管状土鉢B類¹⁾。10はA10区出土の中世5b期の備前焼鉢鉢口縁。11はA10区出土の京都系土師器2期の皿で、口縁に打ち欠きがある。12はA11区出土の中国景德鎮窯系毛彫形碗。13は15世紀前半中世4期の備前焼埴口縁部。なおSD118・SD250・SK262出土片と接合した完形の備前焼埴(接合資料35)の破片が出土しているほかに、上層からは青磁碗、

埋まじりの破片

註1 田中裕介編『豊後府内3』P274 2006、大分県教育庁歴史文化財センター

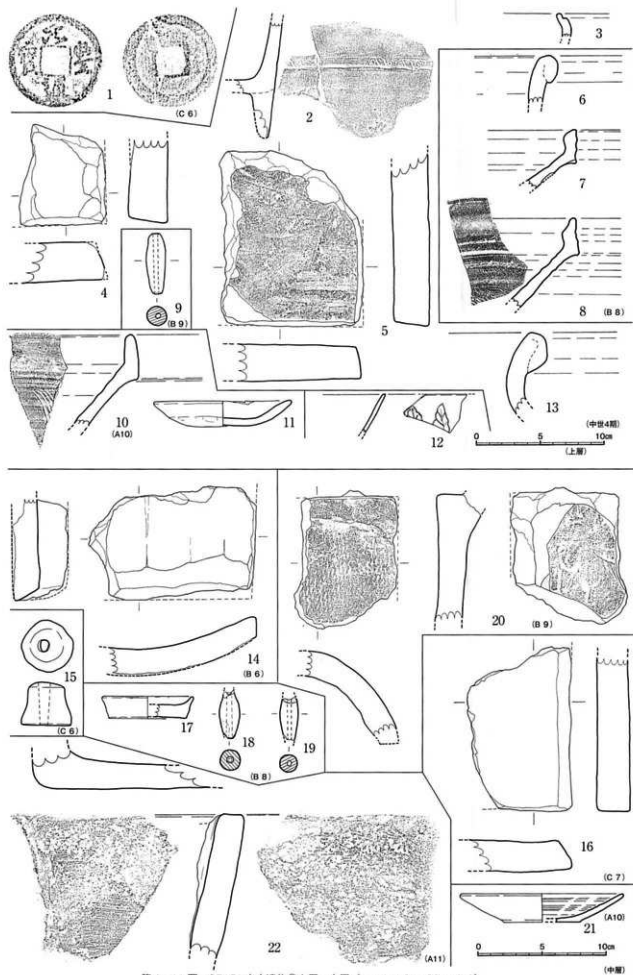


第4-10面SF151下層 (1/100)

中国漳州窯系青花、中国黒褐釉陶器、備前焼徳利、瓦質鉢、内面布目の丸瓦、平瓦、海部郡産の埴の破片が出土している。

道路2-3面

中層(第4-11図) 第2面ないし第3面構築土に含まれる遺物。SD250構築時の遺物と対応する。16世紀第4四半期前半。14はC6区出土の胎土に2~4mm大の石英粒子を多量に含み海部郡産と考えられる平瓦²²。15はC6区出土の中央に穴が貫通した完形の土製品。変形土錘あるいは紡



第4-11 図 SF151 出土遺物①上層・中層 (1 = 1/1, 2 ~ 22 = 1/3)

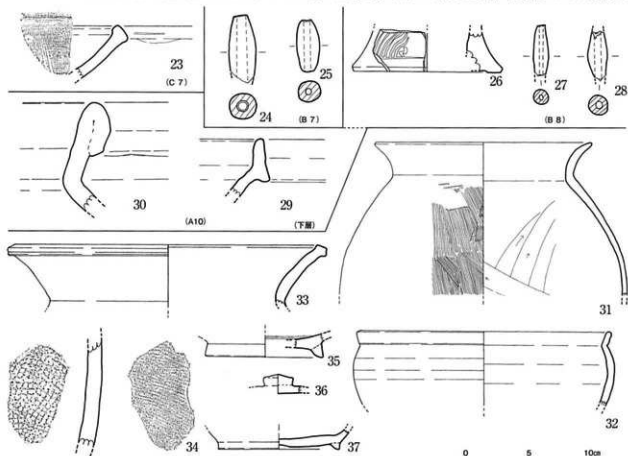
鍾車とも考えられる。16はC7区出土の埴、端面はヘラで調整する。17は口縁に煤が付着し灯明皿として使用された底部系切の土師器の小皿片。復元径7.2cmとかなり小さく、口縁が真っ直ぐに小さく立ち上がる特徴は14世紀の製品に近い。18はB8区出土の管状土鍾B類の破損品。19はB8区出土の両端を欠いた管状土鍾。20はB9区出土の丸瓦、内面に布目痕、外面は縄目タタキのあとナデ調整。21はA10区出土のロクロ目土師器の皿で、器高の低い河野分類のC-3類にあたる16世紀後半の製品。22はA11区出土の方形の瓦質角火鉢で、外面に菊花文の刻印がある。ほかに青磁碗、備前焼甕、外面格子タタキの瓦質鍋、京都系土師器、平瓦の破片が出土している。

道路4面以下

下層(第4-12図) SD165に対応する道路の埋土。ただし23-26は埋層中から出土したので第4硬化面の舗装の積み土中に含まれた遺物である。23はC7区出土の瓦質播鉢口縁。24は一部欠けたB7区出土の小型管状土鍾A類。25はB7区出土の完形の小型管状土鍾B類。26はB8区出土の朝鮮王朝産象嵌青磁の瓶底部。27はB8区出土の管状土鍾A類。28はB8区出土の両端を欠いた管状土鍾。29はA10区出土の15世紀後半中世5期の備前焼播鉢口縁。30はA10区出土の中世6期の備前焼甕口縁。ほかに備前焼甕、瓦質鍋、内面布目の丸瓦、平瓦、ウマ下顎臼歯の破片が出土している。

残留遺物

主に礫敷きの中に混ざりこんでいた遺物である。31は古墳時代中期の土師器甕。口縁部に1箇所打ち欠きがある。32は中世須恵器の鉢口縁部。33は古代の須恵器甕口縁。34は内面に格子目に宛て具痕、外面に並行タタキと特徴のある須恵器甕胴部。35は古代の黒色土器A類碗底部。36は古代土師器坏蓋のつまみ。37は口縁の全周を打ち欠いた古代土師器坏底部。ほかに古代土



第4-12図 SF151 出土遺物②下層 (1/3)

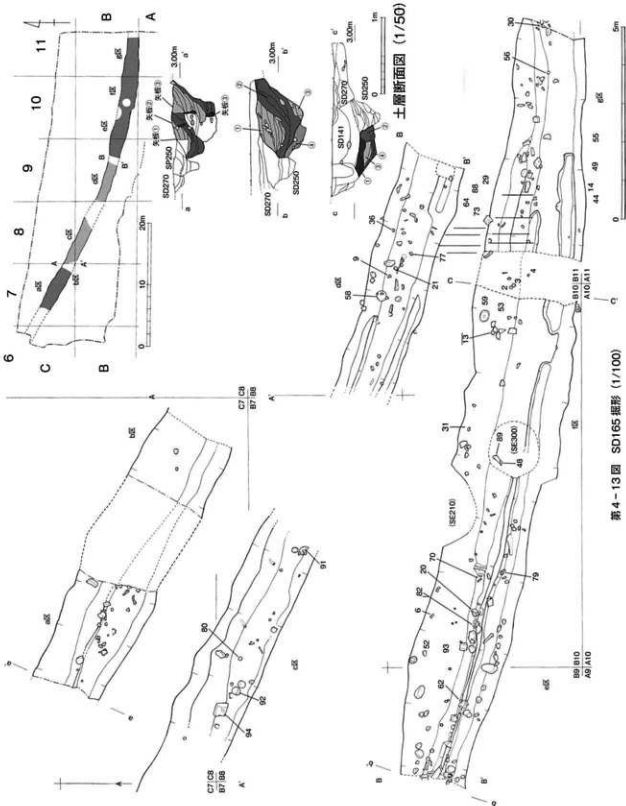
註2 近世から近代の瓦産地として知られる豊後国海部郡の坂ノ市から神崎の近世瓦の胎土および混和材と酷似するので、同じ胎土の中世瓦も海部郡産と推定される。以下の記述では類項をさけて単に海部郡産と表記する。

師器企数型甕、高坏・甌の破片が出土している。

溝

SD165 (第4-13~15図・付図7断面)

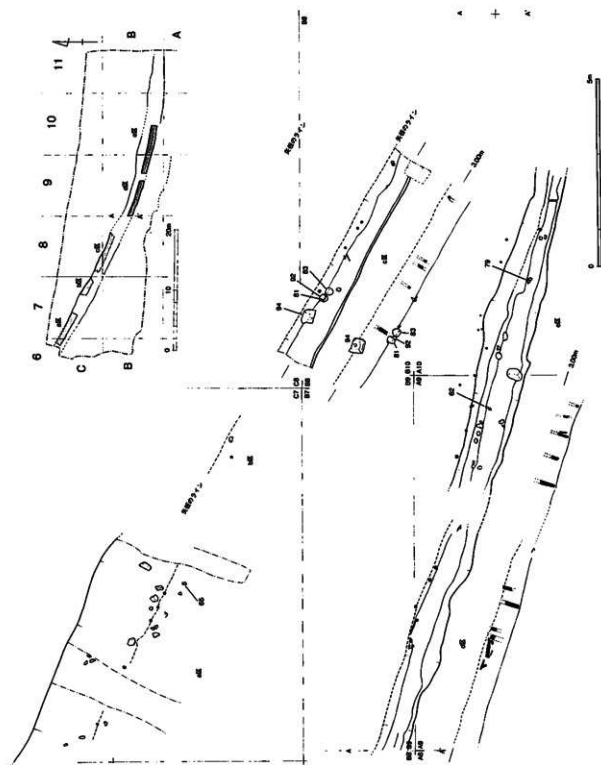
第Ⅱ層除去後に検出した調査区全体を横切っておおよそ東西方向に伸びる溝である。正確には北に5~25度ふり、西に向かうほど北に曲がっていく。全長52mにわたって検出した。溝の断面中央に木製の杭列および杭が腐朽した空洞の杭痕跡を検出し、一部に矢板の痕を発見した。溝北側か



第4-13図 SD165埋形 (1/100)

道路側溝

らの溝の崩壊を抑えるために矢板をあてその南側に杭を打ち込んで止めていたことが判明した(第4-15図B9区付近)。本来は南側の道路遺構SF151の北側側溝としての機能を果たすと同時に、北側の敷地との境界を兼ね、さらに東から西に排水を流す水路としての役割をもっていたことが、溝の掘形底面の絶対高がSD165の東端で2.45m、西端で2.0mの差があることからわかる。15世紀後半の土坑SK251と井戸SE300を切り、近世前期の石列SX139の下に位置し、16世紀第2四半期の土坑SK163に切られるほか、第4四半期の溝SD168、SD250、SD270とSD292に切られる。長大な遺構であるため、土層観察用土手を境界にして西からa~g区の7区画にわけて掘下げた。杭と



第4-14図 SD165第4矢板列(1/100)

矢板はa区からd区まで検出されたがe区より東では、掘りなおしが浅いことや後の溝と重複しているため検出できなかった。

溝は当初上端幅2.0m以上、深さ1.4m、底部幅1.0mほどの断面不整な逆台形に掘られ、その中央からやや北に偏った位置に木杭と矢板による土留めを構築している。したがってSD165の北半分は掘形であり、南半分は水路として機能していたことになる。事実水路部分には柔らかい粘土や水流の痕跡である砂混じりの埋土が堆積している。断面観察からみると、最初の杭列を第4とすると第1までの3回の作り直しがあり、そのたびに水路の底部が高くなっていく。西端に近いC7区断面をみると、当初の第4矢板列の水路底面は標高2.1mだが、第3列では2.5m、第2列では2.2m、第1列では2.3mとなっている。同時に矢板の位置をみると、第3列は当初の第4列と同じ位置に作られているが、第2列と第1列は次第に南側に移動している。

構築と存続の時期であるが、第4矢板列を構築したB10～B11区の掘形内に一括埋置されたと考えられる1～4の底部糸切の土師器坏と小皿（第4-15図）から15世紀後半のある時点で構築され、第3矢板列を構築した最初の修築の時期はロクロ目土師器49や京都系土師器1期Ⅱ50、接合資料10の瓦灯の破片が入った16世紀第2四半期と考えられる。第2矢板列と第1矢板列の改修の時期は、SD165が16世紀第4四半期前半と考えられる溝SD250にきられていることから、下に掲げた埋土出土遺物の最新の遺物として京都系土師器2期の土師器が出土していることから、16世紀第3四半期にあたと考えられる。穿った見方をすれば、溝を3回にわたって改修することで1世紀近く存続した溝SD165は16世紀第4四半期にいたって、新たに溝SD250に掘りなおされ、さらにSD270へと引き継がれたと考えられる。

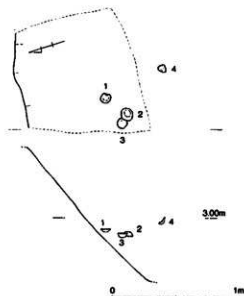
矢板列が作られている方向から見て道路SF151の道路側溝として作られたことは明らかである。しかしSF151には道路面が7面存在した。その対応関係を示しておくと、第4矢板列の構築は第7道路面に、第3矢板列は第6道路面に、第2矢板列は第5道路面に、第1矢板列は第4道路面に対応すると考えられる。

SD165 出土遺物（第4-16図①～④）

埋納 B10区とB11区の境界の土手で発見された土師器の一群である（第4-15図）。最初につくられた第4矢板列の裏込めの中におかれたもので、水路構築にともなう儀礼行為に関わって埋置されたものと考えられる。以下に記述するように、坏については明確ではないが小皿はいずれも河野分類A類にあたり、15世紀後葉の製品である。

1は口縁全周が打ちかかれて正位で発見された底部糸切の土師器坏で被熱している。2は逆さに伏せて発見された、灯明皿に使用された完形の底部糸切の土師器小皿。口縁が打ち欠かれ、被熱による剥離が激しい。3は口縁全体に煤が付着して灯明皿に使用された完形の底部糸切の土師器小皿、正位で検出された。4は口縁全周を打ち欠き、やや傾いた正位で出土した底部糸切の土師器小皿の完形品。

掘形内 第4矢板列と第3矢板列内の遺物を掘形出土として水路埋土と区別して取り上げることができた。しかし構築当初の第4矢板列北側の掘形出土遺物と、次に改修した第3矢板列の裏込土から出土した遺物を区別することができなかった。したがって以下にあげる掘形内出土遺物の大半



第4-15図 SD165 B10・11区の掘形時の埋土土師器（1/30）

矢板の改修

15世紀末の遺成

土師器埋置

矢板①・④の掘形内

をしめる15世紀の遺物が当初の溝SD165の構築時期を示し、少量含まれる16世紀代の遺物の時期が第3矢板列の時期を示していると考えられる。

青磁青花

5はg区出土の中国龍泉窯系青磁の皿底部片。6は中国龍泉窯系青磁の皿底部片。7はd区出土の口縁外面に雷文帯を刻む15世紀の青磁碗C-2b類の口縁片。8はd区出土の中国景德鎮窯系青花の筒形碗の底部片。9は15世紀後半中世5期の備前焼の壺口縁片。10は中世5期の備前焼の壺口縁片。11はc区出土の16世紀中世6期の備前焼の壺口縁片。12はa区から出土した15世紀末中世5b期の備前焼の襷鉢口縁片。13～17は15世紀後半中世5期の備前焼襷鉢口縁片。そのうち15はd区出土、17はf区出土。18は口縁外面につけた二条の三角突帯の間に七宝文の刻印のある瓦質火鉢の口縁片。19は渦文の刻印のある瓦質火鉢口縁。20は横方向に穿孔のある獸脚をつけた瓦質火鉢の胴部下半の破片。21は口縁を玉縁状に外反させる瓦質襷鉢の口縁片。22は掘形底部より出土した瓦質鉢の口縁片。23は瓦質土器の碗底部。24は口縁が外反する15世紀の底部糸切の土師器坏。25はe区出土の底部糸切の土師器坏口縁片。26は口縁に2箇所打ち欠きが残る底部糸切の土師器坏。胎土に大型石英粒子を含む海部郡産。27は口縁を1箇所大きく打ち欠いた底部糸切の土師器坏底部、河野分類A類。28は河野分類A類の底部糸切の土師器坏だが、口縁端部の仕上げはロクロ目土師器皿の古い形態の影響を受けている。25～28は指ナデと板状圧痕がなく、河野分類A類に属す。出土位置も埋置土師器1～4のすぐ近くで出土している。29は河野分類B類の底部糸切の土師器坏であるが、口縁が外上方に伸びる特徴はA類の影響が考えられる。30は河野分類B類の底部糸切の土師器で、皿の影響を受けている。31は河野分類B類の底部糸切の土師器坏片。32は口縁部に煤が広く付着して灯明皿に使用された底部糸切土師器皿の中型品の破片。33は14世紀の底部糸切の土師器小皿片。34は口縁に煤が付着して灯明皿に使用された完形の底部糸切の土師器小皿。在来系の河野分類B類である。35は口縁に4箇所打ち欠きのある底部糸切の土師器小皿の完形品、指ナデと板状圧痕を残す河野分類B類にあたる。36は口縁に1箇所打ち欠きのある河野分類A類の完形の底部糸切土師器小皿。37は河野分類A類の底部糸切の土師器小皿片。38は口縁を大きく打ち欠いた河野分類A類の底部糸切土師器小皿の小型品。39は口縁を大きく打ち欠いた河野分類A類の底部糸切の土師器小皿。胎土精良。40は河野分類A類の底部糸切の土師器小皿、胎土精良。41はf区出土の河野分類A類の底部糸切の土師器小皿。42はf区出土の河野分類A類の底部糸切の土師器小皿だが、器高が低い。43はロクロ目土師器に近い底部糸切の土師器皿。44はロクロ目土師器の形態に近い底部糸切の土師器坏。45は底部糸切の土師器皿であるが、ロクロ目土師器のロクロ目をナデ消した皿である。46はロクロ目土師器皿片、河野分類C-1類。47は底部に板状圧痕を残すロクロ目土師器皿で、被熱による剥離激しく、外面に煤が付着している。48は底部糸切の土師器底部、胎土精良。49は完形のロクロ目土師器皿。50は口縁部に1箇所煤が付着し、1回のみ灯明皿として使用されたと推定される京都系土師器1期の小皿片。51はがんぶり瓦の破片。52は胎土は海部郡産で、内面に布目痕の残る丸瓦片。53は海部郡産の平瓦。54は海部郡産の埴。55は厚手で胎土は在地産の埴。56と57は埴。58は上下両端を削って再加工された凝灰岩製の五輪塔の水輪。59は凝灰岩製の五輪塔の水輪。60はe区出土の完形の中国銅鏡、元豊通寶（北宋1078年初鑄、篆書体）。61はc区底部出土の円形木製品の破片。なおSK265出土片と接合した瓦壘（接合資料10）の破片が出土している。ほかに石臼、鉄釘、焼けた壁土の破片が出土している。

備前焼

瓦質土器

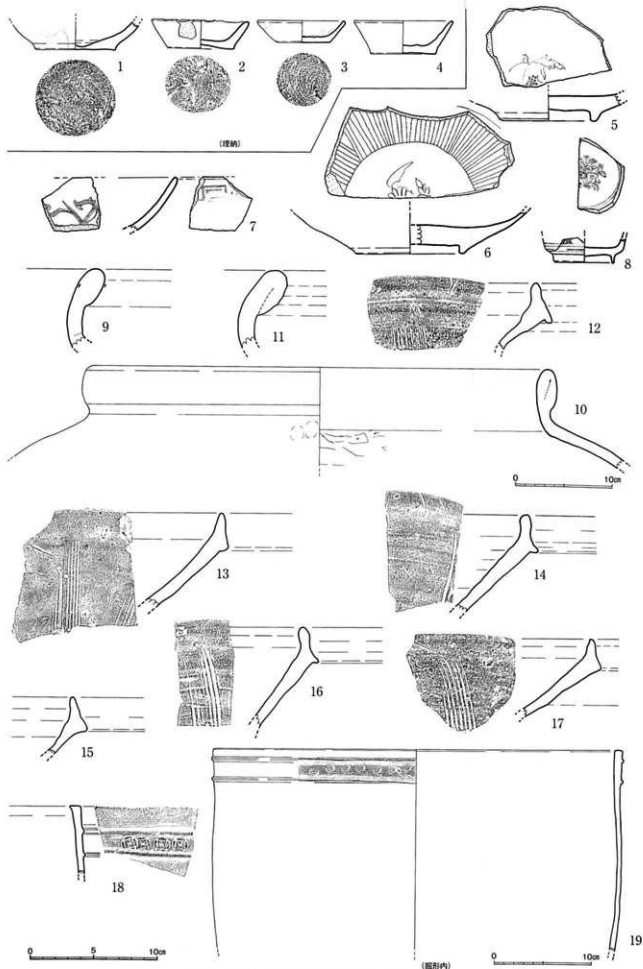
土師器

瓦・埴

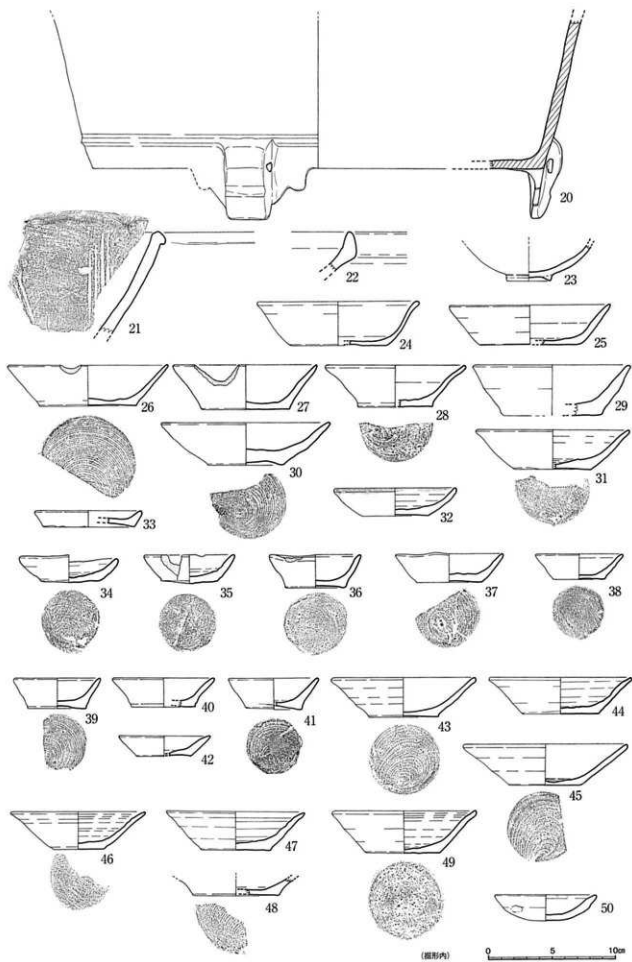
埋土内 粗土として取り上げた遺物は第4矢板列の水路埋土、第3矢板列の水路埋土、第2矢板列と第1矢板列の裏込めと埋土出土の遺物に当たる。このうち81と83の土師器および92の石塔はほぼ同時に廃棄されたものである。

備前焼

62は中国景德鎮窯系青花皿C群の萐苜底の皿片。63は中国製褐釉陶器の壺口縁片。64は備前焼の壺口縁片。65と66は15世紀後半中世5期の備前焼襷鉢の口縁片。67はB10区出土の15



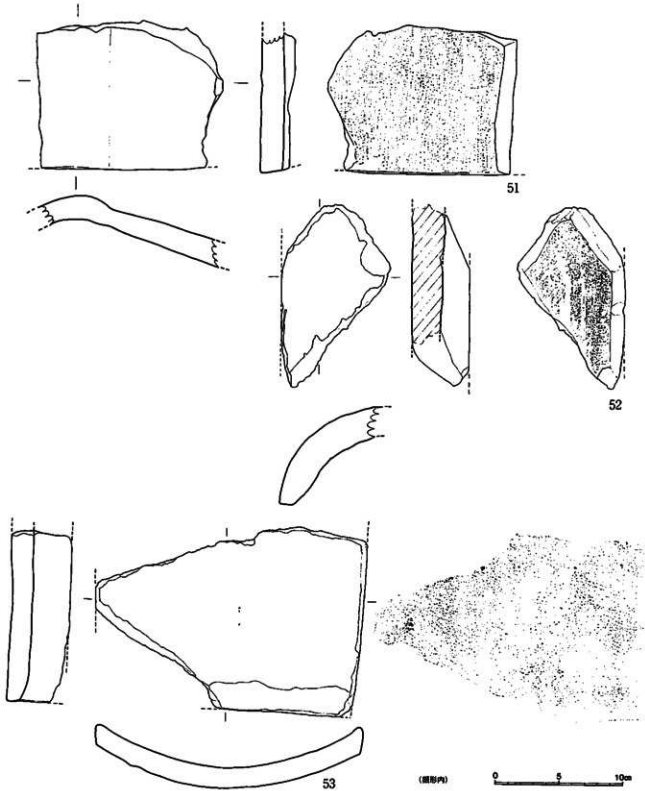
第4-16图① SD165出土遺物 (1/3, 10, 19 = 1/4)



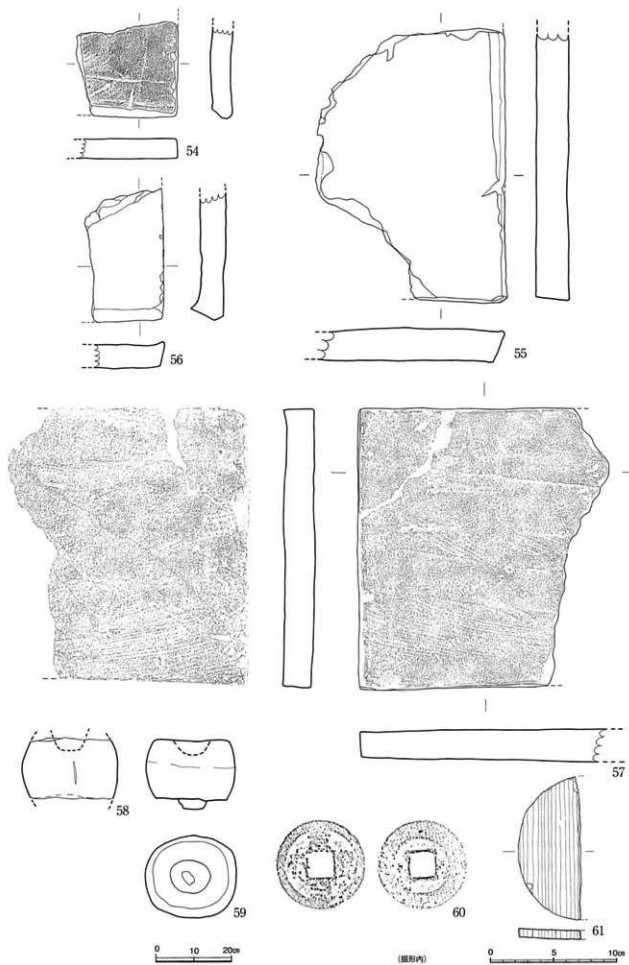
第4-16図② SD165出土遺物 (1/3)

瓦質土器
土師器

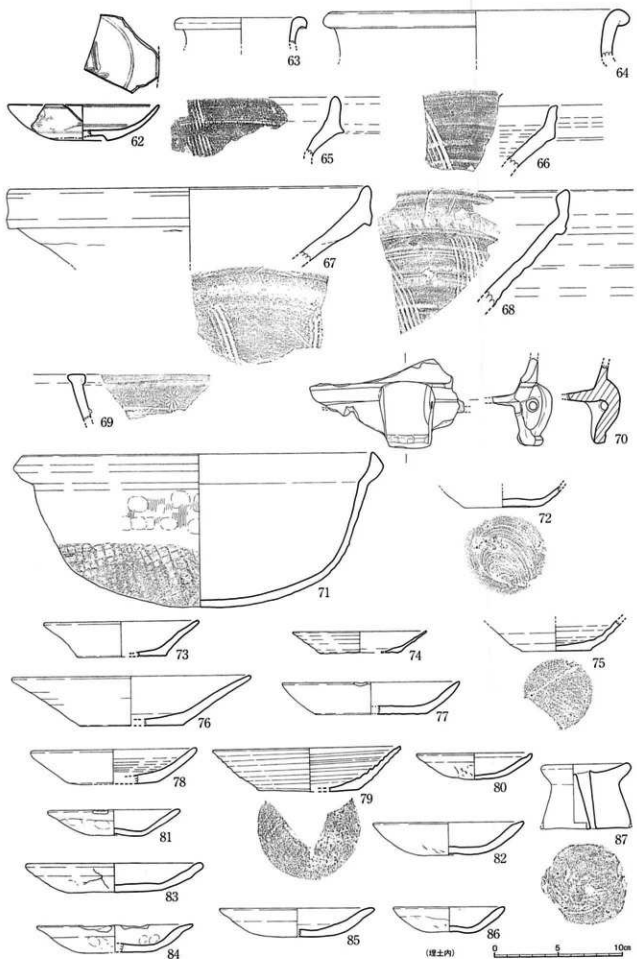
世紀前葉中世5a期の備前焼播鉢口縁片。68は中世6a期の16世紀前葉の備前焼播鉢。69は菊花文の刻印のある瓦質火鉢の口縁。70は横方向に穿孔のある瓦質火鉢の獸脚。71は底部外面に格子タタキを残す防長系の瓦質鍋（接合資料5）。72は口縁全周を打ち欠いた底部糸切の土師器坏の底部。73は河野分類A類の系譜を引く底部糸切の土師器皿。74は白っぽい胎土で薄手の大内系底



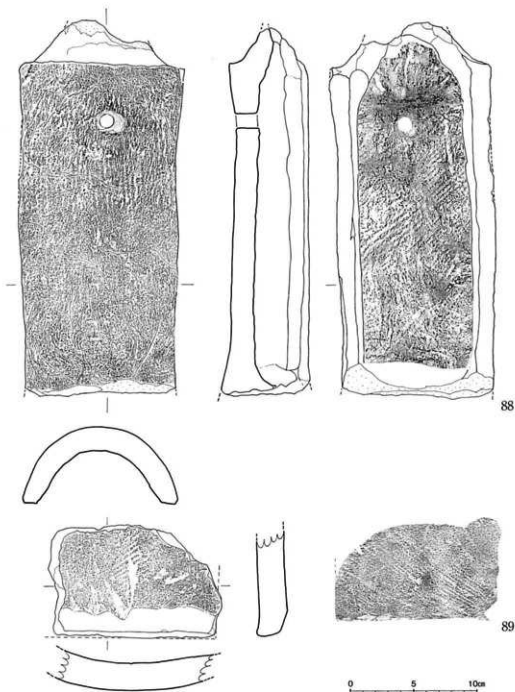
第4-16図③ SD165出土遺物 (1/3)



第4-16図④ SD165出土遺物 (1/3) (58・59=1/10, 60=1/1)

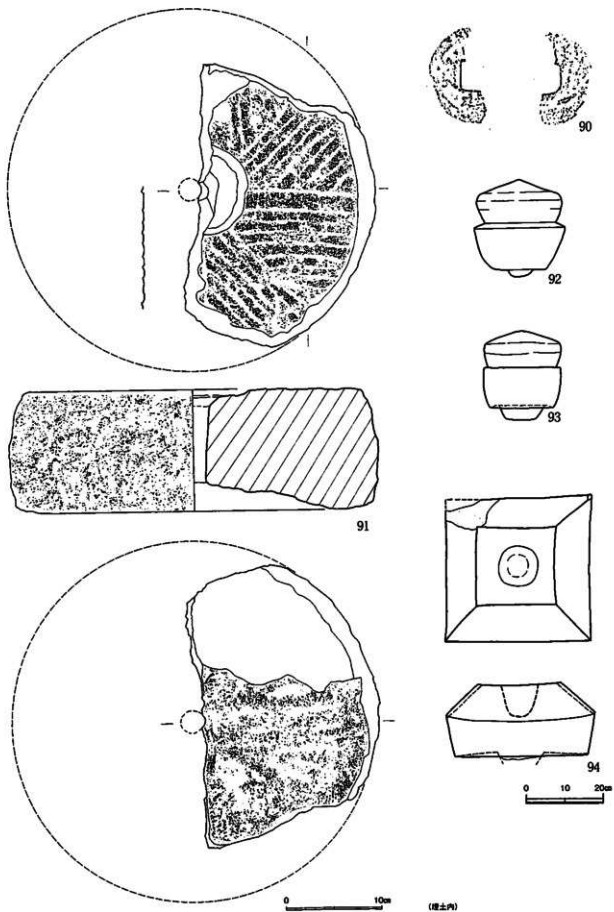


第4-16图⑤ SD165出土遺物 (1/3)

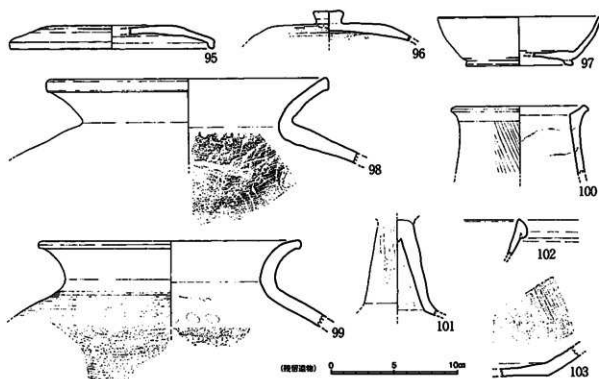


第4-16図⑧ SD165出土遺物 (1/3)

部糸切の土師器坏口縁片。75はロクロ目土師器の底部。76は河野分類A類の糸譜を引く底部糸切の土師器の大皿口縁片。73と同一形式。77は口縁に1箇所打ち欠きがある16世紀後半の京都系土師器を模倣した底部糸切の土師器皿口縁部片。78はロクロ目土師器皿。79はロクロ目土師器皿の大型品。80は口縁に2箇所煤の付着があり灯明皿として使用された完形の京都系土師器1期の小皿。81は口縁に1箇所打ち欠きのある京都系土師器1期皿。82は外面が被熱して変色して剥離し、内面には一部に煤が付着した京都系土師器2期皿の破片。83は口縁が1箇所大きく打ちかかれた京都系土師器2期皿、破片が接合したので廃棄される直前にその場で割られたことを示している。84は口縁に1箇所打ち欠きのある京都系土師器2期皿の口縁片。85はd区出土の京都系土師器2ないし3期の皿口縁片。86はd区出土の口縁に1箇所の煤の付着して灯明皿に使われた京都系土師器2期小皿。87はd区出土の底部糸切で穿孔の貫通する土師器場台A類。88は外面に縄目



第4-16图① SD165出土遺物 (90-1/1, 91-1/4, 92・93・94-1/10)



第4-16図④ SD165出土遺物(1/3)

石製品

タキ肌が残りに、目釘穴がある軒九瓦。89は海部郡産の平瓦片。90は半分に分れた中国銅銭。嘉祐通寶（北宗1056年初鑄・真書体）。91は安山岩製石臼の下臼の破片。下底に工具痕残る。92と93は凝灰岩製の五輪塔の空風輪。94は凝灰岩製の五輪塔の火輪。なおSK228、SK261、SK293出土片と接合した瓦質火鉢（接合資料15）の破片が出土している。ほかにB9区では中国漳州窯系青花、海部郡産の九瓦、がんぶり瓦、動物骨の頭骨、木製の卒塔婆の破片などが出土している。

残留遺物 95は8世紀後半の須恵器坏蓋。96は8世紀の土師器坏蓋。97は8世紀後半の須恵器坏身。98は古代の須恵器甕口縁。99は肩部にカキ目を施す古代の須恵器甕口縁片。100は非常に粗いハケ目の古代の土師器小型企救型甕口縁。101は古墳時代前期の土師器高坏脚部片。102は12～13世紀の口縁玉縁の白磁碗。103はc区掘形内より出土した12～13世紀の瀬戸美濃産銅皿の底部片。

SD259・SD277・SD294・SD255（第4-17図）

小溝群

墓地以前

C7・C8区（北2区）において第2層除去後に発見された以下に述べる4つの溝は、16世紀後半に成立する墓地の各埋葬に近接あるいは重複して検出されたため、調査当初は墓地に関連する区画の溝とも考えたが、小溝がすべて墓地の遺構に切られることや、溝の埋土中から16世紀と判断できる遺物が出土せず、最も新しい溝SD255からは、底部糸切の土師器小皿破片が出土しているため15世紀の遺構と判断した。

SD259・SD294は本来1連あるいは相互に関係すると見られる東西方向の小溝である。延長すると長さ10m、幅0.8m、深さ0.2mほどの断面円形の浅い溝である。SD259は15世紀後半の土坑SK256を切り、16世紀第4四半期の墓ST260（10号墓）とSD255に切られる。SD277は16世紀第4四半期の墓ST150（4号墓）に切れ、SD294は同じくST150（4号墓）とSD255に切られる。並行するSD277とSD294はともに灰色の粘質土の単純層からなり、本来同じ時期に使われた一組の並行する遺構と考えられる。以上の小溝からは時期を判定できる遺物はないが、京東系土師器の破片が含まれないことを確認した。

SD259・SD294を切るSD255はほぼ同じ方向にやや南に掘られた溝で、同一の機能の溝が作り直されたものと推定される。西側で北に屈曲する。長さ東西11m以上南北3m以上、幅0.4～0.6m、深さ0.3m。断面はゆるい台形をなし、埋土は単層の明灰褐色土で、小礫や礫が砕けたような粗い硬い土を多く含む。遺物は数点の土師器の破片が出土しているのみである。16世紀後半の墓地群であるST149(8号墓)、ST152(9号墓)、SP254、ST257(11号墓)、ST152(9号墓)、ST296(15号墓)、ST274(12号墓)、ST296(15号墓)に切られる。出土土師器がロクロ目土師器、京都系土師器を含まず底部糸切の土師器のみである点と、15世紀前半の土坑SK256を切ることから15世紀後半の遺構と判断した。その性格はなんらかの区画の溝と推定される。

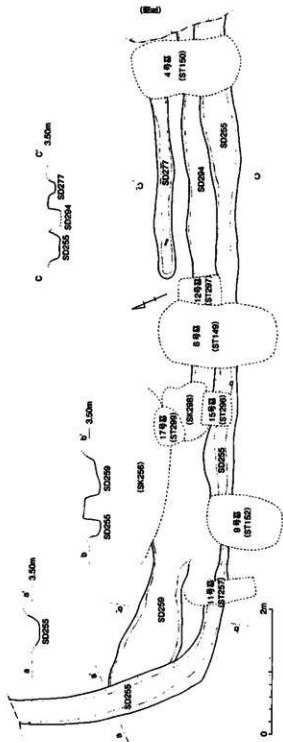
SD255 出土遺物 (第4-18図)

1は上面出土の底部糸切の土師器小皿。内面底部にらせん状のナデ痕があり、口縁に1箇所打ち欠きがある。2も底部糸切の土師器小皿片。1と2は同一形式である。ほかに瓦質土師器の破片が出土している。

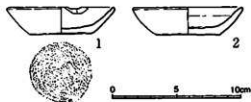
井戸

SE300 (第4-19図)

B10区(東区)の溝SD165の掘形底面で検出された井戸である。径1.4mの井戸の掘形内より、竹製の桶の蓋のみが出土し、桶の板材そのものは出土していない。井筒と推定される範囲内から小型の曲げ物が出土している。このような状況からおそらくSD165が掘削された際に井戸桶を抜き取ったものと推定される。桶は径0.65～0.7mである。底面の標高は海拔1.6mで、2.0mまでが水の湧き出る砂層である。激しい湧水のため記録することが不可能であったが、その底面は礫敷きであった。溝SD165にきられていることと、出土土師器がロクロ目土師器、京都系土師器を含まず底部糸切の土師器のみである点から15世紀の遺構と判断した。底部糸切の土師器等は在来系のもものが集中するので15世紀中葉以前と考えられる。



第4-17図 SD259・SD277・SD294・SD255 (1/60)



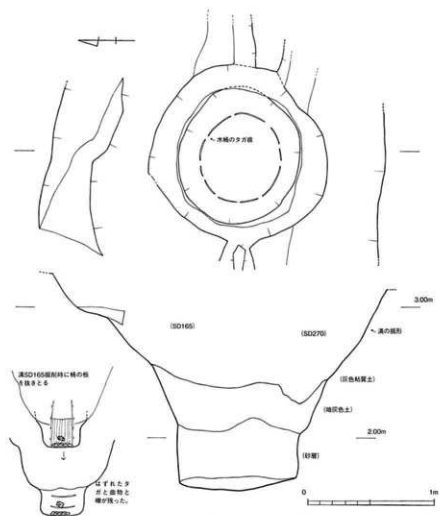
第4-18図 SD255 出土遺物 (1/3)

区画Bの溝

井筒は桶

抜き取り

15世紀前半



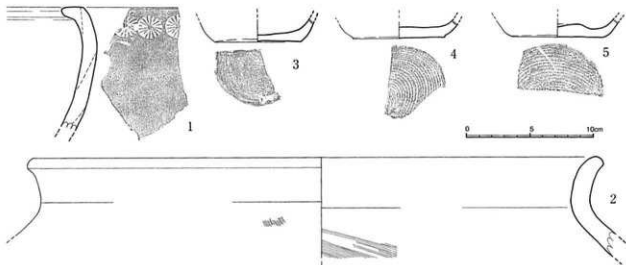
第4-19図 SE300 (1/30)

瓦質土器

SE300 出土遺物 (第4-20図)

土師器

すべて井筒内から出土したものである。1は口縁が内湾する瓦質火鉢の口縁部、外面に菊花文の刻印が連刻されている。2は口径40cmをこえる瓦質大甕の口縁。3と4は河野分類B類にあたる在来系の底部糸切の土師器坏底部片。5は底部糸切の土師器坏底部片。



第4-20図 SE300 出土遺物 (1/3)

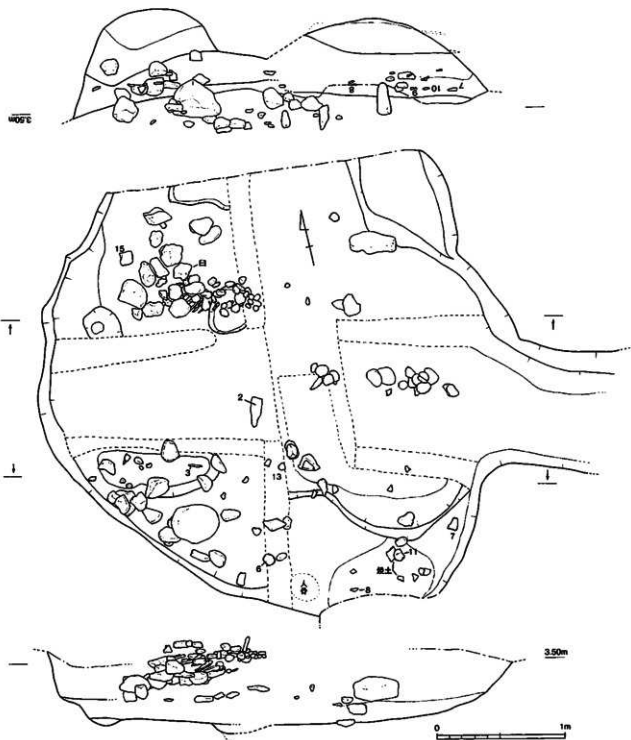
土坑

以下に記述する土坑のほかにSK266のA土坑(第4-39図)が15世紀にさかのぼる可能性が高い。詳しくは3項のSK266を参照。

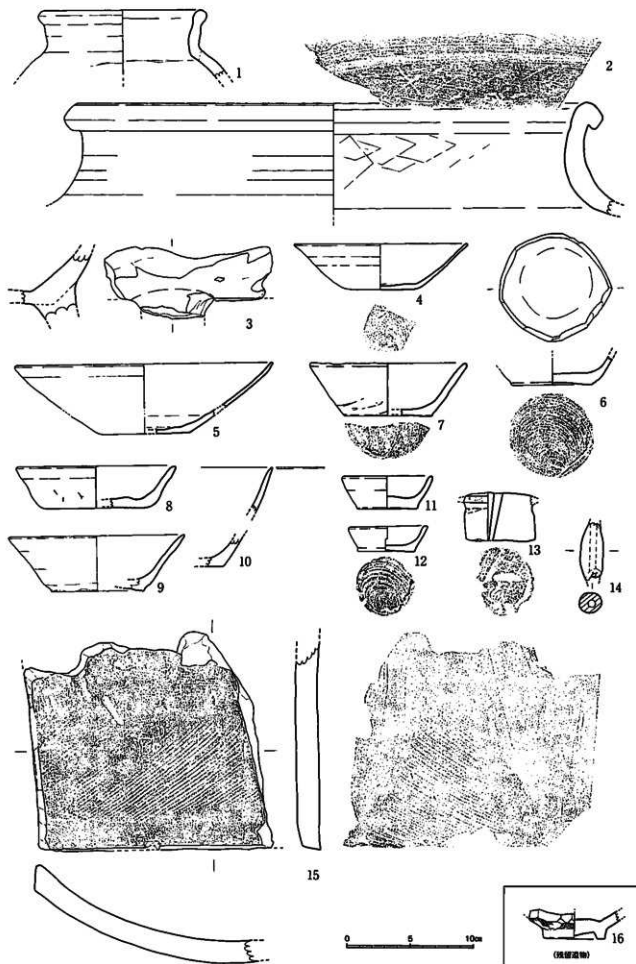
大型土坑

SK256 (第4-21図)

C8区(北2区)で検出された長さ3.7m、幅3.5m、深さ0.6mのほぼ平面円形の土坑で、SD131、SD259、16号墓(ST297)、17号墓(ST299)など多数の遺構に切られている。焼土や炭、動物骨



第4-21図 SK256 (1/30)



第4-22図 SK256出土遺物 (1/3)

廃棄土坑 や土師器の破片が散在する廃棄土坑である。とくに8～11の底部糸切の土師器坏は、廃棄された焼土のブロック中で検出されたもので、一括性が高い。ほかに動物の肋骨が廃棄されており、大型の廃棄土坑と考えられる。切合上最古の遺構であることと、出土遺物に16世紀に下るものがないことから15世紀の遺構と判断した。口縁が直線的に外上方にのび、器高の高い坏と小皿（河野分類A類）の出現する15世紀後半の遺構と考えられる。

SK256 出土遺物（第4-22図）

大内系 1は15世紀中世4ないし5期の備前焼の壺口縁部片。2は須恵器のような色調の中世2b期の備前焼の壺口縁片。3は脚部の残る瓦質火鉢の底部片。4は胎土精良で白っぽい大内系土師器器坏の破片。5は同じく大内系土師器大型の坏、復元口径はおよそ22cm。6は口縁全周を破損した底部糸切の土師器坏の底部で、底部内面の指ナデや板状圧痕はない。故意に打ち欠いたものと考えられる。7は器高の高い底部糸切の土師器坏、河野分類のA類。8から11までの4個体の土師器は、焼土ブロック中から出土しており同時に廃棄されたもので、一括性の高い資料である。8は器高の低い河野分類B類の底部糸切の土師器坏。9は河野分類A類の底部糸切の土師器坏。10は河野分類A類の底部糸切の土師器坏。11と12は河野分類A類の底部糸切の土師器小皿。13は15世紀の小柳分類5類にあたる土師器燗台。14は胎土から海部郡産と推定される管状土鍾B類。15はコビキ痕A類が明瞭な平瓦。

一括資料

残留遺物

残留した遺物として、16の12～13世紀の中国阿安窯系青磁碗の底部が出土したほかに、鉄釘片や骨片、古代の布目のつく六連式焼塩用製塩土器が出土している。

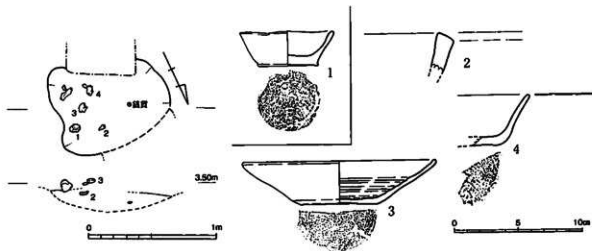
SK298（第4-23図）

C8区（北2区）で検出された長さ0.8m、幅0.7m、深さ0.3mのほぼ平面円形の土坑で、SD255、SD294、SK256を切り、15号墓（ST296）と17号墓（ST299）に切られた墓地以前の遺構である。埋土には炭を多く含み、伏せられた状態で底部糸切の土師器小皿の完形品1個体を上部で発見した。故意に埋置されたものと推定される。出土遺物は小片を含めてすべて15世紀後葉のものであり、遺構の切合関係も矛盾しないことから15世紀の遺構とした。

SK298 出土遺物

1は埋置された遺物で、逆さで出土した。炭化物の付着した完形の底部糸切の土師器小皿で、口縁を比較的広く打ち欠いている。河野分類のA類にあたる。

以下は埋土中で出土したもの。2は中世3ないし4期の備前焼壺鉢口縁。3は大内系土師器の坏で内面にロクロ痕が残る。4は14～15世紀代の在来系の底部糸切の土師器坏。



第4-23図 SK298（遺構1/30、遺物1/3）

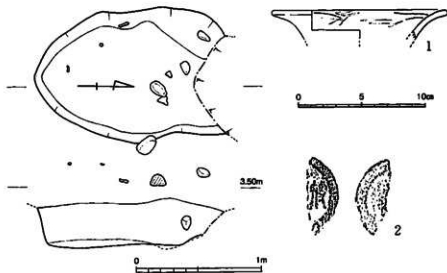
SK286 (第4-24 園)

廃棄土坑

B10 区 (東区) で検出された長さ 1.5m、幅 1.05m、深さ 0.3m の平面円形の土坑で、断面は半円形をなし、埋土は上下 2 層に分かれる。上層は暗茶褐色粘質土 (黄色粘土ブロックを多く、小礫・炭焼土を含む) で、下層は暗茶褐色軟質土で 1cm 大の炭を多く含む。SK283 の底面で検出し、その SK283 と 16 世紀第 2 四半期の土坑 SK285 に切られている。両層とも炭焼土を多く含む。出土遺物はいずれも碎片で、埋土中に散在しており、廃棄されたものと推定される。切合関係から 15 世紀の遺構と考えられる。

SK286 出土遺物

1 は鋳のある中国製の青磁皿口縁部、SE234 出土片と同一個体と推定される (接合資料 37)。2 は元符通寶 (北宋初鑄 1098 年・篆書体) と考えられる中国銅銭の破片。ほかに青花の小片、備前焼の壺、瓦質火鉢、埴の破片と銭種不明の銅銭が出土している。



第4-24 園 S286 (縮倍 1/30 遺物 1=1/3 2=1/1)

小土坑

SK287

B10 区 (東区) において攪乱坑の底面で検出された平面長円形の小土坑で、16 世紀第 2 四半期の土坑 SK285 に切られている。断面は半円形を成し、埋土はやや硬い小礫と暗茶褐色土の混層である。図示できる遺物はないが、土師器の破片が出土している。切合関係から 15 世紀の遺構と推定する。

SK206、SK207

C10-C11 区 (東区) で切りあって検出された 2 つの土坑である。いずれも基盤 IV 層上で検出され、SK206 を SK207 が切り、ともに井戸 SE234 に切られる。底面はともに凸凹で、いずれも残された部分がわずかなため形態は不明である。埋土は単層で、第 2 層と同じ土で埋没している。出土遺物はなく、切合関係から 15 世紀の遺構とした。

SK199 (第4-25図)

C11区(東区)で切りあった2つの土坑である。当初基盤IV層上で検出されたときは1つの土坑と考えたが、掘り進むと2つの土坑となった。まず長さ1.7m、幅1.4m、深さ0.1mの長円形のSK199A土坑が掘られ、それを切り込んで径0.8m深さ0.35mの円形の小土坑であるSK199B土坑が掘られている。その上からSP201とSP213に切られている。A土坑の底面には炭層(2層)が認められるが、土器は破片が散在する状況で、廃棄土坑と推定される。これに対しB土坑には底面に炭層が堆積し、その上に口縁が打ちかかれた多数の底部系切の土師器の坏7個体と小皿1個体が置かれていた。中には破砕されたような土師器や完形のまま逆さで発見されたものもあった。中央に置かれた8の土師器坏が逆さにおかれ、その周囲の土師器はすべて正位で置かれていた状態であった。すべては破砕あるいは口縁を打ち欠かれてる。火を焚く行為をともなった何らかの祭祀行為の痕跡と推定される。

以上のような祭祀土師器の配置からみると、まず中央に8の坏が逆さに置かれ、その周囲に5・7・9あるいは6までの坏が正位で置かれ、その外周に北端に4の坏、南端に10の坏が、いずれも口縁全周を大きく打ち欠いた底部のみの状態で置かれたものと考えられる。その後最後に逆さにおかれた8の坏に重なるように、土器群全体のほぼ中央に11の小皿が正位で置かれている。この小皿のみに煤が付着しており、祭祀の際の灯明につかわれた可能性も考慮する必要がある。

この出土土師器はすべて河野分類A類の底部系切の土師器であるところから、B土坑は15世紀後葉の遺構と考えられる。

A土坑

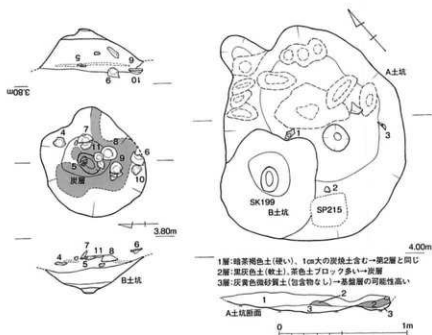
廃棄土坑

B土坑

祭祀土坑

中央に坏

最後に小皿



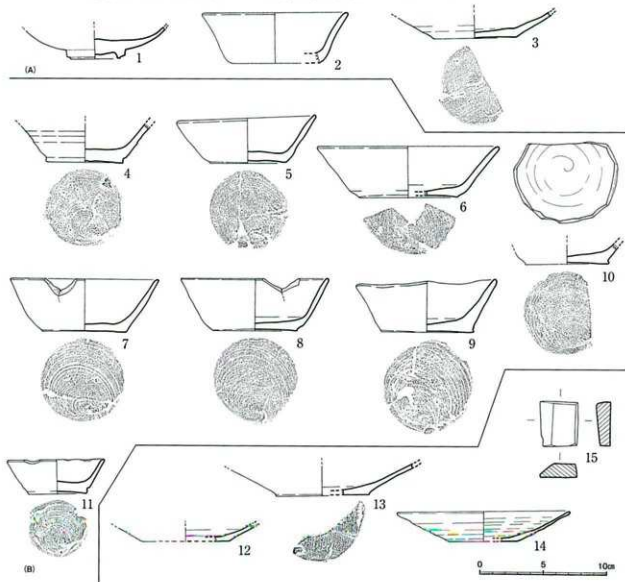
第4-25図 SK199 (1/30)

SK199 出土遺物 (第4—26 図)

SK199A 1は白磁皿底部で、外面高台外まで露胎である。2は口縁が外反する河野分類A類にあたる底部糸切の土師器杯の口縁。3は白っぽい色調の大内系土師器皿の底部片。底部に板状圧痕あり。

SK199B 4～11は一括埋置の底部糸切の土師器群。4は口縁の全周を欠いた底部糸切の土師器杯。土師器群の北端に正位で置かれた状態である。5は完形に復元できたが、出土時はつぶれていた底部糸切の土師器杯。6はSP215によって半分がうしなわれた大型の底部糸切の土師器杯。7は口縁を2箇所大きく打ち欠いた上に、故意に割ったような状態で正位におかれた底部糸切の土師器杯。8は逆さにして中央におかれた底部糸切の土師器杯で、口縁に1箇所打ち欠き、そこから大きく割れている。9は口縁を1箇所打ち欠いて正位で出土した底部糸切の土師器杯。10は南のはしに正位で置かれた底部糸切の土師器小皿の完形品。以上の底部糸切の土師器は杯・小皿とも同一型式で、口縁部が外方にやや外反気味に長く伸びるタイプで、器高も高くなる。底部内面の指ナデとそれに対応する板状圧痕はまったくない。したがって河野分類のA類にあたり、15世紀後葉の一括遺物として貴重である。

以下の3つの遺物は出土位置を明確にすることはできなかったが、関係する破片がB土坑にはないのでA土坑の可能性が高い遺物である。12～14は白っぽい胎土の大内系土師器皿。15は前面に磨り面のある小型砥石。ほかに瓦質火鉢の底部片なども出土している。

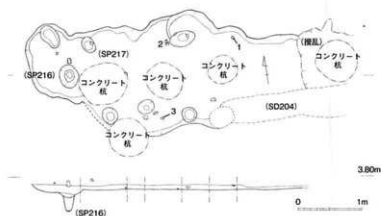


第4—26 図 SK199 出土遺物 (1/3)

SK203 (第4-27図)

浅い大型土坑

C11区(東区)において基盤IV層上で発見された東西に長い不整長円形の土坑で、長さ4.5m、幅1.8m、深さ0.1mの浅い皿状をなす。SP178とSD204に切られ、SP216とSP217と重複している。東西溝SD204を屋敷の境界と看做せるならば、境界のそばに掘られた浅い土坑と考えられる。埋土は単一層で第2層の土が入っていた。遺物は碎片で散在した状態である。埋土中の土師器が底部糸切の土師器河野分類A類のみで、ロクロ目土師器や京都系土師器を含まないところから15世紀後葉とした。

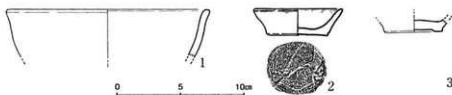


第4-27図 SK203 (1/60)

SK203出土遺物 (第4-28図)

土師小皿

1は中国製青磁碗口縁片。2は口縁にひろく煤が付着して灯明皿として使用されたことがあきらかな底部糸切の土師器小皿。3は底部糸切の土師器小皿。2と3はともに内面の指ナアと底部の板状圧痕がつかず、口縁部が外上方に直線的に伸びる河野分類A類にあたる。ほかに丸瓦、平瓦や、古代から残留した須恵器甕の破片も出土している。



第4-28図 SK203出土遺物 (1/3)

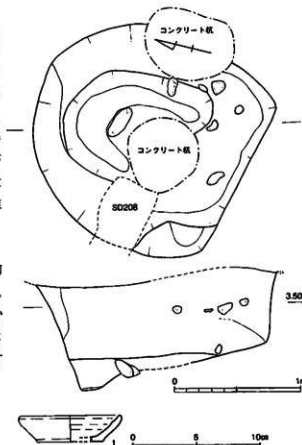
SK212 (第4-29図)

C11区(東区)において基盤IV層上で発見された長さ1.9m、幅1.85m、深さ0.7mの平面円形の土坑で、SD208に切られている。埋土中には比較的層が少なく、砂層と黄色土ブロックが互層をなしている。中からは15世紀代にあたる器高の高い底部糸切り土師器小皿の小片が出土している点と、切合関係上最古の遺構になるところから15世紀の遺構と推定した。

SK212 出土遺物

灯明皿

1は河野分類B類の在来系の底部糸切の土師器小皿。外面に煤が付着しており、灯明皿として使われた痕跡がある。ほかに備前焼壺の底部や上部から混入したと考えられる京東系土師器2期の皿の破片が出土している。



第4-29図 SK212 (遺構 1/30 遺物 1/3)

SK251 (=SK302) (第4-30図)

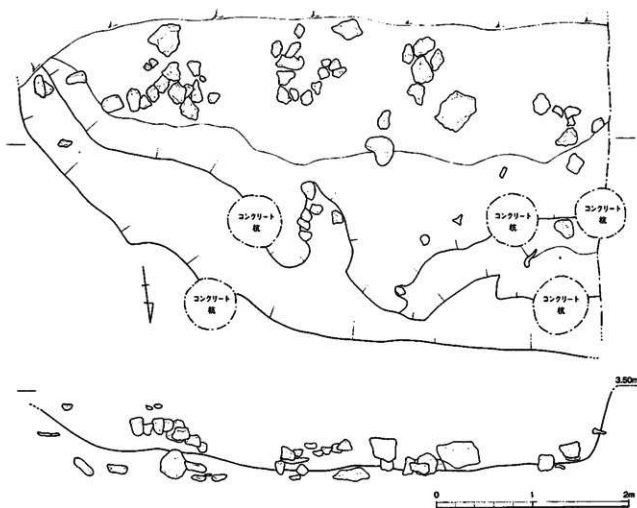
埋め戻し
廃棄土坑

B11区(東区)において発見された長さ6.0m以上、幅3.2m以上、深さ1.0mの不整形の大型土坑で、底面も整っていない。SD141とSD165、S280、S281、S282に切られる。内部には層が散在する。埋土は砂層と粘土が互層をなし、人為的な埋め戻しがおこなわれた廃棄土坑と推定される。SK302としてA11区の道路状遺構SF151の下で検出した土坑も、その位置からSK251の一部であるとされる。廃棄された土器の中には完形のままの底部糸切の土師器などもあり、ロクロ目土師器、京東系土師器を含まない点と、SD165やSF151より古い遺構であることから、15世紀の遺構と判断した。さらに9~13の在来系の土師器の型式からみて15世紀前半にさかのぼると推定される。

SK251 出土遺物 (第4-31図)

廃棄遺物

1は龍泉窯系青磁碗の端反りの口縁破片。2は華南三彩の盤の底部片、同一個体と思われる破片がSP213から出土している。上部からの混入品の可能性が高い。3は口縁が内湾し外面に菊花文の刻印が連刻された瓦質火鉢、口径は51cmになる。多くの破片はSD165やSD141、さらに第2層まで残留していた。4は瓦質鉢の口縁部と考えられる破片。5は口径21.6cmの比較的小型の瓦質撥鉢。内面は磨耗が激しく、よく使い込まれている。6は瓦質の徳利口縁片。7は瓦質土器の壺口縁片。8のabcは同一個体の瓦質撥鉢で、底面に板状圧痕があり、5の撥鉢と同一型式である。内面は磨耗が激しい。9~11は、底部内面に指ナデを、対応する外面に板状圧痕を残す在来系の底部糸切の土師器坏、河野分類B類にあたる。9・10と11とは形式が異なる。前者の坏は口縁がやや外反し、後者は内湾する。12は9・10の形式に対応する底部糸切の土師器小皿、完形だが口縁の3箇所を打ち欠き、口縁全体に広く煤が付着する灯明皿。13は11の坏に対応する底部糸切の土師器の完形の灯明皿。口縁が広く欠けている。14は糸切(コビキA技法)で切り出した埴



第4-30図 SK251 (1/40)

状の粘土板を凸型に載せて整形し、端部をヘラで切り落とすという製作工程がよくわかる平瓦片、胎土は大型石英粒を多量に含む海部郡産である。15は完形の管状土錘で端部をヘラ調整するA類。16は半分に折れた管状土錘のB類。ほかに青磁や瓦の破片が出土している。

残留遺物

残留遺物。17は2つの小穴を穿つボタン状の結晶片岩製の石製品。径23cm。古墳時代後期からの残留遺物の可能性がある。18は古代8世紀後半の土師器坏蓋。19は古代8世紀末の須恵器坏身。20は古代8世紀の箱形の土師器坏片。21は14世紀中世4期の備前焼播鉢の口縁片。22は被熱した京都系土師器2期皿、切り合い土SK251はこの土器の時期まで下ることはないので、検出できなかったピットなどに含まれた上部からの混入品と推定される。ほかに備前焼の破片や古代の須恵器の破片がかなり出土している。

S275

C9区(北1区)において第2層除去後に発見された土坑状の遺構であるが、ほりあげると底面がでこぼこしているので、自然の窪みの可能性がある。SK236とSK232に切られる。埋土は単層で、黄色粘土ブロックの多い第2層と同じ土で埋没している。内部からは須恵器の破片が出土しているのみであるが、埋没土の内容から古代の遺構ではないと判断した。



第4-31圖 SK251 出土遺物 (1/3, 3=1/4, 17=1/1)

ビット

以下のビットは16世紀に下る遺物がないことや、切合関係上16世紀に下る可能性がないことなどから時期を推定したものである。

SP183

C11区(東区)の基盤Ⅳ層上で検出された径0.4m深さ0.29mの長円形のビットであるが、2つのビットの重なりであることが判明した。埋土は第2層土の単一層で、ほかの遺構との切合関係はない。内部から15世紀代の底部糸切の土師器坏の口縁や底部の破片、さらに残留した古代の土師器坏底部の破片が出土している。

SP221

C10区(東区)の基盤Ⅳ層上で検出された径0.25m、深さ0.2mの円形のビットである。ほかの遺構との切合関係はなく、内部から15世紀代の底部糸切の土師器坏口縁の破片が出土しているのみである。

SP223

C10区(東区)の基盤Ⅳ層上で検出された径0.2～0.3m深さ0.2mの長円形のビットである。ほかの遺構との切合関係はなく、内部から白磁口縁と底部糸切の土師器の破片が出土している。16世紀第1四半期の溝SD245に切られるところからも15世紀代の遺構と考えられる。

SP288

C9区(北1区)の基盤Ⅲ層直上で検出された長さ0.5m、幅0.3m以上、深さ0.5mの不整なビットで、SE148とSD284に切られている。埋土は基盤層土のブロックを多く含むC層土の単一層である。埋土から底部糸切の土師器付の底部の破片が出土している。

小結

以上15世紀代とした遺構群は、その切合関係と平面的な位置からおおよそ2時期に分けることができる。すなわち道路状遺構SF151と水路SD165の建設の以前と以後である。いま仮に以前をA期、以後をB期とすると、A期に属すると考えられる遺構は、土坑SK256・井戸SE300・土坑SK251などである。B期に属すると考えられる遺構は溝群SD259・SD277・SD294・SD255、土坑SK298などである。ほかの遺構はどちらの時期に属するか明確にしたいが、東西道路建設以前にあたる15世紀のA期には、この付近に井戸や大型廃棄土坑をとまう居住遺構が、第4南北街路が想定される位置に面して分布している点が注目される。それを都市内の遺構と見るかどうかは別として、第4南北街路の南端に近いこの付近に15世紀代の居住空間が広がるようになっていたことがわかる。

次の15世紀B期には東西道路が建設されている。その道路が井戸や大型土坑を切っているところからみて、道路SF151の建設は居住空間の移転を伴っていたと考えられる。その事態はそれまでとは異なる街路整理すなわち都市計画の施工によるものと推定される。同時に東区ではそのまま町屋が引き継がれるが、北2区付近では道路の北側の、第4南北街路からみれば町屋の裏側に当たる位置に、方形区画の溝と考えられる小溝群が掘られている。おそらく町屋の背後に別な施設が設けられているのであろう。

道路以前

A期

B期

道路建設

3 16世紀第1四半期の遺構と遺物

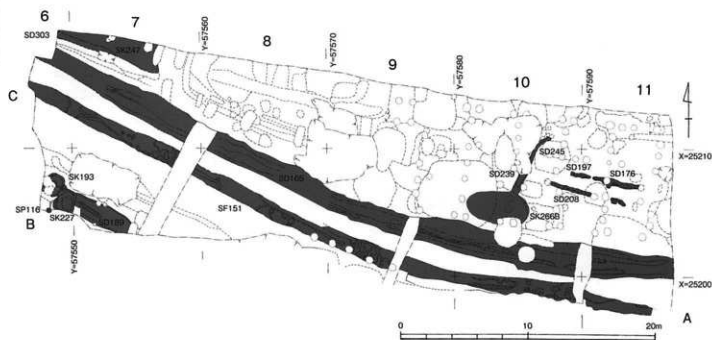
概要（第4-32図、付図5中）

いわゆる
段々土師器

16世紀第1四半期に認定した遺構は、ロクロ目土師器を含むが京都系土師器をまったく含まず、さらに遺構の切合関係上矛盾のない遺構で、その多くは16世紀代の型式と認められるロクロ目土師器が出土した遺構である。

道路と水路

15世紀の後半（厳密に見れば末に近いと考えられる）の構築された道路状遺構 SF151 第7硬化面とその北側の道路側溝を兼ねた水路である溝 SD165 の第4矢板列が維持されている。それ以外の16世紀第1四半期代と考えられる遺構は、その東西道路の北側にあたる C7 区付近の西区と BC10/11 区の東区、さらに道路南の C6、C7 区の南区の3箇所に分布が分かれる。C11 ~ B11 区付近は前代からひきつづき本東第4南北街路に面した場所にあたる。

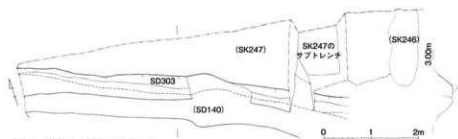


第4-32図 16世紀第1四半期の遺構 (1/300)

溝

SD303 (第4-33図)

C6 ~ C7 区 (西区) で検出された東西にのび、溝 SD165 に並行する溝で、長さ 7.1m、幅 0.5m 以上、深さ 0.3m で断面は半円形をなす。16世紀第1四半期の土坑 SK247 を切り、第2四半期の同種の溝 SD140 に切られる。断面で観察されるやわらかい淡褐色微砂層のラミナ状堆積は、埋土が水成堆積であることを示す。内部からは底部糸切の土師器の破片のみが出土している。切合関係と京都系土師器が出土しないことから16世紀第1四半期の遺構と判断した。



第4-33図 SD303 (1/80)

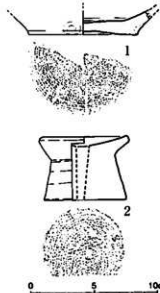
SD239=SD245 (第4-34図)

当初2つの遺構としたが調査が進むと中央部を擾乱で破壊された同一の溝であることが判明した。C10・B10区(東区)の第2層除去後に検出された南北方向に伸びる溝で、長さ5.2m、幅0.5m、深さ0.2m、断面は浅い皿状になる。SP221・SP223を切り、16世紀第2四半期の土坑であるSK224とSK265の両者に切られ、SK244と重複する。埋土は第2層土の単一層である。遺物はいずれも破片で散在した状況である。切合関係と2の16世紀前半代に編年されるSD245土師器燗台から16世紀第1四半期の遺構と考えられる。

SD239=SD245 出土遺物

(第4-35図)

1はSD239出土の口縁全周を故意に打ち欠いた底部糸切の土師器杯、おそらくロクロ目土師器となるだろう。2はSD245出土の中央の穿孔は貫通し、底部糸切の土師器燗台A1類。ほかに備前焼変調部や土師器の破片、古代の土師器、土壁の一部なども出土している。



第4-35図 SD239=SD245 出土遺物 (1/3)

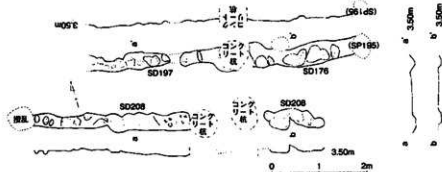


第4-34図

SD239=SD245 (1/60)

SD176、SD197、SD208 (第4-36図)

B10・B11区(東区)の基盤IV層上で検出された平行あるいは連続する溝状の遺構である。北側に東西に伸びるSD176とSD197は本来同一の溝であったと考えられる。長さ5.5m以上、幅0.2~0.5m、深さは0.1~0.2m。その南に約1m隔てて平行にSD208が伸びている。長さ6.1m以上、幅と深さは同じである。SD176はSP195と重複し、SD197は16世紀第2四半期の井戸SE144に切られ、SD208はSK212を切る。埋土はいずれも第2層土の単一層で、出土遺物なし。当初は路地にあたる狭い道路の溝溝とも考えたが、底面に浅い窪みが連なって存在することから、ぐり石を並べて置いた建物基礎つまり壁の下部構造の痕跡と考えられる。方向は東西だが、南に14ないし16度振り、第4南北街路や道路状遺構SF151の方向とは必ずしも一致しない。時期は切合関係から16世紀第1四半期以前で、15世紀代にさかのぼる可能性も残している。



第4-36図 SD176、SD197、SD208 (1/60)

南北溝

土師器燗台

遺物基盤

土坑

SK247 (第4-37図)

大形土坑

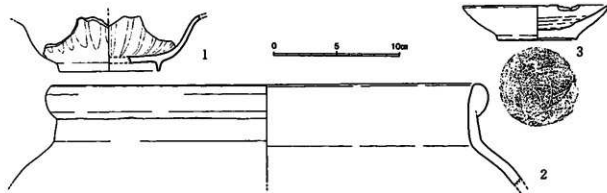
C7区(西区)の第2層除去後に検出した巨大な方形の土坑で、調査区の北に更に広がると推定される。長さ8m以上、幅2.4m以上、深さ0.8mで湧水のため底面まで達していない。16世紀第2四半期の溝SD140、SK246とSK268(3号墓)と第1四半期の溝SD303に切られる。内部からは完形のロクロ目土師器皿(3)が出土している。切合関係とロクロ目土師器の出土から16世紀第1四半期の遺構と考えられる。調査は一部にトレンチを入れたのみで、全掘はしていない。



第4-37図 SK247 (1/80)

SK247 出土遺物 (第4-38図)

1は中国製の端反りの白磁鉢片。2は15世紀中世5期の備前焼の甕口縁片。3は接合により完形に復元したしたロクロ目土師器皿で、被熱して口縁に2ないし3箇所の打ち欠きがある。ほかに京都系土師器2期の皿の破片が出土しているが、ピットの見落とし等による上部からの混入である。



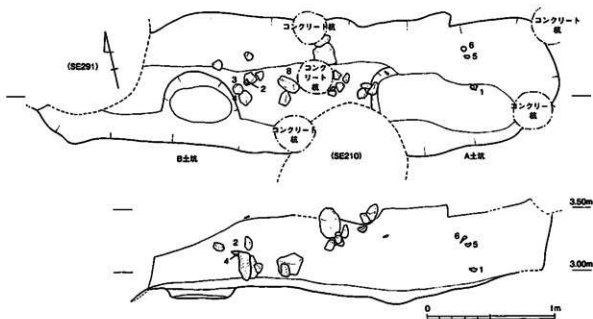
第4-38図 SK247 出土遺物 (1/3)

SK266 (第4-39図)

B10区(東区)の第2層除去後に検出した長さ8.2m、幅2.2m、深さ0.65mの大型長円形の土坑である。16世紀第4四半期前半築造の井戸SE210、SK237、第2四半期の土坑SK265と同じくSK272に切られる。底面に炭焼土混じりの黒色土が堆積。その黒色土上面にロクロ目土師器皿(3と4)が正位で発見され、やや離れて土師器の小皿(5と6)が多く出土している。5と6はいずれも15世紀代の底部糸切土師器の特徴を持っているので、SK266は東西2つの土坑が切りあっている可能性がある。その目で見ると西側のほうが底面が低くなり、小皿周辺の遺物である1の青磁碗も15世紀代のものである。東側をA土坑、西側をB土坑とするならば、A土坑は土師器小皿の型式から15世紀後半、それを切って16世紀第1四半期にB土坑が掘られたものと推定される。ともに何らかの祭祀行為の痕跡であろうか。上部から混入の遺物に12の京都系土師器皿のような新しいものがある。

A土坑

B土坑



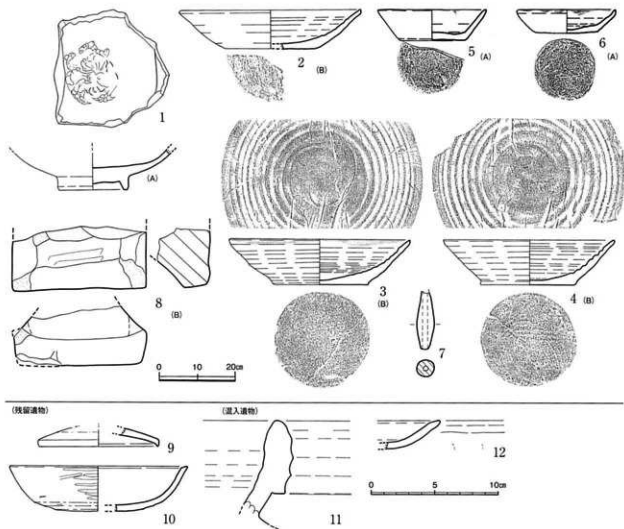
第4-39図 SK266 (1/30)

SK266 出土遺物 (第4—40図)

土師器皿

以下の出土遺物のうち1・5・6はA土坑に、2～4・8はB土坑に帰属することが明確である。そのほかの遺物は不明である。1は見込みに輪花文のある中国龍泉窯系青磁碗の底部片。口縁全周が打ちかかれたようにも見える。2はロクロ目土師器の口縁片。3は接合してほぼ完形のロクロ目土師器皿。4はロクロ目土師器皿。3と4は同じ位置に重なるように出土した。5は灯明皿として使用された煤の付着した底部糸切の土師器小皿の完形品、河野分類A類で胎土に金雲母がはいる。口縁部が大きく破損している。6は口縁に広く煤が付着し灯明皿として使用された底部糸切の土師器の小皿。ほぼ完形。7は管状土錘B類。8は凝灰岩製の五輪塔の火輪を縦に半裁して石材として再利用したもの。ほかに鉄器片、五輪塔の火輪や埴の破片が出土している。

以下は残留遺物と混入遺物。9は8世紀末の須恵器杯蓋口縁片。10は8世紀の土師器杯、外面に回転ヘラ削りがある。11は近世1期の備前焼堯口縁片。12は京都系土師器2期の皿口縁片。11と12は切台上あり得ない時期の遺物なので、上部からの混入あるいは調査上のミスと考えられる。



第4—40図 SK266 出土遺物 (1/3, 8=1/10)

SK227 (第4-41図)

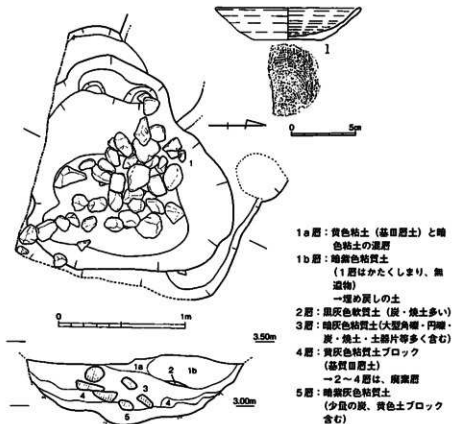
廃棄土坑

以下のSK227、SK189、SK183はB6・B7区(南2区)において同一時期に、切り合いながら連続して掘られた廃棄土坑群である。切合の古い順から記述する。まずSK227は基盤III層上面で検出した長さ2.1m、幅1.5m、深さ0.55mの不整形の土坑である。SK189とSK193とピットに切られる。断面は深い皿状で、埋土は上下2層に分かれ、上層(1層)は基盤III層粘土で埋め戻して密閉している。下層(2~4層)には隙が集中する。隙の中には安山岩製の河原石とともに凝灰岩の角礫が含まれる。隙層と粘土層は斜めに堆積し、南の方向から廃棄されたものと推定され、最後は人為的に埋め戻している。総じてSK227は廃棄土坑として掘られ、廃棄後すぐに埋め戻されている。下層の隙層内からロクロ目土師器の破片が出土していることや、切合関係から16世紀第1四半期の遺構とした。

埋め戻し

SK227 出土遺物

1は下層出土のロクロ目土師器の皿片、中型の法量である。ほかに中国製青磁碗、備前焼甕などが出土したが、京都系土師器の破片はまったく含まなかった。

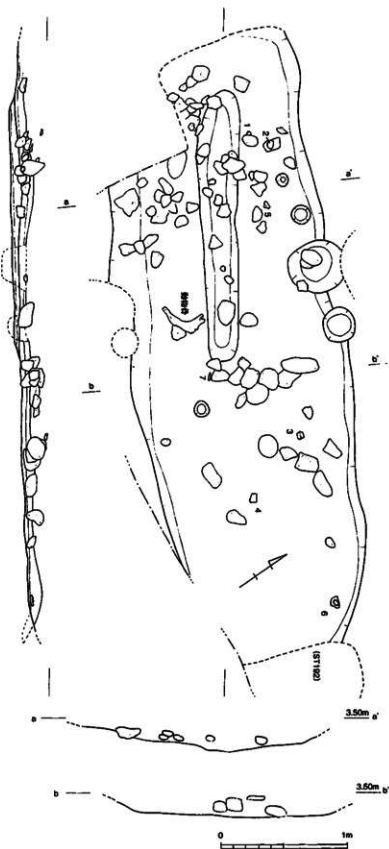


第4-41図 SK227 (遺構 1/30、遺物 1/3)

SK189 (第4-42図)

浅い溝状
道路と並行
廃棄土坑

B6・B7区(南2区)の基盤IV層上で検出した長さ5.0m、幅1.7m、深さ0.2mの東西に長く伸びる溝状の土坑で、断面は浅い皿状を示し、底面に土坑の方向と一致する東西の浅い溝が走る。道路状遺構SF151と並行しているため、本来は何かの機能をもつ施設の一部として掘られたものと考えられる。SK227を切り、SK191と16世紀第2四半期の遺構ST192にきられる。埋土は第2層土の単一層で、人頭大の礫を含む。礫には河原石のほか凝灰岩礫が多く含まれ、被熱したものも多い。その内部には土器の破片が散在し、動物骨も混じり、最後には廃棄土坑として埋没していると考えられる。土師器には京都系土師器を含まず、ロクロ目土師器が最新の遺物であることから16世紀第1四半期の遺構とした。

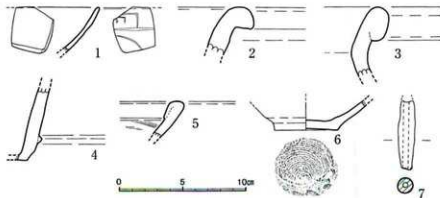


第4-42図 SK189 (1/30)

SK189 出土遺物 (第4—43図)

破片のみ

1は外面に雷文帯とラマ式連弁を描く15世紀の中国龍泉窯系青磁碗C-II類の口縁片。2は14世紀の中世3ないし4期にあたる備前焼の壺口縁片。3は15世紀前半の中世5期にあたる備前焼の甕口縁部片。4は瓦質火鉢の胴部片。5は口縁内面に粘土を巻き込み防長系の瓦質鐏鉢口縁部。6は内面をかなりナデ消したロクロ目土師器皿の底部片。7は端部をへら調整しないB類の管状土鉢。ほかに瓦質の鍋や鉢、鉄釘や動物の下顎骨などの破片が出土している。



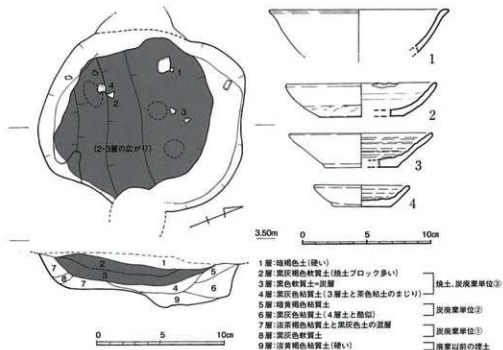
第4-43図 SK189出土遺物 (1/3)

SK193 (第4—44図)

廃棄土坑

土師小皿埋置

B6区(南2区)の基盤Ⅲ層上面で検出した長さ1.6m、幅1.4m、深さ0.4mの不整円形の土坑で、断面は半円形をなす。古代の土坑SK226と16世紀第1四半期の土坑SK227を切り、第4四半期の溝SD194と柱穴に切られる。埋土には3回の廃棄があり、3回目には炭の堆積がある(廃棄単位1~3)。炭層の底には4の底部糸切の土師器小皿が完形のまま正位で置かれていた。口縁を打ち欠いており、何らかの祭祀行為の残りを廃棄したものと推測される。出土した土師器の破片は底部糸切の土師器とロクロ目土師器に限られ、京都系土師器を含まない。出土遺物から16世紀第1四半期の遺構と考えられる。



第4-44図 SK193 (遺構1/30、遺物1/3)

SK193 出土遺物

1は2回目の廃棄にあたる5ないし6層出土の端反りの中国龍泉窯系青磁碗。2は3回目の廃棄単位に当たる3層出土の底部糸切の土師器皿の口縁部片、口縁に2箇所打ち欠きがある。河野分類のB類で在来系。3はロクロ目土師器皿の破片。4は3回目の廃棄単位に当たる2層出土のロクロ目土師器小皿、口縁をおおきく打ち欠かれた状態で、正位で検出されている。

ビット

SP166 B6区(南2区)の第2層除去後に検出した径35cm深さ30cmの柱穴で、内部からロクロ目土師器皿の口縁の破片が出土している。

小結

16世紀第1四半期の状況をまとめると、次の4点に集約できる。

道路と側溝

① 15世紀後半あるいは末に建設された道路SF151とその側溝SD165においては、道路建設当初の第7硬化面と水路の第4矢板列がこの時期まで同一の位置に維持される。SD165の南端と南2区の同時期の廃棄土坑SK189などに挟まれた空間が、その道路幅としてよければ、この時点での東西道路の最大幅は約8mである。

南側の区画

② 南2区で道路状遺構SF151と並行するように廃棄土坑が3基以上つぎつぎと掘られている。この時期に道路南側に廃棄土坑を連続して掘るような比較的大きな区画が成立したものと考えられる。

北側の区画

③ 西区に方形の巨大な土坑SK247が掘られ、その後も同じ位置に溝SD303が掘られている。道路側溝SD165と並行し、略方形の区画が道路にそって新たに設定されたことを示している。この区画は15世紀後半～末の東西道路建設と同時に建設された溝群SD259・SD277・SD294・SD255で区画された方形の敷地の、さらに奥に当たる位置が開発されたことを物語っている。

「中町」の角地

④ 東区の第4南北街路と東西道路に挟まれた角地には、溝SD239=SD245で区画された方形の区画が成立し、その西南隅には祭祀行為が行われた可能性の高い土坑SK266が掘られ、内部にはSD176、SD197、SD208を建物の基礎の一部とする建物が造られていたと推定される。壁の方から見て第4南北街路に面する宅地であったと推定される。

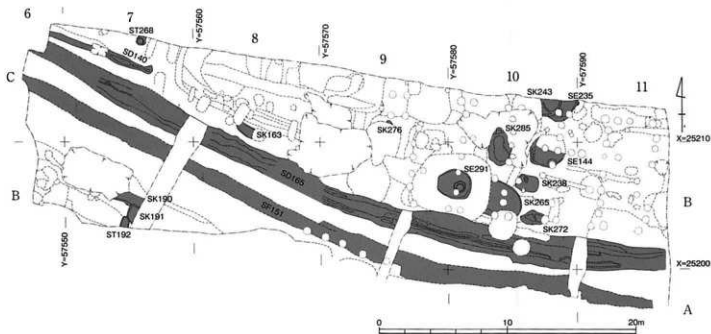
4 16世紀第2四半期の遺構と遺物

概要(第4-45図、付図5下)

遺物と切合

16世紀第2四半期と認定した遺構は、京都系土師器1期の皿を含み、2期以後の京都系土師器は含まない。さらに遺構の切合関係上矛盾のない遺構で、その多くは16世紀代の型式と認められるロクロ目土師器を出土した遺構である。

道路状遺構SF151と道路側溝を兼ねた溝SD165とが、路面を更新し、さらに矢板の修繕を行いながら維持されている。それ以外の16世紀第2四半期代と考えられる遺構は、その東西道路の北側にあたるC7区付近の西区とBC10/11区の東区、さらに道路南のC6/7の南区の3箇所、第1四半期と同様に分布する。C11～B11区付近はおなじく本来第4南北街路に面した場所で、その後「中町」とされる町並みのほぼ南端にあたる。



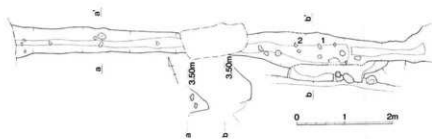
第4-45図 16世紀第2四半期の遺構 (1/300)

溝

SD140 (第4-46図)

区画の溝

C6・C7区(西区)で検出された、溝SD165に並行する長さ8.5m以上、幅0.5~0.7m、深さ0.4mの東西方向にのびる溝である。方位角111度で、真東西から南に21度振る。16世紀第1四半期の大型土坑SK247、古代の土坑SK301と16世紀第1四半期の溝SD303を切る。内部からは少数の礫や土器片が散在する状態であった。16世紀第1四半期の遺構を切り、埋土中に京都系土師器1期の皿の破片が出土していることから16世紀第2四半期の遺構と推定した。



第4-46図 SD140 (S=1/80)

SD140出土遺物 (第4-47図)

1と2はいずれも15世紀の中世4期と5期の備前焼摺鉢の口縁片で、2は下部から出土している。ほかに備前焼甕、底部糸切の土師器、京都系土師器1期皿の破片が出土している。



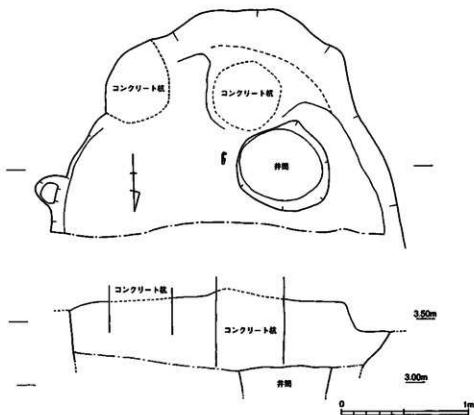
第4-47図 SD140出土遺物 (1/3)

井戸

SE235 (第4-48図)

井筒

C10区(東区)において第2層除去後に検出した径2.75mの掘形をもつ井戸である。湧水がひどいために完掘はしていない。井筒は素掘りあるいは桶かと推定される。15世紀の土坑であるSK206とSK207を切り、16世紀第3四半期の井戸SE234に切られる。井筒の真上には土坑SK243があり、それは井戸の廃棄時にほられた土坑と考えられる。切合関係と最新の土師器が京都系土師器1期皿とロクロ目土師器である点から、16世紀第2四半期の遺構と考えられる。



第4-48図 SE235 (1/30)

SE235 出土遺物 (第4-49図)

掘形出土

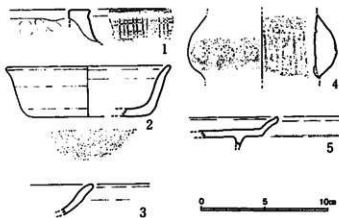
掘形内からは、底部糸切の土師器とロクロ目土師器の破片が多く、京都系土師器1期の皿の破片をわずかに含む。1は口縁外面に格子文の刻印をほとんど器種不明の瓦質土器。2は口縁が外反する14世紀から15世紀前半の底部糸切の土師器坏片。3は京都系土師器1期皿の口縁片。

井筒内

井筒内からは、4の外面に菊花文の刻印を施し、内面に接合のための貼り付け痕をのこす瓦質の華瓶あるいは水瓶の破片が出土している。

瓦質華瓶

ほかに残留した5の高台付の須恵器皿のほかに瀬戸美濃産天目碗や動物骨の破片が出土している。

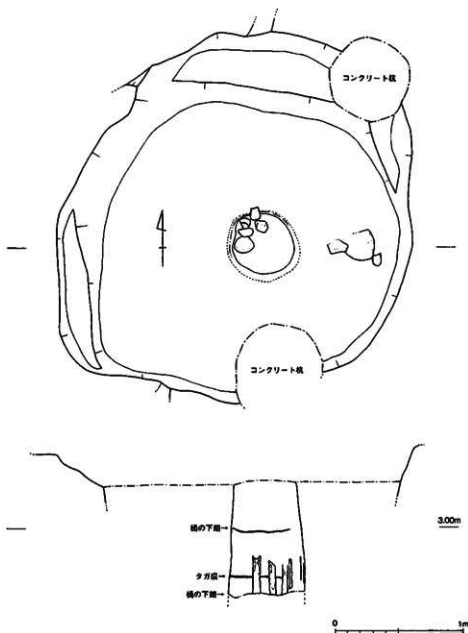


第4-49図 SE235 出土遺物 (1/3)

SE144 (第4—50図)

井筒は桶
小型

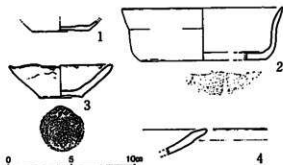
C10・B10区(東区)において第2層1回目除去後に検出された掘形不整形の井戸である。長さ2.7m、幅2.5m、深さ1.2m以上。井筒は径0.5～0.7mほど木製の桶である。上から2段の桶の重なりを検出したが、標高2.5m付近から湧水がひどく調査を断念した。16世紀第1四半期の溝SD197を切り、第2四半期の土坑SK224に切られる。井筒は小型で武家屋敷によく見られるタイプである。遺物は掘形内出土か井筒内出土か区別できなかったが、いずれも砕片である。京都系土師器1ないし2期の小皿が出土したが、切合関係から16世紀第2四半期の遺構と考えられる。



第4—50図 SE144 (1/30)

SE144 出土遺物 (第4-51図)

1は白っぽい色調の大内系土師器の皿底部片。2は口縁が外湾する15世紀の底部糸切の土師器の坏口縁片。3は口縁に煤が付着して灯明皿として使用された底部糸切の土師器小皿、完形品。4は京都系土師器1ないし2期の皿口縁片。ほかに青磁皿、ロクロ目土師器、埴の破片が出土している。



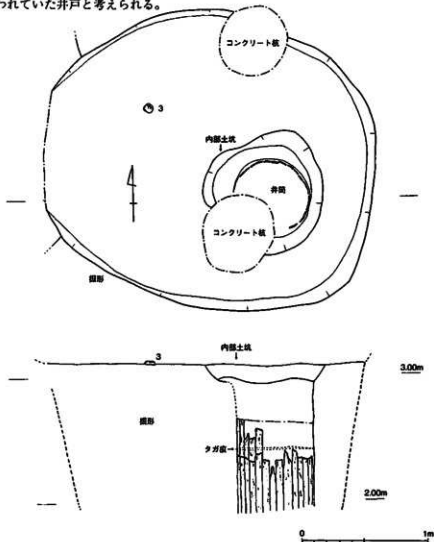
第4-51図 SE144 出土遺物 (1/3)

SE291 (第4-52図)

B9・B10区(東区)においてSK262完掘後の底部より検出された掘形長円形の井戸である。井筒を標高1.9mまで掘下げたところで湧水がひどくなり、完掘はしていない。掘形の規模は長さ2.6m、幅2.4m、深さ1.3m以上。井筒は木製桶で径0.6mの桶を2段まで検出した。長さ1.0m、幅0.9m、深さ0.2mの内部土坑(埋土は2~3mm大の炭焼土と拳大の礫を多く含む暗褐色土)が井筒埋没時に掘られている。16世紀第2四半期の土坑SK265を切り、16世紀第4四半期前半の土坑であるSK261とSK262に切られる。井筒内からは京都系土師器1期の皿が見つかり、廃絶時に掘られた内部土坑からは京都系土師器2期の皿が出土しているので、16世紀第2四半期に建設され第3四半期まで使われていた井戸と考えられる。

井筒は木桶

井戸封じ



第4-52図 SE291 (1/30)

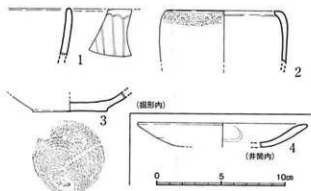
SE291 出土遺物 (第4—53図)

いずれも破片

掘形内。1は15世紀後半から16世紀前半の剣先蓮弁を有する中国龍泉窯系青磁碗B-IV類の口縁片。2は口縁外面に菊花文の刻印が連刻されている瓦質香炉の口縁片。3は口縁部全周を打ち欠いた底部糸切の土師器坏底部、口縁が失われているがロクロ目土師器と考えられる。

井筒内。4は京都系土師器1期の皿口縁片。

井筒上部の内部土坑からは底部糸切の土師器、ロクロ目土師器、京都系土師器2期の皿、埴の破片が出土している。



第4—53図 SE291 出土遺物 (1/3)

土坑

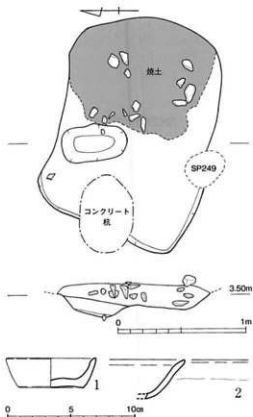
SK238 (第4—54図)

火焚をくりかえす

B10区(東区)において第2層除去後に検出した不整形長形の土坑である。長さ1.7m、幅1.2m、深さ0.2m。断面は皿状をなし、内部には薄い炭層が何回も広がっている。拳大の礫と土器の破片が散在している。火を焚いたあとと考えられる。祭祀土坑SK224の南側にあり、何らかの関係がある可能性がある。SP249に切られる。京都系土師器1期皿が出土したことから16世紀第2四半期の遺構と考えられる。

SK238 出土遺物

1は口縁に打ち欠きのある底部糸切の土師器の小皿の破片。2は京都系土師器1期の皿口縁片。ほかに中世陶器の堯、瓦質火鉢、丸瓦や埴の破片が出土している。



第4—54図 SK238 (遺構 1/30、遺物 1/3)

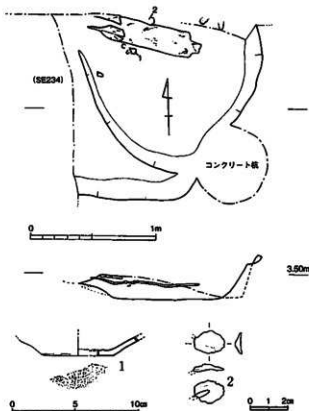
SK243 (第4—55図)

井戸封じの土坑

C10 (東区)において、第2層除去後に検出された不整形の土坑である。井戸 SE235 の廃棄時に掘られた内部土坑である。長さ1.4m、幅1.3m以上、深さ0.2m。内部から板材が出土し、その下から SE235 の井筒がみつかった。16世紀第3四半期の井戸 SE234 に切られている。切合関係から16世紀第2四半期の遺構とした。

SK243 出土遺物

1は白っぽい色調で薄手の大内系土師器の皿底部片。2は紙状の鋼製品。ほかに土師器の破片が出土している。



第4-55図 SK243 (遺構 1/30、遺物 1=1/3・2=1/2)

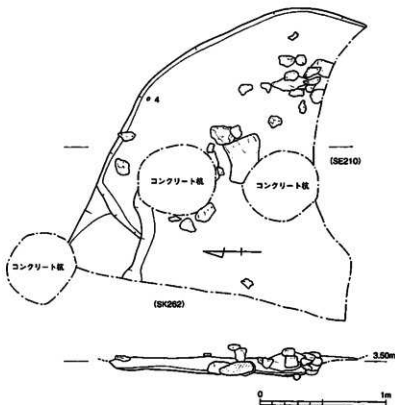
SK265 (第4—56図)

大型土坑

B10 (東区)において、第2層除去後に検出された長さ2.3m以上、幅2.2m以上、深さ0.3mの

廃棄土坑

大型の土坑である。断面は皿状である。埋土は第2層土にあたる茶褐色土の単一層である。内部からは被熱した多くの拳大の礫に混じって土器の破片が出土した。なんらかの廃棄土坑である。16世紀第1四半期の溝 SD239 と土坑 SK266 を切り、第2四半期の井戸 SE291、第4四半期前半の土坑 SK262 と SD292、第4四半期後半の井戸 SE210、同じく SK231 に切られる。積極的に16世紀とする遺物は出土していないが、切合関係から16世紀第2四半期の遺構とした。

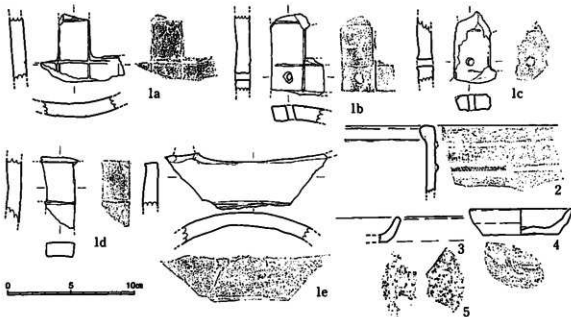


第4-56図 SK265 (1/30)

SK265 出土遺物 (第4-57図)

瓦破

1は同一個体と推定される瓦葺の破片が5点出土している(接合資料10)。1aと1cはSD141、1bは第2層に、1eはSD250に残留したもので、1dはSD165d区掘形内出土の破片である。2は瓦質火鉢の口縁部で、小突帯を貼り付けるための沈線が残っている。3は口縁に煤が付着して灯明皿に使用された底部糸切の土師器小皿の口縁片、河野分類のB類にあたる。4は同じく河野分類B類の底部糸切の土師器小皿の口縁片。5は中国銅銭の破片で「賈」が読めるのみ。ほかに備前焼夷の破片が出土している。



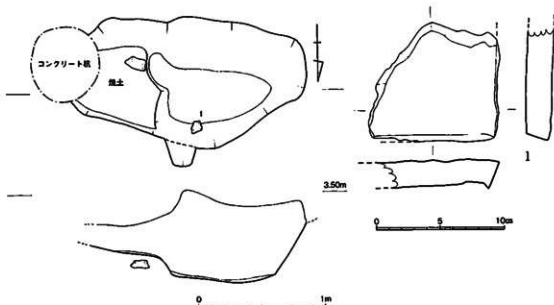
第4-57図 SK265 出土遺物 (1/3, 5=1/1)

SK272 (第4-58図)

B10(東区)において検出された長さ1.9m、幅1.05m、深さ0.6mの東西に長い長円形の土坑である。

大穴地埋土坑

断面は半円形で、16世紀第1四半期の土坑SK266を切り、第4四半期後半の井戸SE210に切られる。埋土は上下2層にわかれ、第1層は暗褐色土(1cm大の炭、2~3cm大の焼土ブロック多い)。第



第4-58図 SK272 (縮倍1/30、遺物1/3)

2層は暗茶褐色粘質土（礫多い）。内部からは焼土や埴、瓦や壁土など文字通り瓦礫で埋まっており、火災処理土坑と考えられる。切合関係から16世紀第2四半期の遺構と考えられる。

SK272 出土遺物

1は胎土から海部郡産と推定される埴の破片。ほかに丸瓦や多量の壁土の残骸が出土している。

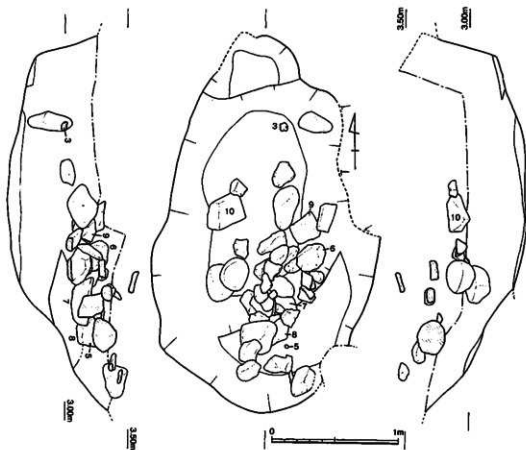
SK285（第4—59図）

B10（東区）において検出された長さ2.6m、幅1.7m、深さ0.9mの長円形の土坑である。断面は半円形で、内部上層には礫が集中する。最下層には焼土と炭の堆積がある。15世紀の土坑 SK286とSK287を切り、SK283に切られる。礫は安山岩質の河原石のほか結晶片岩と凝灰岩礫がおおく、凝灰岩の多くは五輪塔の再加工品や加工された石材である。礫には被熱したものも多く、下層に堆積した焼土と炭を考え合わせると、瓦礫と化した廃材を焼却して片付けた廃棄土坑と考えられる。ただし礫の廃棄層と同じ高さから3の口縁を打ち欠いた土師器燗台や5の銭貨が出土しているので、廃棄に際して何らかの祭祀行為が行われた可能性が指摘できる。埋土中の遺物で最新のものがロクロ目土師器と京都系土師器1期風であることから16世紀第2四半期の遺構と考えられる。

焼却

廃棄土坑

祭祀行為



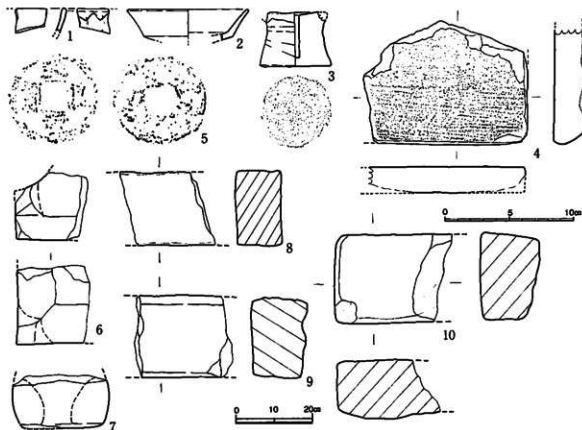
第4—59図 SK285 (1/30)

SK285 出土遺物（第4—60図）

1は上田分類のB—IV類にあたる細線蓮弁文をほどこす中国龍泉窯系青磁碗の口縁片。2は15世紀の森田分類D類にあたる中国製白磁皿の口縁片で、小さな打ち欠きがある。3は底部未切の土師器燗台A1新、穿孔は貫通しない。口縁が欠損している。4は埴の破片。5は完形の中国銅銭の天聖元寶（北宋初鑄1023年・篆書体）。6は凝灰岩製の五輪塔の火輪を4分の1に分割して石材と

転用石材

して利用したもの。7は凝灰岩製の五輪塔の水輪を加工した石材。8は凝灰岩製の石材、全体に被熱して割れている。9と10は凝灰岩製の角材に加工した石材。ほかに底部糸切の土師器、ロクロ目土師器、京都系土師器1期皿や凝灰岩の破片が出土している。なかには五輪塔の火輪の破片が含まれる。



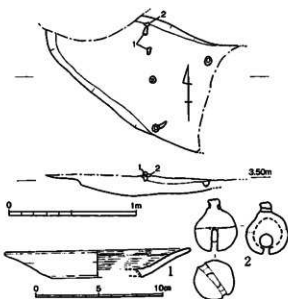
第4-60図 SK285出土遺物 (1/3, 5=1/1, 6~10=1/10)

SK163 (第4-61図)

C8区(北2区)において第2層除去後に検出した長さ1.4m以上、幅0.8m、深さ0.1mの東西に長い長円形の土坑である。断面は半円形で、埴土は小礫を多く含む第2層土の単一層である。16世紀第4四半期前半の8号墓ST149と土坑SK156に切られる。溝SD165を切るようであるが、確認できなかった。内部からは土師の完形品が出土している。廃棄土坑である。出土した土師器の最新のがロクロ目土師器と京都系土師器皿である点から16世紀第2四半期の遺構とした。

SK163出土遺物

1は器高の低くなったロクロ目土師器の



第4-61図 SK163 (遺構1/30, 遺物1/3)

廃棄土坑

土跡

皿口縁片。2は硬質のかわた音のする完形の土製の鈴。沈線が1条横位置に1周する。ほかに京都系土師器皿の破片が出土している。

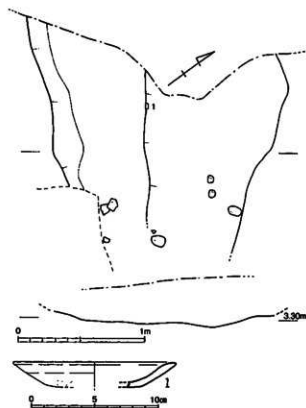
SK190 (第4—62図)

溝?

B7区(南2区)の基盤IV層上面で検出した土坑であるが、西側を擾乱坑によって大きく破壊されて溝になる可能性もある。埋土は灰茶褐色土である。16世紀第2四半期の土坑SK191と第4四半期後半の溝SD168とに切られる。SD116を切る可能性もあるが確認できなかった。切合関係から16世紀第2四半期の遺構とした。

SK190 出土遺物

1は京都系土師器1ないし2期の皿の口縁片。ほかに土師器、平瓦の破片が出土している。



第4—62図 SK190 (遺構 1/30、遺物 1/3)

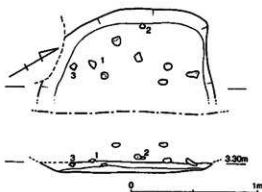
炭瓦土充填

SK191 (第4—63図)

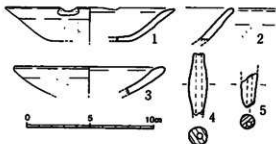
B6区(南2区)の第2層除去後に検出した長さ1.4m、幅0.7m、深さ0.1mの長円形の土坑である。断面は皿状で、埋土は細分可能だが全体に真っ黒い炭泥じり土が充填している。16世紀第1四半期の溝SD189と第2四半期の土坑SK190を切り、第2四半期の墓らしいST192に切られる。内部からは銅製の装束金具や京都系土師器皿の破片が散在して出土している。切合関係から16世紀第2四半期の遺構と推定される。

SK191 出土遺物 (第4—64図)

1は1箇所打ち欠きのある京都系土師器1期の皿口縁片。2も京都系土師器1期の皿口縁片。3は京都系土師器2期の皿口縁片。4は端部を調整しない管状土錘A類の完形品。5も管状土錘A類の破片。銅製の装束金具があったが調査中に行方不明になった。ほかに白磁皿、備前焼、瓦質火鉢、古代土師器碗の破片が出土している。



第4—63図 SK191 (1/30)



第4—64図 SK191 出土遺物 (1/3)

SK276

小土坑

C9区(北1区)の第2層除去後において検出した円形の小土坑である。埋土は第2層土(黄色粘土ブロック多い)の単一層である。16世紀第3四半期の土坑SK232に切られる。図示できる遺物はないが、京都系土師器1期皿の底部の破片が出土している。京都系土師器1期皿が出土したこと、切合関係から16世紀第2四半期の遺構と考えられる。

墓?

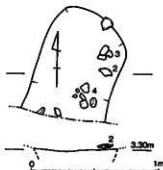
ST192(第4-65図)

木棺墓?

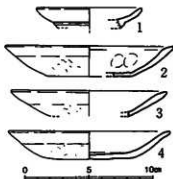
B7区(南2区)で検出された長さ0.9m以上、幅0.6m、深さ0.3mの隅丸方形の土坑である。内部から京都系土師器1期皿がまとめて出土し、鉄釘らしき鉄器が出土したので、木棺墓の可能性のある土坑である。16世紀第1四半期の溝SD189と第2四半期の土坑SK191を切る。切合関係と京都系土師器1期皿が出土していることから16世紀第2四半期の遺構と判断した。

ST192出土遺物(第4-66図)

1は底部糸切の土師器小皿の口縁片。2と3は京都系土師器1期の皿口縁片。4は口縁を大きく2箇所両側から打ち欠いた京都系土師器1期皿。ほかに釘らしき鉄器の破片が出土している。



第4-65図 ST192(1/30)



第4-66図 ST192出土遺物(1/3)

小結

16世紀第2四半期の状況をまとめると、次の4点に集約できる。

道路改善

① 道路状遺構SF151とその側溝SD165は、道路の硬化面を第6硬化面に更新し、水路は第3矢板列に打ち替えを行いつつ、この時期にも同一の位置に維持される。そのSD165の南端と南2区の廃棄土坑SK190に挟まれた空間が、その道路幅としてよければ、この時点での東西道路の最大幅は約6mである。そうすると第1四半期に比べて道路幅はやや狭くなった可能性が高い。

南側の区画

② 南2区で道路状遺構SF151と並行するように廃棄土坑群が掘られている。この時期に第1四半期以来の比較的広大な区画が継続していたものと考えられる。

北側の区画

③ 西区のかつて方形の巨大な土坑SK247が掘られた位置に、溝SD303を掘り直した溝SD140が掘られている。第1四半期以来の区画がやはり踏襲されているものと推測される。

「中町」の角地

④ 第1四半期に引き続き東区の第4南北街路と東西道路に挟まれた角地には、宅地が継続し、井戸や廃棄土坑がかなり密に分布する。非戸や土坑は第4南北街路の位置から約10mほど西に控えた場所に分布することから見て、第4南北街路に面した空間には建物が立ち、その背後に井戸や土坑が分布する景観を想定できる。その意味で第1四半期に引き続き、この角地は町人屋敷として利用されたものと推定される。

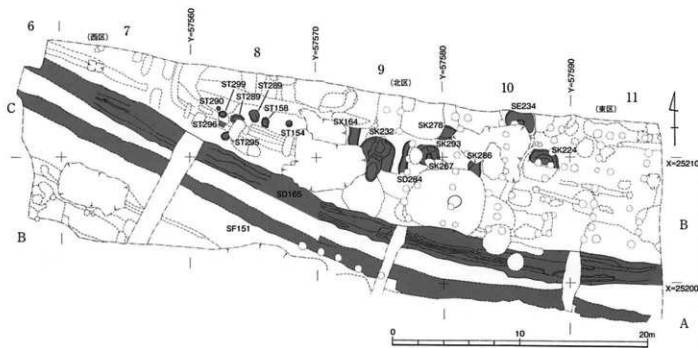
5 16世紀第3四半期の遺構と遺物

概要 (第4-67図付図6上)

遺物と切合 16世紀第3四半期と認定した遺構は、京都系土師器2期の皿を含み、3期以後の新しい京都系土師器は含まない。中国景德鎮窯系青花ではE類の微頭心碗が含まれるようになるが、備前焼では近世1期の製品はまだ含まない時期のものであり、遺構の切合関係上も矛盾のない遺構である。

道路と水路 道路状遺構SF151と道路側溝を兼ねた溝SD165とが、引き続き路面を更新し、さらに矢板の修繕を行いながら維持されている。とくにSD165は矢板の位置が南に移動し溝も浅くなっている。それ以外の16世紀第3四半期代と考えられる遺構の分布はそれまでと大きく変わるようである。東西道路の北側にあたるC7区付近の西区とその道路をはさんだ対面する位置においては、それまで続いた道路南のC6、C7の南区の2箇所に遺構がなくなる。変わってその隣、かつて方形の区画のあったあたりに、幼小児の墓が集中するようになる。C11～B11区付近はおなじく本来第4南北街路に面した東区も遺構がなくなり、北1区としたあたりに土坑や溝が集中する。墓地については節を改めて述べる。

墓地



第4-67図 16世紀第3四半期の遺構 (1/300)

溝

SD284 (第4-68図)

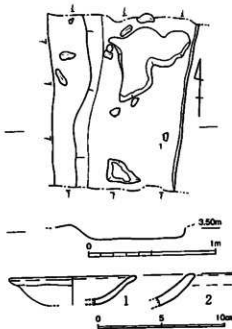
C9・B9区(北1区)で検出された、南北方向に伸びる(東に11度傾く)溝である。長さ2.8m、幅0.6m、深さ0.1mで、断面は半円形をなす。埋土は暗褐色土と黄色砂層との混層の単一層である。15世紀のピットSP288を切り、16世紀第4四半期の井戸SE148と溝SD230に切られる。埋土から出土した遺物は破片となって散在する状態である。京都系土師器2期の皿が出土したと切合関係から、16世紀第3四半期の遺構と考えられる。

SD284 出土遺物

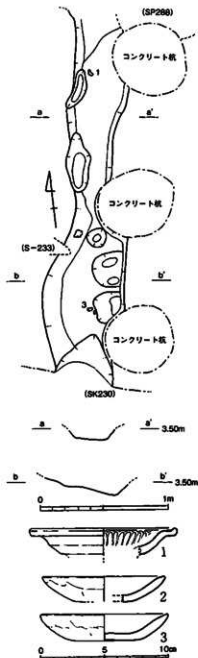
1は瀬戸美濃大窯3期の皿でSK231出土片と接合した(接合資料24)。2と3は京都系土師器2期の小皿口縁片。

SX164 (第4-69図)

C9区(北1区)の第2層除去後に検出された当初溝と考えた南北方向に伸びる遺構である。三方を攪乱で失っているが、ほりあがると底面はでこぼこで、地形のくぼみの可能性もある。長さ1.3m以上、幅0.8m、深さ0.1m。埋土は小礫を多く含む第2層土の単一層である。碎片化した土器が散在して出土した。最新の遺物が京都系土師器2期皿であるから16世紀第3四半期とした。



第4-69図 SX164 (遺構1/30、遺物1/3)



第4-68図 SD284 (遺構1/30、遺物1/3)

SX164 出土遺物

1は内外に煤が付着するが、灯明皿とは異なる京都系土師器1期の皿口縁片。2は京都系土師器2期の皿口縁片。出土した中国焼締陶器小型四耳壺の口縁片(4-76図1)はSD141上部、SK278出土片と接合した(接合資料12)。ほかにロクロ目土師器皿や埴の破片が出土している。

南北溝

遺構?

井戸

SE234 (第4-70図)

井筒は木桶
井筒小型
銭をまく祭祀

C10区(東区)の第2層除去後に検出された掘形円形の井戸である。長さ26m、幅24m、深さ1.1m以上。井筒は径0.6mほど木製の桶である。桶を2段検出した標高25m付近で湧水がひどくなったために完掘はしていない。16世紀第2四半期の井戸SE235の井戸封じ土坑であるSK243を切る。井筒は小型で武家屋敷によく見られるタイプである。掘形内には銅銭や京都系土師器、動物骨などが廃棄されていた。特に銅銭は下位の4枚(4~6、一枚は破損激しく固化できない)がほぼ同じレベルでまかれたように発見された。近くから動物骨も出土しており、井戸建設に伴う祭祀行為がおこなわれたものと推定される。残りの2枚(2と3)高さを違えて同じ位置から出土しており、そのレベルでは7と8の京都系土師器の破片が出土している。祭祀行為は繰り返された可能性が高い。京都系土師器2期の皿が出土したことと、切合関係から16世紀第3四半期の遺構と考えられる。

SE234 出土遺物 (第4-71図)

第4-70図 SE234 (1/30)

6枚の銭貨

掘形内。1は出土位置不明の完形の中国銅銭で、「祥〇元寶」と読める。2は「元」一文字のみが読める完形の中国銅銭。3は中国銅銭の洪武通寶(明1368年初鋳)。4は完形の中国銅銭の洪武通寶(明1368年初鋳)。5は「寶」一字のみよめる銭種不明の完形の銅銭。6も銭種不明の完形の銅銭。7と8は京都系土師器2期の皿口縁片。なお15世紀の土坑SK286出土片と接合した青磁皿(接合資料37)の破片が出土しているが、これは残留してきたものである。ほかに動物骨の破片が出土している。

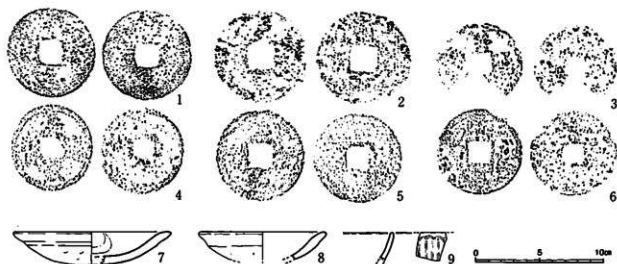
井筒内。9は中国龍泉窯系青磁碗B-IV型の剣先蓮弁文碗の口縁片。ほかにロクロ目土師器、京都系土師器1期皿の破片が出土している。

土坑

SE291 内部土坑

井戸封じ

井戸SE291の廃絶時に掘られた土坑である。京都系土師器2期皿を含むことから16世紀第2四半期に建設された後、第3四半期に廃棄されたものと考えられる。



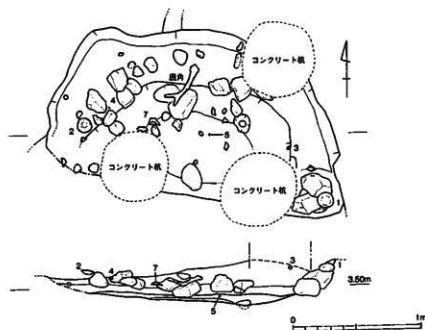
第4-71図 SE234出土遺物 (1~6=1/1、7~9=1/3)

SK224 (第4-72図)

C10・B10 (東区) の基盤 IV 層上で検出した東西に長い長さ 2.4m、幅 1.3m、深さ 0.3~0.4m のゆがんだ長円形の土坑である。底面は皿状で、16世紀第2四半期の井戸 SE144 と第2四半期の溝 SD245 を切る。中央に鹿角、その東そばにガラス小玉 (5)。両側にそれぞれ 1枚の銅鏡 (3と4) をおき、さらに土坑の両端に完形の京都系土師器皿を正位で置いている (1と2)。ガラス玉については底面にあるので、あるいは偶然かもしれない。拳大から人頭大の隙を含む埋土で、ある程度埋めた後に、以上の遺物を供えている。目的は不明だが祭祀行為を行った土坑であることは間違いない。京都系土師器2期の皿が埋置あるいは廃棄されることと切関係から16世紀第3四半期とした。

遺物埋置

祭祀行為

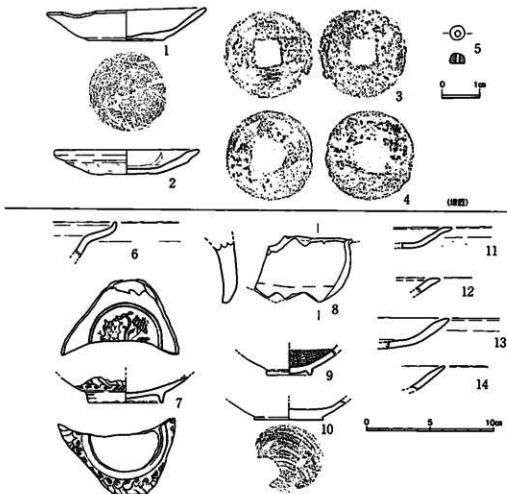


第4-72図 SK224 (1/30)

SK224 出土遺物 (第4-73図)

故意におかれた遺物 埋置遺物。1は完形の底部糸切の土師器皿で、口縁に打ち欠きがある。東端上部に正位で出土したもの。2も完形の京都系土師器2期の皿で、西端の上位で正位のまま出土したもの。3は東側上位で出土した完形の中国銅銭、紹聖通寶(北宋初鑄1094年)。4は西側上位で出土した「元〇通寶」と読める銅銭の完形品で、元符通寶または元祐通寶(北宋銭)になるだろう。5は中央底面で検出した深緑色のガラス小玉。さらに中央北より上位に鹿角1本が、根元を北にして置かれている。以上が埋置された遺物である。

埋土中の破片 以下は下部の礫を多く含む埋土中に混ざっていた破片である。6は中国景德鎮窯系青磁皿の口縁片。7は中国景德鎮窯系青花碗C群のいわゆる蓮子碗の底部片。この破片も鹿角近くの上位で出土したが、破片であるので祭祀遺物に含めなかった。8は瓦質火鉢脚部片。9は16世紀の瓦質土器の碗底部、内面は黒色を呈す。10は底部糸切の土師器皿の底部片。11は京都系土師器1期の皿口縁片。12は京都系土師器1ないし2期の皿口縁片。13は京都系土師器2期の皿口縁片。14は京都系土師器皿口縁片。ほかに蒼石のような白い玉が1点と、小さな黒い石が3点出土している。あるいは祭祀行為と関係があるかもしれないが、出土位置を特定できなかったので図示はしない。



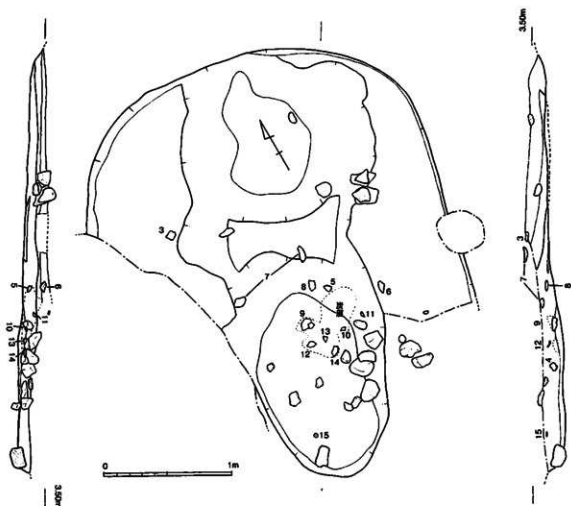
第4-73図 SK224 出土遺物 (1/3, 3~5=1/1)

SK228-SK232 (第4-74図)

土坑の重複 C9・C10区(北1区)の第2層除去後に検出された大型隅丸方形の土坑で、長さ3.4m、幅2.8m、深さ0.2m。円形や長円形のいくつかの土坑が重複しているのだが、調査によって区別することができなかった。SK275と16世紀第2四半期以後の土坑SK276を切る。埋土は黄色土小ブロック混

廃棄土坑

じりの暗黄褐色土（小円礫、1cm大の炭焼土）の単一層で、20cm大の人頭大の礫を多く含む。遺物の出土状況から見て廃棄土坑と考えられる。最新の土師器が京都系土師器2期の皿であること、切合関係から16世紀第3四半期の遺構とした。南側の長円形の部分の底部には炭化物の堆積があり、9と14の京都系土師器の皿はその堆積中に、10・12・13はその堆積の直上に廃棄されていたものである。4～15の遺物は炭化物廃棄に伴う一括性が高く、南側で出土した銅銭1枚もそれにとまなう可能性が高い。



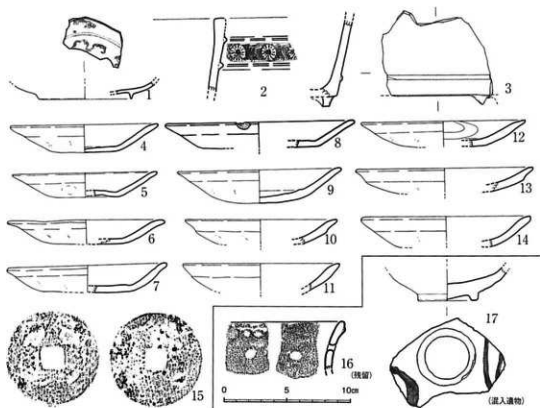
第4-74図 SK228-SK232 (1/30)

SK228=SK232 出土遺物 (第4-75図)

1は中国景德鎮窯系青花鳳の底部で、たたみつきの軸を拭き取っている。2は菊花文の刻印のある瓦質火鉢の口縁片。3は瓦質火鉢底部片。4はきわめて薄手で白っぽい色調の京都系土師器0ないし1期の皿口縁片。5～7はいずれも京都系土師器1期の皿口縁片。8も京都系土師器1期の皿で1箇所打ち欠きのある口縁部片。9は炭層中出土の京都系土師器1ないし2期皿の口縁片。10は炭層中出土の京都系土師器2期の皿口縁片。11は京都系土師器2期の皿口縁片。12は炭層上出土の京都系土師器1ないし2期の皿口縁片。13と14は炭層上出土の京都系土師器2期の皿口縁片。15は中国銅銭の至道通寶（北宋初鑄995年・行書体）の完形品。別に出土した瓦質火鉢の破片はSD165、SK261、SK293出土片と接合している（接合資料15）。

京都系土師器

残留遺物と混入遺物。16は縄文時代晩期の深鉢口縁部。17は1600～1630年製の福岡産陶器（上野高取焼）碗底部で、窯灰軸がかかる。17はかなり上部で出土したもので第2層に含まれたものの可能性がある。ほかに瀬戸美濃灰輪陶器皿、ロクロ目土師器、鉄器の破片が出土している。



第4-75図 SK232出土遺物 (1/3, 15=1/1)

SK278 (第4-76図)

C9-C10区(東区)で検出された長さ1.65m、幅1.1m、深さ0.3mの不整形の土坑である。16世紀第4四半期の井戸SE148に切られている。断面は箱形で、埋土は上下2層にわかれ、上層は暗紫褐色軟質土(マンガン含む)、下層は暗黒灰色粘質土(5cm大の礫含む)である。その間に炭を含む黒色層の堆積がある。京都系土師器2期皿の出土と切合関係から16世紀第3四半期の遺構とした。

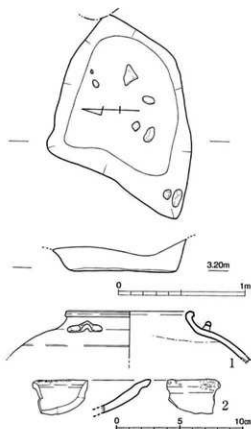
SK278出土遺物

1は溝SD141上層、土坑SK164出土破片と接合した中国焼締陶器四耳壺の破片(接合資料12)。2は京都系土師器2期の皿を転用した増嶋片。口縁部に濃赤色の付着物がある。

廃棄土坑

中国製四耳壺

増嶋

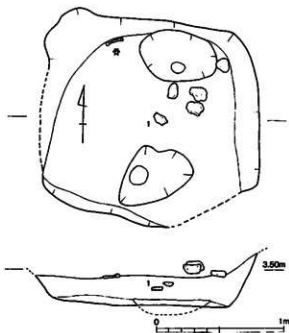


第4-76図 SK278 (遺構1/30, 遺物1/3)

SK293 (第4-77図)

C9区(北1区)で検出されて長さ1.7m、幅1.6m、深さ0.5mの隅丸方形の土坑である。埋土は暗褐色軟質土の単一層で、礫を含む。16世紀第3四半期の土坑SK267、16世紀第4四半期の土坑SK215とSK279に切られる。土器や動物骨の破片をふくむ廃棄土坑である。京都系土師器2期皿の出土と切合関係から16世紀第3四半期と考えられる。

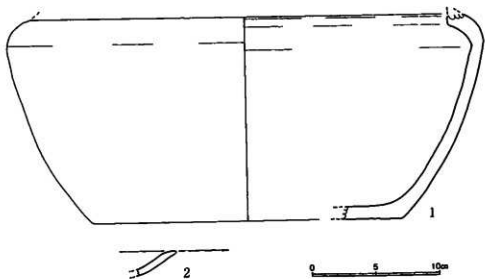
廃棄土坑



第4-77図 SK293 (1/30)

SK293 出土遺物 (第4-78図)

1はSD165、SK228、SK261出土片と接合した瓦質火鉢口縁(接合資料15)。2は京都系土師器2期の皿口縁片。ほかに骨片が出土している。



第4-78図 SK293 出土遺物 (1/3)

SK267 (第4-79図)

C9・B9区(東区)の第2層除去後に検出した円形の小土坑である。長さ0.6m以上、幅0.5m、深さ0.05mで、断面は浅い皿状である。埋土は小砂利混じり層の単一層である。16世紀第3四半期の土坑SK293を切り、第4四半期の土坑SK215に切られる。内部からは銅銭1枚が出土したが、ほかに京都系土師器2期皿の破片を含むのみで、その性格は明確にしがたい。京都系土師器2期皿の出土と切合関係から16世紀第3四半期の遺構とした。

小土坑

性格不明

SK267 出土遺物

1は京都系土師器2期の皿口縁片。2は完形の中国銅銭の皇宗通寶(北宋初鑄1038年・篆書体)。

小結

16世紀第3四半期の状況をまとめると、次の6点に集約できる。

道路改築

① 道路状遺構 SF151 とその側溝 SD165 は、道路の硬化面を2度更新（第5・4硬化面）し、水路は矢板の打ち替え（第2・第1矢板列）を行いつつ、この時期にも同一の場所に維持される。厳密には矢板がわずかに南側に移動している。この時期の道路幅は南側のラインをおさえることができないので、不明である。

南側
区画 A

② 南2区では遺構がなくなる。

③ 西区の第1四半期以来の区画はこの時期の遺構がない。

墓地

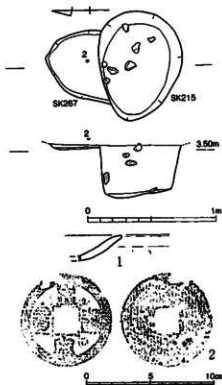
④ 北2区の16世紀前半期までは方形の区画が存在した場所には後述するように、幼児の墓が営まれるようになる。

⑤ 第1・2四半期に引き続き東区の第4南北街路と東西道路に挟まれた角地には、宅地が継続する。しかし井戸や廃棄土坑の位置が西に移動し、溝 SD284 が宅地の背後を画する溝とみられる。この角地は引き続き町人屋敷として利用されたものと推定される。

「中町」の町
屋

⑥ 全体として第3四半期になっても道路や宅地の区画に大きな変動はないが、北2区の区画に墓地が現れることが大きな変化である。

墓地の出現



第4-79図 SK215・SK267
(遺構 1/30、遺物 1=1/3、2=1/1)

6 16世紀第4四半期前半の遺構と遺物

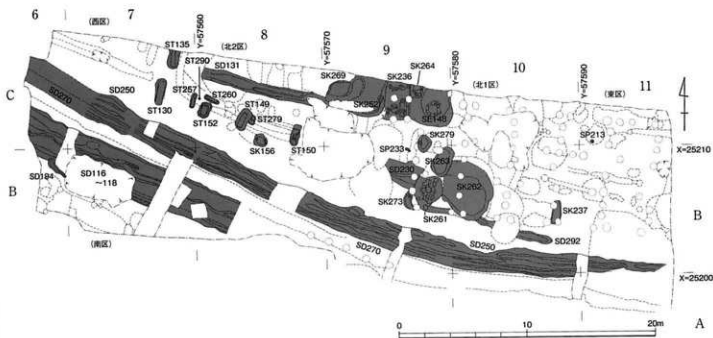
概要（第4～80図、付図6下）

遺物の組合せ 16世紀第4四半期と認定した遺構は、京都系土師器3期の皿を含み、1期ないし4期の京都系土師器は含まない（2期が伴うことは多い）。中国景德鎮窯系青花ではE類の饅頭心碗が含まれるが、それに加えて中国漳州窯系青花が伴うことが多い。備前焼では近世1期の播鉢と甕が出現する。加えて遺構の切合関係上も矛盾のない遺構である。さらに第4四半期は前半と後半に、遺構の切合関係と遺物の接合関係から分けることができる。後半の遺物の指標は中国景德鎮窯系青花皿F群、朝鮮王朝系の影三島碗や肥前葉灰軸陶器、絵唐津皿などの出現である。

道路の改善 第4四半期前半の遺構をまとめると次のようになる。道路状遺構SF151は引き続き路面を3面・2面・1面と更新し維持されるが、道路の北側側溝として溝SD250とSD270がこの順番で掘りなおされる。ともに溝SD165と異なり、矢板がなくなっている。同時にそれまでSF151の道路路面であったと推定される南側に、かなり大きな溝SD118、SD117、SD116が順次掘りなおされていく。

側溝の変化 それ以外の16世紀第4四半期前半代と考えられる遺構の分布はそれまでと大きく変わらないが、その内容は大きく変わるようである。東西道路の北側にあたるC7区付近の西区には第3四半期に続き遺構がないが、その道路をはさんだ対面する位置にそれまで続いた道路南側のC6区、C7区にあたる南区も遺構が少ない。第3四半期幼小児の墓が集中した北2区は、等間隔に成人墓を配する墓地に整備され、その北側には墓地とその北側の空間を画すと推定される溝SD131が掘られている。C11～B11区付近の本来第4南北街路に面した東区も遺構が少ないままであり、北1区としたあたりに井戸や土坑や溝が集中する。墓地については節を改めて述べる。

墓地と溝



第4～80図 16世紀第4四半期前半の遺構（1/300）

溝

SD118 (第4-81図、付図8)

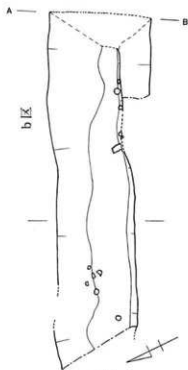
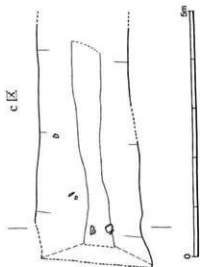
東西溝

南1区と南2区で検出した、東西にのびてSF151やSD165と並行する比較的規模の大きな溝である。II区南調査区に続く。長さ13m以上、幅2.1m、深さ1.3m。断面は場所によって違いがあるが基本的に逆台形となっている。15世紀の土坑SK302を切り、SD117に切られる。また直接の切合関係は確認できないが、道路状遺構SF151の路面を切っているものと推定される。

水路

西に排水

内部には多量の礫が廃棄され、最下部はグライ化していた(8層)。底面標高はII区南調査区の東端で標高2.4m。西端で2.1mをはかり西のほうが低く、内部に水のたまった痕跡があるので、本来西の方向に排水する溝としてほられたものと推定される。道路状遺構SF151の第3道路面構築時に掘られた溝と推定される。b・c区にわけて掘下げた。遺物は水路として機能していた際に廃棄された遺物ばかりである。埋土はB7区東断面では50cm近い深さがあるにもかかわらず、黒紫色粘質土の単一層(8層)で、炭片円礫黄色土ブロックを含む水成層である。埋没した段階でSD117に掘りなおされている。斜めスリ目の入った近世1期の備前焼揺鉢が出土していることと切合関係からみて16世紀第4四半期前半の遺構と考えられる。



- | | |
|------------------------------|---------------------|
| 1層:暗灰茶褐色粘砂質土(黄色粘土ブロック、炭粒土多い) | SD116埋土
(人為的埋戻し) |
| 2層:明茶褐色粘土ブロック層(砂利多い) | |
| 3層:灰褐色粘砂質土ブロック | SD117埋土 |
| 4層:灰紫色粘質土(しまる、2~3cm大の円礫多い) | |
| 5層:暗紫色粘質土(灰色焼砂ブロック、炭片多い) | SD118埋土 |
| 6層:暗褐色粘質土(かた) | |
| 7層:暗紫色粘質土(砂利多い) | |
| 8層:黒紫色粘質土(炭片、円礫、黄色土ブロック多い) | |
| 9層:7層と灰茶色粘砂ブロックの混層 | |

第4-81図 SD118 (1/80)

SD118 出土遺物 (第4 - 82 図)

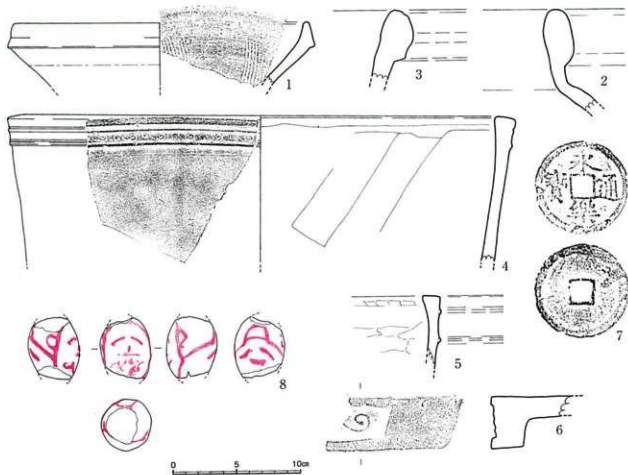
1 は中世4期15世紀後半の備前焼播鉢口縁片。2 は15世紀中世4または5期の備前焼甕口縁片。3 は16世紀中世6期の備前焼甕口縁片。4 は双頭麻手竜雲文の刻印のある瓦質火鉢の口縁片。5 も瓦質火鉢口縁片。6 は唐草文の軒平瓦の破片。7 は完形の中国銅銭の永楽通寶 (明初鑄1408年)。8 はC区底部の泥層中出土の人物の頭部を朱で描画した円鏢。

人面朱描鏢

なおSK229、SD250出土片と接合した瓦質火鉢 (接合資料17)の破片が出土している。ほかに、SK261、SD292、SK262、SF151、SK262、SD250出土破片と接合した中国製黒褐釉陶器の壺 (接合資料19)の破片が出土している。さらにSF151、SD250、SK262出土破片と接合した備前焼甕 (接合資料35)の破片も出土している。

出土した動物骨には、松井章氏の鑑定によれば、牛の頭骨左側、牛の右中足骨が含まれる。

ほかに青花、斜めスリ目に入った近世1期の備前焼播鉢小片、京都系土師器1期の皿、瓦片、凝灰岩石片や、残留した須恵器甕の破片が出土している。



第4-82図 SD118 出土遺物 (1/3, 7=1/1)

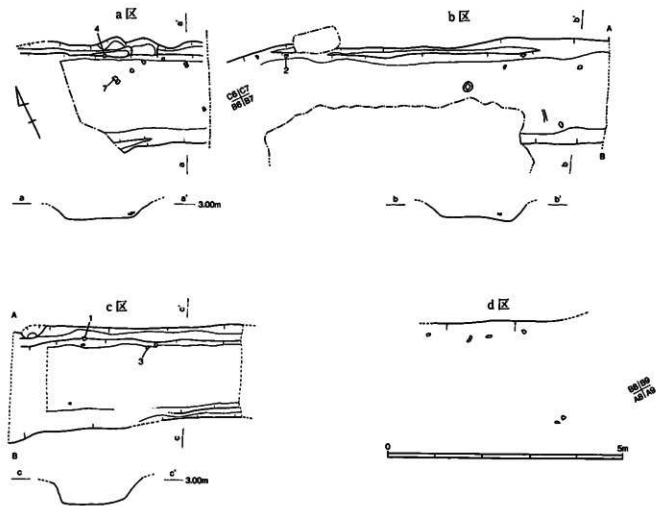
SD117 (第4-83図、付図8)

東西溝

溝 SD118 を掘り直した溝で、II 区南調査区に続く。長さ 32m 以上、幅 2.0m、深さ 0.5m。底面の標高は調査区の東端で標高 2.5m ~ 2.7m である。断面は場所によって多少の違いがあるが逆台形となっている。16 世紀第 4 四半期の溝 SD118 を切り、同じく SD116 に切られる。これは当初 SD118 を掘った後、SD117、SD116 に掘りなおされたことを示している。西から a ~ d 区にわけて掘下げた。埋土中には凝灰岩礫が多く、完形品 (6) をふくむ廃棄遺物が散在していた。埋土はおおよそ 3 層にわかれるが、急速に自然埋没していったような堆積状態である (第 4-81 図)。

水路

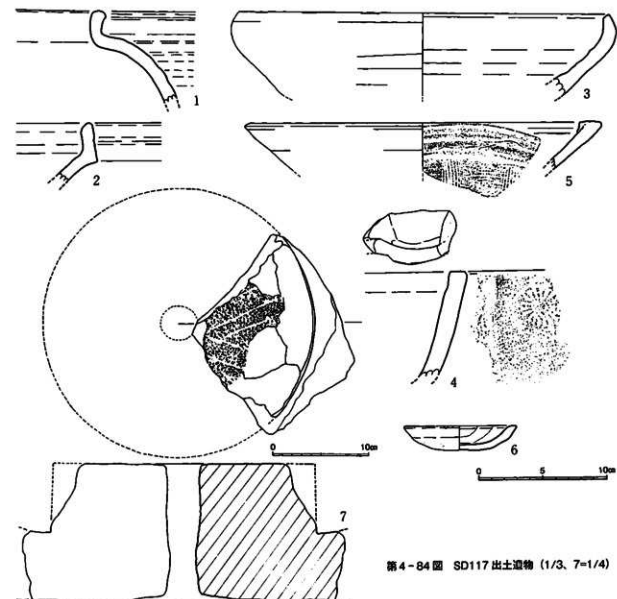
道路状遺構 SF151 の第 2 道路面構築時に掘られた 16 世紀第 4 四半期前半の遺構と推定される。



第4-83図 SD117 (1/80)

SD117 出土遺物 (第4-84図)

1は16世紀中世6期の備前焼蓋口縁片。2は16世紀前葉製作の中世6a期の備前焼摺鉢の口縁片。
 3は備前焼の平鉢口縁片、茶陶である。4は菊花文の大型の刻印をほどこし、内側に向かって四方から押圧する瓦質火鉢の口縁片。5は口縁部に1箇所煤の付着して灯明皿として使用された京都系土師器2期の完形の小皿。横向きに出土した。7は安山岩製の茶臼の下臼片。磨り面の復元径は21.2cm、高さ10.8cm。ほかに備前焼甕、埴、軒丸瓦、平瓦などの破片が出土している。



第4-84図 SD117 出土遺物 (1/3、7=1/4)

SD116 (第4-85図、付図8)

東西溝

溝 SD117 を掘り直した溝である。II 区南調査区から続く長さ 18m 以上の溝を a～c 区に分けて調査した。幅 3.0～3.2m、深さ 0.6～0.8m。底面の標高は II 区南調査区の東端で標高 2.8m、西端で 2.7m をはかり、場所によって高低差がある。16 世紀第 4 四半期前半の溝 SD117 を切り、第 4 四半期後半の溝 SD168 に切られる。上層 (1 層) は黄色土ブロックで埋まり、人為的に埋め戻している。埋土中には凝灰岩層が多く、廃棄遺物が散在していた。道路状遺構 SF151 の第 1 道路面構築時に掘られた 16 世紀第 4 四半期前半の遺構と推定される。

埋め戻し

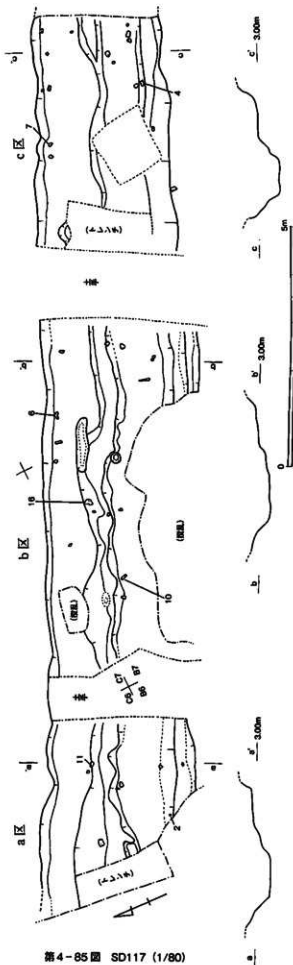
SD116 出土遺物 (第 4-86 図)

1 は 16 世紀の中国産白磁皿 E-2 群。2 は中国産窯系青磁皿で、15 世紀の稜花皿の口縁片。3 は 16 世紀後半の中国景德鎮窯系青花皿 E 群。4 は中世 3 期 14 世紀の備前焼壺口縁。5 は中世 5 期 15 世紀後半の備前焼播鉢の口縁片。6 は 16 世紀前葉中世 6a 期の備前焼播鉢口縁片。7 と 8 は同じく中世 6a 期の備前焼播鉢口縁片。9 は内面を肥厚させる防長線の瓦質播鉢の口縁片。10 は双頭廣手竜雲文の刻印をほどこす瓦質火鉢の口縁片。11 はロクロ目を丁寧にナデ消した底部糸切の土師器皿。12 は京都系土師器 2 期の小皿。13 は先端に穿孔のある棒状土錘の破片。14 と 15 は完形の管状土錘 A 類。16 は赤い粒子を含む御影産の花崗岩と推定される搬入の茶臼上白片。さらに以下の接合資料が出土している。SD250 出土片と接合した備前焼壺底部片 (接合資料 33) と中世陶器壺胴部 (接合資料 30) の破片。SK264 出土片と接合した中国製焼締陶器の鉢 (接合資料 18) の破片。SD131、SD250、SE148 出土片と接合した瓦質風炉 (接合資料 2) の破片。SD131、SD250、SE148 井筒内、SK262、SK263、SP214 出土片と接合した備前焼壺 (接合資料 4) の破片。SD131、SD250、SK231 出土片と接合した備前焼壺 (接合資料 14) の破片。

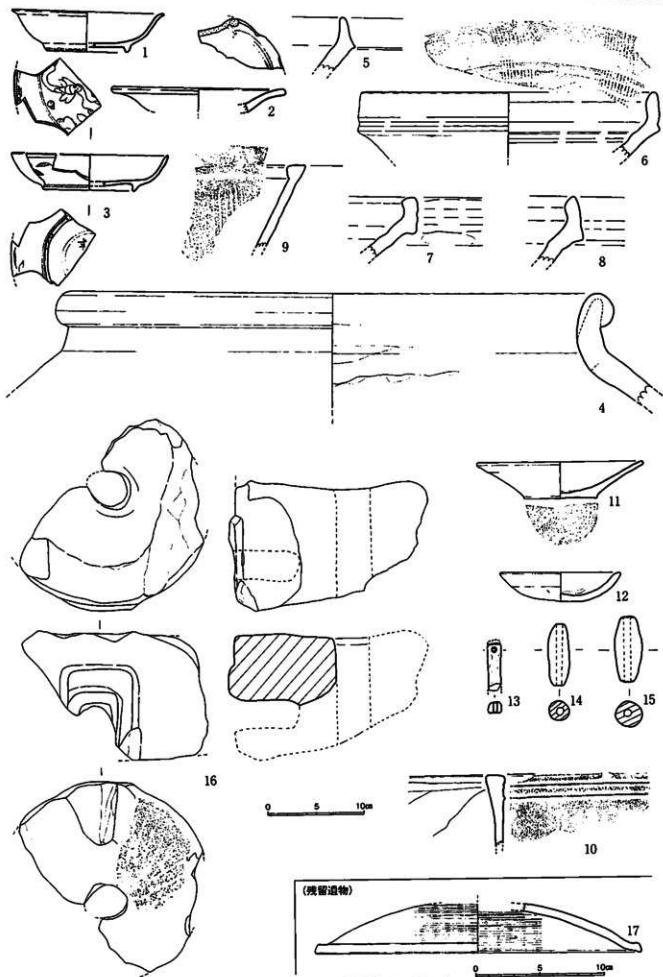
御影石製茶臼

接合資料

ほかに底部糸切の土師器、備前焼壺、瓦質鍋、瓦、動物骨の破片が出土している。残留遺物として 17 は 8 世紀の土師器坏蓋。ほかに古代土師器瓶の破片が出土している。



第4-85図 SD117 (1/80)



第4-86图 SD116出土遺物 (1/3, 16=1/4)

SD250 (第4 - 87 図、付図8)

東西溝

SD165に重なる位置に掘られた東西に貫通する溝である。16世紀第4四半期後半の溝SD167の底面で検出した。第3四半期以前の溝SD165を切り、SD167とSD270に切られる。長さ50m以上、幅1.0~1.5m、深さ1mで、断面はV字溝、その底面は方形に突出している。底面の標高は東端で2.3m、西端で標高2.5mと、西のほうが高くなっている。それまで水路として機能していたSD165が自然地形にあわせて西に向って低くなるのは逆である。ということは排水する機能を失った溝になっているわけである。したがってSD250は北側の区画と東西道路を区切る機能を重視したものとみられ、水路としての排水機能は道路南側の掘られたSD118に切り替えられたと考えられる。B10・B11区付近では溝の北の肩に五輪塔の部材を含む石材を並べて溝の北辺を補強している。そこは「中町」の町屋の側面に当たる。断面をみると一度掘り直された形跡があり、下層には水が溜まったような粘土層の堆積がある。道路状遺構SF151の道路面との対応関係を見ると、SD250が埋没するまでに2面の硬化面があるので、SF151第3硬化面がSD270掘削時に舗装された道路面にあたり、第2硬化面はSD270が掘り直された際に舗装された道路面と考えられる。内部には礫が多く廃棄され、最上層に粘土ブロックが多いところから見ると、次のSD270に掘りなおされる際には上部を人為的に埋めたものと推定される。遺物の出土状態は、大量の瓦礫が廃棄されている。特に瓦や埴の破片が多く、この溝が機能していた第4四半期前半にかなり大規模な廃棄が繰り返されたと推定されるが、焼土や炭は少なく火災処理の廃棄は行われていない。切合関係から16世紀第4四半期前半と考えるられるが、中国景德鎮窯系青花皿F群も出現しており、第4四半期の後半に埋没したものと推定される。

水路ではない

瓦礫廃棄

埋め戻し

SD250 出土遺物 (第4 - 88 図①~⑨)

人形手青磁碗

1はC7区出土の中国龍泉窯系人形手青磁碗の底部片。2は同じくC7区出土の15世紀の中国龍泉窯系青磁碗底部片。3はB9区出土の内面に文様を持ち、口縁に浅い刻みを入れる中国龍泉窯系青磁碗D類の口縁片。4はB11区出土の中国龍泉窯系青磁碗の底部片。5はe区出土の内面に雷文帯をもつ中国龍泉窯系青磁碗の口縁片。6はd区出土の外面に密な唐草を配する15世紀後半から16世紀前半の中国景德鎮窯系青花皿B1群の底部片。7はb区出土の16世紀末の中国景德鎮窯系青花皿F群の口縁片。8はg区出土の景德鎮青花皿C群を模倣した葦筒底の中国漳州窯系青花碗。9はB10区出土の中国漳州窯系青花碗の底部片。10はSK156出土片と接合した中国漳州窯系青花碗の底部片(接合資料36)。11はB9区出土の13~14世紀中国磁州窯系陶器の白地鉄絵褐釉龍鳳文壺胴部片。12はB10区出土の肩部に柳描の波状文をめぐらす備前焼壺片。13はB10区で出土し、10次II区南のSD118やSK252、SK261出土片と接合した備前焼の鉢(接合資料16)。14はB10区出土の中世5期15世紀後半の備前焼壺。SD118、SF151、SK262ほかに10次II区南の遺構と接合した。(接合資料35)。16世紀第4四半期に廃棄されているので、約1世紀間使用されていたものと推定される。15はB9区出土の中世6a期16世紀前葉の備前焼壺口縁片。16はB11区出土の中世6期の備前焼壺口縁片。17はB7区出土の16世紀中葉中世6b期の備前焼壺口縁片。18はB7・8区出土の16世紀後葉近世1期の備前焼壺上半。19はC7区出土の16世紀後葉近世1期の備前焼壺口縁片。20はC7区出土の中世3ないし4期14世紀の備前焼鉢口縁片。21はB8区出土の中世4b~5a期15世紀前半の備前焼鉢口縁片。22はC6区出土の中世5期15世紀末製作の備前焼鉢口縁片。23はC7区出土の中世6期の備前焼鉢口縁片。24はB10区出土の斜めスリ目を施す近世1a期の備前焼鉢。25はB11区出土の近世1a期の備前焼鉢。26はB10区出土の中世須恵器の鉢口縁片。27はB11区出土の多条沈線を施す瓦質火鉢で、獸脚には縦に貫通する穿孔がある。28はC7区出土の多条沈線を施す瓦質火鉢の胴部片。29はB8区出土のSE148井筒内とSK262出土片と接合した浅いタイプの瓦質火鉢(接合資料6)。30はB7区出土の口縁が丸い瓦質火鉢口縁片。31はB11区出土の瓦質火鉢底部。32は瓦質鉢の口縁片。33は外面にケ

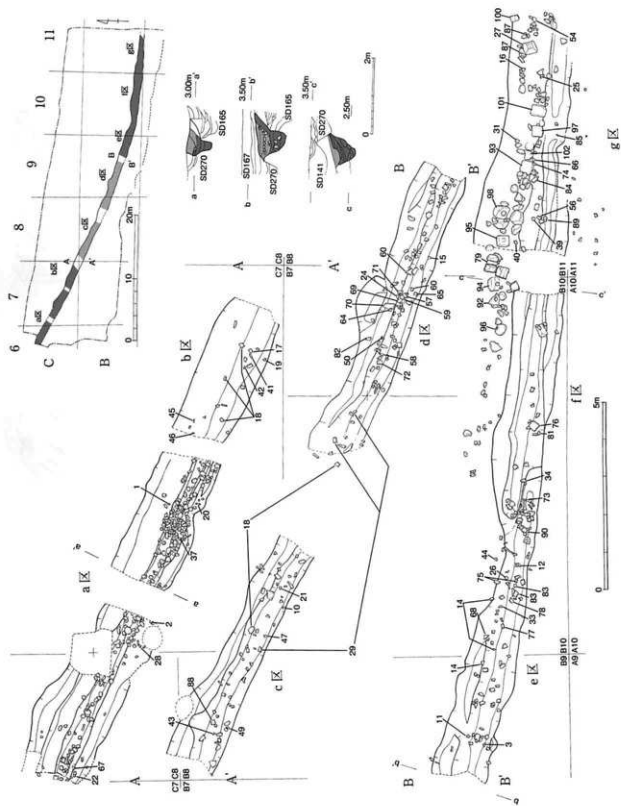
青花

漳州窯

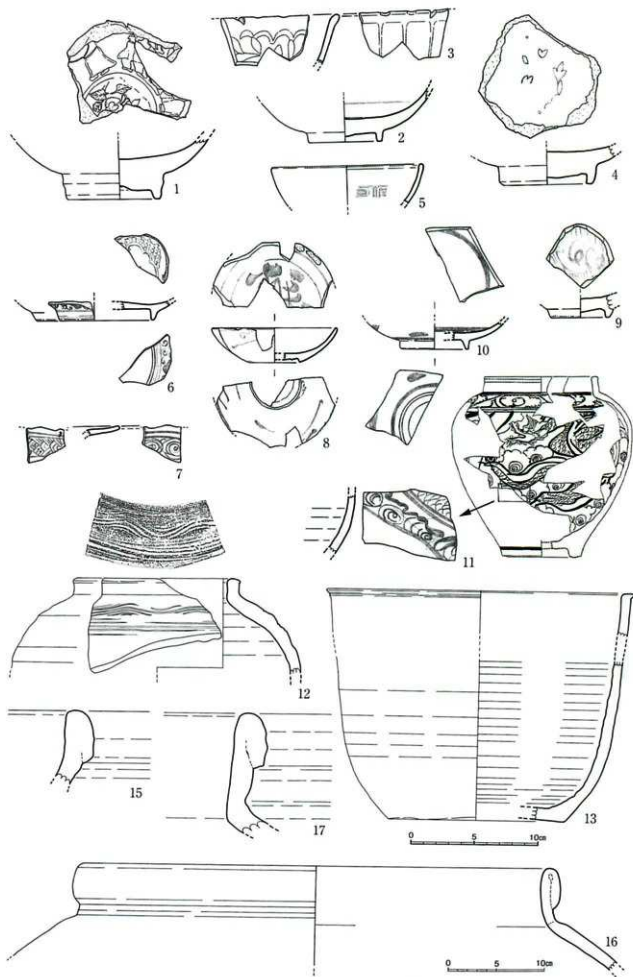
備前焼

1世紀使用された壺

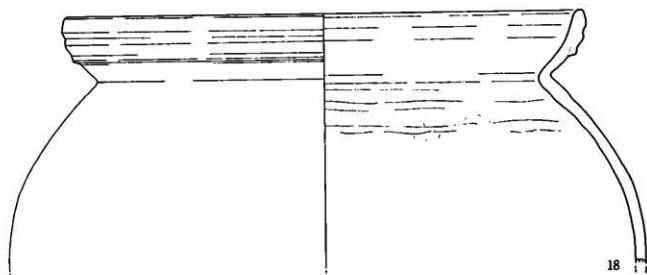
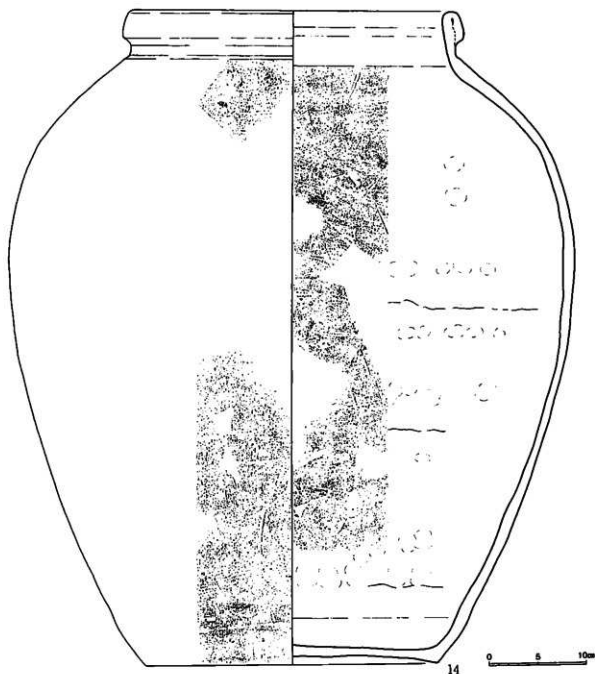
瓦質土器



第4-87図 SD250 (1/100)

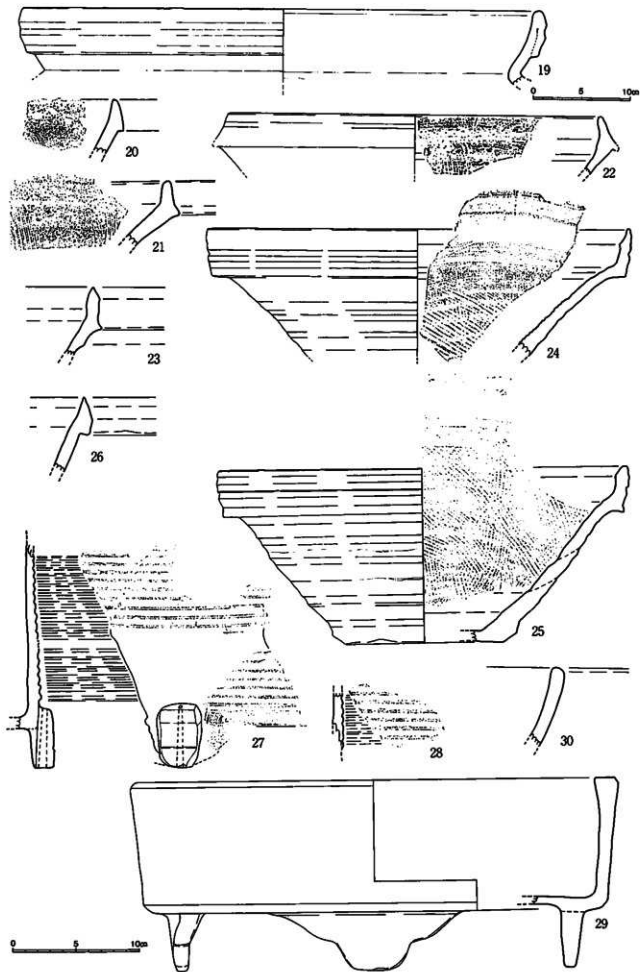


第4-88図① SD250出土遺物 (1/3, 16=1/4)

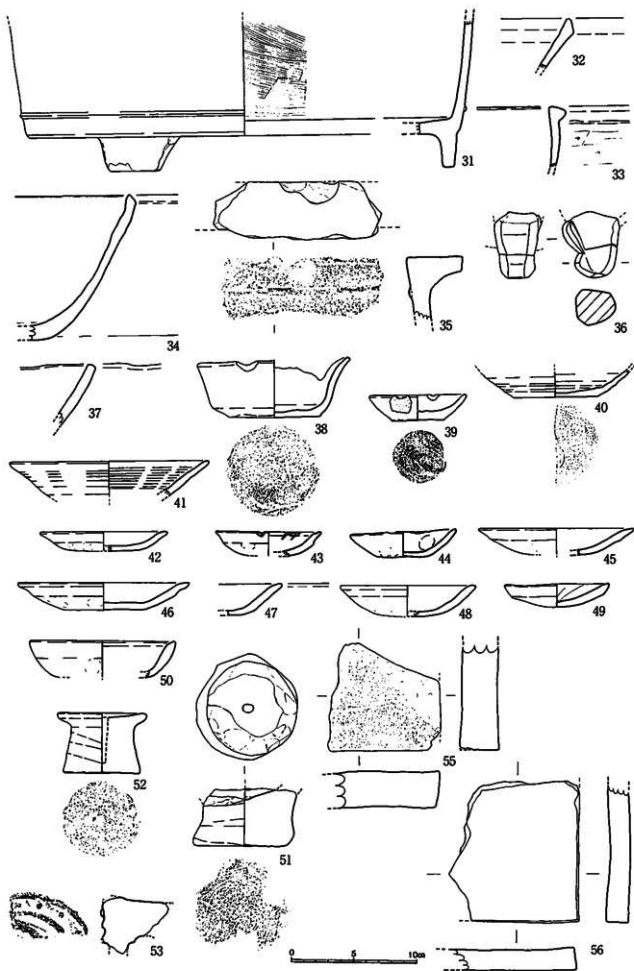


第4-88图② SD250 出土遺物 (1/4)

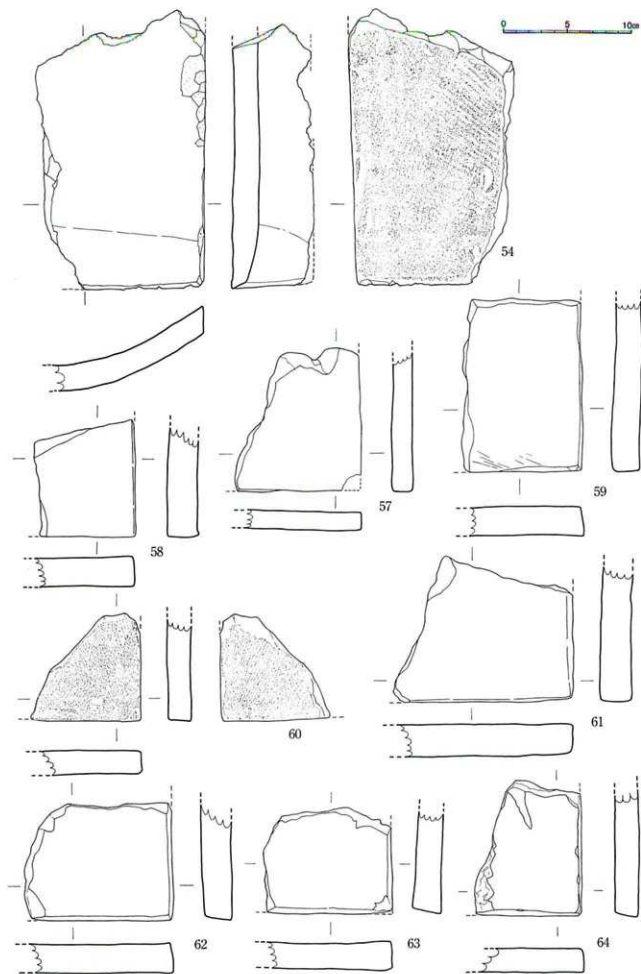
- ズリのある瓦質鉢口縁。34はB10区出土で、10次調査Ⅱ区南のSD116.S104.S124出土片と接合した瓦質鉢（接合資料1）。35は口縁が内側に屈折し、多重菱形文の刻印をもつ方形の瓦質火鉢口縁片。36はB8区出土の瓦質火鉢の立体的な表現の獣脚。37はC7区出土の土師質鍋の口縁部、胎土に石英粒子を多く含むので海部郡産と見られる。38はB11区出土の胎土に金蓋母を含む完形の底部糸切の土師器坏、口縁に2箇所打ち欠きがあり、15世紀後半の河野分類A類にあたる。39はB11区出土の口縁に3箇所打ち欠きがある完形の底部糸切の土師器小皿、河野分類A類にあたる。40はB11区出土のクロロ目土師器皿の底部片。41はB7区出土のクロロ目土師器皿の口縁片。42はB7区出土の灯明皿として使用された京都系土師器1期の小ぶりな浅い皿の口縁片。43はB8区出土の灯明皿として使用された京都系土師器1期の小皿口縁片、口縁に2箇所打ち欠きがある。44はB10区出土の灯明皿として使用された京都系土師器1期の小皿の完形品。45と46はB7区出土の京都系土師器2期の皿口縁片。47はB8区出土の京都系土師器2期の皿口縁片。48はB7区出土の京都系土師器2期の小皿口縁片。49はB8区出土の京都系土師器2期の小皿片。50はB9区出土の京都系土師器3期の坏口縁片。51はB10区出土の底部糸切で器高の低い15世紀の土師器燗台5類。52はB11区出土の土師器燗台A2類。53はB11区出土の軒丸瓦片。54はB11区出土の煤が付着した平瓦片。55はB9区出土の厚手の埴片。56・74はB11区出土の埴片。57～61・69・70・72はB9区出土の埴片。以上の埴はコビキ痕のあとナデ調整。62はB8区出土の埴片。63～66・84はB11区出土の胎土に石英を含む海部郡産の埴片。67はC6区出土の埴片。68・73・75・77～81はB10区出土の埴。71・82はB9区出土の胎土に石英を含む海部郡産の埴片。76・83はB10区出土の胎土に石英を含む海部郡産の埴片。85はB11区出土の端部をへら調整する管状土唾A類の完形品。86はB7区出土の中国銅銭の破片で篆書体の「通」のみ読める。87はB11区出土の和泉砂岩製石臼の上白片。88はB8区出土の安山岩製の石臼上白片。89はB11区出土の安山岩質凝灰岩製の宝塔あるいは宝篋印塔の層輪。90はB10区出土の凝灰岩製の五輪塔空風輪。91はB11区出土の石材に再加工された凝灰岩製の五輪塔の火輪。92はB10区出土の石材に再加工された凝灰岩製の五輪塔の火輪。93はB11区出土の凝灰岩製の五輪塔火輪。94はB10区出土のやや硬質の安山岩質凝灰岩製の五輪塔火輪。95はB11区出土の硬質凝灰岩製の五輪塔火輪。96はB10区出土の硬質凝灰岩製の五輪塔水輪、上下を再加工している。97は凝灰岩製の五輪塔の地輪残欠。98はB11区出土の凝灰岩製の五輪塔地輪。99はB10区出土の空風輪を欠いた硬質凝灰岩製の一石五輪塔。100はB11区出土の凝灰岩製の石材。101はB10区出土の加工した凝灰岩石材。102は凝灰岩製の石材。
- なお以下の接合資料破片が出土している。SD116、SD131、SE148出土片と接合した瓦質風炉（接合資料2）の破片。SK261出土片と接合した備前焼釜口縁（接合資料3）の破片。SD116、SD131、SE148井筒内、SK262、SK263、SP214出土片と接合した備前焼壺（接合資料4）の破片。SK261、SK262出土破片と接合した備前焼広口壺（接合資料7）の破片。SD292出土片と接合した中国製焼締陶器の鉢C類（接合資料8）の破片。SD116、SD131、SK231出土片と接合した備前焼壺（接合資料14）の破片。SD118、SK229出土片と接合した瓦質火鉢（接合資料17）の破片。SD118、SD292、SF151、SK261、SK262の各遺構出土片と接合した中国産黒褐輪軸陶器壺（接合資料19）の破片。SD292、SE148井筒内、SK261出土片と接合した信楽焼陶器壺（接合資料22）の破片。SK261、SK262出土破片と接合した備前焼壺下部（接合資料26）の破片。SK231、SK236、SK269、2号墓（ST135）出土破片と接合した中国産黒褐輪軸陶器の壺（接合資料28）破片。SK262出土片と接合した備前焼壺胴部（接合資料32）の破片。SD116出土片と接合した備前焼壺底部（接合資料33）の破片。SK262出土片と接合した埴（接合資料38）の破片。動物骨として牛上顎臼齒。牛の臼齒。C区上層から馬の切歯などが出土している。ほかに中国黒褐輪軸陶器壺、土師器壺、丸瓦、棧瓦、加工痕のある凝灰岩の破片が出土している。



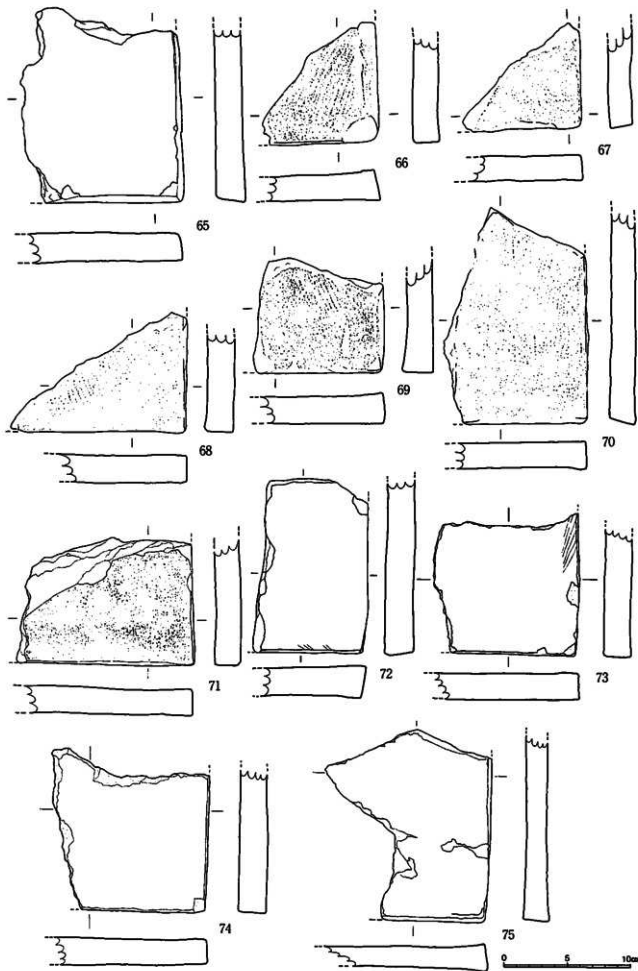
第4-88図③ SD250出土遺物 (1/3, 19=1/4)



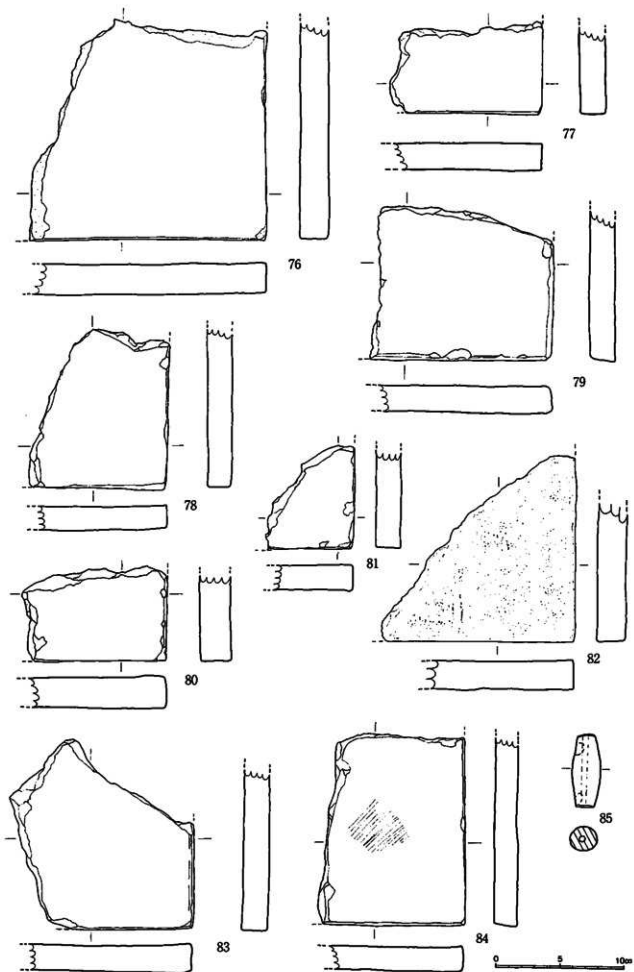
第4-88図④ SD250出土遺物 (1/3)



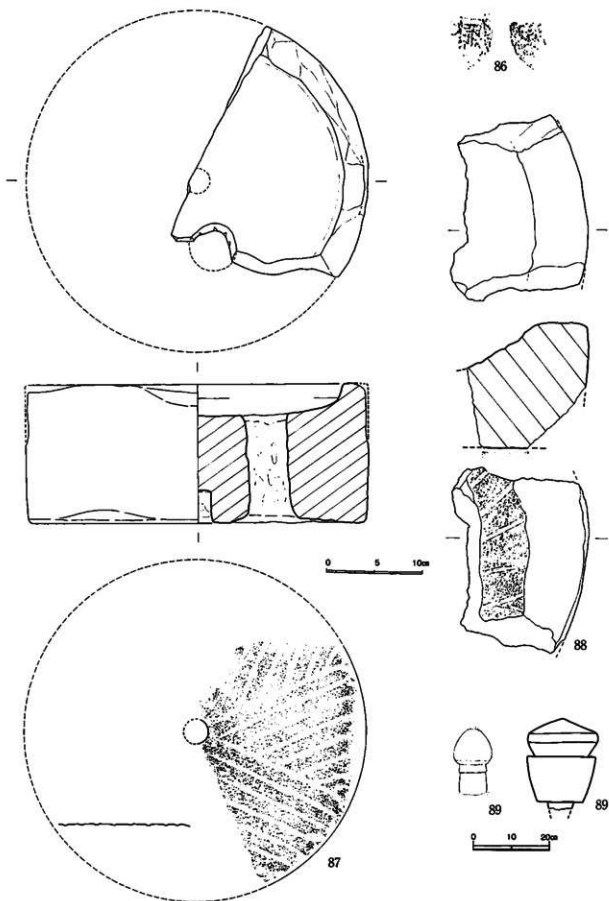
第4-88图⑤ SD250出土遺物 (1/3)



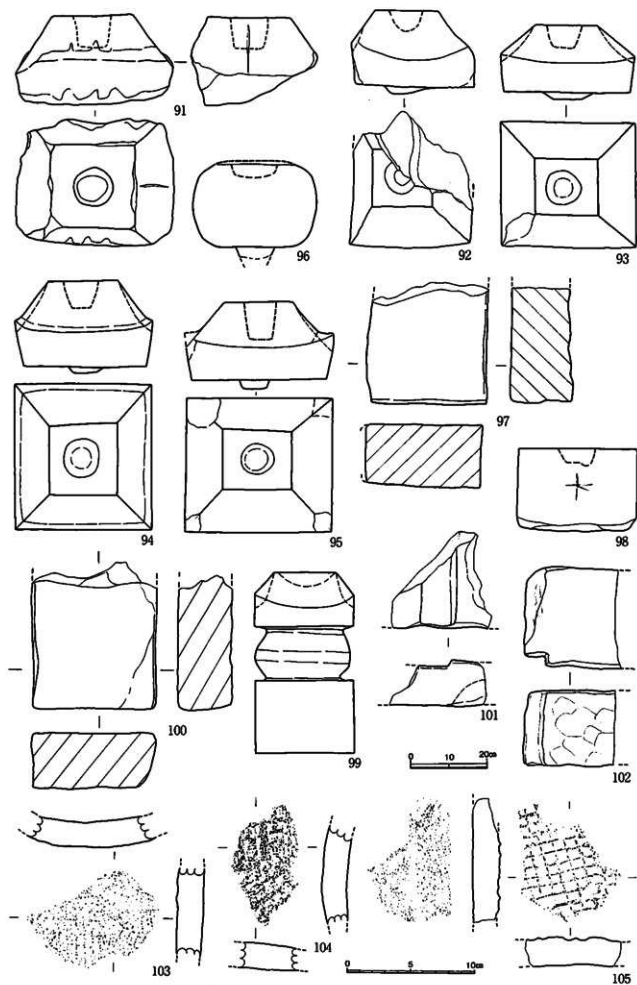
第4-88圖⑥ SD250出土遺物 (1/3)



第4-85圖⑦ SD250出土遺物 (1/3)



第4-88圖⑧ SD250出土遺物(86=1/1、87・88=1/4、89・90=1/10)



第4-88图⑧ SD250出土遺物 (91~102=1/10, 103~105=1/3)

残留遺物。103と104はB9区とB8区出土の内面ナデ、外面格子タタキを施す古代の平瓦。105はC7区出土の内面布目、外面格子タタキの古代平瓦。ほかにSD116出土片と接合した須恵器甕胴部（接合資料30）の破片が出土している。

SD270（第4-89図、付図8）

東西溝 SD250に重なる位置に掘られた東西に貫通する溝である。SD250と同じくSD167の底面で検出した。16世紀第4四半期前半の溝SD250を切り、第4四半期後半の溝SD141とSD167に切られる。長さ44m以上、幅0.5～1m、深さ0.5mで、断面はV字溝、その底面は円形である。SD270とほぼ同じ形態である。底面の標高は東端で3.0m、西端で標高2.9mだが、中央部で2.7mと低くなっている。SD250と同様な掘り方で、決まった方向に水を流すようには掘られていない。SD250を引継いで北側の区画と東西道路を区切る機能を重視したものと考えられる。下層には場所によっては水が溜まったような粘土層の堆積がある。道路状遺構SF151の道路面との対応関係を見ると、SF151第1硬化面がSD250掘削時に舗装された道路面で、第1硬化面使用中に埋め戻されて、SD167に置き換わると推定される。内部には道路の積土から落下した小礫が多くふくまれ、最上層に粘土ブロックが多いところから見ると、次のSD167を構築する際に上部を人為的に埋めたものと推定される。遺物の出土状態は、小破片が散在する状態でSD250に比べると極めて少ない。焼土や炭は少なく火災処理の廃棄は行われていない。近世1期の備前焼や京都系土師器3期の皿が多いことと切合関係から、掘削されたのは16世紀第4四半期前半と考えられ、SD167構築で埋められるのは10の唐津碗から第4四半期後半に下るものと考えられる。

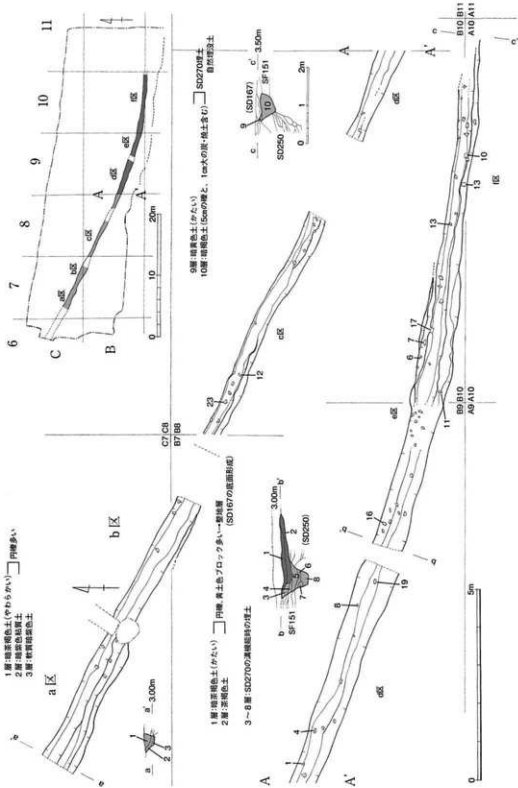
また内部から8世紀の須恵器円面硯の破片が出土していることも注目される。

SD270 出土遺物（第4-90図）

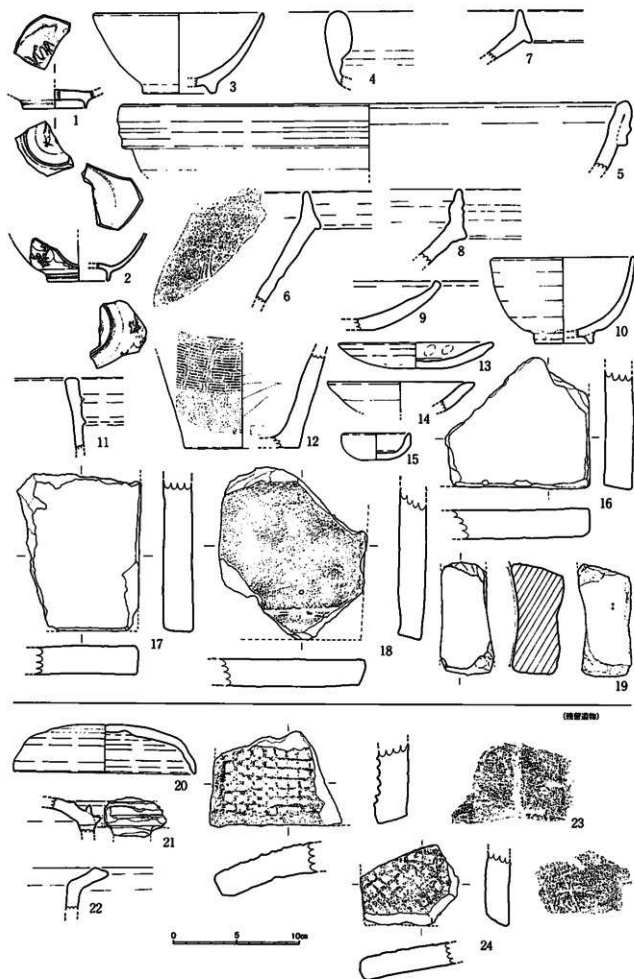
1と2は16世紀後半の中国景徳鎮窯系青花碗E群の段頭心碗底部。3はSF151上層出土片と接合した朝鮮王朝産陶器碗。4は中世5期15世紀後半の備前焼甕口縁片。5は16世紀第4四半期にあたる近世1期の備前焼甕口縁片。6と7は中世4b期15世紀中ごろの備前焼鐙鉢口縁片。8は16世紀末近世1b期の備前焼鐙鉢口縁片。9は備前焼茶陶の浅鉢口縁片。10は1590～1610年製の唐津焼陶器碗。比較的上層から出土しているため、SD167構築時の直前に廃棄された遺物と推定される。11は瓦質火鉢の口縁片。12は胴部外面に雷文などの刻印で埋めた瓦質の壺か、刻印の中には双頭龍手電雲文があるので、在地の瓦質土器製作者の手になるものである。13と14は京都系土師器3期の皿口縁片。15は京都系土師器3期の最小の小皿。16は胎土に大型石英粒子を多量に含む海部郡産の埴の破片。17と18も埴で、18はカキ目を施す。19は完形の砥石。なお、SK262出土片と接合した備前焼甕胴部（接合資料31）の破片も出土している。動物骨。B7区から牛の上顎臼歯。B8区からウシ第3大臼歯。B8区からウマ上右臼歯。B9区からウマ臼歯2片が出土している。ほかに苜蓿、備前焼壺、海部郡産の平瓦、内面布目の九瓦、鉄器の破片が出土している。

円面硯 残留遺物。20は7世紀前半のTK209型式の須恵器杯蓋片。21は8世紀の須恵器円面硯の破片である。22は古代の土師器である金盃型甕の口縁片。23と24は内面布目外面格子タタキの古代の平瓦片。ほかに古代土師器碗底部・高杯の破片が出土している。

古代瓦



第4-89図 S-270 (1/100)



(複製遺物)

第4-90図 SK270出土遺物 (1/3)

SD131 (第4-91図)

屈折する溝

C8・C9区(北1区・北2区)で検出された溝で、東端で円弧を描いて北向きに屈折して終わる。長さ126m、幅1.0m、深さ0.2～0.5mで断面は半円形から逆台形形で一定しない。東端の屈折部分は扇形を検出できず、埋没した際の分布から推定した。底面の高さは3.2～3.3mで一定しており、片方に低く流れるという傾向はないので、本来水を流すことを目的に掘削した溝ではない。15世紀後葉の土坑SK256、16世紀第4四半期前半の土坑SK252とSK269を切る。堰土は暗茶褐色土から明褐色土(黄色土ブロックと炭含む)の単一層で、内部には凝灰岩礫が集中する。とくに溝の両端では礫の集中がはげしく、出土遺物も多くがその礫群の中に入っている。遺物はいずれも破片で散在しており、礫が多い部分は埋没時の瓦礫を廃棄したものと推定される。溝は水路等の排水施設ではなく、区画の溝として掘られたものである。南側に第4四半期前半の墓地第3期の埋葬が行われているので、墓地とその内部を区画する溝と考えられる。墓地との関係から16世紀第4四半期前半に掘削され、切合関係や出土遺物から第4四半期後半まで存続したと想定され、最後は瓦礫を廃棄して埋没している。

区画溝

墓地を区画

瓦礫廃棄

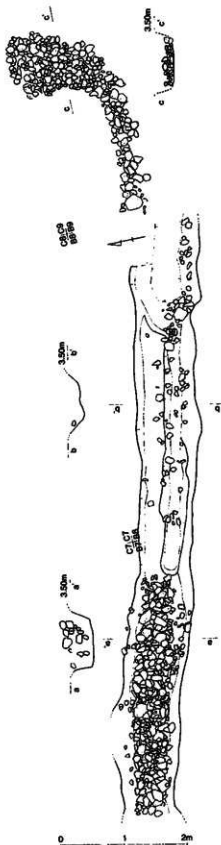
SD131 出土遺物 (第4-92図①②)

中国陶器

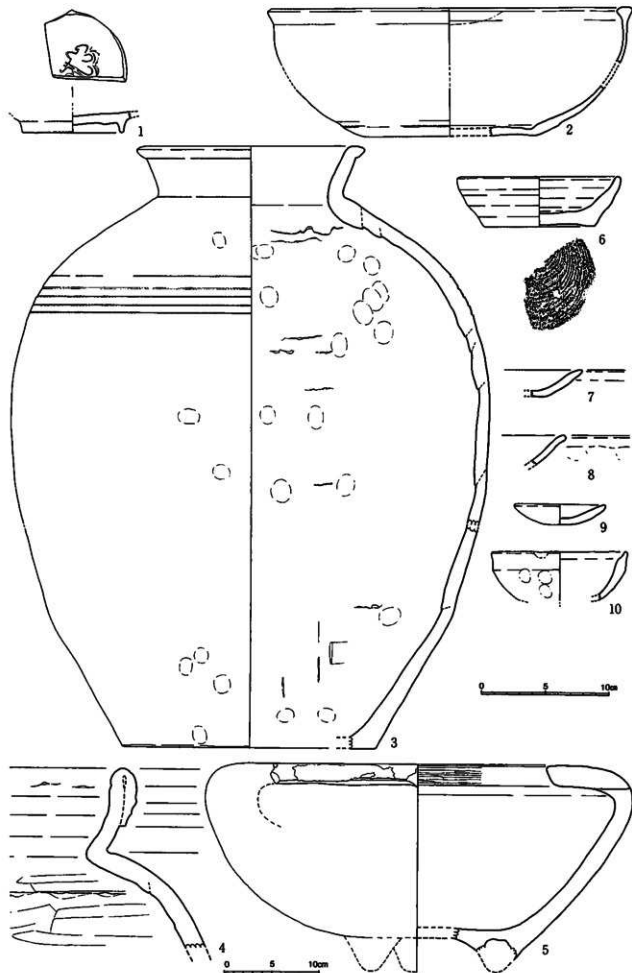
備前焼

土師器

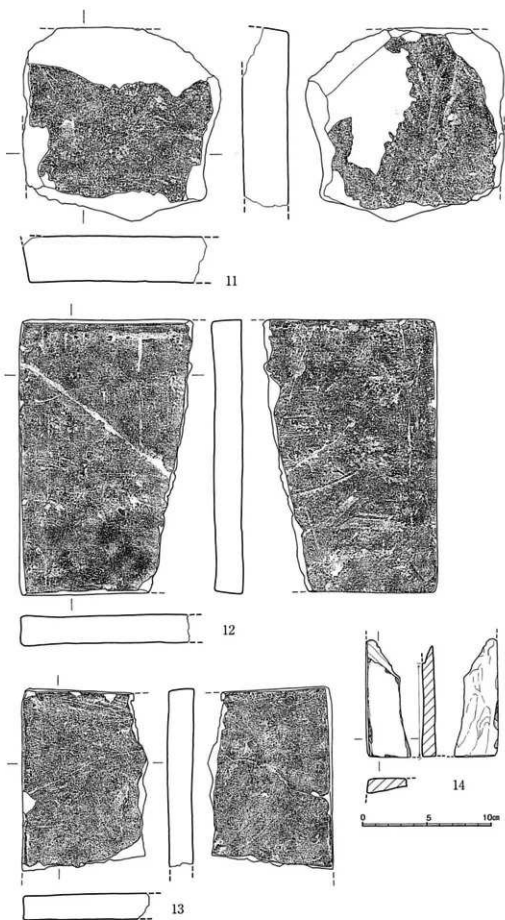
1は14～15世紀の中国龍泉窯系青磁碗C-IIb類の底部片。2はSE147、SK231、SK269出土片と接合した中国製焼締陶器の鉢B類の口縁片(接合資料11)。3はSD116、SD250、SK231出土片と接合した、肩部に5条の沈線がめぐる備前焼の壺(接合資料14)。4は16世紀第4四半期近世1期の備前焼甕の口縁片。5はSD116、SD250、SE148、SK263出土片と接合した瓦質風炉(接合資料2)。6は15世紀河野分類B類に当たる底部糸切の土師器坏の口縁片。7と8は京都系土師器1期の皿口縁片。9は京都系土師器2期の小皿片。10はSE148井筒内出土片と接合した京都系土師器3期の坏で、口縁に1箇所打ち欠きがある(接合資料40)。11は厚手の埴の破片。12は埴。13は海部郡産の埴。14は粘板岩製の砥石片。なお以下の破片が出土している。SD116、SD250、SE148井筒内、SK262、SK263、SP214出土片と接合した備前焼壺(接合資料4)。



第4-91図 SD131 (1/60)



第4-92図① SD131 出土遺物 (1/3, 4=1/4)



第4-92図② SD131 出土遺物 (1/3)

SD141、SE210 掘形内、SK231 出土片と接合した瓦質茶釜（接合資料 21）。ほかに白磁、中国景德鎮窯系青花碗 E 群、中国漳州窯系青花、瓦質火鉢底部、京都系土師器 2 期皿、京都系土師器 2 期皿を転用した増埴、瓦、五輪塔空風輪、動物骨などの破片や、残留遺物として須恵器甕、古代土師器杯・坏壺の破片が出土している。

SD230、SK261、SD292（第 4 - 93 図）

排水遺構

以上の溝と土坑は一連の排水遺構と考えられる遺構群である。B9・B10 区（北 1 区・東区）の第 2 層除去後に検出されたもので、溝 SD230 は 16 世紀第 3 四半期の土坑 SD284 を切り、第 4 四半期前半の土坑 SK229 と SK273 に切られる。同じく土坑 SK261 は第 2 四半期の井戸 SE291 を切り、第 4 四半期後半の土坑 SK231 に切られる。溝 SD292 は SD165 と第 2 四半期の土坑 SK265 を切り、第 4 四半期後半の井戸 SE210 と前半の土坑 SK262 に切られている。

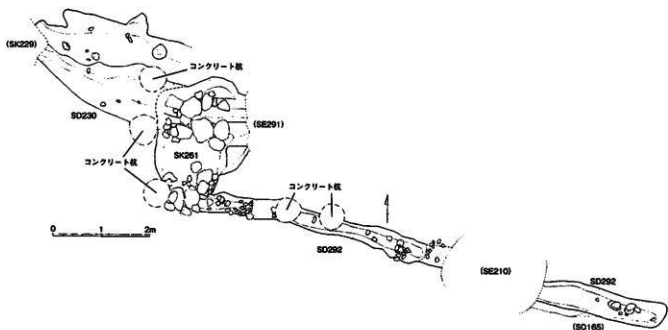
接合した磁

この 3 つの遺構が一連の構造物であることは接合資料 22 の信楽焼壺（497 図①-1）のように、埋没時に SK261 と SD292 の上層に破片が散布する土器の存在から証明される。また SK261 と SD292、SD230 が接続する部分には、特に大型の礫が塞ぐように積れている。まず底面全体に拳大から人頭大の礫を敷き、その上に大型礫を積み上げている。底面の高さを検討すると、SD292 は東から西に向けて緩やかに低くなっており、水が流れる場合は SD292 から SK261 に流れ込むと想定される。同様のことは SD230 との間にもいえる。すなわち SD230 方向から SK261 に向う。

詳

SD230 の埋土は暗黄褐色微砂質土（1cm 大の黄色土ブロック、炭焼土多く含む）で、SD261 は第 2 層と同じ土で埋没している。

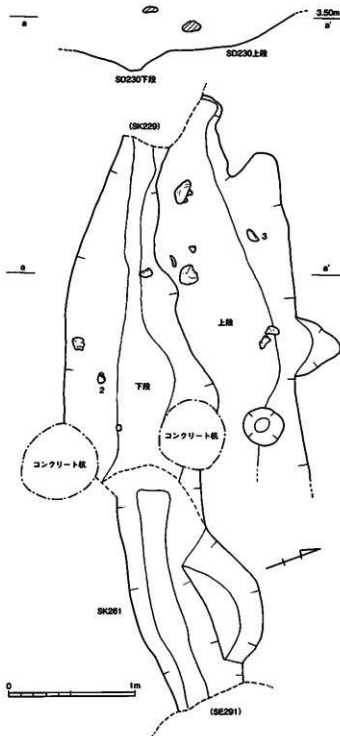
以上の切合関係から、一連の遺構 SD230、SK261、SD292 は 16 世紀第 4 四半期前半の遺構と推定される。



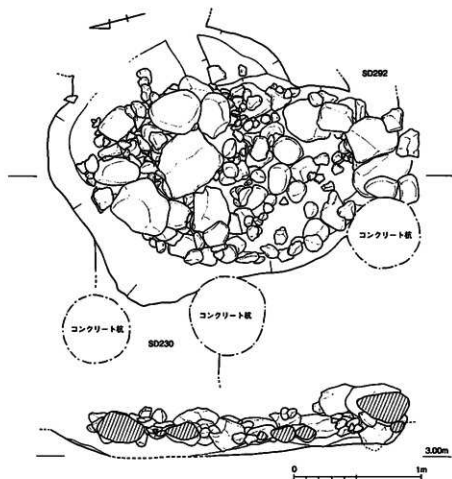
第 4 - 93 図 SD292、SK261、SK230 (1/80)

SD230 (第4-94図) は長さ4.8m以上、幅1.8m、深さ0.4mの溝状遺構で、皿状の断面がかさなる二段掘りになっており、下段の溝はSK261の底面北側でも続きを確認でき、さらにSK261に礫が構築される時点では既にSD230下段の溝は埋没していることが、SK261-2の遺物の廃棄レベルから確かめられるので、SD230下段の溝は時期の異なる古い溝の可能性が高い。その時期はSD230-1と2の底部糸切の土師器小皿の形態から15世紀後半の可能性が高い。

SK261 (第4-95図) はSK231の底面で検出したもので長さ2.8m、幅1.9m、深さ0.5mの長円形の土坑である。南側がすぼまるようになりその先端にSD292が接続する。底面の高さは北に向うほど低くなるので、SD292の方向から水が流れ込む場合、水は土坑北半に溜まることになる。内部は大型礫で石組みし、底部にも礫を敷き詰め充満させた石組み土坑である。礫は安山岩質の河原石がほとんどであるが、中には凝灰岩礫、結晶片岩礫、あるいは石臼の破片を利用している。その礫の敷く際に陶器の壺や瓦、などの破片がかなり混ざりこんでいる。2の備前焼の壺は石組の上下で破片が出土しており、石組み構築時の遺物である。同じく10・11の埴・13の平瓦・16・17の石臼片なども構築時のもので、1・3・5・9・14の破片はこの遺構が機能していた時あるいは廃棄時の遺物である。



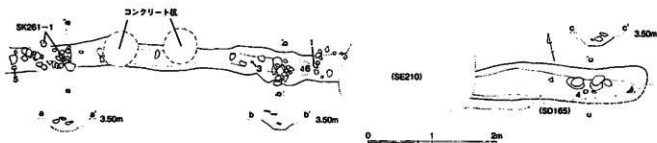
第4-94図 SD230 (1/30)



第4-95図 SK261 (1/30)

細長い溝

SD292 (第4-96図)はSK262の底面で検出した細長い溝で、長さ約10m、幅0.4～0.6m、深さ0.2m、断面は逆台形から半円形で安定していない。道路状遺構SF151および側溝SD165に並行して伸びている。内部には學大の礫が集散しながら廃棄されている。遺物はその中に破片として散在する状況である。石組遺構SK261に対して西側に溝SD230、東側に溝SD292を配した長さ10mに達する遺構である。溝の底面は東から西に向かって緩やかに低くなっている。最新の土師器が京都系土師器3期皿と中国漳州窯系青花である点と、切合関係から16世紀第4四半期の前半と推定した。



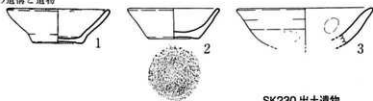
第4-96図 SD292 (1/60)

SD230 出土遺物 (第4-97図)

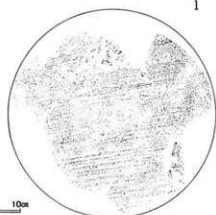
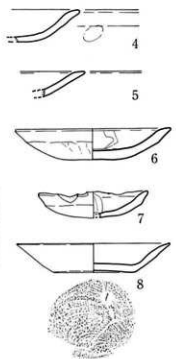
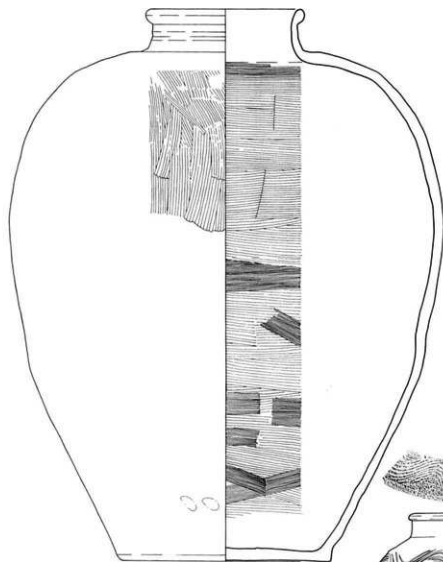
- 土師器 1は口縁部に煤が付着して灯明皿に利用された底部糸切の土師器の小皿。2は口縁全周を打ち欠いた底部糸切の土師器の小皿。1と2とともに15世紀後半の河野分類A類にあたる。3は京都系土師器3期の皿口縁片。ほかに青磁、完形だが箱がひどく鏡種不明の銅銭1枚、瓦質火鉢と埴、土師器の破片が出土している。

SK261 出土遺物 (第4-97図)

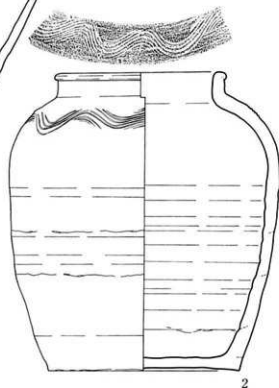
- 信楽焼壺 1はSD250、SD292、SE148 井筒内出土片と接合した信楽焼の壺 (接合資料22)。特有な胎土に内外面を大きな単位のハケ目で仕上げている。底面には板状の圧痕が残る。2はSD250出土片と接合した備前焼の壺、肩部に獅鬚波状文を描く(接合資料3)。SD230との重複部の際の下から上部にかけて破片が散在しており、SK261構築時に廃棄された遺物である。3は中世6a期16世紀前葉の備前焼の壺口縁片。4は下部出土の京都系土師器1期の皿口縁片。5は京都系土師器1期の皿口縁片。6は京都系土師器2期の皿片。7は口縁に打ち欠きのある京都系土師器2期の小皿。8は下層から出土した京都系土師器を模倣した底部糸切の土師器皿、接合してほぼ完形に復元した。9~12は埴の破片。13は平瓦の破片。14は胎土からみて海部郡産の埴。15は完形の中国銅銭である紹聖元寶(北宋初鑄1094年・行書体)、周西を削って小さくしている。重さも19gとその分軽い。
- 石臼 16は安山岩製の石臼の上臼片。17は安山岩製の石臼の下臼で、一単位6本の目が入る。SD292との連結部に際のかわりに置かれたもの。
- 接合資料 なおSD250、SK262出土破片と接合した備前焼水差し(接合資料7)の破片。SD165、SK228、SK293出土片と接合した瓦質火鉢(接合資料15)の破片。SD118、SD250、SK252出土片と接合した備前焼壺の底部(接合資料16)の破片。SD118、SD250、SD292、SK262出土破片と接合した中国製黒褐釉陶器壺(接合資料19)の破片。SD250、SK262出土破片と接合した備前焼壺下部(接合資料26)の破片。SK261出土片と接合した備前焼壺胴部(接合資料34)の、以上の破片が出土している。
- そのほか ほかに中国漳州窯系青花、平瓦の破片、残留遺物として、古代土師器の企救型壺の破片も出土している。



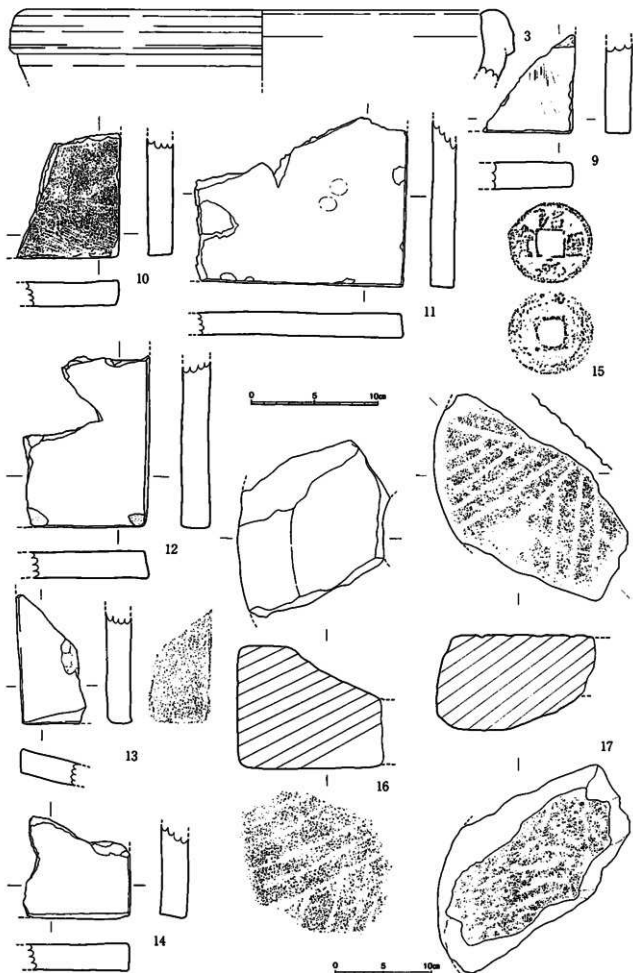
SK230 出土遺物



SD261 出土遺物



第4-97図① SK230・SD261 出土遺物 (1/3, 1=1/4)



第4-97图② SD261出土遺物 (1/3, 15=1/1, 16·17=1/4)

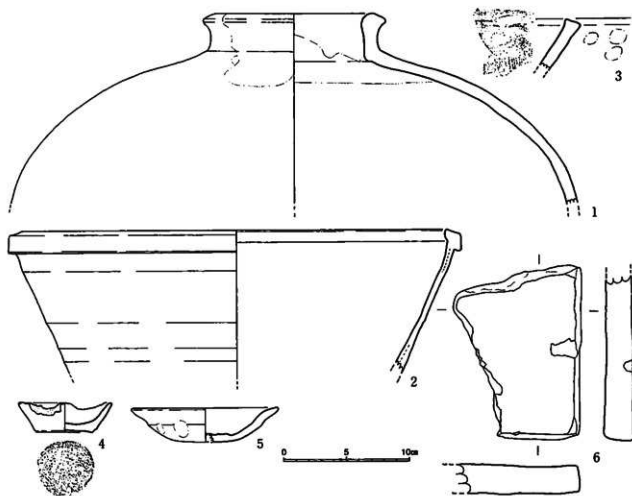
SD292 出土遺物 (第4 - 98 図)

黒釉輪陶器

1 は SD118、SD250、SF151、SK261、SK262 出土片と接合した中国黒釉輪陶器壺の上半部 (接合資料 19)。2 は SD250 出土片と接合した中国製焼締陶器の鉢 C 類口縁 (接合資料 8)。3 は瓦質撞鉢の口縁片。4 は口縁に 3 箇所故意と思われる打ち欠きのある完形の底部糸切の土師器小皿。形態的には 15 世紀の河野分類 A 類にあたる。5 は京都系土師器 2 期の皿口縁片。6 は埴の破片。なお SD250、SE148 井筒内、SK261 出土片と接合した信楽焼壺 (接合資料 22) の破片のほかに、備前焼甕、放射スリ目の備前焼撞鉢、瓦質火鉢の破片が出土している。

古代の遺物

残留遺物として古代の須恵器甕、古代の土師器坏身、黒色土器 A 類碗、内面布目の製埴土器の破片も出土している。



第4-98図 SD292出土遺物 (1/3)

井戸

SE148 (第4 - 99・100 図)

井筒木桶

八角石組

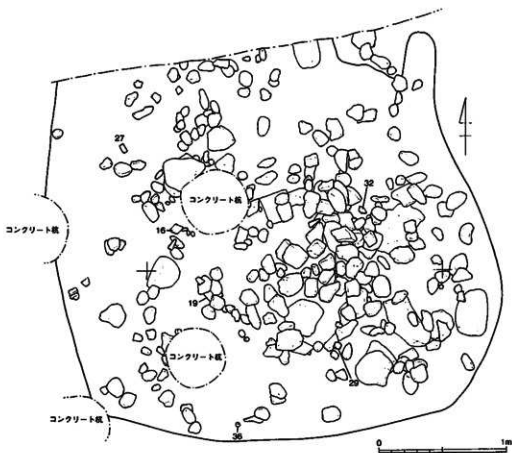
C9 区 (北 1 区) の第 2 層 2 回目掘下げ後に検出した掘形不整形円形の長さ 3.3m、幅 3.0m 以上、深さ 3.0m をこす井戸である。井筒は湧水点に木製桶を 1 基据えて、その上に石材をくみ上げて行くものである。その石組みは上中下の 3 段が残っている。上段と中段は平面八角形になるように石材の面を揃えている。裏込めには凝灰岩の礫や河原石が使われている。下段は上中段と構造が異なり、石材を平たく水平に置いて揃えている。8・9・12・15 では明らかに内側を丸く整形している。同時に上面の高さを一定にするために 7 と 14 のように、石を重ねたりしている。このように下段

五輪塔の部材
の石組みは井筒の石を組み上げるための土台として作られている。使用された石材はすべて凝灰岩で五輪塔の部材が多く加工されて使われている。加工は井筒構築時に行われたようで、石材の隙間に凝灰岩の破片が詰められた状態である。水溜の部分には桶が設置されていたが、桶の上部は欠損している。下段の石組みを平面で見ると丸く内側を整形しているの、本来桶は下段の位置までであったのではないかと推定される。桶の中ほどから以下は湧水がひどく崩落したため完掘できなかった。したがって桶基底の標高を測ることはできなかったが、桶の大きさから推定して、標高1.5mより低くなるかと推定される。

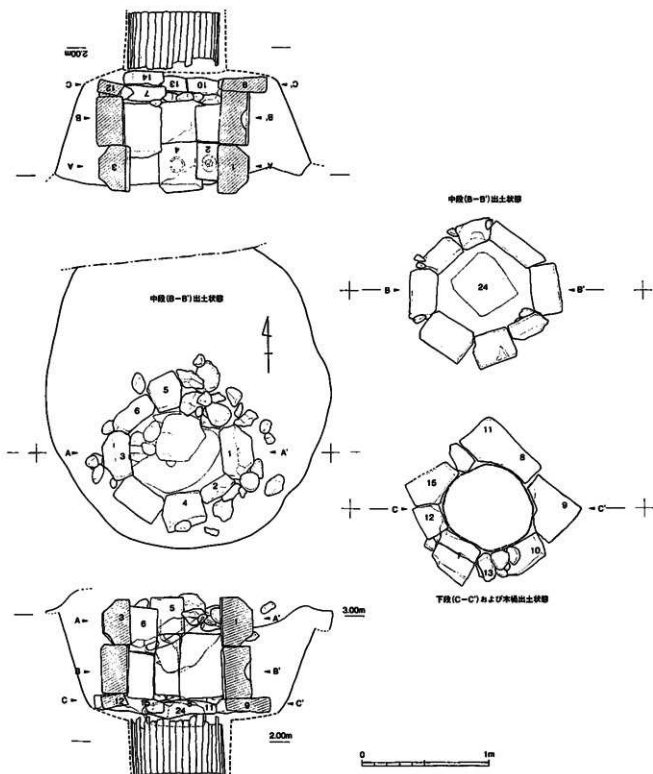
井戸廃棄
井筒の内部には凝灰岩礫が廃棄されている。いずれも本来は井筒の石材と考えるとよい石なので、この井戸を廃棄する際に壊して廃棄したものと考えられる。さらに井戸の掘形の上部に当たる標高3～3.5m付近は第4-99図に示したような廃棄状態であった。内部には凝灰岩礫や被熱した礫が多く井筒の直上にあたるには礫が集中的に廃棄されていた。これは井戸の廃絶時に井筒の上部をふくめて掘形上部を掘り返して内部を埋めた状態であった。このような廃棄状態の遺構を井戸の内部土坑と呼んできたが、これもまさにそのような状態である。

内部土坑

16世紀第3四半期の土坑SK278と15世紀のピットSP288を切り、第4四半期前半の土坑SK264とSK236に掘形が切られ、掘形内から近世1期の備前焼瓦が出土しているの、16世紀第4四半期前半につくられた井戸である。廃絶時の内部土坑から影三鳥碗が出土しており、16世紀の最末期まで使用されている。



第4-99図 SE148 上部廃棄状態 (1/30)



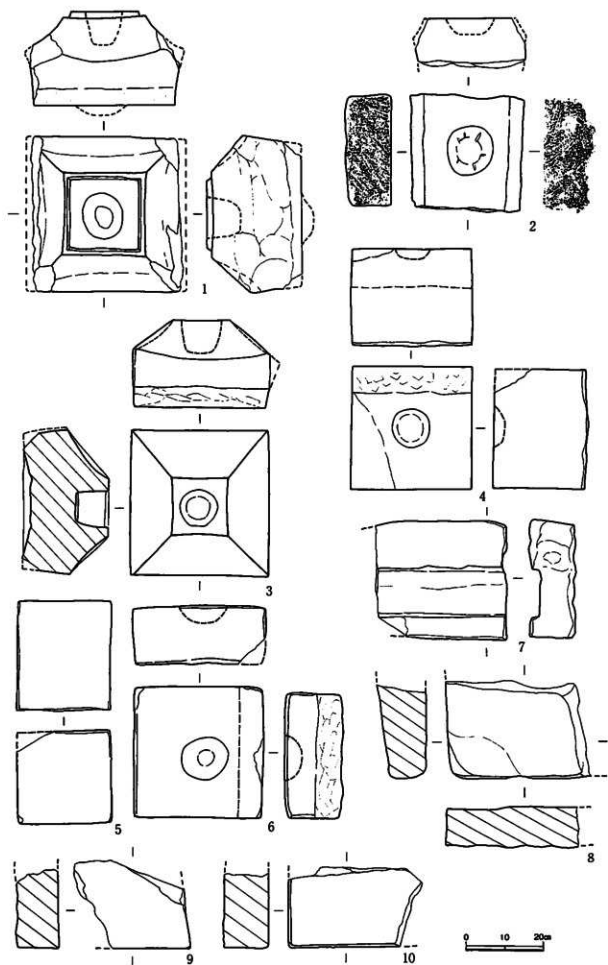
第4-100図 SE148 (1/30)

井筒石材 (第4-101図①②)

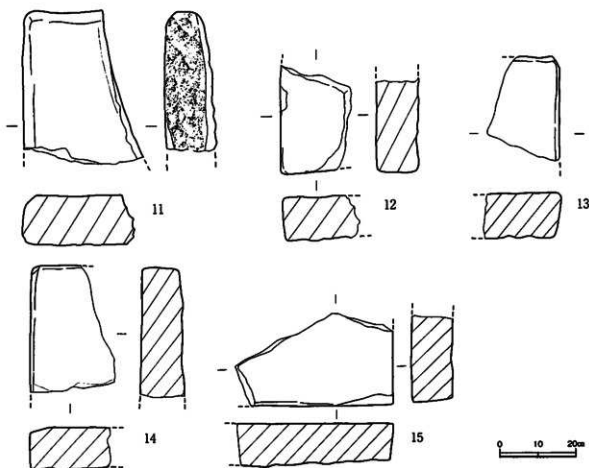
五輪塔の石材

以下の1~6は上段に使われた石材。1~3は再加工された凝灰岩製の五輪塔火輪。4~6は再加工された凝灰岩製の五輪塔地輪。以下の7~14は下段に使われた石材。7は溝を切った石製品を再加工した凝灰岩製の石材。8は凝灰岩製の石材。9は凝灰岩製の加工された石材で、被熱で割れている。10は凝灰岩製の加工された石材。11は加工された凝灰岩石材、手斧痕が明瞭である。なお8と11は本来ひとつの石材である。12は凝灰岩製の加工石材、底面は敲打痕を残し、ほかの

凝灰岩石材



第4-101图① SE148出土遺物 (1/10)

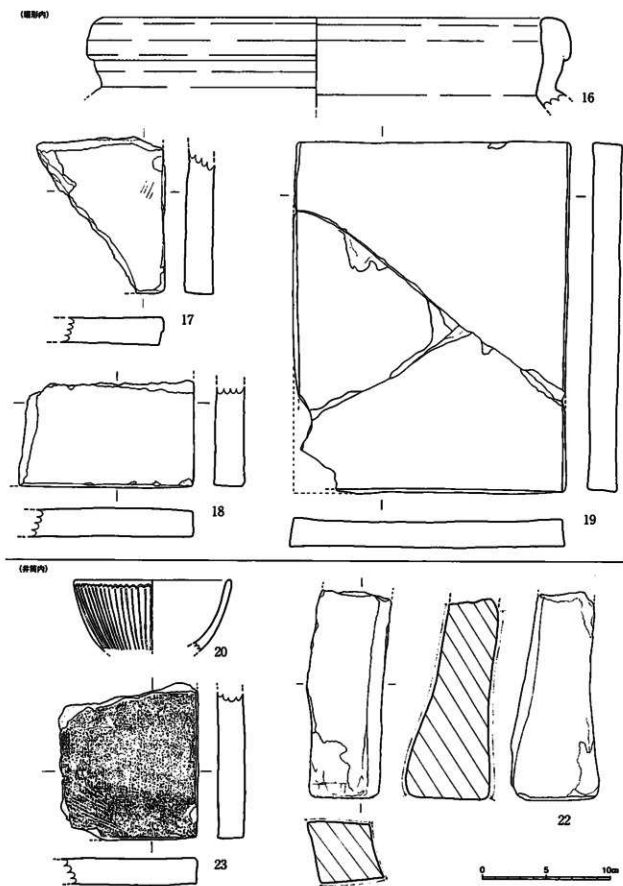


第4-101図② SE148出土遺物 (1/10)

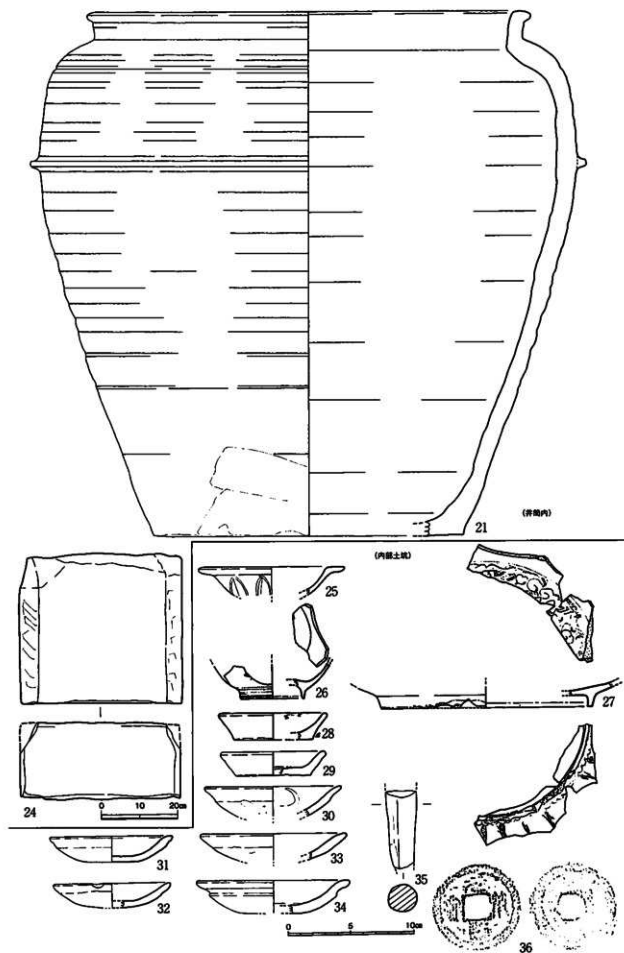
面は研磨している。13は12とおなじ加工の凝灰岩石材。14はおなじく凝灰岩製の加工石材。15は12と同じ加工の凝灰岩石材。

SE148出土遺物 (第4-102図①②)

- 井戸構築時** 掘形内 井戸構築時の遺物。16は中世6期の備前焼甕口縁。17～19は井筒の裏込めに使われていた埴の破片。
- 井戸使用時** 井筒内底部 井戸使用時の遺物。20は細線蓮弁文をほどこす16世紀の中国龍泉窯系青磁碗IV類の口縁片。21は井戸使用中に埋没したと推定される、井筒内の底部で採集した胴部に一条の突帯のめぐる備前焼短頸甕の破片である。SD116、SD131、SD250、SK262、SK263、SP214出土片と接合している(接合資料4)。22は破損した底石片。
- 備前焼窯**
- 井戸廃絶時** 井筒内上部 井戸廃絶時の埋没にさいして廃棄されたと推定される遺物である。23は埴片。24は井筒内に廃棄されていた凝灰岩石材で、五輪塔の地輪を再加工した可能性が高い。なおこのほかに以下の破片が出土している。SD116、SD131、SD250、SK263出土片と接合した瓦質風炉(接合資料2)の破片。SD250、SK262出土片と接合した瓦質火鉢(接合資料6)の破片。SD250、SD292、SK261出土破片と接合した信楽焼の壺(接合資料22)の破片。SK137、SK262出土片と接合した備前焼甕底部(接合資料27)の破片。SD131出土片と接合した京都系土師器3期Ⅲ(接合資料40)の破片。
- 井戸封じ** 内部土坑 以下は井筒検出前の土坑状態のときに発見されたもので、井戸廃絶時の内部土坑内に廃棄された遺物である。25は蓮弁文を施す中国龍泉窯系青磁の鉢口縁片。26は中国景德鎮窯系青花碗E群の設源心碗の底部片。27はSD131・SK269上部出土破片と接合した中国漳州窯系青花皿(接合資料25)。28は口縁に煤が付着して灯明皿として使用された底部糸切の土師器小皿の口縁片。29は内面指ナデ底面に板状圧痕のある河野分類B類の底部糸切の土師器小皿。30は京都



第4-102图① SE148 出土遺物 (1/3)



第4-102 図② SE148 出土遺物 (1/3, 24=1/10, 36=1/1)

系土師器1期の皿口縁片。31は京都系土師器1期の小皿。32は口縁に1箇所打ち欠きのある京都系土師器1期の小皿口縁片。33は京都系土師器2期の皿口縁片。34は京都系土師器3期の皿口縁片。35は防長系の土師器足鍋の脚部片。36は完形の中国銅銭の元符通寶（北宋1098年初鑄・篆書体）。なおSD218、SK231出土片と接合した彫三鳥碗（接合資料9）の破片や、SD165、SE210、SK231出土破片と接合した白磁皿（接合資料23）の破片が出土している。ほかに中国景德鎮窯系青花碗、備前焼甕・指鉢、瓦質火鉢、平瓦、ロクロ目土師器の破片が出土している。

彫三鳥碗

土坑

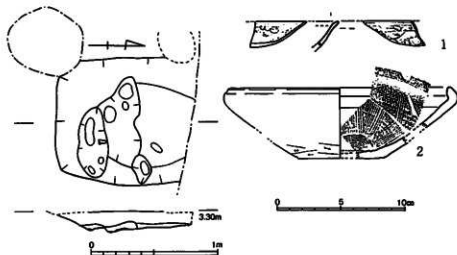
SK264（第4-103図）

C9区（北1区）においてSE148掘下げ中に検出した長さ1.05m、幅1.0m、深さ0.2mの方形の土坑である。断面は半円形で、埋土は第2層土の単一層である。小破片の遺物が散在する出土状態である。16世紀第4四半期の井戸SE148を切り、同じく第4四半期前半SK236に切られる。切合関係から16世紀第4四半期前半と考えられ、出土遺物とも矛盾しない。

方形土坑

SK264出土遺物

1は15世紀後半から16世紀前半の中国景德鎮窯系青花碗B1群の口縁片。2はSD116出土片と接合した中国製焼締陶器指鉢と考えられる破片（接合資料18）。ほかに残留遺物として古代の土師器坏蓋の破片が出土している。



第4-103図 SK264（縮小1/30、遺物1/3）

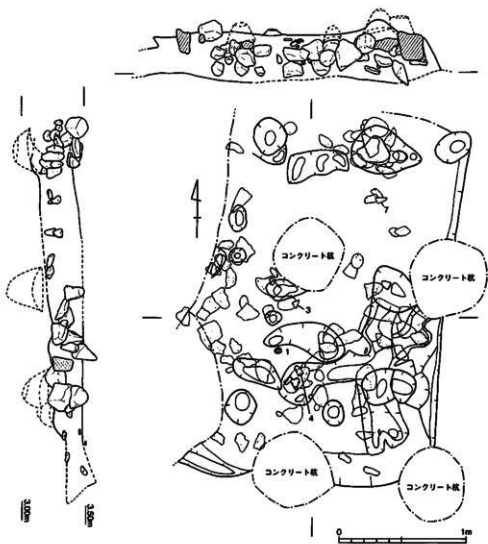
SK236（第4-104図）

C9区（北1区）の第2層除去後に検出した隅丸長方形の竪穴遺構である。長さ2.9m以上、幅2.2m以上、深さ0.3m、底面は平坦で、7本の柱穴を認めた。16世紀第4四半期の井戸SE148と土坑SK264、SK275を切り、同じく第4四半期前半の土坑SK252に切られる。中央南よりの床面近くに完形の土師器皿が逆さにおかれて、中に灰が詰まる。この土師器は口縁を打ち欠き被熱していることから、灰の存在とも考え合わせると、その場で焼かれた上に埋置する祭祀行為が行われたと考えられる。同時に埋土には凝灰岩礫や結晶片岩礫が多く廃棄され、被熱したものも多かった。京都系土師器3期皿の存在と、切合関係から16世紀第4四半期前半の遺構と考えられる。

型穴遺構

逆さの土師器皿

灰と礫



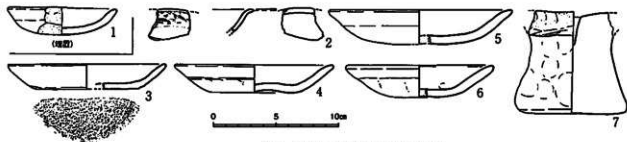
第4-104図 SK236 (1/30)

SK236出土遺物 (第4-105図)

埋戻土器

埋置遺物 逆さに灰の上に完形でおかれた状態で出土した。1は外面が被熱による剥離痕跡の残る京都系土師器1ないし2期の小皿完形品。口縁に1箇所打ち欠きがある。

埋土中 いずれも礫の間などに破片化して散在して出土したものである。2は中国景徳鎮窯系青花碗B群の口縁片。3は底部の広い京都系土師器を模倣した底部糸切の土師器の皿、内面指ナデと板状圧痕がある。4と5は京都系土師器2期の皿片。6は京都系土師器3期の皿片。7は京都系土師器の製作技法で作られた土師器燗台B類で、口縁部をひろく打ち欠かされている。なおSD250、SK231、SK269、2号墓(ST135)出土片と接合した中国黒褐釉陶器燗(接合資料28)の破片が出土している。ほかに青磁片と残留した六連式の製塩土器の破片が出土している。

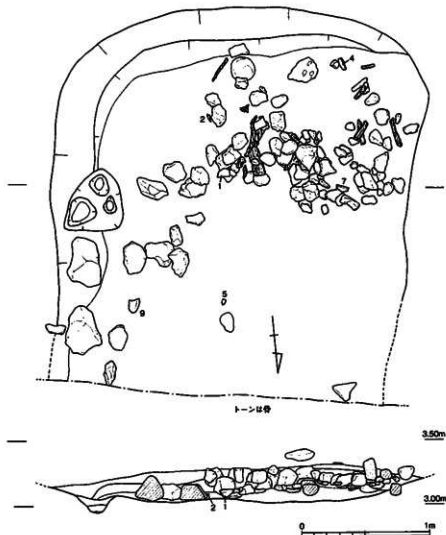


第4-105図 SK236出土遺物 (1/3)

SK252 (=S133) (第4-106図)

長方形土坑
動物骨埋蔵

C9区(北1区)で検出した長さ3.0m、幅2.7m、深さ0.3mの隅丸長方形の土坑である。16世紀第4四半期前半の土坑SK236を切り、同じく第4四半期前半の溝SD131と土坑SK269に、第4四半期後半の土坑SK134に切られる。内部には礫や焼土の集中があり、動物骨が多く、中央に大型骨が置かれていることから何らかの祭祀行為が行われている可能性があるが、出土土器はいずれも破片で礫や骨の間に散在しており、特別な意味は見出せない。中国漳州窯系青花と京都系土師器3期皿の出土と、切合関係から16世紀第4四半期前半の遺構と推定される。



第4-106図 SK252 (1/30)

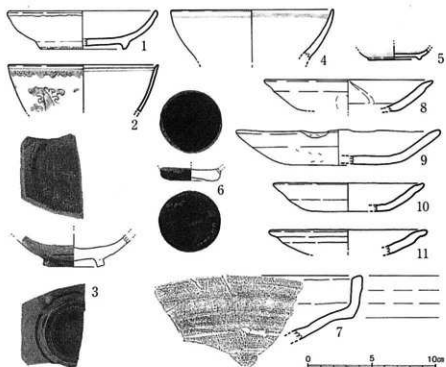
SK252 出土遺物 (第4-107図)

漳州窯

1は16世紀の白磁皿E-1群の破片。2は中国景德鎮窯系青花碗E群の投頭心碗の口縁片、SK263の第4-109図3と同一個体である(接合資料20)。3は中国漳州窯系青花碗の底部片。4は中国漳州窯系青花碗の口縁片。5は翡翠軸の青軸陶器小皿の底部片。6は口縁全体をきれいに打ち欠いた瀬戸美濃産天目碗の底部片。7は16世紀前葉中世6a期の備前焼摺鉢の口縁片。8は京都系土師器2期の皿口縁片。9は口縁に打ち欠きのある京都系土師器2期皿の口縁片。10は京都系土師器2期の皿口縁片。11は京都系土師器3期の皿口縁片。なおSD118、SD250、SK261出土片と接合した備前焼の臺底部(接合資料16)の破片が出土している。

そのほか

ほかに白磁、中国製褐釉陶器、朝鮮王朝産陶器の舟徳利、備前焼甕、平瓦、多数の動物骨・歯の破片が出土し、残留遺物として、弥生土器、須恵器、古代の土師器杯の破片が出土している。

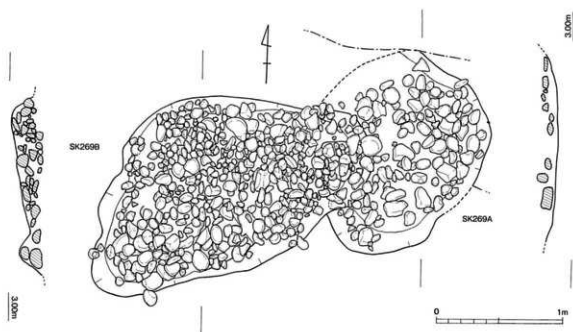


第4-107図 SK252出土遺物(1/3)

SK269 (=S137) (第4-108図)

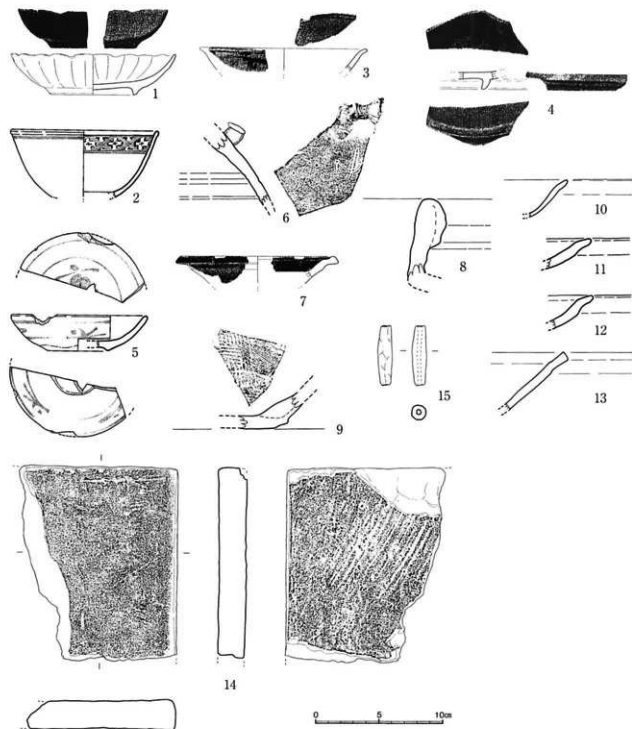
集石土坑

C9区(北1区)で検出したが、当初S137とした集石と同一の遺構と判断した遺構である。掘り進めるうちに重複した2つの土坑からなることが判明した。まずはじめに東側の長さ1.6m、幅1.3m、



第4-108図 SK269 (=S137) (1/30)

2つの土坑 深さ0.1mの平面円形の土坑が掘られ (SK269A 土坑)、大量の拳大の礫が廃棄されたのち、西側に長さ2.4m、幅1.4m、深さ0.3mの不整長円形の土坑が掘られている (SK269B 土坑)。しかし上位で出土した遺物を2つの土坑に分離することはできなかった。ともに礫が充満し、その間にはほぼそした暗褐色土の単一層が詰まっていた。礫の中には安山岩の河原石に混じって凝灰岩角礫や結晶片岩礫など遠隔地から持ち込まれたものも混じっている。土器等の遺物も破片が礫の中に混じりこむ状態で、被熱礫も多く、どちらの土坑もなんらかの建築材をかたづけた廃棄土坑である。16世紀第4四半期前半の土坑SK252を切り、おなじく16世紀第4四半期前半の溝SD131に切られているので、16世紀第4四半期前半のある時期に、礫などの廃棄物进行处理するためにつづけてほられた土坑と考えられる。



第4-109図 SK269 出土遺物 (1/3)

SK269 出土遺物 (第4-109図)

A 土坑出土と確認できるのは残留した須恵器甍片のみで、ほかはすべて B 土坑の隣群の中に入り込んだものである。1 は 16 世紀の中国龍泉窯系青磁椀花皿。2 は口縁内面に四方博文を描く中国景德鎮窯系青花碗の 16 世紀後半のいわゆる鏡頭心碗の口縁片。3 は 15 世紀後半から 16 世紀前半の中国景德鎮窯系青花皿 B 群の口縁片。4 は中国景德鎮窯系青花皿の底部片。5 は景德鎮窯系青花皿 C 群を模倣した碁笥底の中国漳州窯系青花皿で、口縁に土師器と同じような打ち欠きがある。6 は中国製褐釉陶器四耳壺の肩部で、外面にヘラ記号がある。7 は大窯 3 期の瀬戸美濃産陶器の溝緑皿口縁片。8 は 16 世紀中葉中世 6b 期の備前焼の甍口縁片。9 は斜めスリ目を施す近世 1 期の備前焼摺鉢の底部片。10 は京都系土師器 1 期の皿口縁片。11 と 12 は京都系土師器 3 期の皿口縁片。13 は 16 世紀後半の河野分類 B - II 類の土師器鍋口縁片。14 は埴片。15 は端部をヘラ調整する完形の管状土鏝 A 類。

接合資料
 なお SD131、SE147、SK231 出土片と接合した中国焼締陶器鉢 B 類 (接合資料 11) の破片。SE148 井筒内、SK262 出土片と接合した備前焼甍底部 (接合資料 27) の破片。SD250、SK231、SK236、2 号墓 (ST135) 出土片と接合した中国製黒褐釉陶器壺 (接合資料 28) の破片。SD141 出土片と接合した中国製褐釉陶器 (接合資料 29) の破片など多くの接合資料が出土している。

その他
 ほかに 16 世紀後半の白磁皿、中国製黒褐釉陶器、瓦質火鉢、海部郡産の埴、鉄釘の破片が出土し、残留遺物として古代の土師器坏片も出土している。

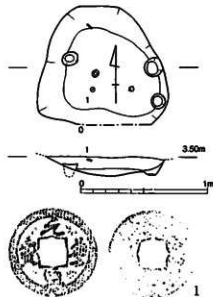
SK156 (第4-110図)

C8 区 (北 2 区) の第 2 層除去後に検出した長さ 1.0m、幅 1.0m、深さ 0.15m の不整形の土坑である。断面は浅い皿状で、底面は凸凹している。16 世紀第 2 四半期の土坑 SK163 と SD165 を切る。埋土は第 2 層土の単一層で、そのなかに土器の破片が散在する状況である。墓地の中にほられた廃棄土坑である。中国漳州窯系青花を出土していることなどから 16 世紀第 4 四半期前半の遺構とした。

墓地の中
 廃棄土坑

SK156 出土遺物

1 は完形の中国銅鏡、星形孔の元豊通寶 (北宋初鋳 1078 年・行書体)。なお SD250 出土片と同一個体の中国漳州窯系青花碗の底部 (接合資料 36) と動物骨の破片が出土している。



第4-110図 SK156 (縮倍 1/30、遺物 1/1)

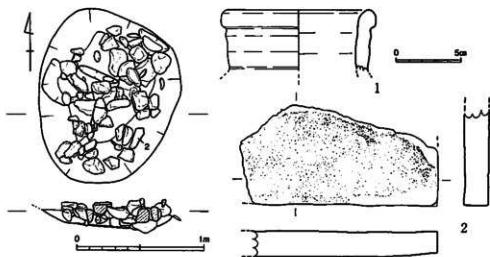
SK279 (第4-111図)

B9 区 (北 1 区) で検出された長さ 1.3m、幅 1.1m、深さ 0.25m の長円形の土坑である。断面は半円形で、埋土は第 2 層土の中に塵と瓦や埴の破片が充満する状態である。16 世紀第 3 四半期の土坑 SK293 を切り、第 4 四半期後半の土坑 SK215 と第 4 四半期前半の土坑 SK263 に切られる。廃棄土坑である。切合関係から 16 世紀第 4 四半期前半と考えられる。

廃棄土坑

SK279 出土遺物

1は備前焼壺の口縁片。2は胎土に大形の石英粒子を多量に含む海部郡産の埴片。ほかに備前焼壺、多数の瓦や残留した古代の須恵器の破片が出土している。



第4-111図 SK279 (道橋 1/30、遺物 1/3)

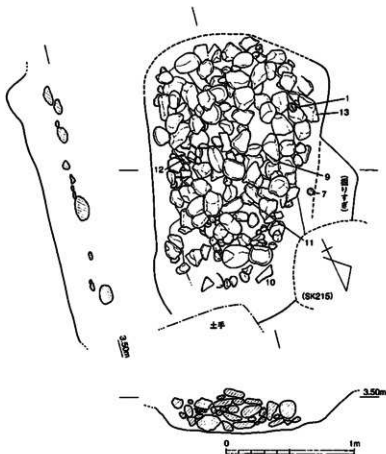
SK263 (第4-112図)

B9区(東区)のSK231の底面で検出した長さ2.3m、幅1.2~1.4m、深さ0.3mの長方形の集石

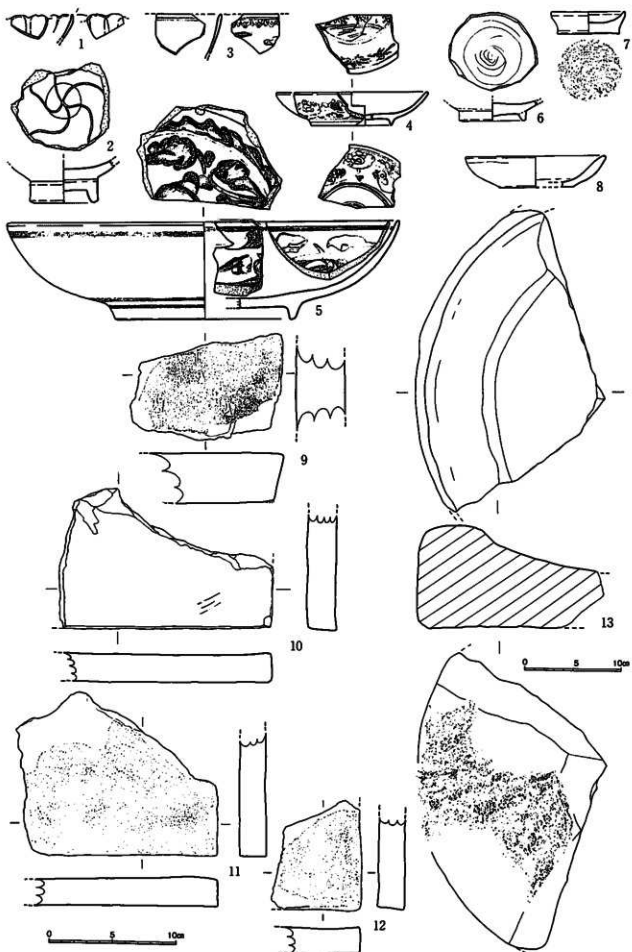
集石土坑

土坑である。断面は逆台形で、内部には人頭大の礫が充満し、礫の間に瓦・埴・石臼・陶磁器・破片が多数含まれている。礫には結晶片岩や凝灰岩など遺跡周辺で採集できない石材を多く含んでおり、同時に被熱したのも多いため、火災等で瓦礫となった建築材と生活材を廃棄した土坑と考えられる。16世紀第4四半期前半の土坑SK279を切り、第4四半期後半の土坑SK215とSK231に切られる。切合関係から16世紀第4四半期前半と考えられ、同じ時期の遺構から出土した破片と接合した接合資料も多く、時期の推定を補強している。

大災処理土坑



第4-112図 SK263 (1/30)



第4-113 図 SK263 出土遺物 (1/3、13=1/4)

SK263 出土遺物 (第4 - 113 図)

青花

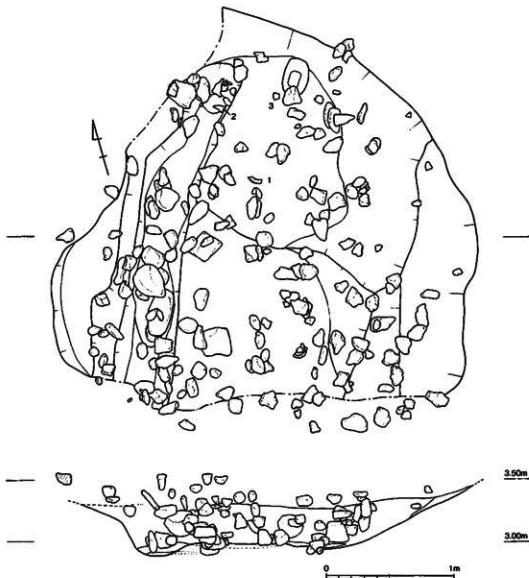
漳州窯

1は中国景德鎮窯系青花皿の菊花皿の口縁片。2は16世紀の中国龍泉窯系青磁碗B-IV類の底部片、口縁全周を打ち欠いた可能性もある。3はSK252出土片と同一個体の中国景德鎮窯系青花碗口縁(接合資料20)。4は16世紀後半の中国景德鎮窯系青花皿E群の破片。5は中国漳州窯系青花大皿の底部と口縁片3点は同一個体である。6は口縁全周を打ち欠いた中国漳州窯系青花碗底部。7は口縁をかなり欠いた完形の15世紀の底部糸切の土師器小皿。8は16世紀後半の京都系土師器を模倣した底部糸切の土師器皿片。9は2ヶ所に小さな刻印のある厚手の埴片。10~12は埴の破片。13は凝灰岩質安山岩製の石臼の上白片。

なおSD116、SD131、SD250、SE148出土片と接合した瓦質の風炉(接合資料2)、SD116、SD131、SD250、SE148、SK262、SP214出土片と接合した備前焼の壺(接合資料4)、SK262出土片と接合した埴(接合資料39)の破片が出土している。ほかに備前焼壺胴部、内面布目の九瓦の破片が出土している。

SK229 (第4 - 114 図)

B9区(北1区)の第2層除去後に検出した長さ3.2m以上、幅3.3m、深さ0.6mの不整形形の土坑である。16世紀第4四半期前半の溝SD230を切る。SK228とSK232に切られる。調査中は1つ



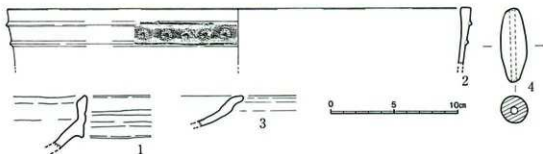
第4-114図 SK229 (1/30)

3つの土坑

の方形土坑と判断したが、完掘近くなって3つの土坑の重複と判明し、そのため切合関係は整理できなかつた。埋土は第2層土の単一層で、内部には凝灰岩礫を含む大型礫が散在していた。出土遺物も礫の間に破片化して散在している。3つの土坑のうち1つは間違いなく16世紀第4四半期前半の遺構である。

SK229 出土遺物 (第4-115図)

1は中世6期の備前焼播鉢の口縁片。2はSD118とSD250出土片と接合した菊花文の刻印のある瓦質火鉢の口縁片(接合資料17)。3は京都系土師器2期の皿口縁片。4は端部を手づくねの管状土錘B類の完形品。ほかにロクロ目土師器、土師器鍋、平瓦、漆塗りの木製品、残留した古代須恵器甕胴部、製塩土器の破片が出土している。



第4-115図 SK229出土遺物(1/3)

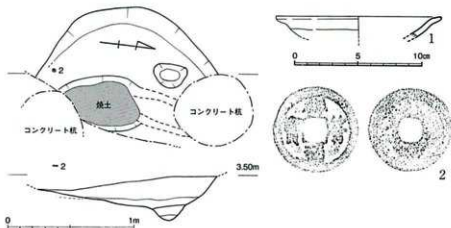
不整円形

SK273 (第4-116図)

B9区(東区)で検出された長さ1.5m以上、幅1.0m以上、深さ0.35mの不整円形の土坑である。断面は皿形で、上部に焼土混じり層が堆積し、下層は暗褐色微砂質土(5mm大の炭焼土多い)である。16世紀第4四半期前半の溝SD230を切り、同じ時期の土坑SK261に切られる。切合関係から16世紀第4四半期前半の遺構と考えられる。

SK273 出土遺物

1は京都系土師器1期の皿口縁片。2は完形の中国銅銭、祥符通寶(北宋初铸1009年)。



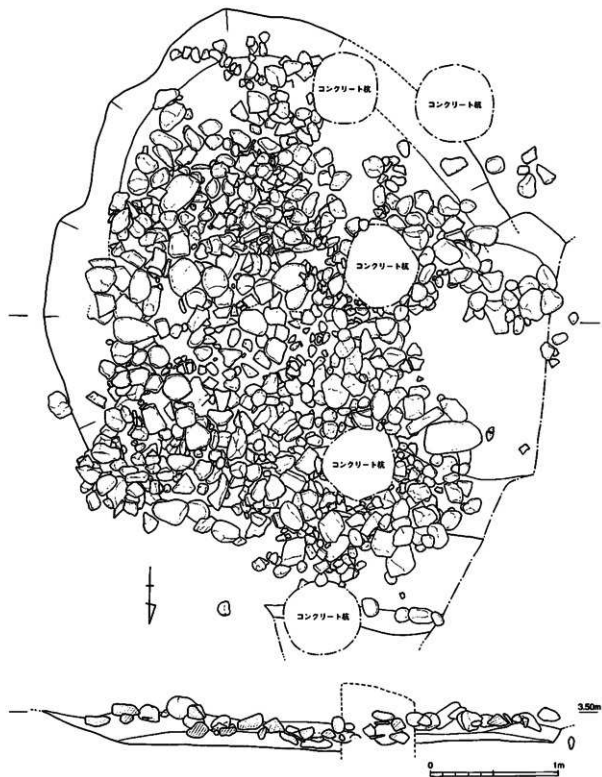
第4-116図 SK273(遺構1/30、遺物1/3、2=1/1)

SK262 (第4-117図)

大型土坑

B10区(東区)のSK231の底面で検出された長円形の大型の土坑である。長さ4.8m、幅4.0m以上、深さ0.4m。内部に瓦礫が充満した廃棄土坑である。瓦や埴、さらに備前焼壺等の大型品の破片が多く、礫も人頭大から拳大まで多様で、凝灰岩礫や結晶片岩礫を多量に含む。炭や焼土をそれほど含まないので火災処理土坑とはいえないが、何らかの理由で破壊された家屋の廃棄物を処理するためにほられ、一気に廃棄されたものである。16世紀第2四半期の井戸SE291と第4四半期前半の

廃棄土坑



第4-117図 SK262 (1/30)

溝SD292を切り、第4四半期後半の土坑SK231に切られる。近世1期の備前焼甕が出土したことから、切合関係から16世紀第4四半期前半の遺構と考えられる。

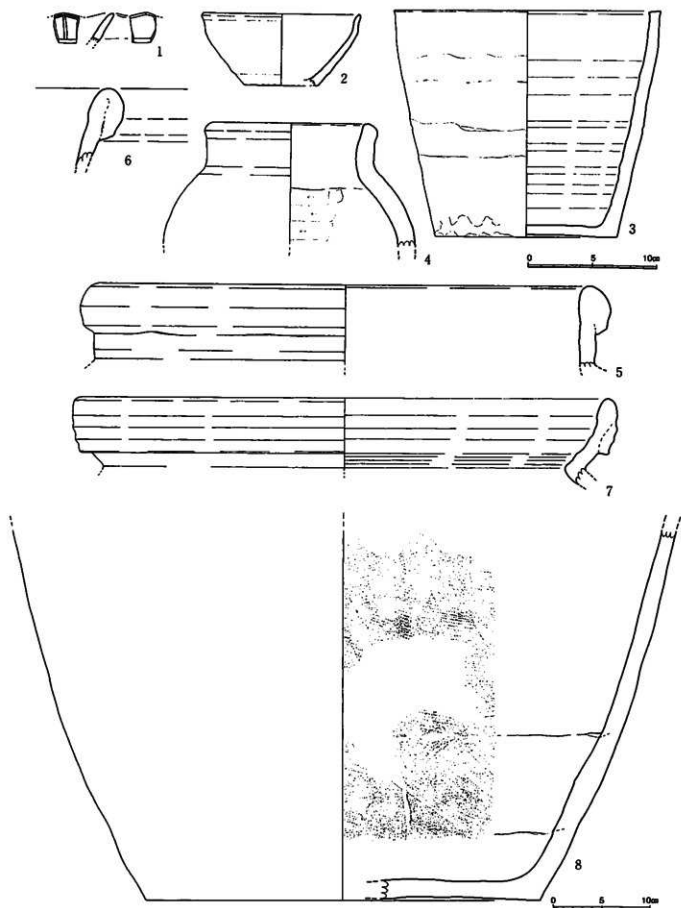
SK262 出土遺物（第4 - 118 図①～⑥）

1は15世紀中国白磁D群の多角坏の口縁片。2はSD141（B11区）出土片と接合した瀬戸美濃産天目碗（接合資料13）。3はSD250、SK261出土片と接合した備前焼水差し（接合資料7）。大友5次A調査のSD436出土破片と接合している²¹。茶器として焼かれた可能性が高い。4は備前焼小型甕の上半。5は16世紀前葉中世6a期の備前焼の甕口縁片。6は中世6期の備前焼の甕口縁片。7は16世紀後葉近世1期の備前焼の甕口縁片。8はSD250、SK261出土片と接合した備前焼の甕底部（接合資料26）。9はSE148井筒内とSK269出土片と接合した備前焼の甕底部（接合資料27）。10は備前焼の甕底部。11は京都系土師器2期の皿口縁片。12は京都系土師器2期の小皿口縁片。13と14・29・32・52は胎土に大型石英粒を含む海部郡産の平瓦。15～18・20・21・23・25・26・30・31・33・35～37・39～51・53～55は埴片。19・22・24・34・38・56は胎土に石英粒を多量に含む海部郡産の埴片。27はSD250出土片と接合した埴（接合資料38）。28はSK263出土片と接合した埴（接合資料39）。

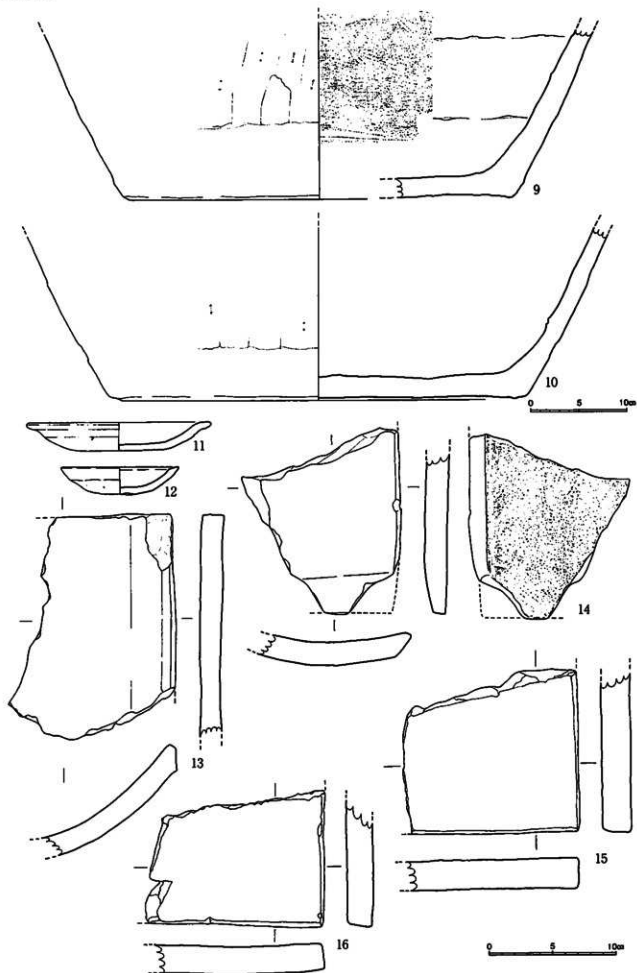
備前焼水差し、
5次と接合

なおSD116、SD131、SD250、SE148井筒内やSK263、SP214出土片と接合した備前焼甕（接合資料4）の破片、SD250とSE148井筒内出土片と接合した瓦質火鉢（接合資料6）の破片、SD118、SD250、SD292、SF151、SK261出土片と接合した中国製黒褐釉陶器の甕（接合資料19）の破片、SD270出土片と接合した備前焼甕胴部（接合資料31）の破片、SD250出土片と接合した備前焼甕胴部（接合資料32）の破片、SK261出土片と接合した備前焼甕胴部（接合資料34）の破片、SD118、SD250、SF151出土片と接合した備前焼甕（接合資料35）の破片等が出土している。ほかにロクロ目土師器と京都系土師器1期皿の破片が出土している。

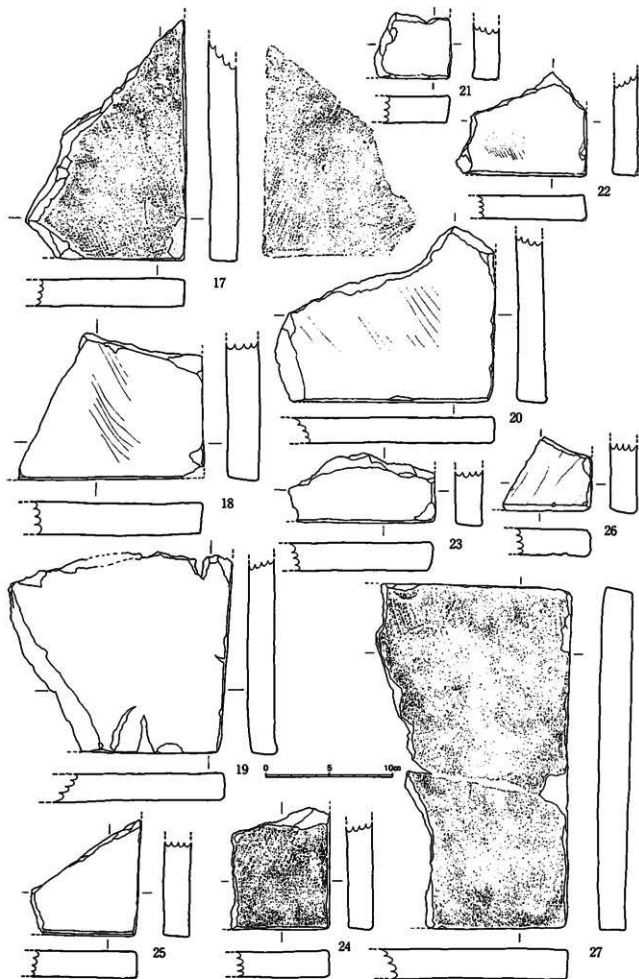
註1 「豊後府内1」（大分県教育庁埋蔵文化財センター報告1）2005、P60の第46図10



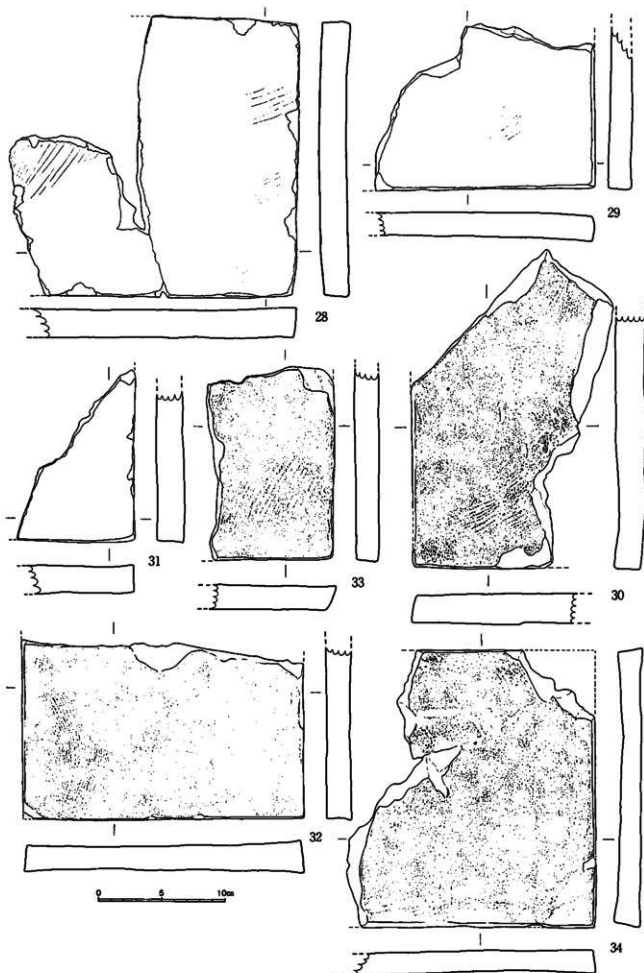
第4-118 图① SK262 出土遺物 (1/3, 8=1/4)



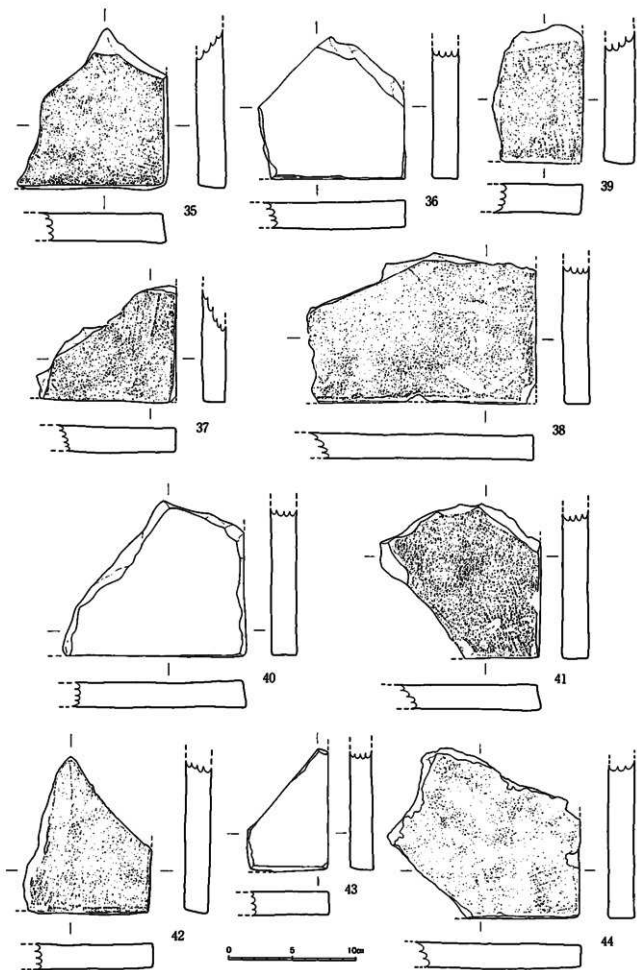
第4-118 図② SK262 出土遺物 (1/3, 9・10=1/4)



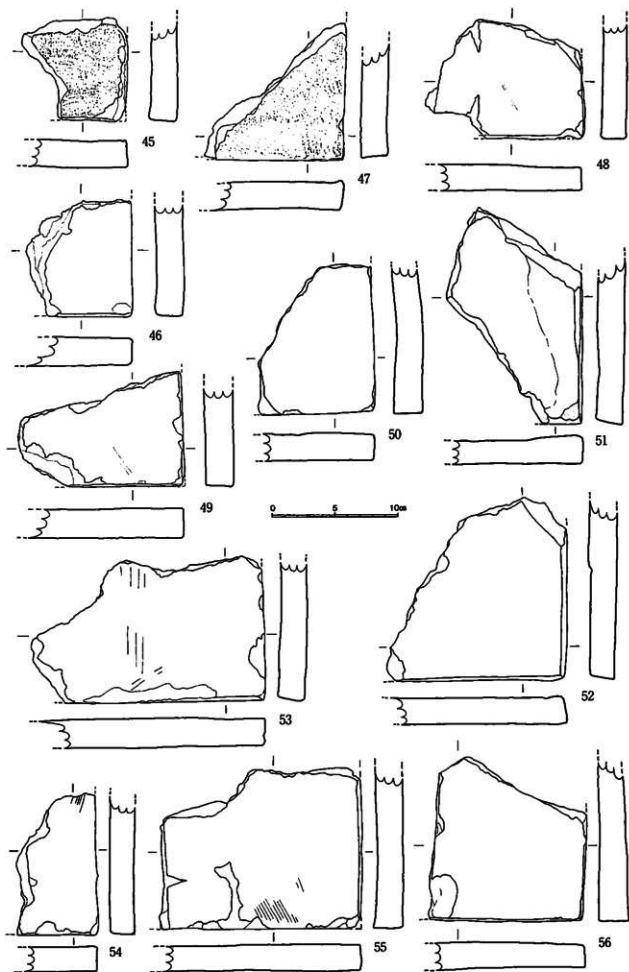
第4-118图③ SK262出土遺物 (1/3)



第4-118 図④ SK262 出土遺物 (1/3)



第4-118図③ SK262出土遺物 (1/3)



第4-118 圖⑥ SK262 出土遺物 (1/3)

小結

16世紀第4四半期前半の状況をまとめると、次の6点に集約できる。

- 道路 ① 道路状遺構 SF151 は引き続き路面を更新し維持されるが、道路の北側側溝は SD165 から SD250 さらに SD270 と掘りなおされつつ、次第に南に移動する。溝 SD165 と異なり、SD250 以後は矢板で護岸を強化しなくなる。同時にそれまで SF151 の道路面であった南側に、かなり大きな溝 SD118、SD117、SD116 が順次掘りなおされていく。つまり道路状遺構 SF151 には第3四半期までは南側に側溝がなかったのに、この時期に両側側溝となる。同時に水路としての機能は北から南に移るようで、道路幅も広くて2mほどに狭くなったと考えられる。
- 両側側溝 ② 第3四半期に幼小児の墓が集中した北2区は、南北方向に棺を向け等間隔に成人墓を配する墓地に整備され、その北側には墓地とその北側の空間を画すと推定される溝 SD131 が掘られている。したがって墓地は北側に続く大きな敷地の南端にあたり、道路が接するあたりに、新たに整備されたもので、成人墓とその家族の墓が配されたものと推測される。墓地については節を改めて述べる。
- 成人墓地 ③ 西区の第1四半期以来の区画はこの時期の遺構がない。
- ④ 第3四半期に引き続き、東区の第4南北街路と東西道路に挟まれた角地には、宅地が継続する。しかし井戸や廃棄土坑が数多く掘られるばかりでなく、道路に並行して SK230、SK261、SD292 と連なる排水遺構が敷地の南辺に造られている。
- 「中町」の角地 全体として第4四半期になっても道路の位置や宅地の区画に大きな変動はないが、各区画のなかではそれぞれ遺構の内容に変化があり、遺構の密度が最も高いのがこの時期である。

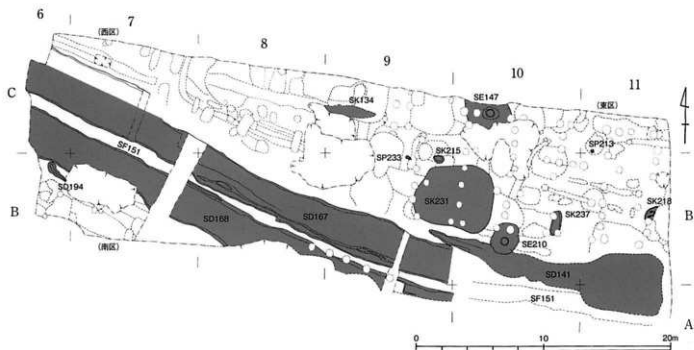
7 16世紀第4四半期後半の遺構と遺物

概要（第4-119図、付図7上）

遺物の内容 16世紀第4四半期後半と認定した遺構は、京都系土師器3期の皿を含み、1期ないし4期の新しい京都系土師器は含まない。中国景德鎮窯系青花ではE類の饅頭心碗が含まれるが、加えて中国漳州窯系青花が伴うことが多く、備前焼では近世1期の播鉢と甕があり、中国景德鎮窯系青花皿F群、朝鮮王朝系の彫三鳥碗や肥前窯灰釉陶器、絵唐津が含まれる。

遺跡の概要 第4四半期後半の遺構をまとめると次のようになる。道路状遺構SF151は引き続き維持されるが、SD270とSD116の両側溝は埋没し、SF151の両側には浅く広い溝であるSD167とSD168が存在する。その底面自体が道路面として機能した可能性もある。

それ以外の16世紀第4四半期後半代と考えられる遺構の分布は減少する。北2区の墓地は埋葬がなくなり、東西道路の北側にあたるC7区付近の西区には第4四半期前半に続き遺構がないが、その道路をはさんで対面する位置のC6、C7区の南区も遺構が少ない。C11～B11区付近の本来第4南北街路に面した東区も遺構が少ないままであるが、井戸や土坑や溝が存続する。墓地については節を改めて述べる。



第4-119図 16世紀第4四半期後半の遺構 (1/300)

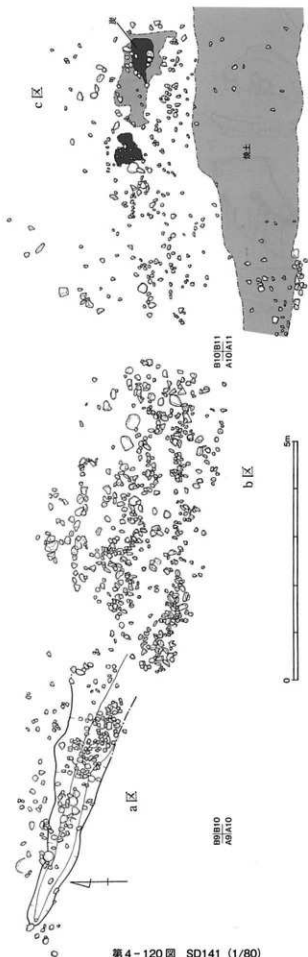
溝

SD141 (第4-120図、付図8)

B10・11区(東区)の第2層直下で検出した長さ19m以上、最も広いところで幅4m、深さ0.3mの浅い溝である。a～c区にかけて掘下げた。SD165、SK251=SK302を切る。下に重なる溝SD165との分離がはっきりできなかった。断面は半円形で、内部には多量の凝灰岩を含む多数の礫や、五輪塔の部材が廃棄されている。また東半では焼土がかなり広く散布し、その上には道路のように固い層があり、SD167から連続する硬化面の可能性がある。礫には凝灰岩、結晶片岩、あるいは被熱したものも多く、ある時期道路そばの溝が火災処理土坑として使われた可能性が高い。

SD141 出土遺物 (第4-121図)

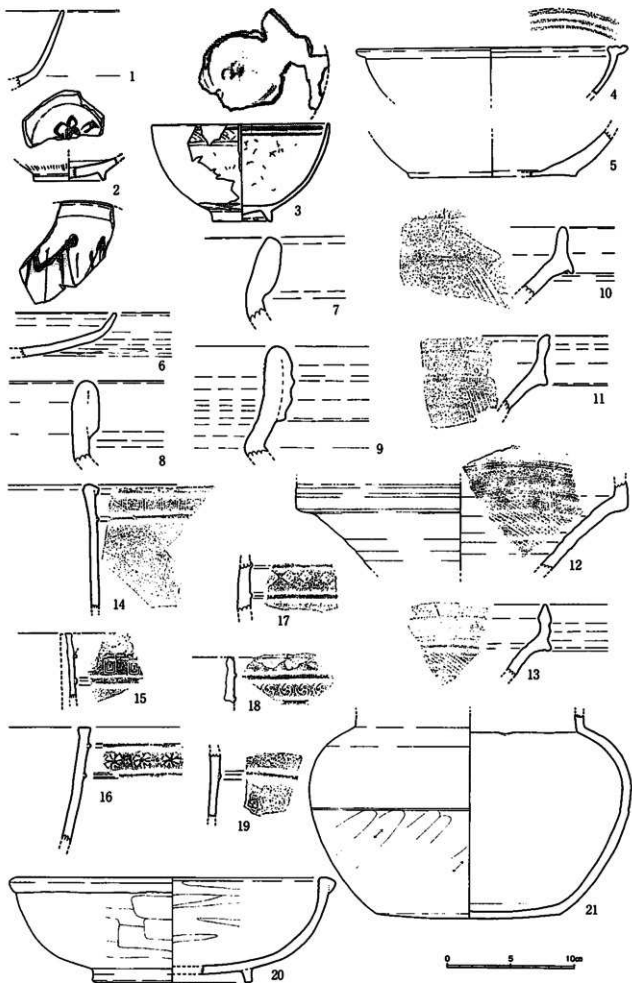
1は中国製白磁碗E-1群の口縁片。2は蓮子碗を模倣した中国漳州窯系青花碗底部。3は被熱して変質した中国漳州窯系青花碗。4は中国製焼締陶器鉢A類の口縁片。5はわずかに上げ底気味の中国製焼締陶器鉢の底部。6は1590～1610年製の絵唐津皿の口縁片。7と8はB11区焼土層出土の中世6期の備前焼甕口縁片。9は16世紀後葉近世1期の備前焼甕の口縁片。10は15世紀中葉中世5a期の備前焼播鉢の口縁片。11は16世紀前葉中世6a期の備前焼播鉢の口縁片。12と13は16世紀後葉の斜めスリ目を施す近世1期の備前焼播鉢片。14は外面に雷文帯の刻印を施す瓦質火鉢の口縁片。15はB10区上層出土の刻印を施す瓦質火鉢口縁、被熱で剥離激しい。16は菊花文の刻印を施す瓦質火鉢口縁片、小突帯を貼り付けるために前もって沈線が施されている。17は多重菱形文の刻印を施す瓦質火鉢



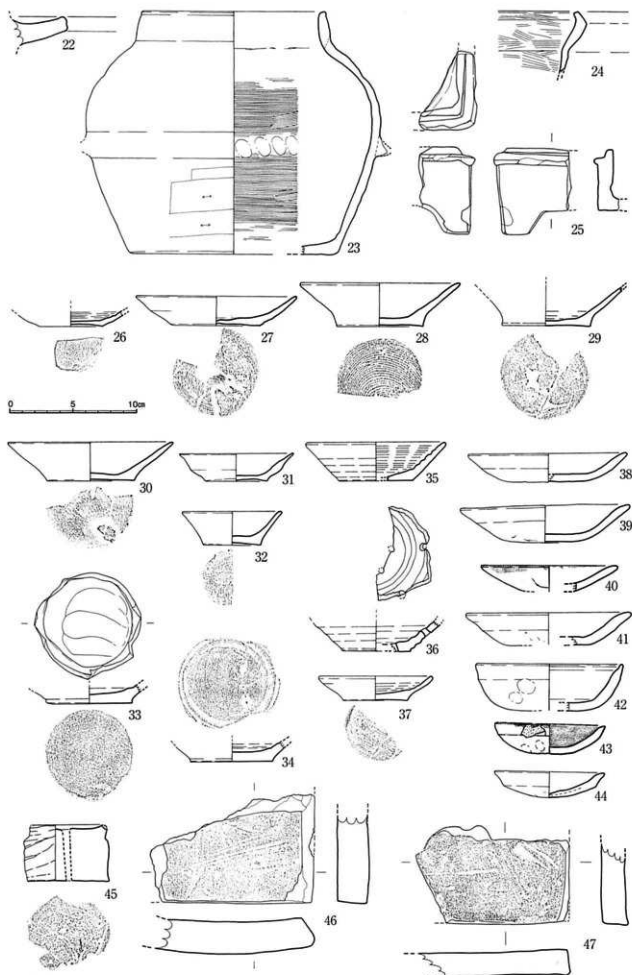
第4-120図 SD141 (1/80)

火災処理

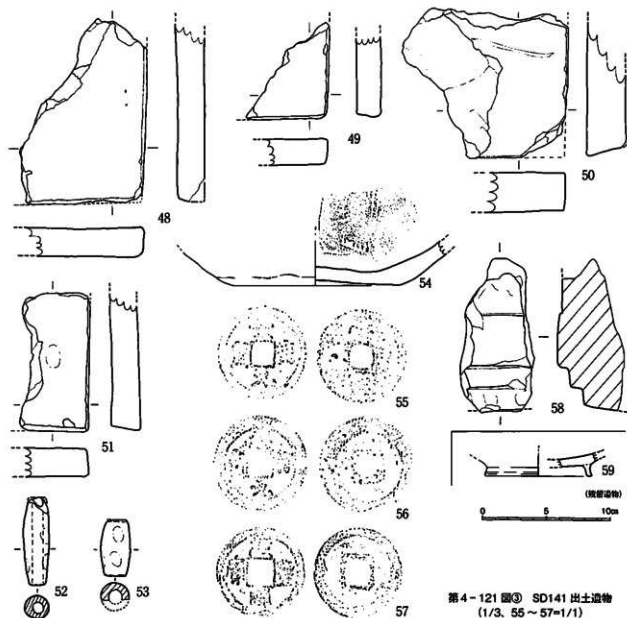
絵唐津



第4-121図① SD141 出土遺物 (1/3)



第4-121 图② SD141 出土遺物 (1/3)



第4-121図③ SD141出土遺物
(1/3, 55~57=1/1)

土師器皿

胴部片。18は巴文の刻印を施す瓦質火鉢の口縁片。19は菊花文の刻印を施す瓦質火鉢胴部。20は玉縁状の口縁に高台を貼り付けた瓦質の浅鉢。21は外面下半をけずる瓦質の釜。底部に煤が付着している。22は瓦質釜の鈎か。23は鈎のつく瓦質釜。外面下半は削りで仕上げ、煤が付着して被熱による剥離激しい。24は口縁端部を内側に折り曲げる防長系の瓦質鍋口縁片。25はB10区下層出土の瓦質の小型箱形土器。26は薄手で白っぽい色調の大内系土師器皿の底部片。27は底部糸切の土師器坏。28と29、30は15世紀後半の河野分類A類にあたる底部糸切の土師器の坏。32は器高が低くなった河野分類A類にあたる底部糸切の土師器小皿。31は被熱のため全体がひどく剥離した底部糸切の土師器小皿。33と34は口縁全周を打ち欠いたロクロ目土師器皿の底部。35はやや厚手のロクロ目土師器皿の口縁片。36は焼成前の穿孔4箇所のあるロクロ目土師器皿の底部片。37はロクロ目土師器小皿。38は京都系土師器2期の皿口縁片。39は上部出土の京都系土師器2期の皿。40は口縁に煤が付着して灯明皿として使用された京都系土師器2期の小皿口縁片。41は京都系土師器2期の皿。42は京都系土師器2~3期の坏口縁片。43は全体にひろく煤が付着して灯明皿に利用された完形の京都系土師器2期の小皿。口縁に1箇所打ち欠きがある。44は被熱して剥離のある京都系土師器2期の小皿口縁片。45は穿孔が貫通する土師器燗台A2類。46

は平瓦片。47～49は埴片。50は厚手の埴片。51は胎土に石英が多く入る海部郡産の埴片。52は両端をへら調整する大型の管状土鍾A類。53は両端をへら調整する管状土鍾A類だが、ほかに短い寸綱の型式である。54は備前焼摺鉢の底部破片を使ったメンコ、胴部の破片と接合した。55は完形の中国銅銭、景德元寶（北宋初鑄1004年）。56は完形の中国銅銭、祥符通寶（北宋初鑄1009年）。57は完形の中国銅銭、元豊通寶（北宋初鑄1078年・篆書体）。58は凝灰岩製の宝篋印塔の基礎あるいは笠部の破片。

なお以下の破片が出土している。SK262出土片と接合した瀬戸美濃産天目碗（接合資料13）。SD131、SE210掘形内、SK231出土片と接合した瓦質茶釜（接合資料21）。SK269出土破片と接合した中国製褐釉陶器（接合資料29）。ほかに荏苒底の中国漳州窯系青花皿、中国黒褐釉陶器壺、丸瓦、がんぶり瓦、鉄器の破片が出土している。動物骨としてウシ上顎臼歯右3、ウマ上顎臼歯などが廃棄されていた。その中の残留遺物としては、59の古代の黒色土器A類碗の底部片や、ほかに古代須恵器壺・甕、古代土師器壺・高坏の破片が出土している。

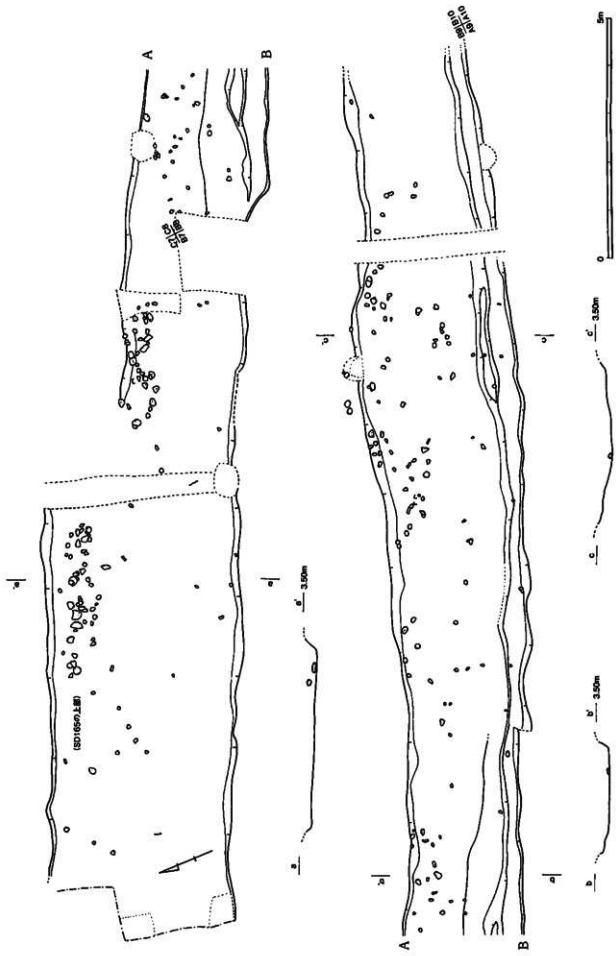
SD167（第4-122図、付図8）

西区・北1区・北2区に東西に貫通する長さ18m以上、幅約3m、深さ0.2～0.3mの溝状の遺構である。断面図からみると、溝というよりは窪みで、道路状遺構SF151の北側の道路面とみることも可能である。ただし硬化面は確認していない。SD250・SD270の位置の真上にあたる。第2層除去後に検出し、断面は浅い皿状となる。西端では当初SD165と区別できなかったため、幅広く表現されている。B10区より東では削平が激しくかつSD141が存在するので、明瞭に検出することができなかった。16世紀第3四半期以前の溝SD165と道路状遺構SF151と、さらに16世紀第4四半期前半の溝SD250とSD270を切る。内部にはところどころ裸の廃棄がみられるが、遺物はそれほど多くない。埋土は第2層土そのもので、廃棄遺物が少ないことから見ても、この付近が放棄されたまま17世紀前半に第2層土の整地層で埋め立てられたものである。中国景德鎮窯系青花皿F群が出土したことや、切合関係から16世紀第4四半期後半の遺構と考えられる。

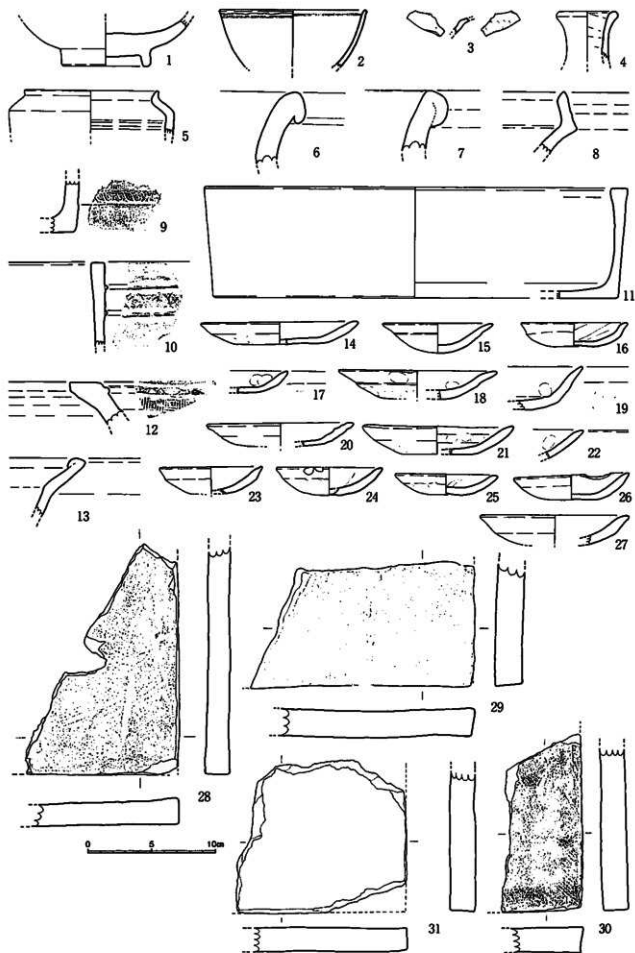
SD167出土遺物（第4-123図①②）

1は中国龍泉窯系青磁碗の底部片。2は16世紀後半の中国景德鎮窯系青花碗E群の腹口縁口縁片。3は外面に鎬のある中国景德鎮窯系青花皿F群。4は備前焼舟徳利の口縁片。5は備前焼の小型短頸壺口縁片。6は14世紀中世2ないし3期の備前焼の甕口縁片。7は14世紀中世3ないし4期の備前焼の甕口縁片。8は16世紀前葉の備前焼摺鉢中世6a期の口縁片。9は双頭兼手毫雲文の刻印のある瓦質火鉢底部片。10は菱形文と菊花文からなる2種類の刻印のある瓦質火鉢の口縁片。11は浅い無紋の瓦質火鉢の口縁片。12は口縁が内傾し方格文の刻印のある瓦質火鉢の口縁片。13は口縁を内側に折り曲げる防長系の瓦質鍋の口縁片。15～17は京都系土師器1期の小皿片。14・18～22は京都系土師器2期の皿口縁片。23～26は口縁に煤が付着して灯明皿として使われた京都系土師器2期の小皿口縁片。26には口縁に打ち欠きがある。27は京都系土師器3期の皿口縁片。28と31は胎土に大型石英粒子を含む海部郡産の埴片。29と30は埴片。32は小型の管状土鍾B類完形品。33と34は管状土鍾B類。35は銅製のキセルの雁首。36は一部欠けた中国銅銭、天聖元寶（北宋初鑄1023年・篆書体）。37は半分に折れた中国銅銭で「〇宋通〇」と読める。皇宗通寶（北宋初鑄1038年・篆書体）と推定される。38は完形の中国銅銭、元豊通寶（北宋初鑄1078年・篆書体）。39は「〇平元〇」と読める完形の中国銅銭、咸平元寶（北宋初鑄998年）あるいは治平元寶（北宋初鑄1064年）と考えられる。40は銭種不明（元〇〇寶）の完形の中国銅銭。41は完形の中国銅銭の洪武通寶（明初鑄1368年）。42は結晶片岩製の砥石。

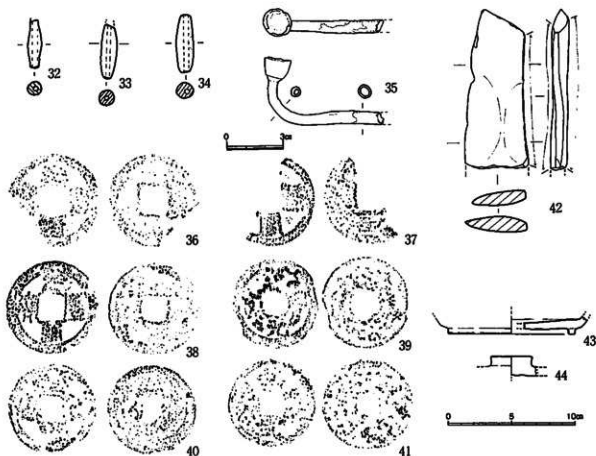
なおSD131、SD141（B10区）、SE210掘形内、SK231出土片と接合した瓦質茶釜（接合資料21）の破片と、SE148、SE210、SK231出土破片と接合した白磁皿（接合資料23）の破片が出土している。



第4-122図 SD167 (1/80)



第4-123図① SD167出土遺物 (1/3)



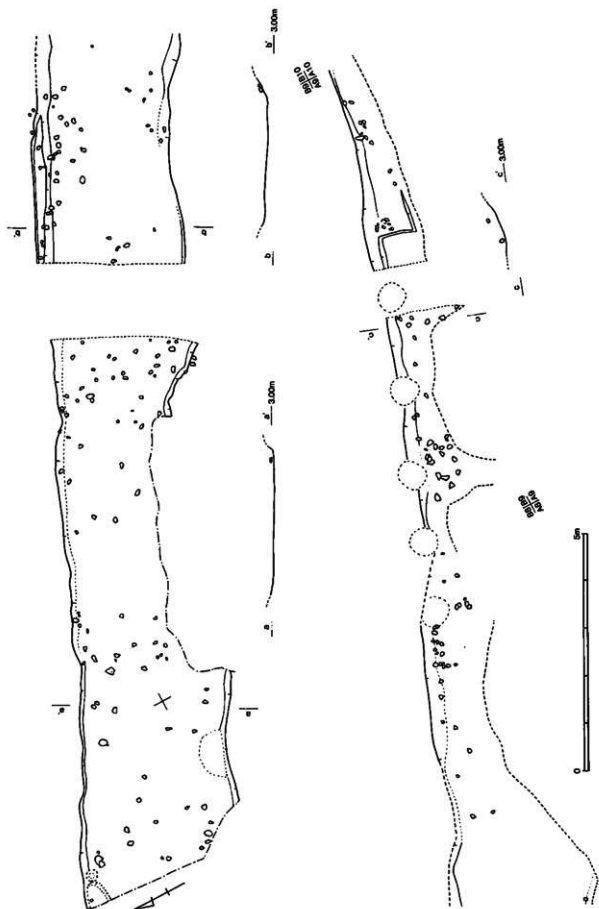
第4-123図② SD167出土遺物(1/3, 35-1/2, 36-41-1/1)

ほかにロクロ目土師器皿、土師器壺、九瓦、海部郡産の平瓦の破片も出土している。動物骨としてはウシ臼歯が含まれる。残留遺物として、43の8世紀の須恵器坏身底部と44の古代の土師器坏蓋のほかは古代土師器高坏・碗の破片が出土している。

SD168 (第4-124図、付図8)

東西に貫通する長さ18m以上、幅約3m強、深さ0.2mほどの浅い溝で、SD118の位置の真上である。第2層除去後に検出し、断面は浅い皿状となる。断面図からみると、溝というよりは窪みで、道路状道構SF151の北側の道路面とみられることも可能である。ただし硬化面は確認していない。道路状道構SF151を挟んでSD167と対応する。16世紀第4四半期前半の溝SD116の上、SF151とS190を切る。内部にはところどころ塵の廃棄がみられるが、遺物はそれほど多くなく碎片ばかりである。埋土は第2層土そのもので、廃棄遺物が少ないことから見ても、SD167同様放棄されたまま17世紀前半に第2層土の表地層で埋め立てられたものである。中国景徳鎮窯系青花皿F群が出土したこと、切合関係から16世紀第4四半期後半としたが、京都系土師器4期の皿が出土していることから見て、17世紀初頭の中世大友府内城下町が近世府内城下町に移転する1602(慶長7)年まで、SD168は存続していた可能性は高い。

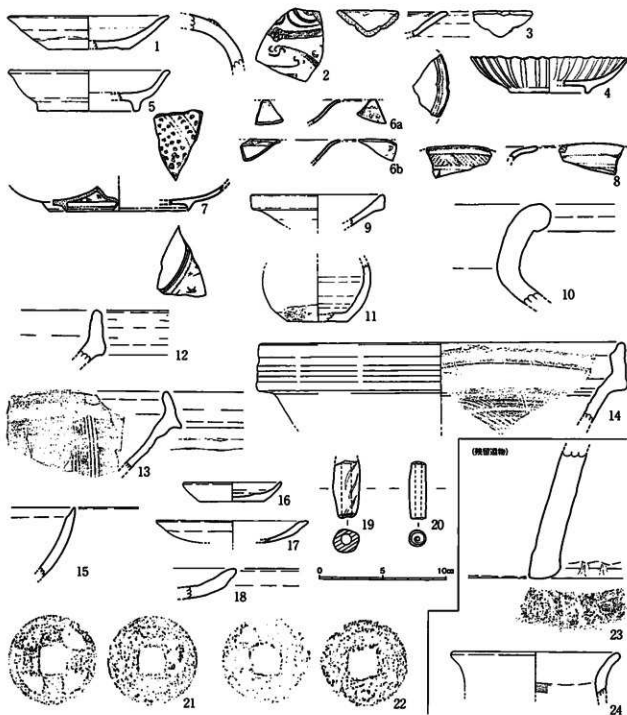
近世に築地



第4-124図 SD168 (1/80)

SD168 出土遺物 (第4 - 125 図)

1 は内面に軸のかからない 16 世紀後半の白磁皿。2 は B8 区から出土した 14 ~ 15 世紀の中国龍泉窯系青磁瓶の肩部片。3 は B7 区から出土した 15 世紀代製作の中国龍泉窯系青磁桜花皿の口縁片。4 は中国景德鎮窯系青磁の菊花皿。5 は B8 区出土の 16 世紀後半の青磁皿。6 は中国景德鎮窯系五彩皿口縁片、a と b は同一個体。7 は B7 区から出土した 16 世紀後半の中国景德鎮窯系青花皿 E 群の底部片。8 は 16 世紀末の中国景德鎮窯系青花皿 F 群の口縁片。9 は B8 区出土の中国製黒褐輪陶器の蓋か。10 は B8 区出土の 15 世紀中世 4 ~ 5 期の備前焼甕口縁片。11 は備前焼小型甕(舟徳利)の底部。12 は B8 区から出土した 15 世紀後半中世 5 期の備前焼播鉢の口縁片。13 は B8 区出土の 15 世紀後葉中世 5b 期の備前焼播鉢。14 は B7 区出土の斜めスリ目をほどこす 16 世紀後葉近世



第4 - 125 図 SD168 出土遺物 (1/3, 21・22=1/1)

1a期の備前焼鉢口縁。15はC6区出土の瀬戸美濃天目碗口縁片。16は内面指ナア底面に板状圧痕が写る河野分類B類の底部糸切の土師器小皿。17はB7区出土の京都系土師器1期の皿口縁片。18は京都系土師器4期の皿口縁片。被熱して黒色に変色しているため、埴場に転用されたものか。19はB7区出土の半分に折れた管状土師器A類。20はB7区出土の両端をへら調整する完形の管状土師器A類。21はB7区出土の完形の「通寶」のみ読める中国銅銭。22はC7区出土の鏡種不明の中国銅銭。

ほかに中国褐釉陶器壺、瀬戸美濃天目碗、備前焼甕、瓦質火鉢・鍋、底部糸切の土師器坏、平瓦、埴、動物骨の破片が出土し、残留遺物としては23の古墳時代の円筒埴輪底部片や24の被熱した古代土師器の甕口縁。ほかに古代須恵器甕、古代土師器壺、甕・坏の破片などが出土している。

井戸

SE147 (第4-126図)

C10区(東区)の第2層2回目除去(10cm掘下げ)後の検出作業で輪郭を認めた遺構である。掘下げるとまず中央に隙群が円形に集中する部分(内部土坑)が認められ、その部分には凝灰岩礫や河原石や被熱した礫、さらに土器の破片が多く含まれていた。下部の井筒よりやや広い範囲に広がるので、おそらく井戸廃絶時に井筒の上部を破壊して瓦礫を廃棄したものと考えられる。掘形の一部はSP225に切られている。

掘形はほぼ径3.4mの平面円形と推定される。井筒の桶は70×64cmの略円形で、下部のほうが広く、竹製の籠を一条検出している。絶対高2.45mの深さまで調査したが、それより下は湧水が激しく底部までは完掘していない。掘形内からは1~6が出土した。最新の遺物は図示できない砕片だが、朝鮮王朝産陶器の影三島碗片、埴場に転用した京都系土師器3期皿である。切欠関係と出土遺物から16世紀第4四半期後半の遺構と推定される。

SE147出土遺物(第4-127図)

掘形内 1は16世紀の白磁皿底部片。2と3は16世紀中葉中世6b期の備前焼鉢鉢口縁片。4は京都系土師器2期の小皿口縁片。5は半分におれた中国銅銭の「〇圖〇寶」で、唐國通寶(南唐959年初鑄・篆書体)。6は安山岩製の石臼の上白片で、方形の挽き手穴が残る。ほかに中国景德鎮窯系青花碗C群の蓮子碗、朝鮮王朝産陶器の影三島碗片、埴場に転用した京都系土師器3期皿、鉄釘、残留した古代土師器の破片が出土している。

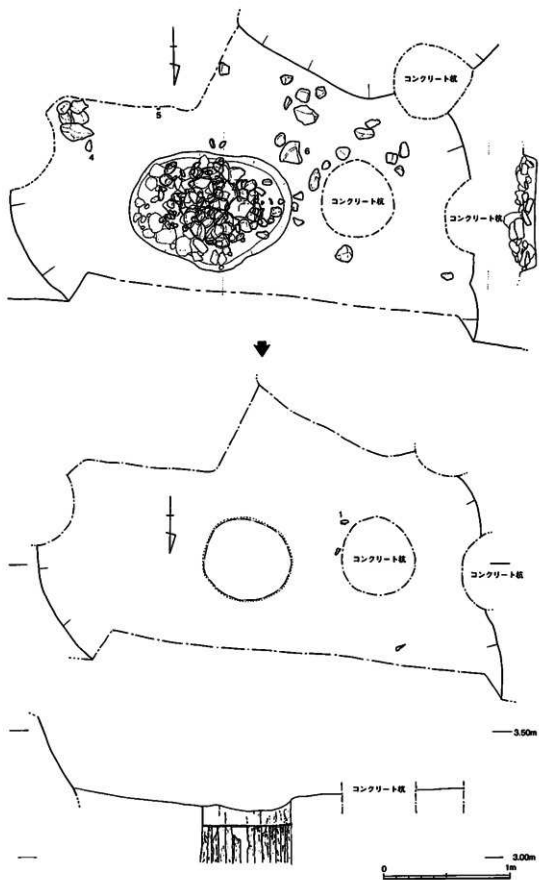
井筒内 隙群より下位で出土して、廃絶以前に廃棄されたと推定される遺物は、7の中国景德鎮窯系青花皿B群の底部片があげられる。

内部土坑 井戸廃絶時の隙群中より出土した。8と9は京都系土師器2期の皿口縁片。10は埴片。ほかに備前焼甕、京都系土師器1期皿の破片が出土している。

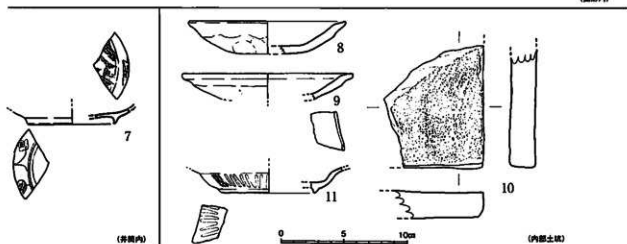
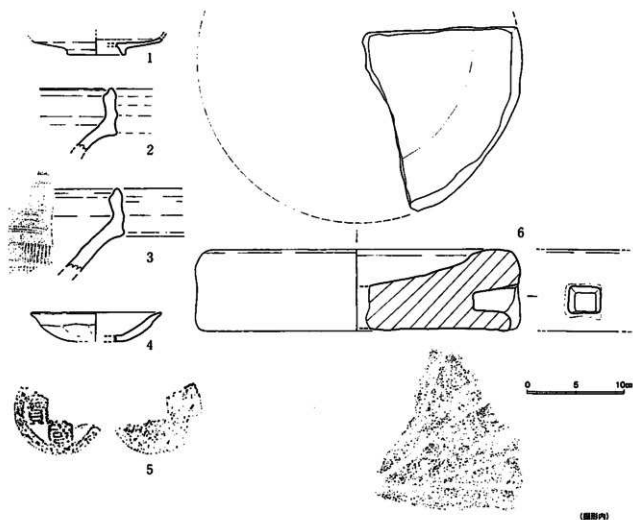
このほか出土位置不明ながら11の中国景德鎮窯系青花皿、外面に錆のあるタイプのF群の罽皿が出土している。さらにSD131、SK231、SK269出土片と接合した中国製焼締陶器の鉢B類(接合資料11)の破片も出土している。

SE210 (第4-128図)

B10区(東区)の基盤IV層上で検出した井戸である。井筒は木製の桶で、底は小礫を敷いている。掘形内には礫や基盤層のブロックを多く含む。16世紀第4四半期の溝SD141、第3四半期まで使われた溝SD165、第2四半期の土坑SK265・SK272、第1四半期の土坑SK266、第4四半期前半の溝SD292を切る。掘形は長さ25m、幅20m、深さ2.4mで、底面の標高はほぼ1.1mで、そこが湧水点である。木製の桶は4段を確認している。最下段の桶は、長さ90cm、径54~60cmで、32枚の板材からなり、上下に二条の竹製の籠がはまる。丈3尺、径2尺の桶である。下から2段目の桶



第4-126図 SE147 (1/30)



第4-127図 SE147出土遺物 (1/3, 5=1/1, 6=1/4)

は高さ73cm、径は上端で58cm、下端で60cm。3段目は高さ50cmの径は上端60cmの桶である。下段の桶は上端と下端の径がほぼ同じ寸法のものであり、既成の桶を転用したのではなく、井戸
 井戸専用
 桶専用で作製されたものと推定される。それから上には丈の低い桶を重ねていくものと考えられる。遺物の大半は掘形内に混ざりこんだ破片である。井筒内からの出土遺物も少ない。注目すべきことは、ほかの井戸がすべて廃絶時に井筒の上部を破壊して埋めているのに対し、この井戸には破壊の
 井戸跡なし
 痕跡はなかったことである。遺構が密集するこの付近で切関係上最も新しい遺構であることから、

おそらく中世都市府内のこの付近が移転した際に放棄された井戸と考えられる。しかし17世紀初頭とする遺物はないので、16世紀第4四半期後半の遺構と考えておきたい。

SE210 出土遺物

(第4-129図)

掘形内

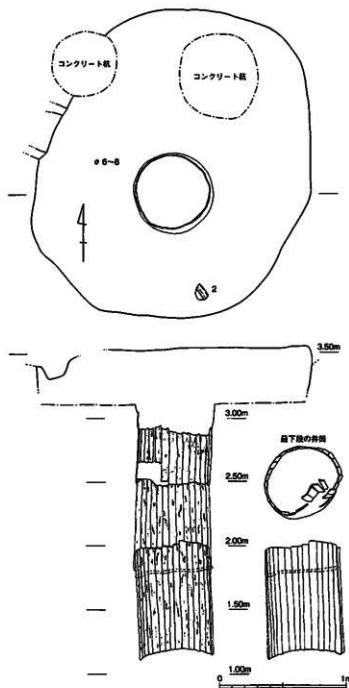
掘形内 1は15世紀後葉中世5期の備前焼甕の口縁片。2は16世紀後葉近世1期の備前焼甕口縁片。3はSD131、SD141、SD167、SK231出土片と接合した瓦質茶釜(接合資料21)。4は口縁部に1箇所打ち欠きのある京都系土師器1期の小皿片。5は口縁にひろく煤の付着し灯明皿に使われた京都系土師器2期の小皿口縁片。以下の6~8の3枚の銅銭は錆着していたもの。6は完形の中国銅銭、淳化元寶(北宋990年初鑄・草書体)。7は完形の中国銅銭、永楽通寶(明1408年初鑄)。8は銭種不明の完形の銅銭。なおSD167、SE148、SK231出土破片と接合した白磁皿(接合資料23)の破片や、ほかに中国漳州窯系青花、瓦質鍋、ロクロ目土師器、丸瓦、埴の破片が出土している。

銅銭

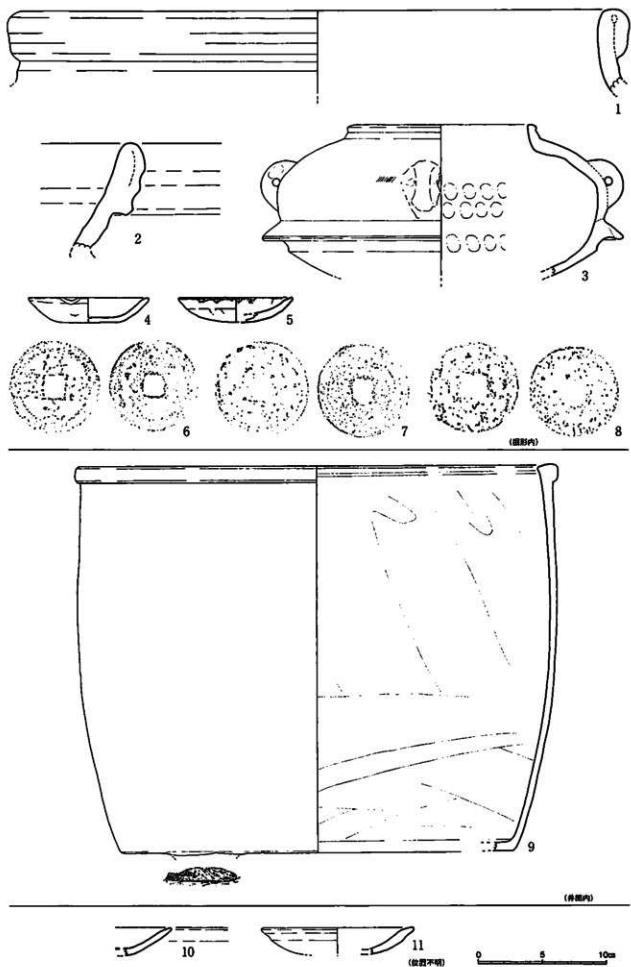
井筒内

井筒内 9は口縁端部が外側に肥厚する深いタイプの瓦質火鉢、底部の脚を接合するための刻みの痕跡がのこる。ほかに京都系土師器2期皿の破片が出土している。

位置不明 10は京都系土師器1期の皿口縁片。11は京都系土師器2期の皿口縁片。



第4-128図 SE210 (1/30)



第4-129图 SE210出土遺物 (1/3, 6~8=1/1)

土坑

S218 (第4-130図)

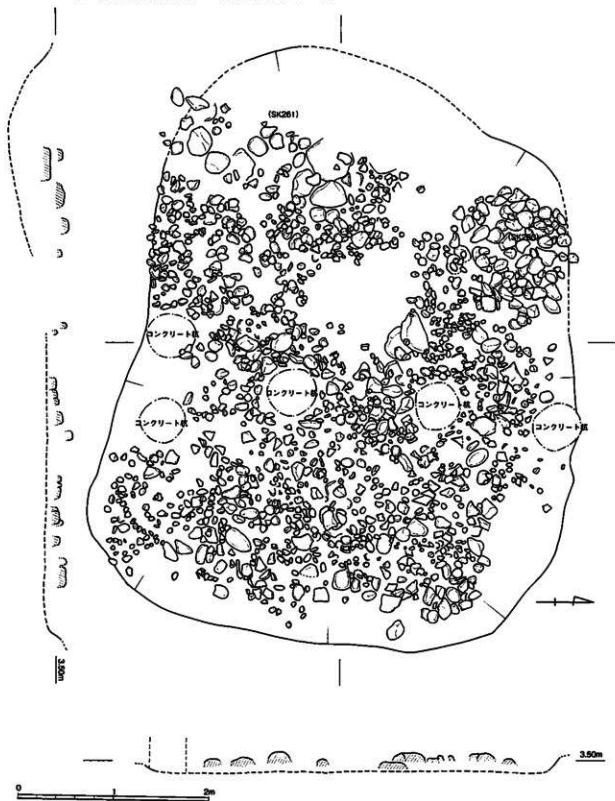
B11 (東区) の基盤IV層上で検出した正体不明の遺構で、SK220を切る。内部から1のSE148とSK231出土片と接合した朝鮮王朝産陶器碗いわゆる

形三島碗

形三島碗(接合資料9)の破片が出土している。



第4-130図 S218出土遺物(1/3)



第4-131図 SK231(1/40)

SK231 (第4-131図)

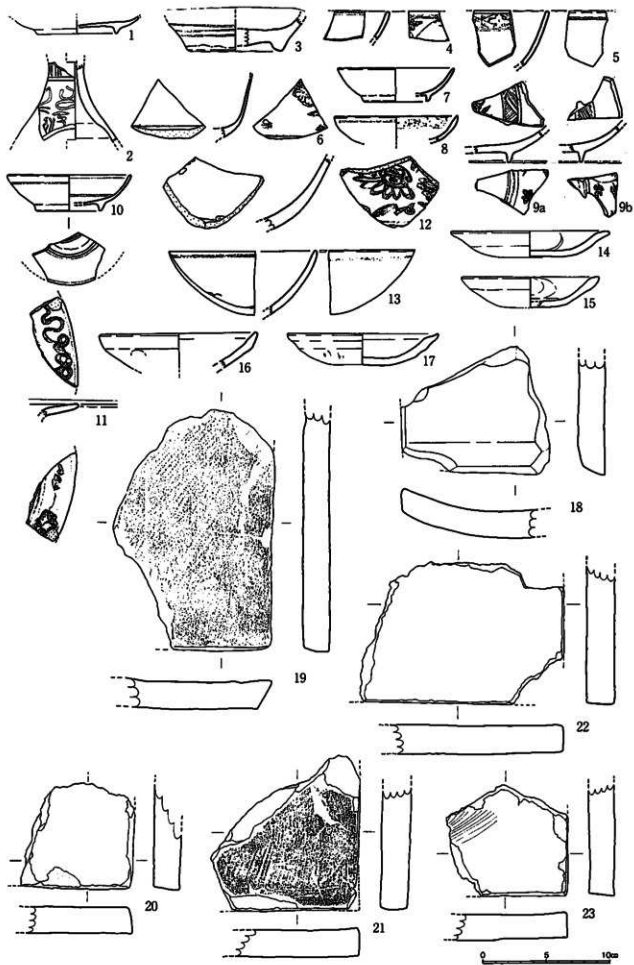
大型方形土坑 B9・10区(東区)の第2層除去後に検出した大型の方形土坑で、長さ6.1m、幅4.8m、深さ0.3m。断面は皿状で、埋土中には凝灰岩や結晶片岩の礫を含む多量の礫群が廃棄され、その多くは焼然していた。出土遺物はその礫の間に挟み込まれるように破片のまま出土した。大型の廃棄土坑である。16世紀第4四半期前半の土坑SK261とSK262およびSK263や第2四半期の井戸SE291を切り、第4四半期後半の溝SD141に切られる。埋土に中国景徳鎮窯系青花皿F群が含まれることや、以上の切合関係から16世紀第4四半期後半の遺構と考えられる。

SK231 出土遺物 (第4-132図①②)

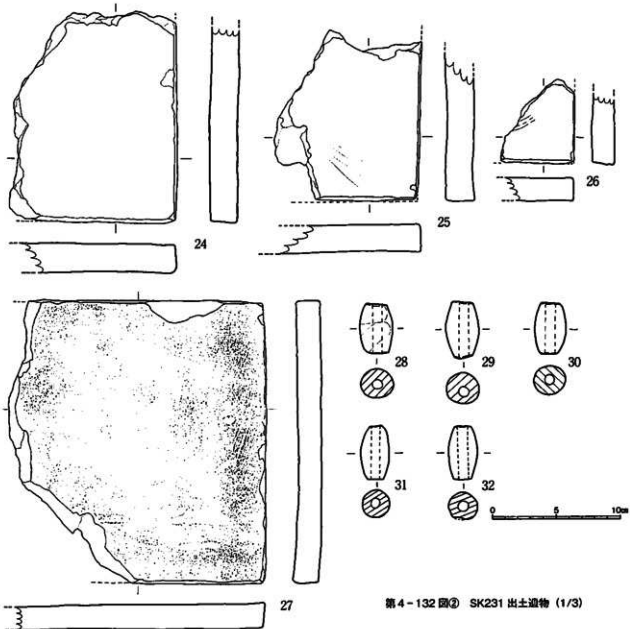
1はSD167、SE148、SE210出土片と接合した白磁皿底部片(接合資料23)。破片の多くは、第4四半期後半の遺構から出土する。2は中国龍泉窯系青磁瓶の破片。3は中国製青白磁瓶の底部片。4は外面に唐草文を描く中国景徳鎮窯系青花碗C群の蓮子碗口縁片。5は内面四方禪文、外面に一条の界線を描く16世紀後半の中国景徳鎮窯系青花碗E群、饅頭心碗の口縁片。6は16世紀後半の中国景徳鎮窯系青花碗E群の胴部片。7は16世紀後半の中国景徳鎮窯系青花皿E群。8は口縁内面に四方禪文を描く16世紀後半の中国景徳鎮窯系青花皿E群。7と8は口径9cm代の小皿である。9aと9bは同一団体の中国景徳鎮窯系青花皿の底部片。10は中国景徳鎮窯系青花皿E群の小皿。11は16世紀末の中国景徳鎮窯系青花皿F群の口縁片。12は中国景徳鎮窯系青花鉢の胴部片。13は中国漳州窯系青花碗の口縁片。14は京都系土師器1期の皿口縁片。15と16は京都系土師器2期の皿口縁片。17は京都系土師器2期の皿。18は胎土に大型石英粒子を含む海部郡産の平瓦片。19と20は胎土に大型石英粒子を含む海部郡産の埴。21～23は埴片。24と25胎土に大型石英粒子を含む海部郡産の埴。26と27も胎土に石英粒を多量に含む海部郡産の埴。28～32は短くて太い寸胴の管状土鍾A類の完形品。

接合資料 なおSE148、S218出土片と接合した彫三島碗(接合資料9)の破片。SD131、SE147出土片と接合した中国製焼締陶器鉢B類(接合資料11)の破片。SD116、SD131、SD250出土片と接合した備前焼壺(接合資料14)の破片。SD131、SD141、SD167、SE210掘形内出土片と接合した瓦質茶釜(接合資料21)の破片。SD284出土片と接合した瀬戸美濃産大甕3期の皿(接合資料24)の破片。SD250、SK236、SK269、ST135(2号墓)出土片と接合した中国黒褐陶軸器壺(接合資料28)の破片など、多くの接合資料が出土している。

ほかに青磁椀花皿、中国製黒褐陶軸器、備前焼壺、斜めスリ目のある近世1期の備前焼椀鉢、内面布目の丸瓦の破片が出土している。残留遺物としては古代の須恵器甕の破片が出土している。



第4-132図① SK231 出土遺物 (1/3)



第4-132図② SK231 出土遺物 (1/3)

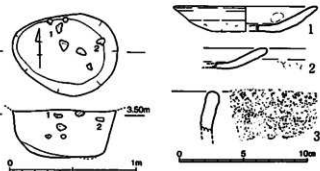
SK215 (第4-133図)

B9区(東区)の第2層除去後に検出された長さ0.8m、幅0.65m、深さ0.4mの楕円形の小土坑である。断面は箱形で柱穴と断定できないので土坑とする。16世紀第4四半期前半の土坑SK263とSK279、第3四半期の土坑SK267とSK293を切る。埋土は単一層の黒灰色軟質土(小礫混じり)である。出土遺物は京都系土師器2期の皿が最新の遺物であるが、切合関係を重視して16世紀第4四半期後半の遺構とする。

SK215 出土遺物

1と2ともに京都系土師器2期の皿口縁片。3は口縁端部に棒がけの刻みを施す弥生土器の口縁片。残留遺物である。

弥生土器



第4-133図 SK215 (遺構1/30・遺物1/3)

S134 (第4 - 134 図)

集石遺構

C8区(北1・2区)で出土した集石遺構である。長さ3.5m、幅1.0m、深さ0.3mの広がりを持つ。16世紀第4四半期前半の土坑SK252を切る。出土品の大半は準大の河原石で、土器等の破片はきわめて少なかった。図示できる遺物はないが、京都系土師器2期皿と埴の破片が出土している。切合関係から16世紀第4四半期後半の遺構と推定する。

小結

16世紀第4四半期後半の遺構をまとめると、その特徴は次の4点になる。

東西道路の両側では、遺構減少

① 16世紀第4四半期後半代と考えられる遺構は減少する。東西道路の北側にあたるC7区付近の西区においても、第4四半期前半に続き遺構がないが、その道路をはさんだ南側のC6、C7の南区も遺構が少ない。

道路再建

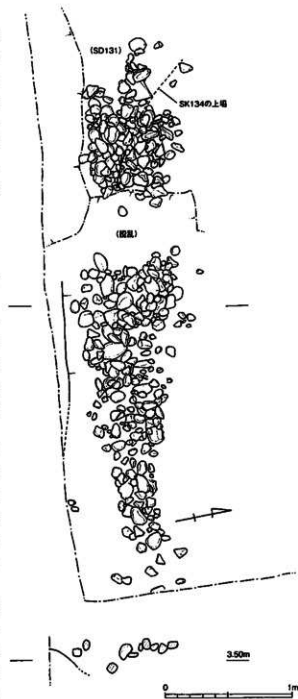
② 道路状遺構SF151は引き続き維持されるが、SD270とSD116の両側側溝は埋没し、SF251の両側は浅く広い溝であるSD167とSD168が存在する。その底面自体が道路面として機能した可能性もある。従来の道路幅は1m程度まで狭まっている。

「中町」の復興

③ C11～B11区付近の本来第4南北街路に面した東区も遺構が少ないままであるが、井戸や土坑や溝が存続するので、おそらく島津勢侵攻後と考えられるこの時期に、中町でもある程度の復興が行われたことを示している。

墓地の廃絶

④ 北2区の塚地は埋葬がなくなり、イエズス会府内教会が廃絶する時期と合致している。墓地については節を改めて述べる。



第4-134図 S134 (1/30)

8 16世紀第4四半期の遺構と遺物

以下の遺構は切り合い関係や出土遺物から16世紀第4四半期に属することは判明したが、前半と後半とに分けることのできなかった遺構である。

溝

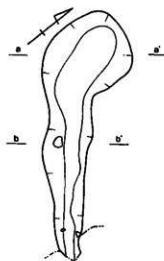
SD194 (第4-135図)

小溝

B6区(南2区)の基盤Ⅲ層上面で検出された長さ1.9m、幅0.2~0.7m、深さ0.1mの断面半円形の溝である。埋土は第2層土の単一層である。16世紀第1四半期の土坑SK193を切り、第4四半期後半の溝SD168に切られる。

図示できる遺物はないが、SD141出土の瓦質火鉢と同一個体の破片が出土している。SD141が16世紀第4四半期前半の遺構であるので、その時期以後であり、第4四半期後半の溝SD168にとりつく溝らしく、そこへの排水溝の可能性があるので、後半まで下る可能性も考えられる。

排水溝



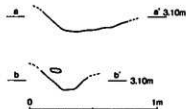
土坑

SK237 (第4-136図)

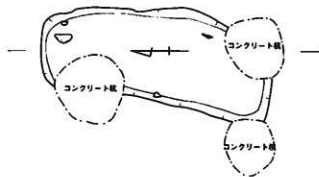
漳州青花

B10区(東区)の第2層除去後に検出された長さ1.6m、幅0.7m、深さ0.1mの長円形の土坑である。埋土は単一層の暗灰黄褐色砂質土(1cm大の炭焼土含む)である。16世紀第1四半期の土坑SK266を切り、SP162に切られる。

図示できる遺物はないが、鉄釘や中国漳州窯系青花碗、瓦質土器、底部糸切の土師器坏、ロクロ目土師器皿、京都系土師器皿の破片が散在して出土している。漳州窯系青花碗の出土から16世紀第4四半期の遺構と考えられる。



第4-135図 SD194 (1/30)



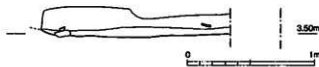
ビット

SP213 (第4-137図)

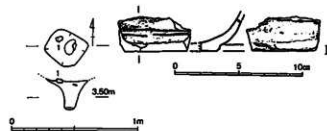
華南三彩

C11区(東区)で検出された径0.3m、深さ0.3mのビットで、15世紀後半の土坑SK199を切る。内部から1の華南三彩の破片が出土している。

その1は華南三彩の盤で、同一個体と思われる破片が15世紀後半の土坑SK251から出土している。ほかに底部糸切の土師器、鉄器の破片が出土している。華南三彩の出土から16世紀第4四半期のビットと推定した。



第4-136図 SK237 (1/30)



第4-137図 SP213 (遺構1/30、遺物1/3)

SP214

C11区（東区）で検出された径0.2m 深さ0.05mの浅い円形のピットである。内部からSD116、SD131、SD250、SE148 井筒内、SK262、SK263 出土片と接合した備前焼壺（接合資料4）の破片が出土している。この遺物は16世紀第4四半期前半の遺構で多く見つかっているところから、16世紀第4四半期の遺構と考えられる。

SP233

不整形ピット B9区（北1区）の第2層除去後に検出された長さ0.5m、幅0.25m、深さ0.05mの不整形のピットである。

図示できる遺物はないが、京都系土師器3期皿の破片が出土している。埋土は第2層土の単一層である。SD284と重複する。京都系土師器3期皿の出土から16世紀第4四半期の遺構と考えられる。

9 16世紀代の遺構と遺物

以下の遺構は時期を限定できる情報がすくないが、中世大友府内町跡において最も都市の状況をなす16世紀代の遺構と判明したものを記す。

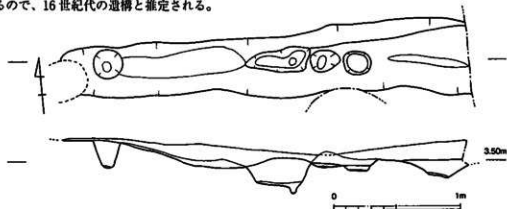
溝

SD204（第4-138図）

東西溝

C11区（東区）の基盤IV層上で検出された長さ1.6m、幅0.4～0.5m、深さ0.3mの東西溝である。方向は5度南に振る。埋土は上下2層からなり、上層は黄色粘土層（基盤III層土）で埋まっている。15世紀の土坑SK203を切り、SP178と数箇所ピットに切られる。

図示できる遺物はないが、瓦質火鉢と土師器の破片が出土している。第4南北街路に直交する溝であるので、区画あるいは建物に関係がある遺構の可能性が高い。第4南北街路を前提とした溝であるので、16世紀代の遺構と推定される。



第4-138図 SD204 (1/30)

土坑

SK136（第4-139図）

方形土坑

C8-C9区（北2区）で検出した長さ2.5m以上、幅2.0m以上、深さ0.4m大型の方形土坑である。埋土にはかなり礫を含み、16世紀第4四半期の溝SD131と重複し、16世紀第4四半期前半の土坑SK137に切られる。礫が集中する部分はSK269の礫群の可能性が高い。

図示できる遺物はないが、備前焼と土師の破片が出土している。第4四半期の遺構に切られるので、それ以前の遺構であることは確実だが、上限は出土遺物から16世紀代としか限定できない。

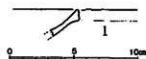


第4-139図 SK136 (1/30)

SK180 (第4-140図)

方形土坑

C11区(東区)の基盤IV層上で検出された方形の土坑で長さ0.9m以上、幅0.8m以上、深さ0.1mである。底面は凸凹し埋土は第2層土の単一層である。遺構の重複関係はなく、1の中国製褐輪陶器の蓋破片が出土している。ほかに土師器の破片も出土している。出土遺物から16世紀の遺構と考えられる。



第4-140図 SK180 出土遺物 (1/30)

SK220 (第4-141図)

円形土坑

B11区(東区)の基盤IV層上で検出された円形の土坑で長さ3.5m、幅1.6m以上、深さ0.25mである。断面は浅い皿状だが、底面はきわめて凸凹している。埋土には焼土、円礫小礫を多く含む。S217と16世紀第4四半期後半の遺構S218に切られる。1の「元」一文字のみ読める中国銅銭が出土しているほか、瓦質釜、平瓦、古代の土師器の破片が出土している。



SK246 (第4-142図)

3ピットの痕跡

C7区(西区)の第2層除去後に検出された長さ1.6m以上、幅0.6m、深さ0.3mの長円形の土坑であるが、3つのピットが重複した可能性が高い。内部からは古代の須恵器や土師器の破片が散在して出土したが、16世紀第1四半期の土坑SK247を切るもので、それ以後の土坑であることは確実である。

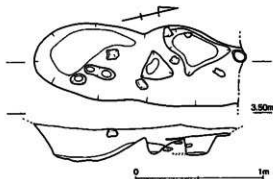
SK246 出土遺物 (第4-143図)

古代版

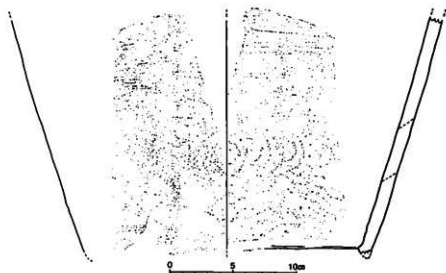
古代から残留した遺物。1は内面にタタキの当て具痕である同心円文がのこる土師器で、盃後大分型版の底部片。ほかには須恵器製の破片が出土している。



第4-141図 SK220 (追構1/30・遺物1/3)



第4-142図 SK246 (1/30)



第4-143図 SK246出土遺物 (1/3)

ピット

SP184

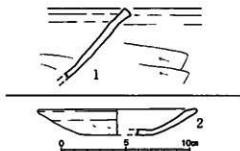
柱穴

C11区(東区)の基盤IV層上で検出された長さ0.35m、幅0.25m、深さ0.2mの柱穴である。埋土は第2層土の単一層である。図示できる遺物はないが、埋土中から京都系土師器1期皿の破片が出土している。このことから16世紀第2四半期以後の遺構と考えられる。

SP195 (第4-144図)

柱穴

B11区(東区)の基盤IV層上で検出された長さ0.5m、幅0.4m、深さ0.35mの掘形円形の柱穴である。16世紀第1四半期の溝SD176と重複している。出土遺物から16世紀の遺構と考えられる。1は外面にヘラケズリを施す瓦質鍋の口縁片、外面全体に煤が付着している。ほかに底部糸切の土師器の破片が出土している。



第4-144図 SP195・SP240出土遺物 (1/3)

SP240 (第4-144図)

柱穴

B10区(東区)の第2層除去後に検出された長さ0.35m、幅0.3m、深さ0.2mの柱穴である。16世紀第1四半期の土坑SK266を切る。2は京都系土師器1期の皿口縁片。ほかに埴の破片が出土している。この遺物から16世紀第2四半期以後の遺構と考えられる。

SP249

B10区(東区)の第2層除去後に検出された長さ0.3m、幅0.25m、深さ0.2mのピットである。16世紀第2四半期の土坑SK238を切る。出土遺物なし。切合関係から16世紀後半の遺構である。

以下はB11区(東区)の15世紀の土坑SK251切る3つのピットである。

SP280 図示できる遺物はないが、底部糸切の土師器の破片が出土している。

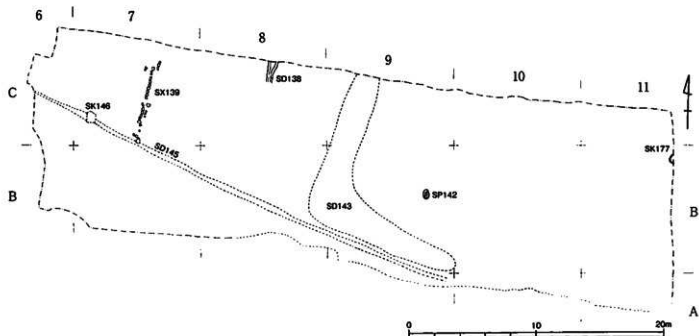
SP281 図示できる遺物はないが、土師器の破片が出土している。

SP282 図示できる遺物はないが、底部糸切の土師器の破片が出土している。

10 近世の遺構と遺物

概要（第4-145図、付図7下）

近世とした遺構は、16世紀末からつづく17世紀初頭の遺構と、18世紀の遺物が出土し第2層上から掘りこまれたことが確実な遺構である。



第4-145図 近世の遺構 (1/300)

近世初頭 溝

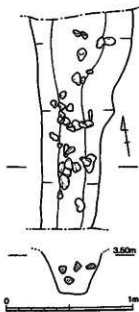
SD138（第4-146図）

C8区（北2区）検出の長さ1.7m、幅0.4～0.8m、深さ0.2～0.3mの溝状遺構で、北に行くほど深く広くなる。16世紀第4四半期の溝SD131と重複する。調査時の所見ではSD131に切られるとしたが、整理時に唐津陶器器灰軸の碗の破片が出土したことが判明したため、SD131に接続する溝として掘りこまれた可能性の高いと考えられる。したがって第4四半期後半の可能性もあるが、近世初頭に下る可能性も高いのでここにのせる。内部には礫が多く、遺物も破片で散在する状態であった。

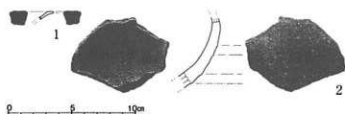
唐津陶器碗

SD138 出土遺物（第4-147図）

1は中国製青釉小皿の口縁片。2は1590年以後の唐津陶器器灰軸の碗。ほかに備前焼堯、埴の破片が出土している。



第4-146図 SD138 (1/30)



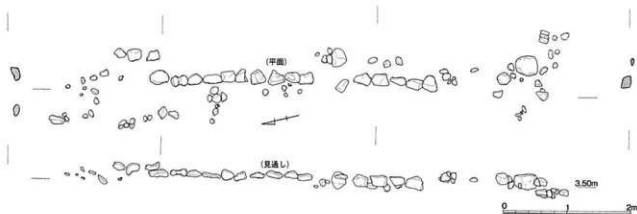
第4-147図 SD138 出土遺物 (1/3)

石列

SX139 (第4-148図)

西面

C7区の北2区と西区の境界で発見された石列で、長さ7.5mを検出した。高さは低く2段以上に重ねるところはない。石の面は西側を向いており構築当時は石列の東側が地形的に高かったことを示している。第2層の途中で作られているので近世中期の溝SD145の下、16世紀の道路SF151の上で作られていることになる。いずれにしても16世紀代の都市の遺構が完全に埋没してから後の遺構である。石列をつくる石材には河原石とともに、五輪塔の空風輪などの部材が転用されていた。おそらく水田化の初期の段階にもりあげて畑地とした場所で、その後更に整地されて完全に水田化し、石列の位置は近代の地籍境界に踏襲されたものと考えられる。



第4-148図 SX139 石列 (1/60)

土坑

SK177 (第4-149図)

キセル

B11区(東区)の基盤第IV層上で検出した長さ0.8m、幅0.2m以上、深さ0.2mの隅丸方形の土坑で、底面は凸凹である。SP179を切る。中から1の銅製キセルの火皿が出土したほかに、埴の破片が出土している。キセルの型式から近世初頭と推定される。



第4-149図 SK177 出土遺物 (1/3)

近世中期

溝

SD145

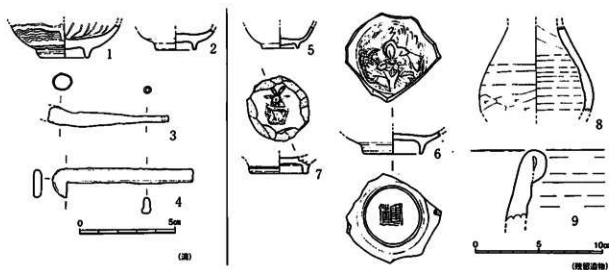
水田側溝

16世紀の道路遺構SF151と全く同じ位置に作られた溝で、長さ20m以上、幅1.0m、深さ0.05m。断面は浅い皿状である。標高3.7mの第1層下部で検出し、細い溝が3回以上重複している。SK146に切られている。この溝は近代の地籍境界になっている。江戸中期以後水田側溝として繰り返し掘りなおされて、戦後宅地化が進むまで使われていたと考えられる。

SD145 出土遺物 (第4-150図)

1は18世紀前半の肥前陶器の刷毛目碗底部。2は18世紀後半の肥前染付小坏の底部。3は銅製キセルの吸い口。4は長さ約7.4cm、先端が鋸形におれる銅製の金具。

残留遺物。5は16世紀の中国製白磁小坏の底部。6は16世紀後半の中国景德鎮窯系青花碗E群の饅頭心碗底部。7は全周を打ち欠いた中国漳州窯系青花碗の底部。8は備前焼徳利胴部。9は中世4期15世紀の備前焼壺口縁。ほかに須恵器壺、青磁碗、備前焼播鉢、底部糸切の土師器、京都系土師器2期皿、軒丸瓦、平瓦などの破片が出土している。



第4-150図 SD145 出土遺物 (1/3, 3・4-1/2)

土坑

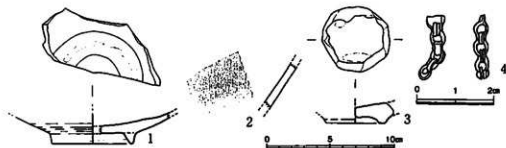
SK146

方形土坑

C7区の境界付近の第1層下部で検出した長さ1.0m、幅0.9m、深さ0.1mの不整形の土坑で、断面は箱形である。埋土は灰色砂屑の単一層である。近世中期の溝SD145を切る。内部からは碎片化した土器片が多数出土している。

SK146 出土遺物 (第4-151図)

1は18世紀後半の肥前唐津焼の皿底部片。2は肥前唐津焼播鉢の胴部片。3は1600～1630年製の唐津系陶器の砂目碗、口縁全周を打ち欠いてメンコ状に加工されている。4は銅製品の鎖片。ほかに多数の近世陶器の破片や、残留した須恵器、中国景德鎮窯系青花碗、中国産焼締陶器の破片が出土している。



第4-151図 SK146出土遺物(1/3、4=1/1)

ビット

SP142 (第4-152図)

B9区(北1区)の第2層上面で検出した重複したビット。埋土は暗黄褐色土(マンガン沈着あり)の単一層である。1の1590～1610年製の唐津焼藁灰軸陶器が出土したため当初は近世初頭の遺構と考えたが、第2層を切っているので、近世中期とした。ほかに青磁碗、備前焼甕、底部糸切の土師器、京都系土師器2期皿、瓦の破片が出土している。



第4-152図 SP142出土遺物(1/3)

小結

溝SD138と土坑SK177は唐津焼陶器碗の出土から17世紀初頭としたが、16世紀末の遺構の最後に作られた遺構とみなすこともできる。そのあとに調査区全体は第2層の整地がなされている。この整地は出土遺物から17世紀の初頭、中世都市府内が廃絶した後に行われたものとかんがえられる。その後この付近は石列SX139で土地の段差が作られたように、一旦畑地化されたようであるが、その後水田開墾SD145が掘られて、18世紀には水田化されている。その境界はおそらく16世紀の都市の区画をそのまま踏襲し、今日の地籍の境界となっている。

近世の整地

水田化

11 近世整地層の遺物

第2層整地層については第1節の基本層序の説明を参照のこと。

第2層整地層出土遺物(第4-153図①②)

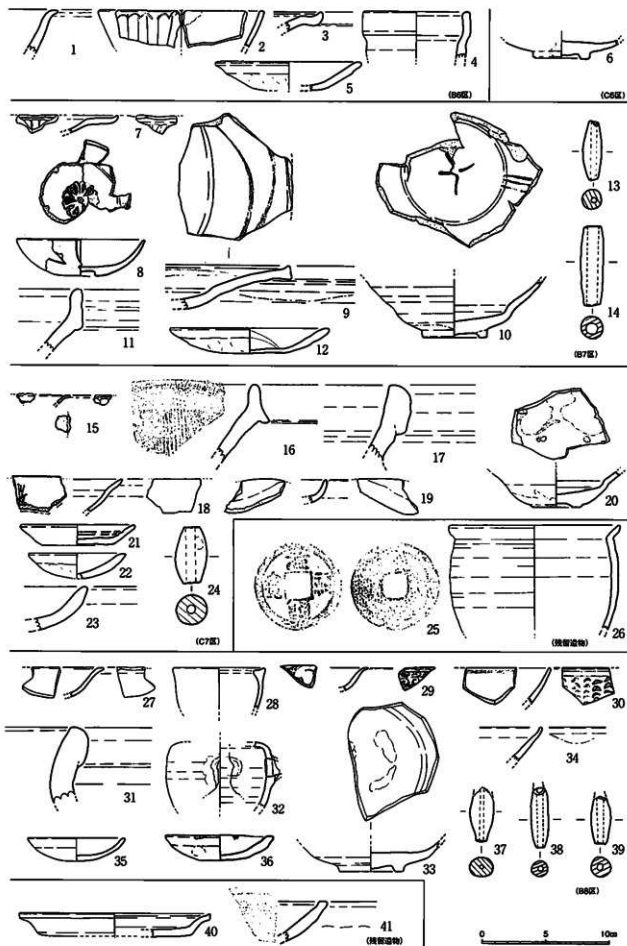
B6区 1は14～15世紀の中国龍泉窯系青磁碗D類の口縁片。2は16世紀前半の中国龍泉窯系青磁碗B-V類の口縁片で、縹線蓮弁文に貫入がはいる。3は中国龍泉窯系青磁皿の口縁片。4は1590～1610年製の唐津焼向こう付け口縁片。5は京都系土師器2期の皿口縁片。ほかに中世6期の備前焼播鉢、瓦質火鉢、底部糸切の土師器の破片が出土している。

唐津向付

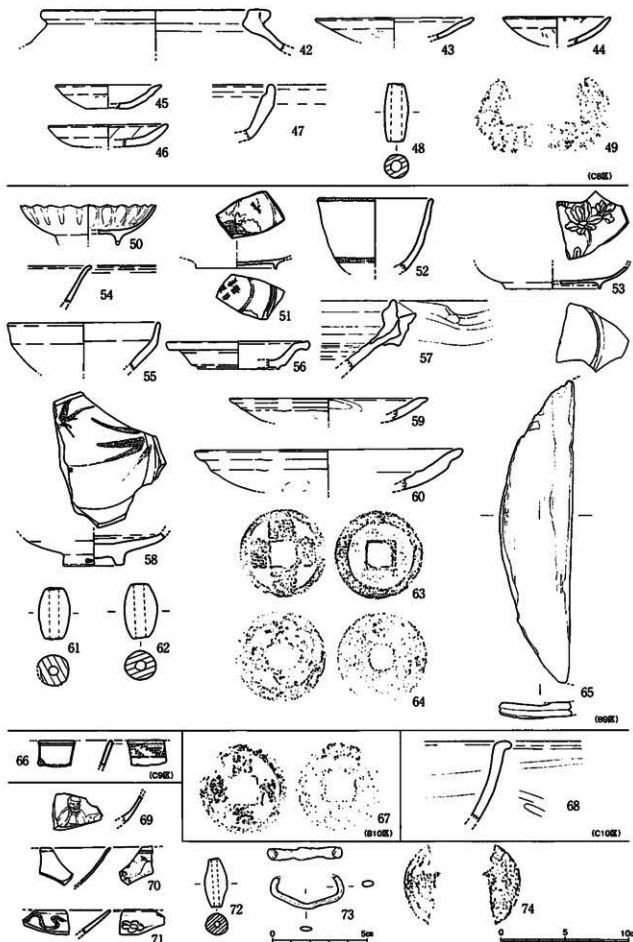
C6区 この付近の遺物はSD167の可能性もある。6は高台部分露胎の15～16世紀の中国製白磁皿の底部片で、貫入激しい。なおSK164、SK278など16世紀第3四半期の遺構出土片と接合した中国製焼締陶器の四耳壺(接合資料12)の破片が出土している。ほかに備前焼甕・播鉢、京都系土師器1期皿、残留した須恵器甕などの破片が出土している。

B7区 7はSD167出土の可能性もある鍋のある白磁皿の口縁片。8はSD189出土の可能性もある16世紀前半の荳萁底の中国景徳鎮窯系青花皿C群。9はSD167出土の可能性もある1590～1610年製絵唐津皿の口縁片。10はSD190出土の可能性もある絵唐津鉢底部。11はSD167出土の可能性もある中世6期の備前焼播鉢の口縁片。12はSD167出土の可能性もある京都系土師器1期

絵唐津



第4-153図① 第2層雙地層出土遺物 (1/3、25=1/1)



第4-153图② 第2层壁地層出土遺物 (1/3、49·63·64·67·74=1/1、73=1/2)

の皿口縁片。13はSD190出土の可能性もある両端をへら調整した管状土鍾A類の完形品。14も完形の管状土鍾A類。ほかに青磁碗、丸瓦、平瓦、近世陶器、鉄器の破片が出土している。

C7区 15はSD167あるいはSF151出土の可能性もある16世紀の翡翠軸の青軸陶器小皿口縁片。16はSD168出土の可能性もある15世紀後半中世5a期の備前焼播鉢の口縁片。17は中世6期の備前焼壺口縁片。18はSD167あるいはSF151出土の可能性もある1590～1610年製の繪唐津皿口縁片。19はSD168出土の可能性もある繪唐津変形碗口縁片。20はSD168出土の可能性もある1590～1610年製の胎土目の唐津碗底部片。21は内面に細かいロクロ目が残る底部糸切の土師器小皿で、指ナデと板状圧痕が残る。22はSD167あるいはSF151出土の可能性もある、口縁部に煤が付着して灯明皿として使用された京都系土師器2期の皿口縁片。23はSD168出土の可能性もある分厚い京都系土師器4期の皿口縁、17世紀前葉に下る。24はSD167あるいはSF151出土の可能性もある完形の管状土鍾、両端をへら調整するA類だが胴部の太い寸胴型である。25は完形の中国銅銭の元祐通寶（北宋1086年初鋳・篆書体）。なおSD168出土の可能性もある彫三島碗の破片が出土している（接合資料9）。ほかに瓦質鉢、底部糸切の土師器、京都系土師器1期皿、平瓦、埴、近世陶器の破片が出土している。残留遺物として26の古代土師器小型甕。ほかに須恵器甕・坏蓋、古代土師器坏の破片が出土している。

B8区 27は中国製白磁後花皿の口縁片。28は青磁の香炉口縁片。29は15世紀後半～16世紀前半の中国景德鎮窯系青花碗B群の口縁片。30は中国漳州窯系青花碗の口縁片。31は15世紀の備前焼壺口縁片。32は注口のある備前焼水注。33は1610～1630年製の砂目の唐津焼灰軸陶器碗底部片。34も同じ時期の唐津焼陶器皿口縁片。35は薄手の京都系土師器1期の小皿。36は口縁に煤が付着して灯明皿として使用された京都系土師器2期の小皿で、故意に打ち割ったような欠け方をしている。37～39は一端を欠いた管状土鍾A類。なお接合資料14の備前焼壺の破片が出土している。ほかに備前焼壺・播鉢、瓦質鉢、底部糸切の土師器坏、ロクロ目土師器皿、土師器鍋、丸瓦、埴の破片が出土している。残留遺物として40の8世紀の土師器皿。41の瀬戸美濃産銅皿の口縁片があり、ほかに須恵器甕、古代土師器坏底部の破片が出土している。

C8区 42は近世陶器の壺口縁片。43は京都系土師器1期の皿口縁。44は口縁に煤が付着して灯明皿に使用した京都系土師器1期の小皿。45は京都系土師器1期の小皿。46は口縁に煤が付着して灯明皿に使用した京都系土師器2期の小皿。47は京都系土師器4期の坏。48は完形の管状土鍾A類。49は半分に折れた銭種不明の銅銭。ほかに備前焼播鉢、瓦質火鉢・鍋、平瓦、埴の破片が出土している。

B9区 50は中国製青磁後花皿。51は16世紀の中国景德鎮窯系青花皿E群の底部片。52は唐津焼近世陶器碗。53は中国景德鎮窯系青花皿底部片。54は内外面に貫入がはいる窯元不明の磁器碗口縁。55は瀬戸美濃産天目碗の口縁片。56は大窯3期の瀬戸美濃産漆黒皿。57は1580～1600年ごろの近世1B期の備前焼播鉢口縁。58は1590～1610年製の繪唐津碗底部。59は京都系土師器2期の皿口縁片。60は京都系土師器3期的大型皿。61と62は寸胴型の管状土鍾A類の完形品。63は完形の中国銅銭、熙寧元寶（北宋1068年初鋳・篆書体）。64は完形の中国銅銭、大康通寶（遼1075年初鋳）または大安通寶（遼1085年初鋳）。65は木製の蓋あるいは底部。なお（接合資料4）の備前焼壺、（接合資料9）の彫三島碗、（接合資料10）の瓦灯、（接合資料11）の中国製焼締陶器の鉢、（接合資料35）の備前焼壺の破片が出土している。ほかに白磁、彫三島、備前焼壺、瓦質釜、底部糸切の土師器坏、平瓦、埴、鉄器の破片が出土している。残留遺物としてほかに須恵器甕・高坏、古代土師器甕・坏底部・甕の破片が出土している。

C9区 66は中国景德鎮窯系青花碗C群のいわゆる蓮子碗口縁片。なお接合資料2の瓦質風炉の破片が出土している。ほかに埴反り口縁の青磁碗、白磁皿、中国景德鎮窯系青花碗、中世6期の備前焼播鉢、唐津焼葉灰軸陶器、瓦質土器、ロクロ目土師器皿、京都系土師器1期皿、土師器甕、

鉄器の破片が出土している。

B10区 67は完形の中国銅銭である紹聖元寶(北宋1094年初鋳・篆書体)。ほかに土師器、動物骨、残留した須恵器甕の破片が出土している。

C10区 68は瓦質銅の口縁。ほかに中国景德鎮窯系青花碗C群、埴、残留した古代土師器杯の破片が出土している。

青磁人形手

B11区 69は5回目掘下げ時に出土した中国龍泉窯系青磁人形手。70は2回目掘下げ時に出土した中国景德鎮窯系青花碗E群口縁片。71は上部出土の中国景德鎮窯系青花皿F群の口縁片。72は両端をへら調整した管状土錘A類。73は銅製の把手の金具。74は5ないし6回目掘下げ時に出土した「賁」1字のみのある銭種不明の銅銭の破片。なお東区Ⅱ層2回目から接合資料9の影三島碗の破片が出土している。ほかに備前焼甕の破片が出土している。

12 近現代の遺構と遺物

概要

水田側溝である溝SD145は宅地化直前まで水田側溝として機能していたが、それ以外に以下の溝SD143がこの時期の遺構である。

L字溝

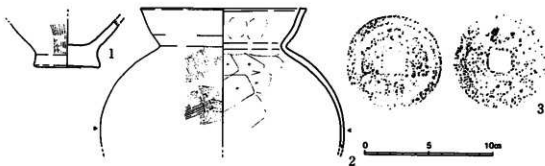
溝

SD143 第2層上面で北1区の区画にそって、L次形に検出した浅い溝で、出土遺物なし。マンガンの厚く沈着した掘土で、上層からのしみてきたものと考えられ、近世の水田および水路の位置を反映しているものと推定される。

13 そのほかの遺物(第4-154図)

擾乱や基盤層から出土した遺物を報告する。

1は被熱して変色した弥生前期末の甕の底部。2は口縁が内湾し上面を面取りする球形銅の古墳時代前期末～中期初めの土師器甕(布留式)、基盤IV層中出土。3は擾乱土から出土した中国銅銭の天禧通寶(北宋1017年初鋳・真書体)。



第4-154図 その他の遺物(1/3, 3=1/1)

第6節 墓地の遺構と遺物

概要(第4-155図、第4-3表、第4-4表)

18基

以下に記述する18基の遺構は、西区から北1区にかけて集中的に分布する一群の墓である。墓の認定はまず人骨の出土を第一に、次に埋葬施設の確認をもっておこなった。1～17号墓は現地調査中の認定順に番号を付した。ただし2号墓はS268遺構として調査終了後、現地での検討中に事後認定した墓であり、18号墓はS290として現地調査中は小ビットと考えていたが、報告書作成時の整理中に人骨片が確認され墓と認定した。

時期

墓の時期については、副葬品が極めて少なかったため苦慮したが、覆土中に含まれる遺物と、切合関係、さらに墓の方向と配置等の分布状態から3時期に分かれると考えられた。すなわち3号墓は副葬された土師器皿のセットから16世紀前半にさかのぼると推定され、この墓のみが西区の区画Aに属し、成人が埋葬された木製桶の塚葬である。この時期を墓地第1期とする。

第1期

それ以外の墓は、埋葬施設が明確でない幼児墓のみからなる一群と、南北方向に桶の方向をむけ東西に等間隔に配列された墓と、それに規制されて配置された一群である。前者の墓を後者が破壊して埋葬しているため、前後関係は明確であった。前者を墓地第2期、後者を墓地第3期とした。墓地廃絶後堆積した第2層の下部からは絵唐津碗や彫三島碗の破片が含まれているので、墓地は1590年代には存続していないことは確実であって、各墓の埋土中にも1590年代以後の遺物は含まれていない。この墓地が、後述するようにイエズス会府内教会の墓地であるとすれば、おそらく1587(天正15)年の島津軍府内占領と、その後につづく豊臣軍の府内退駐により、府内教会ではイエズス会員が退去を余儀なくされているので、その後豊臣秀吉による伴天連追放令によって教会の再開はおこなわれなかったため、墓地の終末はおそらく1587(天正15)年中にあたるであろう。この墓地第3期の墓の覆土中に混ざりこんだ土師器の大半は、京都系土師器第2期の皿片であるので、第3期の墓地の始まりは1570年代にさかのぼり、さらに1560年代までさかのぼる可能性がある。第2期の年代は第3期の墓より古いことと、第2期の始まりが正しい意味での墓地の始まりであること、この付近にはイエズス会府内教会以前に宗教施設がないことなどから、墓地の成立は府内教会の成立を前提としていたことがわかる。この点から第2期の上限は府内教会が開設された1553(天文22)年に求めることができる。したがって第2期の年代は1553(天文22)年以後の1550年代から60年代となろう。

第2期

第3期

ほかの遺構の年代と対比すると、第1期は16世紀第2四半期、第2期は第3四半期、第3期は第4四半期前半にほぼ対応する。

なお以下の記述は、舟橋京子・田中良之氏ら九州大学関係者による人骨所見をまじえつつ、山崎文子による木棺と墓坑の調査所見を田中がまとめたものである。

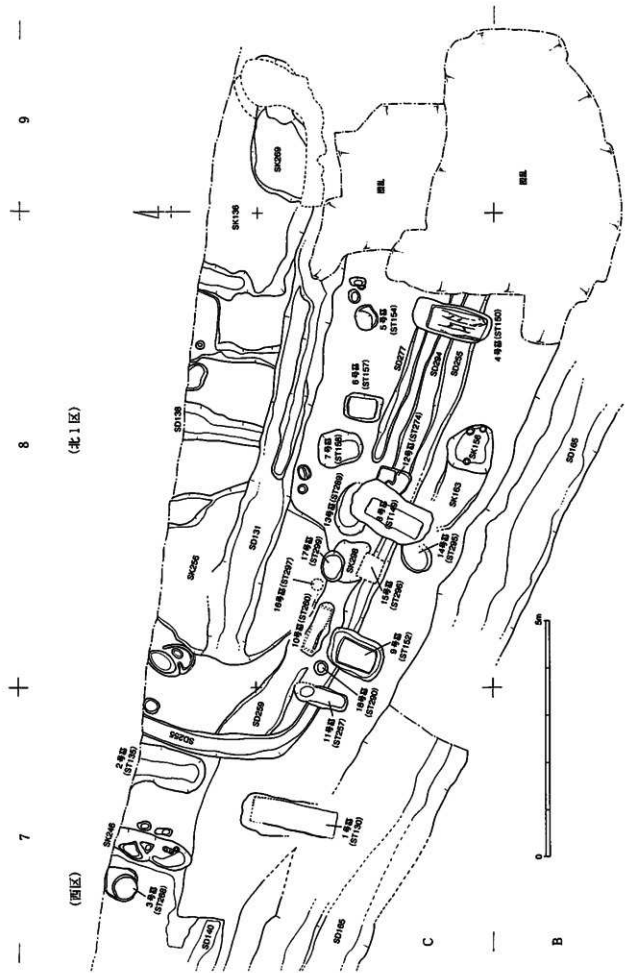
第4-4表 第10次Ⅱ区北緑地区墓地時期別一覧

時期区分	年代	墓
第1期	16世紀第2四半期	3号墓
第2期	16世紀第3四半期(1553～60年代)	5号墓、6号墓、7号墓、13号墓、14号墓、15号墓、16号墓、17号墓
第3期	16世紀第4四半期前半(1570年代～1587)	1号墓、2号墓、4号墓、8号墓、9号墓、10号墓、11号墓、12号墓、18号墓

- 1. 第1期は教会以前。第2・3期は教会存続時期にあたる。
- 2. 第2期は地壇のみが墓。小児・成人は含まれない。
- 3. 第3期は、墓方形木棺の使用と、成人墓が4基等間隔で配列され、間隔も方向も。

第4-3表 第10次Ⅱ区北調査区墓地一覧

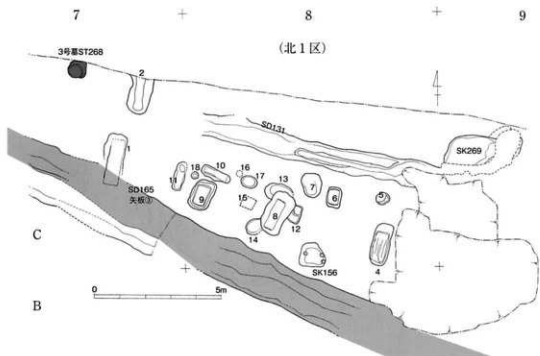
墓番号	通称番号	形状	発掘状況	性別	人骨	方位	埋蔵品	墓底の前後関係と位置	墓誌種類	備考
1号墓	ST130	長方形木棺	成人骸骨	?	仲間部? 両小胸の上で交差させる	北	なし	SD1616埋没後 SD1617に切れる。	3期	釘、漆器残片
2号墓	ST135	木棺?	成人?	?	仲間部?	?	なし	-	3期	釘・人骨出土、埴土に中国製黄銅製陶器残片。
3号墓	ST268	埴輪?	成人骸骨残片	男性	仲間部	-	棺内に土師器小皿2個	SK247(18世紀第11回年表)埋没後	1期	人骨出土。
4号墓	ST150	長方形木棺	成人骸骨	男性	似乱葬部	北	なし	SD277,SD294埋没後	3期	釘・漆器陶器、金貝多数出土、磁器破片、埴土に菅部系土師器2個と1期の埴土に磁器片。
5号墓	ST164	埴輪?	幼児1歳半~2歳	?	仲間部	?	なし	-	2期	漆器・埴土、漆器片同。
6号墓	ST157	方形木棺	幼児4~5歳	?	右似乱葬部	北	なし	-	2期	漆器陶器同。
7号墓	ST158	方形木棺	幼児3か月	?	仲間部	北	なし	-	2期	漆器・埴土。
8号墓	ST149	長方形木棺	成人骸骨	女性?	似乱葬部	北	なし	13・14号墓を90・12号墓に切られる。	3期	埴土陶器の小型の水筒に成人土器、埴土に菅部系土師器2個同。
9号墓	ST152	方形木棺	成人骸骨	?	左似乱葬部	北	なし	SD355(15世紀)埋没後	3期	漆器陶器同、埴土に菅部系土師器2個同片。
10号墓	ST260	長方形木棺	幼児3歳前後	?	仲間部	西	なし	9号墓に直交	3期	釘出土。
11号墓	ST257	?	幼児	?	仲間部?	南?	ガラス小玉1点	9号墓に直交	3期	人骨・瓦器出土。
12号墓	ST274	方形木棺	幼児1~2歳	?	左似乱葬部	-	なし	8号墓を切る	3期	漆器陶器同、埴土に菅部系土師器2個同片。
13号墓	ST289	土坑墓	幼児1~2歳	?	横似乱葬部?	西?	なし	8号墓に切られる	2期	漆器陶器同
14号墓	ST295	土坑墓	幼児1~3歳	?	?	?	土師器小皿1枚	8号墓に切れる	2期	漆器・骨子出土。
15号墓	ST296	木棺?	小児1~3歳	?	?	?	なし	SD295L-SK298埋	2期	漆器出土。
16号墓	ST297	土坑墓?	幼児1歳前後	?	仲間部?	?	なし	SK256を切る	2期	漆器出土。
17号墓	ST299	土坑墓?	成人	?	?	?	なし	SK295L-SK298E同	2期	-
18号墓	ST290	?	幼児?	?	?	?	なし	SK256を切る	3期	骨片出土。



第4-155图 墓地とその周辺の遺構配置 (1/80)

1 墓地第1期 (第4-156図)

第1期に該当する墓は、3号墓の1基のみであるが、埋葬時期が16世紀第2四半期にさかのぼると考えられるのでイエズス会の教会設立以前の墓と考えられる。その所在する場所も厳密に言えば、西区の区画Aの範囲内にあたり、第2期以後の墓地とは区画をこととしているので、本来集団墓地に含まれるものではないと考えられる。おそらく16世紀前半に存在した東西道路に面した区画の中に葬られた単独墓と推定されるが、調査中是一群の遺構として扱ったのでここで記述する。

教会以前の
単独墓

第4-156図 墓地第1期 (1/150)

3号墓 ST268 (第4-157図)

C7区(西区)のSK247掘下げ中に検出した。16世紀第1四半期の土坑SK247に掘り込んでいる。長さ70cm、幅65cm以上、深さ20cm以上の円形掘形に、成人を埋葬した径48～57cmの桶棺墓である。掘形の南に偏って平面円形の桶の痕跡を検出した。

木桶

埋葬

成人骨の埋葬姿勢は木製桶を利用した座葬である。西側から肋骨、左上腕骨、頭蓋骨、左大腿骨、右上腕骨、右尺骨、右桡骨、右大腿骨、右脛骨、左前腕骨の順で出土している。頭蓋骨は顔面が下向きで頭頂部が東を向いている。右上腕骨は近位が北を向き、右尺骨は近位が南を向いている。男性の可能性の高い、熟年後半以上の成人骨である。

その人骨の下から径46cmほどの桶の底板を検出した。数枚の板を接合したもので、板目は北西から南西方向をむく。木質の表面しか残存していないので厚さは不明であるが、掘形底面と木質表面の間には3cmほどの差がある。底板の周囲に幅3～5cmにわたって帯状に土質の異なる部分があり、土質は灰褐色の粘質土で、小礫をわずかに含む土である。桶の木質が粘土に置き換わったものと推定される。深さ20cmほどが残存していた。

土師器副葬

棺内からは完形の糸切り土師器皿3枚が出土している。2の完形土師器は内向きの棺内埋葬で、人骨の上に乗る。1と3はともに人骨の下の桶底部隅で出土したが、1は割れた状態で完形のまま出土しており、いずれもこの埋葬に伴う副葬土師器と考えてよい。1はその出土状態から故意に割られたもので、脛骨上にとった状態で出土しているので、棺内に副葬された可能性と棺上におかれたものが落下した可能性がある。2は口縁に故意の打ち欠きがある。これに対して3には故意の破

損はない。

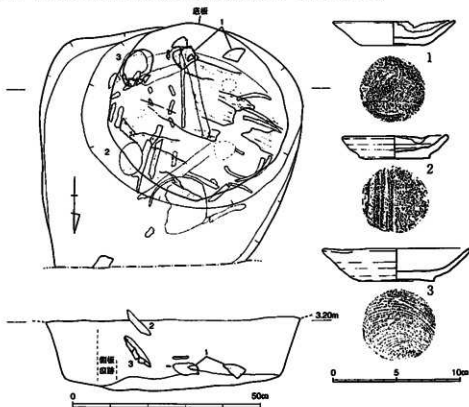
土師器の1と3は河野分類のE類にあたり16世紀前半から中ごろを中心にするが、覆土中の遺物を含めて京都系土師器の破片がなかった点から16世紀前半の遺物と考えられ、第1四半期の遺構SK247を切っているところから、墓そのものは16世紀第2四半期の墓と考えられる。

3号墓 ST268 出土遺物

土師器皿

副葬品 1は接合してほぼ完形になった底部糸切の土師器皿。口径9.6cmの中型の皿で、胎土に石英粒子の多い海部郡産の土師器である。指ナデと板状圧痕はなく河野分類のE類にあたる。2は完形の底部糸切の土師器小皿。口縁に一箇所打ち欠きがある。内面指ナデと外底面に板状圧痕がのこる。3は接合して完形になった底部糸切の土師器皿。指ナデと板状圧痕はなく河野分類のE類にあたる。

掘形内 ほかに残留した古代の須恵器の破片が掘形内から出土している。



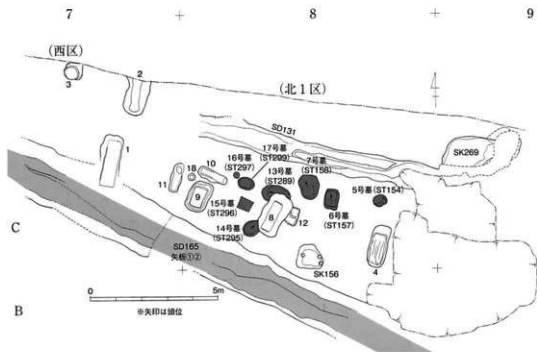
第4-157図 3号墓 ST268 (遺構 1/10・出土遺物 1/3)

2 墓地第2期 (第4-158図)

後述する第3期の墓がほとんど長方形の木棺墓からなり、一定の法則性を持って配列されているのに対し、第2期の墓は第3期の8号墓の周辺に集中する一群である。すべてが幼児あるいは小児埋葬であり、木棺・桶等の埋葬施設を使用した埋葬は5号墓・6号墓・7号墓の東側に並ぶ3基のみである。西側に群集する13号墓・14号墓・16号墓・17号墓は、土坑に直葬されたものと推定され、15号墓のみが掘形の輪郭から木棺の利用の可能性がある。副葬品を伴うのは14号墓の土師器小皿1点のみである。埋葬姿勢は5号墓と16号墓が座葬、6号墓・7号墓・13号墓が横臥屈葬であり、伸葬葬は確認できない。北頭位が多いが、西頭位もあり一定しない。

幼児墓群

この時期に対応する16世紀第3四半期の段階では、第2期の墓地の北にはなにもない空地がひろがり、なんらの区画施設もない。南側には道路SF151の側溝SD165があり、第1および第2矢板列の水路が機能していた時期にあたる。墓地は道路によってさえぎられた区画の南端に設けられたものと推定される。



第4-158図 墓地第2期 (1/150)

5号墓 ST154 (第4-159図)

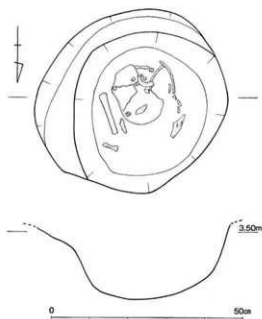
木桶幼児墓

C8区(北2区)の第2層除去後に検出した幼児埋葬の土坑墓であるが、木製桶を使用した可能性がある。墓坑は径約45cmの円形である。埋土は灰褐色土で、空気を含みぼさぼさである。頭骨と歯の破片が出土し、幼児墓と推定される。釘などの鉄製品や副葬品等の出土遺物はない。遺構の切合関係はない。

埋葬
1才半~2才前後

人骨について。墓坑中央から頭蓋骨が出土し、顔面は南向きだが上下は不明。頭蓋骨の東西から大腿骨が出土し、頭蓋骨の西側、大腿骨の南側から肋骨が出土している。その配置から本人骨は正面北向きの座葬で、軟部組織の腐朽に伴い頭蓋骨が左右大腿骨の間に転落したものと考えられる。性別不明の1才半~2才前後の幼児と推定されている。

木桶の痕跡や釘の出土がなかったため、棺の存在は証明できないが、幼児人骨が座葬であること、頭蓋骨が転落する空隙が存在したことを考えると、釘を使わない小型の木製桶が使用された可能性は否定できない。



第4-159図 5号墓 ST154 (1/10)

6号墓 ST157 (第4-160図)

木棺墓

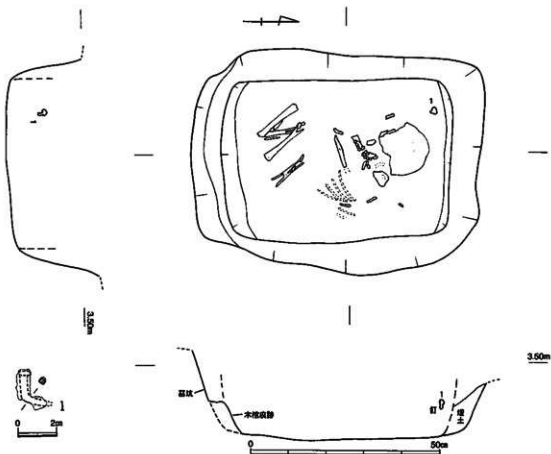
幼児墓
4~5才

C8区(北2区)の第2層除去後に検出した幼児埋葬の木棺墓である。墓坑は長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.2m。内部に長さ60cm、幅40cm、深さ20cm以上の方形木箱の痕跡が土質の違いから明瞭に検出できた。木棺の長軸はほぼ真南北に重なる。木棺埋土は灰褐色土で、空気を含んでほろほろしていた。棺材は残っていないが、人骨と北側小口付近から鉄釘が1点出土している。棺と人骨の大きさから幼児墓と考えられる。副葬品等の出土遺物はない。人骨はほぼ全身が残り、頭位は北向きで、肢体は右側臥屈葬である。人骨は、4~5才前後の幼児で、性別は不明。遺構の切合関係はない。

6号墓 ST157 出土遺物

鉄釘

1は残存長2.3cmの小型の鉄釘、先端を失っているが折れ曲がったところより先端に直交する木質が残っているので、木棺の蓋に使われた釘と推定される。ほかに埋土中から古代の土師器と底部糸切の土師器の破片が出土しているが、覆土中に入ったもので、副葬品ではない。



第4-160図 6号墓 ST157 (遺構 1/10、遺物 1/3)

7号墓 ST158 (第4-161図)

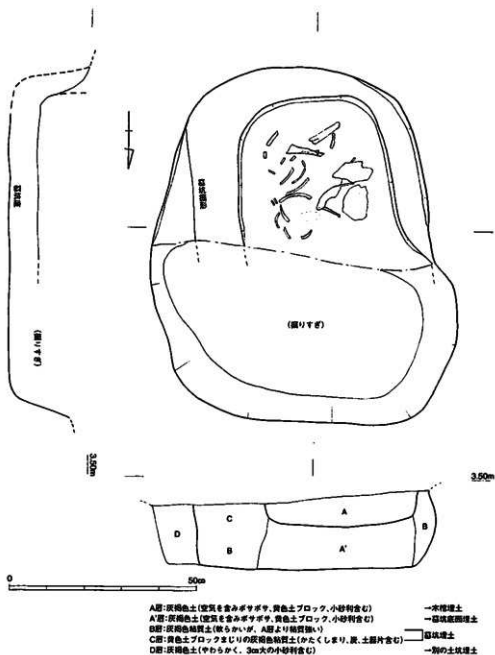
木棺墓

幼児墓

C8区(北2区)の第2層除去後に検出した幼児埋葬の木棺墓である。墓坑は長さ0.6m以上、幅0.6m、深さ0.2m以上の隅丸長方形である。北半を掘りすぎているが、長さ45cm以上、幅35cm、深さ20cm以上の方形木箱の痕跡が残り、頭骨と歯の破片が出土しているので墓であると判明した。木棺と人骨の大きさから幼児墓と考えられる。副葬品等の出土遺物はない。木棺内部には、灰褐色土で空気を含んでほろほろした埋土(A層)があり、周囲は基盤層に由来する黄色土を斑状にくむよくしまった掘形埋土(B・C層)である。棺材や釘等は残っていない。

埋葬 墓坑内北西部から頭蓋骨が出土し、頭蓋骨東側から肋骨が一部散乱した状態で見つかった。南側からは大腿骨が軸を東西にした状態で、大腿骨の南側からは脛骨が、同じく軸を東西にして出土し、肋骨の下から乳歯の破片が出土している。性別不明の生後9ヶ月前後の乳児の埋葬である。

9ヶ月乳児



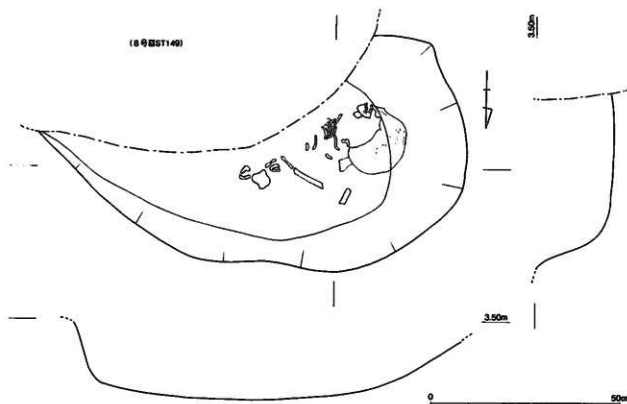
第4-161図 7号墓 ST158 (遺構 1/10)

13号墓 ST289 (第4-162図)

土坑墓 C8区(北2区)の基盤III層直上で検出した幼児埋葬の土坑墓である。墓坑形状は長さ1m以上、幅0.6m以上、深さ0.2mの長楕円形である。墓坑南側と人骨の下半は8号墓 ST149に切られて残っていない。埋土全体が空気を含んでぼさぼさした灰褐色土で、木棺の痕跡が認められなかったので土坑墓であると推定される。横臥屈葬の頭位西向き幼児人骨が検出されたので幼児埋葬と考えられる。出土遺物なし。

1-2才幼児 人骨の顔面は南向きで、顔の東から肋骨、その北から上肢骨、さらに東から骨盤が、出土している。

人骨は、性別不明の1～2才前後の幼児骨である。本人骨は8号墓の墓坑により切られており、その際の攪乱により頭蓋骨北面出土の長管骨片が本来の位置より高いレベルから出土している。



第4-162図 13号墓 ST289 (遺構 1/10)

14号墓 ST295 (第4-163図)

土坑墓

C8区(北2区)の第2層除去後に検出したもので、木棺の痕跡が認められなかったため土坑墓であると推定される。墓坑は長さ70cm以上、幅60cm、深さ15cmの楕円形で、長軸は東北-南西方向である。墓坑の東部は8号墓ST149に切られる。埋土は灰褐色土で、人骨の周辺は空気を含んだざざくした土であった。北端に拳大の礫が一点置かれ、そのそばに割れた頭骨と数点の歯牙がおおよそ同じ高さで底面に張り付くように検出された。頭骨と歯牙のそばに完形の土師器小皿(1)が内面を下にした状態で、頭骨にもたれかかり被せるような位置から出土している。これは埋葬に伴う副葬品と考えてよい。ほかに覆土中から須恵器の破片が出土しているが、これは混ざりこんだものである。人骨は性別不明の1～3才前後の幼児骨と鑑定されているので、14号墓は幼児埋葬の土坑墓と考えられる。

幼児
1～3才

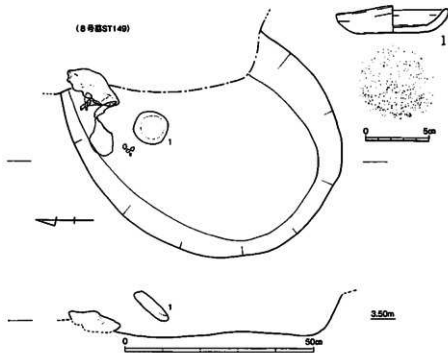
墓の時期は第4四半期の墓8号墓に切られているので、それ以前であることは確かであるが、上限は2案ある。1案は土師器小皿の形態から16世紀前半までさかのぼる可能性をみとめて16世紀前半の墓とする案。2案はその位置から第3四半期の幼児埋葬墓群に含まれるので、第3四半期の墓とする案。本報告では幼児埋葬という点を重視して2案とした。

14号墓 ST295 出土遺物

土師器

1は口縁に2箇所煤が付着して灯明皿として使用された、完形の底部糸切の土師器小皿。内面に指ナデがある河野分類のE類。16世紀第2四半期から第3四半期の土師器である。煤の付着は2

回のみで最小2回だけ灯明に使われた後、口縁を打ち欠くこともなく置かれた土器である。ほかに残留した須恵器の破片が出土している。



第4-163図 14号墓 ST295 (道構1/10、道物1/3)

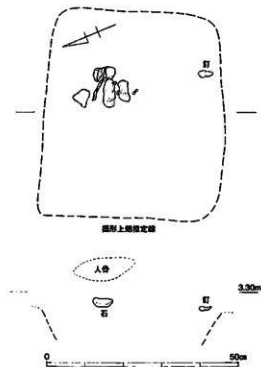
15号墓 ST296 (第4-164図)

木棺墓

C8区(北2区)で検出された幼児埋葬の木棺墓である。木棺の痕跡は認められなかったが鉄釘が1点覆土中から出土しているので木棺墓であると推定される。まず人骨が出土し、そのあとで墓坑らしき長さ55cm、幅45cm、深さ10cm以上の方形の輪郭を検出したが、掘り下げた結果底面を明確にできなかった。

小児
7-8才

中央北よりから頭蓋骨と鎖骨片が出土している。下顎骨内に第1大臼歯が埋伏していた。性別不明の7~8才の小児と推定されている。15世紀代の溝SD255と土坑SK298を切る。副葬品等はまったくなかった。



第4-164図 15号墓 ST296 (1/10)

16号墓 ST297 (第4-165図)

土坑墓
木桶

C8区(北2区)で検出した幼児埋葬の土坑墓であるが、木製桶を使用した可能性がある。墓坑は径約20cmの円形と推定される。頭骨と歯等の破片が出土し、幼児墓と推定される。釘などの鉄製品や副葬品等の出土遺物はない。15世紀後半の土坑 SK256 を切る。

埋葬
1才乳児

埋葬姿勢は不明ながら頭蓋骨と歯牙が近接して西側から出土し、肋骨片がまとめて出土しているところから埋葬の可能性が高いと推定されている。性別不明の1才前後の乳幼児である。

木棺の痕跡や釘の出土がなかったため、棺の存在は証明できないが、埋葬であるならば、釘を使わない小型の木製桶が使用された可能性は否定できない。

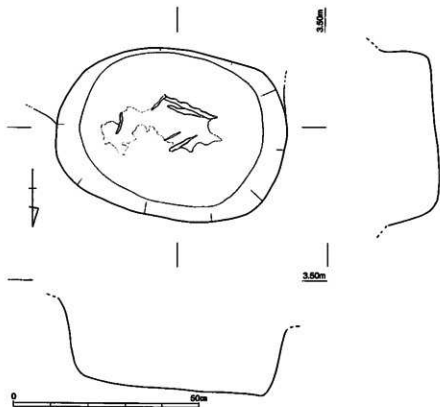


第4-165図 16号墓 ST297 (1/10)

17号墓 ST299 (第4-166図)

土坑墓

C8区(北2区)で検出したもので、木棺の痕跡が認められなかったので土坑墓であると推定される。掘形は楕円形で長さ60cm、幅40cm、深さ20cm以上。15世紀後半の土坑 SK256 と土坑 SK298 を切る。掘土は灰褐色土で空気を含んだざくざくした土であった。人骨の破片が墓坑中央からまとめて出土した。性別不明の未成人である。出土遺物はない。



第4-166図 17号墓 ST299 (1/10)

3 墓地第3期 (第4-167図)

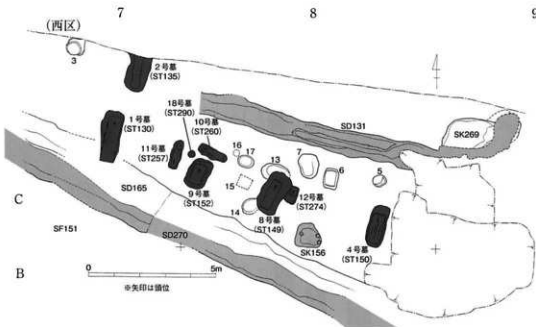
等間隔配列

成人埋葬

規則的に配列された成人墓と、その成人の周囲に配された幼児墓からなる。南北方向に木棺を配置し、北頭位で被葬者を安置する成人埋葬墓5基が、東西に西から1号墓、9号墓、8号墓・4号墓の順に2ないし3mの間隔をあけて葬られ、2号墓は1号墓の北に直列して配置されている。この5基はいずれも成人埋葬で、4号墓は唐櫃を棺に転用している。1号墓が伸展葬のほかは屈葬である。9号墓の周囲には幼児を伸展葬で葬った10号墓と11号墓、さらに18号墓が配されている。8号墓の横にも幼児が屈葬された12号墓が存在する。副葬品は11号墓の幼児埋葬に伴ったガラス小玉1点のみであった。

区画

なお第3期の墓地が存続していた間に南側には道路SF151があり、その側溝はSD250ないしSD270が対応する。それまでより道路側溝の位置が南に移動したため、1号墓をかつての道路側溝であるSD165の掘形に切り込むように埋葬することが可能となっている。SD270は水路機能を喪失して単なる区画の溝になる。いっぽう墓地の北を画すように溝SD131が掘られている。ほかに墓地に関係のある可能性のある遺構として土坑SK156がある。この土坑は8号墓そばの敷地南端ギリギリに掘られたもので、その形態と遺物出土状態から廃棄物処理土坑すなわち、墓地の中のごみ捨て穴と推定される。



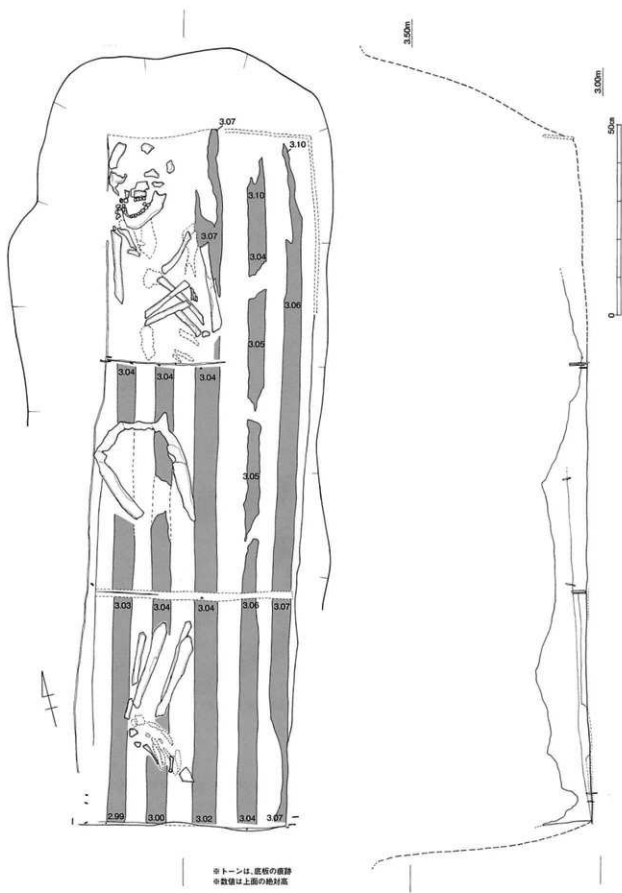
第4-167図 墓地第3期 (1/150)

1号墓 ST130 (第4-168図)

長方形木棺

C7区(北2区)で検出した長方形の木棺墓である。16世紀第2四半期に利用された溝SD165の第3矢板列の掘形を切り、第4四半期後半の溝SD167に上部を切られる。人骨と木棺は掘形とともに切り取りを行った。その際に底面が砂質で軟弱であったため底部が崩落した。底部はブロックとなり一部破損したが修復をおこない、現在、大分県立歴史博物館に保管してある。

掘形の北半は平面で識別可能であったが、南半は上部をSD167に切れ、下部はSD165の掘形に重なるため平面的に識別することができなかった。掘形の規模は木棺より一回り大きい程度である。内部の埋土を取り除くと1体の人骨と木棺の痕跡があらわれ、調査はその木棺を追及した。



第4-168図 1号墓 ST130 (1/10)

木棺の規模は内法で長さ185cm、幅52～55cm、底面から最高で15cmまで確認している。墓坑の検出面から木棺底面までの深さが平均約60cmなので、木棺の高さはそれ以下となり、北小口の上位で出土した鉄釘(5～7)の出土標高が3.51m付近なので、木棺の高さは50cm前後と推定される。

底面構造は特異なもので底面が篋状になっている。詳しくみると木棺の底部に東西横方向の棧が約60cmの等間隔で2枚認められ、底板に縦にあってがわれて板1枚に1本の鉄釘で接合されている。底板は隙間をもつ篋状に南北方向に5枚渡されている。1枚の板の幅は平均5～6cmで隙間の間隔も同じである。この底板を固定する棧板の幅が薄いので、この5枚の板はそれぞれ一枚板であったと考えてよい。側板は残存した部分を見る限り、少なくとも底板よりは幅が広い板を使用している。底部の棧板は側板から釘留めされている。小口の接合方法は観察できなかったが、蓋も含めていずれも釘による接合である。

木棺の設置方向は真南北から東に10度振っている。また木棺の安置に当たってわずか数センチの差ではあるが、頭を向けた北側が高く、人骨が片寄った西側が低くなっている。

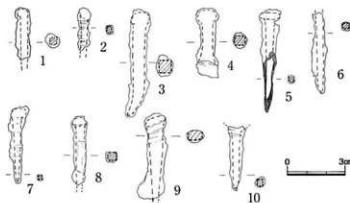
内部には伸展葬の成人熟年人骨1体が中央より西側に偏って発見された。性別は不明である。頭位は北向きで下肢を軽屈した仰臥伸展葬である。顔面はやや西向き。上肢は左右とも肘関節を曲げ、本来胸骨があったあたりで左右の前腕を交差させている。右腕を上にする。

なお木棺に使われた鉄釘以外に、副葬品と認められる遺物は棺内にはない。

1号墓 ST130 出土遺物 (第4-169図)

木棺鉄釘 1～10は木棺に使われた鉄釘である。いずれも軸の断面が方形の和釘である。3・5・7は完全なまま出土した。1寸から2寸の大きさである。ほとんどの釘に木質が残存しており、先端部では縦方向に、基部では横方向に木質が付着するところから見て、いずれも方形の木棺の接合に用いたものと推定される。以上の釘は、木棺上半から内部に落下したものである。下半や基底部に残る釘は切り取りを行ったため取り上げていない。

ほかに残留した古代の遺物が多く、須恵器甕、土師器壺などや中世の底部系切土師器の破片が出土しているが、いずれも細片で埋土中に混入したものである。



第4-169図 1号墓 ST130 出土遺物 (1/2)

2号墓 ST135 (第4-170図)

長方形土坑

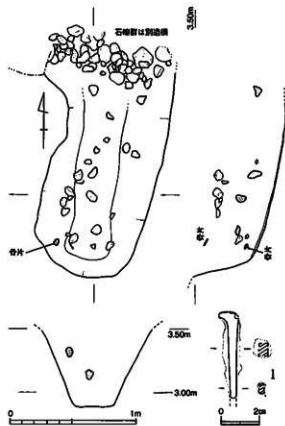
鉄釘と竹

C7区(北2区)で検出した長方形の土坑である。長さ1.7m以上、上辺幅0.8m底面幅0.3m、深さ0.5~0.7m。発掘中は墓と考えていなかったが、1号墓と同じ方向で並ぶように位置し、内部から鉄釘と骨片が出土したため木棺墓の可能性を考慮して墓とした。墓とすれば南北方向(東6度振る)の長方形の墓坑あったと推定される。覆土中から多量の遺物が出土したが、別の遺構と重複していた可能性が高い。北端が調査区外に続くためギリギリまで調査したが、礫を多量に廃棄した別の遺構に切られていた。下記に述べる接合資料28の年代から第4四半期前半の遺構と考えられる。

2号墓 ST135 出土遺物

1は先端を失った鉄釘。なおSD250、SK231、SK236、SK269出土破片と接合した中国製黒褐輪軸陶器壺(接合資料28)の破片が出土している。この接合資料28の破片はほとんど第4四半期前半の遺構から出土している。

ほかに15世紀前半の備前焼播鉢、瓦質土器の碗、大内系土師器、底部糸切の土師器坏、ロクロ目土師器、京都系土師器1期Ⅱ、平瓦の破片が出土している。



第4-170図 2号墓 ST135 (遺構 1/30、遺物 1/2)

4号墓 ST150 (第4-171・172図)

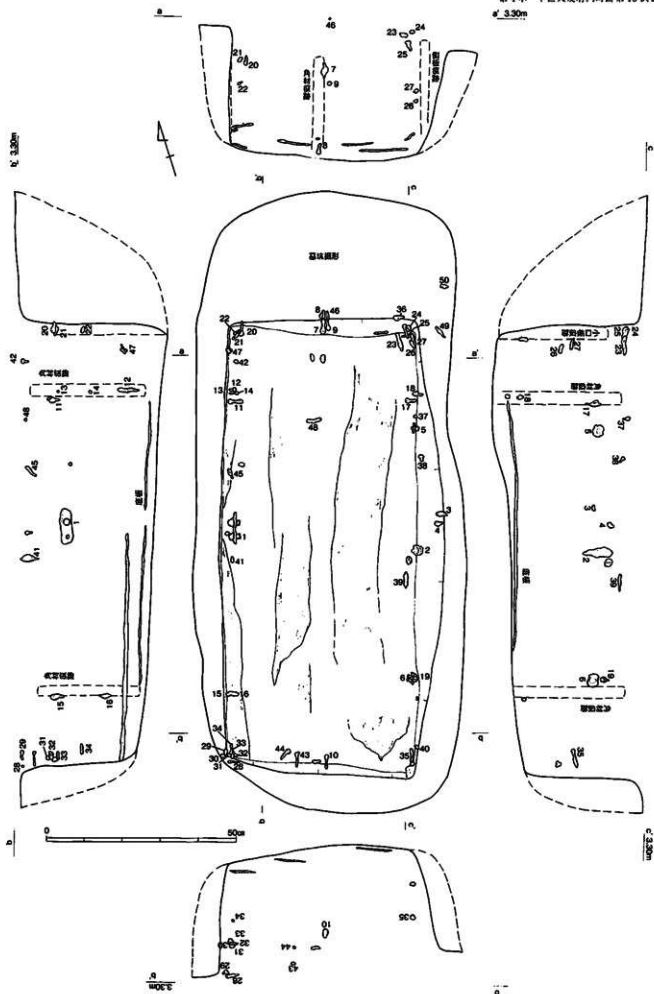
木棺墓
唐櫃転用

C8区(北2区)の第2層1回目除去後に検出した長方形箱形の木棺墓である。しかし木棺は長さ約117cm、幅約46cm、深さ35cm以上の唐櫃の足を切断して転用したものと考えられ、蓋は釘で留めている。墓坑は長さ175cm、幅80cm、深さ45cmの不整円形である。15世紀の溝SD277とSD294を切って、掘り込んでいる。木棺の方位は長軸を南北に向け東に17度振る。

T字形銅

掘形全体を下げていくと、やや南によって長方形の木棺痕跡が土質の違いで明瞭に認められ、同時に木棺痕跡と掘形の境界に釘や金具が次々と出土し、逆に最上部に多かった土器片の出土は少なくなった。木棺痕跡の内部を掘下げていくと、側面に各々2ヶ所、小口面に1ヶ所角材の痕跡と考えられる方柱状の空隙が見つかった。さらに四壁に釘とは異なる鉄製品が現れた。特に先端が二股に分かれたT字状の飯らしき金具や、蝶番らしき金具、蓋を固定する錠前を通すための金具などが出土し、この棺は埋葬用の木棺ではなく、唐櫃あるいは長持のような家具を転用したものであると考えられた。この転用棺の詳細は遺物の項と第7節2で触れる。

掘形埋土以外の覆土は2層に分かれる。上層の1層は検出面から10cmほどまでの層で、マンガンが沈着して赤みがかって、絵唐津片が含まれる。木棺内の覆土の大半を含む2層は炭片や2cm



第4-171圖 4号窟 ST150 (1/10)

大の小礫を多く含む空気を含んだぼさぼさの灰褐色土層である。東よりに硬い地山ブロックが多い。

仰臥屈葬
成人男性

内部には北頭位の仰臥屈葬の成人熟年男性が、一体埋葬されていた。大坐骨の切痕狭く、大腿骨の柱状性が発達している。頭蓋骨と下顎骨は土圧で変形している。頸骨と胸骨は不連続である。

埋葬年代

出土遺物は棺に転用された唐櫃の金具と接合用の鉄釘、それに蓋を留めたと推定される釘が大半で、棺が腐朽した後に上から落ちこんだ土（2層）や掘形埋土の中から出土した京都系土師器2期の皿片、さらに最上層の1層から絵唐津の皿片などが出土しているが、副葬品と考えられる遺物はない。

陥没後に絵唐津片が存在するところから1590年代に近い年代を想定できる。

木棺金具および釘（第4-173・174図）

唐櫃に本来付属していたと考えられる金具および釘。1～6は本来の唐櫃の蓋との開閉の金具と考えられるもの。1は西壁正面中央で検出した2つの円環をつけた金具。長さ8.5cm、幅3.0cm、厚さ3mm

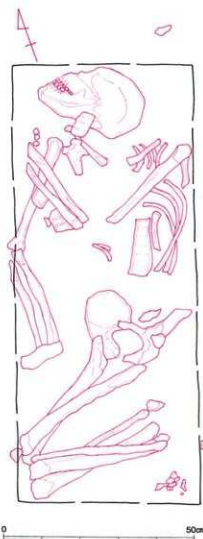
錠前金具

の鉄板に2箇所穿孔し、そこに幅1.3cmの幅広の断面円形の鉄筒を固定するために先端を二股に広げてT字状になる金具を2個差し込む。その2箇所を板を貫き、背後つまり箱の内側には、ワッシャーに当たる銅製の円盤を取り付けていた。錠前をとおすための金具である。2は東壁正面中央のちょうど1の金具の反対正面で見出した金具である。上下に長く上部は2つにわかれそこに棒を通してある。蝶番の役割をする金具と推定される。3と4は2の金具のそばで発見され関係すると推定される金具。なお3と4については棺外の位置に当たるためその関係は可能性にとどまる。5と6は2の金具の両側で発見された円環をつくる二股金具。方形の鉄板の中央に穿孔し円筒を作り出した二股になる金具を差し込むもので本来蝶番の金具である。

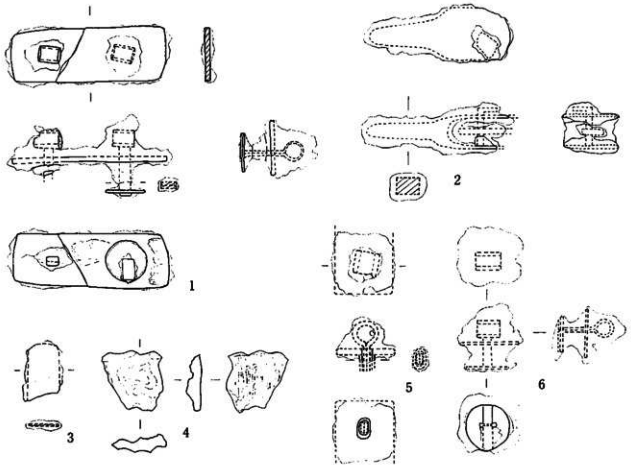
蝶番？

唐櫃の脚部を固定するための金具および釘。7は北小口の上位で発見した、先端をT字状に折り上げた二股金具の先端。8は北小口の下位で発見された釘。9は北小口の金具（7）のすぐ下で、先端を外に向けて検出された鉄釘。内側からとめた釘と推定される。この釘の下位の金具（8）の背後でも先端を外に向けた鉄釘を検出したが、劣化がひどく実測していない。10は南小口の上位で検出した二股金具。下位には対応する金具は発見されなかった。11は西壁北側の上位で検出した先端を折り上げた二股金具の先端。12は西壁北側の下位で検出した先端をT字状に折り上げた二股金具の先端、木質が残る。13は西壁北側の上位で検出した先端を東に向けて横向きに発見された釘。14は西壁北側の下位で発見された先端を東に向けて横向きに発見された鉄釘の頭部片。さらにもう1本最下位に先端を外に向けた釘が出土している。15は西壁南側の上位で検出した、先端をT字状に折り上げた二股金具の先端と頭部。16は西壁南側の下位で検出したT字状に折り上げた二股金具の先端。17は東壁北側の上位で検出したほぼ完全な先端をT字状に折り上げた二股金具で、この形から一種の鋸であることがわかる。18は東壁北側の下位で検出した釘の頭部。

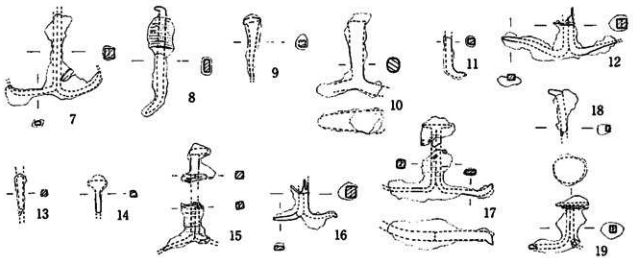
T字形鉄



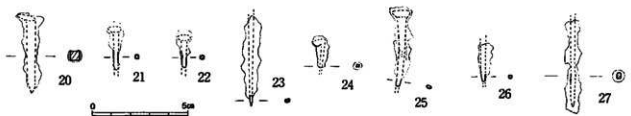
第4-172図
4号墓 ST150 埋葬人骨出土状態 (1/10)



唐櫃に使われた金具



唐櫃の脚部を固定する金具と釘



第4-173図 木棺金具および釘 (1/2)

北小口板と側板の結合に使われた釘

鉄釘

19は東壁南側の上位で検出した二股金具、東壁南側の下位でも鉄片を検出したが、16と同様の二股金具ではなさそうである。

北小口西北隅の側板と小口板の結合部に使用された鉄釘。20は最上位に南北方向の横向きで検出した長さ4.1cmの釘で、2寸釘か。21は上位に先端を東に向けて横向きで検出した長さ2.3cm以上の釘で、一寸釘か。22は中位で先端を東に向けて横向きで検出した長さ1.3cm以上の釘で、一寸釘か。

北小口東北隅の側板と小口板の結合部に使用された鉄釘。23は木棺の上位において、先端を南に向けて横向きに検出した長さ4.8cm以上の釘で、2寸釘か。24は上位において、先端を南に向けて横向きに検出された鉄釘。25は上位に先端を南に向けて横向きに検出された長さ4.0cm以上の釘で、2寸釘か。26は中位において、先端を南に向けて横向きに検出された鉄釘の先端。27は中位において、先端を南に向けて横向きに検出された長さ4.3cm以上の釘で、2寸釘か。もう一点最下位に先端を西に向けて横向きに検出した釘を取り上げたが、保存状態が悪く実測していない。

頭部環頭

南小口南西隅の側板と小口板の結合部に使用された鉄釘。28は木棺最上位に、先端を東に向けて横向きで検出した長さ3.1cm以上の鉄釘。29は上位において、先端を北に向けて横向きに検出した鉄釘の先端。27のすぐ下で同じ向きの釘が検出されている。30は中位において、先端を東に向けて横向きで検出した長さ2.5cm超の鉄釘で、一寸釘か。31は中位において、先端を北に向けて横向きで検出した鉄釘。32は中位において、先端を東に向けて横向きで検出した長さ2.9cm以上の金具で、頭部を円環に作っている。33は下位において、先端を北に向けて横向きに検出された釘。34は下位に先端を北に向けて横向きに検出した釘。35は南小口南東隅の側板と小口板の結合部に使用した鉄釘で、中位において、先端を北に向けて横向きで検出した長さ4.1cm以上の釘で、二寸釘か。

木製の蓋を閉じるための釘。木棺痕跡の最上位に、先端を下にして垂直に検出した鉄釘を、以下に北小口から時計回りに述べる。36は東北隅の結合部において先端を下にして検出した長さ5.4cm以上の釘で、2寸釘か。37は東側板上に先端を下にして検出した釘。38は東側板上に先端を下にして検出した鉄釘頭部。39は東側板上に先端を南に横向きにして検出した長さ4.1cm以上の釘で、2寸釘か。40は東側板上の南端近くで、先端を下にして検出した鉄釘頭部。41は西側板上に先端を下にして検出した長さ1.4cmの鉄あるいは釘で、木質が大きく付着する。釘ならば1寸釘か。42は西側板上に先端を下にして検出した鉄釘の先端。

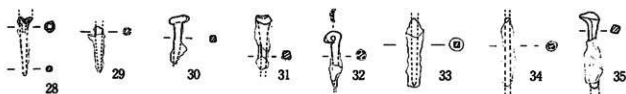
内部に落下あるいは棺外で検出した釘。43は南小口の上位で、先端を南に向けて横向きに検出した長さ4.3cm以上の釘で、2寸釘か。44は同じく南小口の上位において、先端を南に向けて横向きに検出した長さ4cm以上の釘で、2寸釘か。45は蓋の腐朽に伴って内部に落下したと推定される棺内中央の中位で検出した釘片。46は棺の蓋よりかなり上位で検出した鉄釘の先端。47は内部底面で検出した長さ2.9cmの釘で、1寸釘か。48は棺の蓋よりかなり上で検出した長さ3.1cm以上の釘で、2寸釘か。49は明らかに棺外だが蓋と同じ高さで先端を西に横向きで検出した長さ4.6cm以上の釘で、2寸釘か。50も、明らかに棺外だが、蓋と同じ高さで先端を東に横向きで検出した鉄釘片。釘のついた板などを埋めたものだろうか。ほかに内部に落下した鉄釘が5点出土している。

4号墓 ST150 出土遺物（第4-174図）

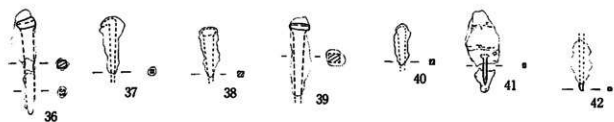
埋土混入

木棺内 いずれも木棺蓋の腐朽陥没後に内部に落ち込んだ土器片で、すべて京都系土師器2期の小皿の破片であるにもかかわらず、同一個体ではない。51と52は京都系土師器2期の小皿口縁片、ともに煤が付着し灯明皿として使われている。53は京都系土師器2期の皿口縁片。54は京都系土師器2期のやや大振りの小皿口縁片。

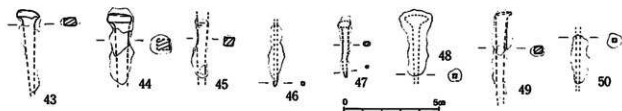
棺外 棺外の埋土から、55の京都系土師器2期の小皿片が出土している。ほかに瓦質播鉢の碎



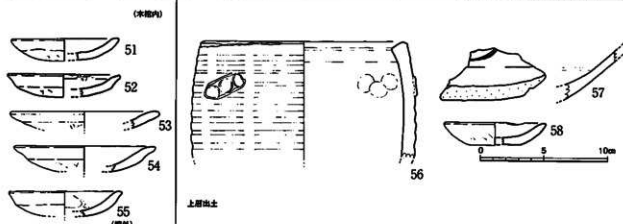
細小口両面溝の釘板と小口板の結合に使用された釘



埋葬施設に転用されて木製の蓋を閉じるための釘



内部に落下あるいは外側で発見された釘



第4-174 図② 木棺金具および釘 (1/2) 木棺内上層出土遺物 (1/3)

片と京都系土師器3期皿の破片が出土している。

陥没土中

上層出土 掘形検出後の木棺痕跡を検出するまでの上層で出土した遺物で、本来木棺の陥没したのちの窪みあるいは上層に含まれていたもので、この埋葬とは直接関係ないものと推定される。56は備前焼鉢口縁で、外面に把手を貼り付けている。57は絵唐津大皿の破片。58は京都系土師器2期の小皿口縁片、内面に指ナア外底面に板状圧痕が付く珍しい京都系土師器で、口縁に1箇所打ち欠きがある。上層からはほかに底部外面に格子タタキを施す土師器鍋、底部系切の土師器坏、埴の破片が出土している。

木棺の復元 (第4 - 175 図)

ここでは、木棺痕跡と金具・釘の出土位置から復元される木棺についてまとめる。

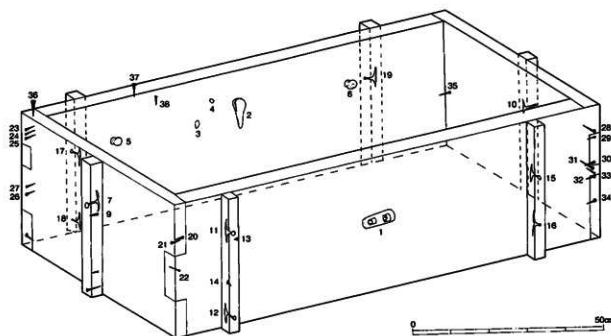
側板と小口
に角材

木質痕跡の観察からは、底板と側板・小口板とも一枚板である可能性が高いが、板の厚さは木質がわずかしか残っていなかったので不明である。側壁に残された角材の痕跡からみて、左右の側板の外側に2本ずつ角材をあて、各角材は外側から上下に2箇所、二股になるT字形鉄状の金具を通して先端をT字型に曲げて固定する。北小口外側でも小口中央の縦に一本の角材痕跡と金具が出土し、南小口では角材の痕跡が明瞭ではなかったものの金具10が出土していることから北小口と同様に、角材があてがわれていた可能性が高い。角材の下部は底面より下に痕跡を残していないので、本来あった脚にあたる部分は切り取られたものと推定される。左右の側板から金具が出土し、ほぼ原位置を保っているものと考えられる。西側には錠前をさすための金具1が横向きにとりつけられ、東側には蝶番になると推定される金具5と6が出土している。全体の長さは約117cm、幅約46cm、高さ35cmをはかり、また側板と小口の接合は相互に切り込みを入れて組み合わせる強固な接合方法を用いている可能性が高く、おそらく当時の家具であった唐櫃であると考えられる。錠前金具や蝶番金具のうち、蓋に取り付ける片割れの金具が出土していないので、蓋は取り外して別の板材を蓋として、釘留めにしたものと推定される。復元の根拠は第7節3で触れる。

脚を切除

唐櫃

蓋は別材



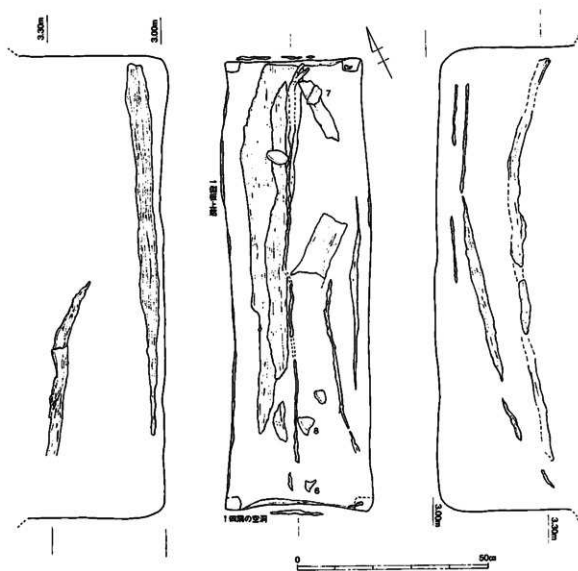
第4 - 175 図 4号墓 ST150 の木棺の復元図 (1/10)

8号墓 ST149 (第4 - 176 図①~③)

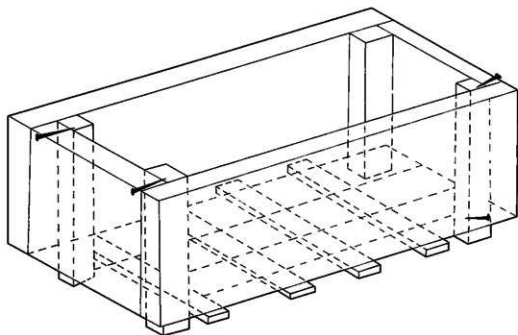
長方形木棺

C8区(北2区)の第2層除去後に検出した木棺墓である。墓坑は長さ170cm、幅90~100cm、深さ42cm以上の不整楕円形であるが、墓坑は完掘していない。木棺は長さ120cm、幅40cm、高さ35cmの長方形箱形である。その方位は長軸を南北に向け、東に26度振る。ピットと16世紀第2四半期の土坑SK163、第3四半期の13号墓ST289と14号墓ST295を切り、第4四半期前半の12号墓ST274に切られている。

墓坑全体を一段掘下げると、長方形の木棺の輪郭があらわれた。掘形埋土との境界付近には、ところによって1~2cmほどの厚みの灰色粘土が帯状に広がり、その内側では木質が残存する部分



第4-176 図① 8号墓 ST149 棺蓋出土状態 (1/10)



8号墓 ST149 木棺想定復元図

木棺痕跡

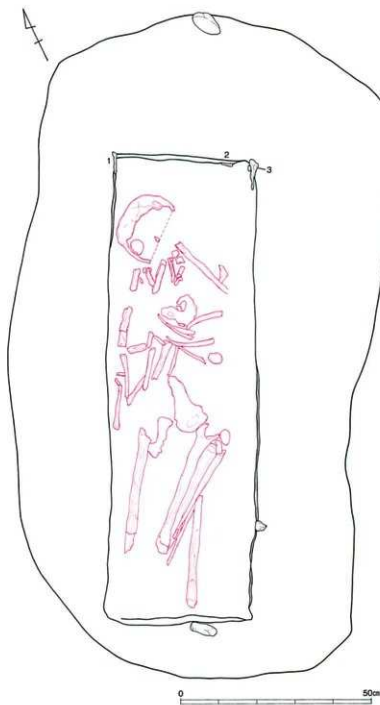
鉄釘

角材痕跡

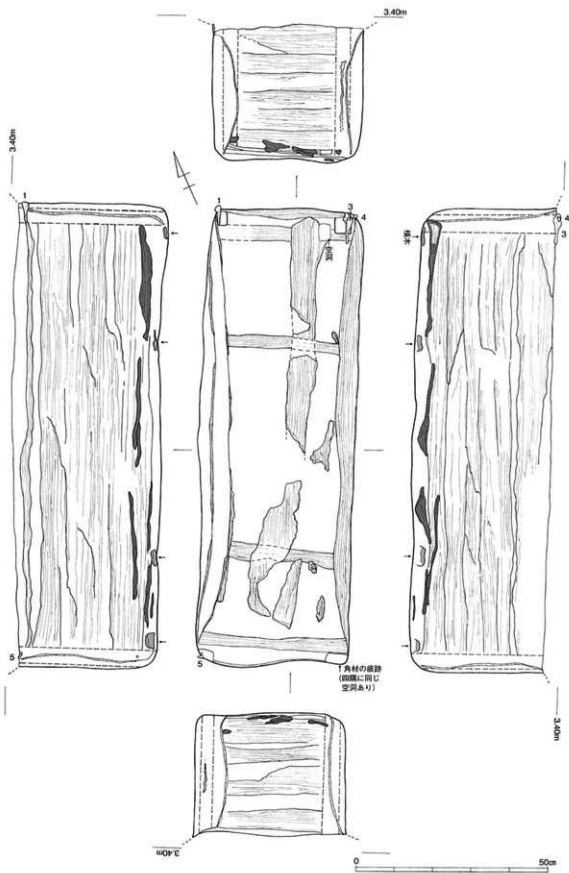
木棺底面

があった。灰色粘土は木質が朽ちた後粘土に置き換わったもので、混じりがなく灰色粘土のみが均一に広がる部分と、空気を含みほささの土に置き換わった部分がある。また北小口の両側に当たる位置から、頭部を北に向けた鉄釘が発見され、長方形の木棺であることがわかった。しかし南小口の内側両側では径3ないし6cmの方形の空洞が見つかり、その部分に角材か何か当てられていたと考えられ、当初は4号墓同様転用棺かと考えられた。しかしその後底部の構造が判明して、専用の木棺であると判明した。木棺内部には空気を含んでほささした灰褐色土が充満していた。掘形埋土は灰褐色粘質土で、ところどころに基盤層に由来する黄色土のブロックが含まれている。

木棺は4号墓と同様に墓坑の南側につめて置かれている。木棺の構造は、小口板、側板ともに一枚板と考えられるが、側板は土圧により内側に大きく歪んでいる。底板は1枚板あるいは複数の板材を差し渡し、その下に4枚の幅3~4cmの横木をあてて固定しているが、間隔は等間隔ではなく中央を大きく開けている。横木と底板の接合に鉄釘をもちいた痕跡はない。棺内4隅には4×3cmほどの角材をあて、小口と側面の両方向から釘により固定している。その角材は底板よりも下に飛び出している。木棺上面検出以降3回にわたって蓋板の崩落状況が認められたので、蓋



第4-176図② 8号墓 ST149 埋葬人骨出土状態 (1/10)



第4-176図③ 8号墓 ST149木棺 (1/10)

板一枚板とは考えにくく、複数の板を並べたものと推定される。北小口近く東側にも底板を貫き横木には及ばない方形の空洞があったが、何であるかは不明であった。

仰臥屈葬
成人女性？

内部には北頭位の仰臥屈葬の成人女性の可能性の高い人骨が一体埋葬されていた。棺内の底面近くまで落下した蓋板の下から人骨の右半身が出土した、ちょうど蓋板に押しつぶされた形である。人骨は調査結果によると仰臥屈葬の成人骨で、頭蓋骨は正面を西にし、頭蓋底を上にした状態で出土した。右上肢を伸ばし、棺の北西側の側壁に沿って出土。下肢は両足とも強く曲げていて、股関節を伸ばして膝関節を強屈した仰臥屈葬と考えられる。蓋板の崩落にともない棺内北西側の人骨は頭部が破損しているものの原位置を保ち、南東側の人骨は南東壁際に移動したものと推定される。女性の可能性のある成年～熟年成人骨である。

副葬品なし

副葬品は皆無であったが、蓋板よりも上の覆土内に京都系土師器片や白磁片が落ち込んでいた。いずれも破片であり、土師器も別個体の破片であるので、葬儀・供養等に使われたものではない。そこに含まれる土師器の大半は、京都系土師器2期の皿の破片である。切合関係とも考え合わせると16世紀第4四半期前半の古い時期にあたと考えられる。

8号墓 ST149 出土遺物 (第4-177図)

鉄釘

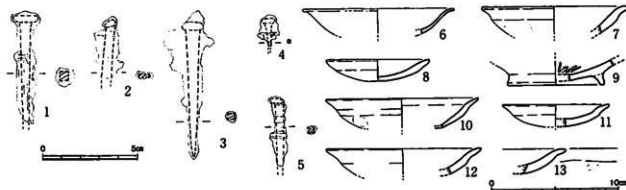
木棺 鉄釘のうち1～3は北側小口に打ち込まれていたもの。残存する木質の方向から、いずれの釘も木棺隅の接合に用いられたものである。木質の痕跡からみて、板の厚さは2cm前後である。1は2寸釘に当たる鉄釘。2は長さ2寸の鉄釘。3は長さ3寸にあたる北小口の鉄釘。4と5は鉄釘。ほかに数点の鉄釘片が出土している。

墓坑埋土からは備前焼夷、土師器の小破片が出土している。埋土に混入していたものである。

埋没後
おちこむ

木棺上の覆土内から木棺の腐朽埋没後に内部に落ち込んだと推定される土器が出土している。6は端反りの白磁皿口縁片。7は京都系土師器2期の皿口縁片。8は京都系土師器2期の小皿片。ほかに底部糸切の土師器杯の破片も含まれている。

この8号墓の上層に当たる第2層中からは以下の土器の破片が出土している。本来第2層中に含まれるもので、この墓に伴うものではないが、覆土中に土器が含まれる理由のひとつである。9は古代の黒色土器A類碗底部片。10は京都系土師器1期の皿口縁片。11は京都系土師器1期の小皿片。12と13は京都系土師器2期の皿口縁片。

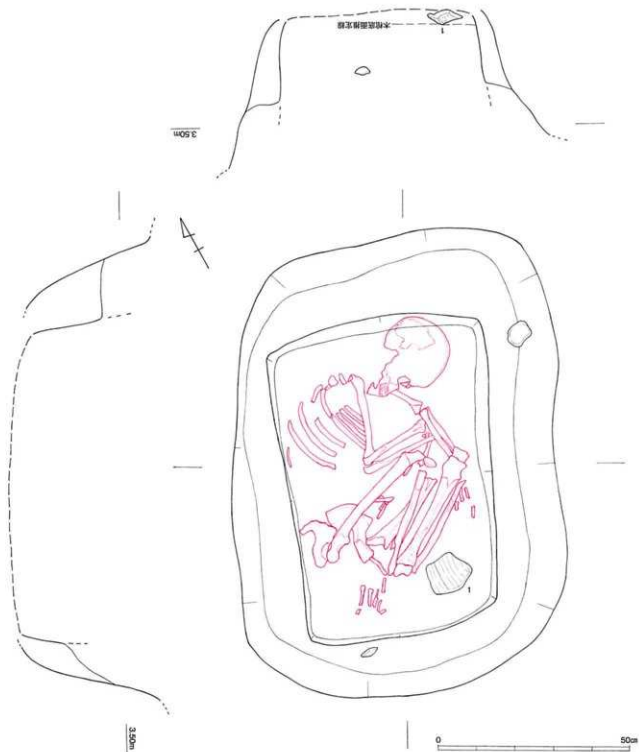


第4-177図 8号墓 ST149 出土遺物 (1～5=1/2, 6～13=1/3)

9号墓 ST152 (第4-178図)

方形木棺

C8区(北2区)の第2層除去後の基盤IV層上面で検出した木棺墓である。S153と15世紀の溝SD255を切る。墓坑は長さ約120cm、幅85cmの不整楕円形で、深さは35cm以上である。東に23度ふった南北方向に置かれた木棺は、長さ85cm、幅55cm、高さ20cm以上の方形に近い長方形木棺である。板材や鉄釘等はまったく遺存していないため木棺の構造は不明である。木棺の東南隅で備前埴摺鉢の破片(1)が底面に張り付くように出土したが、棺内に副葬されたとは考えがたく、木棺を安定させるため下に挟んだものと推定される。墓坑埋土は灰褐色粘質土で、ところどころに



第4-178図 9号墓ST152 (1/10)

成人埋葬

基盤層に由来する黄色土のブロックと小礫が含まれている。4号墓の埋土と変わらない。

内部からは北頭位の左側臥屈葬の成人熟年人骨が東向きの姿勢で一体埋葬されていた。性別は不明である。顔面は南向きで、右上肢はひじを曲げ、下肢は股関節・膝関節を強屈している。覆土内に混じりこんでいた京都系土師器の破片が出土しているが、積極的に副葬品と言える遺物はなかった。

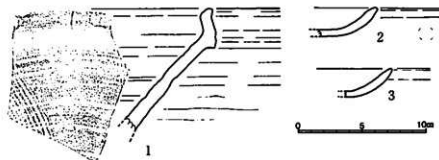
副葬品なし

並列する成人墓のひとつという位置関係から16世紀第4四半期前半の遺構と考えられ、出土した備前焼・京都系土師器の年代も矛盾しない。

9号墓 ST152 出土遺物 (第4-179図)

1は墓坑底部出土の備前焼鐏鉢の口縁部破片。中世6a期16世紀前葉の製品で、スリ目は放射状である。ほかに墓坑埋土からは、備前焼甕の底部片が1点出土している。

木棺腐朽後に流れ込んだ覆土中に、次の京都系土師器の破片が含まれていた。2は京都系土師器2期の皿口縁片。3は京都系土師器2期の小皿口縁片。



第4-179図 9号墓 ST152 出土遺物 (1/3)

10号墓 ST260 (第4-180図)

C8区(北2区)の基盤層上面で検出した小型の木棺墓である。墓坑は最底面に近く、明瞭な形は判明しなかった。15世紀の溝SD259を切る。調査は最初に人骨頭蓋骨が見つかり、周囲を掘下げると木棺痕跡が発見された。深さ10cmほどしか残っていなかった。9号墓の北側に直交して配置され、長軸を21度振り東西方向に置かれた木棺は長さ90cm、幅28cm、高さ10cm以上の長方形木棺である。

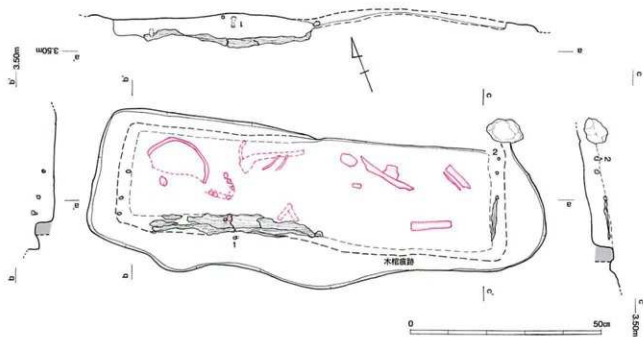
小型長方形木棺

南側側板と東側小口に木質が残る。南北両小口にそれぞれ4箇所、先端を上に向けた鉄釘が出土し、南側板にも底部から上に向けて釘留めした跡が残るので、小口板と側板両方を上に載せる底板を本来持っていたものと推定される。

伸張葬

伸張葬の人骨1体が出土し、下顎がはずれあるいは頭蓋骨が北側に移動している。木棺の形態と規模から見て幼児の伸張葬と推定される。頭骨の位置から頭位は西である。木棺に使われた鉄釘が発見されたが、副葬品等の遺物は出土しなかった。人骨からは、性別不明の3才前後の幼児と推定されている。9号墓の存在を前提にして木棺の埋葬位置と方向が決定されていると考えられるので、9号墓より新しい16世紀第4四半期前半の墓と考えられる。

3才前後の幼児

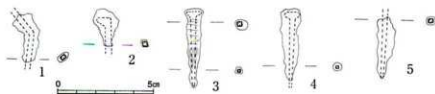


第4-180図 10号墓 ST260 (1/10)

木棺に関わる出土遺物 (第4-181図)

鉄釘

1と2は鉄釘。3～5は長さ4cmほどの鉄釘で、出土位置は不明。ほかに出土遺物なし。



第4-181図 10号墓 ST260 出土遺物 (1/2)

11号墓 ST257 (第4-182図)

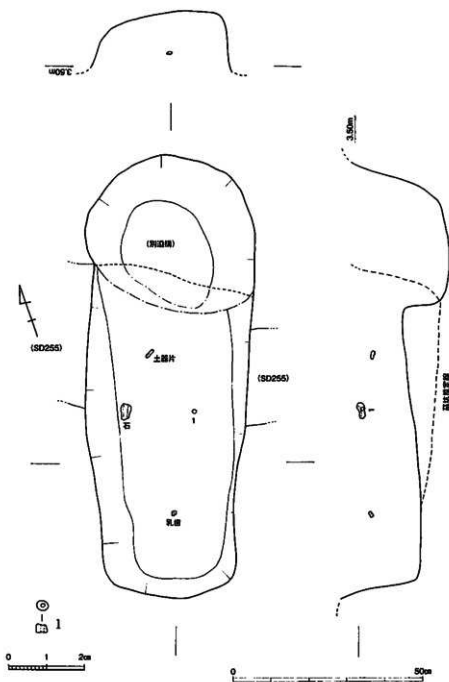
土坑墓?

ガラス玉
幼児埋葬

C7区(北2区)の基礎層上面で検出した小型の墓で、木棺痕跡は検出できなかった。15世紀の溝SD255を切り、S153に切られる。9号墓の西側に並行して南北方向に掘られた墓坑は、長さ85cm、幅35cm、深さ20cm以上で、長軸方向は真南北から東に18度振る。木質・釘等は遺存していない。人骨も残っておらず乳歯が1本出土したのみである。中央からガラス小玉1点が出土した。これは副葬品と考えられる。乳歯が南側から出土したので頭位を南にした幼児埋葬と推定される。10号墓と同じく9号墓の存在を前提にして埋葬位置と方向が決定されていると考えられるので、9号墓より新しい16世紀第4四半期前半の墓と考えられる。

11号墓 ST257 出土遺物

副葬品 1は径3mm、幅2mmの淡いブルーのガラス小玉。ほかに埋土中より底部糸切の土師器の破片が出土している。



第4-182図 11号墓 ST257 (遺構 1/10・遺物 1/1)

12号墓 ST274 (第4-183図)

方形木棺

C8区(北2区)の第2層除去後に検出した幼児埋葬の方形木棺墓である。南半は溝SD294と重複していたため掘りすぎ、そのため墓坑の掘形は不明瞭である。南北方向に置かれた木棺は長さ65cm、幅35cm、深さ20cm以上の長方形木棺である。16世紀第4四半期前半の8号墓ST149と15世紀の溝SD255を切る。埋土は灰褐色粘質土のぼさぼさした土。木質等は遺存していない。足元に京都系土師器の破片(2)が出土しているが、レベルが高いため、この墓に伴うとしても副葬品とは言いがたく、埋土に混入したものである。

埋葬

内部には北頭位の左側臥屈葬の幼児が東向きの姿勢で1体埋葬されていた。性別不明の1~2才

1~2才の幼児

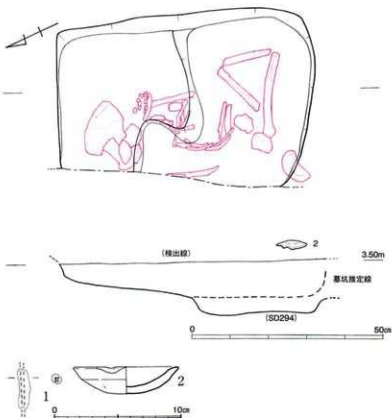
前後の幼児骨である。東に顔面を向けた左側臥屈葬である。下肢は股関節を強屈している。

ほかに埋土中から1点の鉄釘片(1)が出土しているが、木棺に伴うかどうか不明である。8号墓の存在を前提にして埋葬位置と方向が決定されていると考えられるので、8号墓より新しい16世紀第4四半期前半の墓と考えられる。

12号墓 ST274

出土遺物

1は鉄釘片。2は京都系土師器2期小皿の2分の1片。口縁に1箇所打ち欠きがある。ほかに古代土師器杯の破片が出土している。

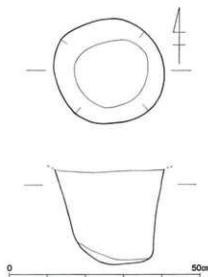


第4-183図 12号墓 ST274 (遺構 1/10・遺物 1/3)

18号墓 ST290 (第4-184図)

土坑墓?

C8区(北2区)で検出した径28cm、深さ25cmの平面円形の小土坑である。調査時は墓としなかったが、内部から人骨の破片が出土している点から墓の可能性が高いと判断した。出土遺物はない。9号墓の側で10号墓・11号墓の幼児墓のなかに掘られているので9号墓以後のその関係者の墓と考えられる。9号墓の存在を前提にして埋葬位置と方向が決定されていると考えられるので、9号墓より新しい16世紀第4四半期前半の墓と考えられる。



第4-184図 18号墓 ST290 (1/10)

4 墓地のまとめ

2001(平成13)年度に木棺墓が1基が発見され、その発見地点は地籍図による復元研究からイエズス会府内教会の敷地内と推定された場所であった。木棺の中からは①伸展葬・②腕を交差させた成人骨が発見され、③木棺の作りが高槻城キリシタン墓の構造(底面が覆状)がよく似るという以上3点の特徴から、キリシタン墓の可能性があることが指摘された。しかしなおその時点では単独の出土であり、宅地区画内の単独墓である可能性も残されていた。2002(平成14)年度の調査では、周囲にさらに17基あわせて18基の墓が発見され、④墓の配列は南北方向・北頭位の埋葬を東西に列状に並べる点でも、高槻城キリシタン墓地と類似することが判明した。成人埋葬はいずれも木棺墓である。ただし埋葬姿勢においては半数に屈葬が認められる点、6歳以下の幼児埋葬が多い点で異なっている。特に埋葬姿勢からみて、被葬者がキリシタンであったとは必ずしもいえないことが明らかとなった。

3時期

以上の知見は調査時点の総括であるが、報告を終えてあらためて以下にまとめると、墓地全体は3期に区分できる。

墓地第1期(第4—156図)の墓は、3号墓ST268の1基のみである。出土した副葬土師器から埋葬の時期は16世紀第2四半期にさかのぼる。桶を利用し熟年男性の可能性高い成人が埋葬され、土師器皿3枚が副葬されている。その所在する場所も厳密に言えば、西区の区画Aに当たり、第2期以後の墓地とは区画をこにしている。おそらく16世紀前半に存在した東西道路に面した区画の中に葬られた単独墓と推定される。したがって1553(天文22)年のイエズス会府内教会設立以前の墓であると考えられる。

墓地第2期(第4—158図)の墓は、第3期の8号墓の周辺に集中する8基からなる一帯である。横にしたL字状に並ぶようにも見えるが、それ以上の規則性はない。すべてが8歳以下の幼児埋葬であり、木棺・桶等の埋葬施設を使用した例は、東半に並ぶ5号墓・6号墓・7号墓の3基のみである。西側に群集する13号墓・14号墓・16号墓・17号墓は土坑に直葬されたものと推定され、

注1 高橋公一編「高槻城キリシタン墓地」(高槻市文化財調査報告書22)2001高槻市教育委員会

高橋公一氏(高槻市教育委員会文化財課、高槻市立埋蔵文化財センター技師)に2002(平成14)年7月1・2日(月・火)、現地にて7月1日現在の調査状況を説明して、墓地を中心に所見をうかがったところ、次の指摘をえた。

- ① 1号墓ST130の長方形木棺墓は、高槻城キリシタン墓に非常によく似ている。特に棺底が覆状になっている点は、類似の例が高槻城キリシタン墓にも多い。
- ② 1号墓ST130の木棺規模は大型だが、高槻城キリシタン墓群のなかの最も大きいグループと同じくらいであるので、必ずしも飛び抜けて大きいわけではない。
- ③ 副葬品が少ない点は、高槻城キリシタン墓でも同じである。30数基のうち本製ロザリオが出土したものは1基のみで、それも副葬品というよりは身に付けていたものである。それよりも、六道線や土師器副葬がほとんどない点を注目すべきだろう。
- ④ 東京都千代田区八重湖北口道路で、最近17世紀はじめごろのキリシタン墓群が発見されており、その埋葬施設も長方形木棺の伸展葬であり、身につけていたメダイとロザリオが出土したのみで副葬品はない。江戸と高槻のキリシタン墓が、長方形木棺を採用し伸展葬をとる点からみると、中世大友府内町跡10次の1号墓ST130例もキリシタン墓の特徴といえる可能性がある。(今野春樹編「東京駅八重湖北口道路」2003、森トラスト株式会社・千代田区東京駅八重湖北口道路調査会)
- ⑤ 成人墓が4基頭位を北にそろえて並んでいる点は、高槻城キリシタン墓と類似する。
- ⑥ 墓の中に伝統的な型い方形棺や屈葬が多いが、当時のイエズス会は現地順応方式の布教を行っており、埋葬姿勢までキリスト教風でなくてもよいのではないかと。

注2 田中良之氏(九州大学大学院教授)等による埋葬人骨の2002(平成14)年6月30日～7月3日(日～水)現地調査時点での所見は①全体的な墓地の印象として家族墓というより集団墓地のようにみえる。②成人墓と幼児墓(6歳以下)ばかりで、小児墓(7～15歳)がほとんどない。というものであった。

1560年代

15号墓のみが掘形の輪郭から木棺利用の可能性がある。埋葬姿勢は5号墓・7号墓と16号墓が埋葬、6号墓・13号墓が側臥屈葬であり、伸展葬は確認できない。北頭位が多いが西頭位もあり、必ずしも一定しない。副葬品を伴うのは14号墓の土師器小皿1点のみであって、灯明皿がそのまま副葬されている。第3期の墓が長方形の木棺墓を一定の法則性を持って配列するのに対し、第2期の墓は東西数m程度の狭い範囲に次々と8歳以下の幼児と小児を葬ったもので、特に2才以下の乳幼児が多い。ただし墓坑同志の切欠関係がないところからみて、埋葬場所にある程度の余裕があり、土殿頭や木製標識等の地上施設が存在したものと推定される。埋葬がおこなわれた期間も、当初の墓の位置が記憶されている程度の短期間であった可能性が高い。後述するように第3期の墓の年代が、一部16世紀第3四半期にさかのぼる時期から第4四半期前半と考えられるので、第2期の墓は第3四半期の1560年代を中心とする時期と推定される。上限はイエズス会府内教会設立の1553(天文22)年以後である。

成人墓

墓地第2期に対応する16世紀第3四半期の周辺の遺構は、北側にはなにもない空地がひろがるようで、なんらの区画施設もない。南側には道路SF151の側溝SD165があり、第1および第2矢板列の水路が機能していた時期にあたる。したがって第2期の幼小児墓地群は道路によってさえぎられた区画の南端に設けられたものと推定される。

寺岡岡列状配列

墓地第3期(第4—167回)は規則的に配列された5基の成人墓と、その成人の周囲に配された4基の幼児墓からなる。18号墓を除くすべての墓が長方形の木棺を埋葬施設としている。1号墓・4号墓・8号墓・9号墓の4基は、やや東に振る南北方向に木棺を配置し、北頭位で被葬者を安置する成人埋葬である。東西に西から1号墓・9号墓・8号墓・4号墓の順に、2ないし3mの間隔をあけて葬られ、2号墓は1号墓の北に直列して配置されている。この5基はいずれも長方形の木棺を使った成人埋葬と考えられるが、4号墓は唐櫃を棺に転用している。1号墓が伸展葬で2号墓もその可能性があるが、4号墓・8号墓は側臥屈葬・9号墓は側臥屈葬である。木棺も屈葬を意識した長さの短いものを利用している。さらに9号墓の周囲には幼児を伸展葬で葬った10号墓と11号墓、さらにそのあいだに18号墓が配されている。10号墓は3才前後の幼児を長方形木棺を用いた伸展葬で、頭位は西向きである。11号墓は土坑墓ながら伸展葬で葬った可能性が高く、頭位は南向きと考えられる。18号墓は小さな円形のピットに埋葬されており、おそらく幼児でもさらに小さな乳児を埋葬したものと推定される。8号墓の横にも1〜2才前後の幼児が屈葬された12号墓が葬られていた。熟年成人埋葬の9号墓を中心とした周辺3基の幼児埋葬の一群と、成人女性埋葬の8号墓と幼児埋葬の12号墓からなる一群は、いずれも、なんらかの血縁関係者を葬ったものと推定される。副葬品は11号墓の幼児埋葬に伴ったガラス小玉1点のみであった。

9号墓周辺

木棺腐朽後の陥没土やその上位から出土する遺物は、基本的に京都系土師器2期の皿で、最新の4号墓で京都系土師器3期皿の破片が出土する。さらに墓地終焉後その上を覆った第2層からは絵唐津皿、彫三鳥碗など1590年代の遺物が出土している。第3期墓地の始まりは京都系土師器3期皿が出現する16世紀第4四半期以前の第3四半期にさかのぼり、墓地終焉後の1590年代には埋葬が行われていないと考えられる。したがって第3期は1560年代まで遡る含みを残した1570年代から80年代の墓地と推定される。

8号墓周辺

なお第3期の墓地が存続していた時期の南側には道路状遺構SF151があり、その側溝はSD250ないしSD270が対応する。それまでより道路側溝の位置が南に移動したため、1号墓がかつての側溝であるSD165の掘形に切り込むように埋葬されている。SD250は水路機能を喪失して単なる区画の溝になり、いっぽう墓地の北を圍すように溝SD131が掘られている。その溝と道路SF151に挟まれた空間に第3期の墓が並んでいたものと推定される。ほかに墓地に関係のある可能性のある遺構として土坑SK156がある。この土坑は8号墓そばの敷地南端ギリギリに掘られたもので、その形態と遺物出土状態から廃棄物処理土坑すなわち、墓地に関わるごみ捨て穴と推定される。

1570～1580年代

道路と墓地

北を区画

地上遺構	ところで中心となる成人墓同志の切合関係がないところからみて、埋葬位置があらかじめ決定され、土饅頭や木製標識等の地上施設が存在していたものと推定される。墓標として石製品の存在も考慮されるので、周辺の遺構や整地層内から出土する石材を点検したが、キリシタン墓碑になるものは見出せなかった。かわりに五輪塔の石材が廃棄されたり再利用されている例が多数存在したが、これはこの調査区特有の現象ではなく、16世紀全般の中世大友府内町跡全体で普通に見られる現象なので、この墓地の墓標に使われたものとはいえない。
第3期の調査	墓地の構成。さて第2期と第3期の間には墓地の構成において大きな違いがある。幼児群集墓から成人配列墓群への変化である。それを機会に墓地の北には区画の溝としてSD131が掘られ、一方南側の道路との境界も、それまでの水路が付け変わっているので、墓地を内にくむ施設全体の整備の一環として墓地の構成が変わったものとみとめられる。大きな画期である。
伝統的墓制 葬儀	墓地の性格。埋葬姿勢に埋葬が多く、木棺もそれに合わせた丈の短い長方形木棺を用いる例が多いという日本の伝統的な中世墓の特徴を備えているが、副葬品に六道銭が一例もなく、土師器の副葬も例外的である。一方16世紀当時、中国人墓をのぞけば列島において実例がきわめて少ない埋葬が成人と幼児ともに存在している。このように発掘資料そのものから墓地の性格を判定することは限界がある。しかし重要なことは、①第2期と第3期の墓地は16世紀後半の年代に収まることである。造構の構築順序からみて、墓地の上限は16世紀第3四半期、下限は1590年代以前であり、府内教会の存続時期である1553(天文22)年から1587(天正15)年とほぼ一致する。②大半が木棺墓であって、道路北側に同一種類の埋葬をくりかえす墓地が広がることが判明した点にある。中世大友府内町跡のこれまでの調査では、墓はすべて単独墓であり、墓地は未発見であった。それは都市という性格上、墓地は本来仏教寺院などの宗教施設の境内あるいは都市域外の郊外に設けられたとみとえられる。この第10次調査区の墓地は「中町」の背後にあり、中世府内の都市域内に存在することから、なんらかの宗教施設の境内に設けられたもの、あるいは宗教施設が管理する集団墓地であると考えざるを得ない。そして府内古園を借用する限り、この場所に墓地を設けうる宗教施設は、「顕徳寺・ダイウス堂」と記された施設すなわち、イエズス会府内教会である可能性がきわめて高い。最も近い仏教寺院である南側の祐向寺とは道路と大溝に隔てられており、さらに10次南調査区の道路南側には遺構の少ない空地がひろがって、その南には屋敷地が存在する可能性が高く、少なくとも祐向寺が道路に接して存在していた可能性は少ない。
墓地の存続年代	
宗教施設内	以上のような墓地の存続時期と墓地の位置と状況からみて、今回中世大友府内町跡第10次北調査区で発見された第2期と第3期の墓地は、直接的証拠(キリシタン遺物など)には欠けるものの、戦国時代の豊後府内にあったイエズス会府内教会(顕徳寺あるいはダイウス堂と表記)の敷地南端に設けられた墓地である可能性が極めて高い。
「顕徳寺・ダイウス堂」	
府内教会	

註3 中世大友府内町跡第7次調査E地区とF地区の単独墓が報告されている。

田中祐介編『豊後府内3』（大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告8）2006

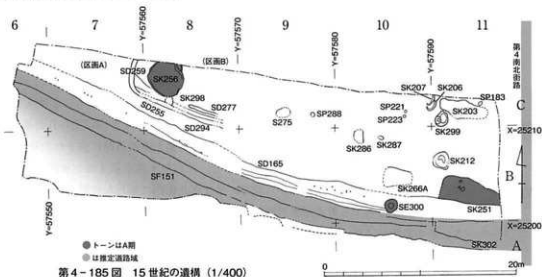
第7節 小結

1 15世紀以後の第10次北調査区の遺構の変遷

中世から近世の調査区の変遷をまとめ、末尾でその画期を考察する。

15世紀(第4-185図) 道路状遺構SF151と水路SD165の建設の以前と以後で2時期に分けることができる。以前をA期、以後をB期とすると、東西道路SF151建設以前にあたる15世紀A期には、井戸SE300や大型廃棄土坑SK251やSK256をともなう居住空間が分布している点が注目される。A期には第4南北街路の南端に近いこの付近に15世紀代の居住空間が広がるようになり、次の15世紀B期には第4南北街路とそれに接続する東西道路(第7硬化面)が建設され、それに伴い道路の北に接して水路である溝SD165が掘削され第4矢板列が設置される。それらB期の遺構が井戸SE300や大型土坑SK251を切っているところからみて、道路SF151の建設は、居住空間の移転・区画の変更を伴っていたと考えられる。それまでとは異なる街路整理すなわち都市計画の施工が、B期になされたと推定される。

同時に東区ではB期にもそのまま町屋が引き継がれるが、道路の北側の第4南北街路からみれば屋敷地の裏側に当たる位置に、方形区画の溝(区画B)と考えられる小溝群(SD259・SD227・SD294)が掘られている。おそらく東西道路SF151の建設に伴って、道路に面した区画Bが設定されたものと推定される。A期は土師器の型式から15世紀前半から後葉、B期はロクロ目土師器以前の15世紀後葉から末と推定される。この時期の画期はB期の東西道路の建設とそれに規制された屋敷地が造られたことである。



第4-185図 15世紀の遺構 (1/400)

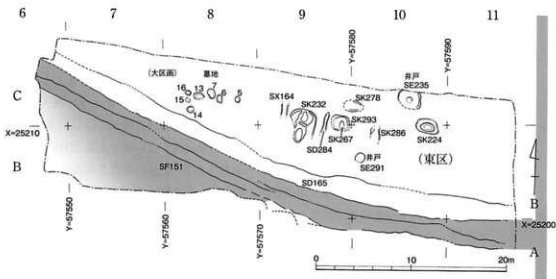
16世紀第1四半期(第4-186図) 道路SF151とその側溝SD165は、第7硬化面と第4矢板列をともなう水路がこの時期まで同一の位置に維持される。東西道路の最大幅は約8mである。道路状遺構SF151の南側では、並行するように廃棄土坑が3基以上つきつぎと掘られている。道路南側では廃棄土坑を連続して掘るような比較的大きな宅地が成立したものと考えられる。区画Aは踏襲され、そこに方形の巨大な土坑SK247が掘られ、その後も同じ位置に溝SD303が掘られている。道路側溝SD165と並行し、略方形の区画が道路にそって新たに設定されたことを示している。この区画Aは15世紀後半～末の東西道路建設時に同時に建設された溝群SD259・SD277・SD294・SD255で区画された方形の敷地(区画B)のさらに奥に当たる位置が開発されたことを物語っている。

東区の第4南北街路と東西道路に挟まれた角地には、南北方向の溝SD239=SD245で区画されたゆがんだ方形の地片が成立し、その西南隅には祭祀行為が行われた可能性の高い土坑SK266Bが掘られ、内部にはSD176、SD197、SD208を基礎の一部とする建物が作られていたと推定される。壁の方向から見て第4南北街路に面する屋敷地であったと推定される。

16世紀第3四半期（第4-188図）道路状遺構SF151とその側溝SD165は、道路の硬化面を2度更新（第5・4硬化面）し、水路は矢板の打ち替え（第2・1矢板列）を行いつつ、この時期にも同じ位置に維持されるが、厳密にみれば矢板列はさらに南側に移動している。いっぽう南側では遺構がなくなる。

西区の第1四半期以来の区画Aにはこの時期の遺構がなく、北2区の区画Bにあたる場所では、幼児の墓が営まれるようになる。おそらく区画A、区画Bと言う区別がなくなり、ひとつの大きな区画の東南隅に幼児墓が営まれるようになったものと考えられる。

第1・2四半期に引き続き、東区の第4南北街路と東西道路に挟まれた角地には、奥行き30mほどの屋敷地が継続する。しかし井戸や廃棄土坑の位置が以前より西に移動し、溝SD284が屋敷地の背後を画する溝とみられる。この角地は引き続き町人屋敷として利用されたものと推定される。全体として第3四半期になっても道路や屋敷地の区画に大きな変動はないが、道路北側の区画に墓が現れることが大きな第2の画期である。



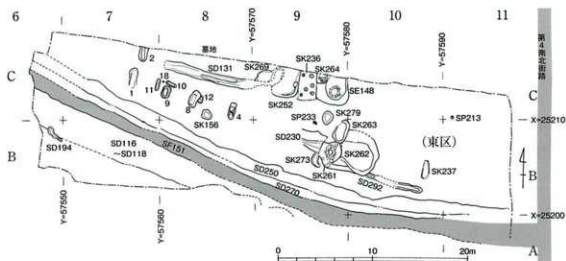
第4-188図 16世紀第3四半期の遺構 (1/400)

16世紀第4四半期前半（第4-189図）道路状遺構SF151は引き続き路面を更新し維持されるが、道路の北側側溝はSD165から溝SD250さらにSD270と掘りなおされている。掘り直すたびに側溝は南側に移動する。ところが溝SD165の時代とは異なり、SD250以後は矢板で護岸を強化しなくなる。いっぽう同時にそれまでSF151の道路面であった南側に、かなり大きな溝SD118、SD117、SD116が順次掘りなおされていく。つまり道路状遺構SF151には第3四半期までは南側に側溝がなかったのに、この時期から両側側溝となるのである。水路としての機能は北から南に移るようで、道路幅も広くて2mほどに狭くなったと考えられる。

第3四半期に幼児の墓が集中した北2区は、南北方向に棺を向け等間隔に成人墓を配する墓地に整備され、その北側には墓地とその北側を画す溝SD131が掘られている。したがって道路の北側に、成人墓とその家族の墓地が配されたものと推測される。

第3四半期に引き続き東区の第4南北街路と東西道路に挟まれた角地には、屋敷地が継続する。しかし井戸や廃棄土坑が数多く掘られるばかりでなく、道路に並行してSK230、SK261、SD292と連なる排水遺構が敷地の南辺に作られている。

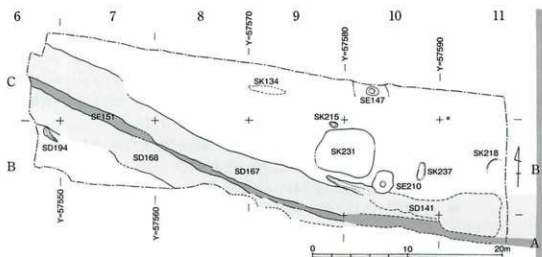
全体として第4四半期になっても道路の位置や区画に大きな変動はないが、各区画のなかではそれぞれ遺構の内容に変化があり、遺構の密度が最も高いのがこの時期である。



第4-189図 16世紀第4四半期前半の遺構 (1/400)

16世紀第4四半期後半 (第4-190図) 16世紀第4四半期後半代と考えられる遺構は減少する。東西道路の北側にあたるC7区付近の西区においても第4四半期前半に続き遺構がないが、その道路をはさんだ南側のC6,7の南区も遺構が少ない。道路状遺構SF151は引き続き維持されるが、SD270とSD116の両側側溝は埋没し、SF151の両側は浅く広い溝であるSD167とSD168が存在する。その底面自体が道路面として機能した可能性もある。従来の埋設道路幅は1m程度まで狭まっているが、SD167とSD168までが道路面とすれば、その幅は6mほどとなる。

この時期になると墓地が終焉していることが、1号墓ST130がSD167にきられていることからわかる。かつて墓地の敷地であったところの一部が、溝あるいは道路敷きになっているのである。C11～B11区付近の本来第4南北街路に面した東区も遺構が少ないままであるが、井戸や土坑や溝が存続するので、おそらく島津侵攻後と考えられるこの時期に、中町においてもある程度の町屋の復興が行われたことを示している。北2区の墓地は埋葬がなくなり、イエズス会府内教会が廃絶する時期とほぼ合致している。

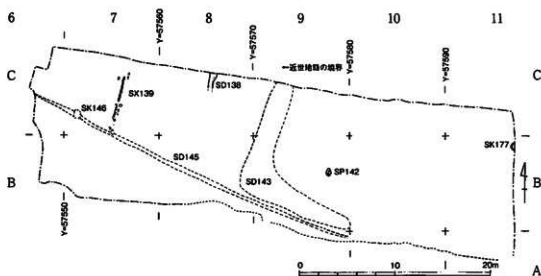


第4-190図 16世紀第4四半期後半の遺構 (1/400)

17世紀初めの
整地

水田化

近世(第4-191図) 溝SD138と土坑SK177は唐津焼陶器碗の出土から17世紀初頭としたが、16世紀末の最後に作られた遺構とみなすこともできる。その前後に調査区全体は第2層の整地がなされている。この整地層の最下部からは絵唐津皿や彫三島碗などが出土するから17世紀の初頭、あるいは1590年代にさかのぼって中世都市府内が廃絶した直後に行われたものと考えられる。そしてこの整地は都市を再建するものではなく、これをもってこの場所は住居遺構の終焉を迎えている。その後この付近は石列SX139で土地の段差が作られたように一旦畑地化されたようであるが、その後水田開溝SD145が掘られて18世紀には水田化されている。その境界はおそらく16世紀の都市の区画をそのまま踏襲し、地籍の境界となっている。



第4-191図 近世の遺構 (1/400)

2 遺構の画期

15世紀A期

第1の画期 次のように6つの画期が存在する。9世紀以来途絶えていた遺構が、15世紀の前半に再び出現するのが第1の画期である。15世紀A期とした遺構群である。この付近に集落あるいは中世都市府内の広がりに含まれるようになる時期である。遺構は井戸や廃棄土坑であるので宅地が展開したものと推定される。この時点で第4南北街路まで存在していた証拠は存在しない。

15世紀B期
道路建設

第2の画期は東西方向の道路SF151と道路開溝のSD165とが、東西に自然地形に沿って作られた15世紀B期である。この道路は第4南北街路と同時に建設されたものと推定される。大分市教育委員会による第4南北街路の調査においてもその建設時期は15世紀後半と考えられており、その調査成果と一致する。また昨年報告された第7次・16次調査の成果によれば、第1南北街路における戦国時代道路面の最初の時期は15世紀末から16世紀初めと報告されている^{1,2}。実年代観において微妙な違いがあるが、第1南北街路と第4南北街路の建設は15世紀後半あるいは末にさかのぼり、ほぼ同じ時期にあたると思われるので、この第2の画期は、中世都市府内全体の画期の一環であったと考えられる。そして第4南北街路に面した遺構配置をとる屋敷地が存在したものと考えられるので、この道路建設によってその後「中町」とされる街路と屋敷地が第4南北街路に面して設けられたものといえる。

都市整備
「中町」

註1 中世大友府内町跡第26次、27次、32次、39次調査の成果による。

佐藤道文・五十川雄也・松尾聡・服部真和「大友府内Ⅷ」(大分市埋蔵文化財発掘調査報告65)2006、大分市教育委員会

註2 田中裕介編「豊後府内Ⅲ」2006、大分県教育庁埋蔵文化財センター

- 第3の画期は16世紀第3四半期の墓地の始まりと、それにさきだつ区画の変更である。16世紀前半までは東西道路の北側には区画Aと区画Bという細かい区画が存在したが、第3四半期にはこの区別がなくなり、中町の町屋の背後には東西道路に面した比較的広い区画が出現し、その区画の東南隅に幼児墓地が営まれることになるのである。墓地が都市の領域内に作られるには宗教施設が存在が前提になる。府内古園との対比から見ると第1章第6節で述べたように、この場所において宗教施設にあたるものは顕徳寺=ダイウス堂以外にはないのである。したがってこの敷地の変更と墓地の出現は、1553(天文22)年のイエズス会府内教会の建設、1555(天文24)年のアルメイダによる育児院の設立、さらに1556(弘治元)年の教会敷地の拡大、1557(弘治2)年の病院の建造と1559(永禄2)年の病院の拡充といった、1550年代の府内教会の整備にともなう教会施設の変遷と関連してくるものと想定される。
- 第4の画期は道路が狭くなり南側に水路(SD118)が移る16世紀第4四半期前半である。実年代については1570年代あるいは、ややそれを遡る可能性もある。水路が南側に付け変わるの第3四半期以来の北側側溝(SD165第2矢板列⇒第1矢板列⇒SD270⇒SD250)が改修されるたびに南側に移動した結果である。最も南に北側側溝が移動した時期には道路幅は2m程度で、しかもSD250は水路機能もたない単なる道路と北側の区画との境界溝になっている。このような北側側溝の推移は、北側の敷地が南側に張り出したことを意味し、かつ水路を南側に移さなければ排水できないほど北側敷地の高さが増したことによると考えられる。このような敷地の拡大とわずかが高燥化する動きは16世紀第3四半期のSD165第2矢板列への改修時点から始まっており、この第4の画期の時点で頂点に達している。以上の変化は道路SF151北側の墓地を含む教会施設の整備に伴う現象であり、この時点で墓地が成人墓地にかわることもその一環であろう。府内教会が最大の規模に達した1580～87年のコレジオ併設期に先立って、すでに教会施設が整備されていると推定される。
- 第5の画期は墓地の終焉と道路の復興が行われた16世紀第4四半期後半である。1号墓ST130の掘形南端を切って道路あるいは側溝のSD167が掘られているので、墓地が終焉し、その後再び道路が整備されていることは明確である。これは1587(天正15)年の島津侵攻による府内占領と教会の退去によるものと見られる。1587(天正15)年の豊臣秀吉による九州攻めの際には、府内教会の施設が島津氏との交渉使節木食上人の宿舎になっているので、戦争による消失をまぬかれていることがわかる。そのため第10次調査区では火災層を見出すことはできないが、墓地の終焉と道路の再整備という遺構の推移とそれらの遺構の上を直後に覆う第2層のなかに1590年代以後の遺物が含まれることから、1587(天正15)年の戦災とその後の復興という経過と遺構の変遷とが一致するものと考えられる。
- 第6の画期は、都市遺構が終焉する17世紀初頭である。復興後にも中町の屋敷地は存続しているが、その後生活遺構がなくなり、近世になると畑地と水田に変化することは第2層以上の遺構から明らかである。これは1602(慶長7)年以後の近世府内城下町への移転という記録と一致する。中世都市府内の終焉である。

註3 五野井隆史「豊後府内の教会領域について—絵図・文献史料と考古学資料に基づく府内教会の諸施設とその変遷—」『東京大学史料編纂所研究紀要』14、2004 東京大学史料編纂所

3 木棺に転用された唐櫃について(第4-192図)

唐櫃

墓地のなかで最新の埋葬である4号墓ST150では、埋葬施設の木棺が当時の家具である唐櫃を転用したものであると報告したが、その復元の根拠となった車長持の参考資料を示す。2002年8月27日に墓地の調査を担当した調査員の山崎文子が、当時所蔵されていた旧愛媛県立歴史民俗資料館(松山市福之内)で、撮影したものである。

車長持

第4-192図は4号墓ST150の木棺復元図と、愛媛県松山市室町に伝わった近世前期の車長持を上下に対比させている。この長持は近世初頭まで使われていた唐櫃から近世後期の長持への変化の中間形態をしめすものである。本来唐櫃は長方形の蓋付きの箱を本体にして、その側面と小口に通常6本の脚を外側に取り付けるものである。一方通常の長持はその脚が省略されて大型化し、担い棒を通して移動させるつくりである。この松山市室町に伝わった車長持は外面に唐櫃の脚にあたる角材が取り付けられているが、下部の先端は地面に達せず考古学でいうところの痕跡器官になっている。一方かなり大型化している点では近世後期の長持に近くなり、把手で持ち上げるのは困難なので、移動のために下部に筒状の車輪が前後に取り付けられている。まだ担い棒を通す構造になっていない点で近世後期の長持が完成する以前の段階をしめしている。

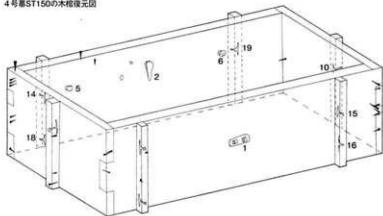
金具の比較

この車長持と4号墓ST150の木棺復元図を比較すると、棺の外側に脚に当たる角材が取り付けられている点で、形態が共通し、金具をみると出土品1は車長持本体と蓋と閉じたときの錠前を通す組み合わせ金具の本体取り付け部分に当たる。出土品5と6は本体と蓋を接合する蝶番金具の本体に取り付けた金具にあたる。また4号墓ST150の木棺の脚に当たる角材の接合に使われた先端が二股にわかれT字形にひらいて出土した多くの金具(7、10、11、12、14～16、18、19)は車長持の把手金具や円環取付金具の先端部と同じ形態である。出土品2の金具のみが対応するものがなく用途不明である。釘の向きと位置から復元される小口板と側板の接合方法も一致する。

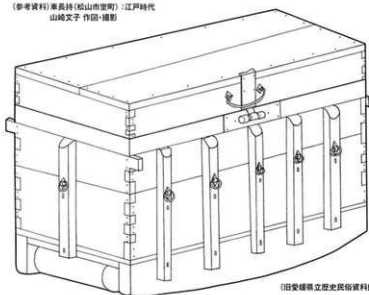
転用状況

以上の形態と金具の一致から想定される唐櫃の棺への転用状況は次のようなものである。おそらく蓋を取り外した唐櫃の本体を棺身とし、脚の本体より下に延びる部分は切り取って棺身として使用したものと想定される。うちつけた釘の存在から見て、蓋は別の板材を利用していると推定される。

4号墓ST150の木棺復元図



(参考資料) 車長持(松山市室町)：江戸時代
山崎文子 作図・撮影



(旧愛媛県立歴史民俗資料館所蔵)



扉蓋の金具(5-6に対応)



T字形鉄の内側(7など)



把手の金具



全 景



扉蓋-金具(1に対応)

第4-192 図 江戸時代の車長持

第5章 自然科学的分析

第1節 中世大友府内町跡第10次調査区出土人骨について

舟橋京子*・田中良之**

* 九州大学大学院人文科学研究院

** 九州大学大学院比較社会文化研究院

1. はじめに

大分県大分市中世大友府内町跡第10次調査区において中世墓地から人骨が出土した。そこで、同県教育委員会から九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に人骨調査の依頼があり、舟橋および岡崎健治・板倉有太が現地における発掘・観察・取り上げを行った。その後、人骨は九州大学に搬送され、本講座において整理・分析を行った。以下にその結果を記載・報告する。なお、人骨は九州大学大学院比較社会文化研究院考古人類学資料室に保管されている。

2. 人骨出土状態

[1号墓ST130] (第4-168図)

方形の木棺内中央より西側から人骨が出土している。本人骨は頭位を北にし上肢を軽屈した伸展葬である。上肢は左右ともに肘関節を屈曲し回内した状態で出土しており、胸の前で前腕部を交差させている。下肢骨は、大腿骨・下腿骨ともに長軸が木棺の長軸にやや斜行していることから、若干膝関節を曲げた状態で埋葬されていたと考えられる。

[3号墓ST268] (第4-157図)

早稲内から人骨が出土している。本人骨は正面を北にした座葬である。西側から、肋骨・左上腕骨・頭蓋骨・左大腿骨・右上腕骨・右尺骨・右橈骨・右大腿骨・脛骨・左前腕の順で出土している。頭蓋骨は顔面が下向きで頭頂部が東を向いている。右上腕骨は近位を北にし、右尺骨は近位を南にした状態で出土している。

土師器皿も3点出土している。うち2枚は左大腿骨の南東側と左上腕骨北側の底板直上から出土しており、棺内に副葬されていたと考えられる(第4-157図1・3)。もう1枚は脛骨上に載った状態で棺内東側から出土しており、棺内に副葬されていた可能性と棺上に置かれていたものが棺蓋の腐朽に伴い棺内に崩落した可能性も考えられる(第4-157図2)。

[4号墓ST150] (第4-172図)

長方形の墓坑内南側4分の3の範囲から人骨が出土している。本人骨は股関節を軽屈・膝関節を強屈し、頭位を北にした仰臥屈葬である。

頭蓋骨は墓坑内の北、60cmの位置から顔面を北にした状態で出土しており、頭蓋骨の前後頭孔付近南側から頸椎の痕跡が南北方向に連なった状態で出土している。左右頰骨内側の位置から推定される胸椎の位置から10cm程度離れており、軟部組織の腐朽にともない頭蓋が右斜め後方に転倒した可能性が考えられる。右上肢は肘関節を伸ばした状態で出土しており、左上肢は肘関節を屈曲・回内し手の骨を右肩付近に置いた状態で出土している。下肢骨は膝関節を強屈し膝が西方向に倒れた状態で出土している。

[5号墓ST154] (第4-159図)

円形の墓坑内の中央付近から人骨が出土している。本人骨は正面を北にした座葬である。墓坑中央から頭蓋骨が顔面を南にした状態で出土している。頭蓋骨の西側からは肋骨が出土しており、肋骨の北側からは大腿骨が出土している。また、頭蓋骨の東側からも大腿骨が出土している。本人骨は軟部組織の腐朽に伴い左右大腿骨間に頭蓋骨が崩落したものと考えられる。

[6号墓ST157] (第4-160図)

方形の墓坑内から人骨が出土している。本人骨は頭位を北にした右側臥屈葬である。墓坑内北側から頭蓋骨

が顔面を西にした状態で出土している。頭蓋骨の南側からは上肢・肋骨片が出土しており、その南側からは下肢骨が長軸を南北に揃えた状態で出土している。

【7号墓ST158】(第4-161図)

方形の墓坑内から人骨が出土している。本人骨は座葬である。墓坑内北西側から頭蓋骨が出土しており、その東側から肋骨が一部散乱した状態で出土している。その南側からは大腿骨・脛骨が長軸を東西にした状態で出土している。

【8号墓ST149】(第4-176図②)

方形の木棺墓内から人骨が出土している。本人骨は頭位を北西に股関節を伸ばし膝関節を強屈した仰臥屈葬である。棺内北側からは頭蓋骨が正面を西に頭蓋底を上にした状態で出土している。右上肢は肘関節を伸展した状態で出土している。下肢骨は左右大腿骨が長軸を北東・南西にした状態で出土しており、左大腿骨直下及び南側からは下腿骨が長軸を大腿骨と揃えた状態で出土している。

【9号墓ST152】(第4-178図)

方形の墓坑内から人骨が出土している。本人骨は頭位を北西にした左側臥屈葬である。墓坑内西側から頭蓋骨が顔面を南にした状態で出土している。頭蓋の南側からは左上肢が長軸を南北にした状態で出土している。頭蓋の西側からは右上肢が、肘関節を屈曲させ、回内した状態で出土している。その西側からは右肋骨片が出土している。墓坑内南側からは下肢が長軸を東西に揃え、股関節・膝関節を強屈した状態で出土している。

下肢骨の南側からは備前焼播鉢片が出土している(第4-179図1)。

【10号墓ST260】(第4-180図)

方形の墓坑内から人骨が出土している。本人骨は頭位を西にした伸展葬である。墓坑内西側から頭蓋骨・下顎骨が出土している。下顎はオトガイを東にしている。その東側からは上肢および肋骨片が出土しており、さらに東側からは大腿骨・脛骨の順に長軸を東西に揃えた状態で出土している。

【12号墓ST274】(第4-183図)

方形の墓坑内から人骨が出土している。本人骨は頭位を北にした左側臥屈葬である。墓坑内北側からは頭蓋骨が顔面を東にした状態で出土している。その南側からは右上肢骨が長軸を南北にした状態で出土している。この上肢骨の東側からは肋骨片が出土しており、さらに東側からは、左上腕骨が長軸を南北にした状態で出土している。その南側からは下肢骨が膝関節を強屈した状態で出土している。

墓坑内南西隅の腰部南側付近からは土師器皿が出土している(第4-183図2)。

【13号墓ST289】(第4-162図)

円形の墓坑内から人骨が出土している。本人骨は頭位西向きの屈葬の可能性が高い。墓坑内西側から頭蓋骨が顔面を南にした状態で出土している。その東側からは肋骨片が出土しており、肋骨の北側からは上肢骨が長軸を東西にした状態で出土している。その東側からは骨盤片が出土している。また、本人骨は南東側半分を8号墓埋葬により切られており、その際に擾乱を受けたと考えられる骨片が頭蓋骨北側の他の骨より12cm程度高い位置から出土している。

【14号墓ST295】(第4-163図)

円形の墓坑内から人骨が出土している。埋葬姿勢・頭位は不明である。墓坑中央部から頭蓋片・歯牙がまとまった状態で出土している。人骨の南東側から土師器皿が出土している(第4-163図1)。

【15号墓ST296】(第4-164図)

埋葬姿勢・頭位は不明である。20cm四方の範囲から人骨がまとまった状態で出土している。

【16号墓ST297】(第4-165図)

本人骨の埋葬姿勢・頭位は不明であるが、頭蓋骨片・歯牙と近接して西側から肋骨片がまとまって出土していることから座葬の可能性が高いと考えられる。

【17号墓ST299】(第4-166図)

隅丸方形の墓坑内の中央付近から人骨がまとまった状態で出土している。本人骨の埋葬姿勢・頭位は不明で

ある。

3. 人骨所見

1号墓人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良くない。頭蓋骨は、左右上顎骨歯槽付近・左右側頭骨の外耳付近・下顎体の歯槽付近が遺存している。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃

○歯槽開放 ×歯槽閉鎖 /欠損 △歯根のみ ●遊離歯 ()未萌出 c歯齦

歯牙の咬耗度は橋原(橋原1957)の2° a~2° bである。

上肢骨は、右上腕骨骨体部・左右尺骨骨体部・左右橈骨骨体部が遺存している。

下肢骨は、左右大腿骨骨体部・左右脛骨骨体部が遺存している。

【年齢・性別】

年齢は、歯牙の咬耗度から熟年と推定される。性別は、判定可能な部位が遺存していないことから不明である。

【形質的特徴】

本人骨は保存状態がそれほど良くなく、計測に基づく形質的特徴の抽出は困難である。但し肉眼観察の結果、本人骨の歯槽部には吉母浜遺跡出土人骨(中橋・永井1985)等に見られる中世人に特徴的な歯槽性突顎は認められない。

3号墓人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良くない。頭蓋骨は、左側頭骨・左頭頂骨の頭頂側頭縫合付近および後頭骨片・左臼歯部付近の下顎体が遺存している。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
(M ³)	/	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	/	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	/	/	/
M ₃	△	△	P ₂	/	C	/	I ₁	/	/	/	P ₁	/	/	/	/
●		●		●		●					●				

歯牙の咬耗度は橋原(橋原1957)の2° b~3° である。

軀幹骨は左右の肋骨片が複数遺存している。

上肢骨は、左右上腕骨骨体部片・左橈骨骨体部片・右尺骨骨体部片が遺存している。この他にも部位同定困難な前腕片や左右不明な指骨が数点出土している。

下肢骨は、左大腿骨骨頭部・左右大腿骨骨体部片・左脛骨骨体部が遺存している。左右不明脛骨骨体部片および部位同定不可能な長管骨片が遺存している。大腿骨の粗線はやや発達している。

【年齢・性別】

年齢は、歯牙の咬耗度から熟年後半以上と推定される。性別は、大腿骨の粗線がやや発達していることから男性の可能性が高いと推定される。

【特記事項】(図1~4)

大腿骨骨体部近位側に骨変成が認められる。レ線像を見ると緻密質に骨融解の症状などは認められず、外骨性の骨増生が見られる。

6号墓人骨

【保存状態】

本人骨は保存状態が良くなく、歯牙と部位同定困難な長管骨片が遺存しているのみである。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

●										
(M ¹)										
	●	●	●	●		●	●	●	●	●
	m ²	m ¹	c	i ²		i ¹	i ²	c	m ¹	m ²
	m ₂	m ₁	c	/		i ₁	/	c	m ₁	m ₂
	●	●	●	●		●	●	●	●	●
(M ₂)			(C)	(I ₂)		(I ₁)	(I ₂)	(C)		
●	●	●	●	●		●	●	●	●	●

【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態 (Ubelaker1989) から4~5才前後の幼児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

7号墓人骨

【保存状態】

本人骨は保存状態が良くなく、部位同定困難な頭蓋骨片と歯牙および肋骨片と部位同定困難な長管骨片が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

●	●						●	●	/	●	●
(m ²)	(m ¹)	/	/	/	/		i ¹	i ²	(m ¹)	(m ²)	
/	/	/	/	/	/		/	/	c	(m ₂)	
									●	●	

【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態 (Ubelaker1989) から9ヶ月前後の乳児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

8号墓人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良くない。頭蓋骨は、右側頭骨乳様突起付近および左頬骨眼窩付近および部位同定困難な破片が遺存している。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	/	●	/	/	/	/	/		/	/	●	/	/	/	●	/
/	/	M ¹	/	/	/	/	/		/	/	C	/	/	/	M ²	/
											I ₂	I ₁	/	/	/	/
											●	●	●	●	●	●

歯牙の咬耗度は橋原 (橋原 1957) の 1° c2° b である。

上肢骨は、右尺骨骨体部片が遺存している。骨体周は小さく、緻密質の厚みも薄い。

下肢骨は、左右大腿骨骨体部片・左右不明腓骨骨体部片が遺存している。左右不明脛骨骨体部片および部位同定不可能な長管骨片が遺存している。大腿骨の粗線はやや発達している。

上記の他にも部位同定困難な長管骨片が遺存している。

【年齢・性別】

年齢は、歯牙の咬耗度から成年～熟年と推定される。性別は、尺骨の特徴から女性の可能性が考えられる。

9号墓人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良くない。頭蓋骨は、左上顎骨歯槽付近片・左右側頭骨の外耳付近・下顎体の歯槽付近が遺存している。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	/	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	x	/
/	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	△	P ₁	P ₂	x	M ₂	/

歯牙の咬耗度は橋原（橋原 1957）の 2^a ~ 2^b である。

上肢骨は、右上腕骨骨頭・右上腕骨遠位端・左右尺骨骨体部・左右橈骨骨体部・左右不明肘頭片が遺存している。他にも右有鉤骨・左右不明中手骨片 2 点が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨弓付近片・左大腿骨骨頭・右大腿骨頭部付近・右大腿骨頭部・右大腿骨遠位端付近・左右不明脛骨骨体部片が遺存している。

上記の他にも部位同定困難な長管骨片が遺存している。

【年齢・性別】

年齢は、歯牙の咬耗度から熟年と推定される。性別は、判定可能な部位が遺存していないことから不明である。

10号墓人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態は良くなく、部位同定困難な頭蓋骨片及び歯牙と肋骨片・部位同定困難な長管骨片が遺存しているのみである。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

●															
(M ¹)															
●	m ²	/	c	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	m ₂	m ₁	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	(P ₁)	(C)	(I ₂)	(I ₁)	(I ₁)	(I ₂)	(C)	(P ₁)	●	●	●	●	●	●	●
	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
															(M ₁)

【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態（Ubelaker 1989）から 3 才前後の幼児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

M11 号人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態は良くなく、歯槽同定困難な歯牙片が遺存しているのみである。

【年齢・性別】

年齢は、乳歯の破片が遺存していることから乳児～小児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

12号墓人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態は良くなく、部位同定困難な頭蓋骨片と歯牙および肋骨・部位同定困難な長管骨片が遺存しているのみである。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

●						●	●
(M ²)						(I ¹)	(I ¹)
	●	●	●	●	●	●	●
	m ²	m ¹	/	i ²	/	i ¹	/
	m ₂	m ₁	c	/	/	/	/
	●	●	●			●	●
(M ₂)						●	●
	●						

【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態 (Ubelaker1989) から1~2才前後の幼児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

13号墓人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態は良くなく、頭蓋冠と歯牙および肋骨・部位同定困難な長管骨片が遺存しているのみである。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
(M ²)	m ²	m ¹	c	i ²	i ¹	/	i ¹	i ²	c	m ¹	/
	m ₂	m ₁	c	i ₂	i ₁	/	/	/	/	m ₁	m ₂
	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態 (Ubelaker1989) から1~2才前後の幼児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

14号墓人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態は良くなく、部位同定困難な頭蓋骨片と歯牙が遺存しているのみである。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

●						●
(M ²)						(I ¹)
	●			●		
	m ²	/	/	/	/	i ²
	m ₂	m ₁	/	/	/	/
	●	●				

【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態 (Ubelaker1989) から1~3才前後の幼児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

15号墓人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態は良くなく、部位同定困難な頭蓋骨片と歯槽部片および歯牙が遺存しているのみである。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

● (I ¹)											
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
/	m ²	/	/	/	/	/	i ¹	/	c	/	m ² M ¹
/	m ₂	m ₁	/	/	/	/	/	/	/	m ₁ m ₂	M ₁
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態 (Ubelaker1989) から7~8才前後の小児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

16号墓人骨

【保存状態】

本人骨は保存状態は良くなく、部位同定困難な頭蓋骨片と歯槽部片および歯牙が遺存しているのみである。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

● (I ¹)											
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
/	m ²	m ¹	/	/	/	/	/	/	/	/	/
(M ₁)	m ₂	m ₁	c	/	/	/	/	/	/	/	/
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態 (Ubelaker1989) から1才前後の乳幼児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

17号墓人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態は良くなく、部位同定困難な薄い小片が遺存しているのみである。

【年齢・性別】

年齢は、残存している人骨片が薄いことから未成人と考えられる。性別は、判定可能部位が残存していないことから不明である。

4. まとめ

以上出土人骨についての記載・報告を行ってきた。本遺跡からは成人5体、小児1体、乳幼児9体、不明1体の計16体の人骨が出土した。出土人骨は保存状態が不良なものがほとんどで計測に耐えうる人骨はなく、形質的比較を行える個体は得られなかった。埋葬姿勢に関しては、成人は時期の早い3号墓(早橋)と伸展葬の1号墓を除いて中世に特徴的な仰臥もしくは側臥の屈肢葬であった。一方で、1号墓に関しては、埋葬姿勢だけでなく、出土人骨の形質的特徴にも中世人骨に特徴的な歯槽性突顎が認められないという特異性がみられた。

最後に本報告にあたり、大分県教育委員会の田中裕介氏を始め各位にはご便宜を賜り、かつご迷惑をおかけ

した。深謝したい。また、九州大学比較社会文化学府基層構造講座の諸氏、とりわけ板倉有大・邱鴻霖・能登原孝道・山根謙二・石田智子・鈴木克・岩下美沙・渡部芳久氏には人骨整理から報告の過程で多くのご助力を頂いた。あわせて感謝したい。

参考文献

橋原博,1957:日本人歯牙の咬耗に関する研究.熊本医学会雑誌, 31. 補冊 4

Ubelaker,D.H.,1989:Human skeletal remains:Excavation,Analysis,Interpretation (2nd Edition). Washington,D.C.:Taraxacum.

中橋孝博・永井昌文,1985:人骨,吉母浜遺跡,下関市教育委員会.

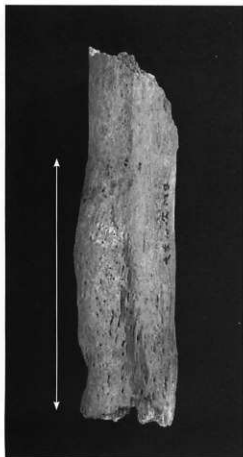


図1 3号墓人骨大腿骨病変部 (後面)



図2 3号墓人骨大腿骨病変部 (側面)



図3 3号墓人骨大腿骨病変部レ線像 (後面)

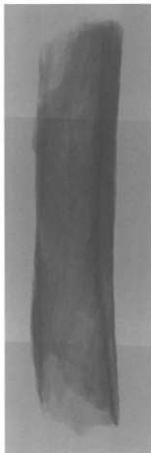


図4 3号墓人骨大腿骨病変部レ線像 (側面)

第2節 中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学調査

イジロマン
魯鏡弦・平尾良光

(別府大学大学院 文学研究科)

1. はじめに

大分県に位置する中世大友府内町跡は大分県教育庁歴史文化センターが調査した中世大友氏の城下町跡である。遺跡がある大分市には九州の有力な戦国大名であった大友氏の守護所がおかれていたところであり、朝鮮半島や中国、東南アジアなどからもたらされた数多くの遺物が出土した。大友義鎮は貿易から得られる利益をよく理解していたため、スペイン人の宣教師であるザビエルを招き、大友氏の城下町府内でのキリスト教の布教を許可した。

大友義鎮はキリシタン大名であり、南方貿易に力を入れたことで有名であり、中世大友府内町跡では多くのキリスト教関連の遺物が出土した。その中にはメダイやロザリオの一部と考えられるガラスなども含まれており、2005年にはこれらに関する自然科学的な調査が行われた。その結果、メダイと推定される金属製品とガラスは中国、朝鮮半島産の材料または未知の地域の材料が使用されたことがわかった。特に注目される特徴は日本の材料が使われておらず、東アジアではない未知の材料が新しく使われたことは当時の貿易ルートを示唆しているとも言える。

ただし、これまでに測定された中世大友府内町跡出土の金属製品は少ないため、その結果がキリスト教との関連がある製品のみにもみられることなのかどうかを理解するためには、より深い研究が必要である。そこで府内遺跡から出土した他の金属製品に関して自然科学的な調査を大分県教育庁歴史文化センターの依頼を受け、化学組成および鉛同位体比分析を用いた産地推定の研究を行った。

2. 資料

今回測定した資料は中世大友府内町跡から出土した金属製品5点である。2点は分銅であり、2点が鏝、1点がクサリである。分銅は完形をしており、鏝は先端欠、クサリは残存した一部である。これらの資料から鉛を微量採取し、測定用試料とした。資料の記載は表1で示した。

表1 中世大友府内町跡から出土した金属製品の記載

番号	資料名	残存長(cm)	残存状況	出土地	出土区	測定番号
1	分銅	0.9	完形	大友5次	包含層 2A5 回H	BP1185
2	鏝	9.6	先端欠	大友7次	C地区 P229	BP1186
3	鏝	16.4	先端欠	大友7次	C地区 P256	BP1187
4	分銅	5.4	完形	大友10次	II区南11-A	BP1188
5	クサリ	1.7	一部	大友10次	II区北SK146	BP1189

3. 鉛同位体比の原理²⁾

地球が誕生したのは45.6億年前とされている。そして、この時にすべての元素の同位体組成は地球上で各元素毎にある値になっていて、それは地球のどこでも同じ値であったとされている。ほとんどの元素の同位体比は時間が経っても変化しないが、例外的ないくつかの元素は変化した。鉛はその例外的な元素の一つである。

鉛(Pb)には²⁰⁴Pb、²⁰⁶Pb、²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pbの同位体があり、地球が誕生した時にできた岩石中に他の元素と一緒に含まれていた。時間が経つと岩石中に含まれていた²³⁸Uは²⁰⁶Pbに、²³⁵Uは²⁰⁷Pbに、²³²Thは²⁰⁸Pbに変化する。よって、U(ウラン)とTh(トリウム)が減少した量だけ鉛の量は増えてくる。

各鉛同位体の量は岩石中のU、Th、Pbの量および岩石中でPbとU、Thが共存していた時間の長さによって、それぞれの増加量が異なるため、鉛同位体比の違いとして表わすことができる。

それ故、同位体の量が地球の誕生から変わっていない²⁰³Pb量と、変化した²⁰³Pb/²⁰⁶Pb、²⁰³Pb/²⁰⁷Pb量との比を調査し、これを世界の鉛鉱山の同位体比と比較することによって鉛の産地の違いを判別することができる。

4. 分析方法

採取したサビ試料に関して鉛同位体比を次のように測定した。試料をアルコールで洗浄し、石英製ピーカーに入れ、硝酸で溶解した。これを蒸留水で約5mlに希釈し、直流2Vで電気分解した。約1日の時間をかけて電気分解を続け、析出した二酸化鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。この溶液から0.3 μgの鉛を分取し、リン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上にのせた。準備したフィラメントを質量分析計（本学に設置されているサーモエレクトロン社の表面電離型質量分析計MAT262）の中にセットし、条件を整え、鉛同位体比を1200℃で測定した。同一条件で標準鉛試料NBS-SRM981を測定し、規格化した。

5. 測定値の表し方³⁾

鉛同位体比測定の結果を理解するため、材料の同位体比を次のように示した。鉛には²⁰⁴Pb、²⁰⁶Pb、²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pbの独立した4つの同位体があり、同位体比は²⁰⁶Pb/²⁰³Pb、²⁰⁷Pb/²⁰³Pb、²⁰⁸Pb/²⁰³Pb、²⁰⁴Pb/²⁰⁶Pb、²⁰⁷Pb/²⁰⁶Pb、²⁰⁸Pb/²⁰⁶Pb、²⁰³Pb/²⁰⁷Pb、²⁰⁶Pb/²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pb/²⁰⁷Pb、²⁰³Pb/²⁰⁸Pb、²⁰⁶Pb/²⁰⁸Pb、²⁰⁷Pb/²⁰⁸Pbという12の方法で表現される。この方法の中で一番整った図で表現でき、4種類の同位体を含む²⁰⁶Pb/²⁰³Pb - ²⁰⁷Pb/²⁰³Pbと²⁰⁷Pb/²⁰⁶Pb - ²⁰⁸Pb/²⁰⁶Pbという2つの図（図1と図2）を用いた表現方法を利用して測定結果を図化した。中国の前漢時代、後漢時代・三国時代の銅鏡を分析して、これらを図中にプロットすると、前漢時代の銅鏡と後漢・三国時代の銅鏡の材料が、はっきり区分されて分布した。前漢時代の銅鏡が分布した領域を、他の出土資料と比較して華北産材料の領域と表し、後漢時代・三国時代の銅鏡が分布する領域を華南産材料の領域と表した。

日本産材料の領域を設定する場合、西暦6世紀頃までの遺物で日本産の材料を用いたと断定できる資料は今のところ確認できていないので、8世紀以降に作られた銭貨と現代の鉛鉱山が示す分布を日本産材料の領域とした。

朝鮮半島産材料の領域を設定する場合、朝鮮半島で製作されたと考えられる多鈕細文鏡を用い、それらが示す分布を朝鮮半島産材料の領域とした。

6. 化学組成

今回の測定試料である金属製品5点に関して化学組成を蛍光X線分析法で測定した。測定は本学に設置されているHORIBA MESA-500Sで行った。測定された蛍光X線スペクトルを付録として末尾に付し、その化学組成を表2でまとめた。

化学組成の結果、分銅は銅、スズ、鉛の三元合金であり、鏡とクサリは銅と鉛の合金であることがわかった。銅にスズあるいは鉛を混ぜると熔融温度が低くなり、流動性がよくなるため、铸造しやすくなる。鉛成分の比率が比較的に高いことは鉛が銅より手に入りやすかったためであると考えられる。

表2 中世大友府内町跡から出土した金属製品の化学組成

番号	資料名	Cu	Sn	Pb	As	Fe	測定番号
1	分銅	24.3	27.3	46.0	0.1	0.9	BP1185
2	鏡	54.5	2.2	30.9	0.1	12.3	BP1186
3	鏡	63.3	1.4	23.0	0.1	12.1	BP1187
4	分銅	39.5	32.1	17.4	2.3	8.8	BP1188
5	クサリ	80.0	0.1	4.7	0.2	15.0	BP1189

7. 結果

測定の結果として得られた鉛同位体比を表3に示し、図1～図4に図化した。図から判断すると1番の分銅は朝鮮半島の領域に位置し、2番の鍍と4番の分銅は中国の華南の領域に位置した。しかし、3番の鍍と5番のクサリは華南の領域から少し外れたところに重なって位置した。

この測定結果を理解するため、2005年に測定された府内町跡から出土した金属製品の測定結果と比較し、図5～図8に示した。図5からみると3番と5番の資料は設定された領域ではないところいくつかの金属製品と重なって位置した。しかし、図7では華南領域の境界線の上に位置しており、どこの材料を利用したか判断しにくい。そのため、この2つの資料に関してはより深い研究が必要である。

8. 考察

大分市に位置する中世大友府内町跡では中世の磁器、ガラス玉、鉄砲玉、金属製品、土製品などが出土しており、中には朝鮮半島、中国、タイ、ヨーロッパとの貿易でもたらされた製品もたくさん含まれていた。この史実を示すように、2005年に測定された結果では金属製品に朝鮮半島、中国、未知の地域の材料が利用されたことがわかった。この未知の材料はどこからもたらされたかはわからないが、スペインの鉛鉱石が近い値を示していることが注目された。

今回測定した金属製品は5点であり、測定結果1点の分銅が朝鮮半島産材料で作られ、また2点の資料(2番と4番)が中国の華南産材料を利用したことがわかった。しかし、2点の資料(3番の鍍と5番のクサリ)は設定された領域から外れたところに重なって分布した。これはこの資料の材料が中国、朝鮮半島、日本産の材料を利用しなかったことと、同一な材料を利用した可能性や同じ資料の一部の可能性であることを意味する。

今回の3番、5番資料をこれまでに測定された府内町跡出土の金属製品と比較してみると、図6で示されるようにスペインの鉛鉱石および3種の前回資料とよく似た範囲の値であった。しかしながら、図8では前回の資料と今回の資料とはかなり大きく離れており、両者が同一材料であるとはとても思えない。鉛同位体比の判断では、図6と図8の両図で一致しなければ同一材料と判断できないが、今回の2点は前回の資料とはまた異なった未知の材料であると判断される。今回の2つの未知の材料がどこの産地であるかは今のところ判らないが、今後の発掘資料の積み重ねにより、また世界の鉛鉱石の値と比較することで明らかになってゆくであろう。

表3 中世大友府内町跡から出土した金属製品に関する鉛同位体比値

番号	資料名	$^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$	測定番号
1	分銅	20.772	16.032	41.399	0.7718	1.9931	BP1185
2	鍍	18.518	15.754	39.049	0.8507	2.1088	BP1186
3	鍍	18.297	15.741	38.784	0.8603	2.1197	BP1187
4	分銅	18.293	15.672	38.765	0.8567	2.1191	BP1188
5	クサリ	18.301	15.740	38.804	0.8601	2.1203	BP1189
誤差		± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0003	± 0.0006	

参考文献

- 1) 大分市教育委員会、2006「中世大友再発見フォーラムⅡ：府内のまち宗麟の栄華」大分市教育委員会文化財課
- 2) 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と鋳造」鶴山堂（東京）、p31～p33
- 3) 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と鋳造」鶴山堂（東京）、p35～p39
- 4) 大分県教育庁埋蔵文化財センター、2006「豊後府内4」埋蔵文化財調査報告書 第9集

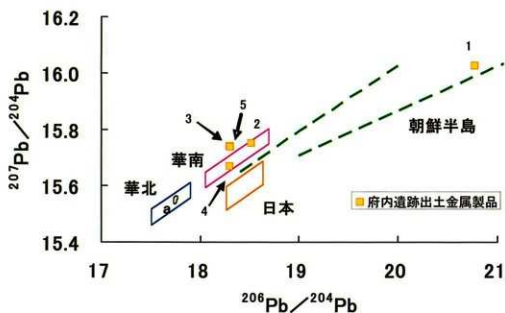


図1 中世大友府内町跡から出土した金属製品の鉛同位体比
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

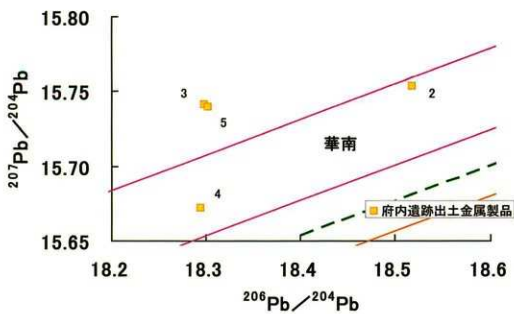


図2 図1の拡大図
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

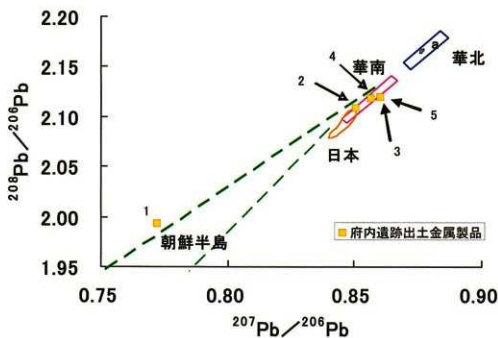


図3 中世大友府内町跡から出土した金属製品の鉛同位体比
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

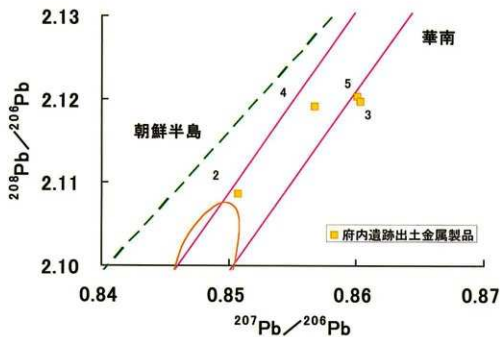


図4 図3の拡大図
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

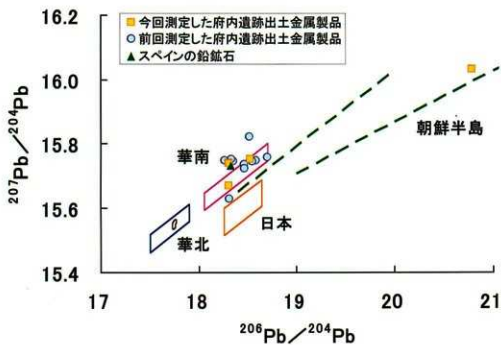


図5 今回の金属製品とこれまで測定された府内跡出土の金属製品の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb} - ^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

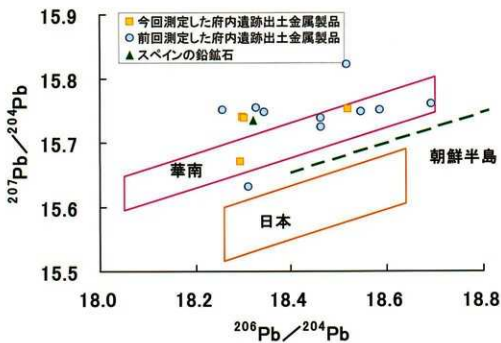


図6 図5の拡大図 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb} - ^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

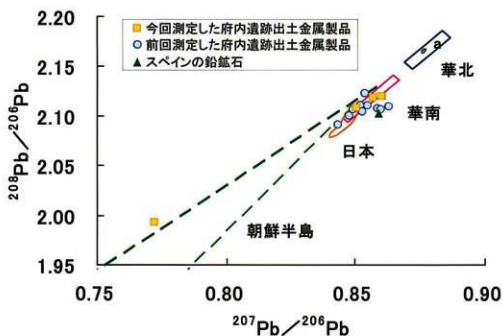


図7 今回の金属製品とこれまで測定された府内跡出土の金属製品の鉛同位体比
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

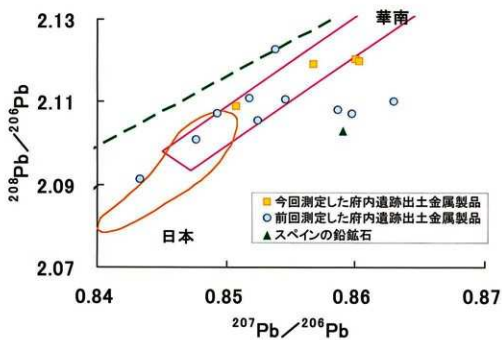


図8 図7の拡大図
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

付録 蛍光 X線スペクトル

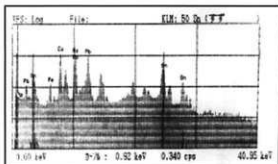
資料番号 1 (大友 5次 包含層 2A5 回目)

測定条件

日付: 06.10.01
時刻: 19:02:39
電圧: 50kV
電流: 10 μ A
時間: 300秒
DT%: 22%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500 定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準偏差	強度 (cps/ μ A)
Fe 鉄	0.9	0.1	1.926
Cu 銅	24.3	0.1	67.716
As ヒ素	0.1	0.1	0.23
Sn スズ	27.3	0.2	31.385
Pb 鉛	46	0.2	74.644



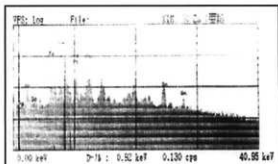
資料番号 2 (大友 7次 C地区 P229)

測定条件

日付: 06.10.01
時刻: 19:34:41
電圧: 50kV
電流: 14 μ A
時間: 300秒
DT%: 24%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500 定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準偏差	強度 (cps/ μ A)
Fe 鉄	12.3	0.1	28.456
Cu 銅	54.5	0.1	112.09
As ヒ素	0.1	0.1	0.277
Sn スズ	2.2	0.1	2.373
Pb 鉛	30.9	0.1	31.845



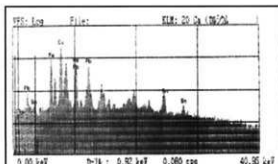
資料番号 3 (大友 7次 C地区 P256)

測定条件

日付: 06.10.01
時刻: 19:16:13
電圧: 50kV
電流: 9 μ A
時間: 300秒
DT%: 21%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500 定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準偏差	強度 (cps/ μ A)
Fe 鉄	12.1	0.1	47.709
Cu 銅	54.5	0.1	200.989
As ヒ素	0.1	0.1	0.495
Sn スズ	1.4	0.1	2.549
Pb 鉛	23	0.1	35.103



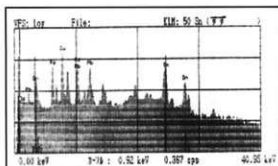
資料番号 4 (大友 10次 II区南 11-A)

測定条件

日付: 06.10.01
時刻: 19:47:41
電圧: 50kV
電流: 10 μ A
時間: 300秒
DT%: 22%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500 定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準偏差	強度 (cps/ μ A)
Fe 鉄	8.8	0.1	21.946
Cu 銅	39.5	0.2	107.07
As ヒ素	2.3	0.1	9.91
Sn スズ	32.1	0.2	45.159
Pb 鉛	17.4	0.1	28.308



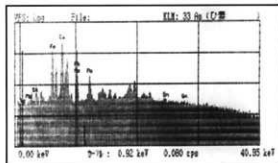
資料番号 5 (大友 10次 II区北 SK146)

測定条件

日付: 06.10.01
時刻: 20:03:00
電圧: 50kV
電流: 24 μ A
時間: 300秒
DT%: 23%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500 定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準偏差	強度 (cps/ μ A)
Fe 鉄	15	0.1	27.035
Cu 銅	80	0.1	85.123
As ヒ素	0.2	0.1	0.21
Sn スズ	0.1	0.1	0.089
Pb 鉛	4.7	0.1	2.204



第6章 総括

第1節 調査の成果（第6-1図）

JR日豊・豊肥線の高架化事業に伴う中世大友城下町跡の発掘調査は、1999（平成11）年度に開始され2002（平成14）年度に現場での作業をほぼ終了した。発掘調査区は、東の大分川の河畔から大友氏館の南側を通り、西は遺跡の西端にあたる低湿地部までの約700mにわたり、中世都市「府内」を東西に横断する調査となった。本巻はその6冊目の調査報告書である。10次調査区は「府内古園」上でたどると、西はその西端から、東は南北に府内を貫く街路（第4南北街路）までにあたる。この発掘調査範囲内はいずれの「府内古園」でも「上町」と「中町」の西側にあたり、さらに「ダイウス堂」すなわちイエズス会府内教会の一部が検出されることが事前に想定された。

調査の結果、15世紀から16世紀末にいたるまで継続的に都市遺構が認められた。特筆される点を列挙すると以下ようになる。

⑩10次Ⅱ区調査区（第3・4章）では第4南北街路から西に向って派生する東西道路が発見され、「府内古園」に描かれた「ダイウス堂」と「祐向寺」との間に描かれた西に抜ける道路を考古学的に確認し、「府内古園」の信憑性を高めた。この道路は15世紀後葉から末のころに建設され、1587（天正15）年の豊薩戦争後の復興時にいたるまで都合7回にわたって道路面を更新しながら存続したことが判明した。くわえて10次Ⅱ区南調査区（第3章）では、16世紀第4四半期段階の溝SD118～116が機能していた段階において、東西道路の南側にも幅5m程度の空閑地が存在し、そこが道路であった可能性が指摘されている。その指摘のとおりであればⅡ区北調査区で検討したように、道路SF151の道路幅がもっとも狭くなって時期は、溝SD118～116が機能した時期と一致し、道路の本体が南側に移ったことになるとの興味深い。²¹

⑪「中町」に相当する10次Ⅱ区北調査区東区において、15世紀後葉から末の道路SF151建設以来17世紀初頭の近世城下町への移転にいたるまで1世紀以上にわたって存続した宅地群の遺構が判明した。その宅地の景観を復元すると、第4南北街路に面して建物が立ち、その背後に井戸が掘られ、さらに敷地の奥に廃棄土坑が掘られるというものである。これは道路に入口を設ける町人屋敷特有のものであることから、この付近は町人町であったと推定される。

⑫東西道路SF151の北側奥では、道路建設当初から16世紀第2四半期までは道路に面した小区画が設定されたものと推測される（区画Aと区画B）。16世紀後半になると大区画に合併され、その中に墓地が作られる。一方道路南側には溝SD001やSD111で区画されているものの、10次Ⅰ区調査区（第2章）では東西道路に北面した町屋的宅地群が16世紀後半には存在しているので、「府内古園」の描く「祐向寺」北側の屋敷地の描写が正確であることを裏付けている（第2-50図）。

⑬墓地が作られた16世紀後半の大区画の位置を「府内古園」にあてると、A～C類²²いずれの古園をみても、東西道路北側に屋敷地が描かれている。ところがその区画の発掘調査結果（第4章）からみると、そこに屋敷地が存在した形跡はない。ことに16世紀後半においては墓地を含むひとつの大区画となっている。墓地を含むので、その大区画が武家屋敷である可能性は低く、そのような敷地内に墓地を持つ区画としては、北隣に描かれた「顕徳寺」あるいは「ダイウス堂」と注記された寺院以外に対応する施設がない。したがってその大区画はその寺院敷地内に作られた墓地であると推定するのが最も素直である。ところでその「顕徳寺」ないし「ダイウス堂」とは1553（天

10次調査区

東西道路

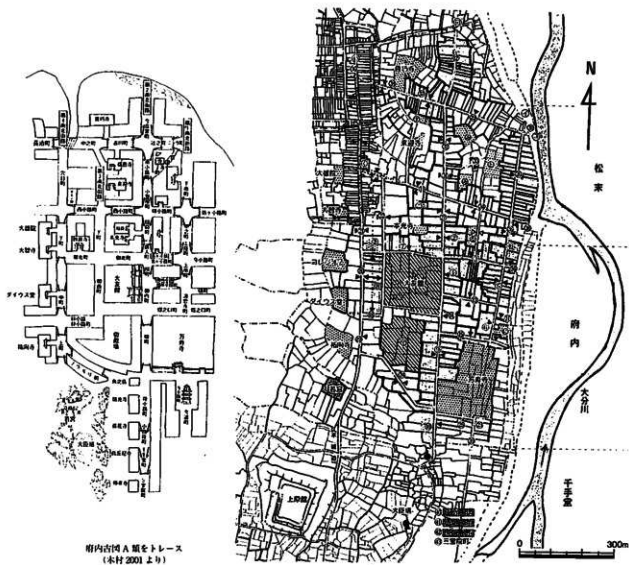
「中町」の遺構

東西道路に面する区画

墓地と「ダイウス堂」

註1 第3章ではSD118～116の時期を、16世紀後葉と控えめに表現しているが、近世1期の備前焼埴鉢の出土や道路SF151の硬化面との対応関係からみて、第4章では16世紀第4四半期前半と限定的に限定したい。

註2 木村幾多郎「府内古園再考」『Funai 府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報 IX』、2001、大分市歴史資料館
木村幾多郎「府内と府内古園」『南筑都市・豊後府内』2001、大分市教育委員会・中世都市研究会



第6-1図 府内古園と地籍図による比定

文22)年に開設され、幾度かの改修・拡張をへて、1580(天正8)年に日本最初のコレジオを併設したイエズス会府内教会にはかならない^{註3}。発掘調査からみて、墓地は16世紀第4四半期の後半には終焉しており、1587(天正15)年の豊薩戦争とその後の伴天連追放令による教会退去によるものと考えられる。

⑤豊薩戦争後、道路と「中町」の屋敷地は再建されているが、墓地は作られなくなる。1602(慶長7)年の近世城下町への移転によって最終的に都市遺構はなくなり、耕地と化して近世を迎えている。このように第4南北街路に面した「中町」においても、1587(天正15)年の豊薩戦争後の一定の屋敷地の復興が推定できることは重要である。この「中町」付近は木村幾多郎氏の研究^{註4}によれば1587(天正15)年の豊薩戦争後、無住の地になったまま復興されなかったと推定された町のひとつである。その推定がかならずしも妥当ではないことを示している。

以上の5項目が第10次調査の成果の要約であるが、以下にイエズス会府内教会と墓地について、

島津氏攻後の復興

註3 五野井隆史「豊後府内の教会領域について」『東京大学史料編纂所紀要』14、2004、東京大学史料編纂所

註4 木村幾多郎「豊後府内の都市建設」『大分・大友土器研究』21、1997、大分・大友土器研究会

木村幾多郎「豊後府内城下町移転と旧府内町」『大分・大友土器研究会論集』2001、大分・大友土器研究会

第2節 第10次調査区発見の墓地とイエズス会府内教会

以下は今回報告した10次Ⅱ区北調査区(第4章)発見の墓地の性格を、調査の経緯をからめて検討したものである。

1. 第10次調査区的位置(第6-1図、第2-50図、第1-6図)

府内古図の
表現

調査区周辺の府内古図の表現 第2-50図は「府内古図」のなかでも最も新しいC類を使用して、ダイウス堂と周辺の道路を示したものである。表現は木戸の有無を除いて最古の古図A類、B類も同じである。描かれた道路は府内町から西の郊外に抜けている。道路の南北には屋敷地の表現があり、北の「ダイウス堂」と南の「祐向寺」は直接道路に接していないように描かれているので、東西道路の両側にも屋敷地が存在した可能性がある。しかし道路の南北両側に描かれた屋敷地に町名が付いていないことに注目すると、その道路の両側はひとつの独立した町内を構成するほどの数の宅地が並んでいなかったことを示している。第1-6図は「府内古図」を明治時代の地籍図に対比して復元した戦国期の府内(「大分市史」案²⁵をもとにしたもの)である。調査区のなかに地籍の境界がどのように入るかがわかる。この場所は明治時代には水田となっており、その境界は水路あるいはあぜで区切られている。「大分市史」案では東西の境界線を道路、道路に接して北にダイウス堂を推定している²⁵。

調査前の仮説

調査前の想定 以上の歴史地理学的な研究成果から発掘調査前の段階では、第10次Ⅱ区北調査区においては、次のような遺構が発見されると予想されていた。①Ⅱ区調査区の東部では、第4南北街路に面する「上町」あるいは「中町」の遺構が、②その西に「上町」と「中町」の間西にむかって郊外に抜ける東西方向の道路と、その両側に連なる屋敷地遺構の広がり、③さらにその屋敷地の北側からは「府内古図」に描かれていた「ダイウス堂」すなわちイエズス会府内教会の遺構が調査範囲内にかかる可能性があると指摘されていた。

しかし「府内古図」の細部表現が正しいとすると、「ダイウス堂」はこの東西道路に接していないことになり、その場合屋敷地が町屋屋敷であれば調査範囲内からは町屋の遺構群、すなわち井戸・ごみ捨て穴・掘立柱建物等が発見されるはずであり、木村氏がかつて指摘したように²⁴武家屋敷地であれば溝等の区画施設や掘立柱建物など比較的散漫な遺構配置が検出されるはずであった。いっぽう「ダイウス堂」の敷地が東西道路に接するとした大分市史の復元案²⁵が正しいとすると、Ⅱ区北調査区において「ダイウス堂」の南端の一部にあたることになるのであった。

道路の位置

調査の経過 したがって以上の仮説を念頭におきながら、発掘調査ではどの位置にどのような遺構が広がるかを丁寧にみきわめることが課題となった。まず調査の初期段階で、17世紀後半以後の水田水路跡を検出し、地籍図との正確な対比が可能となった。その結果、戦国時代の東西に伸びる道路遺構が近世の水田化以後は水路となっていたことが判明し、その道路の位置については「府内古図」「大分市史」の復元案ともに正確であることが立証された。ただし「府内古図」ではその道路は第4南北街路に直交して、直線的に西方に伸びるように表現されているが、実際の道路遺構は西に行くほど北に向きを変えて曲がる道路であった。そこから「府内古図」には、中世の絵図としては当然のことであるが、当時の地理観に基づく一定のデフォルメが存在することが明らかになった。

道路南側の
屋敷地

つぎに10次調査Ⅰ区およびⅡ区南調査区において、東西道路に面した南側に廃棄土坑や井戸・掘立柱建物が分布し、屋敷地が一定の規模で存在することが明らかとなった。これは「府内古図」の表現の正しさを立証するものであった。

ところがⅡ区北調査区において、東西道路の北側に墓地が出現したのは意外なことであった。

註5 「大分市史」中、付図「地籍図に残る戦国時代の府内」1987、大分市

道路南側の墓地 2001(平成13)年度の調査では1号墓ST130のみが発見されたため、なお宅地内に単独で存在する墓の可能性が考慮されていた。いっぽう1号墓からは木棺と人骨が出土してその埋葬姿勢が伸張葬であることと、内部に落ち込んだ京都系土師器の存在から16世紀後半の墓であることが指摘され、「ダイウス堂」推定地に近接することもあり、この埋葬はキリシタン墓ではないかという可能性が取り沙汰されていた。2002(平成14)年度の調査は以上のような指摘を受けて行われた。

キリシタン墓? 10次Ⅱ区北調査区の全面調査が始まると、すぐに1号墓ST130の周辺から大小さまざまな埋葬主体が発見され、最終的には1号墓をふくめて18基の墓が狭い範囲に群集して発見された。しかも一部の墓はかなり規則的に配置されていることがわかり、比較的短期間に埋葬された集団墓地であることが判明した。そのため宅地内に単独で存在する墓の可能性は排除された。

墓地の発見 ではこの集団墓地はいかなる性格の墓地なのだろうか。

2. 墓地の実態

墓地について次のような事実が判明した(第4章第6節)。

第1期単独墓 変遷と年代 墓地は3時期に変遷する。第1期にあたる3号墓は墓地の西端にあり、早稲を利用した成人座葬墓であり、3枚の土師器皿の副葬が行われている。その土師器の年代から16世紀前半(第2四半期と推定)にさかのぼる。埋葬形態(成人唯一の早稲使用)と副葬形態(土師器副葬)、さらに埋葬位置も西にはなれ、その時点では区画Aの内部にあたる。したがって3号墓は単独の墓の可能性が高い。第2期はほとんど幼児埋葬に限られる8基の墓が、あまり規則性をもたず1箇所に集まっている。いずれも人骨調査の結果7~8歳以下の小児・幼児・乳児が埋葬されていた。埋葬施設としては方形の木棺が利用されるものと、直葬された土坑墓があった。埋葬年代は副葬品が皆無なこともあり積極的に確定することは困難であるが、第3期の墓に切られていることと、掘形や内部の覆土内に混じった土師器から1560年代を中心とする時期の埋葬と推定される。第3期は頭位を北にする成人木棺墓4基が等間隔に規則的にならび、その北を溝SD131が区画する。さらに成人墓のまわりには幼児墓が追葬されていることが判明した。その時期は第2期の墓の埋葬が終わった後に墓地が新たに整備されたものと推定され、その継続年代は1570年代の1点から1587年以前と想定された。

宗教性 特定の宗教を想定させる遺物ないし資料は皆無である。木棺材の保存状態がよくないので、棺材に書かれた墨書などの文字は確認できない。死者が身に付けたメダイ、ロザリオ等のキリスト教遺物²⁶は副葬されていない。いっぽう六遺銭などの仏教的要素も皆無である。伝統的な中世日本の民俗的習俗の強い土師器副葬も第1期に属する3号墓と第2期に幼児が埋葬された14号墓(1枚副葬)にのみ認められ、ほかの墓、特に成人墓ではまったく認められない。しかし伝統的に中世後期に普遍的になる横臥あるいは仰臥屈葬という埋葬姿勢は、第2期から第3期の幼児墓と成人墓において数多く認められる。当初注目された伸張葬は1号墓の成人埋葬と、幼児骨を伸張葬で木棺に葬った10号墓、墓坑形態から推定される2号墓と11号墓の4例にとどまった。

地上標識の有無 埋葬墓坑の掘形内埋土や棺内をうめる覆土、さらに周囲の同時期の遺構の中に墓の地上標識の残骸がないかと疑ったが、五輪塔・宝篋印塔などの石塔類や、キリシタン墓碑・石製十字架などの破片は存在せず、井戸等で使用された五輪塔の部材の再利用品や廃棄品の中で、この墓地に存在したものと疑える資料はなかった。特に木棺墓の多くは蓋が落下陥没しており、石材の一部が落ち込んで残っているのではないかと考えたが、そのような出土品は皆無であった。墓地の上部が近世に整地されているため断定的なことはいえないが、以上の状況から個々の墓上には石

註6 キリシタン遺物の定義は次の文献による。

今野春樹「キリシタン遺物の諸相」『キリシタン文化研究会会報』128、2006、キリシタン文化研究会

造の地上標識はなく、何らかの標識がかつてあったとしても、それは木製品であった可能性が高いと考えられる。

墓地の位置 墓地は1号墓から東にまとまって分布することが判明した。その結果地籍図と厳密に対応させると、第1期の3号墓のみが大分市史の復元した「ダイウス堂」の想定範囲内に入り、それ以外の墓はすぐ側が隣りの地片に入ることが判明した。

3. 墓地の性格

以上の基本的な事実を基に、この墓地の性格を以下の論点から改めて考える。

都市内の集団墓地 中世都市の内部に墓地を作れるのはいかなる人たちだろうか。どういう人が葬られるのか。中世大友府内町跡からこれまでに15～16世紀代の墓は数箇所発見されているが、そのほとんどが単独で発見される埋葬である。第7次調査ST748は16世紀第1四半期の横臥屈葬の成人木棺埋葬で、土師器副葬が行われていた。第7次調査ST135は16世紀第3四半期の早稲座葬の女性成人埋葬であった⁴⁷。いずれも単独墓あるいは異常死埋葬と考えられている。このほかに第10次I区調査区の15世後半の幼児埋葬墓ST009も、屋敷地のはずれに単独で存在している(第2章)。このように中世府内の都市内での墓のありかたをみると、単独で存在する墓はあくまでも「屋敷墓」や突発的な埋葬に限られ、そのため町人屋敷内や武家屋敷内に単独で存在すると思われる。屋敷地以外の都市内の空閑地には原則として墓地を設けないとみられる。

単独墓

「新御成敗状」

このことは時期がずいぶん異なるが、府中の内部に墓を作ることを禁じた1242(仁治3)年の「新御成敗状」の記述を参照とさせる。この文書は一般に豊後府内に対して、ときの守護大友頼春が発布した都市法として知られているが、豊後府内に発布されたものではないとする有力な意見もだされている⁴⁸。その一条に「一府中墓所事 右、一切不可有、若有違乱之所者、且改葬之由被仰主、且可召其屋地矣」とあり、府中に墓地を作ることを強く禁じている。山村聖紀氏はこの法令を豊後府内のみを対象としたものではなく、九州を中心とした中世国府を対象とした、より一般的な法制としている。「新御成敗状」が山村氏の説くとおりの豊後府内を直接対象にした法ではないにしても、京や鎌倉の都市法と共通するその内容から見て、中世都市法の典型を示すものと見て差し支えあるまい。このような府中に墓を禁じる条項の存在からみて、屋敷地内の単独墓や仏教寺院などの特定の囲い込まれた空間を例外として、道路敷きや都市内の空閑地に埋葬が行われることが少ないのは、戦国時代の都市に依然として、この禁止法令の法理が生きていたためと考えられる。

埋葬禁止

寺の墓地

たほう都市のなかの仏教寺院内には墓が設けられている。16世紀になるとそのなかに墓地が存在することは、中世以来の多くの都市に残る中世寺院の石塔群をみれば明らかである。豊後府内においても、石塔こそ失われているが、大友氏当主の菩提寺である大雄院や大智寺が第4南北街路に面して作られており、これらの寺院には当主とその関係者、および僧侶の埋葬が行われていたことが考えられる。同様に16世紀の豊後府内の各所に所在した寺院内には、集団墓地が設けられていたことは想像に難くないし、そういう宗教施設は先述の中世都市法の及ばないアジュールとして、都市内各所に存在していたと考えられる。したがって都市内の遺跡の中に集団墓地が発見される場合、宗教施設の内部に作られたものとするのが妥当である。

屋敷内から宗教施設に

このように中世都市内の墓は、一般的にいえば、集団墓地は宗教施設内に、単独墓は屋敷地内にもうけられたと考えられる。10次II区北調査区の墓地の場合、時期差を考慮すると第1期の3号墓は16世紀第2四半期に単独で存在した墓と考えられるのに対し、第2期の幼児墓群と第3期の成人墓群は、当然宗教施設内に設けられたものと推定される。それでどのような宗教施設がこ

註7 田中裕介「中世大友府内町跡第7次調査区」〔豊後府内〕5(大分県教育庁歴史文化財センター調査報告8)、2006

註8 山村聖紀「中世前期都市の空間構造と都市像」『人文地理』54-6 2002、人文地理学会

の第2～3期の集団墓地をその敷地内に設けたのであろうか。1560年代前後から1587年ごろが第2～3期墓地の推定継続年代である。くりかえしになるが先に述べたように1560年代から1580年代にこの場所に存在した宗教施設は「府内古園」の記載から見て「ダイウス堂」あるいは「顕徳寺」と記されたイエズス会府内教会以外に考えられないので、10次Ⅱ区北調査区の墓地のうち、第1期の3号墓をのぞく、第2期の幼児墓群と第3期の成人墓群は当時豊後府内のなかにつくられたキリスト教会の敷地内に設けられた墓地と考えられる。

キリシタン墓地調査例との類似と相違 次に10次Ⅱ区北調査区発見の墓地の各要素を、すでに判明しているキリシタン墓地と比較し、その類似と相違を明確にしておきたい。比較の対象はキリシタン墓である事が明確な次の2遺跡である。ひとつは大阪府高槻市高槻城キリシタン墓地⁹と、いまひとつは東京駅八重洲北口遺跡である¹⁰。(第6-2図)

高槻城キリシタン墓地は、1998(平成10)年に調査されたキリシタン墓地である。摂津高槻は1570(元亀元)年から85(天正13)年までキリシタン大名高山右近の居城であり、85年に右近が播磨明石に転封された後は、豊臣秀吉の祐筆安威了佐が代官となった。彼もまた安威シモンとしてしられるキリシタンであり、彼によって高槻のキリスト教界は保護されている¹¹。墓地は右近が高槻を領した1570(元亀元)年から、1587(天正15)年に発令された豊臣秀吉の伴天連追放令による宣教師の畿内退去とあい前後する教会閉鎖までで継続したものと考えられている。その墓地は右近時代の高槻城内にあり、隣接地には1574(天正2)年建立の教会があったと推定されている。したがってこの墓地は本来イエズス会高槻教会に併設された墓地であったといえる。

木棺墓群 木棺墓27基が発見された墓地の特徴は、①墓域を区画する溝および欄干が存在し、墓域を区画している。②各墓を東西に等間隔に列状に配置する。③墓坑の長軸を南北に揃えた木棺内に、北頭位優位に葬る。④成人墓と幼児・小児墓が混在する。⑤埋葬姿勢は伸屍葬で、腕を曲げたり、うつぶせの例が多い。⑥成人埋葬木棺の蓋板に「二支十字」の墨書が1例ある。⑦27埋葬中2埋葬から木製のロザリオが出土した。

八重洲北口跡 東京駅八重洲北口遺跡は2001(平成13)年に調査されたキリシタン墓地である。八重洲北口遺跡は江戸城東部外堀の内側に位置し、10基の埋葬が発見された。江戸におけるキリスト教布教は教会側史料によると1599(慶長4)年に八丁堀または日本橋石町に、イエズス会に先駆けてフランシスコ会が教会を建て、その後1612(慶長17)年に同会の教会と修道院は、徳川家康による禁教令によって破却されている。八重洲北口遺跡のキリシタン墓地の年代は1590～1605年の間と推定されており、場所・年代とも教会史料の記載とは一致しない。

10基の埋葬が発見された墓地の特徴は、①墓域を区画するし字形の溝2000号がある。②墓群は群集する土坑墓が古く、散在する木棺墓群が新しく成立した可能性が高いこと。③土坑墓群は列状に配置された1399,1349,1351号墓とその周辺埋葬からなる。④埋葬は東西方向に長軸をとり、頭位は一定しない。⑤成人墓と幼児・小児墓が混在する。⑥埋葬姿勢は伸屍葬で、腕を曲げたものも多いが、曲げ方は一定しない。⑦成人埋葬の1380号木棺の蓋板に「ローマ十字」の墨書が1例ある。⑧10埋葬中1埋葬(小児墓1404号)から青銅製楕円形のメダイ1点と木製のロザリオ玉2点とガラス製ロザリオ玉49点が出土した。ほかに1966号墓からガラス製ロザリオ玉1点が出土している。

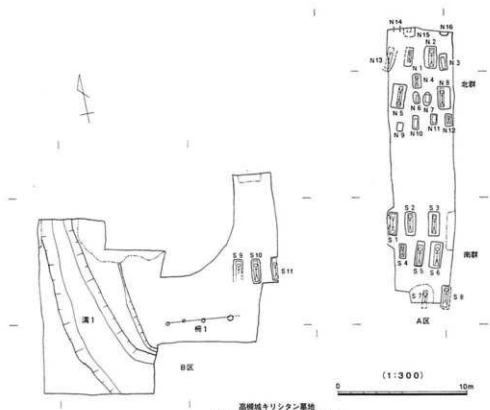
以上の2遺跡のキリシタン墓地については今野春樹氏による適切な考察¹²があり、それを参照しながら、中世大友府内町跡10次調査区の墓地と比較しておきたい(第6-3図)。

註9 高橋公一編「高槻城キリシタン墓地」(高槻市文化財調査報告22)2001、高槻市教育委員会

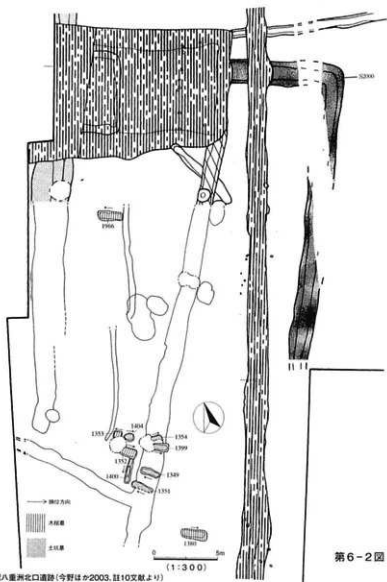
註10 今野春樹ほか「東京駅八重洲北口遺跡」2003、財団法人・千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会

註11 五野井隆史「日本キリスト教史」P142,1990、吉川弘文館

註12 今野春樹「キリシタンの葬制」『キリシタン文化研究会会報』123, 2004、キリシタン文化研究会



高槻城キリシタン墓地
 (「高槻城キリシタン墓地」2001より)



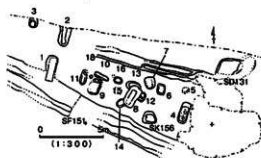
東京駅八重洲北口遺跡(今野ほか2003, 註10文献より)

第6-2図 キリシタン墓地

墓地の区画

まず第1の類似点としては墓域の区画があげられる。高槻城キリタン墓地では溝1と溝1が同時代の区画施設と推定され、それは教会と墓地を区画する位置にある。東京駅八重洲北口遺跡では墓地の北にし字状の溝S2000が存在し、その溝を延長するとキリタン墓がすべてをその内部に収めることになる。このようにキリタン墓地は墓域を囲す溝ないし欄列によって墓域と外界を区別している。

溝ないし欄列



第6-3図 中世大友府内町跡 10次の墓地

府内町跡10次の第2～3期の墓地は、道路SF151の北側の溝SD165・SD270・SD250によって道路と隔てられた大区画内に位置し、第3期の墓群が整備された16世第4四半期前半には、大区画の内部の墓域が溝SD131によってさらに区画されている。

等間隔列状

第2の類似点は墓の配置である。高槻城キリタン墓地では長軸を南北に合わせた木棺が、ほぼ等間隔に数列にわたって並んでいた。東京駅八重洲北口遺跡でも東西に長軸を持って列状に配置された1399.1349.1351号墓が存在し、その周辺に幼児埋葬と小児埋葬がおこなわれている。一部とはいえ高槻例と似た配置がおこなわれていると考えられる。府内町跡10次では第3期の墓群がこのような等間隔列状の配置をとる。すなわち1号墓、9号墓、8号墓、4号墓の4基がやや東に傾く南北長軸をとって、等間隔に並んでいる。その列の北には1号墓の延長上に2号墓が作られている。さらに9号墓と8号墓の周囲には幼児墓が追葬されている。このようにみると頭位方向には共通性がないが、成人墓については同一方向に揃えて等間隔に配列するのが、キリタン墓地の特徴であるといえる。しかし小児墓の配置については必ずしも共通ではない。成人墓の周囲に並行あるいは直交して追葬し、特定の成人墓との関係が明確な府内町跡10次例に対して、高槻城キリタン墓地では幼児墓を等間隔に成人墓と同じように配置しているため、特定の成人墓との関係は不明確である。八重洲北口遺跡は列状に配置された1399.1349.1351号墓の西側に小児埋葬の1404号墓や、1351あるいは1349号墓に直交する成人男性墓が存在する。これらの墓と列状配置をとる3基の墓との関係はそれほど明確ではないので、八重洲北口例は府内町跡10次例と高槻例の中間的様相と考えられる。

木棺墓
伸展葬

第3の類似点は墓域および木棺の有無である。高槻と八重洲北口の2遺跡では木棺が長方形であるため墓域の平面形も隅丸の長方形となるものが多数を占めるという共通性がある。土坑墓も同じで、これは埋葬が伸展葬で行われることに起因する。埋葬の方法には木棺墓のみの高槻例と、木棺墓と土坑墓の両者がある八重洲北口例がある。成人と幼児あるいは小児用との間で木棺には大きさに区別がある点は共通する。埋葬姿勢が基本的に伸展葬である点はキリタン墓地の重要な特徴である。府内町跡10次例との共通性は木棺の使用と土坑墓の存在である。第2期の5・6・7号墓と15号墓は方形の木棺が使用された可能性が高いが、13・16・17号墓は土坑に直葬された可能性が高い。第3期になると成人墓幼児墓を問わず、すべて木棺に埋められている。成人墓と幼児墓に使用された木棺には大きさに区別がある点も共通性と言ってよい。

次に相違点の第1は埋葬姿勢と木棺の形態である。この点については上記2遺跡との重大な相違点が存在する。伸展葬とその姿勢に対応した長方形木棺の使用がキリタン墓の最も著しい特徴といえるが、府内町跡10次例では、伸展葬・長方形木棺の使用は1号墓の成人埋葬と、幼児骨を伸展葬で長方形木棺に葬った10号墓、墓坑形態から推定される2号墓、幼児伸展葬の土坑墓と推定される11号墓の4基のみが、キリタン墓の特徴と共通するのみである。のこる14基の埋

埋葬と埋葬 葬姿勢は、成人墓においては仰臥屈葬に限られ、幼児墓は横臥屈葬と座葬である。さらに複雑な様相を呈するのは9号墓の状況である。仰臥屈葬の成人女性埋葬が行われた9号墓の北と西に密接な位置関係をもって、伸展葬の幼児埋葬である10号墓と11号墓が追葬されているのである。さらに使用された木棺もかなり様相をことにする。成人埋葬の8号墓と9号墓は屈葬を前提とした長さの短い方形木棺であり、4号墓では伸展葬が不可能な唐櫃を木棺に使用している。幼児墓でも6・7・12号墓は短い方形木棺であった。

第2の相違点は、キリスト教を示す装飾やキリスト教遺物の有無である。高槻例と八重洲北口例ではともに、木棺に黒書による十字架表現があり、埋葬内に被葬者の持ち物であるロザリオやメダイが副葬されていた。この点はおのおのの墓地をキリシタン墓地と断定する決定的な証拠となっていた。これに対して府内町跡10次例においては、黒書の有無は木棺の保存状態の悪さから検討できないので別にして、副葬品においてキリスト教遺物と断定できるものは皆無であった。わずかに幼児埋葬と推定されている11号墓から、小型のガラス小玉が1点出土している。ガラス小玉は仏教の数珠にも使われるのでキリシタン遺物とはいえないが、八重洲北口遺跡1966号墓からよく似たガラス小玉が1点出土している点に、わずかに共通性を見出すことができる。とはいえ上記2例のキリシタン墓地と同じように六道銭などは存在せず、屈葬という宗教性の希薄な埋葬習俗の有無が大きな違いである。

以上の比較を通していえることは、中世大友府内町跡10次Ⅱ区北調査区発見の墓地のうち、第2期と第3期の墓地は、その区画と位置から教会の敷地内に作られた墓地であり、特に第3期の墓地はキリシタン墓地特有の配置をとり、教会付属墓地としての外観を明確にもっていたものと推定される。そういう意味でこの墓地はイエズス会府内教会の内部に設けられた付属墓地であると考えられる。しかし第2期の幼児墓群や第3期の屈葬墓に葬られた人々が、キリシタンであったとは必ずしもいえないことも明白である。つまり教会墓地に葬られた人々は必ずしもキリスト教徒ではないのである。

中国人墓、朝鮮人墓、琉球人墓の可能性 つぎに宗教的な観点ではなく、民族的な埋葬習俗との比較を行っておきたい。というのも整理の過程で、伸展葬・長方形木棺墓がキリシタン墓の特徴ではないかと考えていたとき、明代の中国人墓や李氏朝鮮時代の朝鮮人墓および日本のごく一部では伸展葬・長方形木棺墓を使用しているのが、中世大友府内町跡10次調査区発見の墓地もその観点から検討するべきではないかという意見¹³に接した。さらに最近琉球の中世墓の中に唐櫃を埋葬容器とする習慣が存在することが知られるようになり¹⁴、府内町跡10次の4号墓の埋葬施設に唐櫃が用いられるのも単なる転用ではないのではないかという疑いがあるからである。

明代の中国人墓については、16世紀に遡る例は墓石もふくめて日本国内における調査例はない。しかし16世紀中葉以後、明の海禁政策の間隙をぬって密貿易に従事する華南出身の中国人が、日本国内に多数来住し、かなりの数の中国人が日本国内各地に定着した。16世紀後半には各都市に唐人町を作って集住したことはよく知られている。戦国時代の豊後府内にも「唐人町」があり、数代にわたって住み着いた中国人も知られている。その多くが福建省出身者で、かの地の墓はいわゆる亀甲墓であって墓碑を前面に立てる型式である。この墓制は中近世琉球の墓制に影響を与えたことが知られているが、日本国内においてはその影響はあまり知られていない。しかし長崎市周辺の近世中国人墓群¹⁵や、より古い17世紀初頭の例が九州においていくつか知られている。熊本県玉

註13 原田昭一氏の意見である。日本国内では、16世紀代の長方形伸展葬が、北関東を中心に分布するが西日本ではきわめて少ない。

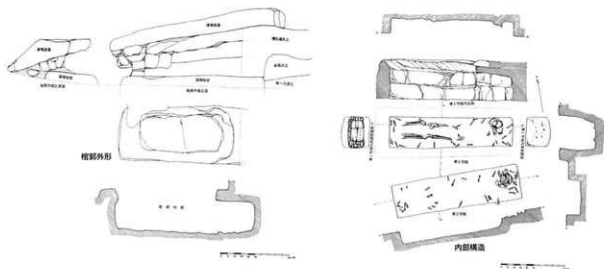
註14 安屋通『琉球の王権とグスク』（山川日本史リブレット42）2006、山川出版社

註15 坂井隆『長崎悟真寺の唐人墓地』『九州考古学』76,2001、九州考古学会

竹内光美・城田征義『長崎墓所一覧 悟真寺国際墓地図』1990、長崎文庫社

振倉謝公墳

名市に江戸時代初期の中国人墓3例が残っている。1619（元和5）年銘の考演沂郭公墓と1621（元和7）銘の林均吾墓は全面に墓碑と石積みの前庭部をもうけ、背後に小墳丘をもつと推定される。両墓の被葬者はいずれも福建省漳州周辺の出身で、その地の亀甲墓の系譜を引くものである。今ひ



第6-4図 振倉謝公墳（田添夏喜「本堂山遺跡」1985より）

一墳二葬

とつ振倉謝公墳は埋葬年代を記していないが「大明 振倉謝公墳」という墓碑銘と後述する墳墓の内容から先の2基の中国人墓と相前後する時期のものと考えられている^{註16}。この墳墓は1976（昭和51）年に調査された（第6-4図）。すでに墳丘以外の施設は消失し、前面に建てられていた墓碑もすでに移動していたが、伸展葬の男性一体を埋葬した長方形木棺（長さ190cm、幅40cm、深さ25cm）を漆喰帯で覆い、さらにその上に切妻形の屋根形に造形した巨大な漆喰の塊を椽の蓋としてのせた1号墓と、そのすぐそばに同じく伸展葬の成人を長方形木棺（長さ200cm、幅38cm、深さ20cm）にいれて葬った2号墓からなり、この2棺はひとつの墳丘に葬られた夫婦ではないかと考えられている。木棺はともに釘を使用したもので、1号墓では木棺の一部に鉄板が装着されていた。1号墓は盗掘を受けているのではっきりしないが、副葬品とみられる指輪形の銅環1点と鳥骨4点が出土し、2号墓の副葬品は皆無であった。

夫妻併葬

漆喰棺椁

今のところ戦国時代の中国人墓に最も近い墓として、キリシタン墓地と比較すると、伸展葬・長方形木棺の使用という点では共通しているが、夫婦を1単位に併葬するという配置はキリシタン墓地には認められない。また漆喰椁・漆喰蓋で覆うという点は大きく相違する。この配置のちがいを重視すると、府内町跡10次の墓地に中国人墓が存在するならば、等間隔列状配置にはならないと考えられる。もちろん単身者の場合には、キリシタン墓地のなかにあっては区別が付かなくなるので、中国人が葬られていないともいいがたい。しかしキリシタンになった中国人単身者の存在も十分考えられるので、かりにこの墓地に中国人が葬られていたとしても、そのこととキリスト教会墓地であることは矛盾しないと考えられる。

朝鮮人墓

つぎに李氏朝鮮時代の墓について。それが伸展葬墓であることはわかっているが、16世紀の朝鮮王朝は明にならって海禁政策をとっており、中国人に比べると来住した朝鮮人は非常に少なく、1590年代の豊臣政権による朝鮮侵略によって日本に連行されてからはじめて増加する。彼らの中にはキリシタンになったものも多いが、韓民族としてのアイデンティティを失った形で日本で生活したため、朝鮮人墓としての民族墓制を伝える墓は今のところみつからない。府内町跡10次

註16 田添夏喜「本堂山遺跡」『滑石小路棺式石棺 本堂山遺跡』（玉名市文化財調査報告6）1985、玉名市教育委員会

の墓地は1590年代以前であることが確実なので、伸展葬・長方形木棺墓の中に朝鮮半島の墓制の影響を考へることは今のところないといえる。

琉球人墓

琉球中世墓について。14～16世紀の琉球王国時代の沖縄島では、王墓ないし首長墓に唐櫃形の厨子が塚葬に使われている^{註17}。琉球王尚氏の初期王墓である浦添ようどれ^{註18}から、1273年に造営されたと推定されている英祖王代の漆塗板厨子の金具が発見され、その板厨子は層根蓋付唐櫃形と推定されている。また今帰仁村の百按司墓には1500年の銘のある層根蓋付十脚唐櫃形板厨子が存在する。唐櫃は本来日本で発達した家具で、側面に脚がつき平蓋付の6脚を基本とする箱である。その唐櫃が13世紀の琉球に伝わり、漆塗板厨子として合葬用の棺として利用され、14～15世紀には百按司墓のような層根蓋付十脚唐櫃形板厨子という琉球独自の形態を生み出している。さらに王族の墓では板厨子は15世紀前半に石製厨子にかわって一棺単体埋葬になる。

唐櫃形板厨子

このように唐櫃を埋葬に使う習慣が沖縄で発達するが、①層根蓋付十脚唐櫃形という琉球独自の形態を生み出すこと。②16世紀にはその形態を維持しながら石厨子に置き換わること。③なによりこの墓形式は琉球王家や有力な豪族に用いられており、庶民墓は17世紀には厨子型が用いられる。④そしてもっとも大きな違いは沖縄の厨子は洗骨した骨を取めるもので、地下に埋める木棺として用いることはないことである。したがって唐櫃が埋葬施設として使用された府内町跡10次調査の4号墓が琉球人墓である可能性は低いと考えられ、別の何らかの理由で木棺に利用されたと考へるべきであろう。

4. まとめ

以上の報告と検討の内容をまとめておく。

教会村墓地

①中世大友府内町跡10次Ⅱ区北調査区で発見された墓地のうち第2期と第3期に編年された17基からなる墓地は、1553(天文22)年から1587(天正15)年に存在したイエズス会府内教会の敷地内に設けられた墓地と考えられる。

等間隔列状配列

②墓地は7～8歳以下の幼児と小児ばかりが葬られた8基の墓からなる第2期から、等間隔列状に配列された成人墓を中心に幼児墓を追葬した第3期の墓地に推移し、後者の配置はキリシタン墓地の特徴を有している。第2期の墓は16世紀第3四半期に属し1560年代を中心とする時期に埋葬された。第3期は第4四半期前半、1570年代のある時点から1587(天正15)年までにつくられたものと推定される。

伸展葬と層葬

③伸展葬・長方形木棺というキリシタン墓に共通する埋葬様式を持つ墓は多くても4基に過ぎず、ほかの墓は屈葬あるいは座葬で文の短い方形木棺に葬られるという中世日本の伝統的埋葬様式をもつ。そのなかの1基の4号墓は唐櫃を木棺に使用する。

④16世紀の中国人あるいは朝鮮人・琉球人の民族的墓制の可能性は少なく、後述するように1570年代以後豊後府内に教会関係者以外の西欧人が居住した可能性も少ないので、墓地のほとんどは基本的に日本人が埋葬されたものと推定される。

⑤、キリスト教会の墓地であっても、キリシタンのみが葬られたわけではない。伸展葬・長方形木棺に埋葬された被葬者はキリシタンであった可能性は高いが、屈葬・方形木棺といった伝統的埋

註17 瀬戸哲也・知念隆博・新垣力「沖縄県」(狭川真一編)『中世墓資料集—九州沖縄編(2)』2004、中世墓資料集研究会

註18 註14 安川文獻

葬儀式に葬られた人々がキリスト教徒であったとはいえない。たとえば教会に身をよせて扶養されながらも、まだ洗礼を受けていない人々や、教会関係者によって埋葬された身寄りのない人々などが考えられる¹⁹。

第3節 イエズス会府内教会の歴史から

この節では、イエズス会府内教会の歴史をひもときながら、中世大友府内町跡10次Ⅱ区北調査区発見の墓地の変遷を、教会史料から再構成される府内教会の歴史と比較検討しておきたい²⁰。

1. ポルトガル人の来住とキリスト教の伝来

1545年
府内来航

豊後府内にはじめてポルトガル人が来たのは、1545（天文14）年頃、ジョルジュ・デ・ファリアら数名が中国船で来日した²¹のを嚆矢として、1547（天文16）年にはポルトガルのナウ船が府内に来航し、アイエゴ・デ・アラゴン等はそのまま府内に5年滞在している²²。その後1551（天文20）年9月にポルトガル船が府内に来航し、その府内到着を聞いて当時日本布教中であったフランシスコ・ザビエルが豊後府内を訪れている。1552（天文21）年には再びガゴ船長のナウ船が来航し、バルタザール・ガゴ神父をはじめとするイエズス会の第2次伝道団が来日し、彼らは当時布教長のトルスがいた山口にすぐに合流した。

1551年
ザビエル

2. 府内教会の始まりと育児院

1553年

翌1553（天文22）年2月10日、ガゴ司祭がイルマンのフェルナンデスとアルコンバをともなって山口から府内に帰還した。翌日大友義鎮（のちの宗麟）を訪ねたガゴ司祭は、義鎮から自領内での宣教師保護と布教許可状を与えられた。それに伴い土地寄進状が与えられ、教会・宿舎・菜園および望むものすべてを作る事のできる地所があたえられた²³。「地所」は原語でCANPOすなわち野原の意味で、人がすんでいない土地をあらわす。これは第4南北街路に面した「中町」の背後西側にひろがる広大な空き地がイエズス会に与えられたことをしめしている。そこに教会と修院カーサが造られると、同年7月21日に大きな十字架1基が立てられた。その間に地所内にはキリスト教徒たちを埋葬する墓地が定められ、たいへん美しい墓石1基がたてられたとある。この墓石というのは、個々の墓に立てられた標識ではなく、墓地全体のシンボルとして作られたものと考えられる。

「カンポ」

教会で十字架

1555年

その後1555（弘治元）年秋ルイス・アルメイダが育児院を作り、キリスト教徒の乳母数名と牝牛2頭が準備され、当時豊後府内の孤児の収容と養育にあたる一軒の家が用意された。この家と牛を飼養する施設は教会の近接地に設けられたと考えられている。

アルメイダ
育児院

註19 府内教会が存続した時代の豊後府内の信徒には病人や下層階級が多く、独自の屋敷を持つような有力者は自身の家の墓地に埋葬されるのが通常で、教会内の墓地に埋葬される人々は基本的に、既存の地縁血縁関係からはなれた人々であったと推定される。五野井「豊後府内の教会領域について」（註20文献）

註20 その際、この墓地を教会の墓地として解釈した五野井隆史氏の研究を中心に検討することを明記しておく。

五野井隆史「日本キリシタン史の研究」2002、吉川弘文館

五野井隆史「豊後府内の教会領域について」『東京大学史料編纂所紀要』14、2004、東京大学史料編纂所

註21 中島章「ポルトガル人の日本初来航と東アジア海域交易」『史淵』142、2005、九州大学大学院人文科学研究所

註22 岡本良知「十六世紀日欧交通史の研究」1936

註23 1554年5月付け、ゴア発スーネス・パレトのロヨラ宛書簡、「日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 訳文編之二（上）」、P45～46、1998、東京大学史料編纂所

3. 教会の拡張

- 1556年 1556(弘治2)年戦乱の山口を退去した布教長トルレスらが府内に避難し、以来1562(永禄5)年6月にトルレスが肥前横瀬浦に移るまで、豊後府内にはイエズス会の日本布教の本拠地となる。同年7～11月にはイエズス会の第3次伝道団を率いて来日したイエズス会インド管区副管区長スーネス・パレトが府内に滞在し、その間に1553(天文22)年に寄進された地所の隣接地を義鎖の承諾をえて購入し、土地をならし義鎖から贈与された家数軒を解体して、その資材で200人を収容できる教会を新築した。同1556(弘治2)年11月1日にはその教会の落成式が行われた。いこ1553年(天文22)に入手した地所を「下の地所」、新たに購入した地所を「上の地所」と称し、後者は樹木や竹に取り囲まれていたとつたえる。これはその場所が都市の外縁にあったことを意味するから、「下の地所」が中町西側の屋敷地背後の土地にあたるると、「上の地所」はそのさらに西隣の都市のはずれの樹木や竹が生える低地近くまで続いていたと考えられる。この1556(弘治2)年の教会敷地の拡大によって、イエズス会府内教会の敷地の基本が完成したと考えられる。

4. 病院と墓地

- 1557年 1557(弘治3)年には「下の地所」に病院が作られる。その際「下の地所」は病院と墓地に区切られ、病院はハンセン病患者用とほかの諸々の病氣用にわけられた。さらに同じ敷地内に「貧者の家」を作っている。さらに1559(永禄2)年には「下の地所」で大掛かりな改造が続き、病院は新築されて7月1日に完工し、職員の住宅が建癒され、貧者の家を慈悲院に改装している。この年7月には慈悲の組ミゼルコルジアがトルレスの指導のもと設立され、その会員12名の家族は病院の周囲に居住して、貧者や病院の世話をしている。この1559(永禄2)年においてほけ教会施設の造築は完了した。
- 1561年の手紙 墓地については注目すべき書簡が五野井氏によって紹介されている。それは1561(永禄4)年10月8日付け、ジョアン・フェルナンデスの書簡である^{註24}。「キリスト教徒達の葬儀は、(中略)慣例となっている(教会での)諸儀式を終えた後、最前に掲げた十字架をもって出発し、次に遺体がつづきます。(中略)キリスト教徒全員が、市外の特定の場所にある墓穴に赴いて、そこに埋葬します。ここ豊後の府内には平戸及び山口のキリスト教徒が所有しているような墓地を私達はもっていないからです。」とある。当時「下の地所」には一般のキリシタンを葬る墓地はなく、彼らは府内郊外の埋葬地に選ばれていたのである。五野井氏は、そこから「下の地所」にあった墓地に埋葬されたのは、育児院で養育されていた幼児や小児、あるいは病院で死去した患者、慈悲院に仮住まいしていた者達や教会関係者であったと推定している。
- 1560年代 1560年代にはイエズス会宣教師の医療活動は禁止され、病院を担ったアルメイダ修道士は府内からはなれて、九州各地の布教の最前線に立つことになる。それにともなって府内教会の病院及び育児院・慈悲院は慈悲の組ミゼルコルジアの会員によって維持運営されていることが、その後の史料によっても確認される^{註25}。府内教会は1562(永禄5)年にイエズス会の布教本部が肥前に移動したため、宣教師が減少し、教会の敷地が拡大することはなくなる。またイエズス会本部移転後、府内のキリスト教徒は宗麟の居所である臼杵に多く移り^{註26}、新設された臼杵教会に重点が移ったこともあり、府内の教会は宣教師が不在のことが多くなる。

註24 村上直次郎訳「イエズス会日本通信」上、P248、1968、雄松堂書店

註25 1566年10月24日付け、口之津発トルレス書簡、村上直次郎訳「イエズス会日本通信」下、P119、1969、雄松堂書店

註26 1565年10月25日付肥前福田発リス・アルメイダ書簡「十六・七世紀イエズス会日本報告集」第3期2巻、同朋社出版

5. 府内教会の最盛期とコレジオ

1578年の教勢 1577(天正5)年以後宣教師の来日数が急増する²⁷。1578(天正6)年の日本イエズ会の教勢は、イエズ会員51名、内訳は司祭21名、修道士30名である。日本各地の配置は次のように報告されている。

京都	司祭2名、修道士3名。
筑前博多	司祭2名、修道士1名。
肥後天草	司祭3名、修道士1名。
肥前口之津	司祭1名、修道士1名。
肥前大村長崎	司祭3名、修道士3名。
肥前平戸	司祭2名。
豊後府内	司祭4名、修道士13名。
豊後臼杵	司祭2名、修道士6名。(布教長カブラル、フロイス)

府内教会の変化 残る修道士2名(ジョアン、アルメイダ)は、大友宗麟の日向攻めに同行していた。この時点で、府内教会は新たに来日した宣教師の教育機関として活動しており、のちに府内にコレジオが置かれる基礎がすでにできつつあった²⁸。1578(天正6)年10月の時点では、豊後にイエズス会宣教師のほぼ半数が居住し、そのなかでも府内教会はイエズス会員がもっとも多い教会となっている。

ヴァリニャーノ 次に大きな変化が起こるのは1579(天正7)年のイエズス会巡察師ヴァリニャーノの来日である。

1580年 翌1580(天正8)年にはイエズス会の日本布教組織を変更し、長崎に布教本部が置かれ、そこに日本布教長が常駐し、日本全土を下、豊後、都の3地区に分割した。豊後地区長は1580(天正8)年に設置された府内のコレジオ院長が就任することになった²⁹。コレジオの位置は『府内古図』の現地比定の結果、府内教会の北側に広大な空閑地が広がることから、教会推定地の北側隣接地に建設されたものと考えられている³⁰。1581(天正9)年には当時豊後府内最大の仏教寺院であった臨濟宗万寿寺が焼失している。これによって、イエズス会府内教会は豊後府内における最大の規模を擁する宗教施設となっている。これ以後1586(天正14)年末の島津氏の侵攻までの数年間が、豊後におけるキリスト教の最盛期で、豊後国内各地に教会、司祭館が作られるとともに、地方における集団改宗、都市における布教の進展がみられた。

6. 府内教会の終焉

1587年 府内戦災 1587(天正15)年の島津勢の府内占領によって都市の大半が火災にあったが、宣教師が退避したあとの教会施設には秀吉の使者木食上人がはいてその宿舎になっていたため、島津勢は火をかけた³¹。島津勢撤退の後府内に入ったキリシタン大名黒田如水のとりなしにより、教会施設はイエズス会に返還され、そこにレベロ司祭が戻っているが、占領した豊臣勢による略奪が絶えなかったと言う。つづいて羽柴秀長の軍勢が到着すると、教会施設の大半を彼の宿舎として明渡した。そのため修造院と倉庫は残ったが教会は破壊され、秀長は居住した修院の建物の周りに堀のついた非常に厚い竹垣を作らせたという。さらにその直後の1587(天正15)年6月、教会の最大の

註27 来日宣教師の人数と名簿については、註20、五野井2002文獻に詳しい。

註28 1578年10月16日付け、豊後臼杵発ルイス・フロイス書簡。1579年12月10日付け肥前口之津発フランシスコ・カリオン1579年度日本年報『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第3期5巻、1992、同朋社出版

後者でこの2、3年間に新たに来日した司祭・修道士のために日本国内に神学校が1か所設けられ、現在15ないし16名の生徒がいて日本語を学んでいると報告されている。前者のフロイス書簡の宣教師数からみて、この神学校が置かれたのは、豊後府内教会であったと考えられる。

註29 高橋裕史『イエズス会の世界戦略』P96、2006、講談社選書メチエ372

伴天連追放令 被逐者であった大友宗麟が死去し、翌7月には豊臣秀吉が筑前博多にて伴天連追放令を發布した。それに伴い豊後に残った宣教師3名が退去した。これをもって府内教会は放棄され、その後再建されることはなかったのである。

7. イエズス会府内教会の変遷と墓地

以上のように教会史料から復元される教会敷地の利用の変遷を、墓地を中心に次のようにまとめることができる。

①教会は1553(天文22)年に「中町」の西背後の空地を貸与されて建設され、その敷地はのちに「下の地所」とよばれる。そのなかに墓地が設けられる。

②、1556(弘治2)年に「下の地所」の西に隣接する敷地を購入し、新教会を建設する。新たな地所は「上の地所」とよばれ、その敷地の西端は都市豊後府内西端の低地までを範囲とする広大なものとなる。

③1557(弘治3)年に「下の地所」の敷地を病院と墓地に二分する。

④墓地はこのように一貫して「下の地所」に設けられたが、一般の信徒は郊外の墓地に葬られている。教会内の墓地は、当時の府内教会が貧者と病者の教会といわれるとおり、教会外に身寄りのない信者や、信者以外の病死者、育児院でなくなった幼児・小児の墓であった可能性が高い。

⑤府内教会は1577(天正5)年に新たに来日した宣教師の教育機関としてその性格を変え、1580(天正8)年10月に発展してコレジオとなる。それまでの教会とコレジオが別の敷地を持つのか、同一の敷地内に作られたのか史料ではわからない。

⑥1587(天正15)年に豊薩戦争による戦乱と豊臣秀吉による伴天連追放令によって府内教会は放棄される。

以上の教会の変遷と中世大友府内町跡10次調査区の調査成果を重ねると、第1に、10次Ⅱ区北調査区の第2期と第3期の墓地は「下の地所」の南端にあたる可能性が高くなる。教会史料に類出する「上の地所」「下の地所」の位置を推量する有力な手がかりを得たことになる。

第2に、第2期の幼児墓群が作られた時期は1560年代を中心とする時期である。アルメイダが作った育児院の年代は1555～6年ごろに限られるので、年代的に一致しない。幼児墓群を府内教会の育児院にかかわる埋葬とする五野井氏の見解³²をただちに支持することはできないが、そうだとすると逆に育児院が60年代あるいは70年代まで存続した可能性を示すものであろう。

第3に、第3期の等間隔列状墓群はキリスト教会墓地特有のものであるが、そのように整備されるのは、府内教会の歴史をみるかぎり、1562(永祿5)年に大半の宣教師が肥前に移動したあとから、1570年代の後半に再び教育機関をもつ教会として再生されるまでの期間においては、教会の施設が整備された可能性は少なく、1577(天正5)年から始まる宣教師の急増と1580(天正8)年のコレジオ設置ともなう、府内教会の性格の変化に合わせて、墓地が整備された可能性が高い。

そして第4に、墓地の被葬者に必ずしもキリシタンとはいえない死者がともに埋葬されているのは、五野井氏が指摘したよう³³に、基本的にこの時代の府内教会の墓地が、教会外に身寄りのない死者のみを埋葬すると言う特殊な性格を持っていたからであろう。そうであればキリシタンの教会関係者以外の幼児・小児、病院で死んだ患者、慈悲院に扶養されていた貧者が埋葬された可能性が高いのである。

「下の地所」
と墓地

育児院と
幼児墓

教会の変化
と成人墓

非キリシタンを
葬る教会墓地

註30 註5文献、「大分市史」中、付録「地籍図に残る戦国時代の府内」1987、大分市

註31 ルイス・フロイス(松田毅一・川崎純太郎訳)『日本史』8、豊後編Ⅲ、P220.1978、中央公論社

註32 五野井隆史「豊後府内の教会領域について」P48『東京大学史料編纂所紀要』14、2004、東京大学史料編纂所

註33 註32、五野井隆史「豊後府内の教会領域について」P48

最後に五野井氏はもっともキリシタン慕らしい特徴を持つ1号墓の被葬者について、府内で死没した可能性のあるポルトガル人として、山口出身のキリシタンの娘と結婚し、慈悲の組の会員として教会の敷地内に居住したエステヴァン・マルティンスの可能性を示唆されている³⁴が、考古調査と人骨調査の結果は、これを肯定も否定もする材料はともになかったことを付け加えておきたい。

調査から報告書作製の過程において、五野井隆史氏、高橋公一氏、今野春樹氏、竹田宏司氏、木村幾多郎氏、坂本嘉弘氏、原田昭一氏、後藤晃一氏、三重野誠氏、山崎文子氏より、貴重なご意見や文献および資料の提供を賜った。記して感謝します。

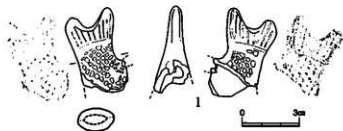
附節 遺物の補遺（第6-5図）

御所小路町

中世大友府内町跡第7次調査の報告は『豊後府内』³⁵と題して昨年報告した。その中で報告を逸した遺物の中に、大変貴重な遺物が存在することが今年度判明したので、この場を借りて報告する。

華南三彩

1は7次調査の16世紀第4四半期後半のG地区SK734土坑の一括廃棄層中から出土した中国製華南三彩の魚形水注の尾の破片である。先方に向かって注ぎ口の一部分がある。長さ4.2cmほどが残っていた。成形は型作りで、うろこの重なりとヒレを表現した左右対称の2枚の粘土板を内部が中空になるように張り合わせている。尾の先端は鉄の黄軸、胴は緑軸で彩色する。土坑SK734は、御所小路町に面し1587（天正15）年の島津氏侵攻による火災で焼失した武家屋敷と推定される敷地を片付けた際の火災処理土坑であるので、この華南三彩魚形水注はそのとき焼けた屋敷の中で使われていた貴重な文房具であると考えられる。



第6-5図 7次調査SK734出土遺物（1/2）

註34 註32、五野井隆史「豊後府内の教会領域について」P48～49

註35 田中裕介「中世大友府内町跡第7次調査区」『豊後府内』5（大分県教育庁歴史文化財センター調査報告8）、2006

遺物觀察表

10次 | 区調整区道物観察表 (土器・陶磁器①)

発掘No.	器 種	発掘地	径 (cm)			器種名	備 考	発掘No.	
			口徑	底径	高さ				
第2-501-1	荷花	壺	中国 (瓠状器)	(9.7)	(2.0)	2.8	SD001	C型	
第2-501-2	荷花	壺	中国 (瓠状器)	(9.0)	(2.0)	2.9	SD001	C型	
第2-501-3	荷花	壺	中国 (瓠状器)	-	-	4.8 (1.8)	SD001	C型	
第2-501-4	荷花	壺	中国 (瓠状器)	-	-	(4.4)	SD001		
第2-501-5	荷花	壺	中国 (瓠状器)	-	-	(4.4)	SD001		
第2-501-6	荷花	壺	中国 (瓠状器)	(10.2)	-	(2.5)	SD001		
第2-501-7	荷花	壺	中国 (瓠状器)	-	-	(3.5)	SD001		流片
第2-501-8	荷花	壺	中国 (瓠状器)	-	-	4.2 (2.7)	SD001		
第2-501-9	荷花	壺	中国	-	-	(7.4)	SD001		
第2-501-10	白磁	瓶	中国	(3.6)	-	(3.1)	SD001		
第2-501-11	天目	瓶	瀬戸内系	-	-	3.0 (1.4)	SD001		
第2-501-12	陶磁	壺	備前	(3.8)	-	-	SD001		36
第2-501-13	陶磁	甗鉢	備前	-	-	-	SD001	中層5層b~6層?	
第2-501-14	陶磁	甗鉢	備前	-	-	-	SD001	近層1層	
第2-501-15	陶磁	甗鉢	備前	-	-	-	SD001		
第2-501-16	陶磁	大甗	備前	28.0	-	-	SD001	3K006 No.10.39.44.45.52.61, 表反, 当層一持石段と報告	36
第2-501-17	京師系土師器	甗	香焼	12.8	-	2.5	SD001	内面一部焼痕	
第2-501-18	京師系土師器	甗	香焼	(14.0)	-	2.3	SD001		
第2-501-19	京師系土師器	甗	香焼	11.6	-	2.9	SD001	煎餅	
第2-501-20	京師系土師器	甗	香焼	(11.0)	-	3.8	SD001		
第2-501-21	土師系土師器	小甗	香焼	7.6	5.2	1.5	SD001	灯明皿, 埋付品	
第2-501-22	瓦葺土器	西伊	香焼	-	-	-	SD001		
第2-501-23	瓦葺土器	大鉢	香焼	-	-	-	SD001		36
第2-701-24	瓦葺土器	鉢	香焼	34.0	-	-	SD001		36
第2-701-30	土師系土師器	甗	香焼	-	-	-	SD001	志項時代	
第2-1001-1	荷花	壺	中国 (瓠状器)	(15.0)	-	(4.6)	SD010		
第2-1001-2	荷花	壺	中国 (瓠状器)	-	-	(2.6)	SD010		流片
第2-1001-3	荷花	壺	中国 (瓠状器)	-	-	(6.0) (2.8)	SD010		
第2-1001-4	土師系土師器	甗	香焼	7.1	5.8	2.4	SD010		
第2-1001-5	土師系土師器	甗	香焼	11.5	6.2	2.3	SD010		
第2-1001-6	土師系土師器	甗	香焼	10.6	5.3	3.7	SD010		
第2-1001-7	土師系土師器	小甗	香焼	12.1	6.3	2.5	SD010		
第2-1001-8	陶磁	郊磁	香焼	-	-	-	SD010		36
第2-1001-9	瓦葺土器	鉢	香焼	-	-	-	SD010		
第2-1001-10	瓦葺土器	西伊	香焼	(9.4)	(6.6)	6.3	SD010		36
第2-1001-11	瓦葺土器	大鉢	香焼	-	-	-	SD010		
第2-1201-1	土師系土師器	甗	香焼	8.9	5.3	2.4	SD028	甗器女口ク口目	36
第2-1201-2	土師系土師器	甗	香焼	12	(7.0)	2.8	SD028	甗器女口ク口目	
第2-1401-1	土師系土師器	甗	香焼	12.8	7.7	2.8	SK004		36
第2-1401-2	土師系土師器	甗	香焼	13.2	7.3	2.8	SK004		
第2-1701-1	陶磁	甗鉢	備前	-	-	-	SK006	近層1層 ナメスリメ	36
第2-1701-2	瓦葺土器	大鉢	香焼	43.8	32.0	29.0	SK006		36
第2-2201-1	荷花	壺	中国 (瓠状器)	-	-	(4.6) (2.0)	SK012		
第2-2201-2	荷花	壺	中国 (瓠状器)	-	-	(3.5)	SK012		
第2-2201-3	京師系土師器	甗	香焼	(8.7)	(2.6)	2.1	SK012	内面口縁部焼痕, 灯明皿	
第2-2201-4	土師系土師器	甗	香焼	-	-	5.5 (1.8)	SK012		
第2-2201-5	瓦葺土器	鉢	香焼	-	-	-	SK012		
第2-2401-1	荷花	壺	中国 (瓠状器)	-	-	(4.1)	SK015		人形手
第2-2401-2	荷花	壺	中国 (瓠状器)	-	-	-	SK015		
第2-2401-3	陶磁	甗鉢	備前	-	-	-	SK015	中層5層~6層	
第2-2801-1	土師系土師器	甗	香焼	11.2	6.5	2.9	SK019		36
第2-2901-1	陶磁	甗鉢	備前	-	-	-	SK022	中層4層	
第2-3101-1	陶磁	甗鉢	備前	-	-	-	SK026		36
第2-3401-1	陶磁	大甗	備前	-	-	-	SK027		36
第2-3701-1	瓦葺土器	土師	香焼	32.0	-	12.6	SK030		37
第2-3901-1	荷花	壺	中国 (瓠状器)	-	-	(6.3) (3.6)	SE014		
第2-3901-2	荷花	壺	中国 (瓠状器)	-	-	(1.7)	SE014		
第2-3901-3	荷花	壺	中国 (瓠状器)	-	-	(3.0)	SE014		流片
第2-3901-4	荷花	壺	中国	(9.6)	(3.4)	2.6	SE014		
第2-3901-5	白磁	瓶	中国	-	-	(3.4)	SE014		
第2-3901-6	土師系土師器	甗	香焼	13.5	(7.9)	3.8	SE014		
第2-3901-7	土師系土師器	小甗	香焼	5.0	3.5	1.3	SE014		
第2-3901-8	土師系土師器	甗	香焼	-	-	5.4 (1.1)	SE014		
第2-3901-9	土師系土師器	甗	香焼	-	-	(5.5) (1.5)	SE014		
第2-3901-10	陶磁	甗鉢	備前	-	-	-	SE014	中層4層	
第2-3901-11	陶磁	甗鉢	備前	-	-	-	SE014	中層5層?	37
第2-3901-12	陶磁	甗鉢	備前	-	-	-	SE014	中層5層?	
第2-3901-13	陶磁	甗鉢	備前	(34.6)	-	-	SE014	近層1層	
第2-3901-14	陶磁	甗鉢	備前	-	-	-	SE014	中層5層b~6層	
第2-3901-15	陶磁	甗鉢	備前	-	-	-	SE014	中層3層	37
第2-4201-1	荷花	壺?	中国 (瓠状器)	-	-	(1.8)	SE017		
第2-4201-2	荷花	壺	中国 (瓠状器)	-	-	(2.1)	SE017		流片
第2-4201-3	陶磁	甗	中国 (瓠状器)	-	-	(2.4)	SE017		
第2-4201-4	陶磁	舟形鉢	備前	-	-	-	SE017		
第2-4201-5	陶磁	甗鉢	備前	-	-	(11.3)	SE017		37

10次 | 区調査区遺物観察表 (土器・陶磁器②)

検出No.	遺物	生産地	法目 (cm)			遺物名	備考	図成No.	
			口径	底径	器高				
第2-42G-6	京都系土器類	瓦	在位	(12.7)	-	2.5	SE017		37
第2-42G-7	京都系土器類	瓦	在位	(10.6)	-	1.9	SF017		
第2-42G-8	京都系土器類	瓦	在位	(16.6)	-	2.4	SE017		
第2-42G-9	瓦類土器	火鉢	在位	-	-	-	SE017	瓦類	37
第2-47G-1	土師器土器	瓦	在位?	15.0	7.3	3.0	STC09	褐色瓦	37
第2-48G-1	瓦類	瓦	中央(横切)	(12.4)	(5.2)	3.2	ビット	4-BG P059	
第2-48G-2	陶器	天目	中切	-	(4.6)	(1.6)	鉛筆鉋	1-BG	
第2-48G-3	陶器	磁鉢	横切	-	-	-	鉛筆鉋	1-BG 中切6割	
第2-48G-4	土師器土器	小皿	在位	7.3	4.3	2.0	ビット	4-AG P002	
第2-48G-5	土師器土器	皿	在位	8.2	5.0	1.9	鉛筆鉋	1-BG 打明器, 厚付器	
第2-48G-6	土師器土器	鉢皿	在位	1.8	3.1	1.6	鉛筆鉋	4-AG	37
第2-48G-7	土師器土器	燗台	在位	-	(7.2)	4.1	ビット	5-BG P010	37
第2-48G-8	瓦類土器	火鉢	在位	-	-	-	鉛筆鉋	5-BG P010	37
第2-49G-18	古代土師器	鉢	在位	(12.3)	8.0	3.8	鉛筆鉋	5-AG	
第2-49G-19	土師器土器	鉢	在位	19.2	-	-	鉛筆鉋	3-BG 古瀬川代前期	
第2-49G-20	縄文土器	浅鉢	在位	-	-	-	鉛筆鉋	3-BG	
第2-49G-21	縄文土器	浅鉢	在位	-	-	-	鉛筆鉋	4-AG	
第2-49G-22	縄文土器	浅鉢	在位	-	-	-	鉛筆鉋	3-BG	

10次 | 区調査区遺物観察表 (瓦)

検出No.	遺物	材質	部位	法目 (単位cm)				法目 (g)	遺物名	備考	図成No.
				長さ	幅	厚さ	厚さ				
第2-8G-32	瓦	-	-	長さ (14.9)	幅 (13)	厚さ 2	-	SD001			
第2-8G-33	埴	-	-	長さ (18.7)	幅 (16)	厚さ 3	-	SD001			
第2-49G-16	埴	-	-	長さ (14.5)	幅 (13)	厚さ 4	-	ビット	4-BG P056		

10次 | 区調査区遺物観察表 (銅銭)

検出No.	銭銭名	遺物番号	国・王朝名	長さ (g)	直径 (mm)	厚さ	遺物名	備考	図成No.
第2-42G-11	南无通銭	621	唐	2.1	2.4	-	SE017		
第2-49G-17	-	-	-	1.9	2.3	-	ビット	4-BG P033	

10次調査区 | 区遺物観察表 (土製品・石製品・金属製品)

発掘No.	品類	材質	形状	寸法 (cm)						重量 (g)	遺物名	備考	図録 No.
				口徑	10.0	最長	2.0	-	-				
Ⅸ2-755-25	磁	鉄製品	-	口徑	10.0	最長	2.0	-	-	94.7	S0001		36
Ⅸ2-755-26	不明	鉄製	-	口徑	4.2	最長	4.0	厚さ	2.0	-	S0001		36
Ⅸ2-755-27	刀子	鉄製品	-	口徑	30.7	最長	2.6	厚さ	0.30	134.4	S0001		36
Ⅸ2-755-28	磁石	磁鉄石	-	口徑	12.9	最長	7.1	厚さ	4.60	-	S0001		36
Ⅸ2-755-29	石臼	凝灰岩	上臼	口徑	9.7	-	-	-	-	-	S0001		
Ⅸ2-755-31	石片	頁岩	-	口徑	(6.0)	最長	5.4	厚さ	(3.50)	-	S0001		
Ⅸ2-1055-12	土埴	土製	-	口徑	4.5	最長	1.1	孔径	0.35	-	S0010		
Ⅸ2-1855-3	石臼	栗山岩	上臼	口徑	36.4	最長	8.0	-	-	-	S0006		36
Ⅸ2-3755-2	不明銅製品	丹銅製	-	口徑	4.1	最長	1.0	-	-	-	S0030		37
Ⅸ2-3955-16	土埴	土製	-	口徑	5.0	最長	1.0	孔径	0.30	-	SE014		
Ⅸ2-4255-10	磁石	石炭層層岩	-	口徑	(4.5)	最長	6.7	厚さ	4.20	-	SE017		37
Ⅸ2-4455-1	磁片	鉄製品	-	口徑	33.7	最長	18.3	厚さ	2.70	-	SE017		37
Ⅸ2-4455-2	罎へう	鉄製品	-	口徑	30.0	最長	-	厚さ	1.30	-	SE017		37
Ⅸ2-4555-3	磁片	鉄製品	-	口徑	34.0	最長	15.7	厚さ	1.70	-	SE017		37
Ⅸ2-4755-2	釘	鉄製品	-	口徑	4.8	最長	0.6	厚さ	0.60	-	ST009		
Ⅸ2-4755-3	釘	鉄製品	-	口徑	4.3	最長	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
Ⅸ2-4755-4	釘	鉄製品	-	口徑	-	最長	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
Ⅸ2-4755-5	釘	鉄製品	-	口徑	-	最長	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
Ⅸ2-4755-6	釘	鉄製品	-	口徑	-	最長	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
Ⅸ2-4755-7	釘	鉄製品	-	口徑	2.0	最長	0.4	厚さ	0.20	-	ST009		
Ⅸ2-4755-8	釘	鉄製品	-	口徑	-	最長	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
Ⅸ2-4755-9	釘	鉄製品	-	口徑	-	最長	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
Ⅸ2-4755-10	釘	鉄製品	-	口徑	3.9	最長	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
Ⅸ2-4755-11	釘	鉄製品	-	口徑	-	最長	0.2	厚さ	0.20	-	ST009		
Ⅸ2-4755-12	釘	鉄製品	-	口徑	-	最長	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
Ⅸ2-4755-13	釘	鉄製品	-	口徑	-	最長	0.3	厚さ	0.30	-	ST009		
Ⅸ2-4755-14	釘	鉄製品	-	口徑	3.9	最長	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
Ⅸ2-4755-15	釘	鉄製品	-	口徑	5.0	最長	0.3	厚さ	0.30	-	ST009		
Ⅸ2-4755-16	釘	鉄製品	-	口徑	-	最長	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
Ⅸ2-4755-17	釘	鉄製品	-	口徑	2.9	最長	0.3	厚さ	0.30	-	ST009		
Ⅸ2-4755-18	釘	鉄製品	-	口徑	2.8	最長	0.3	厚さ	0.30	-	ST009		
Ⅸ2-4755-19	釘	鉄製品	-	口徑	4.0	最長	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
Ⅸ2-4755-20	釘	鉄製品	-	口徑	4.5	最長	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
Ⅸ2-4755-21	釘	鉄製品	-	口徑	-	最長	-	厚さ	-	-	ST009		
Ⅸ2-4755-22	釘	鉄製品	-	口徑	-	最長	-	厚さ	-	-	ST009		
Ⅸ2-4755-23	釘	鉄製品	-	口徑	-	最長	-	厚さ	-	-	ST009		
Ⅸ2-4855-9	土埴	土製	-	口徑	(3.5)	最長	1.6	孔径	0.30	-	各遺物	2-5区	
Ⅸ2-4855-10	土埴	土製	-	口徑	5.0	最長	1.3	孔径	0.40	-	各遺物	5-5区	
Ⅸ2-4855-11	土埴	土製	-	口徑	5.2	最長	1.2	孔径	0.30	-	各遺物	5-5区	
Ⅸ2-4855-12	土埴	土製	-	口徑	5.1	最長	1.5	孔径	0.40	-	各遺物	5-5区	
Ⅸ2-4855-13	磨石(砂かけ)	磨石製	-	口徑	5.5	最長	4.8	厚さ	1.70	-	ビット	PO01	37
Ⅸ2-4855-14	磁石	磁石	-	口徑	9.7	最長	8.2	厚さ	5.10	-	ビット	4-BISPO56	
Ⅸ2-4855-15	不明石製品	磁石	-	口徑	2.6	最長	2.7	厚さ	1.70	-	ビット	3-BISPO10	

10次Ⅱ区南調査区遺物観察表(土器・陶磁器①)

探跡No.	器 種	産地	口径 (cm)			遺物名	備 考	調査No.
			口径	底径	胎高			
第3-5區-1	荷花	唐	中国	-	-	(8.5)	SD111	ラマ式透弁 206、209、210と同一體
第3-5區-2	白磁	唐	中国(南越部)	-	-	(1.9)	SD111	
第3-5區-3	白磁	唐	中国	(13.0)	(6.6)	2.4	SD111	
第3-5區-4	陶器	唐	肥前	-	(4.6)	(2.1)	SD111	
第3-5區-5	陶器	鉢	備前	(21.6)	8.0	(11.4)	SD111	中規5-6區?
第3-5區-6	京都系土師器	唐	在地	(12.9)	-	1.8	SD111	
第3-5區-7	京都系土師器	唐	在地	(11.4)	-	2.2	SD111	
第3-5區-8	京都系土師器	唐	在地	(11.9)	-	2.2	SD111	
第3-5區-9	京都系土師器	唐	在地	(10.7)	-	1.9	SD111	駄土製7青
第3-6區-1	白磁	唐	中国(肥後)	-	4.5	(2.0)	SD113	
第3-6區-2	白磁	唐	中国(肥後)	-	-	(3.1)	SD113	透弁
第3-6區-3	土師系土器	唐	在地	7.9	(4.8)	2.3	SD113	
第3-6區-4	土師系土器	唐	在地	11.5	(5.4)	3.2	SD113	
第3-6區-5	土師系土器	唐	在地	11.8	6.0	2.8	SD113	灯明器、透付品
第3-6區-6	土師系土器	唐	在地	11.8	(5.9)	2.5	SD113	
第3-6區-7	土師系土器	唐	在地	(4.9)	-	1.8	SD113	
第3-6區-8	瓦葺土器	大鉢	在地	-	(5.0)	-	SD113	煎餅
第3-6區-9	瓦葺土器	大鉢	在地	-	-	-	SD113	
第3-6區-10	瓦葺土器	唐	-	-	-	-	SD113	
第3-11區-1	荷花	唐	中国(南越部)	-	(5.6)	(1.6)	SD116	
第3-11區-2	白磁	唐	中国(肥後)	(4.4)	-	(4.0)	SD116	
第3-11區-3	陶器	唐	中国	(17.0)	-	(2.5)	SD116	
第3-11區-4	白磁	唐	中国	(14.2)	-	(4.1)	SD116	口内灯
第3-11區-5	白磁	唐	中国(南越部)	-	4.4	(1.6)	SD116	
第3-11區-6	陶器	磁鉢	備前	-	-	-	SD116	
第3-11區-7	京都系土師器	唐	在地	(11.8)	-	2.0	SD116	
第3-11區-8	京都系土師器	唐	在地	(12.8)	-	2.4	SD116	
第3-12區-9	京都系土師器	唐	在地	12.5	-	2.1	SD116	
第3-12區-10	京都系土師器	唐	在地	(12.8)	(5.9)	2.0	SD116	
第3-12區-11	京都系土師器	唐	在地	(12.2)	-	2.7	SD116	
第3-12區-12	京都系土師器	唐	在地	12.7	-	3.0	SD116	
第3-12區-13	土師系土器	唐	在地	12.6	6.6	3.4	SD116	甕器な口内口
第3-12區-14	土師系土器	唐	在地	12.4	7.2	3.0	SD116	甕器な口内口
第3-12區-15	土師系土器	唐	在地	12.3	6.8	3.3	SD116	甕器な口内口
第3-12區-16	土師系土器	唐	在地	12.0	6.4	2.4	SD116	甕器な口内口
第3-12區-17	土師系土器	唐	在地	11.6	(6.6)	3.1	SD116	
第3-12區-18	土師系土器	唐	在地	11.4	5.5	2.6	SD116	甕器な口内口
第3-12區-19	土師系土器	唐	在地	10.9	6.2	2.6	SD116	
第3-12區-20	土師系土器	唐	在地	9.7	5.5	1.9	SD116	甕器な口内口 灯明器、一帯焼付品
第3-12區-21	土師系土器	唐	在地	8.1	4.4	1.9	SD116	
第3-12區-22	土師系土器	唐	在地	7.4	4.3	2.0	SD116	
第3-12區-23	土師系土器	唐	在地	7.1	4.6	2.9	SD116	灯明器、一帯焼付品
第3-12區-24	土師系土器	唐	在地	4.3	2.6	1.3	SD116	
第3-12區-25	土師系土器	高台	在地	-	(6.2)	3.7	SD116	
第3-12區-26	土師系土器	高台	在地	-	-	5.0	SD116	
第3-12區-27	瓦葺土器	大鉢	在地	-	-	-	SD116	煎餅
第3-12區-28	瓦葺土器	大鉢	在地	-	-	-	SD116-117	
第3-13區-1	白磁	唐	中国	-	-	(3.4)	SD117	口内灯
第3-13區-2	白磁	唐	中国(南越部)	-	(7.4)	(1.2)	SD117	
第3-13區-3	陶器	磁鉢	備前	-	-	-	SD117	直径1目 ナメスリメ
第3-13區-4	京都系土師器	唐	在地	13.4	-	2.3	SD117	内腹裏面有
第3-13區-5	京都系土師器	唐	在地	13.0	-	2.4	SD117	
第3-13區-6	京都系土師器	唐	在地	12.8	-	2.5	SD117	
第3-13區-7	京都系土師器	唐	在地	12.7	-	2.5	SD117	
第3-13區-8	京都系土師器	唐	在地	11.2	-	2.3	SD117	
第3-13區-9	京都系土師器	唐	在地	10.5	-	2.3	SD117	
第3-13區-10	京都系土師器	唐	在地	8.5	-	2.0	SD117	口内灯ナアに各付品
第3-13區-11	京都系土師器	唐	在地	6.2	-	2.1	SD117	内外両口縁裏面有、灯明器
第3-13區-12	土師系土器	唐	在地	12.1	5.6	2.9	SD117	甕器な口内口
第3-13區-13	土師系土器	唐	在地	12.1	6.1	3.2	SD117	甕器な口内口
第3-13區-14	土師系土器	唐	在地	12.0	6.2	3.3	SD117	甕器な口内口
第3-13區-15	土師系土器	唐	在地	11.7	6.9	3.1	SD117	甕器な口内口
第3-13區-16	土師系土器	唐	在地	10.9	5.5	3.0	SD117	甕器な口内口
第3-13區-17	土師系土器	唐	在地	9.2	4.8	2.6	SD117	甕器な口内口
第3-14區-16	土師系土器	唐	在地	-	5.9	(1.8)	SD117	甕器な口内口
第3-14區-19	土師系土器	唐	在地	13.1	7.1	2.6	SD117	
第3-14區-20	土師系土器	唐	在地	12.4	6.7	3.4	SD117	
第3-14區-21	土師系土器	唐	在地	11.4	6.4	2.4	SD117	
第3-14區-22	土師系土器	唐	在地	8.5	4.6	2.1	SD117	甕器な口内口
第3-14區-23	土師系土器	唐	在地	8.4	4.8	1.9	SD117	
第3-14區-24	土師系土器	唐	在地	8.1	4.6	1.8	SD117	
第3-14區-25	土師系土器	小皿	在地	4.5	2.7	1.3	SD117	
第3-14區-26	瓦葺土器	大鉢	在地	-	-	-	SD117	
第3-14區-27	瓦葺土器	鉢	在地	-	(17.4)	-	SD117	
第3-14區-28	土師系土器	高台	在地	-	6.6	4.1	SD117	

10次Ⅱ区南調整区道物観察表(土器・陶磁器②)

探跡No.	品名	産地	法目 (cm)			測深	測深名	備考	図版No.
			口径	底径	高さ				
第3-155B-1	青花	磁	中国 (東越前)	-	4.5	(1.9)	SD118		
第3-155B-2	白磁	磁	中国 (東越前)	(14.0)	-	(4.8)	SD118		
第3-155B-3	白磁	磁	中国 (東越前)	-	(6.2)	(2.0)	SD118		
第3-155B-4	白磁	磁	中国 (東越前)	-	(5.4)	(2.5)	SD118		
第3-155B-5	陶磁	磁	中国	-	-	(4.0)	SD118		
第3-155B-6	白磁	磁	中国	(12.4)	(6.0)	3.1	SD118	蓋物	
第3-155B-7	白磁	磁	中国	-	7.6	(3.5)	SD118		
第3-155B-8	陶磁	磁	朝鮮?	-	(5.0)	(1.7)	SD118		
第3-155B-9	陶磁	磁	備前	-	4.8	-	SD118		
第3-155B-10	陶磁	磁	備前	(28.4)	-	-	SD118	近世1層	
第3-155B-11	陶磁	磁	備前	-	-	-	SD118	近世1層 ナメスリメ	
第3-155B-12	陶磁	磁	備前	-	-	-	SD118	中世6層	
第3-155B-13	陶磁	大甕	備前	-	-	-	SD118		
第3-155B-14	陶磁	大甕	備前	-	-	-	SD118		
第3-155B-15	京都市土器類	磁	京地	13.0	-	1.9	SD118		
第3-155B-16	京都市土器類	磁	京地	12.8	-	2.8	SD118		
第3-155B-17	京都市土器類	磁	京地	12.3	-	2.3	SD118		
第3-155B-18	京都市土器類	磁	京地	10.7	-	2.0	SD118	内覆布巾袋? 口唇部に強いナメ	
第3-155B-19	京都市土器類	磁	京地	8.6	-	2.0	SD118	内外口縁部に印痕、灯明部、2層	
第3-106B-20	土師系土器	磁	京地	-	(6.0)	5.9	SD118		
第3-106B-21	瓦葺土器	大鉢	京地	36.4	-	-	SD118	基層No.9A基層,10Aと接合	
第3-198B-1	土師系土器	磁	京地	10.1	5.4	1.9	SK101	灯明部 両面白ク口縁	
第3-198B-2	土師系土器	磁	京地	12.1	5.9	2.5	SK101	灯明部、蓋物	
第3-205B-1	京都市土器類	磁	京地	(12.0)	-	2.3	SK102		
第3-205B-2	京都市土器類	磁	京地	(12.7)	-	2.2	SK102		
第3-205B-3	京都市土器類	磁	京地	(11.1)	-	1.8	SK102		
第3-226B-1	土師系土器	磁	京地	12.3	(6.6)	2.9	SK103	顔面白ク口縁	
第3-226B-2	瓦葺土器	数鉢	京地	15.6	-	-	SK103	SK104No.43,SD116-SD118と接合	
第3-256B-1	青花	磁	中国 (東越前)	-	-	(5.6)	SK104	ラマ式蓋鉢 207, 208, 210と同一個体	
第3-256B-2	青花	磁	中国 (東越前)	-	-	(2.6)	SK104	F群	
第3-256B-3	白磁	磁	中国	(12.6)	(7.1)	3.3	SK104		
第3-256B-4	白磁	磁	中国 (東越前)	-	(6.0)	(2.7)	SK104		
第3-256B-5	白磁	磁	中国 (東越前)	-	4.8	(3.9)	SK104		
第3-256B-6	陶磁	磁	備前	(13.0)	-	-	SK104		
第3-256B-7	陶磁	磁	備前	-	-	-	SK104	近世1層	
第3-256B-8	陶磁	磁	備前	-	-	-	SK104	近世1層 ナメスリメ	
第3-256B-9	京都市土器類	磁	京地	12.6	-	2.4	SK104		
第3-256B-10	京都市土器類	磁	京地	12.0	-	2.6	SK104		
第3-256B-11	京都市土器類	磁	京地	11.8	-	2.8	SK104		
第3-256B-12	京都市土器類	磁	京地	10.7	-	2.3	SK104	内外両面に印、灯明部	
第3-256B-13	土師系土器	陶鉢	京地	7.0	(6.3)	5.4	SK104		
第3-256B-14	土師系土器	磁	京地	15.8	8.7	3.3	SK104	口ク口縁	
第3-256B-15	土師系土器	磁	京地	13.1	7.2	2.8	SK104	口ク口縁	
第3-256B-16	土師系土器	磁	京地	13.0	6.9	3.1	SK104	口ク口縁	
第3-256B-17	土師系土器	磁	京地	11.2	(6.5)	2.7	SK104	口ク口縁	
第3-256B-18	土師系土器	磁	京地	11.2	(6.0)	2.5	SK104	口ク口縁	
第3-256B-19	土師系土器	磁	京地	6.4	4.8	2.1	SK104	口ク口縁	
第3-256B-20	土師系土器	磁	京地	7.7	3.8	2.2	SK104	口ク口縁	
第3-256B-21	土師系土器	磁	京地	-	6.3	(2.2)	SK104	口ク口縁	
第3-256B-22	土師系土器	磁	京地	-	5.2	(2.4)	SK104	口ク口縁	
第3-256B-23	土師系土器	製土器	京地	-	-	-	SK104	六角穴地輪用製土器	
第3-256B-24	瓦葺土器	磁	京地	-	(4.6)	-	SK104		
第3-269B-25	瓦葺土器	香炉	京地	-	-	-	SK104	彫部、彫の筋	
第3-269B-26	瓦葺土器	香炉	京地	-	-	-	SK104	彫部	
第3-269B-27	瓦葺土器	香炉	京地	14.7	-	-	SK104	彫部	
第3-289B-1	京都市土器類	磁	京地	10.7	-	2.4	SK115		
第3-289B-2	瓦葺土器	火鉢	京地	-	-	-	SK115	彫部及び灯部	
第3-306B-1	陶磁	磁	備前	-	-	-	SK120	中世6層	
第3-306B-2	土師系土器	小甕	京地	7.6	5.1	1.7	SK120		
第3-336B-1	京都市土器類	磁	京地	13.2	-	2.6	SK125		
第3-336B-2	京都市土器類	磁	京地	(13.0)	-	2.4	SK125	外覆黒灰布、口縁部キズ?	
第3-365B-1	土師系土器	磁	京地	11.4	6.0	2.6	SPO03		
第3-418B-1	白磁	磁	中国 (東越前)	-	-	(3.7)	SE126	蓋物	
第3-426B-1	青花	磁	中国 (東越前)	-	(4.0)	(2.7)	倉倉群	7-C区	
第3-426B-2	青花	磁	中国 (東越前)	-	-	(4.6)	倉倉群	10-A区ラマ式蓋鉢 207, 208, 209と同一個体	
第3-426B-3	青花	磁	中国 (東越前)	-	-	(5.6)	倉倉群	8-A区ラマ式蓋鉢 207, 208, 210と同一個体	
第3-426B-4	白磁	磁	中国 (東越前)	(13.5)	-	(4.9)	倉倉群	7-C区	
第3-426B-5	白磁	磁	中国	(11.4)	(6.0)	2.9	倉倉群	蓋物!	
第3-426B-6	白磁	磁	中国	-	(4.2)	(1.8)	倉倉群	8-C区	
第3-426B-7	陶磁	磁	中国	-	(6.0)	(3.6)	倉倉群	7-C区 蓋物	
第3-426B-8	陶磁	磁	中国	-	(3.0)	(0.5)	倉倉群	7-C区 ヒスイ鉢	
第3-426B-9	陶磁	不明	中国	-	-	-	倉倉群	7-C区	
第3-426B-10	陶磁	瓦	朝鮮	-	4.0	(2.5)	倉倉群	7-C区	
第3-426B-11	陶磁	不明	(10.0)	(4.0)	5.9	倉倉群	9-A区		
第3-426B-12	京都市土器類	磁	京地	12.8	-	2.3	倉倉群	9-A区 基層内	
第3-426B-13	京都市土器類	磁	京地	12.9	-	2.6	倉倉群	9-A区 基層内	

10次Ⅱ区南調査区遺物観察表(土器・陶磁器③)

発掘No.	器種	生産地	法目 (cm)			遺物名	備考	図録No.	
			口径	底径	脚径				
第3-42区-14	土師製土器	印	在布?	17.6	-	2.9	弥生前期	B-C区	
第3-42区-15	土師製土器	小口	在布	8.0	-	1.7	弥生前期	B-A区 耳障内	
第3-42区-16	土師製土器	小口	在布	6.6	4.6	2.1	弥生前期	7-C区 灯棚之、粘土埴輪?	
第3-42区-17	土師製土器	小口	在布	7.9	4.5	1.7	弥生前期	10-Z区	
第3-42区-18	土師製埴輪	蓋	在布	(5.2)	-	2.2	弥生前期	9-A区 耳障内	
第3-42区-19	土師製埴輪	蓋	在布	4.3	-	1.5	弥生前期	表穴	
第3-42区-20	土師製埴輪	蓋	在布	5.1	-	1.8	ピット	6-A区	39
第3-42区-21	瓦製土器	蓋	在布	(12.8)	14.4	(9.6)	弥生前期	耳障1	39
第3-42区-22	瓦製土器	不明	在布	-	8.6	-	弥生前期	9-A区 特殊土器 (磁器の成形型力?)	
第3-43区-53	土師製土器	製磁土器	在布	8.4	-	-	弥生前期	耳障1-2 六邊形埴輪製磁土器	
第3-43区-54	土師製土器	製磁土器	在布	12.2	-	-	弥生前期	トレンチ 六邊形埴輪製磁土器	
第3-43区-55	土師製土器	製磁土器	在布	-	-	-	弥生前期	7-区 六邊形埴輪製磁土器	
第3-43区-56	古代土師器	香	-	-	5.7	2.8	弥生前期	B-A区	
第3-43区-57	土師製土器	埴	在布	12.3	-	15.5	弥生前期	7-A区 古道中箱	
第3-43区-58	土師製土器	埴	在布	16.5	-	-	弥生前期	7-A区 古道中箱	

10次Ⅱ区南調査区遺物観察表(瓦)

発掘No.	器種	材質	法目 (単位cm)			法目 (g)	遺物名	備考	図録No.
			厚	径	径				
第3-17区-28	軒瓦	-	-	径 (6.3)	径 (11)	厚さ	2	-	SD118
第3-17区-29	埴	-	-	径 (14.2)	径 (15)	厚さ	2	-	SD118
第3-26区-33	埴	-	-	径 (8.5)	径 (10)	厚さ	4	-	SK104

10次Ⅱ区南調査区遺物観察表(銅銭)

発掘No.	銭名	切跡番号	国・王朝名	重量 (g)	厚径 (mm)	直径	銭名	備考	図録No.
第3-14区-33	永通泉	1408	明	3.1	2.4	-	SD117		
第3-17区-30	洪武通寶	1368	明	2.2	2.2	-	SD118	11-A区	
第3-43区-59	大観通寶	-	-	2.7	2.4	-	弥生前期	10-Z区 P04	

10次Ⅱ区南陽遺区遺物観察表(土製品・石製品・金属製品・木製品)

発掘No.	品名	材質	原産	寸法 (cm)				重量 (g)	遺跡名	備 考	図録No.
				長さ	幅	高さ	厚さ				
第3-505-10	土埴	土製	-	長さ 6.2	幅 2	高さ 1	-	-	-	SD111	
第3-505-11	磁石	石製(磁器類)	-	長さ 4.0	幅 3	高さ 2	-	-	-	SD111	
第3-125-29	土埴	土製	-	長さ 4.4	幅 1.4	高さ 0.30	-	-	-	SD116	
第3-125-30	土埴	土製	-	長さ (4.4)	幅 1.4	高さ 0.60	-	-	-	SD116	
第3-145-29	灰白	磁器	下白	長さ (4.5)	幅 (13.5)	高さ (2.90)	-	-	-	SD117	
第3-145-30	土埴	土製	-	長さ 5.0	幅 1.2	高さ 0.35	-	-	-	SD117	
第3-145-31	不明	陶製	-	長さ 4.6	幅 0.4	高さ 0.40	-	-	-	SD117	
第3-145-32	宝珠印土埴	胡瓶	-	長さ -	幅 -	高さ -	-	-	-	SD117	
第3-165-22	土埴	土製	-	長さ 7.1	幅 2.0	高さ 0.90	-	-	-	SD118	
第3-165-23	埴	埴	-	長さ 13.5	幅 6.3	高さ 4.50	-	-	-	SD118	
第3-165-24	埴	埴	-	長さ 8.9	幅 6.9	高さ -	-	-	-	SD118	
第3-165-25	埴	埴	-	長さ 30.0	幅 3.0	高さ 0.60	-	-	-	SD118	
第3-165-26	下駄	木製	-	長さ 19.9	幅 10.5	高さ 2.70	-	-	-	SD118	
第3-175-27	下駄	木製	-	長さ 19.9	幅 10.5	高さ 2.70	-	-	-	SD118	
第3-205-27	土埴	土製	-	長さ 5.6	幅 2.3	高さ 0.40	-	-	-	SK104	
第3-205-28	土埴	土製	-	長さ (5.4)	幅 1.7	高さ 0.30	-	-	-	SK104	
第3-205-29	土埴	土製	-	長さ 4.4	幅 1.4	高さ 0.30	-	-	-	SK104	
第3-205-30	磁の埴口	土製	-	長さ (6.0)	幅 4.3	高さ 4.10	-	-	-	SK104	
第3-205-31	埴	陶製	-	長さ 13.2	幅 1.2	高さ 0.20	13.0	-	-	SK104	
第3-205-32	石臼	石製	上白	長さ 11.3	-	-	-	5400.0	-	SK104	
第3-315-1	土埴	土製	-	長さ 2.7	幅 2.5	高さ 0.30	-	-	-	SK121	
第3-435-23	土埴	土製	-	長さ 6.7	幅 1.9	高さ 0.70	-	-	倉倉田 7-C区	39	
第3-435-24	土埴	土製	-	長さ 6.5	幅 2.0	高さ 0.60	-	-	倉倉田 7-A区		
第3-435-25	土埴	土製	-	長さ 6.1	幅 1.8	高さ 0.60	-	-	倉倉田 埴		
第3-435-26	土埴	土製	-	長さ 6.0	幅 2.0	高さ 0.65	-	-	倉倉田 埴4		
第3-435-27	土埴	土製	-	長さ 5.8	幅 2.0	高さ 0.60	-	-	倉倉田 9-A区 埴		
第3-435-28	土埴	土製	-	長さ 5.5	幅 1.0	高さ 0.40	-	-	倉倉田 10-A区 北		
第3-435-29	土埴	土製	-	長さ 5.5	幅 1.1	高さ 0.25	-	-	倉倉田 9-A区 埴		
第3-435-30	土埴	土製	-	長さ 5.2	幅 1.2	高さ 0.35	-	-	倉倉田 9-A区 埴		
第3-435-31	土埴	土製	-	長さ 5.1	幅 1.8	高さ 0.65	-	-	倉倉田 9-A区 埴		
第3-435-32	土埴	土製	-	長さ 4.9	幅 1.5	高さ 0.30	-	-	倉倉田 7-A区		
第3-435-33	土埴	土製	-	長さ 4.8	幅 1.8	高さ 0.70	-	-	倉倉田 10-A区 北		
第3-435-34	土埴	土製	-	長さ 4.7	幅 1.5	高さ 0.50	-	-	倉倉田 8-A区		
第3-435-35	土埴	土製	-	長さ 4.7	幅 1.4	高さ 0.50	-	-	倉倉田 9-A区		
第3-435-36	土埴	土製	-	長さ 4.6	幅 1.3	高さ 0.35	-	-	倉倉田 7-B区		
第3-435-37	土埴	土製	-	長さ 4.6	幅 1.7	高さ 0.60	-	-	倉倉田 7-B区		
第3-435-38	土埴	土製	-	長さ 4.5	幅 1.3	高さ 0.35	-	-	倉倉田 7-B区		
第3-435-39	土埴	土製	-	長さ 4.4	幅 1.3	高さ 0.40	-	-	倉倉田 10-A区 北		
第3-435-40	土埴	土製	-	長さ 4.2	幅 1.9	高さ 0.60	-	-	倉倉田 埴		
第3-435-41	土埴	土製	-	長さ 4.1	幅 1.9	高さ 0.70	-	-	倉倉田 10-A区		
第3-435-42	土埴	土製	-	長さ 3.9	幅 1.2	高さ 0.35	-	-	倉倉田 7-C区 西トレンチ		
第3-435-43	土埴	土製	-	長さ 3.7	幅 1.9	高さ 0.75	-	-	倉倉田 埴		
第3-435-44	土埴	土製	-	長さ 3.2	幅 1.8	高さ 0.60	-	-	倉倉田 8-B区		
第3-435-45	磁の埴口	土製	-	長さ 8.1	幅 (6.5)	高さ 3.20	-	-	倉倉田 7-A区 古代倉倉田	39	
第3-435-46	埴	陶製	-	長さ 5.4	幅 3.5	高さ 3.50	268.5	-	-	倉倉田 11-A区 埴	39
第3-435-47	陶製埴	陶製	-	長さ 1.3	幅 1.7	高さ 0.60	7.0	-	-	倉倉田 11-2区 埴	
第3-435-48	磁石	石製	-	長さ (3.2)	幅 3.4	高さ (0.40)	-	-	-	倉倉田 9-C区	
第3-435-49	磁石	石製	-	長さ (2.5)	幅 (2.0)	高さ (5.30)	-	-	-	倉倉田 埴 1・2	
第3-435-50	磁石	石製	-	長さ (7.2)	幅 (5.4)	高さ 1.00	-	-	-	倉倉田 埴トレンチ	
第3-435-51	石臼	石製	上白	長さ 12.7	-	-	-	1800.0	-	倉倉田 埴 1・2	
第3-435-52	石臼	陶製	-	長さ 5.3	幅 5.8	高さ 3.90	-	-	-	倉倉田 7-A区 古代倉倉田埴口	

第10次Ⅱ区北隣地区遺物観察表(土器・陶磁器①)

発掘No.	遺 物	産生地	法相 (cm)			遺物名	備 考	記録No.	
			口径	底径	胎高				
94-11E2	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	SF151	穴部から発見		
94-11E3	陶器	鉢	-	-	-	SF151			
94-11E6	陶器	壺	-	-	-	SF151	中層5層		
94-11E7	陶器	甕	-	-	-	SF151	中層6層		
94-11E8	陶器	甕	-	-	-	SF151	底層1層		
94-11E10	陶器	甕	-	-	-	SF151	中層5層		
94-11E11	京阪土器	土	(10.6)	-	2.0	SF151			
94-11E12	白磁	碗	-	-	-	SF151	毛彫り文		
94-11E13	陶器	壺	-	-	-	SF151			
94-11E15	土器土器	不明	-	2.5	4.0	3.4	SF151	土質もしくは地層厚	
94-11E17	京都府土器	小皿	(7.2)	1.7	(6.0)	SF151	穴部に伴行		
94-11E21	土器	土	-	12.6	2.3	6.0	SF151	穴PC-3 16号地層	
94-11E22	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	SF151	中層5層		
94-12E23	瓦葺土器	甕	-	-	-	SF151			
94-12E26	陶器	壺	(11.6)	-	-	SF151	中層5層		
94-12E29	陶器	甕	-	-	-	SF151	中層5層		
94-12E30	陶器	壺	-	-	-	SF151			
94-12E31	土器	壺	(17.0)	-	12.0	SF151	穴部から発見		
94-12E32	中層土器	鉢	(20.0)	-	-	SF151	中層		
94-12E33	陶器	壺	(25.0)	-	-	SF151	穴		
94-12E34	陶器	壺	-	-	-	SF151	穴部から発見		
94-12E35	内装	碗	(9.4)	-	-	SF151	穴		
94-12E36	京阪土器	洋皿	-	-	-	SF151			
94-12E37	京阪土器	洋	(9.6)	-	-	SF151			
94-16E1	京都府土器	洋	-	-	6.2	SD165	底層	40	
94-16E2	京都府土器	小皿	-	7.6	5.1	2.2	SD165	穴部から発見	*
94-16E3	京都府土器	小皿	-	7.0	4.2	1.7	SD165	穴部から発見	*
94-16E4	京都府土器	小皿	-	(7.8)	5.0	2.6	SD165	穴部から発見	*
94-16E5	陶器	土	-	-	(7.0)	-	SD165		
94-16E6	陶器	土	-	-	(8.5)	-	SD165		
94-16E7	陶器	土	-	-	-	-	SD165	C. 3層	
94-16E8	陶器	甕	(4.6)	-	-	-	SD165		
94-16E9	陶器	壺	-	-	-	-	SD165	中層5層	
94-16E10	陶器	大壺	(48.6)	-	-	-	SD165	中層5層	
94-16E11	陶器	壺	-	-	-	-	SD165	中層6層	
94-16E12	陶器	甕	-	-	-	-	SD165	中層5層	
94-16E13	陶器	甕	-	-	-	-	SD165	中層5層	
94-16E14	陶器	甕	-	-	-	-	SD165	中層5層	
94-16E15	陶器	甕	-	-	-	-	SD165	中層5層	
94-16E16	陶器	甕	-	-	-	-	SD165	中層5層	
94-16E17	陶器	甕	-	-	-	-	SD165	中層5層	
94-16E18	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SD165	穴部から発見	
94-16E19	瓦葺土器	火鉢	(42.6)	-	-	-	SD165		
94-16E20	瓦葺土器	火鉢	-	-	(35.6)	-	SD165		
94-16E21	瓦葺土器	甕	-	-	-	-	SD165		
94-16E22	中層土器	鉢	-	-	-	-	SD165		
94-16E23	土器	壺	-	-	3.4	-	SD165		
94-16E24	京都府土器	洋	-	12.8	7.6	3.45	SD165		
94-16E25	京都府土器	洋	-	(12.6)	7.8	3.1	SD165		
94-16E26	京都府土器	洋	-	(12.6)	7.6	3.2	SD165	穴部から発見	
94-16E27	京都府土器	洋	-	(11.4)	6.8	3.5	SD165	穴部から発見	
94-16E28	京都府土器	土	-	(11.2)	(5.8)	3.3	SD165		
94-16E29	京都府土器	洋	-	(12.4)	-	4.0	SD165		
94-16E30	京都府土器	洋	-	(13.4)	(5.8)	3.3	SD165		
94-16E31	京都府土器	洋	-	(12.0)	(6.0)	3.1	SD165		
94-16E32	京都府土器	洋	-	(9.6)	5.2	2.2	SD165	穴部から発見	
94-16E33	京都府土器	小皿	-	(6.4)	(7.2)	1.3	SD165	14層	
94-16E34	京都府土器	小皿	-	7.8	5.7	2.2	SD165	穴部から発見	
94-16E35	京都府土器	小皿	-	7.2	4.4	2.2	SD165	穴部から発見	
94-16E36	京都府土器	小皿	-	7.3	4.7	2.6	SD165	穴部から発見	
94-16E37	京都府土器	小皿	-	(6.4)	5.2	2.2	SD165	穴部から発見	
94-16E38	京都府土器	小皿	-	(6.8)	4.0	2.0	SD165	穴部から発見	
94-16E39	京都府土器	小皿	-	(6.8)	(4.6)	2.4	SD165		
94-16E40	京都府土器	小皿	-	(8.0)	(7.0)	2.3	SD165		
94-16E41	京都府土器	小皿	-	7.2	4.4	2.7	SD165		
94-16E42	京都府土器	小皿	-	(8.2)	(4.2)	1.95	SD165		
94-16E43	京都府土器	洋	-	(11.4)	5.5	3.1	SD165		
94-16E44	京都府土器	洋	-	(11.2)	6.0	2.9	SD165		
94-16E45	京都府土器	洋	-	(12.8)	(5.6)	3.3	SD165		
94-16E46	白口土器	土	-	(10.6)	(4.0)	3.0	SD165	穴部から発見	
94-16E47	白口土器	土	-	(11.0)	(5.4)	3.1	SD165	穴部から発見	
94-16E48	京都府土器	洋	-	-	(6.8)	-	SD165		
94-16E49	白口土器	洋	-	11.4	5.9	3.4	SD165		
94-16E50	京都府土器	小皿	-	(8.0)	-	2.05	SD165	穴部から発見	
94-16E52	白磁	土	中層	(11.9)	3.9	2.8	SD165	C層	

第10次 区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器②)

探検No.	器種	生息地	高さ (cm)			遺物名	備考	発掘No.
			口徑	底径	器高			
第4-16053	埴輪筒	京	中国	(10.4)	-	-	SD165	
第4-16054	陶甕	京	畿南	(24.0)	-	-	SD165	
第4-16055	陶甕	京	畿南	-	-	-	SD165	中層5周
第4-16056	陶甕	熊野	畿南	-	-	-	SD165	中層5周
第4-16057	陶甕	熊野	畿南	(28.0)	-	-	SD165	
第4-16058	陶甕	熊野	畿南	-	-	-	SD165	中層6周
第4-16059	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SD165	陶瓦文
第4-16070	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SD165	後層4周
第4-16071	瓦葺土器	甕	-	27.6	-	12.1	SD165	
第4-16072	底部糸切土師器	杯	-	-	6.0	-	SD165	口縁打欠
第4-16073	底部糸切土師器	杯	-	(12.2)	(6.6)	2.7	SD165	
第4-16074	底部糸切土師器	小壺	山口	(10.6)	(6.2)	1.7	SD165	大内系 椀状圧痕
第4-16075	段々土師器	甕	-	-	5.4	2.1	SD165	椀状圧痕 口縁打欠
第4-16076	底部糸切土師器	杯	-	(18.8)	(8.2)	3.9	SD165	
第4-16077	底部糸切土師器	甕	-	(7.0)	(4.4)	2.5	SD165	口縁部を磁器に磨研
第4-16078	底部糸切土師器	杯	-	(13.0)	-	2.7	SD165	椀状圧痕?
第4-16079	口夕目土師器	小壺	-	14.8	7.9	3.5	SD165	椀状圧痕
第4-16080	京都系土師器	小壺	-	9.1	-	2.05	SD165	1層 灯明燭 燈付筋
第4-16081	京都系土師器	甕	-	10.4	-	2.0	SD165	1層
第4-16082	京都系土師器	甕	-	(11.8)	-	2.5	SD165	2層 2次焼結
第4-16083	京都系土師器	甕	-	14.0	-	2.3	SD165	2層 口縁打欠
第4-16084	京都系土師器	甕	-	(12.2)	-	2.2	SD165	2層 口縁打欠
第4-16085	京都系土師器	小壺	-	(12.2)	-	2.3	SD165	2層 3周
第4-16086	底部糸切土師器	小壺	-	8.7	-	2.0	SD165	2層 灯明燭 燈付筋
第4-16087	土師器	甕台	-	(7.0)	-	5.0	SD165	A層
第4-16095	瓦形器	坏蓋	-	(16.0)	-	-	SD165	
第4-16096	古代土師器	坏蓋	-	-	-	-	SD165	8周記
第4-16097	瓦形器	坏台	-	(12.8)	8.2	3.9	SD165	8周記後半
第4-16098	陶甕	甕	畿南	(22.0)	-	6.8	SD165	
第4-16099	瓦形器	甕	-	(20.7)	-	(6.7)	SD165	
第4-160100	土師器	甕	-	(10.8)	-	(5.5)	SD165	熊土海部郡もしくは北九州産 金倉型
第4-160101	土師器	坏台	-	-	-	-	SD165	吉備形
第4-160102	陶甕	甕	中国	-	-	-	SD165	
第4-160103	陶甕	甕	瀬戸内産	-	-	-	SD165	おろし器
第4-16011	底部糸切土師器	小壺	-	8.5	4.8	2.2	SK255	
第4-16012	底部糸切土師器	小壺	-	(6.6)	(4.8)	(2.2)	SK255	
第4-2001	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SE300	陶瓦文
第4-2002	瓦葺土器	火鉢	-	(46.5)	-	-	SE300	
第4-2003	底部糸切土師器	小壺	-	-	(6.6)	-	SE300	
第4-2004	底部糸切土師器	小壺	-	-	(7.2)	-	SE300	
第4-2005	底部糸切土師器	小壺	-	-	(7.2)	-	SE300	
第4-2201	底部糸切土師器	小壺	畿南	(13.2)	-	-	SK256	中層4-5周
第4-2202	陶甕	甕	畿南	(40.6)	-	-	SK256	中層2周
第4-2203	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SK256	
第4-2204	底部糸切土師器	甕	山口	(13.8)	6.0	3.6	SK256	大内系
第4-2205	底部糸切土師器	火鉢	山口	(22.0)	(8.6)	-	SK256	大内系
第4-2206	底部糸切土師器	杯	-	-	6.4	2.2	SK256	
第4-2207	底部糸切土師器	牙	-	(12.4)	(7.8)	4.2	SK256	
第4-2208	底部糸切土師器	牙	-	(12.6)	(4.0)	3.3	SK256	
第4-2209	底部糸切土師器	牙	香取	(13.8)	(7.2)	4.4	SK256	
第4-22010	底部糸切土師器	牙	-	-	-	-	SK256	
第4-22011	底部糸切土師器	小壺	-	(7.2)	(4.6)	2.6	SK256	
第4-22012	底部糸切土師器	小壺	-	6.2	4.5	2.0	SK256	
第4-22013	土師器	甕台	-	5.3	5.3	3.8	SK256	
第4-22016	白磁	甕	中国 (西安産)	-	-	(4.7)	-	SK256
第4-2301	底部糸切土師器	小壺	-	7.4	4.8	2.2	SK 208	口縁打欠
第4-2302	陶甕	甕	畿南	-	-	-	SK 208	中層3ないし4周
第4-2303	口夕目土師器	杯	山口	(15.2)	(6.0)	3.4	SK 208	大内系
第4-2304	底部糸切土師器	杯	-	-	-	-	SK 208	
第4-2401	白磁	甕	中国	(13.8)	-	-	-	SK 206
第4-2601	白磁	甕	中国	-	-	3.8	SK 190B	
第4-2602	底部糸切土師器	牙	-	11.7	7.0	3.9	SK 190B	
第4-2603	底部糸切土師器	甕	山口	-	6.4	-	SK 190B	大内系 椀状圧痕
第4-2604	底部糸切土師器	甕	-	-	6.0	-	SK 199A	
第4-2605	底部糸切土師器	杯	-	11.1	6.0	3.5	SK 199A	
第4-2606	底部糸切土師器	杯	-	(14.4)	7.8	4.0	SK 199A	
第4-2607	底部糸切土師器	杯	-	11.7	6.6	4.1	SK 199A	口縁打欠
第4-2608	底部糸切土師器	杯	-	11.8	6.6	4.1	SK 199A	口縁打欠
第4-2609	底部糸切土師器	杯	-	11.1	7.3	4.0	SK 199A	口縁打欠
第4-26010	底部糸切土師器	杯	-	-	-	6.4	SK 199A	口縁部、底部を磁器に磨研
第4-26011	底部糸切土師器	甕	-	7.7	4.6	2.7	SK 199A	灯明燭 燈付筋 口縁打欠
第4-26012	底部糸切土師器	甕	山口	-	7.0	-	SK 199A	大内系
第4-26013	底部糸切土師器	甕	山口	-	(7.4)	-	SK 199A	大内系 椀状圧痕
第4-26014	口夕目土師器	甕	山口	(13.6)	(5.4)	2.4	SK 199A	大内系

第10次Ⅱ区北清地区遺物觀察表(土器・陶磁器③)

調査No.	遺 物	生産地	法目 (cm)			遺物名	備 考	図号 No.	
			口徑	底徑	最高				
94-2901	白磁	焼	(16.0)	-	-	SK203			
94-2902	成塚系切土器類	小塚	-	7.0	4.6	2.1	SK203	打明瓦 押付否	
94-2903	成塚系切土器類	小塚	-	-	(4.4)	-	SK203		
94-2904	成塚系切土器類	小塚	-	(8.2)	5.2	2.1	SK212	打明瓦 口縁部に押付痕	
94-3101	白磁	焼	-	-	-	-	SK251	口縁部に押付	
94-3102	草部系土器	焼	中国	-	-	-	SK251		
94-3103	瓦類土器	火鉢	-	(9.1)	(40.0)	15.5	SK251		
94-3104	瓦類土器	鉢	-	(14.7)	-	-	SK251		
94-3105	瓦類土器	甕鉢	-	(21.6)	(12.0)	7.8	SK251		
94-3106	瓦類土器	埴手	-	(8.6)	-	-	SK251		
94-3107	瓦類土器	甕	-	-	-	-	SK251		
94-3108a	瓦類土器	甕鉢	-	-	-	-	SK251		
94-3108b	瓦類土器	甕鉢	-	-	-	-	SK251		
94-3108c	瓦類土器	甕鉢	-	-	-	-	SK251		
94-3109	成塚系切土器類	押	-	(11.8)	(8.7)	3.0	SK251	破片圧痕	
94-3110	成塚系切土器類	押	-	(13.2)	(8.8)	3.2	SK251	破片圧痕	
94-3111	土器類	押	-	(12.0)	(8.8)	4.0	SK251		
94-3112	成塚系切土器類	小塚	-	8.0	6.0	2.2	SK251	打明瓦 押付否 口縁打突	
94-3113	成塚系切土器類	小塚	-	(7.2)	4.6	2.55	SK251	打明瓦 押付否 破片圧痕	
94-3118	古代土器類	埴蓋	-	14.6	-	2.2	SK251		
94-3119	遺物類	埴身	-	(12.2)	(8.6)	4.1	SK251	破片圧痕	
94-3120	古代土器類	埴身	-	(13.6)	(9.6)	3.4	SK251		
94-31221	陶器	甕鉢	中国	-	-	-	SK251		
94-31222	京都系土器類	二	在屯	(14.6)	-	(2.2)	SK251	2脚 埴鉢	
94-3501	成塚系切土器類	押	-	-	8.6	(1.9)	SD239	破片圧痕	
94-3502	成塚系切土器類	埴台	-	(7.0)	6.5	5.0	SD245	A組	
94-3801	白磁	焼	中国	-	-	-	(7.8)	SK247	
94-3802	陶器	大甕	焼前	(45.2)	-	-	-	SK247	中世5層
94-3803	口夕目土器類	押	-	11.5	6.2	2.7	SK247	口縁打突 2次焼付?	
94-4001	白磁	焼	中国	-	(5.4)	(3.0)	SK266A		40
94-4002	口夕目土器類	甕	-	(14.4)	(7.4)	3.1	SK266B		*
94-4003	成塚系切土器類	甕	-	14.4	7.6	3.55	SK266B	破片圧痕 埴筒	*
94-4004	成塚系切土器類	甕	-	13.4	7.4	3.5	SK266B	破片圧痕	*
94-4005	成塚系切土器類	小塚	-	(8.5)	(5.0)	2.45	SK266A	打明瓦 押付否	*
94-4006	成塚系切土器類	小塚	-	7.7	4.9	1.9	SK266A	打明瓦 押付否	*
94-4009	遺物類	埴蓋	-	(9.4)	-	(1.4)	SK266		*
94-4010	古代土器類	押	-	(14.0)	-	(3.6)	SK266		*
94-4011	陶器	甕	焼前	-	-	-	SK266	出目1層	*
94-4012	京都系土器類	二	在屯	-	-	-	SK266	2脚	*
94-4101	口夕目土器類	二	-	(11.4)	(5.4)	2.5	SK227		*
94-4301	白磁	焼	中国(康定県)	-	-	-	SK189	C. 曹 曹文類、少子式埴鉢	*
94-4302	陶器	甕鉢	-	-	-	-	SK189	中世3-4層	*
94-4303	瓦類土器	甕	焼前	-	-	-	SK189	中世5層	*
94-4304	瓦類土器	火鉢	-	-	-	-	SK189	中世5層	*
94-4305	瓦類土器	鉢	-	-	-	-	SK189	2次兵系	*
94-4306	成塚系切土器類	押	-	-	4.9	-	SK189		*
94-4401	白磁	焼	中国	(14.0)	-	-	SK193		*
94-4402	成塚系切土器類	甕	-	(11.8)	(6.6)	2.6	SK193	口縁打突	*
94-4403	口夕目土器類	押	-	(11.2)	(5.6)	2.8	SK193		*
94-4404	口夕目土器類	小塚	-	7.5	4.5	1.5	SK193	押付否 2次焼付	*
94-4701	陶器	甕鉢	焼前	-	-	-	SD140	中世5層	*
94-4702	陶器	甕鉢	焼前	-	-	-	SD140	中世5層	*
94-4901	瓦類土器	不詳	-	-	-	-	SE235	電子線の1印	*
94-4902	成塚系切土器類	押	-	13.0	(9.8)	4.0	SE235		*
94-4903	京都系土器類	二	在屯	-	-	-	SE235	1脚	*
94-4904	瓦類土器	埴蓋?	-	(8.8)	-	-	SE235	草部系64-43系類 埴瓦文	*
94-4905	遺物類	蓋	-	-	-	-	SE235		*
94-5101	成塚系切土器類	小塚	山口	-	(4.4)	-	SE144	大内系	*
94-5102	成塚系切土器類	-	-	(12.6)	(9.8)	4.1	SE144		*
94-5103	成塚系切土器類	小塚	-	8.2	3.4	2.5	SE144	打明瓦 押付否	*
94-5104	京都系土器類	二	在屯	-	-	-	SE144	2脚	*
94-5301	白磁	焼	中国	-	-	-	SE291	新瓦埴鉢文	*
94-5302	瓦類土器	埴手	-	(9.0)	-	-	SE291	新瓦埴鉢文	*
94-5303	成塚系切土器類	押	-	-	(5.8)	-	SE291		*
94-5304	京都系土器類	二	-	(13.2)	-	1.9	SE291	1脚	*
94-5401	成塚系切土器類	小塚	-	(7.0)	5.0	2.3	SK238		*
94-5402	京都系土器類	甕	-	-	-	-	SK238	口縁打突	*
94-5501	成塚系切土器類	小塚	山口	-	(5.6)	(1.5)	SK243	大内系	*
94-5701a	瓦類土器	瓦打	-	-	-	-	SD265		41
94-5701b	瓦類土器	瓦打	-	-	-	-	SD265	穿孔あり	*
94-5701c	瓦類土器	瓦打	-	-	-	-	SD265	穿孔あり	*
94-5701d	瓦類土器	瓦打	-	-	-	-	SD265		*
94-5701e	瓦類土器	瓦打	-	-	-	-	SD265		*
94-5702	瓦類土器	火鉢	-	-	-	-	SK265		*
94-5703	成塚系切土器類	小塚	-	-	-	-	SK265		*

第10次 Ⅱ区北溝直区遺物観察表(土器・陶磁器④)

発掘No.	種別	産地	径目 (cm)			遺物名	備考	図録No.	
			口徑	底径	高さ				
Ⅱ4-5724	灰赤土器蓋	小口	(8.0)	(6.0)	2.0	SK265			
Ⅱ4-6021	白磁	蓋	-	-	-	SK265	B-片破		
Ⅱ4-6022	白磁	小口	-	(2.4)	-	SK265	D破 1.5cm程		
Ⅱ4-6023	土師系土器	残片	-	5.6	4.2	SK265	A破		
Ⅱ4-6121	口付白土器蓋	蓋	(14.6)	(7.2)	2.15	SK163			
Ⅱ4-6221	赤系土器蓋	蓋	(12.9)	-	1.9	SK190			
Ⅱ4-6421	赤系土器蓋	蓋	(13.2)	-	2.6	SK191	1割		
Ⅱ4-6422	赤系土器蓋	蓋	-	-	-	SK191	1割		
Ⅱ4-6423	赤系土器蓋	蓋	(11.8)	-	(2.2)	SK191	2割		
Ⅱ4-6621	灰赤土器蓋	小口	-	(8.2)	-	1.6	ST192		
Ⅱ4-6622	赤系土器蓋	蓋	(13.2)	-	2.4	ST192			
Ⅱ4-6623	赤系土器蓋	蓋	(12.2)	-	2.0	ST192	1割		
Ⅱ4-6624	赤系土器蓋	蓋	-	12.6	2.2	ST192	1割		
Ⅱ4-6821	陶器	蓋	唐土(唐)	(11.1)	-	-	SD284	大塚3期	
Ⅱ4-6822	赤系土器蓋	小口	-	(9.6)	-	2.0	SD284	2割	
Ⅱ4-6823	赤系土器蓋	小口	-	(10.0)	-	2.1	SD284	2割	
Ⅱ4-6921	赤系土器蓋	小口	-	(10.0)	-	-	SK164	2割 刃先に片破	
Ⅱ4-6922	赤系土器蓋	蓋	-	-	-	-	SK164	2割	
Ⅱ4-7127	赤系土器蓋	蓋	-	(12.6)	-	2.55	SE234	2割	
Ⅱ4-7128	赤系土器蓋	小口	-	(10.0)	-	2.2	SE234	2割	
Ⅱ4-7129	白磁	碗	-	-	-	-	SE234	B-A/破	
Ⅱ4-7321	灰赤土器蓋	蓋	-	12.7	6.0	2.4	SK224	口縁欠	41
Ⅱ4-7322	赤系土器蓋	蓋	-	11.4	-	1.9	SK224	2割	*
Ⅱ4-7326	白磁	蓋	中国(唐唐陶)	-	-	-	SK224		
Ⅱ4-7327	白磁	碗	中国(唐唐陶)	-	5.0	-	SK224	C破 縁子破	
Ⅱ4-7328	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SK224		
Ⅱ4-7329	瓦葺土器	碗	-	-	3.5	-	SK224		
Ⅱ4-73210	灰赤土器蓋	蓋	-	-	5.5	-	SK224		
Ⅱ4-73211	赤系土器蓋	蓋	-	-	-	-	SK224		
Ⅱ4-73212	赤系土器蓋	蓋	-	-	-	-	SK224		
Ⅱ4-73213	赤系土器蓋	蓋	-	-	-	-	SK224		
Ⅱ4-73214	赤系土器蓋	蓋	-	-	-	-	SK224		
Ⅱ4-7521	白磁	蓋	中国(唐唐陶)	-	7.2	-	SK232		
Ⅱ4-7522	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SK232		
Ⅱ4-7523	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SK232		
Ⅱ4-7524	赤系土器蓋	蓋	-	(11.6)	-	2.2	SK232	O割	
Ⅱ4-7525	赤系土器蓋	蓋	-	(11.4)	-	1.9	SK232	1割	
Ⅱ4-7526	赤系土器蓋	蓋	-	(12.4)	-	-	SK232	1割	
Ⅱ4-7527	赤系土器蓋	蓋	-	12.6	-	2.2	SK232	1割	
Ⅱ4-7528	赤系土器蓋	蓋	-	(15.0)	-	-	SK232	1割 口縁欠	
Ⅱ4-7529	赤系土器蓋	蓋	-	(13.0)	-	2.6	SK232	1-2割	
Ⅱ4-75210	赤系土器蓋	蓋	-	(12.0)	-	-	SK232	2割	
Ⅱ4-75211	赤系土器蓋	蓋	-	(12.4)	-	-	SK232	2割	
Ⅱ4-75212	赤系土器蓋	蓋	-	(12.8)	-	-	SK232	1-2割	
Ⅱ4-75213	赤系土器蓋	蓋	-	(13.8)	-	-	SK232	2割	
Ⅱ4-75214	赤系土器蓋	蓋	-	(13.2)	-	-	SK232	2割	
Ⅱ4-75216	縄文土器	片破	-	-	-	-	SK232	破損品	41
Ⅱ4-75217	陶器	蓋	-	-	4.5	-	SK232	上野橋古窯 器名無	
Ⅱ4-7621	埴輪陶器	四目尊	中国	10.0	-	-	SK278	博古資料20	
Ⅱ4-7622	赤系土器蓋	蓋	-	-	-	-	SK278	2割 名不詳に付	
Ⅱ4-7621	瓦葺土器	火鉢	-	(31.6)	-	14.2	SK293	博古資料15	
Ⅱ4-7622	赤系土器蓋	蓋	-	-	-	-	SK293	1割	
Ⅱ4-7921	赤系土器蓋	蓋	-	-	-	-	SK267	2割	
Ⅱ4-8221	陶器	壺	唐	(23.2)	-	4.9	SD118	中世6期	41
Ⅱ4-8222	陶器	壺	唐	-	-	-	SD118	中世4-5期	
Ⅱ4-8223	陶器	壺	唐	-	-	-	SD118	中世6期	
Ⅱ4-8224	瓦葺土器	火鉢	-	(37.8)	-	(11.5)	SD118	上野橋古窯資料館	
Ⅱ4-8225	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SD118	文庫館	
Ⅱ4-8421	陶器	壺	唐	-	-	-	SD117	中世6期	
Ⅱ4-8422	陶器	壺	唐	-	-	-	SD117	中世6期	
Ⅱ4-8423	陶器	壺	唐	(27.4)	-	-	SD117		
Ⅱ4-8424	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SD117		
Ⅱ4-8425	瓦葺土器	火鉢	山口	(27.8)	-	-	SD117	池田系	
Ⅱ4-8426	赤系土器蓋	蓋	-	8.9	-	1.8	SD117	片破	
Ⅱ4-8621	白磁	蓋	唐	(12.0)	(6.4)	3.0	SD116	E-2割 16cm程	
Ⅱ4-8622	白磁	梅花文	中国(唐唐陶)	(13.4)	-	-	SD116	16cm	
Ⅱ4-8623	白磁	蓋	中国(唐唐陶)	(12.6)	(7.4)	2.8	SD116	E割	
Ⅱ4-8624	陶器	壺	唐	(41.4)	-	(9.0)	SD116	中世3期	
Ⅱ4-8625	陶器	壺	唐	-	-	-	SD116	中世5期	
Ⅱ4-8626	陶器	壺	唐	(23.0)	-	-	SD116	中世6A期	
Ⅱ4-8627	陶器	壺	唐	-	-	-	SD116	中世6A期	
Ⅱ4-8628	陶器	壺	唐	-	-	-	SD116	中世6A期	
Ⅱ4-8629	瓦葺土器	火鉢	山口	-	-	-	SD116	池田系	
Ⅱ4-86210	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SD116	上野橋古窯資料館	
Ⅱ4-86211	灰赤土器蓋	蓋	-	(13.0)	(5.6)	2.9	SD116		

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑤)

発見No.	種別	産地	径目 (cm)			遺物名	備考	発見No.
			口径	底径	器高			
Ⅱ4-86012	赤部瓦土器	小瓦	-	9.4	2.3	SD116	2期	
Ⅱ4-86017	赤代土器	坪瓦	(25.4)	-	(3.9)	SD116		
Ⅱ4-86021	瓦磁	碗	中国(殷家窯)	-	(7.4)	-	SD250	瓦部類に赤色埋込の施し
Ⅱ4-86022	瓦磁	碗	中国(殷家窯)	-	(7.8)	-	SD250	内面に文様、口縁部に刷目
Ⅱ4-86023	瓦磁	碗	中国(殷家窯)	-	-	-	SD250	
Ⅱ4-86024	瓦磁	碗	中国(殷家窯)	-	(6.8)	-	SD250	
Ⅱ4-86025	瓦磁	碗	中国(殷家窯)	(12.0)	-	-	SD250	
Ⅱ4-86026	瓦花	皿	中国(晋唐製)	-	(9.4)	-	SD250	B1群 遺物文
Ⅱ4-86027	瓦花	皿	中国(晋唐製)	-	-	-	SD250	7期
Ⅱ4-86028	瓦花	皿	中国(赤州窯)	(10.0)	(4.0)	2.7	SD250	C群碎磁
Ⅱ4-86029	瓦花	碗	中国(赤州窯)	(4.6)	(1.45)	-	SD250	
Ⅱ4-860210	瓦花	碗	中国(赤州窯)	-	(5.4)	-	SD250	综合資料36
Ⅱ4-860211	陶磁	香	中国(福州窯)	-	-	-	SD250	白地影絵襷輪 龍鳳文
Ⅱ4-860212	陶磁	香	備前	(13.2)	-	-	SD250	
Ⅱ4-860213	陶磁	鉢	備前	(17.0)	(13.8)	12.7	SD250	综合資料16
Ⅱ4-860214	陶磁	鉢	備前	(34.8)	(30.8)	68.4	SD250	中世5期 综合資料35
Ⅱ4-860215	陶磁	鉢	備前	-	-	-	SD250	中世6期
Ⅱ4-860216	陶磁	鉢	備前	(51.2)	-	(10.7)	SD250	中世5期
Ⅱ4-860217	陶磁	鉢	備前	-	-	-	SD250	中世6期
Ⅱ4-860218	陶磁	鉢	備前	(54.4)	-	-	SD250	近世1期
Ⅱ4-860219	陶磁	鉢	備前	(54.4)	-	-	SD250	近世1期
Ⅱ4-860220	陶磁	磁鉢	備前	-	-	-	SD250	中世3-4期
Ⅱ4-860221	陶磁	磁鉢	備前	-	-	-	SD250	中世4b-5a期
Ⅱ4-860222	陶磁	磁鉢	備前	(29.0)	-	-	SD250	中世5b期
Ⅱ4-860223	陶磁	磁鉢	備前	-	-	-	SD250	中世6期
Ⅱ4-860224	陶磁	磁鉢	備前	(33.0)	-	(10.0)	SD250	近世1a期
Ⅱ4-860225	陶磁	磁鉢	備前	(31.8)	12.4	13.7	SD250	近世1a期
Ⅱ4-860226	中世山形器	磁鉢	-	-	-	-	SD250	
Ⅱ4-860227	瓦部土器	瓦竹火鉢	-	-	-	-	SD250	瓦部陶片 断片に身丸
Ⅱ4-860228	瓦部土器	火鉢	-	-	-	-	SD250	
Ⅱ4-860229	瓦部土器	火鉢	(38.0)	(34.6)	-	-	SD250	综合資料46
Ⅱ4-860230	瓦部土器	火鉢	-	-	-	-	SD250	
Ⅱ4-860231	瓦部土器	火鉢	-	(33.6)	-	-	SD250	
Ⅱ4-860232	瓦部土器	火鉢	-	-	-	-	SD250	
Ⅱ4-860233	瓦部土器	鉢	-	-	-	-	SD250	
Ⅱ4-860234	瓦部土器	鉢	-	-	-	-	SD250	综合資料1
Ⅱ4-860235	瓦部土器	火鉢	-	-	-	-	SD250	多量彫文E印
Ⅱ4-860236	瓦部土器	火鉢	-	-	-	-	SD250	刷目
Ⅱ4-860237	土部器土器	鉢	-	-	-	-	SD250	
Ⅱ4-860238	成部系切土器	坪	-	12.1	7.4	4.5	SD250	口縁打突
Ⅱ4-860239	成部系切土器	小皿	-	7.6	4.0	2.0	SD250	口縁打突 洞野A組
Ⅱ4-860240	口夕口土器	皿	-	-	(6.6)	-	SD250	
Ⅱ4-860241	口夕口土器	皿	-	(15.6)	-	-	SD250	
Ⅱ4-860242	赤部系土器	小皿	-	(10.0)	-	1.5	SD250	2期 打明口 押付
Ⅱ4-860243	赤部系土器	小皿	-	(8.4)	-	1.9	SD250	打明口 口縁打突・押付
Ⅱ4-860244	赤部系土器	小皿	-	8.4	-	2.0	SD250	1期 内外一部押付
Ⅱ4-860245	赤部系土器	皿	-	(12.2)	-	-	SD250	2期
Ⅱ4-860246	赤部系土器	皿	-	(13.4)	-	2.1	SD250	2期
Ⅱ4-860247	赤部系土器	皿	-	-	-	-	SD250	2期
Ⅱ4-860248	赤部系土器	小皿	-	(10.2)	-	2.4	SD250	2期
Ⅱ4-860249	赤部系土器	小皿	-	(8.2)	-	1.8	SD250	2期
Ⅱ4-860250	赤部系土器	皿	-	(11.4)	-	2.9	SD250	3期
Ⅱ4-860251	成部系切土器	碗鉢	-	-	7.4	-	SD250	5期
Ⅱ4-860252	土部器土器	碗鉢	-	(6.8)	4.6	6.0	SD250	A2層
Ⅱ4-90021	瓦花	碗	中国(晋唐製)	(5.0)	-	-	SD270	E群 磨滅心
Ⅱ4-90022	瓦花	碗	中国(晋唐製)	(4.8)	-	-	SD270	E群 磨滅心
Ⅱ4-90023	陶磁	碗	備前	(13.4)	(5.6)	6.3	SD270	
Ⅱ4-90024	陶磁	碗	備前	-	-	-	SD270	中世5期
Ⅱ4-90025	陶磁	碗	備前	(54.4)	-	-	SD270	近世1期
Ⅱ4-90026	陶磁	碗鉢	備前	-	-	-	SD270	中世4b期
Ⅱ4-90027	陶磁	碗鉢	備前	-	-	-	SD270	近世1b期
Ⅱ4-90028	陶磁	碗鉢	備前	-	-	-	SD270	
Ⅱ4-90029	陶磁	碗	備前	-	-	-	SD270	
Ⅱ4-900210	陶磁	碗	備前	(11.4)	(4.6)	6.7	SD270	磁鉢 磨滅心 口縁磨滅跡
Ⅱ4-900211	瓦部土器	鉢	-	-	(9.0)	-	SD270	
Ⅱ4-900212	瓦部土器	皿	-	(12.2)	-	2.0	SD270	3期
Ⅱ4-900213	赤部系土器	皿	-	(11.6)	-	(2.3)	SD270	3期
Ⅱ4-900214	赤部系土器	皿	-	(11.6)	-	(2.3)	SD270	3期
Ⅱ4-900215	赤部系土器	小皿	-	(5.3)	(2.2)	2.1	SD270	
Ⅱ4-900220	赤部系土器	汁盃	-	(14.3)	-	3.7	SD270	7世紀前半
Ⅱ4-900221	赤部系土器	汁盃	-	-	-	-	SD270	磨滅心
Ⅱ4-900222	赤代土器	瓦	-	-	-	-	SD270	金貨型
Ⅱ4-9201	磁磁	碗	中国(殷家窯)	-	(8.0)	-	SD131	C-Ⅱ
Ⅱ4-9202	磁磁	鉢	中国	(26.6)	(13.6)	-	SD131	B群 综合資料11
Ⅱ4-9223	陶磁	碗	備前	(18.0)	(20.2)	(17.05)	SD131	综合資料14

第10次 区北調査区遺物観察表 (土器・陶磁器⑥)

探検No.	種別	形状	発見地	法目 (cm)			測得者	備 考	図録No.
				口徑	底径	高さ			
第4-9284	甕	甕	甕前	-	-	(19.1)	SD131	近世1層	
第4-9285	瓦葺土器	瓦葺	甕前	(20.0)	-	(16.6)	SD131	鎌倉資料2	43
第4-9286	煎茶土師器	杯	-	12.9	8.6	3.4	SD131	河野2層	
第4-9287	煎茶土師器	皿	-	-	-	-	SD131	1層	
第4-9288	煎茶土師器	皿	-	-	-	-	SD131	1層	
第4-9289	煎茶土師器	小皿	-	7.2	-	1.8	SD131	2層	
第4-92910	煎茶土師器	杯	-	(10.6)	-	(3.7)	SD131	3層 口縁打欠	
第4-9781	煎茶土師器	小皿	-	(8.0)	3.9	2.7	SD230	打物器 口縁部破損 河野A層	
第4-9782	煎茶土師器	小皿	-	(7.2)	4.0	2.4	SD230	河野A層	
第4-9783	煎茶土師器	皿	-	(10.6)	-	2.9	SD230	3層	
第4-9781	陶器	甕	甕前	(16.8)	22.2	58.4	SK261	鎌倉資料22	43
第4-9782	陶器	甕	甕前	13.5	15.0	23.5	SK261	鎌倉資料3 破損状況	44
第4-9783	陶器	甕	甕前	(36.8)	-	(5.5)	SK261		
第4-9784	煎茶土師器	皿	-	-	-	-	SK261		
第4-9785	煎茶土師器	皿	-	-	-	-	SK261	1層	
第4-9786	煎茶土師器	皿	-	(12.2)	-	2.4	SK261	2層	
第4-9787	煎茶土師器	皿	-	(8.6)	-	2.0	SK261	2層	
第4-9788	煎茶土師器	皿	-	(12.0)	6.35	2.3	SK261	煎茶土師器を複製	
第4-9881	煎茶土師器	甕	中国	(14.2)	-	(15.2)	SD292	鎌倉資料19	44
第4-9882	焼酎陶器	鉢	中国	(35.6)	-	(11.7)	SD292	C口焼酎 鎌倉資料8	#
第4-9883	瓦葺土器	瓦葺	-	-	-	-	SD292		
第4-9884	煎茶土師器	小皿	-	7.3	4.4	2.3	SD292	口縁部打欠	
第4-9885	煎茶土師器	皿	-	(11.6)	-	2.25	SD292	2層	
第4-102816	陶器	甕	甕前	(39.8)	-	(7.1)	SE148		
第4-102820	陶器	甕	中国 (南京製)	(12.4)	-	-	SE148	陶器破片文	
第4-102821	陶器	瓦葺	甕前	(34.8)	24.4	40.9	SE148	鎌倉資料4	44
第4-102825	白磁	鉢	中国 (南京製)	(11.6)	-	(2.2)	SE148	陶器破片文	
第4-102826	青花	甕	中国 (南京製)	-	(5.0)	-	SE148	E群 磨心	
第4-102827	青花	皿	中国 (南京製)	-	(16.5)	-	SE148	鎌倉資料25	
第4-102828	煎茶土師器	小皿	-	(8.6)	(6.4)	2.1	SE148	打物器 口縁部破片文	
第4-102829	煎茶土師器	小皿	-	(8.4)	6.0	1.9	SE148	河野2層	
第4-102830	煎茶土師器	皿	-	(10.8)	-	(2.4)	SE148	1層	
第4-102831	煎茶土師器	小皿	-	(9.6)	-	2.0	SE148	1層	
第4-102832	煎茶土師器	小皿	-	(9.2)	-	1.9	SE148	1層 口縁打欠	
第4-102833	煎茶土師器	皿	-	(11.6)	-	(2.1)	SE148	2層	
第4-102834	煎茶土師器	皿	-	(12.2)	-	2.6	SE148	3層	
第4-102835	土師器土	土師器	山口	-	-	-	SE148	粘土系	
第4-10381	青花	甕	中国 (南京製)	-	-	-	SK264	B1群	44
第4-10382	焼酎陶器	焼酎	中国	(17.2)	(6.6)	-	SK264	鎌倉資料18	#
第4-10581	煎茶土師器	小皿	-	8.6	-	2.0	SK236	1ないL 2層 遺物による判断 口縁打欠	
第4-10582	青花	皿	中国 (南京製)	-	-	-	SK236	B群	
第4-10583	煎茶土師器	皿	-	(13.0)	(8.0)	2.0	SK236	煎茶土師器を複製	
第4-10584	煎茶土師器	皿	-	(12.6)	-	2.2	SK236	2層	
第4-10585	煎茶土師器	皿	-	(14.4)	-	2.7	SK236	2層	
第4-10586	煎茶土師器	皿	-	(11.6)	-	2.6	SK236	3層	
第4-10587	土師器土	土師器	-	-	8.4	8.0	SK236	B群 口縁打欠	
第4-10781	白磁	皿	-	(11.8)	(6.5)	2.95	SK252	E-1群	
第4-10782	青花	甕	中国 (南京製)	(11.8)	-	-	SK252	E群 磨心	
第4-10783	青花	甕	中国 (南京製)	-	(4.8)	(2.5)	SK252		
第4-10784	青花	甕	中国 (南京製)	(12.8)	-	-	SK252		
第4-10785	白磁陶器	小皿	-	-	(4.0)	-	SK252	瓦葺	
第4-10786	陶器	瓦葺	瀬戸灰岩	-	3.2	(1.0)	SK252	口縁全体打欠	
第4-10787	陶器	瓦葺	甕前	-	-	-	SK252	中国6層	
第4-10789	煎茶土師器	皿	-	(13.2)	-	(2.4)	SK252	2層	
第4-10790	煎茶土師器	皿	-	(16.0)	-	2.7	SK252	2層 口縁打欠	
第4-107910	煎茶土師器	皿	-	(11.6)	-	2.2	SK252	2層	
第4-107911	煎茶土師器	皿	-	(13.2)	-	(1.95)	SK252	3層	
第4-10981	白磁	鉢花器	中国 (南京製)	(12.9)	(8.4)	3.1	SK269		
第4-10982	青花	甕	中国 (南京製)	(11.8)	-	-	SK269	E群 磨心 口縁内に四方文	
第4-10983	青花	皿	中国 (南京製)	(13.0)	-	(1.7)	SK269	B群	
第4-10984	青花	皿	中国 (南京製)	-	-	-	SK269		
第4-10985	青花	小皿	中国 (南京製)	(10.8)	(4.8)	2.8	SK269	煎茶土師器C群 磨心 口縁打欠	
第4-10986	磁器陶器	磁器	中国	-	-	-	SK269	外層へ少部	
第4-10987	陶器	瓦葺	瀬戸灰岩	(12.0)	-	(2.1)	SK269	大塚3層	
第4-10988	陶器	甕	甕前	-	-	-	SK269	中国6層	
第4-10989	陶器	瓦葺	甕前	-	-	-	SK269	近世1層	
第4-109810	煎茶土師器	皿	-	-	-	-	SK269	1層	
第4-109811	煎茶土師器	皿	-	-	-	-	SK269	3層	
第4-109812	煎茶土師器	皿	-	-	-	-	SK269	3層	
第4-109813	土師器土	土	-	-	-	-	SK269	河野B-1層	
第4-11181	陶器	甕	甕前	(12.0)	-	-	SK279		
第4-11381	白磁	鉢花器	中国 (南京製)	-	-	-	SK263		
第4-11382	白磁	甕	中国 (南京製)	-	4.8	-	SK263	B-V群	
第4-11383	青花	甕	中国 (南京製)	-	-	-	SK263	鎌倉資料20	
第4-11384	青花	甕	中国 (南京製)	(12.0)	6.4	2.6	SK263	E群	

第10次Ⅱ区北調査区道物観察表 (土器・陶磁器①)

標記No.	器名	生産地	法目 (cm)			道物名	備考	図号No.	
			口径	高さ	器高				
第4-11325	青花	磁	中国 (漳州窯)	30.8	(14.0)	7.6	SK263		44
第4-11326	青花	磁	中国 (漳州窯)	-	5.2	(1.5)	SK263	口縁全面付	
第4-11327	鉄原赤土胎磁	小皿	-	(5.9)	4.9	1.75	SK263	1号磁	
第4-11328	鉄原赤土胎磁	皿	-	(11.0)	(5.8)	2.9	SK263	京都系土胎磁を模写	
第4-11521	陶灰	磁鉢	備前	-	-	-	SK229	中世6期	
第4-11522	瓦葺土器	火鉢	-	(48.6)	-	-	SK229		
第4-11523	京都系土胎磁	口	-	-	-	-	SK229	2期 打割口 厚付巻	
第4-11621	京都系土胎磁	口	-	(13.0)	-	-	SK273	1期	
第4-11821	白磁	多角洋	中国	-	-	-	SK262	D群	
第4-11822	陶灰	天明窯	瀬戸文庫	(12.5)	(5.8)	5.7	SK262	埴白資料13	
第4-11823	陶灰	水取し	曲輪	(20.8)	(14.2)	17.6	SK262	京都系土胎磁を模写 埴白資料7	44
第4-11824	陶灰	巻	備前	(13.6)	-	-	SK262		
第4-11825	陶灰	巻	備前	(39.6)	-	-	SK262	中世6a期	
第4-11826	陶灰	巻	備前	-	-	-	SK262	中世6期	
第4-11827	陶灰	巻	備前	(56.8)	-	-	SK262		
第4-11828	陶灰	巻	備前	-	(41.2)	-	SK262		
第4-11829	陶灰	巻	備前	-	(20.0)	-	SK262	埴白資料27	
第4-118210	陶灰	巻	備前	-	-	-	SK262		
第4-118211	京都系土胎磁	皿	-	(14.4)	-	2.2	SK262	2期	
第4-118212	京都系土胎磁	小皿	-	(9.2)	-	2.1	SK262	2期	
第4-12121	白磁	壺	中国	-	-	-	SD141	E-1期	
第4-12122	青花	碗	中国 (漳州窯)	-	(5.6)	-	SD141	海子院を模写	
第4-12123	青花	碗	中国 (漳州窯)	(14.0)	4.7	7.5	SD141	資料により定数	
第4-12124	焼埴瓦器	鉢	中国	(21.2)	-	(3.7)	SD141	A群	
第4-12125	陶灰	鉢	中国	-	(13.2)	(2.0)	SD141	わずかに上げ底	
第4-12126	陶灰	皿	西上	-	-	-	SD141	埴原土器 1590-1610年	
第4-12127	陶灰	皿	備前	-	-	-	SD141	中世6期	
第4-12128	陶灰	皿	備前	-	-	-	SD141	中世6期	
第4-12129	陶灰	皿	備前	-	-	-	SD141	古伊1期	
第4-121210	陶灰	磁鉢	備前	-	-	-	SD141	中世6a期	
第4-121211	陶灰	磁鉢	備前	-	-	-	SD141	中世6a期	
第4-121212	陶灰	磁鉢	備前	(26.0)	-	-	SD141	古伊1期	
第4-121213	陶灰	磁鉢	備前	-	-	-	SD141	古伊1期	
第4-121214	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SD141	白磁陶文様印付 資料取付	
第4-121215	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SD141	資料による陶文が美しい	
第4-121216	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SD141	陶文文様印付 資料取付	
第4-121217	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SD141	多香香形文様印	
第4-121218	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SD141	巴文文印	
第4-121219	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	-	SD141	菊花文印	
第4-121220	瓦葺土器	鉢	-	(25.6)	(12.6)	8.35	SD141	玉縁口縁 磁鉢取付	
第4-121221	瓦葺土器	鉢	-	-	(14.4)	-	SD141	資料に写付付	
第4-121222	瓦葺土器	蓋鉢	-	-	-	-	SD141		
第4-121223	瓦葺土器	鉢	-	(14.4)	(16.4)	18.75	SD141	取付 下層付付	
第4-121224	瓦葺土器	鉢	山口	-	-	-	SD141	粉瓦系	
第4-121225	瓦葺土器	鉢	-	-	-	-	SD141	小型陶形土器	
第4-121226	口欠口土胎磁	口	山口	-	-	-	SD141	大内系	
第4-121227	鉄原赤土胎磁	鉢	-	12.6	6.8	2.3	SD141		
第4-121228	鉄原赤土胎磁	口	-	(12.6)	(6.3)	3.4	SD141	河野A群	
第4-121229	鉄原赤土胎磁	口	-	-	6.9	-	SD141	河野A群	
第4-121230	鉄原赤土胎磁	鉢	-	(13.0)	(6.8)	3.0	SD141	河野A群	
第4-121231	鉄原赤土胎磁	小皿	-	(8.8)	(4.8)	2.1	SD141	資料による陶文が美しい	
第4-121232	鉄原赤土胎磁	小皿	-	(7.8)	(4.4)	2.6	SD141	河野A群	
第4-121233	口欠口土胎磁	口	-	-	6.8	(1.5)	SD141		
第4-121234	口欠口土胎磁	口	-	-	6.4	(1.5)	SD141		
第4-121235	口欠口土胎磁	口	-	(11.0)	(5.8)	3.0	SD141		
第4-121236	口欠口土胎磁	口	-	-	(5.3)	-	SD141		
第4-121237	口欠口土胎磁	小皿	-	(9.0)	(5.0)	1.9	SD141	埴原の青丸4号物	
第4-121238	京都系土胎磁	皿	-	(12.4)	-	2.2	SD141	2期	
第4-121239	京都系土胎磁	皿	-	13.2	-	2.9	SD141	2期	
第4-121240	京都系土胎磁	小皿	-	(10.6)	-	(2.0)	SD141	2期 打割口 口縁付付	
第4-121241	京都系土胎磁	口	-	(12.8)	-	(2.5)	SD141	2期	
第4-121242	京都系土胎磁	口	-	(11.4)	-	3.7	SD141		
第4-121243	京都系土胎磁	小口	-	8.6	-	2.3	SD141	2期 打割口 全面に厚付巻	
第4-121244	京都系土胎磁	小口	-	(8.6)	-	2.0	SD141	2期 資料による打割	
第4-121245	土器土器	甕	-	-	6.4	4.4	SD141	A2群 資料に写付付	
第4-121246	陶灰	磁鉢	備前	-	(13.0)	-	SD141	マン2に転写	
第4-121247	瓦葺土器	鉢	-	(8.4)	-	(1.8)	SD167	A群 古代	
第4-12321	白磁	磁	中国 (定窯窯)	-	(7.0)	3.5	SD167		
第4-12322	青花	磁	中国 (磁州窯)	(11.6)	-	-	SD167	E群 御心	
第4-12323	青花	口	中国 (磁州窯)	-	-	-	SD167	F群 外裏に磁	
第4-12324	陶灰	陶磁利	備前	(4.8)	-	-	SD167		
第4-12325	陶灰	磁鉢	備前	(10.6)	-	-	SD167		
第4-12326	陶灰	磁	備前	-	-	-	SD167	2ないし3期	
第4-12327	陶灰	磁	備前	-	-	-	SD167	3ないし4期	
第4-12328	陶灰	磁鉢	備前	-	-	-	SD167	6a期	

第10次Ⅱ区北溝遺区遺物観察表(土器・陶磁器④)

発掘No.	遺物	産地	直径 (cm)			器種名	備 考	層位	
			口径	底径	器高				
第4-12309	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	SD167	須賀野手造文刺印		
第4-12310	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	SD167	須賀野手造文刺印		
第4-12311	瓦葺土器	火鉢	(33.0)	(31.6)	8.5	SD167			
第4-12312	瓦葺土器	火鉢	-	-	-	SD167	方角文刺印		
第4-12313	瓦葺土器	甕	山口	-	-	SD167	新伝系		
第4-12314	京都系土師器	小甕	(12.4)	-	1.7	SD167	1甕		
第4-12315	京都系土師器	小甕	(8.6)	-	2.35	SD167	1甕		
第4-12316	京都系土師器	小甕	(8.3)	-	1.9	SD167	1甕		
第4-12317	京都系土師器	小甕	-	-	-	SD167	1甕		
第4-12318	京都系土師器	甕	(12.4)	-	(2.2)	SD167	2甕 口径一割打欠		
第4-12319	京都系土師器	甕	-	-	-	SD167	2甕		
第4-12320	京都系土師器	甕	(11.6)	-	(1.8)	SD167	2甕		
第4-12321	京都系土師器	甕	(11.8)	-	2.2	SD167	2甕		
第4-12322	京都系土師器	甕	-	-	-	SD167	2甕		
第4-12323	京都系土師器	小甕	(8.0)	-	(2.1)	SD167	2甕 灯明罐 腹付底		
第4-12324	京都系土師器	小甕	(8.4)	-	2.15	SD167	2甕 灯明罐 腹付底		
第4-12325	京都系土師器	小甕	(8.0)	-	1.6	SD167	2甕 灯明罐 腹付底		
第4-12326	京都系土師器	小甕	-	9.0	2.0	SD167	2甕 灯明罐 腹付底		
第4-12327	京都系土師器	甕	(11.6)	-	2.3	SD167	3甕		
第4-12343	古代深埋器	片蓋	-	(10.0)	-	SD167	片蓋紐		
第4-12344	古代土師器	片蓋	-	-	-	SD167			
第4-12501	白磁	甕	(12.6)	(6.4)	2.65	SD168	16世紀後半		
第4-12502	白磁	瓶	中国 (陝西)	-	-	SD168		45	
第4-12503	白磁	鉢	中国 (陝西)	-	-	SD168			
第4-12504	白磁	鉢	中国 (陝西)	(12.4)	(6.1)	2.8	SD168		
第4-12505	白磁	甕	(12.6)	(8.0)	3.1	SD168		16世紀後半	
第4-12506	白磁	甕	中国 (陝西)	-	-	SD168			
第4-12507	白磁	甕	中国 (陝西)	(11.0)	-	SD168	E群		
第4-12508	白磁	甕	中国 (陝西)	-	-	SD168	F群		
第4-12509	黄褐色陶器	甕	中国	(10.6)	(2.4)	SD168			
第4-12510	陶器	甕	備前	-	-	SD168	中世4~5層		
第4-12511	陶器	舟形鉢	備前	(4.8)	-	SD168			
第4-12512	陶器	甕	備前	-	-	SD168	中世5層		
第4-12513	陶器	甕	備前	-	-	SD168	中世5b層		
第4-12514	陶器	甕	備前	(28.6)	-	SD168	中世1a層		
第4-12515	陶器	天目鉢	油戸英宜	-	-	SD168			
第4-12516	鹿野系土師器	小甕	-	7.8	5.0	1.5	SD168	河野5層	
第4-12517	京都系土師器	甕	(12.0)	-	-	SD168	1甕		
第4-12518	京都系土師器	甕	-	-	-	SD168	4層 器形による異変一増減に使用か		
第4-12524	古代土師器	甕	(13.2)	-	-	SD168	遺熱による劣変		
第4-12701	磁器	甕	-	(4.6)	-	SE147	16世紀		
第4-12702	陶器	甕	備前	-	-	SE147	中世6b層		
第4-12703	陶器	甕	備前	-	-	SE147	中世6b層		
第4-12704	京都系土師器	小甕	(10.3)	-	2.3	SE147	2甕		
第4-12707	青花	甕	中国 (陝西)	(6.8)	-	SE147	磁器		
第4-12708	京都系土師器	甕	(12.4)	-	(2.5)	SE147	2甕		
第4-12709	京都系土師器	甕	13.4	-	(2.0)	SE147	2甕		
第4-12711	青花	甕	中国 (陝西)	(7.4)	-	SE147	F群 外周に横 割面		
第4-12901	陶器	甕	備前	(48.6)	(6.5)	SE210	中世5層		
第4-12902	陶器	甕	備前	-	-	SE210	遺物1層		
第4-12903	瓦葺土器	甕	-	(14.6)	(11.8)	SE210	遺物資料2		
第4-12904	京都系土師器	小甕	(9.4)	-	2.0	SE210	1甕 口径部1割打欠		
第4-12905	京都系土師器	小甕	(8.0)	-	1.9	SE210	灯明罐 口径に近く底付付		
第4-12909	瓦葺土器	火鉢	(37.2)	(30.4)	30.2	SE210			
第4-12910	京都系土師器	甕	-	-	-	SE210	1甕		
第4-12911	京都系土師器	甕	(12.0)	-	(2.1)	SE210	2甕		
第4-13201	陶器	甕	備前	(16.6)	(3.6)	SZ18	尾三白 鎌倉資料9	45	
第4-13201	白磁	甕	-	(6.4)	-	SK231	鎌倉資料23		
第4-13202	白磁	甕	中国 (陝西)	-	-	SK231	器底のみ		
第4-13203	白磁	甕	中国	(7.2)	-	SK231			
第4-13204	青花	甕	中国 (陝西)	-	-	SK231	C群 外周に口文 蓮子葉		
第4-13205	青花	甕	中国 (陝西)	-	-	SK231	E群 器底心 内周に口文		
第4-13206	青花	甕	中国 (陝西)	-	-	SK231	E群		
第4-13207	青花	甕	中国 (陝西)	(9.2)	(5.0)	2.65	SK231	E群	
第4-13208	青花	甕	中国 (陝西)	(9.8)	-	(2.0)	SK231	E群	
第4-13209	青花	甕	中国 (陝西)	-	-	SK231			
第4-13210	青花	甕	中国 (陝西)	(9.8)	(5.2)	2.8	SK231	E群	
第4-13211	青花	甕	中国 (陝西)	-	-	SK231	F群		
第4-13212	青花	甕	中国 (陝西)	-	-	SK231			
第4-13213	青花	甕	中国 (湖州)	-	-	SK231			
第4-13214	京都系土師器	甕	(12.4)	-	2.1	SK231	1甕		
第4-13215	京都系土師器	甕	(10.8)	-	(2.4)	SK231	2甕		
第4-13216	京都系土師器	甕	(12.4)	-	(2.7)	SK231	2甕		
第4-13217	京都系土師器	甕	(12.0)	-	2.5	SK231	2甕		
第4-13301	京都系土師器	甕	(11.2)	-	2.0	SK215	2甕		

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑨)

発掘No.	器種	生産地	寸法 (cm)			器種名	備考	図録No.	
			口径	底径	高さ				
第4-13302	京都系土師器	白	-	-	-	SK215	2層		
第4-13303	京都系土師器	-	-	-	-	SK215	口縁部に残りかけの刻み目		
第4-13701	海南三河	白	中国	-	-	SP213		45	
第4-14001	京焼陶磁器	灰	中国	-	-	SK160			
第4-14301	土師系土器	灰	-	-	-	SK246	奈良時代		
第4-14401	瓦州土器	灰	-	-	-	SP195	瀬川付		
第4-14402	京都系土師器	白	(12.4)	-	2.0	SP240	1層		
第4-14701	磁器	小皿	中国	-	-	SD130	湯碗類		
第4-14702	陶器	瓶	唐津	-	-	SD130	唐磁類		
第4-15001	陶器	瓶	唐津	-	3.8	SD145	16世紀前半		
第4-15002	陶器	小杯	唐津	-	3.0	SD145	16世紀後半		
第4-15005	白磁	小杯	中国	-	(2.9)	SD145	16世紀		
第4-15006	青花	瓶	中国	-	(4.2)	SD145	E群		
第4-15007	青花	瓶	中国(泉州)	-	4.6	SD145	全身打欠		
第4-15008	陶器	舟形杯	備前	-	-	SD145			
第4-15009	陶器	瓶	備前	-	-	SD145	中世2層		
第4-15101	白磁	瓶	肥前	-	(6.4)	SK146	16世紀後半		
第4-15102	陶器	圓鉢	唐津	-	-	SK146			
第4-15103	陶器	瓶	唐津	-	4.6	SK146	砂目焼、口縁上部を打欠C。		
第4-15201	陶器	碗	唐津	(12.7)	-	SP142	皿底焼		
第4-15301	白磁	瓶	中国(福建)	-	-	B6C	D群		
第4-15302	青磁	瓶	中国(福建)	(13.0)	-	B6C	B-V群 経線透丹文		
第4-15303	白磁	皿	中国(福建)	-	-	B6C			
第4-15304	陶器	鉢	唐津	(8.4)	-	B6C	越前津 向こう付け		
第4-15305	京都系土師器	白	-	(11.6)	-	B6C	中世2層		
第4-15306	白磁	皿	中国	-	4.3	C6E			
第4-15307	白磁	皿	中国	-	-	B7E			
第4-15308	青花	皿	中国(福建)	(10.0)	2.9	2.4	B7E	C群 磁瓶底	
第4-15309	陶器	皿	唐津	-	-	B7E	越前津	45	
第4-15310	陶器	鉢	唐津	-	(5.0)	B7E	越前津		
第4-15311	陶器	圓鉢	備前	-	-	B7E	中世6層		
第4-15312	京都系土師器	皿	-	(12.6)	-	B7E	1層		
第4-15315	白磁陶器	小皿	-	-	-	C7E	湯碗類		
第4-15316	陶器	圓鉢	備前	-	-	C7E	中世5a層		
第4-15317	陶器	皿	備前	-	-	C7E	中世6層		
第4-15318	陶器	皿	唐津	-	-	C7E	越前津		
第4-15319	陶器	灰形碗	唐津	-	-	C7E	越前津		
第4-153020	陶器	皿	唐津	-	(3.1)	C7E	動土器印		
第4-153021	京都系土師器	小皿	-	(9.0)	5.6	1.6	C7E	越前津	
第4-153022	京都系土師器	小皿	-	(7.6)	-	C7E	2層 灯明鉢 口縁部打欠		
第4-153023	京都系土師器	皿	-	-	-	C7E	4層		
第4-153026	古代土師器	小皿	-	(13.4)	-	C7E			
第4-153027	白磁	皿	中国	-	-	B8E	越前津		
第4-153028	白磁	香炉	中国	-	-	B8E			
第4-153029	青花	皿	中国(福建)	-	-	B8E	B群		
第4-153030	青花	皿	中国(泉州)	-	-	B8E			
第4-153031	陶器	瓶	備前	-	-	B8E	中世5層		
第4-153032	陶器	水注	備前	-	-	B8E	鎌倉時代18	45	
第4-153033	陶器	皿	唐津	-	(5.1)	B8E	灰物		
第4-153034	陶器	皿	唐津	-	-	B8E	灰物		
第4-153035	京都系土師器	小皿	-	(7.6)	-	B8E	1層		
第4-153036	京都系土師器	小皿	-	8.5	-	2.0	B8E	2層 灯明鉢 口縁部打欠 打欠	
第4-153040	白磁	皿	-	(15.0)	-	-	B8E	8世紀	
第4-153041	陶器	皿	瀬戸系	-	-	-	B8E	B-3層 湯鉢	
第4-153042	陶器	瓶	-	(18.0)	-	-	C8E		
第4-153043	京都系土師器	皿	-	(13.9)	-	-	C8E	1層	
第4-153044	京都系土師器	皿	-	(8.4)	-	-	C8E	1層	
第4-153045	京都系土師器	小皿	-	(8.3)	-	1.9	C8E	1層	
第4-153046	京都系土師器	小皿	-	(9.35)	-	1.7	C8E	2層 須付付	
第4-153047	京都系土師器	杯	-	-	-	-	C8E	4層	
第4-153050	陶器	皿	中国	(10.6)	-	-	B9E	越前津	
第4-153051	青花	皿	中国(福建)	-	-	-	B9E	E群	
第4-153052	陶器	瓶	唐津	(8.8)	-	-	B9E		
第4-153053	青花	皿	中国(福建)	-	(7.4)	-	B9E	E群	
第4-153054	磁器	皿	-	-	-	-	B9E		
第4-153055	陶器	天目碗	瀬戸系	(12.0)	-	-	B9E	越前津	
第4-153056	陶器	皿	瀬戸系	(11.2)	(6.4)	2.2	B9E	大形3層 湯鉢	
第4-153057	陶器	圓鉢	備前	-	-	-	B9E	近世10層	
第4-153058	陶器	皿	唐津	-	4.8	-	B9E	越前津	45
第4-153059	京都系土師器	皿	-	(15.6)	-	-	B9E	2層	
第4-153060	京都系土師器	大皿	-	(21.0)	-	-	B9E	3層	
第4-153066	青花	瓶	中国(福建)	-	-	-	C9E	C群 菓子罍	
第4-153068	瓦州土器	瓶	-	-	-	-	C10E		
第4-153069	白磁	瓶	中国(福建)	-	-	-	B11E	人形手	
第4-153070	青花	瓶	中国(福建)	-	-	-	B11E	E群	

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器①)

発掘No.	品名	種類	生産地	寸法 (cm)			重量 (g)	遺物名	備考	図録No.
				口径	底径	高さ				
第4-153871	片瓦	瓦	中国 (福建産)	-	-	-	B11区	F層		
第4-15401	灰土器	壺	-	-	5.2	-	不明	緊急貯蔵庫 2次燃焼		45
第4-15402	土師器	壺	-	(13.0)	-	-	磁器、磁中	吉川町埋蔵〜中国産の布織式		*
第4-15701	灰土器(小)	小壺	-	9.6	5.0	1.9	ST268	埋蔵品 河野E層		*
第4-15702	灰土器(小)	小壺	-	8.4	5.4	1.8	ST268	口縁部打欠 榑沢区		*
第4-15703	灰土器(小)	杯	-	11.7	6.0	2.5	ST268	河野E層		*
第4-16201	灰土器(小)	小壺	-	8.8	5.9	2.2	ST295	河野E層 灯明皿 口縁部打欠		
第4-174051	灰土器(小)	小壺	-	(8.0)	-	-	ST150	2期 灯明皿 口縁部打欠		
第4-174052	灰土器(小)	小壺	-	(9.0)	-	-	ST150	2期 灯明皿 口縁部打欠		
第4-174053	灰土器(小)	壺	-	(10.8)	-	-	ST150	2期		
第4-174054	灰土器(小)	小壺	-	(11.2)	-	-	ST150	2期		46
第4-174055	灰土器(小)	小壺	-	(9.0)	-	-	ST150	2期		*
第4-174056	陶器	鉢	奥州	(15.5)	-	-	ST150			
第4-174057	陶器	大甕	奥州	-	-	-	ST150	地蔵洋		
第4-174058	灰土器(小)	小壺	-	(8.0)	-	1.8	ST150	2期 榑沢区 口縁部打欠		
第4-17708	白磁	壺	中国	(12.0)	-	-	ST149			
第4-17707	灰土器(小)	小壺	-	(11.4)	-	-	ST149	2期		
第4-17708	灰土器(小)	小壺	-	(8.2)	-	1.7	ST149	2期		
第4-17709	灰土器	壺	-	-	(7.5)	-	ST149	A層		
第4-17710	灰土器(小)	小壺	-	(12.0)	-	-	ST149	1期		
第4-17711	灰土器(小)	小壺	-	(8.4)	-	-	ST149	1層		
第4-17712	灰土器(小)	小壺	-	(12.2)	-	-	ST149	2期		46
第4-17713	灰土器(小)	壺	-	-	-	-	ST149	2期		
第4-17901	陶器	甕鉢	備前	-	-	-	ST152	中層6層		
第4-17902	灰土器(小)	壺	-	-	-	-	ST152	2期		
第4-17903	灰土器(小)	小壺	-	-	-	-	ST152	2期		
第4-18302	灰土器(小)	小壺	-	(8.2)	-	2.1	ST274	2期 口縁部打欠		46
第5-501	磁器三彩	鳥形水盂	-	-	-	-	SK734	尾のふれり 男7次西		

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(石製品①)

発掘No.	品名	材質	形状	寸法 (cm)			重量 (g)	遺物名	備考	図録No.
				口径	底径	高さ				
第4-16090	五輪石	凝灰岩	水輪	最大径 25.0	幅 -	厚さ (15.0)	-	SD165		
第4-16090	五輪石	凝灰岩	水輪	最大径 23.0	幅 -	厚さ 19.0	-	SD165		
第4-16091	石臼	火山岩	下臼	口径 (38.0)	幅 -	厚さ 12.7	(10.5)	SD165		
第4-16092	五輪石	凝灰岩	空煎鉢	最大径 21.0	幅 -	厚さ 25.0	-	SD165		
第4-16093	五輪石	凝灰岩	空煎鉢	最大径 20.0	幅 -	厚さ 22.0	-	SD165		
第4-16094	五輪石	凝灰岩	大輪	最大径 39.0	幅 35.0	厚さ 18.0	-	SD165		
第4-20015	磨石	-	長石	長さ 3.5	幅 3.0	厚さ -	14.5	SK199		
第4-31017	不明	磁器片	-	長さ 2.3	幅 2.3	厚さ 0.3	3.6	SK251		40
第4-4008	不明	磁器	-	長さ -	幅 -	厚さ -	-	SK266	16世紀 石臼に加工	
第4-4008	五輪石	凝灰岩	大輪	長さ -	幅 -	厚さ -	-	SK285	石臼に加工	
第4-4007	五輪石	凝灰岩	水輪	長さ -	幅 -	厚さ 10.0	-	SK285	石臼に加工	
第4-4008	五輪石	凝灰岩	-	長さ -	幅 -	厚さ 19.0	-	SK285	石臼に加工、全面に磨光	
第4-4009	五輪石	凝灰岩	-	長さ 22.0	幅 20.0	厚さ 15.0	-	SK285	鎌倉石臼か	
第4-400810	五輪石	凝灰岩	-	長さ 20.0	幅 (26.0)	厚さ 15.0	-	SK285	石臼に加工	
第4-4200	人形水盂	円筒	-	長さ -	幅 4.0	厚さ -	-	SD118		41
第4-4407	磨石	火山岩	下臼	口径 -	幅 -	厚さ 10.8	1.5	SD117		
第4-440816	磨石	花崗岩	上臼	口径 -	幅 -	厚さ 10.0	10.0	SD118	石臼は奥西からの搬入品	42
第4-440817	石臼	凝灰岩	上臼	口径 (38.0)	幅 -	厚さ 14.5	10.0	SD250		
第4-440818	石臼	凝灰岩	下臼	口径 -	幅 -	厚さ 9.8	1.25	SD250		
第4-440819	五輪石	凝灰岩	空煎鉢	最大径 -	幅 -	厚さ -	-	SD250		
第4-440820	重層の空煎鉢	凝灰岩	煎鉢	最大径 -	幅 (9.7)	厚さ 1.25	-	SD250		
第4-440821	五輪石	凝灰岩	大輪	最大径 -	幅 41.0	厚さ 23.0	-	SD250	石臼に加工	
第4-440822	五輪石	凝灰岩	大輪	最大径 -	幅 16.0	厚さ 20.0	-	SD250	石臼に加工	
第4-440823	五輪石	凝灰岩	大輪	最大径 -	幅 35.0	厚さ 20.0	-	SD250		
第4-440824	五輪石	凝灰岩	大輪	最大径 -	幅 36.0	厚さ 22.5	-	SD250		
第4-440825	五輪石	凝灰岩	大輪	最大径 -	幅 38.0	厚さ 21.0	-	SD250		
第4-440826	五輪石	凝灰岩	水輪	最大径 -	幅 -	厚さ -	-	SD250		
第4-440827	五輪石	凝灰岩	大輪	最大径 (30.0)	幅 30.0	厚さ 16.0	-	SD250		
第4-440828	五輪石	凝灰岩	大輪	最大径 -	幅 31.0	厚さ 20.0	-	SD250		
第4-440829	一五五輪石	凝灰岩	大輪	最大径 (6.7)	幅 -	厚さ 47.0	-	SD250	空煎鉢を欠	42
第4-4408100	凝灰岩	凝灰岩	-	最大径 (31.0)	幅 (33.0)	厚さ 14.0	-	SD250		
第4-4408101	加工石臼	凝灰岩	-	最大径 -	幅 -	厚さ 12.0	-	SD250		
第4-4408102	加工石臼	凝灰岩	-	最大径 27.0	幅 (25.0)	厚さ 19.0	-	SD250		
第4-4408103	磨石	-	-	最大径 (6.7)	幅 3.7	厚さ 3.8	0.212	SD270		
第4-4408104	磨石	-	-	最大径 9.2	幅 3.3	厚さ 1.1	0.413	SD131		
第4-4408105	石臼	火山岩	上臼	口径 -	幅 -	厚さ 9.6	1.5	SK261		
第4-4408106	石臼	火山岩	下臼	口径 -	幅 -	厚さ 10.0	4.5	SK261		
第4-10101	五輪石	凝灰岩	大輪	最大径 20.0	幅 36.0	厚さ 24.5	-	SE148	石臼に加工	
第4-10102	五輪石	凝灰岩	大輪	最大径 29.0	幅 29.0	厚さ 12.5	-	SE148	石臼に加工	
第4-10103	五輪石	凝灰岩	大輪	最大径 38.0	幅 36.0	厚さ 23.0	-	SE148	石臼に加工	
第4-10104	五輪石	凝灰岩	大輪	最大径 32.5	幅 32.0	厚さ 24.0	-	SE148	石臼に加工	

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(石製品)

探跡No.	品名	材質	形状		寸法 (cm)		重量 (g)	遺物名	備 考	探跡No.		
			部位	長さ	幅	厚さ					長さ	幅
第4-10105	玉輪鏃	湖灰岩	地輪	最大径	28.5	幅	25.0	厚さ	2.0	-	SE148	石臼に加工
第4-10106	玉輪鏃	湖灰岩	地輪	最大径	(34.0)	幅	34.0	厚さ	15.0	-	SE148	石臼に加工
第4-10107	加工石材	湖灰岩	-	長さ	32.5	幅	31.0	厚さ	12.0	-	SE148	
第4-10108	加工石材	湖灰岩	-	長さ	(33.5)	幅	(25.0)	厚さ	10.0	-	SE148	
第4-10109	加工石材	湖灰岩	-	長さ	(21.0)	幅	(20.0)	厚さ	11.0	-	SE148	磨蝕
第4-101010	加工石材	湖灰岩	-	長さ	(35.0)	幅	(18.0)	厚さ	11.0	-	SE148	研削
第4-101011	加工石材	湖灰岩	-	長さ	(33.0)	幅	(25.0)	厚さ	12.0	-	SE148	手片削が明瞭
第4-101012	加工石材	湖灰岩	-	長さ	(28.5)	幅	(18.0)	厚さ	11.0	-	SE148	研削 底部削打痕
第4-101013	加工石材	湖灰岩	-	長さ	(26.5)	幅	(19.0)	厚さ	12.0	-	SE148	
第4-101014	加工石材	湖灰岩	-	長さ	-	幅	(22.0)	厚さ	11.0	-	SE148	
第4-101015	加工石材	湖灰岩	-	長さ	-	幅	(41.0)	厚さ	10.0	-	SE148	
第4-102022	砥石	-	-	長さ	16.0	幅	5.9	厚さ	4.5	0.978	SE148	
第4-102024	加工石材	湖灰岩	-	長さ	42.0	幅	39.0	厚さ	2.0	-	SE148	玉輪鏃地輪を再加工
第4-113013	石臼	湖沢谷貫安山石	上臼	口径	33.0	幅	-	厚さ	7.9	(2.7)	SK263	
第4-121050	宝珠印通	湖灰岩	-	長さ	-	幅	-	厚さ	-	-	SD141	草履か管部
第4-123042	砥石	楊島片岩	-	長さ	(12.4)	幅	4.9	厚さ	1.2	0.116	SD167	
第4-127006	石臼	安山石	上臼	口径	(34.0)	幅	-	厚さ	8.5	3.0	SE147	

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土製品)

探跡No.	品名	材質	形状 (断面)		寸法 (cm)		重量 (g)	遺物名	備 考	探跡No.	
			部位	長さ	幅	厚さ					長さ
第4-11009	管状土器	土器質	-	長さ	4.7	幅	1.5	10.6	SF151	B種	
第4-11010	管状土器	土器質	-	長さ	3.6	幅	1.6	8.9	SF151	B種	
第4-11011	管状土器	土器質	-	長さ	3.4	幅	1.4	6.6	SF151	B種	
第4-12024	管状土器	土器質	-	長さ	5.2	幅	2.2	22.3	SF151	A種 片削欠損	
第4-12025	管状土器	土器質	-	長さ	4.0	幅	1.8	12.8	SF151	B種	
第4-12027	管状土器	土器質	-	長さ	4.0	幅	1.2	6.9	SF151	A種	
第4-12028	管状土器	土器質	-	長さ	3.9	幅	1.6	8.1	SF151	B種	
第4-22014	管状土器	土器質	-	長さ	4.5	幅	1.8	13.1	SK256	B種 軸土器磨蝕	
第4-31015	管状土器	土器質	-	長さ	5.5	幅	2.1	20.9	SK251	A種 底部へ少磨蝕	
第4-31016	管状土器	土器質	-	長さ	3.7	幅	1.3	6.0	SK251	B種	
第4-4007	管状土器	土器質	-	長さ	4.5	幅	1.4	6.8	SK266	B種	
第4-4307	管状土器	土器質	-	長さ	5.4	幅	1.2	6.6	SK199	B種	
第4-81002	土鈴	土器質	胴部	高さ	3.2	幅	4.1	16.8	SK163	瓦形	41
第4-6404	管状土器	土器質	-	長さ	(4.8)	幅	1.4	8.4	SK191	B種	
第4-6405	管状土器	土器質	-	長さ	(2.7)	幅	1.2	3.7	SK191	A種	
第4-80013	棒状土器	土器質	-	長さ	(3.7)	幅	0.95	5.0	SD116	瓦形へ骨孔	
第4-80014	管状土器	土器質	-	長さ	4.9	幅	1.6	14.5	SD116	B種	
第4-80015	管状土器	土器質	-	長さ	5.2	幅	2.1	23.5	SD116	A種	
第4-80005	管状土器	土器質	-	長さ	5.7	幅	2.25	24.4	SD250	A種	
第4-1000115	管状土器	土器質	-	長さ	4.7	幅	1.1	1.1	SK299	A種 胴部へ少磨蝕	
第4-11504	管状土器	土器質	-	長さ	5.6	幅	2.0	23.0	SK229	B種	
第4-121052	管状土器	土器質	-	長さ	6.9	幅	1.9	22.7	SD141	A種 胴部へ少磨蝕	
第4-121053	管状土器	土器質	-	長さ	4.35	幅	2.25	9.5	SD141	A種 寸削形式	
第4-120032	管状土器	土器質	-	長さ	3.75	幅	1.1	3.3	SD167	B種 小型	
第4-120033	管状土器	土器質	-	長さ	(4.2)	幅	1.2	6.4	SD167	B種 一部欠損	
第4-123034	管状土器	土器質	-	長さ	4.6	幅	1.4	9.9	SD167	B種	
第4-125019	管状土器	土器質	-	長さ	(4.4)	幅	2.1	17.6	SD168	A種 上部欠損	
第4-125020	管状土器	土器質	-	長さ	4.5	幅	1.3	8.4	SD168	A種 胴部へ少磨蝕	
第4-125023	片削陶器	土器質	-	長さ	-	幅	-	-	SD168	首切状	45
第4-132020	管状土器	土器質	-	長さ	3.9	幅	2.6	23.8	SK231	A種 寸削形式	
第4-132029	管状土器	土器質	-	長さ	4.4	幅	2.5	26.3	SK231	A種 寸削形式	
第4-132030	管状土器	土器質	-	長さ	4.0	幅	2.5	22.9	SK231	A種 寸削形式	
第4-132031	管状土器	土器質	-	長さ	4.2	幅	2.2	20.8	SK231	A種 寸削形式	
第4-132032	管状土器	土器質	-	長さ	4.2	幅	2.3	17.0	SK231	A種 寸削形式	
第4-1530113	管状土器	土器質	-	長さ	4.7	幅	1.5	10.5	B7B	A種	
第4-1530114	管状土器	土器質	-	長さ	6.2	幅	1.7	18.1	B7B	A種	
第4-153024	管状土器	土器質	-	長さ	4.5	幅	2.4	25.6	C7B	A種	
第4-153037	管状土器	土器質	-	長さ	4.3	幅	1.85	12.7	B8B	A種	
第4-153038	管状土器	土器質	-	長さ	4.8	幅	1.3	8.9	B8B	A種	
第4-153039	管状土器	土器質	-	長さ	3.8	幅	1.5	8.7	B8B	A種	
第4-153040	管状土器	土器質	-	長さ	4.6	幅	1.9	12.8	C8B	A種	
第4-153061	管状土器	土器質	-	長さ	4.1	幅	2.4	22.7	B9B	A種	
第4-153062	管状土器	土器質	-	長さ	4.3	幅	2.5	24.7	B9B	A種	
第4-153072	管状土器	土器質	-	長さ	3.9	幅	1.7	8.6	B11B	A種	

第10次Ⅱ区北調査区追物観察表(純質)

採集No.	採集名	採集 番号	国・主産名	重さ (g)	直径 (mm)	形状	産地名	備考	図録 No.
第4-1181	光輝透頁	1078	北京	2.1	25.0	行頁	SF151		
第4-16890	元輝透頁	1078	北京	3.0	24.0	葉頁	SD166		
第4-16890	自然透頁?	1056	北京	0.6	-	頁頁	SD165		
第4-2482	元輝透頁	1098	北京	-	-	葉頁	SK286	「元」のみ	
第4-6785	不明	-	-	-	-	-	SK265	「頁」のみ	
第4-6085	天輝透頁	1023	北京	1.9	24.0	葉頁	SK286		
第4-7181	不明	-	-	2.2	24.0	-	SE234	「元」「頁」のみ	
第4-7182	不明	-	-	-	-	-	SE234	「元」のみ	
第4-7183	洪武透頁	1368	明	-	-	-	SE234	下部欠遺	
第4-7184	洪武透頁	1368	明	2.9	23.0	-	SE234		
第4-7185	不明	-	-	3.2	24.0	-	SE234		
第4-7186	不明	-	-	2.1	23.0	-	SE234		
第4-7383	楊光透頁	1094	北京	3.1	24.0	-	SK224		41
第4-7384	不明	-	-	2.0	24.0	-	SK224	「元」「透」「頁」のみ	
第4-76815	皇光透頁	995	北京	2.7	25.0	行頁	SK232		
第4-7982	皇光透頁	1038	北京	-	-	葉頁	SK267		
第4-82817	永華透頁	1408	明	2.0	25.0	-	SD118		
第4-86886	不明	-	-	-	-	葉頁	SD250	「透」のみ	
第4-97815	楊光透頁	1094	北京	1.9	23.0	行頁	SD261	扇形地取り手さくしている	
第4-102836	元輝透頁	1098	北京	2.5	24.0	葉頁	SE148		
第4-11081	元輝透頁	1078	北京	1.8	24.0	行頁	SK156	皇光丸	
第4-11682	梓輝透頁	1008	北京	2.3	23.0	-	SK273		
第4-121895	皇光透頁	1004	皇朝	3.5	25.0	-	SD141		
第4-121896	梓輝透頁	1008	北京	2.1	26.0	-	SD141		
第4-121897	元輝透頁	1078	北京	2.8	24.0	葉頁	SD141		
第4-123836	天輝透頁	1023	北京	1.8	25.0	葉頁	SD167	一部欠遺	
第4-123837	不明	-	-	-	-	-	SD167	「元」「透」「頁」のみ 皇光透頁と推定	
第4-123838	元輝透頁	1078	北京	2.1	25.0	葉頁	SD167		
第4-123839	不明	-	-	2.4	24.0	-	SD167	「甲」「元」のみ	
第4-123840	不明	-	-	4.5	24.0	-	SD167	「元」「頁」のみ	
第4-123841	洪武透頁	1368	北京	2.3	25.0	-	SD167		
第4-125821	不明	-	-	2.3	25.0	-	SD168	「透」「頁」のみ	
第4-125822	不明	-	-	2.3	24.0	-	SD168		
第4-12785	不明	-	-	-	-	-	SE147	1/2欠遺 「透」「頁」のみ一部透頁	
第4-12886	淨化透頁	990	北京	3.2	24.0	葉頁	SE210		
第4-12887	永華透頁	1408	明	4.6	25.0	-	SE210		
第4-12888	不明	-	-	3.7	24.0	-	SE210		
第4-14181	不明	-	-	-	-	-	SK220	「元」のみ	
第4-153825	元輝透頁	1086	北京	2.8	24.0	葉頁	C78		
第4-153849	不明	-	-	-	-	-	C85		
第4-153863	楊光透頁	1088	北京	2.3	24.0	葉頁	B95		
第4-153864	大元輝透頁	1085	皇朝	2.9	25.0	-	B95		
第4-153867	楊光透頁	1094	北京	2.5	-	葉頁	B10E		
第4-153874	不明	-	-	-	-	-	B11E	「頁」のみ	
第4-15483	天輝透頁	1017	北京	2.8	25.5	頁頁	無貼		

第10次Ⅱ区北調査区追物観察表(瓦製品D)

採集No.	採集名	厚さ	直径 (単位cm)	産地名	備考	図録 No.
第4-1184	-	厚さ (8.0)	径 (8.8)	厚さ 3.0	SF151	
第4-1185	-	厚さ (11.7)	径 (9.5)	厚さ 2.8	SF151	
第4-11814	平瓦	厚さ (8.0)	径 (11.6)	厚さ 2.1	SF151	
第4-11816	-	厚さ (11.8)	径 (7.0)	厚さ 2.4	SF151	
第4-11820	軒瓦	厚さ (9.8)	径 (7.0)	厚さ 2.1	SF151	
第4-16891	軒瓦	厚さ (11.3)	径 (14.3)	厚さ 1.8	SD165	
第4-16892	隅瓦	厚さ (9.5)	径 -	厚さ 2.4	SD165	内面有目 粘土地盤
第4-16893	平瓦	厚さ (13.0)	径 21.0	厚さ 1.6	SD165	粘土地盤 離れ砂付
第4-16894	-	厚さ (6.2)	径 (7.2)	厚さ 1.55	SD165	粘土地盤 離れ砂付
第4-16895	-	厚さ 21.0	径 14.9	厚さ 2.45	SD165	
第4-16896	-	厚さ (8.8)	径 (5.5)	厚さ 1.8	SD165	
第4-16897	-	厚さ (19.7)	径 22.0	厚さ 2.3	SD165	
第4-16898	軒瓦	厚さ (29.4)	径 12.7	厚さ 2.0	SD165	
第4-16899	平瓦	厚さ (6.3)	径 (11.8)	厚さ 2.2	SD165	粘土地盤 離れ砂付
第4-22815	平瓦	厚さ (17.0)	径 (19.0)	厚さ 1.8	SK256	
第4-31814	平瓦	厚さ (13.8)	径 (14.4)	厚さ 2.0	SK251	粘土地盤 離れ砂付
第4-5681	-	厚さ (9.3)	径 (9.9)	厚さ 2.0	SK272	粘土地盤
第4-6084	-	厚さ (8.7)	径 (12.3)	厚さ 2.1	SK285	
第4-82816	軒瓦	厚さ -	径 -	厚さ -	SD118	
第4-86853	軒瓦	厚さ -	径 -	厚さ -	SD250	
第4-86854	平瓦	厚さ (18.7)	径 (11.7)	厚さ 2.1	SD250	行付 二次焼
第4-86855	-	厚さ (8.4)	径 (8.5)	厚さ 2.8	SD250	
第4-86856	-	厚さ (11.2)	径 (10.1)	厚さ 1.6	SD250	

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(瓦製品②)

発掘No.	品名	形状		寸法(単位cm)		透納名	備 考	図録 No.	
		縦	横	縦	横				
第4-88857	-	-	長形	(10.9)	楕	(9.3)	厚さ 1.6	SD250	
第4-88858	-	-	長形	(8.4)	楕	(8.0)	厚さ 2.3	SD250	
第4-88859	-	-	長形	(10.6)	楕	(9.0)	厚さ 2.3	SD250	
第4-88860	-	-	長形	7.9	楕	8.2	厚さ 1.8	SD250	
第4-88861	-	-	長形	(10.5)	楕	(13.8)	厚さ 2.5	SD250	
第4-88862	-	-	長形	(9.1)	楕	(11.4)	厚さ 2.3	SD250	
第4-88863	-	-	長形	8.1	楕	10.0	厚さ 2.0	SD250	粘土海部群
第4-88864	-	-	長形	10.0	楕	8.3	厚さ 1.8	SD250	粘土海部群
第4-88865	-	-	長形	13.3	楕	12.2	厚さ 2.15	SD250	粘土海部群
第4-88866	-	-	長形	(8.2)	楕	(9.0)	厚さ 2.0	SD250	粘土海部群
第4-88867	-	-	長形	(8.2)	楕	(9.1)	厚さ 1.8	SD250	
第4-88868	-	-	長形	(7.6)	楕	(10.3)	厚さ 2.15	SD250	
第4-88869	-	-	長形	(8.75)	楕	(9.9)	厚さ 2.0	SD250	
第4-88870	-	-	長形	(16.3)	楕	(10.5)	厚さ 1.95	SD250	
第4-88871	-	-	長形	(8.6)	楕	(13.3)	厚さ 1.9	SD250	粘土海部群
第4-88872	-	-	長形	(13.15)	楕	(8.1)	厚さ 2.2	SD250	
第4-88873	-	-	長形	(9.8)	楕	(11.2)	厚さ 2.1	SD250	
第4-88874	-	-	長形	(11.0)	楕	(11.9)	厚さ 2.2	SD250	
第4-88875	-	-	長形	(14.4)	楕	(12.7)	厚さ 1.85	SD250	
第4-88876	-	-	長形	(16.9)	楕	(17.5)	厚さ 2.3	SD250	粘土海部群
第4-88877	-	-	長形	(6.6)	楕	(11.6)	厚さ 2.0	SD250	
第4-88878	-	-	長形	(12.1)	楕	(10.2)	厚さ 1.85	SD250	
第4-88879	-	-	長形	(11.2)	楕	(13.3)	厚さ 2.0	SD250	
第4-88880	-	-	長形	(6.6)	楕	(10.7)	厚さ 2.4	SD250	
第4-88881	-	-	長形	(7.7)	楕	(8.1)	厚さ 2.0	SD250	
第4-88882	-	-	長形	(11.6)	楕	(11.7)	厚さ 2.2	SD250	粘土海部群
第4-88883	-	-	長形	(12.5)	楕	(12.6)	厚さ 2.0	SD250	
第4-88884	-	-	長形	(14.5)	楕	(10.6)	厚さ 1.8	SD250	
第4-888103	平瓦	-	長形	(8.5)	楕	(8.5)	厚さ -	SD250	古代 42
第4-888104	平瓦	-	長形	-	楕	-	厚さ -	SD250	古代
第4-888105	平瓦	-	長形	-	楕	-	厚さ -	SD250	古代 内蔵布目 *
第4-90816	-	-	長形	(8.8)	楕	(10.8)	厚さ 2.15	SD270	粘土海部群
第4-90817	-	-	長形	(11.5)	楕	(7.9)	厚さ 2.2	SD270	力牛目
第4-90818	-	-	長形	(11.4)	楕	(11.6)	厚さ 2.1	SD270	
第4-90823	古代平瓦	-	長形	(5.6)	楕	(8.0)	厚さ 2.2	SD270	内蔵布目 外蔵布目タタキ
第4-90824	古代平瓦	-	長形	(5.1)	楕	(8.9)	厚さ 2.0	SD270	内蔵布目 外蔵布目タタキ
第4-92811	-	-	長形	(15.1)	楕	(15.4)	厚さ 3.6	SD131	
第4-92812	-	-	長形	21.4	楕	(13.5)	厚さ 2.4	SD131	
第4-92813	-	-	長形	(14.4)	楕	(9.55)	厚さ 2.1	SD131	粘土海部群
第4-9788	-	-	長形	(7.6)	楕	(8.3)	厚さ 2.0	SK261	
第4-97810	-	-	長形	(8.0)	楕	(7.2)	厚さ 1.9	SK261	
第4-97811	-	-	長形	(12.8)	楕	(18.1)	厚さ 1.8	SK261	
第4-97812	-	-	長形	(12.3)	楕	(9.1)	厚さ 2.05	SK261	
第4-97813	平瓦	-	長形	(10.1)	楕	(5.1)	厚さ 1.8	SK261	
第4-97814	-	-	長形	(7.1)	楕	(8.1)	厚さ 2.0	SK261	粘土海部群
第4-9888	-	-	長形	(13.1)	楕	(9.9)	厚さ 2.0	SK262	
第4-102817	-	-	長形	(11.0)	楕	(7.2)	厚さ 2.1	SE148	
第4-102818	-	-	長形	(7.6)	楕	(12.3)	厚さ 2.25	SE148	
第4-102819	-	-	長形	27.2	楕	21.4	厚さ 2.1	SE148	
第4-102823	-	-	長形	(11.4)	楕	(10.5)	厚さ 2.15	SE148	
第4-109814	-	-	長形	(15.3)	楕	(12.4)	厚さ 2.4	SK269	
第4-11182	-	-	長形	(7.25)	楕	(13.5)	厚さ 1.9	SK279	
第4-11389	-	-	長形	(6.85)	楕	(10.6)	厚さ 3.9	SK263	
第4-113810	-	-	長形	(8.8)	楕	(16.3)	厚さ 2.2	SK263	
第4-113811	-	-	長形	(9.0)	楕	(14.4)	厚さ 2.1	SK263	
第4-113812	-	-	長形	(7.1)	楕	(5.6)	厚さ 2.0	SK263	
第4-118813	平瓦	-	長形	(17.3)	楕	(13.2)	厚さ 1.7	SK262	
第4-118814	平瓦	-	長形	(12.5)	楕	(12.3)	厚さ 1.8	SK262	粘土海部群
第4-118815	-	-	長形	(11.5)	楕	(13.5)	厚さ 2.3	SK262	
第4-118816	-	-	長形	(9.6)	楕	(13.2)	厚さ 2.1	SK262	
第4-118817	-	-	長形	(17.1)	楕	(11.3)	厚さ 2.2	SK262	
第4-118818	-	-	長形	(10.5)	楕	(13.3)	厚さ 2.5	SK262	
第4-118819	-	-	長形	(14.7)	楕	(11.7)	厚さ 2.1	SK262	粘土海部群
第4-118820	-	-	長形	(12.7)	楕	(15.3)	厚さ 1.95	SK262	
第4-118821	-	-	長形	(4.3)	楕	(4.6)	厚さ 2.0	SK262	
第4-118822	-	-	長形	(6.8)	楕	(8.3)	厚さ 1.8	SK262	
第4-118823	-	-	長形	(4.0)	楕	(11.2)	厚さ 2.1	SK262	
第4-118824	-	-	長形	(7.9)	楕	(7.2)	厚さ 1.95	SK262	粘土海部群

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(瓦製品③)

発掘No.	品名	部位	法量(単位cm)			遺物名	備 考	図録No.
			長さ	幅	厚さ			
第4-118025	-	-	長さ(7.1)	幅(8.0)	厚さ(2.0)	SK262		
第4-118026	-	-	長さ(5.1)	幅(5.7)	厚さ(2.0)	SK262		
第4-118027	-	-	長さ(26.6)	幅(14.7)	厚さ(2.4)	SK262	榑台付438	
第4-118028	-	-	長さ(21.4)	幅(20.7)	厚さ(2.3)	SK262	榑台付439	
第4-118029	-	-	長さ(17.2)	幅(12.7)	厚さ(1.8)	SK262		
第4-118030	-	-	長さ(24.8)	幅(15.9)	厚さ(2.3)	SK262		
第4-118031	-	-	長さ(13.3)	幅(9.2)	厚さ(2.1)	SK262		
第4-118032	-	-	長さ(14.0)	幅(22.0)	厚さ(1.8)	SK262		
第4-118033	-	-	長さ(15.0)	幅(10.1)	厚さ(1.9)	SK262		
第4-118034	-	-	長さ(21.9)	幅(19.3)	厚さ(1.7)	SK262	粘土海部磁器	
第4-118035	-	-	長さ(12.6)	幅(11.8)	厚さ(2.2)	SK262		
第4-118036	-	-	長さ(11.0)	幅(11.5)	厚さ(2.0)	SK262		
第4-118037	-	-	長さ(9.1)	幅(10.9)	厚さ(1.9)	SK262		
第4-118038	-	-	長さ(11.8)	幅(17.9)	厚さ(1.9)	SK262	粘土海部磁器	
第4-118039	-	-	長さ(10.8)	幅(7.0)	厚さ(2.3)	SK262		
第4-118040	-	-	長さ(11.9)	幅(13.9)	厚さ(2.0)	SK262		
第4-118041	-	-	長さ(11.8)	幅(12.5)	厚さ(1.9)	SK262		
第4-118042	-	-	長さ(11.8)	幅(9.4)	厚さ(1.9)	SK262		
第4-118043	-	-	長さ(9.5)	幅(6.3)	厚さ(1.8)	SK262		
第4-118044	-	-	長さ(12.0)	幅(12.5)	厚さ(2.0)	SK262		
第4-118045	-	-	長さ(6.5)	幅(7.1)	厚さ(2.1)	SK262		
第4-118046	-	-	長さ(8.4)	幅(6.3)	厚さ(2.1)	SK262		
第4-118047	-	-	長さ(7.6)	幅(8.9)	厚さ(2.1)	SK262		
第4-118048	-	-	長さ(8.4)	幅(11.0)	厚さ(1.9)	SK262		
第4-118049	-	-	長さ(7.4)	幅(10.9)	厚さ(2.3)	SK262		
第4-118050	-	-	長さ(11.4)	幅(8.9)	厚さ(2.15)	SK262		
第4-118051	-	-	長さ(11.0)	幅(10.1)	厚さ(2.15)	SK262		
第4-118052	-	-	長さ(13.55)	幅(13.35)	厚さ(2.1)	SK262		
第4-118053	-	-	長さ(10.6)	幅(17.75)	厚さ(2.15)	SK262		
第4-118054	-	-	長さ(10.6)	幅(5.4)	厚さ(1.95)	SK262		
第4-118055	-	-	長さ(12.2)	幅(15.35)	厚さ(2.0)	SK262		
第4-118056	-	-	長さ(12.5)	幅(11.9)	厚さ(2.1)	SK262	粘土海部磁器	
第4-121046	平瓦	-	長さ(6.9)	幅(10.4)	厚さ(2.4)	SD141		
第4-121047	-	-	長さ(7.8)	幅(11.9)	厚さ(1.8)	SD141		
第4-121048	-	-	長さ(13.4)	幅(9.3)	厚さ(2.2)	SD141		
第4-121049	-	-	長さ(5.3)	幅(5.1)	厚さ(1.95)	SD141		
第4-121050	-	-	長さ(10.2)	幅(8.0)	厚さ(3.0)	SD141		
第4-121051	-	-	長さ(10.2)	幅(4.9)	厚さ(2.2)	SD141	粘土海部磁器	
第4-123028	-	-	長さ(17.3)	幅(11.0)	厚さ(1.7)	SD167	粘土海部磁器	
第4-123029	-	-	長さ(9.5)	幅(15.2)	厚さ(2.0)	SD167		
第4-123030	-	-	長さ(12.6)	幅(5.6)	厚さ(2.0)	SD167		
第4-123031	-	-	長さ(11.0)	幅(12.0)	厚さ(1.9)	SD167	粘土海部磁器	
第4-127010	-	-	長さ(10.1)	幅(7.8)	厚さ(2.0)	SE147		
第4-132018	平瓦	-	長さ(9.8)	幅(10.7)	厚さ(2.1)	SK231		
第4-132019	-	-	長さ(18.7)	幅(12.5)	厚さ(2.1)	SK231	粘土海部磁器	
第4-132020	-	-	長さ(8.0)	幅(7.7)	厚さ(2.05)	SK231	粘土海部磁器	
第4-132021	-	-	長さ(9.7)	幅(8.4)	厚さ(2.2)	SK231		
第4-132022	-	-	長さ(10.1)	幅(13.5)	厚さ(2.2)	SK231		
第4-132023	-	-	長さ(8.1)	幅(8.2)	厚さ(1.9)	SK231		
第4-132024	-	-	長さ(15.0)	幅(12.1)	厚さ(2.1)	SK231	粘土海部磁器	
第4-132025	-	-	長さ(11.2)	幅(8.6)	厚さ(2.1)	SK231	粘土海部磁器	
第4-132026	-	-	長さ(5.2)	幅(5.3)	厚さ(1.7)	SK231	粘土海部磁器	
第4-132027	-	-	長さ(19.5)	幅(21.5)	厚さ(1.9)	SK231	粘土海部磁器	

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(金属製品①)

発掘No.	品名	材質	部位	法量(単位cm)			遺物名	備 考	図録No.
				長さ	幅	厚さ			
第4-95022	金目	鉄	-	長さ(1.6)	幅(1.2)	厚さ(0.3)	SK243	錐	
第4-123035	牛乳鉢	-	厚底	長さ(6.4)	幅(6.5)	厚さ(0.65)	SD167		
第4-149011	牛乳鉢	鉄	大底	長さ(11.75)	幅(1.5)	厚さ(6.5)	SK177	虎世物箱	
第4-150003	牛乳鉢	鉄	破口	長さ(8.3)	幅(8.5)	厚さ(3.0)	SD145		
第4-150004	金目	鉄	-	長さ(7.4)	幅(0.8)	厚さ(0.35)	SD145		
第4-151004	銅	鉄	-	長さ(1.65)	幅(0.4)	厚さ(0.35)	SK146		
第4-153073	金目	鉄	指手	長さ(3.9)	幅(3.5)	厚さ(3.5)	B115		
第4-160011	鉄釘	鉄	-	長さ(2.3)	幅(-)	厚さ(0.35)	-	ST157	
第4-160011	鉄釘	鉄	-	長さ(2.7)	幅(0.7)	厚さ(0.5)	2.2	ST130	
第4-160012	鉄釘	鉄	-	長さ(2.2)	幅(0.5)	厚さ(0.4)	0.7	ST130	
第4-160023	鉄釘	鉄	-	長さ(5.8)	幅(0.85)	厚さ(1.15)	8.2	ST130	
第4-160024	鉄釘	鉄	-	長さ(3.6)	幅(0.7)	厚さ(0.8)	4.0	ST130	
第4-160025	鉄釘	鉄	-	長さ(5.4)	幅(0.6)	厚さ(3.5)	3.0	ST130	
第4-160026	鉄釘	鉄	-	長さ(4.3)	幅(0.45)	厚さ(0.45)	2.0	ST130	
第4-160027	鉄釘	鉄	-	長さ(4.0)	幅(0.5)	厚さ(0.5)	1.8	ST130	
第4-160028	鉄釘	鉄	-	長さ(3.6)	幅(0.7)	厚さ(0.8)	2.7	ST130	
第4-160029	鉄釘	鉄	-	長さ(4.5)	幅(0.8)	厚さ(0.6)	5.5	ST130	

第10次Ⅱ区北調査区辺物観察表(金属製品)

標記No.	品名	材質	測定			法面(単位cm)			重量(g)	品名	備考	図解No.
			断面	長さ	幅	厚さ	長さ	幅				
第4-169Q10	鉄釘	鉄	断面	長さ(3.25)	幅	0.6	厚さ	0.65	1.4	ST130		
第4-170G1	鉄釘	鉄	断面	長さ(4.6)	幅	0.5	厚さ	0.6	5.4	ST135		
第4-173B1	金口	鉄	断面	長さ(8.5)	幅	3.0	厚さ	3.0	-	ST150	2と1で使用する	45
第4-173G2	金口	鉄	断面	長さ(7.7)	幅	3.0	厚さ	(2.1)	-	ST150	1と1で使用する	*
第4-173G3	金口	鉄	断面	長さ(3.0)	幅	2.0	厚さ	2.0	-	ST150		
第4-173G4	金口	鉄	断面	長さ(3.1)	幅	2.9	厚さ	0.7	-	ST150		
第4-173B5	二股金口	鉄	断面	長さ(3.1)	幅	3.0	厚さ	-	-	ST150		45
第4-173G6	二股金口	鉄	断面	長さ(3.6)	幅	3.2	厚さ	-	-	ST150		*
第4-173G7	二股金口	鉄	断面	長さ	幅	-	厚さ	0.5	-	ST150		
第4-173G8	鉄釘	鉄	断面	長さ(5.6)	幅	0.3	厚さ	0.6	-	ST150		
第4-173B9	鉄釘	鉄	断面	長さ(3.3)	幅	0.8	厚さ	0.8	-	ST150		
第4-173G10	二股金口	鉄	断面	長さ(3.2)	幅	3.5	厚さ	0.65	-	ST150		45
第4-173G11	二股金口	鉄	断面	長さ(2.3)	幅	0.5	厚さ	0.6	-	ST150		*
第4-173B12	二股金口	鉄	断面	長さ	幅	-	厚さ	0.5	-	ST150	鉄	
第4-173B13	鉄釘	鉄	断面	長さ(2.2)	幅	0.4	厚さ	0.4	-	ST150		
第4-173G14	鉄釘	鉄	断面	長さ(2.0)	幅	0.3	厚さ	0.3	-	ST150		
第4-173G15	二股金口	鉄	断面	長さ(1.5)	幅	0.4	厚さ	0.4	-	ST150		
第4-173G16	二股金口	鉄	断面	長さ	幅	-	厚さ	0.5	-	ST150		
第4-173B17	二股金口	鉄	断面	長さ	幅	-	厚さ	-	-	ST150	鉄	
第4-173G18	鉄釘	鉄	断面	長さ(2.5)	幅	0.4	厚さ	0.3	-	ST150		
第4-173G19	二股金口	鉄	断面	長さ	幅	-	厚さ	0.4	-	ST150		
第4-173G20	鉄釘	鉄	断面	長さ(4.1)	幅	0.5	厚さ	0.5	-	ST150		
第4-173B21	鉄釘	鉄	断面	長さ(2.3)	幅	0.2	厚さ	-	-	ST150	鉄	
第4-173G22	鉄釘	鉄	断面	長さ(1.3)	幅	0.2	厚さ	-	-	ST150		
第4-173G23	鉄釘	鉄	断面	長さ(4.8)	幅	0.2	厚さ	0.15	-	ST150		
第4-173G24	鉄釘	鉄	断面	長さ(1.5)	幅	(0.15)	厚さ	(0.15)	-	ST150	鉄	
第4-173G25	鉄釘	鉄	断面	長さ(4.0)	幅	0.2	厚さ	-	-	ST150		
第4-173G26	鉄釘	鉄	断面	長さ(1.9)	幅	0.15	厚さ	-	-	ST150		
第4-173G27	鉄釘	鉄	断面	長さ(4.3)	幅	0.2	厚さ	0.3	-	ST150		
第4-173B28	鉄釘	鉄	断面	長さ(3.1)	幅	(0.7)	厚さ	0.5	-	ST150		
第4-173B29	鉄釘	鉄	断面	長さ(2.4)	幅	0.9	厚さ	0.25	-	ST150		
第4-173G30	鉄釘	鉄	断面	長さ(2.5)	幅	0.3	厚さ	0.3	-	ST150		
第4-173G31	鉄釘	鉄	断面	長さ(3.0)	幅	(0.8)	厚さ	0.5	-	ST150		
第4-173G32	金口	鉄?	断面	長さ(2.9)	幅	(0.9)	厚さ	0.6	-	ST150		
第4-173B33	鉄釘	鉄	断面	長さ(3.0)	幅	0.3	厚さ	0.3	-	ST150		
第4-173G34	鉄釘	鉄	断面	長さ(3.6)	幅	(0.8)	厚さ	0.5	-	ST150		
第4-173G35	鉄釘	鉄	断面	長さ(4.1)	幅	(0.4)	厚さ	0.4	-	ST150		
第4-173B36	鉄釘	鉄	断面	長さ(5.4)	幅	(0.13)	厚さ	0.6	-	ST150		
第4-173B37	鉄釘	鉄	断面	長さ(2.9)	幅	(1.5)	厚さ	(1.5)	-	ST150		
第4-173G38	鉄釘	鉄	断面	長さ(2.5)	幅	(1.0)	厚さ	0.25	-	ST150		
第4-173G39	鉄釘	鉄	断面	長さ(4.1)	幅	(1.1)	厚さ	0.8	-	ST150		
第4-173G40	鉄釘	鉄	断面	長さ(2.15)	幅	0.85	厚さ	0.25	-	ST150		
第4-173G41	鉄釘	鉄	断面	長さ(1.4)	幅	0.15	厚さ	-	-	ST150		
第4-173G42	鉄釘	鉄	断面	長さ(2.8)	幅	0.2	厚さ	0.15	-	ST150		
第4-173G43	鉄釘	鉄	断面	長さ(4.3)	幅	(1.3)	厚さ	0.6	-	ST150		
第4-173G44	鉄釘	鉄	断面	長さ(4.0)	幅	(1.3)	厚さ	1.0	-	ST150		
第4-173G45	鉄釘	鉄	断面	長さ(3.1)	幅	(0.4)	厚さ	0.6	-	ST150		
第4-173G46	鉄釘	鉄	断面	長さ(3.2)	幅	0.2	厚さ	0.2	-	ST150		
第4-173G47	鉄釘	鉄	断面	長さ(2.5)	幅	0.3	厚さ	-	-	ST150		
第4-173B48	鉄釘	鉄	断面	長さ(3.1)	幅	(0.2)	厚さ	(0.2)	-	ST150		
第4-173B49	鉄釘	鉄	断面	長さ(4.6)	幅	(1.1)	厚さ	0.6	-	ST150		
第4-173G50	鉄釘	鉄	断面	長さ(2.6)	幅	0.2	厚さ	0.2	-	ST150		
第4-177G1	鉄釘	鉄	断面	長さ(6.0)	幅	1.0	厚さ	1.0	-	ST149		
第4-177B2	鉄釘	鉄	断面	長さ(3.3)	幅	0.8	厚さ	0.8	-	ST149		
第4-177B3	鉄釘	鉄	断面	長さ(7.9)	幅	0.6	厚さ	0.6	-	ST149		
第4-177G4	鉄釘	鉄	断面	長さ(1.6)	幅	0.15	厚さ	0.15	-	ST149		
第4-177B5	鉄釘	鉄	断面	長さ(3.6)	幅	0.6	厚さ	0.6	-	ST149		
第4-181B1	鉄釘	鉄	断面	長さ(2.5)	幅	0.4	厚さ	0.2	-	ST260		
第4-181B2	鉄釘	鉄	断面	長さ(1.5)	幅	(0.2)	厚さ	(0.2)	-	ST260		
第4-181B3	鉄釘	鉄	断面	長さ(4.1)	幅	(0.2)	厚さ	(0.2)	-	ST260		
第4-181B4	鉄釘	鉄	断面	長さ(3.6)	幅	-	厚さ	-	-	ST260		
第4-181B5	鉄釘	鉄	断面	長さ(3.1)	幅	2.5	厚さ	2.5	-	ST260		
第4-183G1	鉄釘	鉄	断面	長さ(2.05)	幅	-	厚さ	0.5	-	ST274		

第10次Ⅱ区北調査区辺物観察表(木製品)

標記No.	品名	材質	測定			法面(単位cm)			重量(g)	品名	備考	図解No.
			断面	長さ	幅	厚さ	長さ	幅				
第4-160G1	不明	-	断面	長さ	11.25	幅	4.9	厚さ	7.0	-	SD165	
第4-153B65	不明	-	断面	長さ	23.7	幅	5.6	厚さ	1.0	-	B9G	

10次Ⅱ区北調査区辺物観察表(その他)

標記No.	品名	材質	測定			法面(単位cm)			重量(g)	品名	備考	図解No.
			断面	長さ	幅	厚さ	長さ	幅				
第4-73G5	小玉	ガラス	断面	長さ	0.25	幅	厚さ	0.4	-	SK224		41
第4-182G1	小玉	ガラス	断面	長さ	0.2	幅	厚さ	0.3	-	ST257		46

写 真 图 版



SD001 遺物出土状況（東から）



SD001 遺物出土状況（東から）



SD001 完掘状況（北から）



SD010・SD028 遺物出土状況（南から）



SK004 遺物出土状況（北から）



SK005 遺物出土状況（南から）



SK005 完掘状況（南から）



SK006 遺物出土状況 (北から)



SK007 遺物出土状況 (南から)



SK008 遺物出土状況 (東から)



SK012 焼土・炭検出状況 (東から)



SK012 遺物出土状況 (東から)



SK013 遺物出土状況 (北から)



SK015 遺物出土状況 (東から)



SK022 遺物出土状況 (西から)



SK027 遺物出土状況 (南から)



SK030 遺物出土状況 (北から)



ST009 遺物出土状況 (北から)



ST009 遺物出土状況 (南から)



ST009 遺物出土状況 (北から)



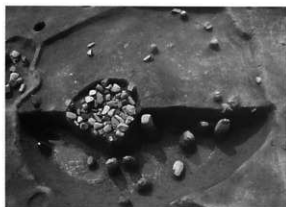
ST009 完掘出土状況 (北から)



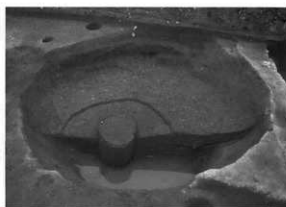
SP01 (4-B区) 滑石製スタンプ出土状況



SE014 完掘状況 (北から)



SE017 検出状況 (北から)



SE017 井側検出状況 (北から)



SE017 土層断面図 (合成写真)



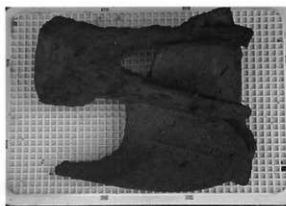
SE017 桶側2段目検出状況



SE017 桶側筈検出状況



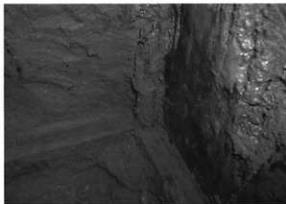
SE017 桶側4段目検出状況



SE017 井筒内出土鉄先・犁先・犁ヘラ



SE126 井側検出状況



SE126 井側南隅横棧支柱



SE126 井側南側横棧接合部



SE126 井筒



SD111 遺物出土状況(西から)



SD113(基礎3)遺物出土状況(北から)



SD113(基礎4)完掘(北から)



SF116・SF124 (西から)



SF116・SF124 (北から)



SF116・SF124 (石敷)



SD116 完掘状況 (西から)



SD116 京都系土師器出土状況



SD116 近世1期備前系陶器擂鉢出土状況



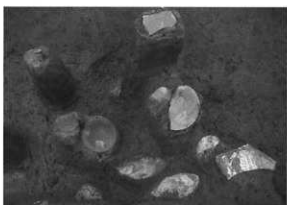
SD117(11-A区) 遺物出土状況(東から)



SD117(11-A区) 在地系土師質土器出土状況



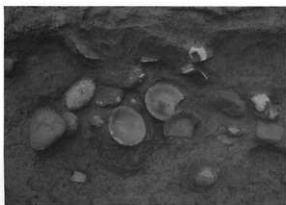
SD117(11-A区) 在地系土師質土器出土状況(拡大)



SD117 (10-A区)遺物出土状況



SD117(10-A区) 永楽通寶出土状況



SD117(10-A区) 京系土師器出土状況



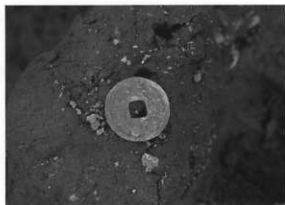
SD117 完掘状況(西から)



SD118(9-A・10-A区) 遺物出土状況(西から)



SD118 下駄出土状況



SD118 洪武通寶出土状況



SD118 折敷出土状況



SD118 完掘状況(西から)



SD118 完掘状況(西から)



SK101 遺物出土状況(北から)



SK104 遺物出土状況



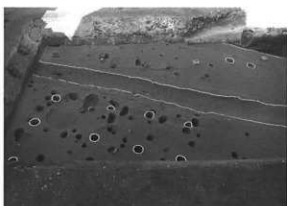
SK104 遺物出土状況(東から)



SK115 遺物出土状況(南から)



SK120・SK121 遺物出土状況(東から)



SB001・SP001・SP002・SD111(南から)



SP003 遺物出土状況



古代包含層遺物出土状況



10次Ⅱ区北
調査区全景



10次Ⅱ区北調査区
全景
(西から、大分川をのぞむ)

調査区東半
(南西から)



調査区東半
(南から、第4南北
街路がみえる)



調査区東半
(南から、線路のむこうは
ダイウス堂推定地)





東区(中町に面した町屋の遺構)



道路SF151 上層



中層



SF151 第1面検出状況



SF151と両側溝、SD167とSD168



道路SF151 西半上層



第1面の検出状況(C7区付近)



中層道路面(C8区付近)



下層道路面(C8区付近)



側溝にはさまれた道路(C8区)



東半(SD165の矢板例がみえる)



近世の石列SX138 (北から)



SX138 (西から)



近世の溝SD145 (道路SF151の上で検出)



SD145



道路SF151と南の溝SD118



溝SD117 (右は道路SF151上層)



SD167と道路SF151 (B8区)



SF151とSD141、出土状況 (東から:A10区)



溝SD141、出土状況 ①



SD141、出土状況 ②



溝SD270と道路SF151 (西から:B9区、A10区)



SD270 出土状況 (東から:A9区、A10区)



溝SD270と溝SD250 (東から、B7区)



道路SF151と溝SD270 (東から、A10区)



北側側溝群と道路SF151 (東から、B10区)
(SD165からSD270、SD250に移るにつれて底が高くなる)



溝SD165、矢板痕跡（第3矢板列、B9区）



SD165、第4矢板列の杭痕（B8区）



SD165、矢板痕



SD165、第4矢板列の木杭痕（C7区）



SD165 完掘状態（西から、B9区）



同左（西南から、B9区）



SD165、動物骨出土状態



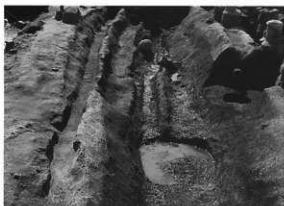
SD165、第4矢板列の堀形内埋置土器群



溝SD189 (南から、南2区)



溝SD194 (B6区)



井戸SE300(15世紀)と井戸SE210(東から)



井戸SE235 (16世紀第2四半期) 北から



SE235の井筒



井戸SE144 (16世紀第2四半期)



井戸SE234 (16世紀第3四半期)



SE234の井筒



井戸SE148検出状態（まだ土坑と考えていた時点）



SE148 井筒と破壊の跡が出現



SE148 石組井筒をこわして塞いでいる



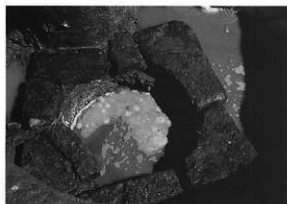
SE148 井筒内大石で塞ぐ



SE148 石組井筒出土状態



SE148 井筒2段目の石組



SE148 石組の基礎出現



SE148 井筒基底の桶出土



井戸SE210 (16世紀第4四半期)



SE210の井筒桶



土坑SK226 (古代)



土坑SK256 (15世紀前半)



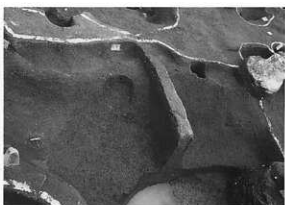
土坑SK199 (15世紀前半)



土坑SK212 (15世紀)



溝SD239 (16世紀第1四半期)



土坑SK266 (15世紀～16世紀代第1四半期)



土坑SK227 (16世紀第1四半期) 出土状態



SK227完掘状態



土坑SK193 (16世紀第1四半期)



土坑SK238 (16世紀第2四半期)



土坑SK265 (16世紀第2四半期)



土坑SK272 (16世紀第2四半期)



土坑SK285 (16世紀第2四半期)



土坑SK163 (16世紀第2四半期)



土坑SK164 (16世紀第3四半期)



土坑SK224 (16世紀第3四半期) 祭祀遺物出土状況



SK224 出土状況細部 ①



SK224 出土状況細部 ②



土坑SK232 (16世紀第3四半期)



土坑SK293 (16世紀第3四半期)



溝SD230 (16世紀第4四半期前半)



土坑SK261 (16世紀第4四半期前半) 出土状況



SK261 埋土除去後



SK261



溝SD292 (16世紀第4四半期前半)



土坑SK236 (16世紀第4四半期前半) 出土状態



SK236 動物骨出土状態



SK236 土器出土状態



SK236 完掘状態



土坑SK269 (16世紀第4四半期前半)



土坑SK279 (16世紀第4四半期前半)



土坑SK263 (16世紀第4四半期前半)



SK263 断面



SK263 完掘状態



土坑SK229 (16世紀第4四半期前半)



SK229 完掘状態



土坑SK262 (16世紀第4四半期前半) 出土状況



土坑SK231 (16世紀第4四半期後半)



土坑SK215 (16世紀第4四半期後半)



土坑SK237
(16世紀第4
四半期後半)



土坑SK220



現地説明会 (2002.8) ①



墓地の区画溝SD131 (東から) 2001年度調査時



SD131



SD131 (西から)



墓地全景 (南から)



墓地全景 (西から)



墓地全景 (北東から)



墓地全景 (北西から)



墓地西部 (南から)



墓地中部 (南から)



墓地中部 (南から)



墓地東部 (南から)



1号墓ST130 (南から)



ST130 (北から)



ST130 木棺



ST130 北半 (東から)



ST130 全貌 (西から)



2号墓 ST135 (西から)



3号墓ST268 埋葬状態



3号墓ST268 棺底出土状態 (東から)



4号墓 ST150 埋葬状態 (南から)



4号墓 ST150、西側板・角材痕跡



4号墓 ST150、東側板・角材痕跡



4号墓 ST150、北小口板角材痕跡



4号墓 ST150、金具12、出土状態



4号墓 ST150、金具1、出土状態



4号墓 ST150、金具2、出土状態



4号墓 ST150、金具11、出土状態



4号墓 ST150、釘25、出土状態



5号墓ST154
埋葬状态



6号墓ST157
埋葬状态



7号墓ST158
埋葬状态



8号墓 ST149 埋葬状态



8号墓ST149 木棺出土状态



8号墓ST149 棺盖落下状况



8号墓ST149 木棺底部



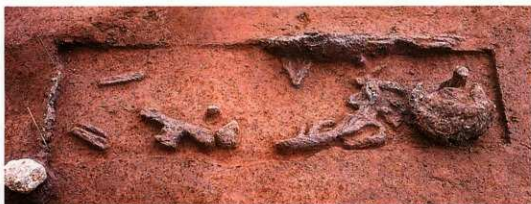
8号墓ST149 北小口、角材出土状态



8号墓ST149 南小口角材出土状态



9号墓ST152
埋葬状态



10号墓ST260
埋葬状态



11号墓ST257出土状態(南から)



11号墓ST257ガラス玉出土状態



13号墓ST289埋葬状態



12号墓ST274埋葬状態



14号墓ST295埋葬状態



15号墓 ST296、人骨出土状態



18号墓 ST290



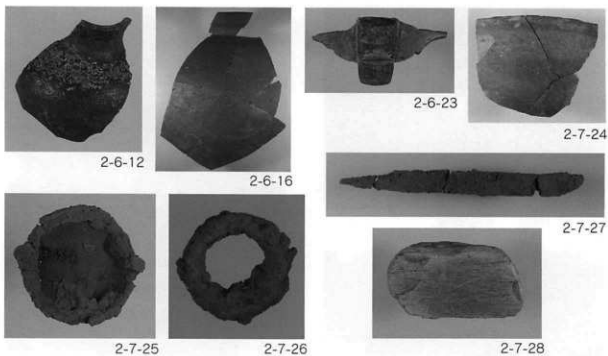
16号墓 ST297、出土状態



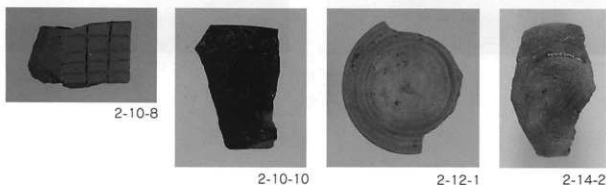
調査風景 (夏の夕暮れ)



現地説明会の



SD001出土遺物 (第2-6図～第2-8図)



SD010出土遺物 (第2-10図)

SD028出土遺物
(第2-12図)

SK004出土遺物
(第2-14図)



SK006出土遺物 (第2-17図・第2-18図)



SK019出土遺物
(第2-28図)

SK022出土遺物
(第2-29図)

SK026出土遺物 (第2-32図)

SK027出土遺物
(第2-34図)



2-37-1



2-37-2

SK030出土遺物 (第2-37図)



2-39-11

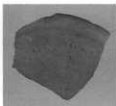


2-39-15

SE014出土遺物 (第2-39図)



2-42-5



2-42-6



2-42-9



2-42-10



2-45-3

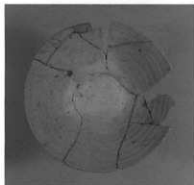


2-44-1



2-44-2

SE017出土遺物 (第2-42図・第2-44図・第2-45図)

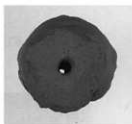


2-47-1

ST009出土遺物
(第2-47図)



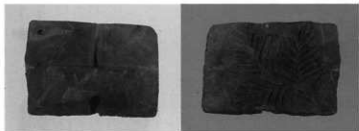
2-48-6



2-48-7



2-48-8



2-48-13

包含層・ビット出土遺物 (第2-48図)



SD111出土遺物 (第3-5図)

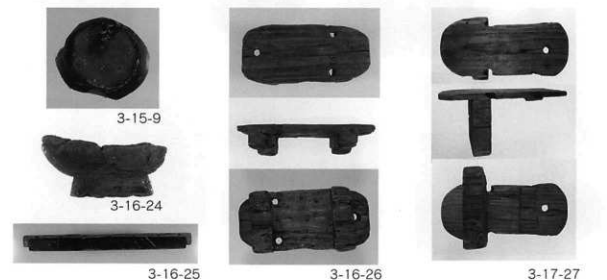
SD113出土遺物 (第3-8図)



SD116出土遺物 (第3-11図・第3-12図)



SD117出土遺物 (第3-14図)



SD118出土遺物 (第3-15図～第3-17図)



3-25-6



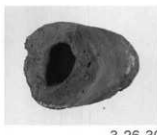
3-25-13



3-26-25



3-26-26



3-26-30



3-26-31

SK104出土遺物 (第3-25図・第3-26図)



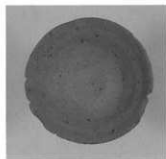
3-28-2

SK115出土遺物
(第3-28図)



3-31-1

SK121出土遺物
(第3-31図)



3-36-1

SPO03出土遺物
(第3-36図)



3-42-20

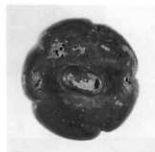


3-43-45



3-42-21

包含層出土遺物 (第3-42図・第3-43図)



3-43-46



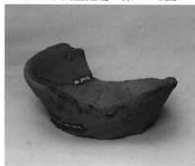
SD165 出土遺物 第4-16图1



第4-16图2



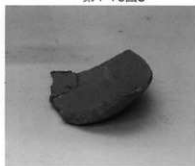
第4-16图3



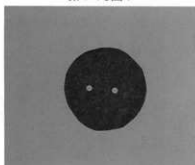
第4-16图4



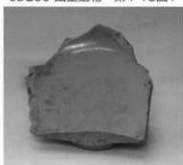
SD255 出土遺物 第4-18图1



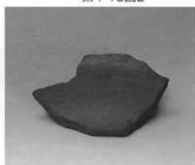
第4-18图2



SK251 出土遺物 第4-31图17



SK266 出土遺物 第4-40图1



第4-40图2



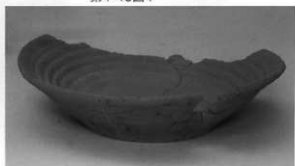
第4-40图3



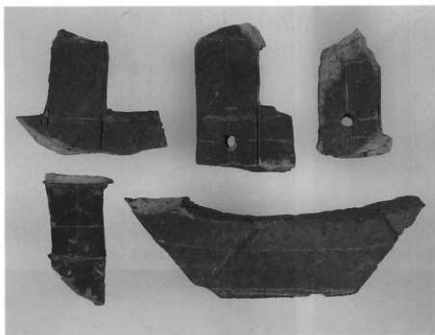
第4-40图4



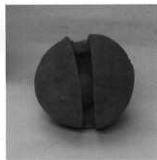
第4-40图5



第4-40图6



SK265 出土遺物 第4-57图1



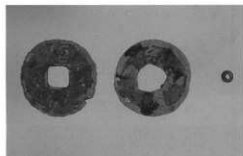
SK163 出土遺物 第4-61图2



SK224 出土遺物 第4-73图1



第4-73图2



第4-73图3·4·5



SK232 出土遺物 第4-75图16



SD118 出土遺物 第4-82图1



第4-82图8



SD116 出土遺物 第4-86图16



SD250 出土遺物 第4-88图1



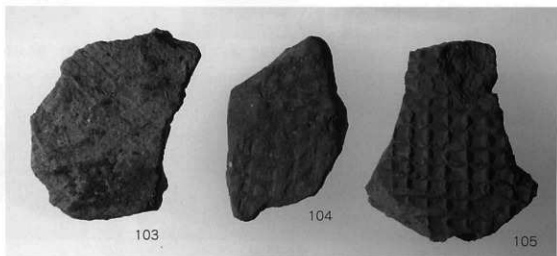
第4-88图11



第4-88图13



第4-88图99



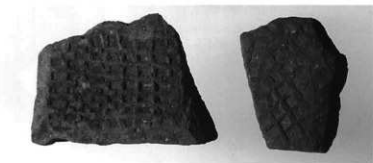
第4-88图



SD270 出土遺物 第4-90图10



第4-90图12



第4-90图23・24



第4-90图21



SD131 出土遺物 第4-92图5



SK261 出土遺物 第4-97图1



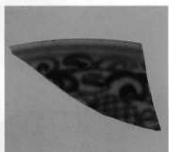
SK261 出土遺物 第4-97図2



SK292 出土遺物 第4-98図1



第4-98図2



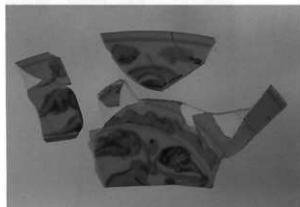
SK264 出土遺物 第4-103図1



SE148 出土遺物 第4-102図21



第4-103図2



SK263 出土遺物 第4-113図5



SK262 出土遺物 第4-118図3



SD168 出土遺物 第4-125図2

第4-125図23



S218 出土遺物 第4-130図1



ST213 出土遺物 第4-137図1



第2層整地層出土遺物 第4-153図32



第4-153図



ST268 出土遺物 第4-157図



ST295 出土遺物 第4-163図1



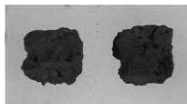
ST150 出土遺物 第4-173図1



第4-173図2



第4-173図10



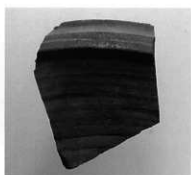
第4-173図5・6



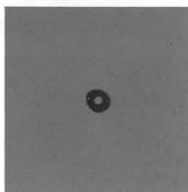
ST150 出土遺物 第4-174図56



第4-174図57



ST152 出土遺物 第4-179図1



ST257 出土遺物 第4-182図1



7次調査 SK734 出土遺物 第6-5図1

報告書抄録

ふりがな	ぶんごふいせい ちゆうせいふいせいのりょうだいだいじゅうじゅうさく
書名	豊後府内6 中世大友府内町跡第10次調査区
副書名	大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	5
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第15集
編著者名	坂本嘉弘、田中裕介、後藤晃一、山崎文子、田中良之、俗提哉、平尾良光
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
発行年月日	西暦2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中世大友 府内町跡 第10次調査	大分市上野 六坊北町	322	51	33° 13' 32"	131° 37' 20"	2001年 7月 ～ 2002年 9月	約2,000	大分駅 周辺連続 立体交差 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中世大友 府内町跡 第10次調査	中世都市	中世	墓地・柱穴群・ 溝・道路・土坑 ・井戸	古代須恵器・土師器・円面 鏡。中世貿易陶磁・備前焼	中世 横小路と中町関 連の町屋遺構、イエズ ス会府内教会付属墓地 と推定される墓地进行 検出

要 約	<p>中世大友府内町跡第10次調査区は、府内古園による第4南北街路に面する上町および中町にあたり、そこから西に延びる道路と道路北側には頭徳寺ダイウス堂と記載されたイエズス会府内教会の敷地にあたと想定されていた。調査の結果、15世紀後半から17世紀初頭まで改修を繰り返しながら使用された東西道路と中町の町屋、東西道路を挟む区画の変遷が明らかとなった。</p> <p>とりわけ中町背後の道路北側には16世紀後半の墓地在り、その埋葬内容と位置からイエズス会府内教会の附属墓地である可能性が高いことが指摘される。</p>
-----	--

豊後府内6

中世大友府内町跡第10次調査区

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (5)

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第15集

平成19(2007)年3月31日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL (097)597-5675

印刷 株式会社インタープリント
〒870-0945
大分市大字津守563-7
TEL (097)568-8123
